

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第79集

瀬名遺跡 V

(遺物編 II)

静清バイパス(瀬名地区)埋蔵文化財調査報告書 5

本文編

1996

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告書 第79集
 『瀬名遺跡V』(遺物編Ⅱ)本文編 正誤表

下記の箇所に誤りがありましたので、訂正下さいますようお願いいたします。

		誤	正
例言3	下から18行目	山下童	山下児
例言4	上から 1行目	議員	職員
例言4	上から 2行目	第3節 3～第	第3章 3、第
例言11	上から18行目	特論	特論
抄録	北緯	138度 25分 31秒	35度 0分 18秒
抄録	東經	35度 0分 18秒	138度 25分 31秒

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第79集

瀬名遺跡 V

(遺物編II)

静清バイパス(瀬名地区)埋蔵文化財調査報告書 5

本文編

1996

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

序

瀬名遺跡は静清平野北部に立地し、度重なる長尾川の氾濫によって形成された扇状地の末端に営まれた水田遺構を中心とした遺跡である。この遺跡は、静清バイパス埋蔵文化財発掘調査業務として建設省中部地方建設局の委託により、昭和61年度から平成2年度まで現地調査が行われた。

この調査により、弥生時代中期から近現代に至るまで連続した各時代の水田遺構が発見され、静清平野における稻作の時代相をおさえることができた。水田以外にも、多くの木製農具、弥生時代の方形周溝墓群、「倭名類聚抄」に見られる郷名の記された木簡、律令祭祀に関連すると見られる木製品など豊富な遺構・遺物が発見されている。

この遺跡は地中6~7mの深さまで埋まっており、地中の水分が多い土地であったために木質遺物が多く残存し、2万点をこえる木質遺物の出土があった。特に弥生時代後期から古墳時代前期の水田より出土した木質遺物は、当時の生産・生活様式をうかがい知ることのできる良好な資料である。平成2年度より続けられている資料整理によって、水田からは耕作に使用された木製農具が出土するほか、畦畔にも多くの建築材が転用されていることが明らかとなり、当時の建築物や建築技術の解明に大きく貢献することが期待されている。

最後になったが、調査ならびに本書の作成にあたっては、建設省静岡国道工事事務所をはじめとした関係機関各位に多大なる援助・協力を受けた。厚くお礼を申し上げる。また、この場をお借りして、現地調査・資料整理に参加した調査員・作業員の労をねぎらいたい。

平成8年3月

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

所長 斎藤忠

例　言

1. 本書は静岡市瀬名地先に所在する瀬名遺跡の発掘調査報告書第五分冊（遺物編II）である。本書では、木製品・文字資料・自然遺物・遺物編Iの補遺を扱った。
2. 調査は「静清バイパス（瀬名地区）埋蔵文化財発掘業務」として、建設省中部地方建設局の委託を受け、静岡県教育委員会文化課指導のもとに、財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。
3. 調査の体制は次のとおりである。

昭和61年度（発掘調査）

所長 斎藤忠、常務理事 八代龍一、調査研究部長 岡田恭順、調査研究一課長 植松章八
調査研究員 森下春美、足立順司、曾根辰雄

昭和62年度（発掘調査）

所長 斎藤忠、常務理事 大石保夫、調査研究部長 山下晃、調査研究二課長 平野吾郎
主任調査研究員 佐野五十三、調査研究員 宮村典雄、小柴秀樹

昭和63年度（発掘調査）

所長 斎藤忠、常務理事 亀山千鶴男、調査研究部長 山下晃、調査研究二課長 栗野克巳
主任調査研究員 佐野五十三、調査研究員 曾根辰雄、杉浦高敏、宮村典雄、杉澤正敏、木下智章
平成元年度（発掘調査）

所長 斎藤忠、常務理事 亀山千鶴男、調査研究部長 山下晃、調査研究二課長 栗野克巳
主任調査研究員 伊藤豪、調査研究員 守谷孝治、竹山喜章、宮村典雄、杉澤正敏、中山正典、
内藤朝雄、繩巻強、木下智章、村瀬隆彦、小林孝誌、嘱託技術員 前嶋秀張

平成2年度（発掘調査／資料整理）

所長 斎藤忠、常務理事 亀山千鶴男、調査研究部長 山下晃、調査研究二課長 栗野克巳
調査研究員 宮村典雄、杉澤正敏、中山正典、伊林修一、笹原芳郎、塚本裕巳、小林孝誌
平成3年度（資料整理）

所長 斎藤忠、常務理事 鈴木勲、調査研究部長 山下晃、調査研究二課長 栗野克巳
主任調査研究員 宮村典雄、調査研究員 中山正典、一杉高徳、伊林修一、小林孝誌、
嘱託技術員 中鉢賢治

平成4年度（資料整理）

所長 斎藤忠、常務理事 鈴木勲、調査研究部長 山下晃、調査研究二課長 栗野克巳
調査研究員 中山正典、小林孝誌、嘱託技術員 中鉢賢治

平成5年度（資料整理）

所長 斎藤忠、常務理事 鈴木勲、調査研究部長 植松章八、調査研究二課長 栗野克巳
調査研究員 中山正典、青木修

平成6年度（資料整理）

所長 斎藤忠、常務理事 鈴木勲、調査部長 小崎章男、調査研究部次長兼一課長 栗野克巳
調査研究員 望月由佳子

平成7年度（資料整理）

所長 斎藤忠、副所長 池谷和三、常務理事 三村田昌昭、調査研究部長 小崎章男、
調査研究部次長兼一課長 栗野克巳、調査研究員 望月由佳子

- 本書は静岡県埋蔵文化財調査研究所の議員が分担して執筆した。
- 望月由佳子 第Ⅰ章、第Ⅱ章第1節3～9、第2節、第3節、第Ⅳ章1～3～第Ⅴ章、第Ⅵ章、遺物観察表
- 岩崎しのぶ 第Ⅱ章第1節1～2、中山正典 遺物観察表
- 平成4年度の資料整理は中山正典、小林孝志、中鉢賢治が中心となって実施した。平成5年度の資料整理は中山正典、青木修が中心となって実施した。
- 平成6・7年度の資料整理は望月由佳子が中心となって実施した。
- 平成4～7年度の資料整理は、下野整理事務所（清水市下野緑町1番35号静清バイパス高架下）で実施した。
- 遺物写真は池田カメラ（池田洋仁氏）、楠華堂（楠本真紀子氏）に依頼したほか、当研究所職員が撮影した。
- 木製品の樹種鑑定は山内文氏（元国立科学博物館）、鈴木三男氏（東北大学大学院理学研究科）に依頼した。
- 動物依存体の鑑定は金子浩昌氏（早稲田大学）に依頼した。
- 河川出土人骨についての人類学的分析は、山口敏氏（元国立科学博物館）に依頼し、玉稿をいただき第Ⅳ章4に収録した。
- 木製品の資料検討は宮本長二郎氏（文化庁）、山田昌久氏（東京都立大学）の指導を受けた。なお宮本長二郎氏は「瀬名遺跡出土建築材の復原」の玉稿をいただき第Ⅶ章特論に収録した。

凡 例

- 本書の記述、図示については以下の基準に従っている。
- 遺物の実測図は本書に、遺物写真は図版編に掲載した。
 - 遺物の実測図は、礎盤・柱根・鼠返し・扉を1/6、梯子・垂木・円柱・柱状材・板材を1/9、装身具・工具を1/3、武具は1/6、用途不明木製品は1/4の縮尺を基本とした。遺物の性格上、これらに入らないものは縮尺を変え、図中に記入した。
 - 木製品の実測図は正面図及び、横断面図を示すことを基本とし、必要により追加・省略した。木製品の木目は断面図の中に模式的に示した。
 - 木製品の欠損部は、推定できるものを破線で表現した。
 - 木製品において、炭化している部分は、スクリーントーン で示し、樹皮を用いている部分はスクリーントーン で示し、墨書きされている部分は黒で塗りつぶしている。また、木釘または楔が残存している部分はスクリーントーン で示した。
 - 遺物の個々の法量、出土地点、形態的特徴などは観察表にまとめ、巻末に付した。
 - 遺構の略号は次の通り。

略号	遺構	略号	遺構	略号	遺構
S D	溝状遺構	S H	掘立柱建物	S P	小穴
S R	自然流路・河川	S T	水田	S X	その他の遺構

- 各報告書で使用されている遺構番号は、整理作業の段階で区と層位を盛り込んだ番号に変更したため、調査年度ごとに刊行された「調査概報」とは異なる番号が付されている。この対応関係については本書の第VI章2節の遺構番号変更表を参照のこと。
8. 実測図版・写真図版に付された番号は観察表のそれぞれの遺物の通し番号と一致する。
 9. 遺物の年代観については『瀬名遺跡III（遺物編I）』の各区各層の年代観に基づいている。これは整理段階で流入造物も含めて各層の出土遺物を検討したため、年代幅がやや広く設定されている。各区各層出土遺物の年代観は以下の表の通り。

1区

層位・遺構	3層	10層	13層	16~19層	SR12201	20層	22層	23層	28層	29・35層
年代観	中近世		中世・平安		奈良~平安		弥生後後 ~古墳前		弥生中期後葉	

2/3区

層位・遺構	3・4層	5層	6層	7・8層	9・10層	11層	12層	14層	16層	20・21層
年代観	中近世		平安	奈良 ~平安	古墳中期	弥生後後 ~古墳前	弥生後期 前葉	弥生中期 後葉	弥生中期	古墳前

5区

層位・遺構	2層	3層	5層	6層	8層	9層	10層	12層	13層
年代観	中近世		平安	古墳中期 ~平安	古墳中期	古墳前期	弥生後後 前葉	弥生中期後葉	弥生後期初頭

6区

層位・遺構	2層	5層	6~10層	11・12層	13層	14・15層	16層	17層	18層	19・20層
年代観	中近世		平安	奈良?	古墳中期	弥生後後 ~古墳前		弥生後期	弥生中期 前葉	

7区

層位・遺構	2・4層	6・7層	SR70801	8層	9層	10a層	10b層	11層	12層	13層
年代観	平安 ~中世	平安 ~8C	6C後 ~奈良	古墳後期	古墳中期	弥生後後 ~古墳前	弥生中期	弥生	中 期	

8区

層位・遺構	5・6層	7~9層	10~13層	14a層	14b層	15・16層	17a層	17b層	18層	20~24層
年代観	平安	中世		奈良・平安		古墳中期	弥生後後 ~古墳前	弥生後期 前葉	弥生中期	

9区

層位・遺構	1~19層	20~34層	SR92502 SR93303	35層	37層	38層	40層	41・42層
年代観	中近世	奈良	平安	中世	古墳中期	弥生後後 ~古墳前	弥生	中 期

10区

層位・遺構	5~17層	18層	19~22層	23層	24~27層	30層	31~32層	33~35層	36層	39~41層
年代観	近世	平 安		奈良 ~ 平安	古墳中期	古墳前期	弥生後後 ~古墳前	弥生後期 前葉	弥生中期	

目 次

序

例言・凡例

第Ⅰ章 漢名遺跡の概要	1
第1節 調査経過	1
1 現地調査	1
2 資料整理	1
第2節 位置と環境	6
1 地理的環境	6
2 歴史的環境	7
3 主な遺構・遺物	10
第Ⅱ章 木製品	13
第1節 建築部材	13
1 磁板	13
2 杖根	13
3 梯子	16
4 鼠返し	18
5 扉	22
6 垂木	23
7 円柱	26
8 柱状材	27
9 板材	37
第2節 その他の木製品	50
1 裝身具・紡織具	50
2 交通交易関連遺物	51
3 工具・武具・葬送具	53
4 用途不明木製品	54
第Ⅲ章 文字資料	60
1 木簡	60
2 黒書上器	63
3 その他の文字資料	63

第Ⅳ章 動物遺存体	64
1 貝類	64
2 獣骨	64
3 人骨	65
4 9区出土の中世頭蓋（山口 敏）	68
第Ⅴ章 補遺	69
第1節 木製品	69
1 容器	69
2 農具	69
3 祭祀	70
4 その他	70
第2節 土製品	70
第3節 石製品	71
第VI章 まとめ・補遺	72
第1節 建築材について	72
第2節 濱名遺跡発掘調査報告書等の構成と内容	74
第3節 遺構番号の変更について	77
第VII章 特論	81
濱名遺跡出土建築材の復原	81
遺物觀察表	(1~64)
遺物実測図版	(1~117)

報告書抄録

挿表目次

第1表	瀬名遺跡各区調査年度	1
第2表	瀬名遺跡主要遺構一覧	11
第3表	瀬名遺跡主要遺物一覧	11
第4表	梯子計測表	16
第5表	鼠返し計測表	20
第6表	扉計測表	22
第7表	垂木計測表	26
第8表	円柱計測表	27
第9表	中央部を表裏から削った材	29
第10表	孔に他の材を差し込み、斜めの角度を作り出す部材	29
第11表	孔が正面から側面に抜ける部材	29
第12表	貫孔のある四角柱	31
第13表	断面多角形となる柱材	31
第14表	屋根板と考えられる板材	38
第15表	壁板と推定される板材	39
第16表	屋根板と考えられる材に類似する板材	40
第17表	両側縁に対照的に小孔を穿つ板材	40
第18表	片方の側縁に穿孔のある板材	40
第19表	壁板材もしくは床板材と推定される板材	43
第20表	下駄計測表	51
第21表	文字資料一覧表	61
第22表	瀬名遺跡出土動物遺存体（貝類）一覧表	65
第23表	瀬名遺跡出土動物遺存体（獣骨）一覧表	65~66
第24表	瀬名遺跡出土動物遺存体（人骨）一覧表	67

挿図目次

第1図	木製品整理の流れ	2	第10図	扉概形模式図	23
第2図	静清平野地形模式図	7	第11図	垂木先端加工の変遷	25
第3図	瀬名遺跡周辺遺跡分布図	8	第12図	垂木先端加工模式図	26
第4図	1区17c層建築遺構	14	第13図	準構造船材出土部分模式図	52
第5図	5区13層掘立柱建物	14	第14図	用途不明木製品1出土分布図	54
第6図	8区24層掘立柱建物	14	第15図	用途不明木製品99・183	56
第7図	梯子下端の加工	18	第16図	文字資料文字部分集成図	62
第8図	鼠返し概形模式図	21	第17図	9区20層中世頃蓋出土状況	68
第9図	鼠返し孔縁の加工模式図	21	第18図	板材の加工過程	73

写真目次

写真1 下野整理事務所	3
写真2 シーラーパック作業	3
写真3 実測作業	3
写真4 写真撮影	3
写真5 写真整理	4
写真6 カード登録	4
写真7 PEG常温含浸作業	4
写真8 トレース作業	4
写真9 鼠返し 方形の焼け残り部分（正面）	21
写真10 鼠返し 円形の焼け残り部分（裏面）	21
写真11 杭列畦畔	27
写真12 畦畔の横板に転用されている建築材	37
写真13 板材140出土状況	46
写真14 準構造船材取上状況（2-b）	51
写真15 準構造船材取上状況（2-a）	52
写真16 用途不明木製品2出土状況	55
写真17 用途不明木製品46出土状況	55
写真18 中世頭蓋出土状況	68

遺物観察表目次

礎板・柱根観察表	1～2
梯子観察表	2～4
鼠返し観察表	5～6
扉観察表	7
垂木観察表	8～9
円柱状材観察表	10
柱状材観察表	10～26
板材観察表	26～45
装身具・紡織具観察表	46～47
交通交易関連遺物観察表	47～48
武具・その他の木製品観察表	49
用途不明木製品観察表	50～59
捕獲図版観察表	60～64

遺物実測図版目次

第1図 磁板・柱根実測図 1	第39図 柱状材実測図 14
第2図 磁板・柱根実測図 2	第40図 柱状材実測図 15
第3図 梯子実測図 1	第41図 柱状材実測図 16
第4図 梯子実測図 2	第42図 柱状材実測図 17
第5図 梯子実測図 3	第43図 柱状材実測図 18
第6図 梯子実測図 4	第44図 柱状材実測図 19
第7図 梯子実測図 5	第45図 柱状材実測図 20
第8図 梯子実測図 6	第46図 柱状材実測図 21
第9図 鼠返し実測図 1	第47図 柱状材実測図 22
第10図 鼠返し実測図 2	第48図 柱状材実測図 23
第11図 鼠返し実測図 3	第49図 柱状材実測図 24
第12図 鼠返し実測図 4	第50図 柱状材実測図 25
第13図 鼠返し実測図 5	第51図 柱状材実測図 26
第14図 扉実測図 1	第52図 柱状材実測図 27
第15図 扉実測図 2	第53図 板材実測図 1
第16図 扉実測図 3	第54図 板材実測図 2
第17図 垂木実測図 1	第55図 板材実測図 3
第18図 垂木実測図 2	第56図 板材実測図 4
第19図 垂木実測図 3	第57図 板材実測図 5
第20図 垂木実測図 4	第58図 板材実測図 6
第21図 垂木実測図 5	第59図 板材実測図 7
第22図 垂木実測図 6	第60図 板材実測図 8
第23図 垂木実測図 7	第61図 板材実測図 9
第24図 円柱実測図 1	第62図 板材実測図 10
第25図 円柱実測図 2	第63図 板材実測図 11
第26図 柱状材実測図 1	第64図 板材実測図 12
第27図 柱状材実測図 2	第65図 板材実測図 13
第28図 柱状材実測図 3	第66図 板材実測図 14
第29図 柱状材実測図 4	第67図 板材実測図 15
第30図 柱状材実測図 5	第68図 板材実測図 16
第31図 柱状材実測図 6	第69図 板材実測図 17
第32図 柱状材実測図 7	第70図 板材実測図 18
第33図 柱状材実測図 8	第71図 板材実測図 19
第34図 柱状材実測図 9	第72図 板材実測図 20
第35図 柱状材実測図 10	第73図 板材実測図 21
第36図 柱状材実測図 11	第74図 板材実測図 22
第37図 柱状材実測図 12	第75図 板材実測図 23
第38図 柱状材実測図 13	第76図 板材実測図 24

- 第77図 板材実測図 25
第78図 板材実測図 26
第79図 板材実測図 27
第80図 板材実測図 28
第81図 板材実測図 29
第82図 板材実測図 30
第83図 板材実測図 31
第84図 板材実測図 32
第85図 板材実測図 33
第86図 板材実測図 34
第87図 板材実測図 35
第88図 装身具実測図 1
第89図 装身具実測図 2・紡織具
第90図 交通交易関連遺物実測図 1
第91図 交通交易関連遺物実測図 2
第92図 工具・武具・葬送具実測図
第93図 用途不明木製品実測図 1
第94図 用途不明木製品実測図 2
第95図 用途不明木製品実測図 3
第96図 用途不明木製品実測図 4
第97図 用途不明木製品実測図 5
第98図 用途不明木製品実測図 6
第99図 用途不明木製品実測図 7
第100図 用途不明木製品実測図 8
第101図 用途不明木製品実測図 9
第102図 用途不明木製品実測図 10
第103図 用途不明木製品実測図 11
第104図 用途不明木製品実測図 12
第105図 用途不明木製品実測図 13
第106図 用途不明木製品実測図 14
第107図 用途不明木製品実測図 15
第108図 用途不明木製品実測図 16
第109図 用途不明木製品実測図 17
第110図 用途不明木製品実測図 18
第111図 文字資料実測図
第112図 補遺 1 曲物実測図
第113図 補遺 2 釧物・舟舟実測図
第114図 補遺 3 農其实測図
第115図 補遺 4 農其实測図
第116図 補遺 5 農具・祭祀其实測図
第117図 補遺 6 石製品・土製品・箸状木製品実測図

第Ⅰ章 瀬名遺跡の概要

第1節 調査経過

1 現地調査

静清バイパスは清水市美津から静岡市丸子二軒屋までの延長24.2kmの道路である。昭和46年より工事に着手し25年が経過しており、この間に建設省の協力のもと、清水市教育委員会、静岡市教育委員会、当研究所によって路線内の埋蔵文化財についての調査が実施された。

瀬名遺跡は昭和60年度と昭和62年度に予備調査が行われ、昭和61年度から平成2年度まで4年8ヵ月の現地調査で延べ測量面積182,834m²を測定し終了した。この調査の結果、地表面から深さ約6mの間に、弥生時代中期から近世に至る造構面を多数検出した。

各調査区の調査は同時進行したわけではなく、用地買収とバイパス工事の工程によって調査可能となった地区から開始された。また、平成元年度には6地区的調査が同時に行われる大規模な調査となり、調査参加者も1日に300名を超えた。最後に開始した8~10区については工程上1年半で調査を終了しなければならないため、1ヵ月の間に複数の造構面を調査するという厳しい状況であった。このため、造構面の測量に空中写真による測量が導入された。

第1表 瀬名遺跡各区調査年度

年度	1区	2/3区	5区	6区	7区	8区	9区	10区
昭和60年度	予備調査(静岡市教育委員会)							
昭和61年度		現地調査						
昭和62年度		現地調査				予備調査		
昭和63年度	現地調査	現地調査		現地調査	現地調査			
平成元年度		現地調査		現地調査	現地調査	現地調査	現地調査	現地調査
平成2年度		資料整理		資料整理	資料整理	現地調査	現地調査	現地調査
平成3~7年度	資料整理	資料整理	資料整理	資料整理	資料整理	資料整理	資料整理	資料整理

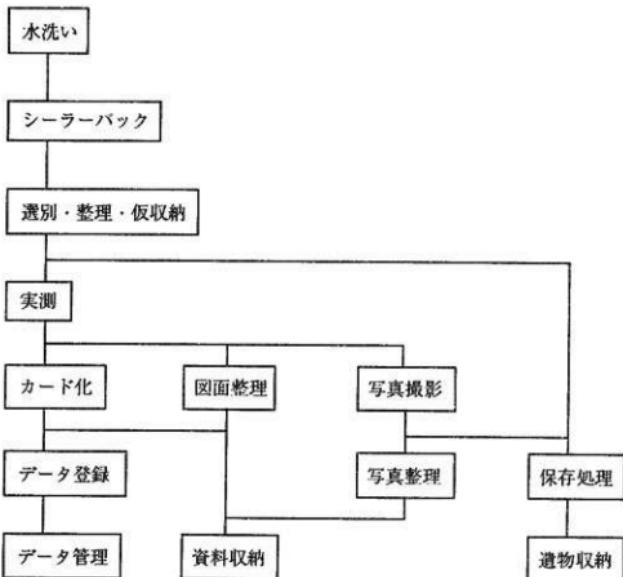
2 資料整理

平成2年度後半の現地調査終了後より、本格的な整理作業に着手した。各調査区の数百枚に及ぶ図面や写真を整理し、工程上、現地で校正できなかった写真測量図の確認、校正を行った。平成2年度・平成3年度は各区の造構面を中心に整理した「造構編I」、平成4年度は造跡全体にわたる造構の変遷と土層の対応関係をまとめた「造構編II」を編集した。また、これと平行して、2万点にも及ぶ木質遺物の洗浄、分類、シーラーパック、仮収納を行った。瀬名遺跡の出土遺物の整理作業は、平成3年度後半から本格的に展開され、土器、石器木製農具を中心とする器種が限定できたものを優先的に整理し、平成5年度に「遺物編I」を刊行した。この編集にあたっては、造構、流路出土の一括遺物を一群として扱い、水田造構出土の遺物は木製農具、水田施設としての杭、塙、樋状木製品を優先させている。器種の認定も農具に関しては細かな細分類まで行った。建築材、その他の木製品については平成4年度より整理作業に着手しており、当初は「遺物編I」に掲載すべく分類、実測が行われていたが、数量が膨大で器種も多岐にわたるため、整理に時間がかかり「遺物編

II』(本書)で扱うこととなった。

建築材においては平成4年度には加工の頗著な木製品の第一次抽出を行い、平成5年度はその中から器種の明確なもの、加工の頗著なものを抽出して実測し、図版を作成した。平成6年度は全体の形状が把握できる大型木製品を優先的に実測して図版を組み、平成7年度前半でさらに第一次抽出遺物の中から、加工の頗著なものを抽出して実測を行った。第一次抽出の後、3回にわたる第二次抽出と図版組みをおこなったため、器種の明確でないものについては「柱状材」、「板材」とし、実測図版において細かな分類までは行われていない。建築材と並行して服飾具、紡織具、工具、武器、交通交易関連遺物、自然遺物などの整理作業を行った。

上述のように短期間で膨大な木質遺物の整理を行うため、遺物整理作業を効率的に進めが必要があった。木質遺物における資料整理の流れは下図の通りである。



第1図 木製品整理の流れ



写真1 下野整理事務所



写真2 シーラーパック作業



写真3 実測作業



写真4 大型遺物の写真撮影

本質遺物は乾燥による変形を防ぐため水漬けで保管しなければならないので、ポリエチレンまたはナイロンシートで水漬けのまま密閉してしまうシーラーパック作業を実施した。整理作業の準備段階として遺物を水洗し、注意事項を鉛筆で記入したマイラーシートのラベルを封入してパックした。

次に用途がある程度限定できるものを約1100点を選別し、優先的に実測図を作成した。残りの2万点弱の木質遺物は遺構編の資料遺物として調査区分、層位別、遺構別に仮収納した。このため抽出分とその他の木製品という二重構造が出来上がり、その他の木製品が抽出分に比べ、検討を十分に加えられないという現状にあった。その後、他の木製品については加工の顕著なものを第一次抽出遺物とし、この中から建築材の可能性のあるものが抽出され、整理された。抽出遺物はその場で略測図を作成し、器種別の実測用木製品登録台帳を作成した。実測木製品これは整理段階での遺物の混同を避け、整理の現状を知る上で必要となるものである。

実測図はB3の方眼紙に書くことを基本とした。B3に収まらない大型の遺物については適宜用紙を選択した。建築材においては大型ものがほとんどであり、カード作成や図版組みの作業も考慮して基本的に2分の1縮尺で実測図を作成した。木製品は普通の方眼紙では遺物の水分によって伸縮するため、マイラーシートのセクションフィルムを使用した。正面、側面、横断面の三面を図示することを基本として図化したが、前述の1100点を優先し、その他の木製品は正面と断面、あるいは特徴のある部分のみの図示に留めた。平成6年度以降の実測作業では、より多くの遺物の実測図を報告書に掲載するため、多くの部分で省略を行い、模式的な図や部分図を多くしている。

写真撮影

遺物写真は整理作業開始当初、6×7版の白黒と35mmのカラーリバーサルの2種類

シーラー パック作業

遺物の選別

仮 収 納

木製品

第一次抽出

登録台帳

実測図

2分の1 縮尺

セクション フィルム

- 6×7版** を撮影していたが、途中より報告書の写真図版作成を中心に考え、6×7版の白黒のみに切り替えた。また、土器、農具その他の立体的な遺物、長大な遺物は4×5型の大型カメラによる撮影を行った。また、実測図版組みが終了しているものについては割り付けの手間を省略するため、同じ実測図版の遺物を4×5版1枚に撮影した。
- 4×5型** 上記の撮影は報告書掲載遺物に限られ、その他の木製品の中から抽出した遺物は6×7版の白黒で、4~5点を1枚に撮影した。
- ネガの整理** 4×5版のネガの整理については4×5版のシートに入れ、HCLファイルボックスに収納している。
- 遺物カード** 実測図が出来た遺物については、速やかに実測図のコピーを貼付した遺物カードを遺物1点につき1枚ずつ作成した。カードは当研究所の様式のカードを使用している。
- 新カード** が、カード様式がデータベース用に変更されているので、新カード様式で作成し、旧カードで作成してあるものについては新カードに対応できるよう書き替えている。カードの裏面には撮影済みの写真を貼付し出土位置の遺構図も示した。カードには特に法量について計測値を詳細に記入した。以上のカードは実測をしたものについて作成し、それ以外の遺物については保存処理作業をする時点で、8点につき1枚のカードを作成している。取り上げ台帳をコピーして貼付し、保存処理の工程を記入するようしている。実測を行いカード化した遺物に対してカード型データベースのソフト
- 8点で1枚** を用い、1点1点登録した。登録項目に関しては「遺物の分類と整理」(当研究所情報処理検討委員会1991)に沿って項目を設定した。
- カード登録**
- 保存処理** 木質遺物の保存処理については膨大な点数であったため、早めに計画的な処理方法を立案、実施することが要求された。報告書掲載遺物についてはPEG(ポリエチレン
- 加熱含浸法** グリコール) 加熱含浸法を中心に行い、加
- 
- 写真5 写真整理**
- 
- 写真6 カード登録**
- 
- 写真7 PEG常温含浸作业**
- 
- 写真8 トレース作業**

熱式の処理槽内で100%PEGを含浸する。曲物等薄い小型の木製品に関しては真空凍結乾燥法を併用しながら処理を実施している。その他の遺物のなかで、スギ材で残存状況が良好なもの（全体の9割を占める）については常温でPEGを40%含浸させる処理方法を採用了した。40%は常温でPEG4000が水に溶ける最大の濃度に近い値である。PEG40%の常温含浸方法は未開発であったため、実験的に試行錯誤を繰り返しながらの作業となった。第一段階の含浸としてPEG20%溶液に3ヶ月間、第二段階の含浸で40%溶液に3ヶ月間浸した後、風通しの良い室内で9ヶ月間自然乾燥させる。以上のような処理で保管に耐え得る仕上がりとなり、表面も100%の加熱含浸に比べて木質感があり、色も黒みが強くならない。現在では含浸作業の効率化が検討され、40%溶液に4ヶ月間浸し、9ヶ月間自然乾燥する工程で処理が行われている。

出土した木質遺物は膨大で、その全てを把握することは難題であった。用途の明確な遺物を抽出した際に、いくつかの建築材は抽出されていたが、その他の木製品の中から、建築材の可能性のある遺物を抽出しただけでもその数が2千点以上に及んだ。建築材と思われる遺物のほとんどは水田の畦畔を補強する杭材・芯材・横木として転用され、杭材のほとんどは細かく裁断され、先端を尖らせる二次加工を受けていた。このため、原形を推定することが非常に困難であり、形の推定できるものから実測を開始した。大型の製品は実測に時間がかかり、なるべく多くの点数を掲載するためには各年度ごとに実測の終わったものから順次図版を組みトレースを行って実測図版を作成した。このため報告書に掲載する図版は調査区、層位、遺構等が混在してしまう結果となった。

以上のような遺物整理の流れで遺物についての報告書を作成した。平成5年度には『遺物編Ⅰ』として上器、金属製品、石器の総体、木製品は農具、祭祀具、容器、食事具、十木材を扱い報告した。平成6年度には『自然科学編』の編集と並行して平成7年度に刊行する『遺物編Ⅱ』（本書）の編集も進めた。

真空凍結
乾燥法

PEG
常温含浸法

遺物の抽出
畦畔に転用

報告書作成

<参考文献>

- 『瀬名遺跡－昭和61年度発掘調査概報』 勅静岡県埋蔵文化財調査研究所 1987
『瀬名遺跡－平成元年度・平成2年度静清バイパス（瀬名地区）埋蔵文化財調査概報』 勅静岡県埋蔵文化財調査研究所 1991
『瀬名遺跡Ⅰ（遺構編Ⅰ）静清バイパス（瀬名地区）埋蔵文化財調査報告書』 勅静岡県埋蔵文化財調査研究所 1992
『瀬名遺跡Ⅱ（遺構編Ⅱ）静清バイパス（瀬名地区）埋蔵文化財調査報告書』 勅静岡県埋蔵文化財調査研究所 1993
『瀬名遺跡Ⅲ（遺物編Ⅰ）静清バイパス（瀬名地区）埋蔵文化財調査報告書』 勅静岡県埋蔵文化財調査研究所 1994
『大谷川III（遺物編）巴川（大谷川）総合治水対策特定河川事業埋蔵文化財発掘調査報告書（神明原・元宮川遺跡）3』 勅静岡県埋蔵文化財調査研究所 1988
『大谷川IV（遺物・考察編）巴川（大谷川）総合治水対策特定河川事業埋蔵文化財発掘調査報告書（神明原・元宮川遺跡）4』 勅静岡県埋蔵文化財調査研究所 1989

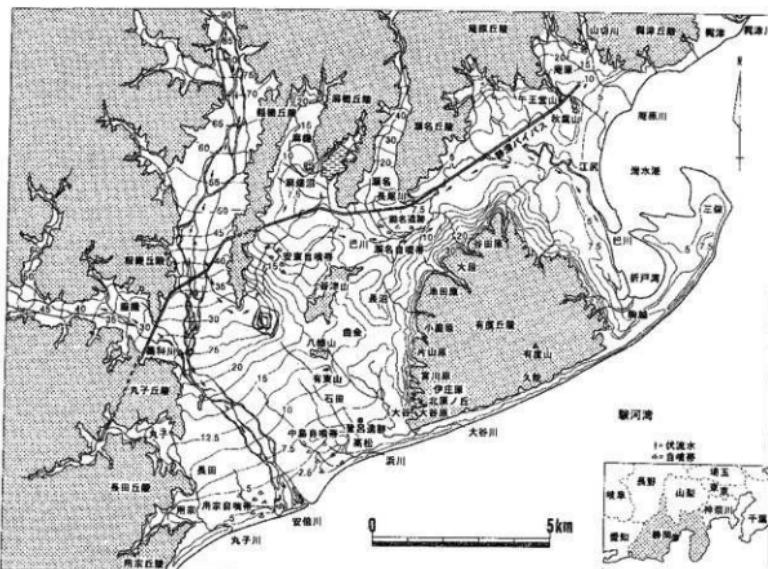
第2節 位置と環境

1 地理的環境

- 東西交通** 静岡市は静岡県のほぼ中央にあり、古くから東西交通の重要な位置を占めている。現在でも東海道本線をはじめ東海道新幹線、国道1号線、東名高速道路など重要な交通網が市域を通り抜けている。
- 静岡平野** 静岡市は南北に長く、面積は全国で二番目に広い市であるが、平野の部分は全域の約10%にあたる約115km²、安倍川(あべかわ)下流域の南部に集中している。静岡平野は北には南アルプス赤石山地から連なる安倍(あべ)山地、東には庵原(いはら)山地、西には長田(おさだ)丘陵があり、南に少し離れてドーム状に隆起した有度(うど)丘陵が存在する。また、平野の形成が沈降山地の溺れ谷の堆積という性格上、平野の中央に谷津山(やつやま108m)、八幡山(やはたやま65m)、有東(うとう30m)丘陵が独立丘陵として島状に存在している。
- 平野の形成** 静岡平野の形成には安倍川が大きな役割を果たしており、安倍川によって運ばれた厚い砂礫層が扇状地性の平野を形成し、下流域に広がっている。戦機(しづはた)丘陵先端と有度丘陵西側の小鹿(おしか)地区を結ぶラインで水系、地形が分かれしており、南西域は安倍川の扇状地の影響が強く、北東域では北部より流れてくる巴川(ともえがわ)などの中小の河川によって、各所で自然堤防等の地形を発達させている複合的な扇状地地形である。安倍川扇状地の上端は戦機丘陵先端部の浅間神社付近(海拔約30m)にあり、南、東、北東方面に向けて地形が緩く傾斜している。砂礫層からなる扇状地は周縁部に向けて次第に低平になり、泥の層からなる低湿地へと移り変わってゆく。戦機丘陵と南沼上(みなみぬまがみ)丘陵との間にある麻機(あさばた)低地は巴川の形成した谷が平野部にさしかかる地域だが、低いところでは海拔6mしかない低湿地である。しかも安倍川の扇状地の影響で、南側が高い地形である。このため、扇状地からの湧水と河川の水が集まって滯り、麻機沼を形成している。
- 遺跡の立地** 潑名遺跡はこの静岡平野の東北部、清水市と隣接する地域にあり、瀬名丘陵の先端部付近から西に広がり、南東に有度丘陵の北端を臨む。庵原山地に源を持ち、南沼上丘陵と瀬名丘陵の間を流れる長尾川(ながおがわ)の押し出した多量の土砂の堆積によって形成された扇状地の末端に広がる自然堤防帶に立地する。
- 長尾川** 長尾川は北側の竜爪山(りゅうそうざん)に源を発し、長さは約20km、巴川の支流で県の管理下にある二級河川である。この川は河床約1/300の急勾配で平素はほとんど伏流しているが、上流域が山崩れや地滑りの起きやすい地質であり、洪水の度に多量の土砂を流し出しており、現在では高い堤防を持つ天井川となっている。その流域は活発な冲積化が行なわれて、現地表面が標高約12mに対し、繩文時代晚期頃の大沢スコリア、カワゴ平バミスが標高約6m付近で検出されている。しかも南側の瀬名川(せながわ)地区において西から流れて来る0.5/1000という緩勾配の巴川に合流し排水機能が低下するため、大雨によって洪水が何度も繰り返されてきた。瀬名地区西側に川合(かわい)という地名が残ることから、巴川との合流地点がかつては上流の瀬名遺跡付近であったと推定される。
- 土砂の堆積** 瀬名遺跡付近は長尾川扇状地の扇端部にあたり、湧水が豊富で付近の生活用水、灌漑用水として利用してきた。昭和40年代前半まで周辺はほとんどが水田であったが、40年代

後半に宅地化が進み、現在では水田がほとんど見られなくなった。また、地籍図には土地割りの変形が見られ、かつては長尾川が扇状地上を蛇行、亂流していたと推定される。現地調査では何本もの旧河道が発見されていることからもわかる。

瀬名遺跡は現地表から地下約6mの間にヒトテ状に広がる自然堤防があり、それに続く微高地、後背湿地部分に弥生時代中期以来、各時代の水田が間層を挟んで重複する形で確 水田の重複認されている。



第2図 静清平野地形模式図

豊呂博物館「静岡・清水の弥生時代」所収の図に加筆

2 歴史的環境

瀬名遺跡周辺で縄文時代にまで遡る遺跡は南沼上丘陵西麓、賤機丘陵東麓、有度丘陵北 縄文時代麓などの丘陵部で、上器や石器類の出土があったが明確な遺構は確認されていない。

静清地区は弥生時代中期前半より、弥生土器が確認される。安倍川西岸の丸子(まりこ) 弥生時代セイゾウ山、佐渡(さわたり) 遺跡や、有度丘陵西麓の天平山(てんのうざん) 遺跡などの丘陵上に立地するものや、清水市の下野(しもの) 遺跡といった低地性のものなど確認されている数が多く、低地の開発や集落の発達についてまだ不明な点が多い。中期後半になると平野部に遺跡が拡大し、微高地上に方形窓溝墓群、集落址が発見されている。弥生時代後期になると平野部の遺跡が増加する。瀬名遺跡南側約500mに位置する瀬名川遺跡からは弥生時代後期の土器が出土しており、集落址の存在が考えられる。また、西側にある川合遺跡からは弥生時代後期～古墳時代の水田跡・集落址が発見されている。

静岡平野最古の古墳は、谷津山山頂に立地する前期中葉の前方後円墳である谷津山1号 古墳時代



第3図 瀬名遺跡周辺遺跡分布図

国土地理院「清水」「静岡東部」2万5千分の1に加筆

墳（榎木山神古墳）である。前期後葉から中期前葉の有力古墳は清水平野北部の庵原地区に移ってゆくが、静岡平野では中期に平野を囲む丘陵上に有力な古墳が散在するようになる。後期になると、これらの古墳を中心に周辺に小規模の古墳群が形成されてゆく。瀬名遺跡東側の瀬名丘陵上には前方後円墳3基、円墳3基、方墳1基からなる瀬名古墳群がある。中期の前方後円墳である瀬名1号墳、8号墳、円墳の2号墳（瀬名マルセッコウ古墳）を中心にして5世紀から7世紀初頭にわたって造営されたと推定される。西側には円墳5基の南沼上古墳群があり、この他、周辺の支丘の南斜面に群集墳が形成されている。古墳時代の集落址は瀬名遺跡西側の川合遺跡、川合道路八反田（はったんだ）地区で確認されているが、北側の切石（きりいし）遺跡・東下（ひがししも）遺跡から土器が出土しており、集落址と推定される。

古代 瀬名地区は平安時代の『和名抄』にある「庵原郡西奈（世奈）郷」に比定され、瀬名遺

跡は安倍郡と庵原郡の境界域に存在している。西側の川合地区にある宮下遺跡は平安時代の集落址で、川合遺跡をへだてた内荒（うちあれ）遺跡からは振立柱建物群とともに「造大神印」の銅印などが出土し、安倍（あべ）郡の官衙関連施設と推定される。川合地区は昭和初期まで舟による水運が発達していた巴川流域にあり、「安倍郡川津郷」のあった可能性が指摘されている。また、北側約2kmの麻機沼北部で明治12年以前の幕末維新时期に「安倍郡」の印が出土したと伝えられるが、個人蔵であったため、現在は所在不明となっている。

中世には約400m南側を通る北街道が中世東海道となって、瀬名川村が宿駅として発展し、室町時代中期まで継続したことが文献に見られる。「瀬名川」「瀬無川」の地名は中世の紀行文等に見られる。瀬名丘陵の南端は「梶原山（かじわらやま）」と呼ばれ、鎌倉幕府初期に梶原景時が京都へ逃れる途中、この山中で在地武士団の吉香（きっかわ）氏に追い詰められ最期をとげたと伝えられる。

戦国時代初期には今川範将の所領で、範将の死後、宝町幕府の御料所となった。後に範将の孫、堀越一秀がこの地に住んで瀬名氏を称し、瀬名氏系代相続の地となつた。今川義元、氏真の頃には洪水によって田畠が損なわれ、駿河国浅間宮流鏑馬郷役の貢高が減ったことが天文18年（1549）と永禄元年（1558）の朱印状に記録されている。今川氏滅亡後は、甲斐の武田氏、徳川氏、豊臣氏の家臣中村一氏と領主が交替した。慶長年間（1596～1614）川の名称に上流域の長尾（ながお）村において、鮎を取るために代官所へ川の名を「長尾川」と届け出したことから現在の川名となつた。これ以前は「龍爪（りゅうそう）川」「微雨（びう）川」「垢離取り（こりとり）川」「水梨（みずなし）川」など地域ごとに様々な名称で呼ばれており、「長尾川の鮎」が瀬名地区の名産となつたために「長尾川」の名称が定着したと伝える。

江戸時代には、東海道が南へ移り、北街道は脇街道となって文字通り「東海道の北の街道」となつた。瀬名地区は初め駿府藩領となり徳川頼宣・徳川忠長を藩主と仰いだが、寛文9年（1669）瀬名川村の一部と瀬名村が大久保紀伊守の知行地、瀬名川村の一部が天領とされた。元禄11年（1698）には長尾村、平山（ひらやま）村、瀬名川村の一部が現在の清水市小島（おじま）に陣屋を置く松平丹後守に小島藩領として与えられ、それぞれの領地が交錯する地域となつた。天明2年（1782）、文政末年（1830）、天保7年（1836）、天保11年（1840）と度重なる水害に、村々は年貢の減免を訴えるとともに、領主の違いを越えて組合を結成し長尾川・巴川の川除營請を行なつた。嘉永2年（1849）8月の東堤決壊の際には、深夜に村人総出で護岸工事をを行い、村を越えて人足を出し合つて川合村の名主九右衛門の日記から知ることができる。巴川の改修は正徳元年（1711）、享保15年（1730）、宝曆10年（1760）、天保14年（1843）に行われたという記録が残る。特に天保14年の改修は流域の村人で15才以上60才以下の男子すべてを動員し、数万人規模の掘削工事を行うというものであったが、幕府の財政難により全国の土木工事が停止されたことで中止となつてしまつた。長尾川では文化18年に堤防の再築工事が見えるが、明治初年の頃まで、木材で「棚牛」という物を作り、蛇籠を乗せて水流の激しいところに置くことや、川の付近に竹林を作り土砂の侵入を防ぐといった工夫を村人が生み出している。村人は護岸工事を兼業する一方、長尾川の流路を付け替える工事を検討していた。享保9年（1724）には周辺の19ヶ村が長尾川の河道を南沼上丘陵の山麓から瀬名丘陵の山麓側に付け替える請願を出しているが、実現に至らなかつた。その後も同様の請願が度々出されているが、

川合地区

都印の出土

中世

戦国時代

川の名称

江戸時代

水害の記録

川除營請

水防の工夫

実施されることはなかった。この他にも南沼上丘陵にトンネルを掘り、長尾川の水を麻機沼に流すということも考えられていたようである。

近 現 代 明治維新の時には徳川家連領に属していたが、明治4年（1871）の廃藩置県により静岡県第3大区第6小区の所属となり、明治11年（1878）には群区編成法により清水市とともに庵原郡に属した。明治21年の町村制実施で瀬名村・瀬名川村・長尾村・平山村を合わせて、庵原郡西奈（せな）村と称した。この間にも明治17・19・23・30・37・43年と水害が発生し、数度にわたって長尾川の樋出し工事、堤防の石張工事、石溜りを設ける中割り工事が県の補助を受けて実施された。明治36年には巴川水防組合が結成され、県営事業で大正初年まで瀬名川村松木田以東の長尾川・鶴川（ままがわ）、補以東の巴川の改修工事が行われた。明治40年に巴川と長尾川の合流点を下流の清水市長崎地区に変え、瀬名川地区では両河川が並行する現在のような姿となっている。

七夕豪雨 昭和23年（1948）4月1日に西奈村が静岡市に合併された後も長尾川・巴川の治水が進められた。昭和34年（1959）の水害の後、36年から37年にかけて長尾川の大改修が行なわれて川幅が広げられ、川底も深く掘削された。昭和49年（1974）の「七夕豪雨」は長尾川の堤防決壊・巴川の氾濫により静岡・清水両市に大きな被害をもたらし、巴川の水を南へ流す大谷川放水路の建設など現在に至るまで治水事業が続けられている。

西奈の呼称 現在では地区名・小中学校名に「西奈」という文字が使用されているが、「にしな」と呼ばれている。駿河古文書会が編集した『静岡市の大字・小字名集成』の「市制施行時より80年間の町、字名」の項目に「仁科村（ニシナムラ）」とあり、西奈村であった時期に起こった誤認と思われる。

3 主な遺構・遺物

遺構については『瀬名遺跡I（遺構編I）』（1992）に各区の詳細な遺構について報告されているので、ここでは概略を述べる。

縄文以前 瀬名遺跡では縄文晩期に降下したとされる大沢スコリア（Os）が1区～10区の泥炭層より検出されており、この時期には瀬名遺跡周辺が湿地帯であったと考えられる。7区15層に溝状遺構、8区24層に掘立柱建物の柱穴が検出されているが、遺物は8区で柱穴の中に柱根が検出された以外は認められなかった。これ以前の層については2／3区、5区、6区、7区、8区で調査したところ、泥炭と礫層を部分的に挟むが、さらに下層には砂層、シルト層が連続しており、水面下であった可能性が高い。

湿地の開発 弥生時代中期前葉～中葉になると、水田に閑連すると考えられる水利関係の遺構が見られ、湿地の開発が行なわれたと思われる。遺物は打製石斧が6区23a層に散在しているのが認められ、中期前葉の弥生土器片が出土した。中期後葉になると明確な水田遺構が検出され、微高地に方形周溝墓、低地に水田が営まれている。遺物は方形周溝墓より中期後葉の弥生土器が出土している。

大区画畦畔 中期後葉から古墳時代前期にかけては、大区画の畦畔を作り、この中を小区画の畦畔で細分する水田が見られる。遺物には杭列畦畔に伴い、木製農具や杭に転用された建築材が多く見られる。2／3区12層では準構造船の部材が畦畔中より出土した。

湿 地 化 しかし、次第に水位が上昇し、黒泥と泥炭質の土層に覆われることから、古墳時代中期になると瀬名遺跡一帯は完全に湿地化してしまったようだ。木道状の遺構が6区～10区で見られ、当時の人々が湿地の再開発に着手していたことをうかがわせるが、水田面の検出

推定時期	10区	9区	8区	7区	6区	5区	2/3区	1区
中近世	6層 水田 9層 水山 11層 溝 柱穴	5層 故状遺構 路路	6層 水田 8層 水田	2層 水田 5層 水田	3層 水田	3層 水田	10層 水田・流路 13層 水田・流路 16層 水田・流路	
平安時代	14a層 水田 14b層 水田 16層 水田 19層 水田	20層 水田・流路 22層 水田・流路 25層 抗列・流路 14a層 水田	10a層 水山 10b層 水田	7層 水田・流路 11層 水田	5層 水田 8層 水田	6層 水田	17b層 水田・流路 17c層 捩立柱建物 路路 19層 水田・流路	
奈良～ 古墳時代	23層 水田 26層 水田	33層 水田		8層 水田・流路 13層 水山		8層 水田	20層 流路 窓集中地点	
古墳時代 (中期)	30b層 水道 水山	35層 木道	15・16層 木道	9層 木道	14層 木道	8層直下 流路 9層 流路・抗列 10層 流路・塙		
古墳前期 I	31a層 水田 31b層 水田	37層 水田			10層 水田			
弥生後期	33層 水田 35層 水田 36層 水田	38層 水田 17b層 水田	17a層 水田 10a層 水田	16層 水田 18層 水田	12層 水山 13層 流路 14層 捩立柱建物 森林跡・塙	12層 水山 14層 水田	22層 水田・流路	
弥中～後		40層 水田			19層 水田			
弥生中期	39層 水田 41層 上面 方形周溝墓 42層 流路・塙		18層 上面 方形周溝墓 21層 杖 22層 上面 小穴部・溝 23層 杖痕	12層 上面 方形周溝墓 13層 抗列 15層 清		14層 水田 20層 水田 21a層 流路 溝・塙	16層 水田 28層 水田・流路 28層 下層 木棺 溝・流路 35層 抗列・流路	

第2表 濑名遺跡主要造構一覧

(土層の対応を考慮しながら、各調査区におけるおよその推定時期でまとめている。)

建物名	10区	9区	8区	7区	6区	5区	2/3区	1区	
土器	弥生土器 古式土器 古式土器 土師器 須恵器 灰釉 陶磁器	縄文土器 弥生土器 古式土器 土師器 須恵器 灰釉 陶磁器	縄文土器 弥生土器 古式土器 土師器 須恵器 灰釉	縄文土器 弥生土器 古式土器 土師器 須恵器 灰釉	縄文土器 弥生土器 古式土器 土師器 須恵器 灰釉	縄文土器 弥生土器 古式土器 土師器 須恵器 灰釉	縄文土器 弥生土器 古式土器 土師器 須恵器 灰釉	弥生土器 古式土器 土師器 須恵器 灰釉 山茶碗 陶磁器	
木製品	杭・矢板 建築部材 櫛・歯 舟子・舟舟 田下駄 曲物・挽物 木簡 鳥形・舟形 蓋串	杭・矢板 建築部材 櫛・歯 梯子・舟舟 泥除け・整杆 田下駄・かせい 漆輪・刮物 曲物 舟形・挽物 刀形・蓋串 木棺	杭・矢板 建築部材 櫛・歯 梯子 泥除け・整杆 田下駄 下駄・歯 梯子 舟形 刮物 付札・板 辛塔婆 蓋串・木棺	杭・矢板 建築部材 梯子 泥除け・整杆 田下駄・歯 梯子 舟形 刮物 高杯・曲物 付札・板 辛塔婆 蓋物	杭・矢板 建築部材 梯子 泥除け・整杆 田下駄・歯 梯子 舟形 刮物 高杯・曲物 付札・板 辛塔婆 蓋物	杭・矢板 建築部材 梯子 泥除け・整杆 田下駄・歯 梯子 舟形 刮物 高杯・曲物 付札・板 辛塔婆 蓋物	杭(線刻合) 建築部材 梯子 泥除け・整杆 田下駄・歯 梯子 舟形 刮物 高杯・曲物 付札・板 辛塔婆 蓋物	杭・矢板 建築部材 梯子 泥除け・整杆 田下駄・歯 梯子 舟形 刮物 高杯・曲物 付札・板 辛塔婆 蓋物	杭・矢板 建築部材 梯子 泥除け・整杆 田下駄・歯 梯子 舟形 刮物 高杯・曲物 付札・板 辛塔婆 蓋物
金属製品	鐵貨 鐵錢	鐵貨 錢	鐵錢	銅錢 銅鑄 刀子	馬銭の刃		錢貨 馬銭の刃 袋狀鐵斧		
自然遺物 石製品 その他	歯骨・昆蟲 種子 網代 石斧	人骨・昆蟲 種子 砥石 石斧・石鑿 黑耀石・輕石	人骨・昆蟲 歯骨 種子 砥石 石斧・四凹 黑耀石	人骨・昆蟲 歯骨 種子 砥石 石斧・四凹 白玉			昆蟲 網代 砥石 石斧	人骨・昆蟲 種子 石鍬	

第3表 濑名遺跡主要遺物一覧

- は困難であった。木製農具や畦畔と考えられる木道状遺構に埋め込まれた建築材等が出土している。
- 再開発** 古墳時代後期から奈良時代にかけては湿地の状態が終わり、新たな規格による水田の再開発が行なわれている。水田は各区において地形に応じた形で開発され、畦畔は東西と南北方向に走り、正方形型を呈示する。遺物は農具や生活什器などが中心であるが、1区20層では斎串、人形などの祭祀遺物と「西奈」「五百原」といった古地名・人名の記された木簡も出土している。
- 祭祀遺物と木簡の出土**

平安時代中期ごろより、畦畔の方向が北から38度西に傾く条里型の地割りと考えられる
条里型水田 水田が登場し、以後もこの畦畔の方向が踏襲された水田が中近世において検出され、次第に形骸化している。遺物は農具とともに墨書きのある土器や生活什器が出土している。

<参考・引用文献>

- 「瀬名遺跡昭和61年度発掘調査概報—静清バイパス(瀬名地区) 埋蔵文化財発掘調査—」
『静岡県埋蔵文化財調査研究所』 1987
- 「瀬名遺跡—昭和62年度静清バイパス(瀬名地区) 埋蔵文化財発掘調査概報—』 静岡県
埋蔵文化財調査研究所 1988
- 「瀬名遺跡—昭和63年度静清バイパス(瀬名地区) 埋蔵文化財発掘調査概報—』 静岡県
埋蔵文化財調査研究所 1989
- 「瀬名遺跡—平成元年度・平成2年度静清バイパス(瀬名地区) 埋蔵文化財発掘調査概報、
『静岡県埋蔵文化財調査研究所』 1991
- 「瀬名遺跡I(造構編I)」 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1992
- 「瀬名遺跡II(造構編II)」 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1993
- 「瀬名遺跡IV(自然科学編)」 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1995
- 「池ヶ谷遺跡(自然科学編)」 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1993
- 伊林修一「花粉の分析と周辺の植生環境」「研究紀要IV 水田跡調査の方法と研究」
『静岡県埋蔵文化財調査研究所』 1993
- 小柴秀樹「プラント・オーパール分析について」「低湿地遺跡の調査—発掘調査方法の改善研究ー」
『静岡県埋蔵文化財調査研究所』 1989
- 「西奈村誌」 廃原郡西奈村 1913
- 『静岡市史・原始 古代 中世』 静岡市役所 1981
- 『静岡・清水平野の誕生時代』 登呂博物館 1988
- 『静岡県文化財地名表I』 静岡県教育委員会 1988
- 中川雄太郎「村と伝説—瀬名近郷よもやま話」 静岡出版社 1965
- 玉川保治 「村を見なおそう—西奈村誌よりー」 水韻社 1977

第II章 木製品

第1節 建築部材

建築部材は主に水田の畦畔及び河川の堰から出土しており、建築遺構からの出土は礎・柱根のみである。

水田から出土した部材は、ほとんどが畦畔の杭材・芯材・横板として転用されており、特に杭列畦畔の杭材として転用されたものは細かく裁断され、先端を鋭く削られている。また、一部の材に炭化が見られ、焼失住居の解体材も利用されていたことがわかる。河川の堰から出土した建築材は垂木材が多く、ほとんどが堰の杭材として短く切断し、先端を鋭く尖らせるなどの二次加工を受けていた。

また、古墳時代中期の木造状遺構からも垂木材・円柱材が多く出土しており、これらは二次加工を受けずに埋め込まれているため、長大なものが多く全体の形状のわかるものが多かった。

1 磁板

本遺跡では計9点の磁板が出土した。これらは全て1区J7c層調査区南西域で検出された縦柱の掘立柱建物SH11701を構成する柱穴に伴うものである。この建物を構成する31の柱穴のうち7箇所の柱穴で磁板が出土した。このうち柱根を伴うのはSP23より出土したW51のみである。また、SP11でW49とW50が、SP14でW46とW47が共伴する他は、全て単独で出土している。さらにSP11、SP14、SP16では1個ないし2個の根固め石を共伴している。既に柱根を失っている柱穴が多く、残された磁板や根固め石も遺物構築時の原位置を保っているかは確かではない。

W49、W50はわずか径30cm前後の柱穴SP11に計4点の磁板、根固め石が折り重なった状態で出土した。このすぐ西隣の柱穴SP14も2枚の磁板W46、W47の上に根固め石が重なり、SP11と同じ様相を呈している。またSP14から1つおいて北側にあるSP16は、柱穴の底に並んで置かれた根固め石の上に、側面を地上に向けて乗った状態で出土した。柱穴SP23は調査区南端のNo.2トレンチの掘削の際に失われているため、遺構の形態については不明であるが、L字型の柱根の上に磁板W51が倒れかかったような状態で確認されたため、この地点に柱穴が存在したと仮定した。その他に根固め石を伴わず、磁板1枚で出土するW48、W45は柱穴の底で出土したが、W45は柱穴の底からやや浮いた状態である。遺構図より見ると、磁板を検出する柱穴は南側の桁列2列に集中する。

個々の遺物の形態を見ると、W49は出土した磁板の中で最も小型のものである。両側面、両小口を垂直に切った平滑な板材で、木裏面全体に压痕が見られる。小型で長方形を呈する磁板は他にもW44、W51が出土しているが、W44はミカン剥材のままの断面形を呈した压痕の少ないもので、W51は一方の小口が粗く切り落とされているなど加工の統一性は見られない。W48は裏面の一方の側縁が著しく肥厚した柱材を利用し、両小口は中央を膨らませた形状に加工している。この肥厚は樋状木製品の側面の立ち上がりと推定され、転用の可能性がある。W49に共伴するW50は一辺を欠くものの正方形を呈していると考えられる。

これに対し、他の4点はいずれも全長15cm以上、厚さ3.5cm以上で、出土した礎板の中では比較的大型である。W47はかなり丁寧に作られた資料である。W46とW52はホゾ穴を穿った厚い板材を転用したものである。双方とも一方の小口が丸く加工されているが、摩滅が著しい。もう一方の小口は転用時に垂直に切り落とされている。W52はホゾ穴の周囲が著しく劣化しているが、左側縁部分の

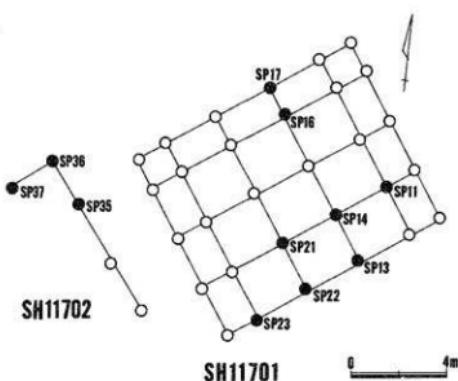
スギ板目材 極めて粗い加工で撥形の突起を作り出した特異な形状を呈する。これら4点の礎板は全てスギ板目材を用いており、内樹する。本裏面を地上に向かって立たせた状態で出土している。SH11701から出土したいずれの礎板も板材の転用材と考えられ、全長13~18cm、幅7~12cm、厚さ2~5cmで、ほぼ同時期に比定される藤枝市御子ヶ谷遺跡、同秋合遺跡、静岡市川合遺跡から出土した礎板に比べ、はるかに小型のものである。また、9枚の礎板は材厚3cm以下の薄いものと、同3.5cm以上をはかる厚いものに大別できる。転用時の小口の加工については比較的丁寧なものが多く、この傾向は厚いものほど顕著に現れている。

2 柱根

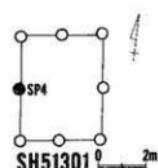
柱根は1区17c層SH11701、SH11702から出土した5点と、その他の建築構造より出土した3点に大別される。

(1) 1区17c層建築構造出土の柱根

SH11701 総柱建物SH11701からはSP17とSP23で計2点の柱根が確認されている。最も北側の桁行にあるSP17からはW40が柱穴の中心からやや西へずれた位置でまっすぐ立った状態で出土した。接地面は柱穴の底部より深く埋没し、上部は検出面から約30cmほど突出している。検出面より突出する部分は劣化による欠損を受けている。SP23で出土したW56は南側に礎板W51が覆いかぶさり、やや北側に倒れたような状態で出土した。枝の付根の部分を利用したL字状の特異な平面形態を呈するが、接地面に僅約



第4図 1区17c層建築構造



第5図 5区13層掘立柱建物



第6図 8区24層掘立柱建物

8.5cmほどの摩滅した加工面があることからこの木片が柱根であると推定した。

SH11701から西に約3m離れた調査区南西端にSH11702を検出した。この遺構から、現存する5箇所の柱穴のうち、北側にあるSP35、SP36、SP37で柱根を検出した。W55は根出土状況
固め石の直上で立った状態のまま出土した。柱根の出土位置は柱穴の中心よりやや北にずれる。W55は部分的に樹皮が付いたままの丸太材を使用している。芯の中央部で5個の破片に割れ、保存状態も極めて悪い。また、根固め石に接する面は建物構築時の圧力によってかなり平坦になっている。

W41は柱穴SP36の中心よりやや南寄りで、接地面が柱穴の底についた状態で出土した。上半部約3分の2は芯の中央部を残し、辺材部が劣化欠損している。また接地面はW55と同じ様に建物構築時の圧力を受けている。

柱穴SP37で出土したW42は1区17c層で出土した柱根の中で最も残存長が長く、最も太い資料である。上半部約2分の1の劣化はW41に類似するが、この劣化面は検出面から上方へ突出しており、かつ炭化している。接地面も建物構築時の圧力によって平坦になっている。

1区17c層検出の建築遺構出土の柱根は径が約10~15cmの範囲ではほぼ統一されるが、丸太材を杭状に加工しただけのものが中心で根がらみや抉り等を伴ったものは確認されていない。また、これらの5点の柱根の樹種はW40がイヌマキ、W56がクヌギ、SH11702はすべてコナラであり、主に広葉樹が用いられている。
丸太材を杭状に加工
広葉樹使用

(2) その他の建築遺構出土の柱根

柱根を伴う建築遺構は1区17c層SH11701以外にも8区24層北東部に弥生時代前期と考えられる掘立柱建物跡SH82401、5区13層のSR51301東岸に立地する弥生後期と考えられる掘立柱建物SH51301がある。

8区24層のSH82401からは確実に残存する南東の柱穴からW1488、南西の柱穴からW1489が出土している。SH82401はこのほかに北西部に柱根跡が残るため、東西約2.4m、南北約3mの1間×1間の掘立柱建物であると推定した。W1488、W1489とともに、上部は検出面の高さで折損し、下部は柱穴の底面に接する。出土位置はともに柱穴のほぼ中央部である。W1488、W1489はともに、側面に樹皮を付着する直徑約10cmほどの丸太材を用いている。これらの材には接地面の加工を施しているが、ともに石器加工と考えられる深く鋭い加工痕が部分的に残存している。柱根の樹種はW1488はクヌギ、W1489はコナラと広葉樹材を用いている。
丸太材使用

5区13層のSH51301は柱穴8箇所で構成される桁行4.28m、梁間3.30mをはかる2間×2間の南北棟の掘立柱建物である。柱穴は隅丸方形を主体に円形と楕円形が加わる。径は最小のもので17×20cm、最大30×34cmを測る。このうち、西辺中央の円形の柱穴4より柱根W414を検出した。W414は、現存長約47cm、径約20cmをはかり、このため直徑約30cmほどの柱穴に比べ、かなり大型の柱根が立てられていたことになる。地面に対し、やや北側に傾いた状態で、上部は検出面上にわずかに突出し、下部約2分の1は柱穴の底より、深く埋没した状態で検出された。上方で二又に枝分かれする丸太材を半剖に加工し、底部を斜めに切り落として柱根とした特異な形状を呈する。加工の方法も粗雑で、接地面は建物構築時の圧力を受けている。
丸太材半剖

3 梯子

出土状況 梯子はほぼ完形で元の形態のわかるものから5点、ほかに割られて杭や矢板・横木などに加工されたものも多い。ほとんどが畦畔に転用されて出土し、埴築造構からの出土はない。

側縁の孔痕 1はほぼ完形である。5区の13a層のSR51301(弥生中期後葉～弥生後期初頭)にかかる1号堰から出土した。流れに直交して出土しており、幅の広い板材であるため、堰の横木として転用されたものと考えられる。右側縁に1箇所孔跡があるが、堰を作る際に穿ったたるものか、建築材として組み合わせるために穿ったものは不明である。下端は右側が斜めに切られおり、転用による切断が推定される。しかし、下の段が最も長く、下端を地面に埋めて固定した可能性もある。

2もほぼ完形の梯子である。2/3区の14層水田(弥生後期前葉)より出土した。畦畔SK21404の脇からの出土であるため、畦畔に埋め込まれたものが洪水流で流れ出した可能性が高い。下端はU字形に切り欠いてあり、この部分を地面に差込んで固定したものと考えられる。

3は梯子を細く割り、杭に加工されたものである。2/3区の14層水田の畦畔SK21402に打込まれていたものが洪水によって抜け、横倒しとなった形で出土した。

4はほぼ完形と思われるが、上部を切断した可能性もある。5区の10層水田(古墳前期)下端V字形の畦畔SK51104の中から出土した。下端はV字形に切り欠いている。

5は上部を切断し、下部2段のみ残存する。10区の31a層水田(古墳前期)の畦畔SK1031a03より出土した。下端はV字に切り欠いている。

番号	区	遺物番号	下端	1	2	3	4	5	6	7	上端	年代観
1	5	W371	二又カ	35.4	34.3	34.4	30.2	29.5			平坦	弥中後～弥後初
2	2/3	W863	二又	33.8	33.1	30.8	29.7	19.5			平坦	弥後前
3	2/3	W723	欠損	(27.6)	30.8	(9.9)					欠損	古前
4	5	W258	二又	28.1	29.1	34.1	37.2	20			平坦	古前
5	10	W782	二又	33.1	(28.2)						欠損	古前
6	6	W5200	平頭	41.4	36.9	38	36.8	18.6			穿孔	弥後後～古前
7	9	W1801	平頭カ	(16.4)	29.3	41.7	推定(33.3)	推定(33.4)	23.4	(29.7)	平頭カ	弥後後～古前
8	1	W2700	二又	31.8	32.4	31.2	33	32.2	27.6	31	平頭	弥後後～古前
9	6	W2488	杭加工	(6.1)	33.1	29	(30.2)				欠損	弥後後～古前
10	1	W1372	平頭カ	31	34	(20.6)					欠損	弥後後～古前
11	5	WK424	杭加工	32.9	32.1	(14.5)					欠損	古前
12	1	W957	欠損	23.1	28.5	(13.9)					欠損	弥後後～古前
13	10	WK1550	欠損	28.9	(30.1)						杭加工	弥後後～古前
14	2/3	W1310	杭加工	(10.7)	30.6	(17.1)					杭加工	弥後後～古前
15	2/3	W996	杭加工	29.6	21.9	(6.3)					欠損	弥後後～古前
16	10	WK1558	杭加工	14.3	23.1	(17.7)					欠損	弥後前
17	2/3	W249	欠損カ	32.7	36.9	37.8	37.8	(3.6)			欠損	古中
18	2/3	W100	平頭カ	43.2	32.9	34.4	(42)				欠損	古中
19	5	W278	平頭カ	35	33.8	35.2	(13.6)				欠損	弥後前
20	6	W3175	欠損	(18)	26	22.8	(39)				欠損	弥後後～古前
21	1	W2821	切断カ	(20.6)	38.2	39.3	(24.1)				切断	弥中後
22	6	W2024	切断	(26.4)	28.6	29.3					杭加工	弥後後～古前
23	10	WK1690	欠損	(6.1)	38.8	(32)					切断	弥後後～古前
24	10	WK2144	割剥がし	(7.6)	26	(25.3)					欠損	弥後後～古前
25	2/3	W1516	欠損	(14.8)	14.5	(12.7)					杭加工	弥後前
26	7	SK7-10-371	切断	(33.6)	(20.9)						欠損	弥後後～古前

後の数は下から計測する。 単位 : cm () 内は残存長

第4表 梯子計測表

6はほぼ完形である。6区18層水田（弥生後期前葉）のSK61803の盛土上面より出土した。上端は大きな円孔を穿って埴物に固定したと考えられる。下端は丸太の木肌状になつており、特に加工がなく、木製品の可能性もある。

7は欠損が著しい。9区38層水田（弥生後期後葉～古墳前期）の畦畔SK93801に横板として埋め込まれていた。下部は木の瘤を利用して段を作ったため、1段の間隔が40cm～23cmの間に極端に変化する。中央部の段は欠損し、不明である。

8は完形である。丸太を利用して作られている。1区22層水田（弥生後期後葉～古墳前期）の畦畔のSKJ2202内部より出土した。上端は緩い弧状に切り、下端はコの字形に切り欠いている。段の間隔は32cm前後に整っている。

9～16は杭として二次加工をされ幅6cm前後に割られ、長さも2～3段を残す程度に切断されている。9は6区16層水田（弥生後期後葉～古墳前期）の畦畔SK61601、10は1区の22層水田（弥生後期後葉～古墳前期）の畦畔SK12202、11は5区の10層水田（古墳前期）の畦畔SK51006、12は1区の22層水田の畦畔SK12203、13は10区の35層水田（弥生後期後葉～古墳前期）の畦畔SK103504、14は2／3区12層水田（弥生後期後葉～古墳前期）の畦畔SK21204、13は2／3区12層水田の畦畔SK21206、16は10区の36層水田（弥生後期前葉）の畦畔SK103605に杭として打込まれていたものである。

17～18は丸太材を利用した梯子で、2／3区の10層（古墳中期）の流路SR21001内より出土した。17は3号堰の横木として転用されている。18は1号堰の下流から出土し、下端がやや薄く削られていることから1号堰に杭として打ち込まれていたと推定される。

19は広葉樹の板材を加工した梯子で、上部が切断されている。5区12層水田（弥生後期前葉）の畦畔SK51203から出土した。段が3段とも欠けており、畦畔に埋め込む際に段を割り取ったと思われる。

20は杭に二次加工されている。6区16層水田（弥生後期後葉～古墳前期）の畦畔SK61601内より出土した。段は不明瞭で、杭にする際に削ったものと思われる。

21は表面摩滅のため、加工が不明瞭であるが、段の痕跡が3箇所に見られる。いずれも厚く盛り上がるのみで、二次加工によって段が削り取られた可能性が高い。1区28層（弥生後期後葉～古墳前期）の洪水流内より出土した。

22は段をほとんど削り落としてしまっている。現状では表面はほぼ平坦で、段の厚みは残っていない。段を削った痕跡が2ヶ所あり、28cm前後の高さをもつことがわかる。矢板状の加工を受け、上端が矢板の下の部分となっている。下端は両面から削って切断されたと考えられる。6区16層水田のSK61601とSK61602の交差する部分に杭として打ち込まれて出土した。

23も段をわずかに残して削り剥がしている。1段の高さは38.8cmで、2段の痕跡が残存している。杭として細く削られており、10区35層水田のSK103502より出土した。

24は23と同様に段の痕跡が2ヶ所残る。段の高さは約26cmである。杭として細く削られており、10区35層水田のSK103503より出土した。

25は細い板状に削り剥がされている。段も削り剥がされているが、痕跡が1ヶ所残存する。上端は杭としての二次加工を受けている。2／3区14層（弥生後期前葉）のSK21403とSK21405の交差部分から出土した。

26は段の板材である。段の下部には刃物痕があり、段を削り落とそうとした痕跡と推定される。上部にも段があったと思われるが、削り落とされたと考えられ、現状ではその痕

	跡が確認できない。7区10層（弥生後期～古墳前期）のSK71003に伴うものと推定されている。	
梯子の形状	梯子には8・17・18のように丸太に直接切り込みを入れて作り上げるタイプと、1・2・6などのように丸太を割って厚みのある板材にしてから切り込んで作り上げるタイプが見られる。これは使用する木材の径による差と思われる。	
下端の加工	下端の加工は下を真っすぐ切るものと切り欠くものとに大別され、切り欠くタイプは瀬名遺跡出土の梯子について、切り欠きがU字型からV字型へ変化する傾向が認められる。このV字型への変化は古墳時代前期の梯子に見られる。段については時代に関係なく32～33cm程度が多いようである。	
上端の加工	上端の加工は6は中央に穿孔で、1は両端に突起を作り出すことで建物と組み合わせたと思われる。これは葦山町山本遺跡出土の梯子が上端の中央に突起を作つて組み合わせるものと逆である。	
出土状況	鼠返しは大半が弥生時代後期後葉から古墳時代前期の層から出土している。ほとんどが転用されて畦畔より出土しており、矢板・杭等に二次加工され破片となっているものもある。建築遺構からの出土はない。	
炭化材	1と2は2/3区12層水田（弥生後期後葉～古墳前期）の畦畔SK21204より出土した。1は焼失建物の材であったと考えられ欠損と炭化が著しいが、一辺10cmの孔と孔縁の作り出	
柱の痕跡	柱部が残存している。孔の周間が幅21.5cmにわたって盛り上がっている。正面は方形に、裏面は円形に焼け残り、組み合わされていた柱が断面円形で、上部は方形に細く削り壁板・台輪など、他の部材と組み合わせていたと推定される。2は孔の部分から欠損しており、孔縁の作り出し部も炭化が著しく不明瞭である。孔は15cm残存しており、15cmをこえる柱に組み合わされていたことがうかがえる。どちらも欠損部分を復元すると長径80cm程度の大きさと推定される。いずれも表面をチョウナで調整する。	
小	3は幅が短径が30cmしかなく、厚みも少ない小型の鼠返しである。長径は欠損しているが、復元すると45cm前後と推定され、柱孔も一辺7cmと小さい。6区の16層水田（弥生後期後葉～古墳前期）の畦畔SK61609より出土した。	

第7図 梯子の下端の加工

4は10区の35層水田(弥生後期後葉～古墳前期)の畦畔SK103503内より出土した。半分が欠損しているか、長径90cmを超え、短径も60cmを超えたものと推定される。孔は一辺16cmが残存する。

5は5区の8層(古墳中期～平安)より出土している。長径が51cmで小型であるが、孔縁の厚さ7cm、外縁部分でも3.8cmもあり、かなり厚いものである。孔は一辺16cmが残存し、大きさの割に太い柱に組み合わせられていたことがわかる。形状が他と異なり、タタリ等の建築材とは別の用途の物である可能性がある。

6は2／3区12層水田(弥生後期後葉～古墳前期)の畦畔SK21206の洪水による浸食痕跡部分から出土した。長径が87cmで大型だが、孔が残存辺11cmでやや小さく、欠損辺が12cm残存するため、長方形または小判形であった可能性が高い。穴の周囲が幅31.2cmにわたって盛り上がる。

7は6と形態が似る。2／3区の14層水田(弥生後期前葉)より出土した。畦畔の部材が洪水により流出したものと思われる。孔は6.5cm×13cm以上と縦長の長方形となる。孔の周囲は幅21.3cmにわたって盛り上がる。

8は6や7と形態が似る。分割し、右側を矢板として尖らせる二次加工を受けている。**二次加工** 2／3区16層(弥生中期後葉)の水田域から離れる微高地上から出土した。孔は幅10cm×4.5cm以上、孔の周囲は約20cmにわたってわずかに盛り上がる。左半分は炭化しており、焼失建物の部材であったと推定される。幅は杭の加工を受けてはいるが、90cm弱と推定される。

9も6や7と形態が似る。2／3区12層水田の畦畔SK21204より出土した。細く割られているが、上部に幅8.8cmの柱を通す孔の痕跡が残る。孔の周囲は幅26cmにわたり、わずかに盛り上がる。左が欠損するが右と同じ形状とすると、幅100cm前後の大型の鼠返しとなる。全体的に炭化しており、焼失建物の部材であったと推定される。

10～12は細く割られており、孔の周囲の盛り上がりによって鼠返しと推定した。10も6・7の形態の鼠返しを割ったもので、長径は75cmをこえると推定される。10区36層水田(弥生後期前葉)の畦畔SK103602より出土した。孔の周囲は2cm近く立ち上がり、高く盛り上がる。11も細く割られており、表面は正面・裏面ともに炭化している。2／3区12層水田の畦畔SK21204から出土した。長径が1m前後のものと推定される。12は割られており、原形が推定できないが、長径90cmをこえる大型のものであろう。2／3区12層水田の畦畔SK21204より出土した。貫通孔があり、固定するために穿たれた可能性がある。正面・裏面とも炭化しており、11と近い位置で出土していることから同じ建物の部材であった可能性がある。

13は3つに割られた破片で、厚さから鼠返しとした。孔痕はなく、短径50cm以上・長径85cm以上の大型のものになると推定される。8区の17a層水田(弥生後期後葉～古墳前期)の小畦畔から出土した。

14は柱を通す孔は残存しないが、右端のカーブから大型の鼠返しと推定される。全面炭化しており、孔の周囲の盛り上がりは二次加工の際に削り取られたと推定される。2／3区12層水田の畦畔SK21204から出土した。

15は下面にわずかに孔痕と思われる部分が残る。正面は所々に焼け焦げがあり、裏面は全面炭化している。2／3区12層水田の畦畔SK21204から出土した。

16は破片で孔跡はなく、長径1m前後の大型の鼠返しと推定される。2つに割られ、7

炭化材

同一建物か

区10層水田（弥生後期後葉～古墳前期）の小畦畔に杭として打ち込まれていた。

17は2／3区12層水田の畦畔SK21204から出土した。孔痕はないが右端のカーブにより、鼠返しと推定した。正面は左2／3が、裏面は右1／2が炭化し、正面と裏面とで炭化的部位が逆になっている。残存幅で75.4cmあるため、長径80cmを超える鼠返しと推定される。

18は10区35層（弥生後期後葉～古墳前期）の畦畔SK103503より出土した。孔痕はないが、右端のカーブから鼠返しと推定した。正面のみ炭化している。焼失建物の部材と推定される。

番号	長径	短径	孔	孔縁厚	概形	孔縁	孔縁幅	出土区・層位	年代観
1	62.8 (80)	56.3	10×9	4.8	小判形	22	5~6.5	2/3区12層	弥生後期～古墳前期
2	41.4 (80)	57.6 (65)	9×15 (15×15)	5.2	小判形	不明	約5	2/3区12層	弥生後期～古墳前期
3	26.8 (43)	30.6	7×7	2.8	小判形	なし	なし	6区16層	弥生後期～古墳前期
4	90.2 (60)	31.4 (16×16か)	16×5	4.4	小判形	なし	なし	10区35層	弥生後期～古墳前期
5	51.9 (38)	22.2 (16×16か)	16×7	7	隅丸方形	約21	3.5	5区8層	古墳中期～平安
6	87.1	20	11×12	7.4	隅丸方形	31	9.5~12	2/3区12層	弥生後期～古墳前期
7	66.0 (74)	22.5	6.5×13 (6.5×13以上)	5.1	隅丸方形	26	9~10	2/3区14層	弥生後期前葉
8	86.6 (90)	15.6 (30以上)	10×4.5 (10×10か)	3.7	隅丸方形	約20	5周後	2/3区16層	弥生中期後葉
9	85.2 (90)	11.1 (25以上)	8.8×1.5 (8.8×8.8か)	3.6	隅丸方形	26		9/2/3区12層	弥生後期～古墳前期
10	37.2 (85)	13.4	1.5×11.5 (1.5以上×11.5)	5.1	隅丸方形	不明	2.4	10区36層	弥生後期～古墳前期
11	45 (100)	3.6	不明 -辺8.8cm以上	3.5	隅丸方形	不明	4	2区12層	弥生後期～古墳前期
12	42.2 (100)	14.6	不明	4.4	隅丸方形	不明	6	2/3区12層	弥生後期～古墳前期
13	42.8 (100以上) (50以上)	25	欠損のため不明	3.4	小判形	不明	不明	8区17a層	弥生後期～古墳前期
14	55.3 (75以上)	23.7 (47以上)	欠損のため不明		小判形	不明	不明	2/3区12層	弥生後期～古墳前期
15	58.7 (79以上)	28.4 (57以上)	欠損のため不明	2.7	小判形	不明	不明	2/3区12層	弥生後期～古墳前期
16	66.1 (120)	14.8 (40超)	欠損のため不明	3.3	小判形	不明	不明	7区10層	弥生後期～古墳前期
17	75.4 (76以上)	17.8 (36以上)	焼損のため不明		小判形	不明	不明	2/3区12層	弥生後期～古墳前期
18	56.1 (60以上)	21.4 (43以上)	焼損のため不明		小判形	不明	不明	10区35層	弥生後期～古墳前期
19	56.7 (85超)	26.8 (60超)	切断により不明	4.5	小判形	不明	不明	6区16層	弥生後期～古墳前期
20	62.8 (90)	31 (70)	11×1 (11×11か)	3.7	小判形	(25)	7.2	2/3区12層	弥生後期～古墳前期
21	69.4 (95以上)	9.6 (20以上)	不明	3.2	不明	19.5	不明	5区10層	古墳前期

単位：cm () 内は推定値

第5表 鼠返し計測表

19は矢板として右端を薄く削り、右下端を切り込むことによって二次加工されている。 矢板に転用孔跡もいたため原形の推定が困難であるが、短径が60cmをこえるものと推定され、大型の鼠返しであったと考えられる。6区16層水田(弥生後期後葉～古墳前期)の畦畔SK61601より出土した。左は削り取られていると推定され、特に下部が削り込まれており、孔の周囲の盛り上がりを削り取った可能性が高い。

20は2／3区12層水田の畦畔SK21204より出土した。約1／4弱が残存していると思われ、短径70cm・長径95cm前後と推定される。孔は一辺11cmが残存しており、やや小型である。孔の周囲は隅丸方形に盛り上がり、その部分が焼け残り、他の部分は全面炭化している。断面が隅丸方形の柱が組み合わされていたと推定される。

21は杭に完全に加工されてしまっているが、中央部が幅19.5cmにわたってわずかに盛り上がり、鼠返しの孔の周囲の盛り上がりと推定される。復元すると幅90cmを超える長径となる。

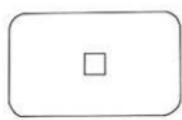
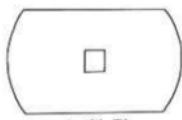
鼠返しの大きさを残存部から、およその復元値を推定する 大きさと、長径が80cm・短径が50cmを超える大型のものと、長径が50cm・短径が30cm程度の小型の物がみられる。

概形は両端が弧状に加工される小判型のもの(1～4、13概～20)と直線的に切り落とす隅丸方形のもの(6～12)に大別される(第8図参照)。小判形には弧のカーブに緩急の差があるが、時代差を示すものではない。

柱を通す孔については一辺が7cmが最も細く、10cm前後と16cm前後のものが見られる。いずれも垂直に穿ち、角度のつくものは見られないため、柱に垂直に組み合わされたものと考えられる。また、孔は欠損していて不明だが、ほぼ正方形のものと、6や7のように長方形になる可能性のものがある。

孔縁の加工は明確に段差を作り出すものと段差が不明瞭なものとに大別される。段差の明確なもののなかでも1や6のように幅が狭く特に段差が明確なものと、6や7のように10cm前後に幅広く作られるものがある(第9図参照)。これも時代差を示すものではないようである。

2／3区12層水田の畦畔SK21204から出土した鼠返しはグリッドC-21に集中し、ほぼ近い位置からまとめて出土し



第8図 鼠返し概形模式図



第9図 孔縁の加工模式図

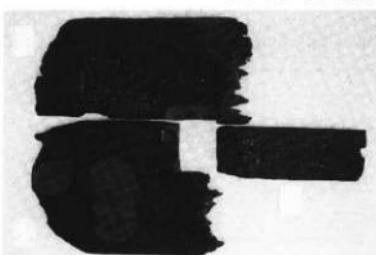


写真9 方形の焼け残り部分(正面)

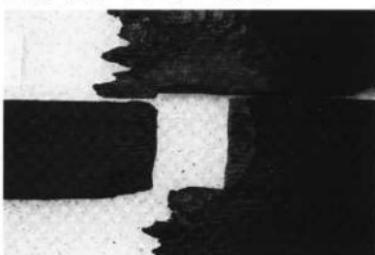


写真10 円形の焼け残り部分(裏面)

一様に炭化 ている。一様に炭化しており、水田の畦畔を作る時期の直前に建物火災があり、焼け残った材を畦畔の矢板などに転用したものと推定され、同一建物の材と考えられる。二次加工により割られているが、いずれも長径が90cm以上と考えられる大型の風返しである。

前頁の写真は柱の部分が焼け残った風返し(2・12・20)を組合せて接合関係を推定してみたものである。火を受けることによって材がそれぞれ収縮しているため、接合がわかりにくい状況であった。焼け残った部分を合わせてみたが、表と裏で焼け残った部分にずれが生じているため、同一の材ではない可能性がある。しかし、裏面が円形、正面が方形柱の形状に焼け残っていることから、同一建物に使用されていた可能性は高い。柱は断面円形で、風返しと組み合わせる部分を断面方形に細く削り出し、上には台輪などの他の材を組み合わせたと推定される。

5 畦

畠の形状 板材の側縁部の両端または一端に突起を作り出し、可動するように加工してあるものを扉と推定した。一端のみに突起を有する場合はもう一方の端部に穿孔し、突起と対になって回転軸を支える形になっている。

1は下部1/2弱が残存していると思われる。6.5×10cmの長方形孔が、回転軸の突起のやや上にも小孔が穿ってある。10区35層水田(弥生時代後期後葉～古墳時代前期)の畦畔SK103503に横板として打込まれていた。

2は上部の回転軸の突起が欠損していると思われ、下端には突起が作り出されている。右側縁上部に径2.5cmの孔を穿っている。上部を緩い弧状に切り、欠損している左側縁部には穿孔または方形に切り欠いた可能性がある。6区14層(古墳時代中期)の木造状造構61401の延長上に、踏み板のように長軸を木造状造構の方向に沿わせて水平に置かれた形で出土した。

3はほぼ完形である。他のものと比較してやや小型である。上端・下端ともに突起が残り、上端がやや長めに作り出されている。また、左側縁部中央には手を掛けたと思われる細い長方形のくぼみが作られている。9区33層(奈良時代～中世)の河川SR93302より出土した。

4は上端の突起が周囲をコの字形に削ることによって作り出されている。これでは回転軸を受ける部材に上端があたってしまい、うまく回転しないのではないかと思われるが、他のものとは異なる部材を組み合わせたのであろうか。右側縁の欠損部には方形の切り欠きが作られ、扉を開閉する際に利用したものと推測される。10区23層水田(奈良時代～平安時代)の畦畔SK102305より出土した。

番号	区	遺物番号	長さ	幅	回転軸長	回転軸幅	年代観
1	10	W3057	68.4(120)	54.7	上欠損 下4	上欠損 下3.8	弥後～古前
2	6	W8045	115.9	30.3	上なし 下4.4	上なし 下2.8	古中
3	9	W1530	74.1	27.4	上6.4 下2.4	上3.4 下2.4	奈良～中世
4	10	W327	106.1	30.7	上8.8 下8.6	上6 下3.2	奈良～平安
5	5	W169	93.5(97)	15.1	上なし 下3.3	上なし 下2.6	古中～平安
6	2/3	W455	85.7	26.2	上切断 下8	上切断 下2.1	弥後後～古前
7	2/3	W491	98.4	17.2	上なし 下5	上なし 下4.5	弥後後～古前

単位:cm ()内は推定値

第6表 畠計測表

5は2と形態が似ている。下端は突起が作り出されているが、上端は欠損していると思われる。また約2cmの小孔を右側縁上部に穿つ。上端の突起を作らず、回転軸の代わりに穿孔し、建物に繫縛したものと考えられる。5区8層水田（古墳時代中期～平安時代）の小畦畔の突点付近にはほぼ水平に埋没して出土した。

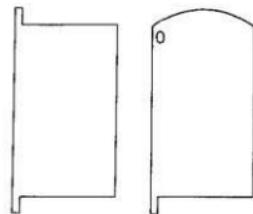
6は下部に回転軸が残り、上部は切り取られているものと推定される。扉の上と下に横長の細い穴を開ける。2/3区12層（弥生後期後葉～古墳前期）の畦畔SK21204より出土した。

7は5に似る。やや薄いが、劣化または二次加工で削られた可能性がある。上部は丸く切る。下部に回転軸と思われる突起があるが、劣化により薄くなっている。2/3区12層の畦畔SK21204より出土した。

扉の形状は上下に回転軸があるもの（3・4・6）**扉の概形**と、下部にだけ回転軸があり、上部には回転軸の近くに穴を穿ち、横の部材に縛って固定するもの（2・5・7）に大別される（第10図参照）。出土点数が限られているため時代的変化は不明であるが、瀬名遺跡においては弥生後期から奈良・平安時代まで両者が存在していたようである。

幅が完全に残存している扉は、短いものが30cm前後**扉の幅**であり、30cmでは一枚で単独に使用するにはかなり幅狭くなるため、2枚1組であったと思われる。

第10図 扉概形模式図



長いものは54cmあり、一枚で単独に使用することも可能である。幅の狭いものが回転軸と逆の側縁部を切り欠いているのに対して、1では中央に孔を穿っているのは、単独使用であるためとも考えられる。垂山町山木遺跡出土の扉板でも幅の広いものと狭いものが出土しており、扉の形状が片開きの一枚板と、中央開きの2枚板の2種類あったと考えられる。

6 垂木

瀬名遺跡出土の垂木は主として古墳時代中期を中心として、これ以降のものが大半である。ほとんどが河川にかかる橋や木道状造構から出土している。

1～4は8区の15層（古墳中期）の木道状造構の中に埋め込まれ、まとめて出土したものである。上端の抉りの中心部分の周囲を一周するように削るという加工の類似点が見られ、同じ建物に使用され廃棄されて埋め込まれたものと推定される。径も8.5cm～10.5cmで、長さも4が436cmと短い以外は6m前後である。抉りは1と3が上下から緩い角度で大きく削り、2と4は上は緩い角度で下は垂直に近く削っている。抉り部分の周囲を削るのには繫縛するための加工と考えられる。

5は6区14層（古墳中期）の木道状造構61403より出土した。径5.1cm、長さが4mとなり細長い。上端の抉りは上から緩い角度で、下は垂直に近い角度で切り込んでおり、1～4にみられるような周囲の削り込みは見られない。

6～10は2/3区10層（古墳中期）の流路SR2100Iにかかる堰から出土した。6は上端の加工が5に似る。7は上端を3方向から削って尖らせており、抉りや繫縛のための加工がみられない。二次加工を受けている可能性もある。8も上端を2方向から削って尖らせて堰から出土

木道状造構

出土の垂木

いるが、削りの中央に抉りの加工が残っており、抉りの部分は長さ4.1cm、深さ1.8cm程度で縛縛の加工もなしに横枠材にかけるには適さないのではないかと思われる。このため、

二次加工 この垂木は二次加工を受けており、本来の抉りの部分が切り落とされているものと推定される。おそらく長さ13cm、深さ4cm程度の抉りがあったと思われる。9も上端を7方向から削って尖らせている。10は上端が8と同様の二次加工を受けていると推定される。この流路出土の垂木は堰材に転用されており、堰の横木である6を除くと一様に上端が尖り、杭としての二次加工を受けている。

11は10区21層(平安)の疊層より出土した。洪水流によって上流から運ばれたものである。抉りは上端から平行、下から垂直に近い角度で切り欠いており、横枠材にかけるといった加工ではなくなっている。

堰材に転用 12は7区8層(古墳後期～奈良)の流路SR70801にかかる堰より出土した。堰の杭材として転用されていたが、7～10に見られるような二次加工は見られなかった。上部の抉りは上からの切り込みがやや平行に近い角度になっている。

13は2／3区9層(古墳中期)より出土した。流路SR20901に添って散らばる木材の一つで、木道状造構または流路に設けられた堰の一部が洪水流で流れたものと推定される。上部の抉りは上から緩やかな角度で、下から急角度で切り込んでいる。

14と15は2／3区のSR21001の堰より出土した。14は二次加工せず横木に使用していたが、15は両端を切り横木としたため、両端の加工が不明である。15は径15cmと円柱とも考えられるくらい大型で、長さ・重さも相当あったため、堰材に転用する際に切らざるを得なかつたと思われる。14は上端を円頭状に作り出し、首の部分を縛縛したものと考えられる。

16～17は7区のSR70801の堰より出土したものである。杭に転用されているが、二次加工は見られない。上部の抉りは浅いV字状でやや下からの切り込みが急角度である。

18は2／3区のSR21201の堰材に転用されており、横木に利用されていたと思われる。上部は浅いV字形の抉りで下からの切り込みがやや急角度である。

19は9区33層(奈良～中世)の流路SR93303の川岸から出土している。上部の抉りは上と下からほぼ同じ角度で切り込み、台形状に切り取っている。

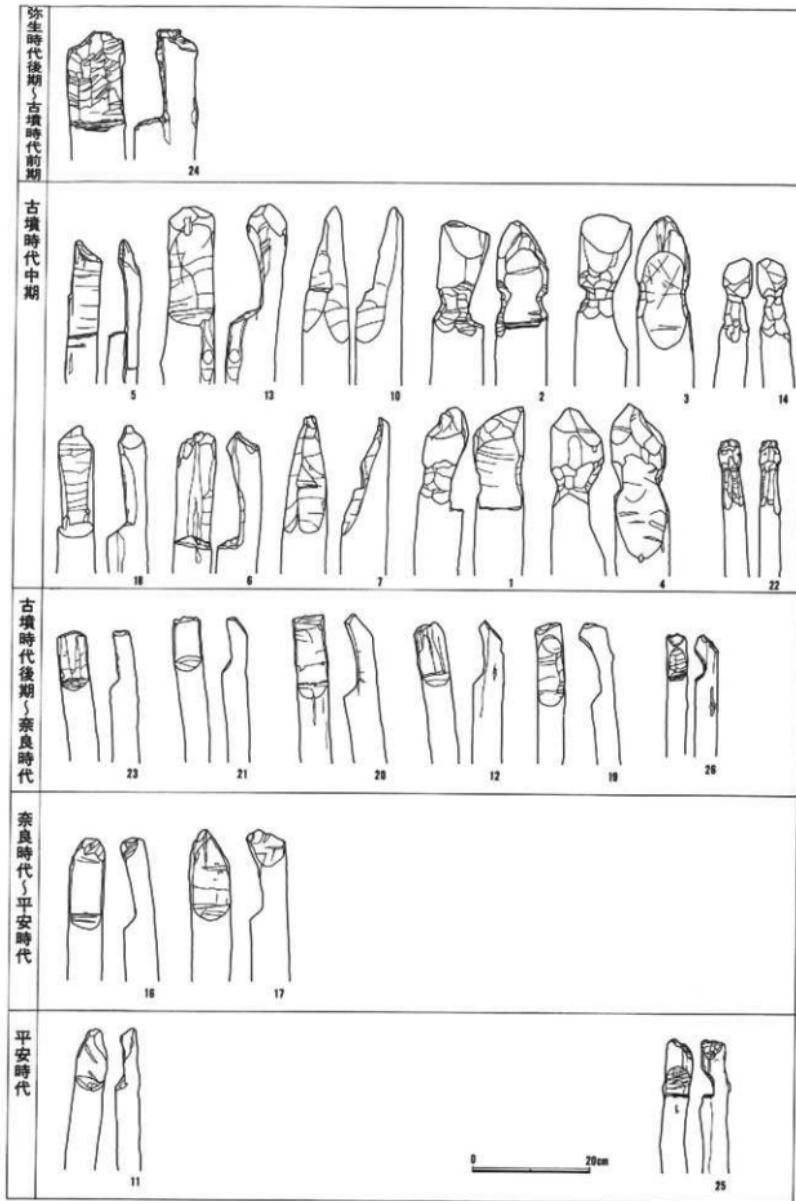
20と21は7区のSR70801の堰より出土している。ともに堰の杭に転用されたものである。20は二次加工は見られないが、21の下端は6方向から削って尖らせており、また、長さも166cmと垂木としては短いため、下端は杭として二次加工された可能性が高い。上部の抉りは浅いV字形である。

22は7区9層(古墳中期)から出土した。木道状造構の南側の木材集中部分から出土しているため、木道状造構の一部が洪水流で流された可能性がある。上端は円頭状に作る。23は7区8層の構造造構SD70801より出土した。上流のSR70801の堰材が流れこんだ可能性がある。上端の抉りは上から平行に下から急角度で切り込んでいる。

畦畔の出土 24は1区22層水田(弥生後期後葉～古墳前期)の畦畔SK12202に杭として打ち込まれていた。長さ134cmで杭として下端は二次加工され切り取られたと思われる。上端の抉りは上から平行に切り、下からほぼ垂直に切り込んでいる。

25は6区13層(奈良カ)の出土だが、上の11層水田(平安)の畦畔SK61101に埋め込まれたものとも考えられる。加工が荒く、上部の抉りも垂木とは考えにくい。

26は7区のSR70801の堰から出土したものである。堰の杭であったと思われるが、下端



第11図 垂木先端の加工の変遷

は欠損していて二次加工を受けていたかどうか不明である。上部の抉りは浅いV字形で、やや下からの切り込みが急角度である。

垂木の形態 形態としては抉りを入れて掛けるものと、頭を作り出して繋続するもの、抉りを入れてさらに繋縛をする加工をしたもの三種類に大別される。瀬名遺跡においては出土点数が古墳時代中期と古墳時代後期～奈良時代に多いため、先端の加工について、古墳時代中期に先端の加工の種類が豊富になるように思われるが、時代差ととらえるには難があり、今後の資料の増加を待ちたい。

抉りの加工 上部の抉りの加工については時代ごとに様々な形態が見られるが、古墳時代中期には上を続い角度で長く切り込み、下から垂直に近い角度で切り込んで間を80°～90°の鋭角に仕上げる加工が比較的多い。古墳時代後期から奈良時代では下からの角度がやや緩くなり、間を113°～132°の鋭角に仕上げる加工が多くなっている。



第12図 垂木先端模式図

番号	上部の抉り(単位:°)			長さ (cm)	太さ (cm)	出土区・層位・遺構	年代観	備考
	上からの割り	下からの割り	角度					
1	27	24	129	603	9.5	8区15層木造状遺構	古墳中期	有頭状
2	13	77	90	603	8.8	8区15層木造状遺構	古墳中期	有頭状
3	23	18	139	594	10.5	8区15層木造状遺構	古墳中期	有頭状
4	10	90	80	437	8.5	8区15層木造状遺構	古墳中期	有頭状
5	7	76	97	408.8	5.1	6区14層木造61403	古墳中期	
6	6	67	106	276.3	7.1	2/3区10層SR21001 4号壙	古墳中期	
7	不明	不明		273	8	2/3区10層SR21001 1号壙	古墳中期	
8	2	90	88	255	8	2/3区10層SR21001 1号壙	古墳中期	
9	不明		(247.5)	7.5	2/3区10層SR21001 2号壙	古墳中期		
10	(10)	64	116	245	8.5	2/3区10層SR21001 1号壙	古墳中期	
11	4	53	123	(243)	4.6	10区21層	平安	
12	17	43	130	(241.8)	5	7区8層SR70801 2号壙	古墳後期～奈良	
13	34	61	85	(240.8)	8.8	2/3区9層	古墳中期	
14	なし	なし		235.5	10	2/3区10層SR21001 1号壙	古墳中期	有頭状
15	不明	不明	(237.5)	15	2/3区10層SR21001 2号壙	古墳中期		
16	8	48	124	(219.1)	5.7	7区8層SR70801 2号壙	古墳後期～奈良	
17	11	48	121	(208.6)	7	7区8層SR70801 2号壙	古墳後期～奈良	
18	5	52	123	(198.5)	7.2	2/3区10層SR21001 2号壙	古墳中期	
19	22	45	113	185.2	4.5	9区SR93303	古墳後期～奈良	
20	6	50	124	(174.8)	5.6	7区8層SR70801 2号壙	古墳後期～奈良	
21	10	43	132	(166)	4.7	7区8層SR70801 1号壙	古墳後期～奈良	
22	なし	なし	(137.7)	5.1	7区9層	古墳中期	有頭状	
23	15	50	115	(129.2)	5.2	7区8層SD70801	古墳後期～奈良	
24	17	63	110	(134)	11.8	1区22層SK12202	苏生後期～古墳前期	
25	30	53	97	(71.7)	9.8	6区11層SK61101	平安	
26	43	93	44	(38.5)	6.8	7区8層SR70801 1号壙	古墳後期～奈良	

第7表 垂木計測表

7 円柱

垂木に似るが、太く上端の半分を切り取る加工をしたものと円柱とした。

1～4は2/3区10層(古墳時代中期)のSR21001の埴材として転用されていたものである。1は堰の横木となっており、径15cm、下から60cm前後を細く削り、地面に立てるための加工をしている。60～70cmを地面に埋まっていたとすると柱の上端で地上2m50cm前後となる。2は杭材に転用されていたものである。下部1mは良好に残存するが、上部は炭化や劣化が著しい。径は下部の太い部分でも10cmとやや細い。下部1mが地面に埋まっていた部分とすると、上端は地上180cmとなる。3も杭材に転用されていたものである。下端より70～110cmの部分が劣化している。この部分が埋めた部分と地上部分との境目だとすると、上端が地上140～180cmとなる。4は横木に転用されたもので、全体的に劣化が著しい。下端も欠損しており、実際はかなり長いものと考えられる。

5～6は10区30b層(古墳中期)の木道状遺構から出土した。5は全体をチョウナで加工し、14面を削り出すという丁寧な仕上げ方をしている。6は表面の加工が認められないが、からの出土下端より約65cm余りの表面が荒れしており、地中に埋まっていたと推定される。垂直に立てられていた場合、上端は地上2m10cm前後の高さとなる。

これが柱として使用されていたか、垂木として使用されていたかは不明であるが、柱であるならば、上端の加工が他の横架材等と組み合わせにくく、やや細いと考えられるので2本以上を組み合わせて使用した可能性も考えられる。

番号	長さ	径	上端の長さ	出土区・層位	年代観	備考
1	315.5	13	14.5	2/3区10層SR21101 2号堰	古墳中期	
2	280	8.5	16.8	2/3区10層SR21101 2号堰	古墳中期	上部炭化
3	257.2	10.2	13.2	2/3区10層SR21101 1号堰	古墳中期	
4	(230)	7.5	(11.2)	2/3区10層SR21101 4号堰	古墳中期	
5	284.2	10.6	23.4	10区30b層木道状遺構	古墳中期	全周面取 14面
6	277.4	10.8	18.2	10区30b層木道状遺構	古墳中期	下端67.6cm劣化

単位:cm ()内は残存値

第8表 円柱計測表

8 柱状材



写真11 桁列畦畔

瀬名遺跡出土の建築材は大半が杭列 桁列 畦畔
畦畔に打込まれていたため、二次加工で元の材を細かく削ってある場合がほとんどである。このため、端部の加工(いわゆる仕口)は切り落とされている場合が多く、柱材として使用されていたか、横架材として使用されていたかは不明である。ここでは便宜上「柱状材」としているが、必ずしも柱として使用されていたとは限らず、部材によっては厚い板材を細く削ったものも存在する可能性もある。

遺物は大半が弥生時代後期後葉～古墳時代前期の水田の杭列畦畔より出土している。中でも10区33・35層の出土が多い。このため、以下の年代観については弥生後期後葉～古墳前期のものは省略する。

1は長さ324cm、径9～10cmで法量から見ると、垂木等に利用された可能性があるが、中央部から下の表面を面取りするといった加工を加えている点が漸名遺跡における他の垂木材とは異なる。

2は長さ297.3cm、径7～11cmで上部に表面を削って作り出したホゾがあり、栓をして他の部材と組み合わせる加工がなされている。下端も欠損しているが同様の加工があったと推定される。両側を柱材等に差し込んで留める横架材の可能性が強い。両端のホゾの加工の近くにある斜めの線状の溝は蔓状の物が自然に巻き付いた痕跡で、人為的な加工ではない。10区30b層（古墳中期）の畦畔の芯材として埋め込まれていた。

大引貫式 3は杭として二次加工されているが、おそらく中に壁板をはめ込む形の柱材の一部である。大引を受ける8×7cmの穴があり、直径が20cm前後の大引貫式の柱と考えられる。この貫穴の下にも14cm×5cmの壁板が入ると考えられる部分がある。2／3区20層（弥生中期）の層より出土した。

4は上端にホゾを作り出した材である。7区SD70801（古墳後期～奈良）の中から出土した。

5は8区6層（平安～中世）の杭の集中SX80601より出土した。加工が直線的で、おそらく近代的な工具で加工されたものと思われる。近代のものが6層まで打ち込まれていたと推定される。

6は元は断面が四角であったと推定される。上端にはホゾ状の削り出しがあり、正面に非貫通孔を2ヵ所穿つ。孔間は105cmで、台輪の可能性もある。9区38層の畦畔中に埋め込まれていた。

えつり孔 7は貫穴をもつ柱材と考えられる。貫穴の下には貫通孔、上には「えつり孔」の痕跡と思われる窪みがある。縦横に部材を組み合わせたことが想像される。8区SR70801（古墳後期～奈良）より出土した。1号塚の杭として転用されていたと考えられる。

中央部を削る材 8は中央部を表裏から削った材である。この部分に他の部材があたり、材と材との間に挟まれる部材と思われるが、上下に組み合わせたか左右に組み合わせたかは不明である。

28・107～110・217～219も同様の部材であろう。107は長さ231.4cmとかなり長い部材で、下端が大きく地面に立てた可能性が強い。1区22層、2／3区12層、10区33・35層の畦畔より出土している。107が横倒しになって出土している以外は、すべて杭として畦畔に打ち込まれていた。表面の加工は、表皮を剥がしたままの材と、周囲をチョウナで削り、面取りするものがある。

斜めの穿孔 9は孔に他の材を差込んで斜めの角度を作り出す部材である。孔の角度は上が39°下が50°で差込む材は130～141°の角度で持ち上げられることになる。この材が地表面に垂直に使用されていたとすれば、地表面に対して40～51°の角度である。屋根材を支える柱材の可能性がある。11もほぼ同様の形態で、孔の角度が45～50°で、垂直に立てた場合は地表面に対して40～45°の角度で材を支えることになる。10区33層の畦畔から近接して出土しており、同じ建物の部材であった可能性が高い。17と18は9のような形狀の材の先端を切り落としたものと推定される。孔の角度は共に残存部で40°で、垂直に立っていた場合には地表面に対し、50°の角度で部材を支えていたことになる。10区35層の畦畔より出土した。188は

斜めの穿孔と思われる痕跡が残存する。穿孔の角度は51°～67°である。孔の内部と思われる部分と裏面の一部が炭化している。1区22層の畦畔より出土した。189も斜めの穿孔を持つ材である。48～49°の角度で穿っている。両側面は割り剥がされているが、表面の加工から左側面は元からの面と考えられる。10区35層水田の畦畔に打ち込まれていた。190・191も斜めに大型の穿孔があり、190は32°、191は28°の角度で穿つ。いずれも10区33層水田の畦畔に打ち込まれており、近接しているため同一建物の部材であった可能性が高い。

10は孔が正面から側面に抜ける柱材である。おそらく角にあたる部分にあった柱と思われる。孔間は約44cmである。左側面には13cmの間隔を開けて非貫通孔を穿つ。10区35層の畦畔の杭として出土した。114・118・119・121～124・136・197・198も同様の材である。119は穿孔が1ヶ所、上部には67に類似した溝状の加工と段差が見られる。121は2個ずつ2ヶ所、計4つの穿孔がある。孔と孔の間隔は中央部が49cm、側縁部寄りが47cmである。4ヶ所同時に使用されたのか、補修等により2回に分けて穿孔されたのかは不明である。

番号	長さ	幅	厚さ	抉りの長さ 右	抉り部幅 左	表面の加工	出土区・層位	年代観	備考
8	139.9	7.1	6.5	18.4	18	2.9	丸太材	1区22層	弥生後期～古墳前期
28	156.5	8.8	7.3	14.8	15.6	5	面取り	10区33層	弥生後期～古墳前期
107	231.4	7.3	6	8.8	9.2	4.2	丸太材	2/3区12層	弥生後期～古墳前期
108	130.8	8.4	7.3	10.8	11	5.1	面取り	10区35層	弥生後期～古墳前期
109	132.4	9	6	21.6	18.2	6.4	丸太材	10区33層	弥生後期～古墳前期
110	142.4	10.4	6.1	15.8	16.5	3.9	丸太材	1区22層	弥生後期～古墳前期
217	168.8	7.2	6.5	10以上	14.5	4.5	面取り	10区35層	弥生後期～古墳前期
218	112.1	8	4.3	なし	29.2	4.2	面取り	10区33層	弥生後期～古墳前期
219	95.9	9.2	8	23.2	21.6	5	面取り	2/3区12層	弥生後期～古墳前期

単位：cm

第9表 中央部を表裏から削った材

番号	長さ	幅	厚さ	穿孔角度	出土区・層位	年代観
9	140	12.1	5.9	39°～50°	10区33層	弥生後期～古墳前期
11	101.2	10	5	45°～50°	10区33層	弥生後期～古墳前期
17	37.4	12.5	7.9	40°	10区35層	弥生後期～古墳前期
18	28.9	10.3	4.5	40°	10区35層	弥生後期～古墳前期
188	22.4	8.1	4.4	51°～67°	1区22層	弥生後期～古墳前期
189	80	14.4	4.7	48°～49°	10区35層	弥生後期～古墳前期
190	113	16.8	5	32°	10区33層	弥生後期～古墳前期
191	96.4	13.2	4.8	28°	10区33層	弥生後期～古墳前期

単位：cm

第10表 孔に他の材を差し込み斜めの角度を作り出す部材

番号	長さ	幅	厚さ	孔数	孔間	加工面	出土区・層位	年代観	備考
10	115.2	9.6	5.6	2個	44	3面	10区35層	弥生後期～古墳前期	非貫通孔2
114	173.2	8.2	6.1	2個	57.6	2面	5区10層	古墳前期	
118	139.7	6.1	5	2個	44.5	2面	5区10層	古墳前期	
119	142.5	9.6	5.8	1個		3面	10区33層	弥生後期～古墳前期	ト部段差あり
121	153.2	8	5	4個	49°～47°	1面	5区10層	古墳前期	
122	160.5	6.5	3.9	2個	45	不明	5区10層	古墳前期	
123	168.4	6.6	5.8	2個	47	2面	5区10層	古墳前期	
124	169.9	8.4	5.4	2個	62.4	2面	5区10層	古墳前期	
197	106.2	10.7	6.1	2個	35.5	2面	10区35層	弥生後期～古墳前期	
198	147.8	7.9	5.6	2個	50	2面	5区10層	古墳前期	

第11表 孔が正面から側面に抜ける柱材

136は1面のみ残存し、他の面は二次加工によって割り剥がされているが、小孔が側面の方向に向かって開けられている。119・136が10区33層、197が10区35層の出土の5区10層（古墳前期）の出土である。

12は中央に $2.5 \times 20\text{cm}$ の細長い貫通孔が開き、上下に斜めに溝が入る材である。板材をはじめ込んだものと推定されるが、欠損のため全体がどのようなものであったかは不明である。13も孔の部分から切り落とされて杭に加工されていると思われ、ほぼ同じ形状のものである。12と対で使用された可能性もある。12は9区38層の畦畔、13は10区35層の畦畔より出土した。

14は中央が幅広く、広い部分に一辺 4cm の方形孔がある。建築材の可能性が低いと思われるが、ホゾを受ける材の一一種の可能性がある。1区22層の畦畔に杭として打ち込まれていた。

ホゾの穿孔 15はホゾに孔があり、中に栓が残っているものである。他の部材を直角につなぐものとすると、ホゾの根元と孔との間はわずかに 3cm あまりで、うすい板材に組み合せたと推定される。ホゾ全体が 7cm あることを考えると、上端がコの字形になったものに組み合せたという可能性もある。ホゾの断面は邊 $2.2 \times 2.5\text{cm}$ の長方形である。1区22層より出土した。

16もホゾを持つ材である。ホゾの長さは 11.2cm で、断面一辺 3cm の方形に作る。1区22層より出土した。

貫孔を持つ四角柱 19は一辺 8cm 前後の方形孔のある四角柱を四分割して杭に加工したものである。復元すると断面が $15.4\text{cm} \times 11\text{cm}$ の長方形の柱となる。20も一部しか見つからなかったが、ほぼ同程度の四角柱と推定される。44も同様の形状で、貫孔の辺は $8 \sim 9\text{cm}$ である。出土位置も10区33層のSK103304と近く、加工も似ていることから、同じ建物の部材であった可能性が強い。

断面多角形 21～27・29・31～40・42・45～47・49・76～80・84～87・137・142は断面多面形になるよう状に削った材である。大半が四分割されて杭となっている。元の形を推定すると、ほとんどが断面の径 12cm 前後の円形に近い多角形で、12角形前後であったと考えられる。長いもので 234.4cm 、短いもので 92cm の残存長で、 $130\text{cm} \sim 150\text{cm}$ のものが大半を占める。円柱の5が径 11.5cm 、長さ 284.2cm で、これを中央で2つに切断し、みかん割り状に分割すると、このような杭材になるため、元の形は円柱の5のような多面柱であったと考えられる。142は下部に幅 6.8cm のホゾ穴を穿っているため、別の形態の物も存在したと考えられる。また、28・219のように表面を面取りし、両側から抉りを入れる部材を削ったという可能性も残る。半分以上が10区33層～35層の出土であるが、一部5区10層（古墳前期）のものがある。两者とも加工方法や形状に大きな差は見られない。27は出土層位が不明であるが、おそらく10区の33～35層のものと考えられる。木取りを見ると、芯持材はなく、年輪の傾斜から見ても芯とその周囲の部分は使用されていない。かなり太い丸太材から複数の柱材を作ったと考えられる。

四角柱 30は断面が方形の柱材の一部と推定される。表面にはチョウナの加工痕が残るが、多面柱のように曲面を作り出している。下端は段の加工が残り、他の材と組み合わせるためにホゾ穴状の加工があったと思われる。10区33層の畦畔に打ち込まれていた。

41は厚い材である。下端は削られており、杭としての二次加工と思われる。 $2.5\text{cm} \times 4\text{cm}$ の粗い穿孔があり、他の材を組み合わせるためのものと考えられる。上部の側縁に緩い弧

状に切り欠きがあるが、これも組み合せのための加工と思われる。全体的に建築材としては加工が粗いが、建築部材の出土の多い10区33層の畔に打ち込まれていた。

43もかなり厚い材で、6.5cm×7.5cmの方形孔がある。幅18cm前後の柱材を削ったものと推定される。10区23層（奈良～平安）より出土した。

48は表面が多面柱と四角柱の中間的な加工で、中央部裏に板材をはめ込んだと考えられる1.5×18cmの細い削り込みがある。裏面はチョウナによる加工が見られず、割り剝がされているため、もとは断面が方形状であった可能性が高い。10区35層の畔に打ち込まれて

番号	長さ	幅	厚さ	孔の法量	出土区・層位	遺構	年代観
19	135	15.4	11.6	9×7.8	10区33層	SK103304	弥生後期～古墳前期
20	128.8	(11.2)	(10.5)	9×(7)	10区33層	SK103304	弥生後期～古墳前期
44	135.7	(8)	(5.8)	9×(4)	10区33層	SK103304	弥生後期～古墳前期
56	140.4	(8.2)	(5.1)	8.5×(3.2)	10区33層	SK113304	弥生後期～古墳前期

単位：cm

第12表 対孔のある四角柱

番号	長さ	残存寸	復元径	残存面	復元面	出土区・層	年代観	備考
21	143.9	8.6×5	16~17	2面	12~13面	5区10層	古墳前期	
22	161.3	8.2×6.9	16~17	2面	12~13面	5区10層	古墳前期	
23	180.6	6.7×7.3	12~13	3面	12面	10区33層	弥生後期～古墳前期	
24	177.6	9.2×5.2	13~14	4面	12面	10区33層	弥生後期～古墳前期	
25	164	7.3×5.9	12~13	5面	12面	10区33層	弥生後期～古墳前期	
26	161.6	10×7.6	14	4面	12~13面	10区33層	弥生後期～古墳前期	
27	159	8.6×5.8	13~14	3~4面	12面	10区層不明	不明	
29	155.9	9×6.3	13~14	4面	12面	10区33層	弥生後期～古墳前期	
31	150.6	8.8×6.8	13~14	4面	12~13面	10区33層	弥生後期～古墳前期	
32	147.8	7.7×4.6	12~13	3面	12面	10区35層	弥生後期～古墳前期	
33	145.6	8.5×6.9	12~13	4面	11~12面	10区33層	弥生後期～古墳前期	
34	145.2	8.4×6	13~14	4面	12~13面	10区33層	弥生後期～古墳前期	
35	144.8	7.2×5.4	13~14	2	12~13面	5区10層	古墳前期	
36	143.2	8.7×4.8	13~14	3面	12~13面	10区33層	弥生後期～古墳前期	
37	143.4	13.6×5.4	14	7面	14~15面	10区33層	弥生後期～古墳前期	
38	143.2	8.4×7.6	8前後	10面	10面	10区33層	弥生後期～古墳前期	完周
39	141.8	7.5×4.9	13	3面	12面	10区33層	弥生後期～古墳前期	
40	141.2	6.8×6.3	12~13	3面	12面	10区33層	弥生後期～古墳前期	
42	138.5	11.6×3.9	13~14	3面	11~12面	10区35層	弥生後期～古墳前期	
45	135.2	9×5.8	13~14	3面	12面	10区35層	弥生後期～古墳前期	
46	134.6	7.5×6.5	14	3面	12面	10区35層	弥生後期～古墳前期	
47	97.8	6×4.4	10~11	3面	12面	10区33層	弥生後期～古墳前期	
49	92.3	10.4×4.4	12~13	4面	10~12面	10区33層	弥生後期～古墳前期	
76	105.8	6.8×6.1	6~7	12面	12面	9区38層	弥生後期～古墳前期	完周
77	129	5.8×5.5	10~11	3面	12面	5区10層	古墳前期	
78	136.1	10.7×6.6	15~16	4面	15~16面	5区10層	古墳前期	
79	140.6	7.9×4.2	12~13	3面	12~14面	5区10層	古墳前期	
80	142.8	6.6×5.2	12	3面	12~13面	5区10層	古墳前期	
84	141	9.2×5.6	18~20	3面	16~18面	5区10層	古墳前期	
85	154.8	8.2×5.2	16~17	3面	12面	5区10層	古墳前期	
86	156.2	8.8×6.6	16~17	3面	14面	5区10層	古墳前期	
87	167.4	8.6×4.8	15~16	3面	13~14面	5区10層	古墳前期	
137	234.4	12.6×5.4	14~15	9面	13~14面	10区33層	弥生後期～古墳前期	穿孔
142	112.8	5.6×5.8	12~13	3面	12~13面	10区33層	弥生後期～古墳前期	

単位：cm

第13表 断面多面形となる柱

いた。

50・52は側面または側縁部を削り、下端に頭を作り出すものである。これは杭を抜けにくくする加工とも考えられるが、この部分を繋縫して他の材と組み合せたとも考えられる。頭の部分は二次加工を受けているか、抉りの加工があった可能性がある。4cm~6cmの細い材である。

51は円柱を削ったと考えられる材で、下端は円柱の上端部を杭として二次加工したものと思われる。1区22層の畦畔に打ち込まれていた。

53は丸太材の端部にホゾを作り出している。柄の付根の部分は60°前後の角度がつけられ、他の部材と斜めに組み合わされていたと考えられる。10区35層の畦畔に打ち込まれていた。

ホゾのある角材 54・55は角材の先端にホゾを作り出している。54はホゾの長さ12.5cm、幅4cmで、55はホゾの長さ10cm、幅4cmである。出土地点も近く、同じ建築物の材と推定される。5区12層水田（弥生後期前葉）から出土している。

先端に段差 56~58と61~70・82・103は先端に段差が認められ、貫孔または組合せの加工（いわゆる仕口）が作られていたと考えられる四角柱の割り材である。56は下端に一辺8.5cmの方形の貫穴の痕跡と思われるものがあり、19のような四角柱の割材と考えられる。57はコの字状の先端をした材の一部と思われる。65・103も同様の材の一部と考えられる。58はホゾのある柱の割り材とも考えられる。61は57に類似するが、24cmもホゾ状の突起があり、突起の付根4cmから下を削っているため、この部分にホゾ穴があった可能性が高い。62も57に似るが、チョウナ痕が3面あり、断面が横長の長方形の柱を割ったものと考えられる。64は段差が正面と側面にあり、組合せが複雑であったことを思われる。67は57と下端の加工が似るが、さらに上部に溝状の抉りがある。68は斜めに突起した痕跡と思われる削り込みが見られる。69・70は27cmあまりホゾ状に大きく突起させている。この2点は接合する可能性があり、元は太い角材であったとおもわれる。ほとんどが10区33~35層の出土で、5区10層と6区16層のものが1点ずつある。

59は断面円形の先端にホゾをつけ、さらに胴部に継長の穴を穿って板材をはめ込む加工がある。6区8層（中世近）の畦畔より出土したが、径が6.9cmと細く、建築材ではない可能性がある。

ホゾのある丸太材 60は丸太材の先端にホゾを作り出した材である。下端は二次加工によって粗く切り落とされており、実際はかなり長いものであった可能性がある。中央部に切り込みが2箇所あり、他の部材と組み合わせたと推定される。10区21層（平安）より出土した。

71は両端を対称的に細く削る材である。7区8層（古墳後期～奈良）の河川SR70801の1号堰付近より出土した。

72はホゾ穴・柱穴痕のある材で、表面を斜めに削り14°の傾きを作っている。左側が割り取られており、復元すると下部にホゾ穴を持ち、上部に大型の長方形穴孔を持つ材となる。上部も切断されており、対照的であったとすれば、横架材であった可能性が高い。8区17a層の畦畔に打ち込まれていた。

73は6cmの孔を24~25°の角度で穿つ。垂直に立てられていたとすれば、地表面に対して65~66°の角度で他の材を上げることになる。6区16層の畦畔に打ち込まれていた。

74は2cm強のホゾ穴痕を持つ。5区10層（古墳前期）の畦畔に打ち込まれていた。

75は断面が一辺約18cmの隅丸方形となる材を削ったものと考えられる。7区8層（古墳

後期～奈良）の河川SR70801より出土した。

81・88～102・104～106は四角柱の割材と考えられる。89には木目にそって削った面に、四角柱割る際に打ち込んだと推定される木釘または楔の破片が残っている。98は正面の中心に溝があり、裏面の一部にもチョウナ痕が残ることから、柱ではなく別の部材という可能性もある。101は下端にホゾ穴があつた可能性がある。ほとんどが10区33層の出土で、一部5区10層、2区12層の出土のものがある。年代的にはほぼ同時代のものである。

83は3面にチョウナ痕が残存し、一辺が11cmの隅丸方形の材になると推定される。10区33層の畦畔に打ち込まれていた。

111は表面を斜めに削り、20°の角度を作り出している。上部にはホゾ穴痕がある。右側面が削り剝がされており、対照的だったとすると間に板を挟むように加工された柱の一部であった可能性があるが、杭としての二次加工のため、原形は不明である。1区22層の畦畔に打ち込まれていた。120も25°の角度が付けられている部材で、形状がやや似る。表から裏への貫通孔があり、10区33層の畦畔に打ち込まれていた。

112・113・115～117はホゾ穴の痕跡と考えられる抉りのある材である。いずれも四角柱 ホゾの痕跡の割り材である。112は2方向から、113は斜め方向からホゾが差し込まれたと推定される。

115は裏表で加工が異なるため、やはり2方向からと推定される。また115には上部に幅12cmの柱穴の加工も見られ、横架材であった可能性がある。117は木釘または楔が残る。全て10区33層の畦畔に杭として打ち込まれていた。

125は四角柱の割り材と考えられ、上部に段差の加工があり、67に類似したものと思われる。126も同様の形状である。10区33層の畦畔から出土している。

127は形状が樅に似る。下部表面を削り調整しているが、類似するものが他になく、建築材ではない可能性が高い。出土地点・層位ともに不明である。

128は円柱を加工した可能性がある材である。上部は径約11cmの丸太材で、下端を薄く尖るように裏表から削る。1区22層の畦畔に杭として打ち込まれていた。

129は幅が下に向かって狭くなり、下端に抉りまたは切り欠きの入っている材である。下端の部分を他の材に掛けたものか、あるいは、長さに比べて薄い材であることから、ホゾ穴の部分を削った可能性もある。5区10層の畦畔に打ち込まれていた。

130は劣化が著しいが、柱材と考えられる。復元すると、下部は断面が円形、上部は断面 柱が方形であったと推定され、組合せられる高床建物の柱であったと考えられる。表面はチョウナで加工され、下部の断面円形の部分の復元径は14.6cmである。同様の柱は、垂山町山本造跡ではほぼ完形の柱が出土している。131も上部が断面方形、下部が断面円形の柱と推定されるが、130に比べて太く大型であり、下部は焼失している。断面の中央部に芯を持っているため、丸太材をそのまま削りだして作られている。

132・133・135は断面が三角形状となる材である。132・135は正面・裏面とともに加工しており、上部のやや薄くなる部分に小孔を穿つ。間に板をはめ込む円柱の一部分の可能性がある。

134は上部が断面方形の柱になると考えられる。下部は二次加工により削り剝がされており、原形が円形であったか方形であったかは不明である。

138～141は一辺9～12cmの大型の方形孔を持つと考えられる材である。138aと138bは接合すると幅20cm前後となり、裏面が削り剝がされていることから、同様の厚みを持った四角柱である可能性が高い。140・141は側面のみにチョウナ加工が見られ、三面を削り剝が

している。いずれの材も10区33層畦畔より出土し、やや近い位置にあるため、同じ建物の部材であった可能性が高い。

方 形 孔 143・144・146・147・148・149・152・155～158は方形孔を持つと推定される角材である。143・147は約7cm、144・146・155・158は約9cm、148は3cm、149・152は5cm、156・157は6cmの孔の痕跡がある。149が7区10層の出土の他は10区33層より出土している。156には孔の周囲約1.5cmがわずかに残り、別の部材が組み合わされていた跡痕と推定される。この部材は一辺9cm前後の角材で、組合せ部分を断面の一辺が6cmのホゾに作り出していると考えられる。

145は断面方形の角材を割ったものと考えられるが、一部を幅7cmにわたって断面円形に加工していると思われる。10区33層の出土である。

150は加工面に他の部材を垂直に組み合わせるための方形の切り欠きを持つ材である。10区35層の出土である。

151は約5cmの方形孔を持つ。表裏両面にチョウナ痕が残り、厚さ4.6cmの板材であった可能性が高い。10区35層の出土である。

153は下端を薄く削り、中央にホゾ孔を開けている。他の材に薄い部分を挟み込み、ホゾでとめたものと推定される。

楔の痕跡か 154は角材であったと推定される材であるが、片方の側面に楔または木釘の痕が残存する。10区35層の出土である。

159は2.5cm×3cmの小孔のある材である。柾目板状に割り剥がし、表面を一部チョウナでやや平坦に加工しているが、建築材としては粗い加工である。表裏ともにチョウナによる加工痕があり、当初は板材であった可能性がある。上下に炭化が見られ、焼失建物に関する材と推定される。10区33層水田の畦畔に杭として打ち込まれていた。

160は上端に長方形状の孔があったと考えられる。3面にチョウナによる加工が見られるため、厚さ5.9cmのやや厚めの板材として加工されていた可能性がある。10区33層水田の畦畔に杭として打ち込まれていた。

161は正面から側面への穿孔1箇所と、正面から裏面への穿孔2箇所の残る材である。3面がチョウナで加工されており、右側面が二次加工により割り剥がされていると考えられ、元は断面長方形の材になると考えられる。10区35層水田の畦畔に杭として打ち込まれていた。

小孔を穿つ 162～170は小孔を持つ材である。164は元は板状に加工されており、上部を幅6cm、長さ11cmのホゾ状に作り出し、ホゾの中央部に2cm×2.5cmの長方形孔を穿つ。166は上部に孔間6cmの2箇所の小孔を穿つ。168は左側縁に孔間は16cmの孔痕が残存する。両側面は割り剥がされているため、元は板状に加工されていたと推定される。169は上部が幅広くなり、4cm×2.6cmの長方形孔を穿つ。孔の周囲はチョウナで丁寧に調整されている。170も下端にある穿孔の周囲が薄く削られている。162が10区35層水田の畦畔、163・164・167・170が1区22層水田の畦畔、165・166が2／3区12層水田の畦畔、168・169は6区16層水田の畦畔より出土した。

171～173は中央部に切り欠きがあり、三角形状の孔痕と推定される。171は10区35層水田の畦畔、172は2／3区12層水田の畦畔に杭として打ち込まれていた。173は10区30b層(古墳中期)の出土で、下端が杭状に加工されているが、木道状造構に直行する形で横倒しなって出土した。

174～177は抉りが数箇所に見られる部材である。174は抉りの長さが異なるが、他は11cm～15cmで、抉りと抉りの間隔が25cm～35cm前後である。細断されているが、建物の垂木を受ける横木の可能性がある。174は2区9層（古墳中期）の櫛状杭列、175は5区10層水田（古墳前期）の畦畔、176・177は6区16層水田の畦畔より出土した。

178は右側面に切り欠きがある材である。2区6層（平安）畦畔の中に踏み板として埋め込まれていた。

179は先端を大きく切り欠き、他の部材と組み合わせるように加工し、さらに中央部正面を薄く削り、あたりの加工をしていると推定される。下端は粗く切断している。6区16層の河川の西岸より出土した。

180は劣化が著しいが、垂木状の切り欠きのある材である。正面がやや丸味を持ち、元は断面円形であったと推定される。2／3区12層水田の畦畔より杭として出土した。

181・186は下部の表裏を薄く削り、他の部材に挟み込むように加工されている。両側面が削り剝がされているため、元は板状であったと推定される。181は表裏をほぼ同様に薄く削り、186は正面をV字状に削り、裏面は薄く削り取る。181は1区22層水田の畦畔、186は2／3区10層（古墳中期）の河川より出土した。

182～185は非貫通の孔を持つ材である。182は4.5cm×3cmの孔があり、孔の周囲が他の部分よりわずかに盛り上がる。183は8cm×3cmの長方形孔を持つ。184は11cm×3cm前後の長方形孔を2箇所に穿つ。185も184に似た形状であるがやや厚い。182・183は10区33層水田の畦畔、184は3区6層水田（平安）、185は1区20層（奈良～平安）の河川より出土した。

187は全体が炭化し劣化が著しいため、元の形状がわかりにくいか、全面から削り込んでくびれ部分を作り出している。芯持材を断面長方形に加工しており、5区13層（弥生中期後葉～弥生後期初頭）の3号櫛より出土している。

192は下端に段差があり、左側面と裏面が削り剝がされていることから、コの字型の突起を作り出していたと推定される。193は下端にホゾ状の突起を作り出している。正面・裏面・右側面が削り剝がされているが、元は四角柱状で中央にホゾを持つ材であったと推定される。194は長さ4cm前後、75～80°のやや傾きを持った穿孔のある材である。いずれも10区35層水田の畦畔に杭として打ち込まれていた。

195・196はホゾ状の突起を持つ材である。195は突起の長さが17cm、付根の部分がわずかに抉られている。先端は斜めに切り落とされている。196は突起が11cm残存している。全周を削り剝がされているが、元は四角柱状の材であったと推定される。いずれも2／3区12層水田の畦畔に杭として打ち込まれていた。

199・200は先端に大きな弧状の切り欠きを持つ。チョウナ面が三面あり、元は板状の材であったと思われる。弧状の切り欠きの先端は切り落とされており、円形の柱等に組み合わせるための加工の可能性がある。199は2／3区12層、200は2／3区14層（弥生中期後葉）の畦畔より出土している。

201～203はホゾ状の加工の見られる角材片である。いずれもホゾが二次加工により切断されている。202は左側面に、木目で削り剝がす際にいたと思われる楔の痕跡が残る。201・202は10区35層、203は10区33層の畦畔に杭として打ち込まれていた。

204は下端を方形に切り欠く。裏面を割り剥がしているが、右側面が削られているため元は板材であった可能性が高い。下端より30cmをチョウナで削って薄く仕上げ、他の材と組み合わせるために丁寧に加工されていると思われる。10区35層の畦畔に矢板状に打ち込まれていた。

木釘の残存 205・206は木釘が残存する材である。205は左側面に1箇所、正面に8箇所の痕跡が残る。このうち、木釘が残存するのは左側面1箇所と正面6箇所である。正面の2箇所は木釘が裏まで貫通している。正面の木釘の間隔は18.5cm～23.5cm前後である。正面下部の木釘について計測してみると、長さ4.5cm、厚さ3mmで、幅は上部の広い部分で1.4cm、下端の狭い部分で0.7cmである。206は正面に2箇所、右側面に1箇所の痕跡があり、左側縁部には削れているが、2箇所の孔の痕跡がある。このうち、右側面にのみ木釘が残存する。木釘は貫通しているもののが少なく、他の材に打ち付けたものとは考えにくい。また、206のように側面に孔の痕跡の残るものがあり、木材を割り剥がすことを目的とした楔である可能性が高い。206は10区36層（弥生後期前葉）、207は5区10層（古墳前期）の畦畔からの出土である。

207は3面をチョウナで加工し、右側面を木目で割り剥がしている。厚さが約2cmで、木材を割ったものと推定される。6区16層の畦畔に杭として打ち込まれていた。

208は全周割り剥がされていると思われるが、正面に段差が見られ、溝状の切り込みと推定される。2/3区12層の畦畔に杭として打ち込まれていた。

209・210は角材の角の部分をチョウナで削り落としている。209は10区35層、210は10区33層の畦畔からの出土で、わずかに時期差はあるが形状が似る。

212は正面がなめらかな弧状となる。径16～17cm程度の円柱を削った材と推定される。10区33層の畦畔に打ち込まれていた。

213はチョウナで平坦に調整された面が2面あり、角材を削ったものと推定される。6区16層の畦畔より横倒しの状態で出土した。

214は先端に頭を作り出し、下に垂木状の抉りを入れている。下端は杭状の二次加工により切断されていると思われる。抉りの部分を他の材と垂木の一種と推定される。10区33層の畦畔より出土した。

215は上端にホゾ状の突起を持ち、裏面を大きく抉る。下端は杭として二次加工されている。芯持材であり、抉りの加工から垂木と推定されるが、ホゾ状の加工があることを考えると、ホゾ材を垂木に転用し、その後に杭として加工したと考えられる。2/3区9層（古墳中期）の杭列内より、横倒しの状態で出土した。河川の近くで、洪水流による流れ込みの可能性もある。

ホゾの残存 216はホゾが下端部に組み合せたまま残存する。下端に3.5cmの段を作り、その中央部に穿孔してホゾを差し込んで材を留めている。組み合わされていた材は残存していないため、組合せ方法が不明ではあるが、段差部分が直線的であるため、直交する形で組み合せた可能性が高い。

220・221は丸太材の一部を削り、表面に角を作り出している。全体として断面が円形になるように枝や筋は削り落としている。220は10区35層の畦畔に杭として打ち込まれ、221は10区31a層（古墳前期）の畦畔内より横倒しとなって出土した。

杭材の接合 222は6区16層水田の畦畔に近接して打ち込まれていた2つの杭材が接合したものである。チョウナで加工してある正面が緩やかにカーブしており、他の面が削られていること

から、元は直径21.4cm前後の面取りした円柱片と推定される。上部に材と直交する溝を切り込んでおり、根がらみ等の材があたっていたものと考えられる。

223は全周をチョウナで加工しており、直径9cm前後の円柱と考えられるが、断面がV字形となる溝を切る。ここに他の材をはめ込んだ可能性がある。10区33層の畦畔に打ち込まれていた。

224～227は断面が円形状になるように加工した材で、芯持材ではないため、ほぼ全周を断面円形加工している。太さは上部が下部に比べてやや太く、下端は尖らせている。いずれも芯持材ではなく、縦方向に表面を削って断面円形に仕上げている。225は断面が正円に近く仕上げられ、他は梢円形である。224と225は長さ、太さとも226と227に比べ、やや小型である。225が2／3区14層の畦畔出土である以外は、全て2／3区12層の畦畔より出土した。226と227は近い位置から出土しており、同一の材である可能性が高い。

9 板材

板材は各区とも弥生時代後期後葉から古墳時代前期の層の畦畔を中心に出土している。このため、以下の文中では弥生後期～古墳前期の記述は省略し、他の年代観のみ記す。建築材の可能性として、屋根板材、壁板材、台輪、ケハナシ、床板材等が考えられるが、瀬名遺跡出土の板材の形状は種類が多く、用途については明確に分けにくい物がほとんどである。畦畔の横木、芯材等に使用されていたものは二次加工を受けず、原形を留めているものが多いが、矢板に加工されたものについては、元の形がどのようなものであったか推定しにくくなっている。

1～14・16・17・19・26・29・35は長さ190cm前後、上端にやや大きめの穿孔が1ヶ所ないし2ヶ所あり、左右側縁部に並んで小孔が2ヶ所、さらにその下に互いにずれた形で2ヶ所ある。下の小孔については、ほとんどの物について右側縁部側の小孔がやや上部にある。この部分にあたりの加工の施されているものも見られる。このあたりが屋根を載せる桁に当たる部分とすれば屋根板と考えることができる。下端が45～50cm前後やや薄くなり、境目が劣化しているものが多く、屋根板材であったとすると、この部分が壁より外にあり風化したものと考えられる。しかし、下端が土中に埋まっていた可能性があり、縦方向に並べられた壁板とも考えられる。この場合あたりの加工は横に材を渡して板と板を緊縛するためと考えられる。10区35層・33層と6区16層、9区38層の畦畔の横板として出土している。すべて弥生時代後期後葉から古墳時代前期のものである。38・41・42・44・71・72・83・96・108・128・129・150・151も欠損または二次加工により変形しているが、ほぼ

同様の形状をしていると思われる。127は小型だが形状が類似し、下端から約43cmの表面が劣化しており、用途が同様であると推定される。同様の形状をしていると思われる材の出土地区・層位は上記以外に2／3区12層、1区22層より出土している。

15・18・20・22～25・27・28・36・37・40・45・46・70・75・171・173・176・178～185・188・189・191・221・



写真12 畦畔の横板に転用されている建築材

番号	上部の孔数	上部の孔間	右側縁孔間	左側縁孔間	あたりの加工	上部加工長	上端～あたりの長さ	全長	幅	出土区	層位	年代	
1	2個	54.5	欠損	43	有	47	90	190.8	18.6	9区38層	弥生後期～古墳前期		
2	1個	59.5	62	欠損	有	44.5	108.5	211.8	17.7	6区16層	弥生後期～古墳前期		
3	1個	51	52	57.5	無	無		199.6	25.4	10区35層	弥生後期～古墳前期		
4	2個	53.5	39	47.5	一部有	50	90	196.4	24.2	10区35層	弥生後期～古墳前期		
5	2個	47	欠損	48.5	無	42.5		193.8	17.8	10区35層	弥生後期～古墳前期		
6	1個	51	40	43	有	50.5	89	193.8	20	10区35層	弥生後期～古墳前期		
7	1個	48	42	47.5	有	48	88	192.8	27	10区35層	弥生後期～古墳前期		
8	1個	44.5	43	49	有	41	84	192.2	24	10区35層	弥生後期～古墳前期		
9	1個	54.5	40.5	欠損	有	49	90	191.8	(20.3)	10区33層	弥生後期～古墳前期		
10	1個	45	43.5	47	有	47.5	81	191	21.8	10区35層	弥生後期～古墳前期		
11	1個	44	42	46.5	有	52	83.5	190.1	25	10区35層	弥生後期～古墳前期		
12	1個	47.5	39	欠損	有	51.5	79	199	20.4	10区35層	弥生後期～古墳前期		
13	1個	52	38.5	38.5	無	43		182.6	23.2	10区35層	弥生後期～古墳前期		
14	1個	43	47	42	有	43.5	59	182.2	16.2	10区35層	弥生後期～古墳前期		
16	1個	51	39	43	有	不明	84	(122.8)	26.8	10区35層	弥生後期～古墳前期		
17	1個	47	42	47	無	不明		(118.6)	21.6	10区35層	弥生後期～古墳前期		
19	1個	41	83	83.5	無	45		206.8	15.4	6区16層	弥生後期～古墳前期		
26	2個	47.5	欠損	75	無	欠損		(166.3)	(11.4)	6区16層	弥生後期～古墳前期		
29	1個	73.5	欠損	欠損	欠損	欠損		(96.8)	22.7	10区35層	弥生後期～古墳前期		
35	1個	50	欠損	82	右有	40	112.5	226	(15.2)	6区16層	弥生後期～古墳前期		
38	1個	64.5	60.5	欠損	無	42		209.8	(17.2)	6区16層	弥生後期～古墳前期		
41	1個	58	59.5	欠損	無	(24)		(168)	(12.6)	6区16層	弥生後期～古墳前期		
42	1個	60	欠損	50	無	(33)		(155.4)	(15)	2/3区12層	弥生後期～古墳前期		
44	1個	66	58	(62)	無	欠損		(171.8)	19.6	1区22層	弥生後期～古墳前期		
71	1個	60	不明	不明	不明	不明		180.0	(12.6)	6区16層	弥生後期～古墳前期		
72	1個	59	64	欠損	無	30		(135.7)	(13.4)	6区16層	弥生後期～古墳前期		
83	1個	43	74	欠損	無	欠損		(155.4)	(20.4)	1区22層	弥生後期～古墳前期		
96	1個	52	欠損	56	無	欠損		(135.7)	(13.9)	10区33層	弥生後期～古墳前期		
108	1個	53.5	38	41	無	欠損		(96.4)	17.5	10区35層	弥生後期～古墳前期		
127	1個	33.5	不明	37	無	欠損		190.5	(15.0)	6区16層	弥生後期～古墳前期		
128	1個	46	51	欠損	有	欠損		85.5	(123.2)	(18.2)	10区35層	弥生後期～古墳前期	
129	1個	56.5	欠損	欠損	無	欠損		(87.1)	(20.8)	6区16層	弥生後期～古墳前期		
150	1個	59	不明	不明	不明	欠損		(89.0)	(22.0)	6区16層	弥生後期～古墳前期		
151	1個	50	欠損	欠損	不明	欠損		(68.4)	(12.6)	2/3区12層	弥生後期～古墳前期		

単位: cm

第14表 屋根板と考えられる板材

239～242・244・245・247～251は側縁部を薄く削り、この部分に小孔を穿つ壁板材と推定される。小孔は片側に穿つものと両側に穿つものがある。中央部に柱のあたりがあり、端部に削りの加工を施して柱に嵌み込むための形状となっているものもある。小孔の穿つ位置はそれぞれ異なり、決められた位置に穿つことはなく、組み合わせる材の状況に応じて穿ったと思われる。表面の加工は全面をチョウナで加工するものと、側縁部のみをチョウナで削って薄く仕上げるもののものがある。ほとんどか畦畔の上留めの横木または芯材として出土し、先端を尖らせるなどの二次加工により矢板として打ち込まれていたものもあった。182は水田内より出土しているが、畦畔から抜けて流れこんだたるものと推定される。出土地区・層位は1区22層・2/3区12層・5区10層（古墳前期）・6区16層・7区10層・8区17a層・8区17b層（弥生後期前葉）・9区38層・10区33層である。

21は厚めの板材で、上部に幅約8cmの孔痕または切り欠きがある。台輪または壁板の可能性がある。2/3区12層の畦畔より出土した。

30・31は1にやや似るが、上部が薄く段差が作られている。上部に孔が1つあり、側縁

番号	全長 (cm)	幅 (cm)	表面の 加工	孔数 (個)	孔間 (cm)	あたりの 加工	端部の 加工	出土区 ・層位	年代観
15	151	(15)	全面	2	71	無	無	9区38層	弥生後期～古墳前期
18	(212.5)	16.5	側縁	2	68	無	無	6区16層	弥生後期～古墳前期
20	(201.6)	21.0	不明	(1)	不明	無	無	2/3区12層	弥生後期～古墳前期
22	(213)	(17.6)	側縁	2	137.5	有	有	6区16層	弥生後期～古墳前期
23	211.4	18.7	全面	2	不明	有	有	6区16層	弥生後期～古墳前期
24	211.5	14.3	全面	2	137	有	有	6区16層	弥生後期～古墳前期
25	(186.8)	(8.8)	全面	1	不明	無	無	2/3区12層	弥生後期～古墳前期
27	(156.0)	(9.2)	側縁	2	56	無	無	2/3区12層	弥生後期～古墳前期
28	(140)	(11.8)	側縁	1	不明	無	無	1区22層	弥生後期～古墳前期
36	210.8	24.2	側縁	2	104.8	無	有	6区16層	弥生後期～古墳前期
37	212.4	18.0	全面	6	49.5～70	有力	無	5区10層	古墳前期
40	(167.8)	17.0	全面	2	54	無	無	1区22層	弥生後期～古墳前期
45	(102.1)	13.8	全面	1	不明	無	無	8区17a層	弥生後期～古墳前期
46	(38.7)	20.2	全面	2	62	無	無	8区17a層	弥生後期～古墳前期
75	(169.4)	16.0	全面	2力	50カ	無	有	9区38層	弥生後期～古墳前期
171	(78.4)	(10.6)	側縁	1	不明	無	無	2/3区12層	弥生後期～古墳前期
173	(80.5)	12.7	側縁	1	不明	無	無	10区33層	弥生後期～古墳前期
176	(123.4)	(12.3)	側縁	1	不明	無	無	10区33層	弥生後期～古墳前期
178	(135)	(13)	側縁	2	74	無	無	2/3区12層	弥生後期～古墳前期
179	(137.6)	(16)	側縁	2	50	無	無	2/3区12層	弥生後期～古墳前期
180	(73.3)	19.3	全面	1	不明	無	無	10区33層	弥生後期～古墳前期
181	(62.4)	(13.4)	全面	1	不明	無	無	2/3区12層	弥生後期～古墳前期
182	(55.5)	(2.6)	側縁	1	不明	無	無	1区22層	弥生後期～古墳前期
183	(52.8)	(12.0)	全面	1	不明	無	無	2/3区12層	弥生後期～古墳前期
184	(29.7)	20.5	全面	1	不明	無	無	10区33層	弥生後期～古墳前期
185	(33.4)	(13.4)	全面	1力	不明	無	無	2/3区12層	弥生後期～古墳前期
188	(89.5)	13.4	側縁	1	不明	無	無	1区22層	弥生後期～古墳前期
189	(96.5)	(5.2)	側縁	1	不明	無	無	1区22層	弥生後期～古墳前期
191	(100.8)	(9.4)	全面	2力	97カ	無	無	5区10層	古墳前期
221	(246.9)	22.4	全面	4	26～46	無	有	2/3区12層	弥生後期～古墳前期
239	422.5	23.0	全面	2	218	有	有	1区22層	弥生後期～古墳前期
240	(424)	(11.6)	側縁	6	41.5～118	無	有	2/3区12層	弥生後期～古墳前期
241	420.2	(13.7)	全面	6	46～98	有	有	1区22層	弥生後期～古墳前期
242	370	(18.5)	側縁	2	68.4	有力	有	5区10層	古墳前期
244	(312.8)	14.4	全面	1力	不明	有	有	1区22層	弥生後期～古墳前期
245	(317.2)	22.6	全面	6	20～74	無	無	2/3区12層	弥生後期～古墳前期
247	(258.6)	(11.2)	全面	3	60～115	無	無	5区10層	古墳前期
248	(201.6)	(13.8)	側縁	2	35.5	無	有	1区22層	弥生後期～古墳前期
249	(303)	(9.8)	側縁	3カ	34～37.6	無	無	7区10層	弥生後期～古墳前期
250	(285.6)	(12.8)	側縁	1	不明	無	無	8区17a層	弥生後期～古墳前期
251	(177.4)	(7.4)	側縁	1カ	不明	無	無	8区17b層	弥生後期～古墳前期

第15表 積板と推定される板材

の孔も間隔を広く穿っている。30は9区38層、31が9区37層の畦畔の出土である。いずれも畦畔の芯材として埋め込まれている。

32は30に似るが、上部の薄い部分が37cmと長い。この部分には小孔を1つ穿ち、貫通していない孔と、逆にやや高まる部分がある。下部にも穿孔が1箇所ある。7区8層(奈良・平安時代)の河川SR70801の1号標の部材に転用されていた。

33・34は30に似るが、上部に溝を切り、この部分に小孔を2つ穿ち、別の材と組み合わせたと考えられる。側縁部に孔を多く穿ち、一方の側縁は斜めに切られ、これに添って小孔が穿たれている。また、反対側の側縁には孔を横に並べて穿ち、別の部材をここに緊締

番号	全長	幅	厚さ	段部分 段/全体 の長さ	上部の 側縁部の孔数		側縁部の孔間		出土区 ・層位	年代範 囲	
					孔数	右	左	右			
30	(91.7)	(14.8)	2.0/3.6	8.5	1個(2か)	1個	2貫	52	9区38層	弥生後期～古墳前期	
31	(95.0)	(19.0)	3.0/4.7	10.5	1個(2か)	2個	欠損	51	9区37層	弥生後期～古墳前期	
32	161.9	19.1	2.0/2.7	13	2個	1個	欠損		7区8層	弥生後期～古墳前期	
33	(154)	(10.5)	3.2/4.7	37	1個(不明)	2個	4個	25	26.5/35/31.5	奈良～平安	
34	185.6	18.9	0.6/2.3	16	1個(2か)	4個	2個	27.5/31.5/35.5	1.5	9区38層	弥生後期～古墳前期

第16表 屋根板と考えられる板材に類似する板材

番号	全長	幅	厚さ	孔数	孔間	出土区・層位	年代範 囲	備考
39	170.0	14.4	2.4	5個	28/74.5/35.5	7区10層	弥生後期～古墳前期	
61	235	22.4	3.6	4個	73/82.5/11.5	2/3区12層	弥生後期～古墳前期	
86	152.9	17.0	2.9	3個	51	10区35層	弥生後期～古墳前期	斜めにずれて穿つ
102	102.8	12.4	2.8	3個	28.5/31	7区9層	古墳中期	
105	99.6	17.4	2.1	2個	38.5/37.5	8区17a層	弥生後期～古墳前期	
109	76.2	12.4	2.2	4個	35.2	7区10層	弥生後期～古墳前期	上端部に段差あり

第17表 両側縁に対照的に小孔を穿つ板材

番号	全長	幅	厚さ	孔数	孔間	端部削り	出土区・層位	年代範 囲
43	149.3	17.9	2.1	5個	3.5/51/47.5/35.5	無	2/3区12層	弥生後期～古墳前期
55	(304.5)	18.2	2.9	5個	57/63.5/64.5/33	有	9区38層	弥生後期～古墳前期
57	(270)	(14.0)	3.2	5個	46/51/54.5/54.2	無	9区35層	古墳中期
67	(209.6)	18.8	2.4	4個	22/48.8/4	右	6区16層	弥生後期～古墳前期
69	(185.8)	13.5	3.0	3個	37/41.5	右	2/3区12層	弥生後期～古墳前期
70	181.6	(9.2)	1.5	2個	66.5	有	1区12層	弥生後期～古墳前期
93	138.3	(11.1)	1.7	5個	18.5/22/42/27	無	2/3区12層	弥生後期～古墳前期

第18表 片方の側縁に穿孔のある板材

したと考えられる。いずれも9区38層の畦畔から出土し、30と近接して出土しているため、同じ建物の部材であった可能性が高い。

壁板材か 39・61・86・102・105・109は板材の両側縁に対照的に小孔を穿つ板材である。86は斜めにずれた形で並べて穿孔している。109は上端から35.5cmの部分の上部を薄く削り、段差をつけている。出土区と層位は2/3区12層・7区10層・8区17a層・10区35層の畦畔の中に埋め込まれている。102のみ7区9層(古墳中期)の木造状遺構の出土である。

43・55・57・67・69・70・93は平坦に加工された板の片方の側縁に穿孔が見られる材である。端部を薄く仕上げているものもあり、壁板材の可能性がある。43は下部に小孔を上下に並べて穿つ。小孔の間隔は3.5cmで、ここに別の材を直交するように縫締したと推定される。また、中央部には一辺3cmのやや大きめの孔が、上端には一辺2cmの孔がある。55は小孔とやや大きめの孔を交互に穿つ。上端から16cmの表面をやや薄く削り、また、中央部のやや大きめの孔底の部分の周辺を長さ27.5cmにわたって薄く削り、この2箇所が他の材に差し込まれるようになっていると推定される。57はほぼ同形の小孔を41cm～50cm程度の間隔で穿つ。67は上端を表裏ともに薄く削る。孔は側縁部上部に小孔1、中央部にやや大きめの孔1、下部に斜めにずれる形で小孔2を穿ち、ここに直交するような形で別の部材を縫締したと考えられる。69は上端をやや薄く作り、一辺3cm前後の孔をほぼ当間隔で穿つ。70は上部をわずかに削っていると推定される。小孔は正方形と長方形の小孔が1つずつある。93は上部両側縁に穿孔していたと考えられる。また、下端の側縁にも孔底がある。57が古墳中期の木造状遺構から出土している以外は、弥生後期～古墳前期の層の畦畔

内より出土している。

47・51・54・58・59・63は長大な材で、建物の壁の上下に渡される台輪と考えられる板台輪か材である。中間にいくつか穿孔し、中間柱を差し込むように作られているものもある。47は接合部が上部しか作り出されておらず、もう一方は二次加工で切断したか、あるいは別の材に差し込む等の組み合わせ方であったと考えられる。7区12層（弥生中期）の溝状造構SD71201より出土した。48は芯持ち材の広葉樹を使用しており、断面はやや平坦な半円形である。中間柱を固定したと考えられる小孔が約1mおきに2箇所穿つ。8区15層の木造状造構（古墳中期）に埋め込まれていた。49も48に形状がやや似る。中央に中間柱を組み合わせるための貫通孔を穿ち、さらにその中に非貫通孔を穿って、壁板を頑丈に留めるよう作られている。各孔の間隔は約50cm前後とほぼ一定である。9区33層（奈良～中世）より出土した。50は下端が欠損しているが、板材の両側に柱と組み合わせるための孔を穿つ。下部はさらに倍の長さにまで続いている可能性もある。5区10層（古墳中期）の畦畔より出土した。51は中央部に径8cmの柱を通すための円孔を穿ち、正面から側面に抜ける孔を35cm～40cmの間隔で4箇所穿っている。この孔は他の部材を緊縛するための孔とも考えられるが、正面が4cm×5cm、側面が2cm×5cmとやや大型であるため、緊縛するというよりは、別の部材と組み合わせるための孔と考えたほうが良いと思われる。1区20層（奈良～平安）の河川SR12001の覆土上より出土した。54は一辺7cmの方形孔を2箇所穿つ。孔間は約2mである。58は上端に2箇所、中央部に1箇所穿孔の痕跡がある。54・58は6区16層の畦畔の芯材として出土した。59は一辺約4cmの方形孔が4箇所残存する。孔間は57～71cmである。5区10層の畦畔の横板として出土した。63は上部に方形孔が1箇所残存し、下端にも同様の孔が存在したと推定される。上端は二次加工で切断されていると考えられる。2／3区12層の畦畔より出土した。

53は長大な板材で、下端にホゾ状の突起がみられ、壁板あるいは床板の可能性がある。6区16層の畦畔の芯材として出土した。

56は長大な板材で、下端に孔を穿ち、さらに中間に斜めにずれた形で小孔を穿つ。この小孔は別の材を緊縛するためと考えられ、壁板の可能性がある。7区10層の畦畔の横板として出土した。

60は上端に突起を作り出し、鼻栓で固定するように加工されている。孔は5cm前後の孔を3箇所粗く穿つ。右側面は33cm前後の間隔で溝を6箇所刻む。建築材として使用した後に編み台として転用されていた可能性がある。2／3区12層の畦畔より出土した。

62は厚さ7cmの長大な板材である。右側縁に小孔を穿ち、中央部に方形孔を穿っていたと思われるが削り取られている。台輪であった可能性がある。5区10層の畦畔に埋め込まれていた。

64は1に形状がやや似るが、小孔がそれぞれの側縁に1箇所ずつしかない。1区22層の畦畔より出土した。

65は長大な板材で、上部に3箇所、中央部に2箇所、下部に1箇所の小孔を穿つ。中央部の小孔は間に他の部材を組み合わせて緊縛したと思われる。右側面には約19cmおきに溝を切り、編み台として転用された可能性がある。1区22層の畦畔より出土した。

66は薄く長い板材の側縁に小孔を穿つ。中央よりやや上に9.5cmの間隔をあけて小孔があり、柱に緊縛したものと考えられ、檜板材の一種と思われる。6区16層の畦畔より出土した。

編み台に転用

- 柱に繋ぐ** 68は厚さ2.5cmのやや厚めの板材である。上端に周開が欠損しているが、一辺8cm程度の孔があったと思われる。下端は欠損しており、実際はもう少し長い材であったと考えられ、台輪の可能性がある。7区10層の畦畔の横木として出土した。
- 柱目板** 73は上部に孔を4箇所穿つ、孔の間隔は、上から9.5cmと11cmで、間に柱材などの部材を繋ぐとしたと考えられる。上端の孔は他の3つの孔に比べてやや大きめで、側縁に切り欠きがあり、瀬名遺跡出土の板材としては少ない柱目の板で、どのような性格の部材かは不明である。5区10層（古墳前期）の畦畔の芯材として出土した。
- 両端に穿孔** 74・79・98・126・138は端部より14cm～19cmの部分にそれぞれ1つずつ孔を穿つ。孔の形は74が長方形、79・98・126は正方形で、138は円形に近い。孔の間隔も74は127.5cm、79は108.5cm、98は75.5cm、126は95.5cm、138は73cmとかなり異なる。入口の上部につけられた材の可能性がある。74・79は6区16層、98は7区10層、126と138は2／3区12層の出土で、いずれも畦畔内より出土した。100は下端が欠損しているが長方形孔が上端より18cmの部分に長方形孔を穿つ。9区38層の畦畔より出土した。
- 76は梢円孔を3箇所に穿つ。下端は正面のみ薄く削り、他の部材に挟み込んだと思われる。台輪または壁板・床板等の可能性がある。2／3区14層の水田より出土しているが、畦畔の材が流れこんだものと推定される。
- 台輪か** 77は厚さ3.5cmとやや厚めの板材である。下端の正面にあたりの加工がある。この部分の右側面に長さ13cmの孔痕があり、柱などが組み合わされていたと思われる。右側面は削り剝がされており、上部にも孔痕と思われる切り欠きが残る。台輪の可能性がある。10区33層の畦畔より出土した。
- 78は厚さ2.4cmで欠損が著しく原形の推定が困難であるが、両端の対角線上に1つずつ孔を穿つ。右側縁の上下端を約27cmにわたって薄く削る。欠損部分にも孔があった可能性がある。2／3区12層の畦畔より出土した。
- 80は1に似るが、やや小型である。上端は2箇所の孔痕があり、側縁に小孔を4箇所穿ち、右側縁に長さ8.5cmの切り欠きがある。下端は欠損しており、板の幅は下端に向かってやや広くなる。6区16層水田の畦畔の芯材として出土した。
- 壁板または床板** 81・120・121・122・123・219・220・233・243はほぼ15に形状が似るが、側縁部に小孔を穿っていない。壁板材もしくは床板材と推定される。両端に削りの加工が施されているものもある。弥生中期のものは板材が厚く、加工も粗く作られているが、弥生時代後期～古墳時代前期になると端部や表面の調整が細かくなり、全体をチョウナで加工してあるものも見られる。81は両端を薄く削り、柱に挟み込むような加工となっている。2区6層（平安）の畦畔より出土した。120も同様に両端を薄く削る。7区12層（弥生中期）の河川SR71101より出土した。122は上端の表面をやや薄く削っている。9区38層の畦畔の芯材として出土した。123は厚さ3.6cmでやや厚く、上端から9.5cmの正面を長さ6cmにわたって削り落めており、梯子の段を削り落とした可能性もある。6区16層の畦畔の芯材として出土した。219は上端を薄く削り、下端は方形に切り欠いている。6区16層の畦畔の芯材として出土した。220は上部の正面を削って崖める。7区8層（古墳後期～奈良）の河川SR70801壁板材の中より出土した。233はほとんどの部分が切断されて失われているが、全面をチョウナで加工している。1区22層の畦畔内より出土した。243は完形に近い壁板材と考えられる。全面チョウナによって加工され、両端および中央部は柱に挟み込むため薄く仕上げられている。5区10層の畦畔の横木として出土している。1区22層の畦畔に埋め込まれていた。こ

番号	全長	幅	厚さ	端部の加工①	中央部の加工②	(1)-(2)洞	孔数	出土区・層位	年代観
81	138.2	17.2	2.4	両端有	無		無	2区6層	平安
120	141.5	15.6	3.6	下端有	無		無	7区12層	弥生中期
122	(136.0)	16.4	2.4	上端有	無		無	9区38層	弥生後期～古墳前期
123	(80.8)	18.7	4	上端有	無		無	6区16層	弥生後期～古墳前期
219	165	(0.4)	2	上端有	無		無	6区16層	弥生後期～古墳前期
220	(242.8)	20.2	3.9	上端有	無		無	7区8層	奈良～平安
233	(37.4)	19	2.4	なし	不明		無	1区22層	弥生後期～古墳前期
243	364.8	15	1.6	左右有	有	155.3/153.6	無	5区10層	古墳前期
90	142.8	13.8	3	不明	不明		無	9区38層	弥生後期～古墳前期
114	136.4	16	3.4	不明	不明		無	6区16層	弥生後期～古墳前期
115	163.0	23.2	4.2	不明	不明		無	5区13層	弥生中期後葉～弥生後期初頭
116	(167)	17.6	4.4	不明	不明		無	5区12層	弥生後期前葉
118	(118)	8.6	1.9	不明	不明		無	2/3区20層	弥生中期
119	150.4	15.8	3.4	不明	不明		無	9区38層	弥生後期～古墳前期
255	(237.4)	19.3	2	不明	不明		無	2/3区12層	弥生後期～古墳前期
163	(96.1)	(7.1)	1.9	不明	不明		無	10区35層	弥生後期～古墳前期
168	(84.3)	9.4	2.4	下端有	不明		1	2/3区12層	弥生後期～古墳前期
246	314	13	1.8	両端有	無		1	9区38層	弥生後期～古墳前期

第19表 壁板材もしくは床板材と推定される板材

これらに類似したものでは、端部に目立った加工のない平坦な板材があり、90・113-116・118・119・255がこれにあたる。113・114は端部を斜めに切断し、116は上端を方形に切り欠く以外はほぼ長方形に加工されている。90・119は9区38層、113は2/3区12層、114は6区16層の畦畔より出土している。115は5区13層（弥生中期後葉～弥生後期初頭）の河川SR51301にかかる1号堰の部材として梯子1とともに出土した。116は5区12層（弥生後期前葉）より出土し、厚さ4.4cmとかなり厚い板材である。118は2/3区20層（弥生中期）の洪水による侵食痕跡と水田の境より出土している。255はチョウナで全面加工されていると思われる。2/3区12層の畦畔より出土した。また、同様の板材に小孔を穿つものも見られ、163・168・246がこれにあたる。168には下端に薄く削る加工が見られ、246はほぼ243と同じ形狀であり、異なるのは中央部に小孔を穿つということである。163は10区35層、168は2/3区12層、246は9区38層の畦畔より出土した。

82は小孔痕と思われる切り込みが両側面に見られる。壁板材であったと思われる。1区 壁板材か22層の畦畔の芯材として出土した。

84は方形の孔または切り欠きを2箇所に持つ。孔または切り欠きの長さは6.2cmと5.5cmで、右側は削り取られているため、幅は不明である。正面、右側面は割られており、元は柱などの角材であった可能性がある。9区35層（古墳中期）の木道状造構の踏み板として 原形は角材出土した。

85・111・112・162は中心線上に小孔を穿つ板材である。厚さ・幅などから壁板材であつた可能性がある。85は10区35層、111・112は10区33層、162は2/3区14層の畦畔より出土した。

87は4cm×6cmの方形孔を持つ、やや厚めの板材である。劣化、変形が著しい。6区16層の畦畔の芯材として出土した。

88は2cm×4.5cmの椿円孔を持つ板材である。劣化欠損しているが、元は長方形状の材であったと思われる。9区38層の畦畔の横板として出土した。

89は断面の左側が厚く、右側が薄くなるようにチョウナで加工されている。また、中央部に孔痕と思われる切り込みが見られる。8区17a層の畦畔の芯材として出土した。

91は孔の多い部材である。中心線上の上端に2箇所、下端に1箇所やや大型の孔を穿ち、左側縁には22~24cm前後で小孔を穿つ。右側縁には2つずつ並ぶように小孔を穿つ箇所が2箇所あり、間に他の部材を直交するように緊縛したと考えられる。9区37層で、畦畔と

水門状造構 畦畔の間の水口に板を渡している水門状造構の部材として出土した。中心線上にある上部の大きめの方形孔と、下部の円形孔にはそれぞれ杭が差し込まれており、これらの孔は水門状造構を作る際に開けられた可能性がある。94と97は2つずつ並ぶように小孔を穿つ板材で、やや形状が似る。91は孔を並べて穿っている場所が2箇所で孔間が38cmであるが、94は3箇所で孔間34cm、97は4箇所で孔間39~42cmである。94は下部に方形孔が開けられていた可能性がある。94は2/3区12層の畦畔、97は7区12層の溝状造構SD71201の中から出土した。

端部の穿孔 92・132・133・134・144・145は端部に孔を穿つ板材である。この孔は板を上から緊縛し、下に垂らすようにする孔、もしくは板を横に留めるための孔と推定される。92は表面をチョウナで調整しているやや厚めの材の下端部に椿円孔を穿つ。132は上部に長方形孔を穿つ。133は矢板状に加工された下端部に横長の細い孔を穿つ。134・144・145は下端部に方形状の孔を穿つ。92・132・133は1区22層の畦畔、134は2/3区14層（弥生後期前葉）の畦畔、144・145は2/3区12層の畦畔より出土した。

95は右側縁部に長さ6cmの孔痕が残存する。孔の左下にも約19.5cmあけて孔を2箇所に穿つ。2/3区12層の畦畔内より出土した。

穿孔材 99-159は幅10~11cm、厚さ約3cmの平坦に加工された板材に、縦長の長方形孔を2箇所に穿つ材である。99は上下端を緩く尖らせる。孔に他の材を直交する形で組み合わせた部材と考えられ、孔間は99が約36.8cm、159が約70.8cmである。両方とも10区30b層（古墳中期）の木道状造構より出土した。

101は一辺5~6cm前後のやや大型の方形孔を持つ板材である。中央部に長さ6cmの方形の切り欠きがあり、孔であった可能性もある。また、左上端には円形の孔痕が残る。8区17a層の畦畔内に埋め込まれていた。

103も一辺が5cm前後の方形孔を持ち、幅31.9cmの幅広い板材である。右側縁にも細長い椿円孔を穿った痕跡がある。2/3区10層（古墳中期）のSR21001の1号棟に引っ掛かる形で出土した。167も6cm×4cmの方形孔を持つ板材で、幅26.6cmとやや幅広く、両側面は削り取られているため、かなり幅広いものであったと考えられる。2/3区12層の畦畔内より出土した。230も一辺5.7cmの大型の方形孔を持ち、厚さも5.7cmと非常に厚い板材である。上下端とも二次加工で切断されており、長大であったと推定される。1区20層（奈良～平安）の河川SR12001の覆土中より出土した。

104は両面を丁寧にチョウナで調整した板材で、側縁部に小孔を穿つ。上端には両側縁に1つずつ、中央部には右側縁に1つ、下端は両側縁に上下に並ぶ形で小孔を2つずつ穿つ。下端の孔間は約3cmで、ここに別の部材を直交するように組み合わせて緊縛したものと考えられる。裏面の上部は炭化しており、焼失建物の壁板材である可能性が高い。2/3区14層水田より出土した。

106は上下端を弧状に削り、表面をチョウナで削ることにより中央部に比べやや薄くする。梯子が取り付けられる鼠返しに似るが、梯子や建物に取り付ける部分の孔が見られない。このため、未製品とも考えられるが、正面中央部がやや窪み、圧痕の可能性があるため、実際に中央部が嵌み込まれる形で使用されていたのではないかと考えられる。10区33層の畦畔の横板として出土した。125も上下端はほぼ直線的に切断されているが、形状が似る。中央部右側に長さ24cm、幅15cmにわたって圧痕があり、上に柱などの大型部材が載っていた可能性がある。10区33層の畦畔の横木として出土した。

107は不整形の孔を右側面に2箇所、小孔を左側面に1箇所持つ材である。不整形孔の孔間は約5cmで、間に直交する形で別の材を組み合わせたと考えられる。小孔は同様の材を緊縛するための孔と考えられる。矢板として二次加工を受けているため、原形の推定が矢板に加工難しいか、壁板材や床板材などの可能性がある。

110は方形に厚く盛り上がる部分が2箇所ある材で、下部の盛り上がった部分の右側に小孔を穿っている。上部は欠損しているが、下部と同様の作りであるとすれば、全長は85cm前後となる。左側は削り取られていると考えられ、裏面は平坦である。これは5cm前後の高さの脚のついている台または容器であり、建築材ではない可能性が高い。2／3区10層 脚付容器が（古墳中期）の河川SR21001にかかる1号堰に引っ掛かる形で出土した。

117は両端に切り欠きがあり、別の材に掛けた形となっていたと推定され、横架材であった可能性がある。7区10層の畦畔の芯材として出土した。254は形状が類似するが、117にくらべかなり大型で、中央部に一辺が約4cmの方形孔がある。右端部は二次加工により杭状に尖らせているが、左端部と同様の形状であったと推定される。2／3区の16層（弥生中期）水田の畦畔より出土した。

121は厚さ5.1cmのかなり厚い板材である。下端は二次加工で切断されたと考えられ、元は長大であったと考えられる。厚い材で、目立つ加工もほとんどないため、壁板または床板などの可能性がある。7区12層（弥生中期）の溝状遺構SD71201内より出土した。

124は右側面に長さ5.5cm、幅2.7cm以上の方形孔を持つと考えられる板材である。下端は矢板に二次加工されているが、左側がやや緩い弧状となっており、鼠返しであった可能性が高い。6区16層の畦畔より出土した。

130は下端の正面をチョウナで削って薄く仕上げる板材である。右側が切り取られているが、孔痕と思われる部分が2箇所ある。右側縁にも小孔1箇所、左側縁中央部に径3cmの比較的大きな円孔がある。薄く削った部分を柱などの部材に嵌み込んだと推定される。10区36層（弥生後期前葉）の畦畔に打ち込まれていた。131も130にやや形狀が似る。下端を正面、裏面とも薄く削る。薄く削った部分に一辺2cmの方形孔を穿つ。2／3区12層の畦畔に打ち込まれていた。

135は下部の正面を薄く削り、その中央部に小孔を穿つ。別の部材に組合せ、小孔に木釘等で留められたと推定される。1区22層の畦畔に打ち込まれていた。

136は下端を矢板状に斜めに切り落とした材である。斜めに切った下端には孔があったと思われる。137も同様に下部を斜めに切り落とした部分に孔痕が見られる。いずれも10区35層の畦畔に打ち込まれていた。

139・252・253は台輪の可能性がある部材である。139は全体的に劣化しているが、孔痕台輪かが2箇所にある。孔間は約126cmである。6区18層（弥生後期前葉）の畦畔の横木として出土した。252は劣化が著しいが、劣化部分に一辺5cm～6cmの方形孔があったと推定され

両端が弧状

る。孔間は約184cmである。2／3区12層の畦畔の横木として出土した。253は左端を半円状に切り、一辺5cmの方形孔の痕跡が2箇所、一辺3.5cmの方形孔が1箇所ある。5cmの方形孔の孔間は約158cmである。5区10層（古墳前期）より出土した。

140は3cm×2cm前後の楕円孔を2列に並ぶように6箇所穿つ。2列の孔間は7.5cm～9cmで右が狭く、左が広くなる。劣化が著しいが、出土状況を確認したところ、元は写真のように隅丸方形の板材で、田下駄であった可能性が高い。1区22層の畦畔より出土している。

141は3箇所に孔を持つ板材である。孔も大きさがそれぞれ異なり、下端は削って薄く尖らせる。大部分は二次加工によって切り落とされ、原形は不明である。2／3区16層（弥生中期後葉）の水田面より出土した。

壁板か 142は右側縁に小孔を穿つ板材で、大部分が切断・欠損しているため、原形は不明である。側縁の小孔と厚さから、壁板等の破片であると推定される。1区20層（奈良～平安）の河川ISR12001の覆土中より出土した。143も板材の破片であるが、小孔は側縁部からやや内側に穿つ。2／3区12層の畦畔内より出土した。

146は不整形の孔を多く穿つ板材である。孔間は一定ではないが、中央のやや大きめの孔をのぞくと、ほぼ42～46cmで穿っている。上端は二次加工によって切り落とされているため、元はかなり長大な板材であったと推定される。10区36層（弥生後期前葉）の畦畔の横木として出土した。

147・152・153は大小様々な長方形孔を穿つ板材である。欠損のため、原形は不明であるが、多くの部材と組み合わせられていたと考えられる。147は10区33層、152は7区10層、153は2／3区12層の畦畔より出土した。

148は下部に5cm×6.5cmの大型孔を持ち、その右下に小孔を2箇所穿つ。小孔の孔間は約8cmで柱材などを間に挟んで緊縛したと思われる。2／3区12層の畦畔の芯材として出土した。

149は右側縁中央部に長さ8.5cmの方形の切り欠きを持つ。上部には径3cmの孔を2箇所穿つ。孔間は15cmで、間に別の材を組合せ緊縛した可能性がある。2／3区16層の小畦畔上より出土した。

155は右側縁部をチョウナで薄く加工し、側縁より4cm内側に小孔を穿つ。壁板材に似るが、二次加工によって大部分が失われているため、原形は不明である。1区22層畦畔脇より出土した。

156は表面中央部をチョウナで削ってわずかに薄くする。薄く削った部分は別の材と組み合わせるためのあたり、または挟み込むための加工と推定される。下部には2.4cm×2.8cmの方形孔を穿つ。6区16層の畦畔に打ち込まれていた。

丁寧な加工 157は表面をチョウナで細かく削って厚さを一定にするなど丁寧に加工されている。下端が上端に比べてやや幅広くなると思われる。上下端には小孔が2箇所ずつ穿つてあると思われる。左側縁の中央部には孔間を上下に3.5cmあけて小孔を2箇所穿つ。10区36層畦畔

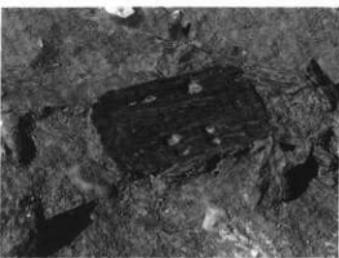


写真13 板材140の出土状況

に埋め込まれていた。

158は左側縁に48.5cmあけて2箇所孔痕がある。また、そのほぼ中間に孔を穿つ。下端はやや幅狭くなる。10区35層の畦畔に打ち込まれていた。

160は右側縁上部に円孔底が2箇所残る。柾目材であり、厚さが5.7cmもあるため、柱材 柱 目 板などを割り剥がした可能性がある。2／3区14層（弥生後期前葉）の畦畔内により出土した。

161は原材料に瘤があり、その部分が幅広くなる板材である。中央よりやや下部に小孔を穿つ。2／3区12層の畦畔に打ち込まれていた。

164はチョウナで表面を加工した板材である。上端はさらに薄く削られており、別の材と組み合わせるための加工と思われ、壁板材にやや似る。中央部には径1.8cmの木釘または別 木釘の残存の材の折れた部分が残る。2／3区12層の畦畔内に埋め込まれていた。

165は中央に4cm×8cmの長方形孔を穿つ。左側面は平坦にチョウナで加工し、右側縁は薄く削っている。2／3区12層の畦畔の芯材として出土した。

166は左側面に弧状の切り欠きがあり、柱などにあたっていたと考えられる。上下は緩いカーブを描くように切り、鼠返しの形状にやや似る。右側縁には小孔が2箇所あり、右側に別の部材を緊縛したか、あるいは孔間が17cmあるため、間に別の部材を直交させて緊縛した可能性がある。2／3区12層の畦畔内により出土した。

169は孔を3箇所に穿つ材である。いずれも梢円孔で、孔間は19cm前後、下部の孔ほど大型になる。二次加工により切断されているため原形は不明である。1区22層の水田ST41の中より出土しているが、畦畔からの流れ込みと考えられる。

170はチョウナで全面加工された板材で、中央部に長方形孔を穿つ。下部は二次加工により切断され、左下に方形の切り欠きが見られる。2つにさらに分割され、2／3区12層の畦畔に近接して打ち込まれていた。

172は板の裏から粗く削って孔をあけている板材である。下端は幅狭く加工され、壁板材の可能性がある。2／3区12層の畦畔に打ち込まれていた。

174は表面をチョウナで削って仕上げた薄い板材である。欠損が著しいため原形は不明 壁 板 かであるが、長い板材であったと考えられ、壁板材であった可能性がある。6区16層の畦畔に打ち込まれていた。

175は板材の右側縁を弧状に切り欠く板材である。切り欠きの部分は柱などにあたっていた可能性がある。2／3区12層の畦畔の芯材として出土した。

177は右側縁に孔を2箇所穿つ板材である。側縁部はやや薄く仕上げられている。劣化欠損しているため、元は幅広く長大な板材であった可能性がある。6区16層の畦畔の横木として出土した。

186は右側縁に一辺3cm弱の方形孔、左側縁に小孔を穿つ材である。チョウナで表面を加工し、幅2cmに調整している。下端はやや薄く削っており、壁板材の可能性がある。6区16層の畦畔に打ち込まれていた。

187は左下端に方形孔の痕跡と考えられる切り欠きが見られる。下端は正面のみ薄く削っており、壁板材または床板材の可能性がある。6区16層の畦畔内より出土した。

190は下端に孔痕と思われる方形の切り欠きがある。左下部が割り剥がされており、下部に向かって幅広くなっていたと考えられる。その幅広い部分に方形孔を穿つ材と推定される。2／3区9層（古墳中期）の河川SR20901の東岸より出土した。

- 矢板に加工** 192~194・196・199・200は側縁部を薄く削り、小孔を穿つ矢板材である。192は横に並ぶように小孔を2つ穿ち、199・200は31cm前後の幅広い板の両側縁に小孔を同じ位置に1つずつ穿つ。他は片方の側縁のみ小孔が見られるが、もう片方の側縁が割り取られていると思われる。192~194は10区35層、199・200は6区16層の畦畔より出土した。
- 195・201は199に形状が似るが中心線上にも小孔を穿つ。195は右側縁が割り取られており、左側縁と同様な加工になっていたと推定される。6区16層の畦畔より出土した。199・200の出土位置に近く、同じ部材であった可能性が高い。201は中心線上に小孔を2箇所穿っていたと推定される。孔間は約20cmである。5区10層（古墳前期）の水田の下層より出土した。畦畔の矢板が流れこんだものと推定される。155は201に形状が似ており、中心線上に23cmあけて小孔を穿つ。6区16層の畦畔に矢板として打ち込まれていた。
- 197・198・202・203は中心線上に小孔を上下に4cmあけて2箇所穿つ矢板である。ここに別の材を直交するように繋続したと考えられる。202・203には組み合わされていた材の圧痕の残存
- 197・198は側縁部にも小孔が残る。いずれも6区16層の畦畔に矢板として打ち込まれていた。いずれも近接して出土している。
- チョウナ痕のある矢板** 204~215は表面にチョウナ加工の見られる矢板材である。厚さは2cm~3cmで206は5.8cmとかなり厚い。チョウナ加工はほぼ全面がチョウナで加工されているものと、割り剝がして、厚い部分のみチョウナで調整するものがある。木取りは206と212が極目で他は板目である。ほとんどが二次加工によって切断され、原形が不明であるが、212は下端が円形に切り取られていた可能性がある。212が10区35層、204が6区16層の出土以外は全て9区38層の出土でいずれも矢板として打ち込まれていた。
- 216は正面に溝を削り、上端に孔痕が見られる。裏面は割り剝がしており、溝に別の板材などを組み合わせる柱材等であった可能性が高い。下端は矢板状に加工されている。10区33層の畦畔に杭として打ち込まれていた。
- 溝を刻む材** 217は上端を方形に切り、下端をU字状に切り欠く。正面に4本、裏面に3本の溝を刻んでいる。劣化によって加工は不明瞭だが、溝は上下に貫通していないものが多い。
- 218は粗く加工された板材である。厚さが4.9cmとかなり厚く、柱材などを割り剝がした材である可能性もある。2区6層（平安）の畦畔の横木として出土した。
- 222は径25~30cm前後の円柱を削った材と思われる。8区17a層の畦畔に矢板状に打ち込まれていた。
- 橋状に加工** 223は正面を緩く弧状に削り溶めている。丁寧に加工されており、下端が裏からわずかに削り角度が付けられている。このため、斜めに置き窪みの部分に水などを通した橋状の用途が推定される。2/3区12層の畦畔内より出土した。
- 224は全面をチョウナで加工している側縁部は削り剝がされており、壁板材などを矢板状に二次加工したものと推定される。10区33層の畦畔に打ち込まれていた。
- 225は中央部の周辺をチョウナで削って中央部がやや盛り上がるような形に仕上げる。二次加工により上下を切断されていると思われ、原形は不明である。10区33層の畦畔より出土した。
- ホゾ状突起** 226は薄い板材であるが、下端をホゾ状に突起させる。この部分を別の材に差し込んで直交させたと考えられる。10区35層の畦畔に打ち込まれていた。
- 228は厚さ5.8cmで、下端は緩い弧状に切り、表面をチョウナで細かく削り丁寧に加工する。下端部と上端に孔を穿ち、上端は二次加工で切断されていると思われる。柱または横

架材を直交するように組み合わせた部材と推定される。6区18層（弥生後期前葉）の珪畔内より出土した。

229は右と左で厚さが変わる材である。下端に大型の長方形孔を穿ち、上端に7.5cmあけて小孔を2箇所穿つ。この小孔は別の部材に繋縛するためのものと考えられる。2／3区12層の珪畔に打ち込まれていた。

231は木目にそって断面弧状に作られた板である。右側面中央には切り欠きがある。建築材というよりも、弧状の部分を利用して導水をしたと考えられ、木樋であった可能性がある。本樋かる。1区22層の珪畔に埋め込まれていた。

232は幅7cmの大型の孔を持つ板材である。二次加工によって大部分が欠損しており、元の形は不明である。10区35層の網代のある部分の木材ととともに出土した。

234～238は扉の可能性のある板材である。234と235は左側縁部中央に把手のような孔を穿つ。いずれも回転軸や固定するための孔などは見られない。234は幅23.2cmと狭く、孔のある側の上下端が方形に切り取られていることから、扉とは考えにくいが、貯蔵穴などの蓋の可能性もある。2／3区16層（弥生中期後葉）の水田面より出土した。235も幅26.7cmと幅狭い。2／3区10層（古墳中期）の河川SR21001の東岸より出土した。236は欠損が著しく、中央の孔も劣化によって開いたものと考えられる。右下端は孔痕と思われ、右側縁の中央部も周囲が劣化欠損しているが、孔のあった可能性がある。1区22層の珪畔の下より出土した。237は右下端を方形に切り欠く。この部分に回転軸が取り付けられていた可能性がある。幅は26cmと狭く、二次加工で割り刹がされたことも考えられる。8区17a層の珪畔の芯材として出土した。238は左下に長さ4cmの孔を穿つ。元は下端が上端であり、上部に孔を穿つタイプの扉となる可能性がある。9区33層（奈良～中世）の河川SR93303の流域内より出土した。

256は断面が「工」字形となる板材である。劣化しているが、右側劣化欠損部分の側面に非貫通の孔をあけ、別の部材を差し込んでいたと推定される。両側面の窪みに壁板を差し込んで固定する中間柱的な用途の部材であったと推定される。2区6層（平安）の珪畔脇より出土した。近くに木樋状造構があり、この部材に転用されていた可能性がある。

257は左端に孔があったと思われ、台輪の可能性がある。5区10層（古墳前期）の珪畔より出土した。

258はやや厚めの板材で、壁板材または床板材の可能性がある。1区22層の珪畔の横木として出土した。

259は長さ380.3cmの細長い材で、中心線上に溝を刻む。右端は尖らせてあり、正面をわずかに切り欠く。7区10層の珪畔の芯材として出土した。板材などに直交するように繋縛する材の可能性がある。

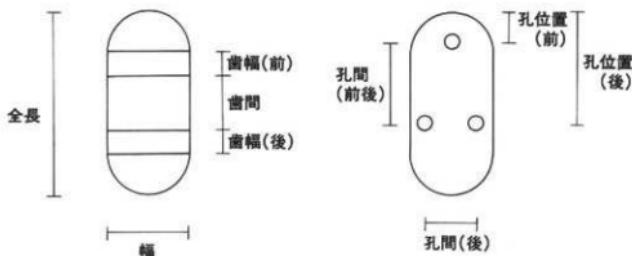
第2節 その他の木製品

1 服飾具・装身具

- 横櫛** 1は横櫛で、8区の奈良～平安時代と推定される14b層から出土した。この層は上層の14a層の水田の擾拌を受けており、輪カンシキ型田下駄が出土している。おそらく14a層に放棄された遺物が擾拌で埋没したものであろう。出土時に歯が欠けて散らばっており、小片のために原形がわからないが、歯の長さが約3cm程度で、1cmの間に10本を超える枚数の歯が細かく切り出された横櫛である。
- 下駄** 2～10は下駄である。瀬名遺跡出土の下駄は全てが一本造りの通歯下駄で、平面が橢円形または小判形で、長方形の平面を持つものはない。前蓋は前歯の直前に穿ち、後緒の蓋は後歯の直前に穿つ。ただし、4のみが前歯と後歯が近接していることから、後緒の蓋が後歯にややかかる形で穿孔されている。2・8は2／3区6層内（平安）、3～5は7区8層（6世紀後半～8世紀）の河川SR70801内、6は9区33層（奈良～中世）の河川SR93301内、7は9区22層（奈良～中世）の河川SR92201内、9は9区25層～33層（奈良～中世）の河川SR92502～SR93303内、10は9区20層水田（奈良～中世）の耕作土中の出土である。3は全長が15.9cmと小さく、長方形の板の角を切り落とした細い作りで、おそらく小児用の下駄と思われる。7は大半を欠損するが、歯が高さ5cmを超える高歯で、藤枝市御子ヶ谷遺跡出土の高歯の下駄に似る。緒を通す孔（蓋）の穿孔は、前蓋を中央に穿つものと左右どちらかに偏って穿つものの2種類があり、前者は比較的孔が小さくほぼ円形で、後者は孔が大きく縦長の楕円形または隅丸の長方形状である。4～6の下駄には前者の特徴が見られる。遺跡の出土例から、古墳時代の下駄は前蓋を偏って穿ち、奈良・平安時代になると中央に穿つ傾向にあることが言われている。県内においてもこの傾向があるようだが、浜松市の城山遺跡出土の下駄がやや偏った形で前蓋を穿ち、瀬名遺跡でも6のように、奈良・平安時代においても前蓋が偏る下駄がわずかに存在するようである。孔の大きさは工具の発達の違いと考えられるが、緒の材質の差異も考えられるだろう。
- 高歯の下駄** 前蓋の偏り
- 木製紡錘車** 11は木製紡錘車と考えられる。5区8層水田を覆う平安時代の洪水流跡である6層より出土した。厚さ0.8mmの板を円形に切り、端部をやや薄く仕上げる円盤状の型である。直径は一部欠損しているが、どの部位も8.5cm前後である。中央の孔に細い棒をはめ込み、糸を撚ったと考えられる。静岡市の神明原・元宮川遺跡（大谷川）で奈良時代の木製紡錘車が出土しているが、厚さ1.3cm直径4.2cmと瀬名遺跡のものより小型で厚く、端部を薄く仕上げる加工がされていない。
- 杼** 12は杼である。37層の古墳時代初頭の杭列畦畔中より出土した。37b層は弥生時代後期後葉から古墳時代前期の洪水流によって運ばれた土壌である。杼は機にかける準備に使われるもので、纖維に撚りをかけて仕上げた糸をもつれないように輪状に巻いて糸束にするために使用される。一端が欠損しているが68.5cmが残存しており、復原すると工の字型で全長が76cm前後になると推定される。県内では菊川町白岩遺跡から弥生時代中期の杼が出土しており、全長約80cmで中央部を細く削り込み、瀬名遺跡の杼と形状がよく似ている。杼の軸が瀬名遺跡のものは断面円形に対し、白岩遺跡のものは長方形状で横にわたる板材も瀬名遺跡が21.8cmであるのに対し、白岩遺跡は33cm前後でやや大型である。

番号	全長	幅	歯幅		孔位置		前孔	孔間	出土区・層位	年代観	
			前	後	歯間	前					
2	19.6	8.1	3.5	3.7	6.4	1.6	11.8	中央	5.3	10.4	2/3区6層 平安
3	15.9	7.8	2.4	2.3	5.7	1.9	10.4	中央	6.0	8.5	7区8層SR70801 6世紀後半～8世紀
4	25.7	11	5.5	4.6	3.1	3.6	13.6	左寄	8.2	9.9	7区8層SR70801 6世紀後半～8世紀
5	24.3	11	1.7	2.0	12.0	3.8	15.4	右寄	8.3	12.4	7区8層SR70801 6世紀後半～8世紀
6	(20.5)	7.6	2.7	欠損	不明	2.8	13.9	右寄	不明	11.4	9区33層SR93301 奈良～中世
7	(9.2)	10	欠損	5.4	不明	不明	不明	不明	不明	9区22層SR92201 奈良～中世	
8	20.5	(4.5)	4.0	5.0	4.7	不明	10.7	中央寄	不明	不明	2/3区6層 平安
9	(19.6)	(5.2)	2.0	2.3	7.0	不明	不明	中央寄	不明	不明	9区25～33層 奈良～中世
10	21.5	(5.3)	4.1	3.3	4.7	3.1	11.9	中央	不明	8.7	9区20層 奈良～中世

単位: cm



第20表 下駄計測表

2 交通・交易関連遺物

1は2/3区16層から出土した櫂である。調査区の北東端の畦畔SK21602内の上部から出土した。広葉樹のため全体的に劣化が著しく、柄の部分と下端が欠損している。断面は柄の延長部分である中央部が厚く、側縁部に向かって薄くなる。水を搔く羽根の部分が40cmあまり、幅が12cmと幅に対して長さが短い形状である。木取りは板目で正面が木裏となっている。16層の水田からは有東式土器が出土しており、弥生時代中期後葉と考えられる。

2-aと2-bは準構造船の刳船部分と考えられる。2枚の2/3区北東隅の12層水田の畦畔の下部に埋め込まれた状況で出土した。時期的には12層出土の土器より、3世紀末～4世紀頃と考えられる。船の舷側部分が二次加工で割り取られたもので、ともに船の内側部分を下にしてbの上にaが重なる形で埋め込まれ、周囲には多くの杭が打ち込まれていた。横断面はカマボコ状に丸味を帯びている。両端が割られ、底部も割り取っていることから、板材として二次加工を受けていると考えられる。内側には下面と考えられる側縁部に底板を削がした跡が認められ、反対側の側縁には一定間隔に

櫂

準構造船材

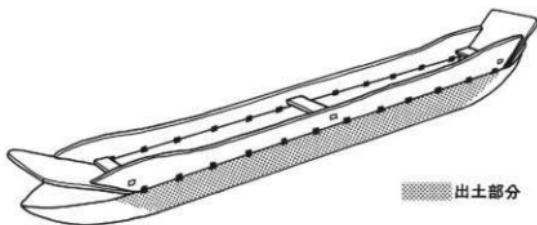
出土状況

二次加工



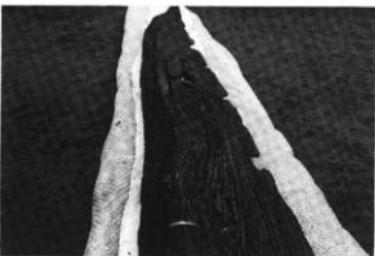
写真14 準構造船材取上状況(2-b)

世紀頃と考えられる。船の舷側部分が二次加工で割り取られたもので、ともに船の内側部分を下にしてbの上にaが重なる形で埋め込まれ、周囲には多くの杭が打ち込まれていた。横断面はカマボコ状に丸味を帯びている。両端が割られ、底部も割り取っていることから、板材として二次加工を受けていると考えられる。内側には下面と考えられる側縁部に底板を削がした跡が認められ、反対側の側縁には一定間隔に



第13図 準構造船材出土部分模式図 (原案: 栗野)

穿 孔 孔が穿たれている。これは波除けの板を取付けるために木の皮を通して緊縛したと考えられ、隙間に栓を入れたと推定される。孔の形はaが長さ5~7cm、幅1~1.5cmの長楕円形に対し、bの孔の形は長さ2cm、幅1cmの長方形で、孔を穿つ間隔もaが41cm、bが36cmと異なる。樹種はともにスギであり、年輪の形、木取りが異なることか



別々の船材 ら別々の船材であったと考えられる。 写真15 準構造船材取上状況(2-a)

aの側縁の外面の一部に段差が見られるが、波除け板の段差結合を示すものかは不明である。bは平坦面が丁寧に削り出され、波除け板を合わせて結合したものと考えられる。

小 軸 3~4は小軸である。いずれも前輪あるいは後輪の部分で、緩いV字形をしている。居木を取り付けるための孔は方形で、3は半分以上欠損しているため1箇所のみ残存、4は破片をつないで復元すると3箇所に穿孔されていたことがわかる。どちらも形状が似ているが3がやや大きく、出土した区も離れ、使用している木の材質も異なることから、3と4は同一の軸の部材ではないかと考えられる。3は2/3区の奈良・平安時代の層である8層の上面から出土した。水田の遺構を洪水流が侵食した地点から出土している。居木を取り付ける孔は約1.5cm×2cmの方形のものが1ヶ所残存する。4は割れているが、接合して原形を推定すると全長が33cm前後になると考えられる。「く」の字形の形状で、内角が内側で95°外側で105°である。中央と左右に居木を取り付ける孔が3箇所あり、孔は下方の1つが約1.2cm×2.4cm、もう1つは欠損のため長さは不明だが幅1.2cmである。中央の孔が約1.5cm×3cm、7区の8層の河川跡SR70801から出土しており、この河川は6~9世紀の遺物が多く出土している。

軸の出土例 県内の出土例では、島田市居倉遺跡から平安時代の軸の輪の部分が3点が出土しているが、このうち2点には居木を取り付ける孔がなく、中央部に切り欠きがあるのみである。1点は半分を欠損しているが、居木を取り付ける孔を下方に2つ並んで穿つ。また、輪の角度も1点は90°前後、1点は85°前後、孔を持つもので97°であり、瀬名遺跡のものよりやわらかに鋭角で、形も大型である。浜松市の城山遺跡出土の奈良時代の居木は、輪に取り付けるホゾの部分が断面約1.5cmの方形である。

付札状 5~15は付札状の形をした木製品である。上部の両側面を切り欠いて紐などを括り付ける形をしたものと付札状木製品とした。全長は欠損しているものもあるが、ほぼ11cm前

後である。上端は圭頭状に加工されたものと直線的に切ったものがある。また、側面の切り欠きも両方から切り込む手法は同じだが、上下とも同じ長さで「く」の字状に切り欠くものと、上を短く下を長く切り欠いたものとがある。切り欠く位置はほぼ1.5cm前後である。7は3cmとやや長めである。下端は欠損しているものもあるが、ほとんどが直線的に切っていると思われる。7は下端が尖り、刺して使われたようである。9は鈍角の三角形に加工されているが、刺して使うには向きであり、他のものと同じく紐で付けた可能性が高い。5は1区の奈良～平安時代の流路である20層のSR12001から出土した。上端の加工から祭祀遺物の入形木製品の可能性も考えられた。6は2／3区の6層の平安時代の水田上から出土した。7は3区5層の中近世の水田土壤内から出土した。形状がやや他のものと異なり、下端が尖っていて何かに差し込むという用途が強く、付札として利用されたかどうか不明である。8は5区の平安時代の層であるから、9は7区8層の古墳後期～平安時代の流路であるSR70801から出土した。10～12は7区の平安から中世の層である8層の上面より出土、13トレンチから出土しているが、10～12に近い位置から出土しており、形状もよく似ているため、ほぼ同時期のものと考えられて良いだろう。14は9区の平安時代の流路であるSR92501から出土している。15は10区の弥生後期前葉と考えられる36層の水田から出土した。厚さが0.3cmと薄く全体的に直線的で、かなり形状が他のものと異なっている。いずれのものにも墨書き等の文字は見られなかった。文字がなければ付札としての機能が果たせないと思われるが、あるいは使用前のもの、使用して文字を削ぎ落としてしまったものかもしれない。

3 工具・武具・葬送具

1は7区の6世紀後半から8世紀の流路であるSR70801底部より出土した刀子である。刀子
漆塗りの木製の柄に8.3cmほど中子が差し込まれている。刃の部分は鋸びて折れ曲がっているが、14.9cm残存し、復元すると約15.3cm程度になると推定される。

6は木柄である。古墳時代中期から平安時代の流路であるSR51801から出土した。形は膝柄状であるが、先端に石斧や鎌等を装着するための造作がないため、使用されたものかどうか不明である。

2は飾弓と考えられる。10区39層の水田の畦畔SK103902から出土した。この層からは有東式土器が出土しており、弥生時代中期後葉のものと考えられる。残存している上部に二条の線が浮き彫りにされており、周囲には蔓が巻きつけられていた。大部分が欠損しており、畦畔から出土したため当初は農具の柄と思われたが、上から下へ一条の刻線があり農具の柄とするにはやや細いこともあって飾弓と考えた。木取りは広葉樹の板目である。

3は矢とを考えられる。2／3区の古墳時代中期の流路SR21001から出土した。先端を鐵状に加工し、鐵の部分が最大径1.4cm、胴の部分が径0.9cm前後である。先端は鐵を模して作られたものと考えると、実用的であるかどうかが疑問である。

4は櫛と考えられる。5区の弥生時代中期後葉から弥生時代後期初頭の流路SR51301から出土した。上端を丸く、側面はやや中央がくびれる形をしており、下端にむかって幅広くなっている。長さ約1m、幅約46cm、厚さ約2cmは手に持つには重く、不便であることから、地面に立てて使うものであろう。地面に立てるときに横木に縛ったと思われる穿孔が3ヵ所あり、また、横木が当たったと思われる痕跡も残り、何枚か横につなげて使用した可能性がある。表面はほぼ平沢でとくに文様等は見られず、上端を斜めに削っているだ

上端の形状

下端の形状

文字はなし

子

木

節

弓

本

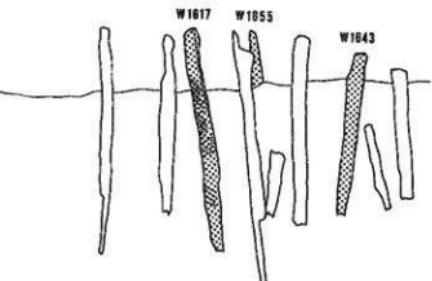
櫛

けである。

5は卒塔婆である。6区の近世と推定される第5層水田の洪水による被膜層から出土した。洪水で上流から流入したものと考えられる。仮の墓標として使用された後で杭として二次加工がされており、本来の形とは上下逆に加工されている。広葉樹の丸太材で、枝状に別れた部位の枝の一方を切り落として作っている。表面の一部を削って平坦面とし、阿弥陀の種子を示す梵字である「キリーク」が墨書きされている。また、この梵字の上に2本下に1本墨を入れた刻線がある。卒塔婆を象ったものを刻線で示したと推測されるが、板碑の形式に近いものとも考えられる。卒塔婆は一般的に平板または四角柱状のもので、四十九日後に石製の墓標を立てるが、貧しい者はそのまま使用していたということもあったようである。この卒塔婆は作りが丸太材で粗いこと、杭として二次加工されていることから、おそらく正式な墓標が立てられることによって不要となり、廃棄されたりとなつたものであろう。近くからは土葬されたと考えられる人骨の一部も出土しているが、卒塔婆との関連は不明である。

4 用途不明木製品

1は2区21a層(弥生中期前葉)の河川に埋のように流路に直交して打ち込まれていた杭で見られる杭である。文様のある2つの杭が接合したが、同じ杭列にもう1つ同様の文様が刻まれている杭があり、同一の物と考えられる。杭に転用するために縱方向に細く削り取られているため、原形は不明である。裏面の上部に横木を組んだと考えられる溝があり、もとは板を何枚かつなげ、かなり幅のあるものであった可能性がある。表面の4条の同心円と直線の線刻文様は浜松市伊場遺跡出土の弥生時代後期前葉



第14図 用途不明木製品1出土分布図

の短甲狀木製品にやや似るが、瀬名遺跡のものはかなり大型の文様である。残存する長さが約20cmを越え、厚さも約5mmと人が持ち歩くには無理のあるものであり、武具と考えれば地面に置く橋、建築部材と考えれば壁板など人目に付く部分に使用されたと思われる。

2は10区23層(奈良~平安)の水田の畦に斜めに突き立った状態で出土したもので、出土状況が次頁の写真のようにあたかも立札のようであったため、「立札状木製品」と呼称されているが、立札とは考えにくい。下端部は杭としての二次加工を受けたらしく、斜めに切り落とされている。本来はこの部分が柄となっていたと推定される。使用方法は不明だが、茅葺の屋根を吹き替える際に使用するコテに似ており、平坦な部分や先端を利用して何かを均す役割を持つ道具の可能性がある。

3~10はホゾ状の突起が作り出されている木製品である。様々なものの部材であるが、

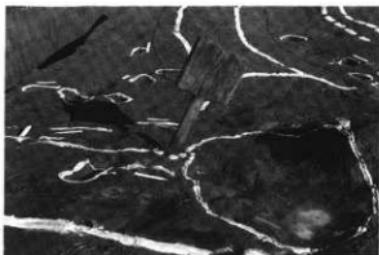


写真16 用途不明木製品2出土状況

おり、径もほぼ同じである。13・14・18は下端をやや尖らせた形状、15は下端を薄く加工し筒状になっている。17は中央か窪み、紐を巻き付けて編籠として使用した可能性がある。11は古墳中～平安の水田内、12～14は奈良・平安時代の河川内、16は奈良・平安時代の水田内、17は奈良～中世の河川内の種子集中区域内より出土した。

19～47と232～233は端部に頭状の突起の加工をした木製品である。このような形状の物は機織具（中筒・経巻具・布巻具）・農具の部材など様々な可能性があり、用途を特定できない。19と232・233は径がそれぞれ2.7、3.25、3.15で機織の経巻具の可能性がある。22も刻みが絹糸を固定するものとすれば同様の物の可能性がある。23・24・29は両端の正面のみを切り欠いており、長さは約37cm～48cmとわずかに異なるが、ほぼ同様の形状をしている。断面が四角形で登呂遺跡出土の布巻具に近い形状であるが、水田内の出土を考えると、輪カンジキ型田下駄の横棒である可能性がある。26・27は断面が円形で栓または木釘として使用された可能性がある。31・32はカシ材であり、形状から二又歎の破片を二次加工したものと推定される。34・35・46は輪カンジキ型田下駄の部材の可能性がある。19は弥生後期の水田内、21・40は中近世の水田内、22は中近世の河川内、23・24・41は古墳中期～平安の水田内、25・28・31～35・47は弥生後期～古墳前期の畦畔内、27は

ホゾの加工

11～18は棒状に加工された木製品で

ある。11と12は断面円形に加工されて

棒状に加工

13～18は下端を薄く加工

し筒状になっている。

17は中央か窪み、紐を巻き付けて編籠として使用した可能性がある。

11は古墳中～平安の水田内、12～14は奈良・平安時代の河川内、16は奈良・平安時代の水田内、17は奈良～中世の河川内の種子集中区域内より出土した。

有頭状加工

経巻具か

輪カンジキ型

田下駄か

出土地点

奈良・平安の水田内、29は奈良～中世の水田内、30は奈良～中世の河川内、36は古墳中期の畦畔、37は平安の木樋状遺構、38は平安の畦畔、46は平安～中世の水田内の出土である。

以下は様々な加工のなされた木製品である。部分的に用途が明確でない物ではあるが、他遺跡の出土例などから推定、形状からの可能性を一部の物についてあげておく。

輪カンジキ型

田下駄か



写真17 用途不明木製品46出土状況

53は小孔が多く開けられているが、左側縁部に孔痕があり、やや大きめの孔が三角形状にあけられている。この点から、小型ではあるが、輪カンジキ型田下駄と推定される。平安時代の層より出土した。

68は曲物の底板を転用した泥除けと推定される。古墳中期から平安時代の水田内より出土している。

曲物の転用

泥除けか

69は幅1.6cm、厚さ0.4cmの薄い板で、先端を丸く加工し、中央に小孔を穿つ。扇の一部

踏板か の可能性がある。古墳中期から平安の水田より出土した。

71は半分に割れているが、輪カンジキ型田下駄または大足の踏板と考えられる。中近世の水田内より出土した。74・91も輪カンジキ型田下駄の踏板と推定される。

泥除けか 同様の物と推定される。96も大部分が欠損しているが、泥除けであった可能性が高い。

縫打工具類似 川にかかる堰の中から出土した。

88は87に似るがかなり小型で厚い。出土は87と同じ河川内である。

93は中央に円孔を穿つ、径約13cmの円形の板であったと推定される。泥除けまたは容器の蓋の可能性がある。

履物か ないため、木製の履物または草履に編み込まれた板と考えられる。

叩板か 整する叩板であった可能性がある。97は古墳中期の水田面、98は奈良～中世の河川内より出土した。

文様のある部材 99は弥生中期後葉のもので一部に三角形に表面を削った文様が見られ、特殊な用途が考えられるが、欠損によって原形がわからぬ。

183も同様の文様が見られ、近接して出土していることから同一の部材と考えられる。弥生中期後葉の水田内より出土した。

容器の底板 100は折敷などの方形容器の底板と考えられる。右端の孔は樹皮で側板を留めていた痕跡と推定される。しかし、左端の孔は元からあったものではなく、後に別の物に転用されていたと推定される。奈良～中世の河川内より出土した。

102は中央がやや窪む杓子状をしており、

杓子状 杓子形木製品の先端部と推定される。

108と109は鍬先状のもので、形状がやや

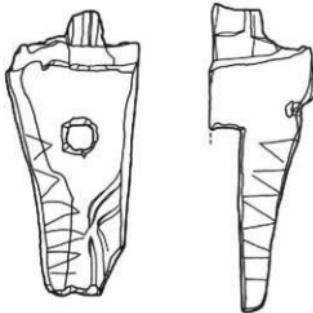
鍬先状 似る。柄をつけて使用する農具または工具 第15図 用途不明木製品99・183

の一種かと推定される。108の樹種はカシで、農具であった可能性が高いと思われる。弥生中期後葉～弥生後期初頭の河川にかかる堰の導水路内より出土した。109は古墳後期～奈良時代の河川内より出土した。

高杯か 110は木製高杯の口縁部の破片と考えられる。弥生中期後葉～弥生後期初頭の河川内より出土した。

櫛状 112～113は櫛形をしているが、薄い板材で穿孔のある部材である。111もやや形状が似るが、やや大型で厚い。いずれもスギ材で鍬などの農具とは考えにくい。

114は脚状の突起が見られ、裏面が平坦となっているため、脚付きの皿または台であった可能性がある。奈良～平安の河川内より出土した。115は付根が高く突き出すような立体的脚付き容器 な把手がつけられ、裏面に脚を1つ作り出す形状である。欠損しているが平らな面が続く形となるため、木製の把手付皿または台と推定される。古墳中期の河川にかかる堰内より



0 10cm

出土した。

117は中央がわずかに窪み、上で何かを擣りつぶすまたは叩くなどの作業をしたものと推定される。古墳後期～奈良の河川内より出土した。

118と121は脚のついた木製容器と考えられる。121には把手と見られるものも作り出している。118は奈良～中世の河川内、121は古墳後期～奈良の河川内より出土した。

119と122はホゾ材と考えられる。119は完形品、122は上部を欠損している。静岡市登呂 脚付き容器遺跡より出土している物に類似する。いずれも古墳中期の層より出土している。

120は四又になると推定され、鍛先のような形状であるが、スギ材であり農具の可能性低 ホゾ材いと思われる。弥生後期～古墳前期の畦畔より出土した。

123は一部に樹皮が残り、細く作る部分は樹皮で止める部分と思われ、曲物の側板と考えられる。平安から中世の包含層より出土した。

125は上器を作る際のあて具に似るが、やや太めで大型である。奈良～中世の河川内より 曲物の側板出土した。

127は穿孔部分に組み合わせた部材の一部が残り、1・8・9のような形状の板が差し込まれたと考えられ、大足の部材と推定される。奈良～中世の河川内より出土した。

128は裏面が平坦であり、菱形の脚のついた台または皿と推定される。奈良～中世の河川 大足の部材内より出土した。

129は渦曲する内側の一部を平坦に加工し、軸もほん腰と同じくらいであることから機械 脚付き容器の腰あて具と推測される。範にも形状が似るが、太さが太い部分でも3.5cm程度で鋸を牛などに引かせるにはやや細く、小型である。両端の加工が異なるため工具の柄の可能性もある 腰あて具かる。奈良～中世の河川内より出土した。

131は墨痕跡が約6.5cmごとに残り、長さを測る物差として利用された可能性がある。古墳前期の層より出土した。

132はやや小型であるが、櫛のような形状に加工されている。樹種はカシであり、掘り棒 物差かなどの農具であった可能性がある。古墳前期の畦畔内より出土した。

133は断面が半円形で、大足の部材と考えられる。奈良～平安の流路内より出土した。掘り棒か

136は上部にU字状の切り込みを持ち、下部の両端に孔1つずつ穿つ。これは平安時代の水田の直下の砂層より出土した。同様の物が池ヶ谷遺跡、岳美遺跡においても出土しており、いずれも条里型水田に伴って出土していることから、奈良～平安時代に特有の遺物であると思われる。

137は田下駄状であるが、穿孔が多くあるため田下駄と認定できなかった。両端の切断の状況が異なるため、一旦他の部材として作られた後、廃棄されるにあたって二次加工を受け、田下駄として使用されていたのではないかと思われる。弥生中期後葉の層より出土した。田下駄かた。

141はチョウナで表面を加工し、側縁部を薄く仕上げ小孔を穿つ。厚さ2.1cmとやや厚めであるが、壁板材などの建築材であった可能性が高い。弥生後期～古墳前期の水田の畦畔より出土した。142も同様の物と思われる。古墳前期の水田の畦畔より出土した。

143は輪カンジキ形田下駄または大足の踏み板と思われる形状しているが、穿孔位置の問題から用途不明木製品とした。建築材を転用した可能性がある。弥生後期～古墳前期の水田の畦畔より出土した。

149はカシ材であり、鍛などの農具の破片である可能性が高い。弥生後期～古墳前期の水

条里型水田

に伴う部材

大足の部材

建築材か

踏板か

- 田の畦畔の中から出土した。
- 農具か** 150は左側を欠損しているが、周囲を斜めに削って薄くする。容器の一部であった可能性がある。平安の水田内より出土している。
- 容器か** 151-156は先端に加工の見られる杭である。先端が垂木状に加工され、部材の上に乗せ緊縛した可能性がある。しかし、すべて上部を下にして杭として打込まれており、杭が抜けにくいうようにこのような加工をしたとする「かえしのある杭」の考え方もある。いずれも弥生後期～古墳前期の水田の畦畔に杭として打ち込まれている。
- 先端垂木状** 158は刀子形木製品に形状が似るが、やや厚めの材である。奈良～平安時代の砂層中より出土した。
- 159はホゾを作り出した部材で、柱などの建築材であった可能性がある。平安の蝶層中より出土した。
- 建築材か** 160はやや下に向かって厚くなるため、建築材の風返し片、または田下駄の一部である可能性がある。弥生後期～古墳前期の水田の畦畔より出土した。
- 161と162は律令期の祭祀に関わる遺物である刀形木製品の一部ではないかと思われる。奈良～平安の河川の覆土中より出土した。
- 刀形か** 163と165・167は斎串状木製品の可能性がある。斎串は一般的には切り込み・切り欠き等の加工が側縁部に見られるが、静岡市神明原元宮川（大谷川）遺跡の斎串の一部には加工
- 斎串状** が見られないタイプがあり、このタイプである可能性がある。163は奈良～平安の河川内より、165は奈良～中世の河川内、167は奈良～中世の河川の路より出土した。
- 鳥形に類似** 164は鳥形木製品に形状が似るが、胴部の穿孔が首の部分にあり、羽の部材をつけるための孔ではないとも考えられる。弥生後期～古墳前期の水田の畦畔内より出土した。
- 人形に類似** 166はやや大型ではあるが、人形木製品に似る。下部は下から2本の切り込みを入れ、間を折り取って足の表現をしていると思われる。上部は頭が欠損していると思われ、緩いV字形に切り込んで顎を作っていたと推定される。奈良～中世の畦畔内より出土した。
- 仏教関連か** 168は角棒の角に切り込みが見られ、下は断面円形に加工される杖状の木製品である。形状から仏教に関連した用具の一種ではないかと推定される。
- 169はホゾ状に加工されているがかなり大きく、建築部材などの組合せに使用された可能性がある。
- 踏板か** 170は輪カンシキ型田下駄の踏板の破片と推定される。古墳中期から平安の水田内より出土した。207も形状が似ており、同様のものと考えられる。平安～中世の水田の畦畔より出土した。
- 梯子か** 180は梯子の破片の可能性がある。上部は丁寧に加工されているが、下端は段を作り出している部分の下で粗く切り落とされている。両側面は割り取られている。弥生後期～古墳前期の水田の畦畔より出土した。
- 未製品か** 186は穿孔がないが、形状が下駄に似る。形が整っており加工痕も明瞭であることから下駄の未製品の可能性がある。古墳中期の河川内より出土した。
- 187は大足の部材の可能性がある。古墳中期の層より出土した。
- 194は弓状をしているが、上端の糸を掛け部分に幅があり細く尖っていない。弥生後期～古墳前期の水田の畦畔より出土した。
- 田下駄か** 195・198・211は田下駄の可能性がある。195・211は弥生後期～古墳前期の水田の畦畔、198は奈良～中世の河川内から出土した。

200は側板を留めていたと思われる樹皮が残り、曲物または折敷の底板の破片と推定される。底板かる。小孔と右下部の弧状の切欠きから、泥除けとして転用されていた可能性がある。中近世の畦畔脇より出土した。

202はおそらく泥除けの一部であろう。203・217・226も泥除けの一部と推定される。202 泥除けか・217・226は平安の包含層、203は平安の水田より出土した。

205は二又鍬の破片と思われる。弥生後期～古墳前期の水田の畦畔より出土した。二又鍬か

206は大足の部材の可能性がある。奈良～平安の水田の下面より出土した。

214は木釘が残り、左側面に3箇所の樹皮で底板を留めたと思われる痕跡があり、折敷の側板側板と推定される。6世紀後半～8世紀の河川内より出土した。

215は小型の部材であるが、唐箕の轡を落とす量を調節する部分の把手に似る。中近世の畦畔より出土している。

220は刀形木製品に似るが、刃の部分の中央に切り欠いた部分があるため、刀形と認定することができない。奈良～平安の水田の畦畔脇より出土した。

228は曲物の底板であった可能性がある。樹皮で側板を止めていた箇所が欠損し、切欠き曲物か状になっている。6世紀後半から8世紀の河川内より出土した。

229は曲物の側板の一部と思われる。上端に斜めの切り込みが見られるが、樹皮で止める曲物の側板部分の付根に似る。6世紀後半から8世紀の河川内より出土した。

230は小型の鎌の柄状をしているが、劣化のため鎌の刃を挿入する部分は確認できなかつ鎌の柄類似た。弥生後期～古墳前期の水田の畦畔内より出土した。

236は又鍬の破片と推定される。刃が2本残存するが、両側面は欠損しており、4本以上又鍬の破片の刃があったと推定される。古墳前期の水田の畦畔から出土した。

237は木製皿または高杯の一部と推定される。平安の水田内より出土した。容器か
<参考文献>

『日本住宅公園藤枝地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ－奈良・平安時代編－志太郡衙跡（御子ヶ谷遺跡、秋合遺跡）』藤枝市教育委員会 1981

『川合遺跡（造構編）』 勝静岡県埋蔵文化財調査研究所 1990

『葦山町史第1巻』 静岡県田方郡葦山町役場 1979

『長崎遺跡I（造構編）』 勝静岡県埋蔵文化財調査研究所 1991

『長崎遺跡II（造構編）』 勝静岡県埋蔵文化財調査研究所 1992

『下駄』 沼津市歴史民俗資料館 1992

『大谷川IV（造物考察編）』 勝静岡県埋蔵文化財調査研究所 1989

『静岡の原像をさぐる！－平成2年度埋蔵文化財発掘調査報告会－』 勝静岡県埋蔵文化財調査研究所 1990

『居倉遺跡発掘調査報告書』 島田市教育委員会 1987

『静岡県浜名郡可美村城山遺跡調査報告書』 可美村教育委員会 1981

『伊場遺跡遺物編』 浜松市教育委員会 1978

『平成元年度の発掘調査』 勝静岡県埋蔵文化財調査研究所 1990

『平成2年度の発掘調査』 勝静岡県埋蔵文化財調査研究所 1991

『静岡県史 資料編3 考古三』 静岡県 1992

第III章 文字資料

瀬名遺跡では文字資料として、木簡4点、卒塔婆1点、焼書木製品8点、墨書き土器6点が出土した。水田を主体とする遺跡としては文字資料の出土が多く、隣接する官衙関連遺跡である内荒遺跡との関係、水田を営んだ人々の居住域の近接が問題となる。

1 木簡

- 短冊型木簡** 1は1区の自然流路SR12001の底から多くの木製品とともに出土した短冊型の木簡である。SR12001の上層の検討の結果、8~9世紀代の層を削って流れ、11世紀に水田が形成されるまでの間に埋没したと考えられる。流路の底から出土した上器から木簡および出土木9世紀代 製品は9世紀代の流れの段階で流路に入り込んだものと考えられる。文字は裏表に楷書体で墨書きされているが、欠損により判読が困難である。表の上部に一行、下部に三行の文字列、裏面には二文字の痕跡が認められる。上部の文字は「件」と読めるが、内容が微集の命令とすると「仰」の可能性もある。左の行には「西奈□□□□□」、その下に「五百原□□□」とあり、さらに「戸・五月女」とある。「戸・五月女」の「目」は「月」の可能性もある。西奈は「和名抄」に出てくる蘆原郡の郷名であり、瀬名は中世以降に用いられるようになった。「五百原」は郡名だけでなく、古事記の孝霊紀にある「五百原君」、統日本紀神龜2年(725年)1月22日条に「五百原君虫麻呂」、奉写一切経所銭用帳の宝龟3年(772年)10月4日条と6日条に「写經牛五百原豊成」等に見られるように人名を表す可能性もある。また「五百原」は「蘆原」とも書かれ、日本書紀天智2年(663年)8月13日条には「蘆原君臣」、駿河国正税帳天平9年(737年)条には「蘆原君足礎」、統日本紀大平勝宝2年(750年)3月10日条には「駿河國蘆原郡」とあり、奈良時代まではほぼ並行して使用され、これが平安時代になると「庵原」または「菴原」となっていくようである。二行目は「五百原□□□人□」「戸廣□」とあり、その下に文字がいくつか欠落して三文字分がある。これにも地名や人名等が書かれていたと推定される。三行目は欠損が著しく、上部の文字が欠落し、下に「廢」という文字がかろうじて読める。その下に二文字分あったと推定される。「五百原」「西奈」等の律令時代の文献に登場する地名、氏族名や人名が書かれていたこと、官衙的な書式であることから、地方政治を行なう上で、雜徭などの労役のため人を動かした記録簿としての性格の木簡を考えることができる。
- 官衙的書式** 2は9区の自然流路SR90502の覆土の砂礫層から出土した。この流路は8区と9区の境を流れる。長尾川の支流である蘿川の河川改良前の流路と思われる。軍隊の階級である「少佐」の文字が墨書きされている。7区の旧耕作土層より練習用の手榴弾も発見されており、軍の演習中または陣地構築中に投棄したものと推定される。静岡市には第34聯隊、第230聯隊などがあり、また、終戦直前には第140師団の第410聯隊、独立混成第120旅団が市内に陣地の構築を行なっており、このいずれかの聯隊のものか。
- 聯隊関連か** 3は9区の自然流路SR92502から出土した。この流路からは灰釉陶器が出土し、平安時代を下限とする流路であると推定される。長さ18.3cmで、上下が欠損している。発見当初は墨痕のようなものが3文字分見えていたが、現在では全く認められない。3文字目は「入」

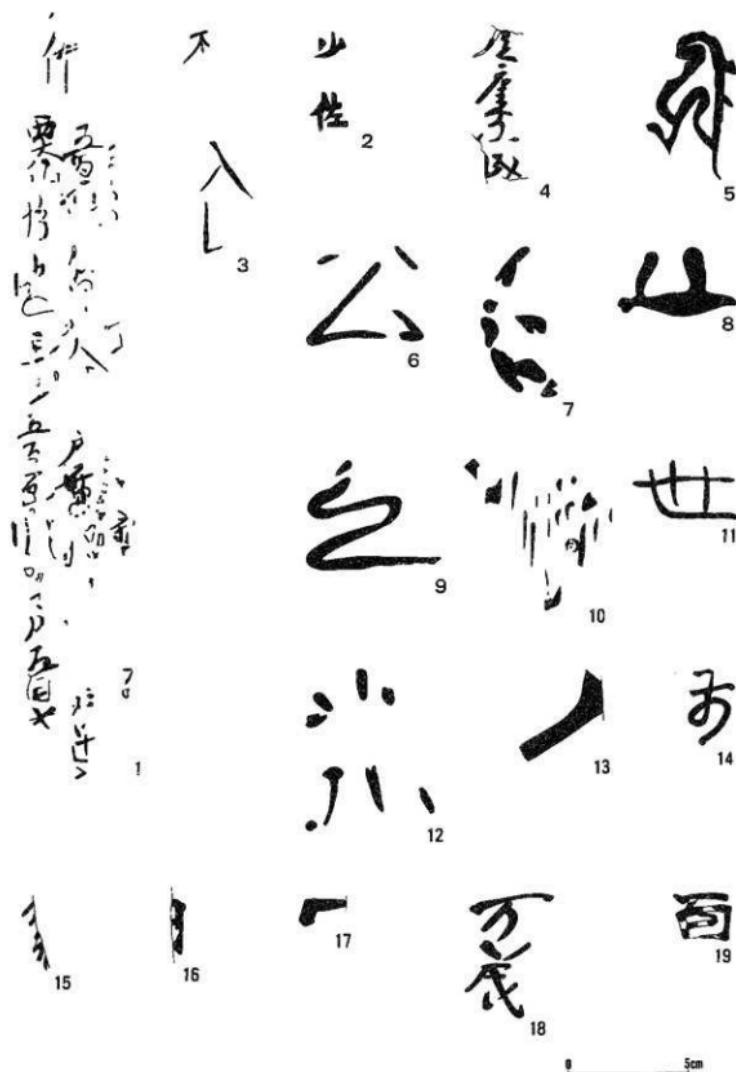
と考えられたようだ。

4は14層水田と16層水田の中間層である15層上面である。15層は洪水により堆積した砂 洪水の堆積層であり、木簡は上流より流されてきたものと推定される。木簡の左右は木目で削離し、上下も欠損している。文字は草書体で5文字分が墨書きされており、一字目は「郷」または「屋」と考えられ、二文字目と三文字目は「戸主」または「广」のつく漢字の可能性がある。「戸主」であるとするならば、平安時代初期頃までの表現であり、年代観が9~10世紀頃となる。四文字目は「奈」、五文字目は「成」または「戊」と考えられる。

5は6区の5層水田を覆う洪水流で運ばれた砂層より出土した。卒塔婆で丸太材の表面 卒 塔 婆を削りだして平らな面を作り、この部分に梵字が墨書きされている。この梵字は阿弥陀如来の種子とされるキリークと呼ばれる文字で、卒塔婆に書き込まれる文字である。梵字の上に二条、下に一条の溝を刻み、溝中に線を墨書きする。

番号	遺物名 遺物番号	出土区 出土層位・遺構	法長(cm)			部位 種類	獸文	年代観	出版書名 写真番号
			長さ	幅	厚さ				
1 木簡 W-53		1区 SR12001復元	40.6	5.8	1	両面 墨書き	(夷) [] 麟 □□ ×□□ 五百原□□人口 戸廣: [] □□□× 〔作か〕西崩[生]上[]五百原□□[]女 〔日分〕	奈良 平安	遺物編Ⅱ 113-1 善断カラ一団版 96-1
2 木簡 W-1		9区 3・4層砂層	6.3	2.3	0.6	片面 墨書き	少佐	近現代	遺物編Ⅱ 111-4 96-4
3 木簡 W-328		9区 北側排水溝内	18.3	4.2	1.2	片面 墨書きカ	× □ □ □ × 〔入カ〕	平安ガ	遺物編Ⅱ 111-2 96-2
4 木簡 W-105		10区 15層上面	7.3	4.5	0.9	片面 墨書き	× □ □ □ □ × 〔限〕(奈 成カ)	中近世	遺物編Ⅱ 111-3 96-3
5 卒塔婆 W-8001		6区 南側排水溝内	32.7	7.1	7.1	片面 墨書き	(梵字のキリーク: 阿弥陀の種子)	近世ガ	遺物編Ⅱ 92-5 79-5
6 猊物 W-40		7区 SH70801底部	17.2		1.5	片面(裏) 焼者	公	奈良	遺物編Ⅰ 137-34 85-8
7 猊物 W-688		7区 復元径	18.6		1.4	片面(裏) 焼者	ち(または長カ)	平安	遺物編Ⅰ 135-21 88-9
8 猊物 W-776		7区 復元径	18.2		1	片面(裏) 焼者	(廿カ)	平安	遺物編Ⅰ 136-25 88-13
9 猊物 W-236		10区 19層	16.6		1.4	片面(裏) 焼者	[之カ]	平安	遺物編Ⅰ 138-45 90-5
10 曲物 W-86		1区 SR12001	11.6		1.1	片面(裏) 墨書き	(須賀のみ)	奈良 ~平安	遺物編Ⅰ 129-109 85-2
11 曲物 W-38		7区 SR70801底部	17.7			片面(裏) 焼者	後(または三十の略字カ)	平安	遺物編Ⅰ 120-2 78-1
12 曲物 W-590		9区 SR92501	13.2		0.8	片面(裏) 焼者	(欠損のため判読不能)	平安	遺物編Ⅰ 129-94 84-10
13 曲物 W-323		10区 19層	18.7 復元径 19	7.4		片面(裏) 焼者	(欠損のため判読不能)	平安	遺物編Ⅱ 111-5 96-5
14 灰釉鏡 O-53様式 P-514		1区 17c層				底部裏 墨書き	(前カ)	平安	遺物編Ⅰ 3-60 1-10
15 灰釉鏡 P-119		7区 7層	14.2	5.4	4.1	底部裏 墨書き	××(判読不能)	平安	遺物編Ⅰ 38-69
16 灰釉鏡 P-83		7区 南側排水溝内				底部裏 墨書き	×(判読不能)	平安	遺物編Ⅰ 38-80 16-13
17 灰釉鏡 P-84		7区 南側排水溝内				口縁部 墨書き	×(判読不能)	平安	遺物編Ⅰ 38-79
18 灰釉鏡 E-90様式 F-290		9区 SH92501	12.7	5.7	3.1	器底側面 墨書き	万茂	平安	遺物編Ⅰ 46-13 21-8
19 灰釉鏡 F-190		9区 22b層	14.3	6.6	4.8	底部裏 墨書き	百	平安ガ ~中世	遺物編Ⅰ 46-45

第21表 文字資料一覧表



第16図 文字資料文字部分集成図

2 墨書土器

14は1区17c層から出土した灰釉碗で折戸53号窯式の段階のものと考えられる。文字は底部裏に「前」の略字と思われる文字が書かれている。

15は7区7層より出土した墨書土器である。折戸53号窯式の段階の灰釉碗である。文字は胴部外面に二文字書かれていると推定されるが、釉により判読できなくなっている。黒施釉前墨書

書は施釉前に書かれたものと考えられる。上の文字は「万」か。

16は7区の南側排水溝より出土した灰釉碗で、文字は底部裏に墨書されているが、欠損のために判読できない。「月」または「日」か。

17も7区の南側排水溝より出土した灰釉碗である。胴部の口縁部に近い部分に墨書されているが、欠損により判読できない。出土位置が近接し、胎土や厚さが似ていることから、16と同一個体と推定される。

18は9区の自然流路SR92501の覆土最上部より出土した。ほぼ完形の灰釉小碗で黒窓90 K-90窯式号窯式の段階のものである。文字は背面胴部にあり、「万□（茂カ）」と読める。

19は9区の22b層から出土した灰釉碗で、高台は粘土紐を貼りつけて作る。不明瞭であるが、底裏に「百」と読める墨書がある。

3 その他の文字資料

6は7区の流路SR70801の覆土下部より出土した。挽物の盤の外底面に「公」と読める焼書がある。

挽物に焼書

7は7区の流路SR70801より出土した。挽物の盤の内底面に二筆で書かれた記号状の焼書があり、文字として解読しがたいが、「ち」あるいは「長」とも考えられる。

8は9区の自然流路SR92501の覆土下部より出土した。底部外面に焼書で「山」または「二」の記号が書かれている。

9は10区19層より出土した。挽物の盤の外底面に一筆で蛇行した線書きの焼書がある。記号か文字かは不明だが、文字とするならば「之」であろうか。

10は1区の20層より出土した。曲物の底板の底部外面に焼書痕跡があるが、文字は判読できない。

11は7区の流路SR70801の覆土下部より出土した。曲物の底板の表面に焼書されており、「せ」または「卅」、あるいは「三十」の記号とも読める。

曲物の底板

12は9区の自然流路SR92501の覆土下部より出土した。曲物の底板で縁辺部に3ヶ所の目釘穴が残っている。焼書は上面にあるが中央部を欠損しており、文字が判読できなくなっている。

13は10区19層より出土した曲物の底板である。底外面に焼書の痕跡があるが、欠損のため文字は不明である。

<参考文献>

「静岡の原像をさぐる！－昭和63年度埋蔵文化財発掘調査報告会－」 勅静岡県埋蔵文化財調査研究所 1989

「瀬名遺跡－昭和63年度静清バイパス（瀬名地区）埋蔵文化財発掘調査概報－」 勅静岡県埋蔵文化財調査研究所 1989

「昭和63年度の発掘調査」 勅静岡県埋蔵文化財調査研究所 1989

栗野克巳・守谷季治「瀬名遺跡最近発見の文字資料」『研究所報No25』 勅静岡県埋蔵文化財調査研究所 1990

第IV章 動物遺存体

1 貝類

海水産の貝 貝類は12点出土している。タニシやイシガイ等のように水田や河川に自然に生息するものと、海水産で何かの目的で搬入された物とに大別される。海水産ではバイガイ、ハイガイ、イタヤガイ、シジミは食用として、イボウミニナは畑の肥料として持ち込まれたことが考えられる。海水産のものはいずれも内湾の浅瀬や干潟などに生息する貝であり、海進期に海が内陸部まで入り込み、海水と淡水が混じった環境があった可能性もある。瀬名地区は比較的内陸部にあること、巴川に沿って海水が入り込んだとしても急流の長尾川周辺は淡水の環境であったと考えられ、海水が入り込んだ可能性は低いと思われる。このため海水産のものは近隣の海から運び込まれたと考えたほうが自然である。

2 獣骨

牛馬の使用 獣骨は多く出土しているが、古墳時代以降はほとんどが馬骨で、わずかに牛、鹿、猪が見られる。瀬名地区は近現代まで農耕・運搬に牛馬が使用されていたが、古墳時代以来、牛馬が一般的に使用されていたことがわかる。

1区は3点あり、中近世の水田と平安の包含層、奈良～平安の河川より出土した。いずれも馬骨である。

2／3区は3点あり、近現代の包含層より牛骨、中近世の層より馬骨、弥生中期の包含層より鹿骨が出土している。

水田の出土 5区は23点で、このうち19点が古墳中期から平安の水田から出土している。その中の17点が同じグリッドより接近して出土しており、同一馬の骨と推定される。また、1点が弥生中期～後期の河川より馬骨が出土している。

6区は近現代と中近世の包含層より4点が出土している。1点は牛または馬、3点は馬骨である。

7区は28点あり、このうち6点が平安の溝から出土した鹿骨で同一個体のものと考えられる。出土地点不明の2点も鹿であり、この一連のものとの関係すると推定される。また、17点が6世紀～7世紀の河川より出土しており、馬骨と牛骨、鹿骨である。馬の骨が多く、臼歯の摺り減りの度合いを見ると、若い馬と老齢馬のものがある。この河川からは小鞍が出土しており、農耕用の牛の存在が考えられる。

8区は2点あり、平安～中世の包含層より馬骨、弥生中期の包含層より焼けた猪骨が出土している。

9区は56点あり、このうち5点が中近世の河川より出土し、種類は鹿、馬、猪の骨など多種にわたる。46点が奈良～中世の河川から出土し、ほぼ馬または牛の骨である。また、1点が弥生中期の鶏骨である。

10区は6点出土し、近世の包含層より馬骨、古墳前期の水田より鹿骨が出土している。

第22表 潛名遺跡出土動物遺存体(貝類)一覧表

遺物番号	区	グリッド	層位	年代範囲	遺構	同定結果
1-181	3		28層	弥生中期後期	水田	貝 タニシ
6-003	6	E西方	砂疊層			貝 パイ貝 (海水底)
6-029	6	E4QN	16層	弥生後～古墳前		貝 一枚貝 シジミ
7-002	7		複数		SR701	貝 パイ貝 (海水底)
8-022	8	D61N	8層	平安・中世		貝 表皮 インガイ (淡水底) *
8-不明	8					貝 インガイ (淡水底) *
9-001	9	D76N	10～12層	中近世		貝 インガイ (淡水底)
9-090	9	E75S	25層	奈良・平安・中世	SKR2503	貝 ハイ貝 (海水底) 左殻
9-091	9	E76S	25層	奈良・平安・中世	SKR2503	貝 イタヤ貝 (海水底)
9-113	9	E75S	22～32層	奈良・平安・中世	SKR2502～93303	貝 イボウミニナ (海水底巻貝)
9-不明	9					貝 ヘナタリ貝 (貝巻) ・トリ貝 (一枚貝)

第23表 潜名遺跡出土動物遺存体(歯骨)一覧表

遺物番号	区	グリッド	層位	年代範囲	遺構	同定結果
1-003	1	D10	10層	平安	水田	歯骨 馬 右上腕骨
1-012	1	G8N	17層	平安		歯骨 馬 下顎骨
1-100	1	F9S	20層	奈良～平安	SR12601	歯骨 馬 切歯
2-001	2	D13	1層	近現代		歯骨 牛 下顎骨
2-005	2	E13	4層	中近世		歯骨 馬 右下顎・臼歯
2-043	2	E14N	19層	弥生中期		歯骨 馬 右上腕骨
5-001	5	G31N	13層	弥生中期～後期	SR51301	歯骨 馬 左上顎臼歯・中足骨々
5-002	5	H30S	8層	古墳中期～平安	水田	歯骨 馬 人頭骨
5-003	5	H30S	8層	古墳中期～平安	水田	歯骨 馬 または牛 大頭骨片*
5-004	5	H30S	8層	古墳中期～平安	水田	歯骨 馬 右下顎
5-005	5	H30S	8層	古墳中期～平安	水田	歯骨 馬 下顎切歯 (1.3左右)
5-006	5	H30S	8層	古墳中期～平安	水田	歯骨 馬 左右上顎臼歯 (7～8才)
5-007	5	H30S	8層	古墳中期～平安	水田	歯骨 馬 左上顎臼歯 (7～8才)
5-008	5	H30S	8層	古墳中期～平安	水田	歯骨 馬 在上部臼歯 (7～8才)
5-009	5	H30S	8層	古墳中期～平安	水田	歯骨 馬 または牛 牙片
5-010	5	H30S	8層	古墳中期～平安	水田	歯骨 馬 下顎角
5-011	5	H30S	8層	古墳中期～平安	水田	歯骨 馬 下顎片
5-012	5	H30S	8層	古墳中期～平安	水田	歯骨 馬 左下顎 (左右切歯有)
5-013	5	H30S	8層	古墳中期～平安	水田	歯骨 馬 左下顎 (M2・3)
5-014	5	H30S	8層	古墳中期～平安	水田	歯骨 馬 左下歯根部
5-015	5	H30S	8層	古墳中期～平安	水田	歯骨 馬 切歯 (7～8才以上)・骨片
5-016	5	H30S	8層	古墳中期～平安	水田	歯骨 馬 左上顎臼歯 (M3・破片)
5-017	5	H30S	8層	古墳中期～平安	水田	歯骨 馬 または牛 牙片
5-018	5	H30S	8層	古墳中期～平安	水田	歯骨 馬 上顎臼歯 (P2)・右椎骨片 (輪椎)*
5-019	5	HII2S	8層	古墳中期～平安	水田	歯骨 牛 下顎臼歯
5-020	5	G33S	8層	古墳中期～平安	水田	歯骨 牛 下顎臼歯 (ホコ・若い馬)*
5-021	5	南トレンチ	12層下面部			歯骨 牛 前頭骨 (右角座部分)
5-022	5	G34	13a層	弥生中期～後期		歯骨 牛 左上腕骨遠位端
5-024	5		13層	弥生中期～後期	2号堆下	歯骨 牛 下顎臼歯 (M2)
6-001	6	C	3層	近現代		歯骨 牛 距骨 (左カ・やや小弱の馬)
6-002	6	E	3層	近現代		歯骨 牛 胸蓋背骨・馬 末節骨
6-004	6	C	4層	近現代		歯骨 牛 左右上腕骨・右膝骨
6-012	6		5層	中近世	水田	歯骨 馬 切歯
7-001	7	CS5	トレンチ			歯骨 馬 右下顎臼歯
7-011	7	CG2～53	6層	平安		歯骨 牛 白角片
7-012	7	C49	7層	平安	SD70701	歯骨 牛 右更生2点・馬 左上顎骨多數
7-022	7	C49N	7層	平安		歯骨 牛 または猪 鹿歯
7-023	7	C49N	7層	平安		歯骨 骨片 (側面不可)
7-024	7	C49N	7層	平安		歯骨 鹿 右肩甲骨・右橈骨・頭椎・胸椎
7-026	7	C19N	7層	平安		歯骨 鹿 下顎骨・四肢骨・腰椎・胸椎・跖角
7-032	7	E48N	7層	平安	SD70701	歯骨 馬 上顎臼歯 (若い馬)
7-033	7	C49	7層	平安		歯骨 鹿 上顎前臼歯 (P) 片
7-044	7	E49	8層	6C後～7C	SR70821	歯骨 馬 上顎臼歯
7-045	7	R49	8層	6C後～7C	SR70801	歯骨 馬 下顎臼歯カ
7-048	7	D19	8層	6C後～7C	SR70801	歯骨 馬 左上顎臼歯 (老齢馬)
7-049	7	D49	8層	6C後～7C	SR70801	歯骨 馬 切歯
7-055	7	C50	8層	6C後～7C	SR70801	歯骨 馬 左脛骨後面
7-062	7	D50N	8層	6C後～7C	SR70801	歯骨 馬 中足骨*
7-065	7	C19N	8層	6C後～7C	SR70801	歯骨 牛 中子骨飼跡部
7-066	7	C19N	8層	6C後～7C	SR70801	歯骨 馬 右上顎臼歯
7-069	7	C49	8層	6C後～7C	SR70801	歯骨 牛 右大腸骨
7-076	7	E49	8層	6C後～7C	SR70801	歯骨 馬 左下顎臼歯
7-080	7	E48N	8層	6C後～7C	SR70801	歯骨 馬 左下顎臼歯
7-082	7	D49N	8層	6C後～7C	SR70801	歯骨 馬 下顎臼歯 (左右不明)
7-089	7	E48	8層	6C後～7C	SR70801	歯骨 馬 左上顎臼歯 (若い馬)
7-095	7	C49N	8層	6C後～7C	SR70801	歯骨 馬カ 斯波赤部

遺物番号	区	グリッド	層位	年代縦	遺構	同定結果
7-096	7	E51N	6層	6C後-7C	SR70801	歯骨 鹿 腕骨
7-098	7	D50	8層	6C後-7C	SR70801	歯骨 馬 白角片（上下不明）
7-100	7	D50	6層	6C後-7C	SR70801	歯骨 馬 左上腕臼骨（P2）
7-115	7	南トレンチ				歯骨 鹿 基節骨
7-不明	7					歯骨 鹿 左肩甲骨・左中手骨・人頭骨・中足骨・肋骨
8-014	8	C61S	8層	平安・中世	水印	歯骨 馬 距骨
8-138	8	E63N	20層	発生中期		歯骨 牛 肩甲骨（焼けている）
9-003	9	E71N	16層	中近世	SR92005	歯骨 馬 距骨・脛片
9-004	9	D74S	19層	中近世	SR92003	歯骨 馬 横骨（右）
9-007	9	D70S	16層	中近世	SR92005	歯骨 鹿 左上腕骨骨体部
9-012	9	D75S	19層	中近世	SR92003	歯骨 馬 基節骨
9-070	9	D75S	19層	中近世	SR92001	歯骨 馬 または牛 上腕片
9-073	9	不明	不明			歯骨 馬 左上腕臼骨（M3）
9-076	9	D75N	20層	奈良・平安・中世	SR92001	歯骨 牛 右上腕骨
9-081	9	E76N	20層	奈良・平安・中世	SR92001	歯骨 牛 または馬 劲骨片
9-084	9	F71S	25層	奈良・平安・中世	SR92501	歯骨 牛 または猿 頭骨近位部破片
9-087	9	D76N	20層	奈良・平安・中世	SR92001	歯骨 牛 左下顎臼齒（7-8才以下）
9-091	9	E76S	25層	奈良・平安・中世	SR92503	歯骨 骨片 多数
9-105	9	C74N	22層	奈良・平安・中世	杭列1	歯骨 馬 切歯
9-128	9	E71N	25層	奈良・平安・中世	SR92501	歯骨 牛 または猿 犬歯
9-131	9	E71N	25層	奈良・平安・中世	SR92501	歯骨 鹿 地骨近位端
9-142	9	E71N	25層	奈良・平安・中世	SR92501	歯骨 牛 または馬 腱骨（胫骨または大脚骨）
9-143	9	E71N	25層	奈良・平安・中世	SR92501	歯骨 馬 中足骨骨体部・近位端
9-144	9	E71S	25層	奈良・平安・中世	SR92501	歯骨 鹿 左上腕臼骨（若い馬）
9-145	9	E71S	25層	奈良・平安・中世	SR92501	歯骨 牛 または馬 骨片
9-146	9	E71S	25層	奈良・平安・中世	SR92501	歯骨 馬 右上腕臼曲
9-147	9	E71N	25層	奈良・平安・中世	SR92501	歯骨 馬 中手骨
9-148	9	E71S	25層	奈良・平安・中世	SR92501	歯骨 馬 切歯
9-149	9	E71S	25層	奈良・平安・中世	SR92501	歯骨 骨片
9-151	9	E71N	25層	奈良・平安・中世	SR92501	歯骨 骨片
9-152	9	E71N	25層	奈良・平安・中世	SR92501	歯骨 骨片
9-153	9	E71N	25層	奈良・平安・中世	SR92501	歯骨 骨片
9-154	9	E71S	25層	奈良・平安・中世	SR92501	歯骨 骨片
9-194	9	E71N	25層	奈良・平安・中世	SR92501	歯骨 牛 切歯曲
9-195	9	E71	25層	奈良・平安・中世	SR92501	歯骨 骨片
9-196	9	E71N	25層	奈良・平安・中世	SR92501	歯骨 骨片
9-197	9	E71N	25層	奈良・平安・中世	SR92501	歯骨 牛 切歯
9-198	9	E71N	25層	奈良・平安・中世	SR92501	歯骨 馬 上顎臼齒（左）
9-200	9	E71S	25層	奈良・平安・中世	SR92501	歯骨 骨片
9-201	9	C71N	25層	奈良・平安・中世	SR92501	歯骨 骨片
9-202	9	C71N	25層	奈良・平安・中世	SR92501	歯骨 馬 下顎臼齒
9-204	9	D71S	25層	奈良・平安・中世	SR92501	歯骨 馬 駄骨（無骨）
9-205	9	D71S	25層	奈良・平安・中世	SR92501	歯骨 牛 または馬 駄骨
9-206	9	D71S	25層	奈良・平安・中世	SR92501	歯骨 牛 または馬 駄骨
9-207	9	E71N	25層	奈良・平安・中世	SR92501	歯骨 骨片
9-209	9	E71N	25層	奈良・平安・中世	SR92501	歯骨 骨片
9-220	9	E71N	25層	奈良・平安・中世	SR92501	歯骨 牛 骨片
9-230	9	C71N	33層	奈良・平安・中世	SR93301	歯骨 骨片
9-231	9	E71N	33層	奈良・平安・中世	SR93301	歯骨 馬 白歯片
9-232	9	E71N	33層	奈良・平安・中世	SR93301	歯骨 鹿 下顎臼齒片多數・牛 または馬 白歯片
9-235	9	E71N	33層	奈良・平安・中世	SR93301	歯骨 牛 または馬 上腕骨片
9-252	9	E71S	33層	奈良・平安・中世	SR93301	歯骨 馬 切歯（下顎）
9-257	9	E71S	33層	奈良・平安・中世	SR93301	歯骨 馬 下顎片
9-264	9	E71S	33層	奈良・平安・中世	SR93301	歯骨 馬 上顎臼齒（左右）
9-266	9	D70N	33層	奈良・平安・中世	SR93301	歯骨 牛 犀骨遠位端
9-269	9	C71N	33層	奈良・平安・中世	SR93301	歯骨 牛 尺骨・橈骨骨体部・肩甲骨
9-270	9	C71N	33層	奈良・平安・中世	SR93301	歯骨 牛 または馬 牙齒室部・大頭骨
9-280	9	E71S	33層	奈良・平安・中世	SR93301	歯骨 馬 四頭骨
9-287	9	D72N	40層	発生中期	SR92004	歯骨 鹿 左尺骨（若鳥）
9-314	9	不明	20層	奈良・平安・中世	SR92004	歯骨 骨片
9-329	9	D77	不明	不明	SR92004	歯骨 牛 または馬 骨片
9-不明	9	不明	不明	不明	SR92004	歯骨 馬 左上顎臼齒（老齢場）
10-054	10	F80S	5層	近世		歯骨 牛 または馬 上腕骨近位端
10-055	10	E83N	5層	近世		歯骨 馬 左中手骨
10-056	10	E83S	14b層	近世		歯骨 牛 右腕骨・右中手骨・基節骨
10-064	10	K83N	31層	古墳崩壊	SR92004	歯骨 鹿 左鳥舟
10-069	10	E83S	31層	古墳崩壊	SR92004	歯骨 鹿 左各泳位端々
10-不明	10					歯 下頸骨（左右）・下裏切歯

3 人骨

人骨は平安～中世と中近世の堆積層・河川内出土と、弥生中期後葉の方形周溝墓群の出土とに大別される。

方形周溝墓以外の出土では14点あり、ほとんどが中近世のものである。4点は洪水による堆積の層中、9点が中近世の河川より出土している。中近世の河川出土の人骨の中には火葬骨が含まれており、火葬と土葬が並行していたことがわかる。1点は出土層位不明であるが、火葬骨であるため中近世の層の出土であった可能性が高い。洪水の堆積や河川内という出土状況は、洪水や河川の浸食によって流れこんだと考えられ、瀬名遺跡よりも上流域に墓域があったと推定される。実際に近世から続く村の中心地は瀬名遺跡より1.5kmほど上流域にあり、墓域もこの辺にあったと推定される。

方形周溝墓は1区で1基(木棺墓と報告されている)、7区で14基、8区で3基、9区で2基、合計20基が確認されている。このうち、主体部が確認されたものが、1区の1基、7区で5基、8区で2基、9区で2基である。また、8区1号墓と9区の2号墓には主体部が2箇所存在したことが確認されている。1区の木棺墓、7区の5号墓・7号墓・12号墓・14号墓、8区の1号墓第1主体部・1号墓第2主体部・2号墓、9区の1号墓・2号墓第1主体部には人骨が残存していた。

9区の中近世の河川出土の頭骨(遺物番号9-074)については本章第4節に、方形周溝墓出土の人骨については遺物編Ⅰに山口敏氏の詳細な分析結果を収録しているので、参照されたい。

参考文献

小曾貞男「日本の貝」成美堂出版 1994

第24表 瀬名遺跡出土動物遺存体(人骨)一覧表

方形周溝墓以外の出土

遺物番号	区	グリッド	層位	年代範	遺構	同定結果
6-005	GIC37	5層	中近世		人骨	ヒト 頭頂骨
7-006	7F50N	4層	平安～中世		人骨	ヒト 白齒 (M1またはM2)
8-001	8D61N	5層	平安・中世		人骨	ヒト 頭頂骨
8-009	8D60S	8層	平安・中世	SX80801	人骨	ヒト 左大脛骨
9-003	9E76S	19層	中近世	SR92001	人骨	ヒト 4(火葬骨)
9-006	9D70S	16層	中近世	SR92005	人骨	ヒト 3(火葬骨)
9-027	9E76S	19層	中近世	SR92001	人骨	ヒト (火葬骨)
9-028	9E76S	19層	中近世	SR92001	人骨	ヒト 頭骨 (火葬骨)
9-058	9E76S	19層	中近世	SR92001	人骨	ヒト 後頭骨 (火葬骨)
9-059	9E76S	19層	中近世	SR92001	人骨	ヒト 後腰骨 (火葬骨)
9-060	9E76S	19層	中近世	SR92001	人骨	ヒト 腰骨 (火葬骨)
9-074	9E76S	19層	中近世	SR92001	人骨	ヒト 頭骨
9-075	9E76N	19層	中近世	SR92001	人骨	ヒト 大脛骨
10-不明	10-不明	不明	不明		人骨	ヒト 火葬骨

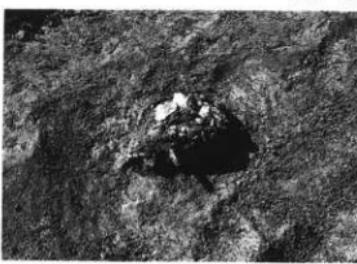
方形周溝墓出土

区	グリッド	層位	年代範	遺構	同定結果
1	F9N	28層下層	弥生中期	木棺墓	人骨 ヒト 24～30才 男性 身長164.5cm前後 横臥屈曲
7	D51S	12層	弥生中期	方形周溝墓5号墓	人骨 ヒト 20～21才 男性か 頸臥屈曲
7	C50N	12層	弥生中期	方形周溝墓7号墓	人骨 ヒト 4才
7	E52S	12層	弥生中期	方形周溝墓12号墓	人骨 ヒト 少年期 身長130cm前後 頸臥伸展
7	E47N	12層	弥生中期	方形周溝墓14号墓	人骨 ヒト 16～22才 女性か
8	D53N	18層	弥生中期	1号墓第1主体部	人骨 ヒト 16～20才 男性か いき歿
8	D63N	18層	弥生中期	1号墓第2主体部	人骨 ヒト
8	C63N	18層	弥生中期	方形周溝墓2号墓	人骨 ヒト 横臥屈曲
9	E73N	41層	弥生中期	方形周溝墓1号墓	人骨 ヒト
9	D74S	41層	弥生中期	2号墓第1主体部	人骨 ヒト 成人男性

4 濑名遺跡9区出土の中世頭蓋

山口 敏

出土状況 右側を下にした状態で下顎骨を伴わない頭蓋のみが出土し、保存状態不良のため下部の土層ごと取り上げられている。頭蓋の右半分は腐食している。頭蓋冠左側と左上顎骨の一部はある程度保存されているが、前頭鱗の左部から左頭頸骨の一部と左側頭鱗にかけて大きく破損している。残存部分もひび割れと歪みがあり、計測・観察は困難である。



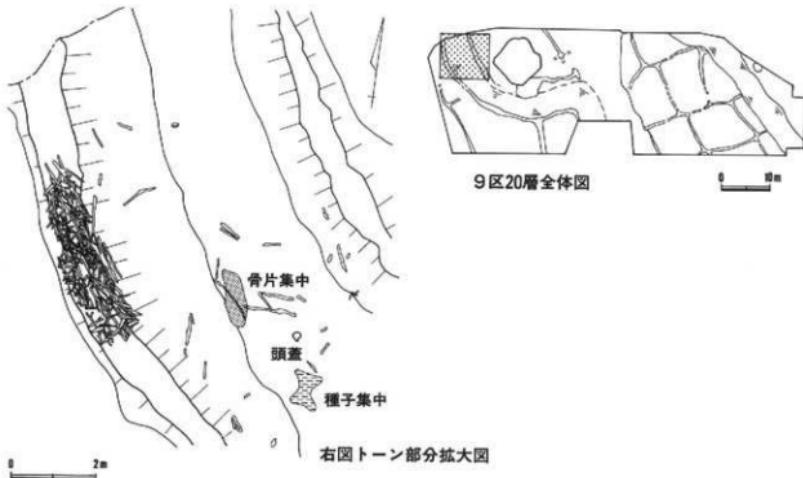
頭蓋の状況 頭蓋最大長の正確な計測はできないが、写真18 中世頭蓋出土状況

おおむね175mm前後と推定される。眉間、眉弓の発達は弱く、後頭骨上鱗の矢状湾曲が比較的強い。頭蓋冠の骨はかなり薄い。縫合の状態はよく観察できない。

歯の咬耗 歯は上顎の左の第1、第2乳臼歯と第1大臼歯が植立しており、未萌出の上顎犬歯と第1小白歯の歯冠も観察できる。その他に第2大臼歯と思われる未完成の歯冠が遊離状態で出土している。乳臼歯はいずれも第3度の咬耗を示すが、第1大臼歯の咬耗はほとんど進んでいない。

年齢の推定 以上の所見からこの個体の年齢は7歳から9歳の間であったと考えられる。

出土位置 9区の西北端から南端中央へ大きくS字状に湾曲する流路SR92001の河道底より出土した。流路両岸は水田で一部に堤が築かれている。人骨が出土したのはこの流路の北端のグリッドE76で、桃の種子・錢貨・土器片等が付近より出土している。



第19図 9区20層中世頭蓋出土位置図

第V章 補遺

遺物編Iで容器・農具を中心とした多くの木製品を報告したが、遺物量が膨大であったため、実測図が間に合わなかったもの、後の検討によって新たに認識されたものなどが数点あり、本書に補遺として報告する。

第1節 木製品

1 容器 (補遺1~14)

1~8は曲物の底板である。1・2・5は縁辺部をわずかに薄く削って側板をあて、樹皮で留める。いずれも2/3区の出土で、1は6層(平安)、2・5は8層(奈良~平安)の河川の周辺より出土している。4も小孔の部分に樹皮が巻き付けられていたと推定される。楕円形と推定されるが、復元すると長径40cmあまりのやや大型のものとなる2/3区9層(古墳中期)の河川周辺より出土した。8は縁辺部を薄く削っている部分が残存しており、樹皮で留めていたと推定される。1区22層(弥生後期~古墳前期)の畦畔より出土した。3は縁辺部を斜めに削り、ここに側板を組み合わせたと推定される。2/3区4層(中世包含層)より出土した。6・7は縁辺部に目立つ加工がなく、クレゾコと考えられる。

9~14は削物である。9は残存長91.4cmでかなり長大なものである。両端は緩く斜めに加工されており、平面は楕円形または六角形をしていたと考えられる。3区6層(平安)の畦畔内より出土しており、田舟であった可能性がある。10~14は平面長方形の削物と考えられる。10・12は片方の端に把手があり、ほぼ同形のものである。9区33層(奈良~中世)の河川内より出土している。11は片方の端部に把手と脚が一体化し、器壁は垂直に加工されている。また、もう一方は欠損しているが、斜めに器壁が作り出されていたと考えられる。9区33層(弥生後期~古墳前期)の河川内より出土した。13は破片のため、形状が不明である。2/3区10層(古墳中期)の河川にかかる堰内より出土した。14は両端の器壁を斜めに削っており、底面積が狭い。1区20層(奈良~平安)の河川の覆土上より出土した。

2 農具 (補遺15~33)

15は田舟である。端部の把手の部分とその周辺のみが残存する。1区22層(弥生後期~古墳前期)の水田の小畦畔より出土した。

16~21は田下駄である。いずれも長方形の平坦な板状出下駄で、足台を作り出しているものはない。16~18と20・21は板に孔を穿ち、19は板を切り欠いて足を固定する繩をかけるための加工をしている。16~20は弥生後期~古墳前期の畦畔または水田から、21は古墳中期の河川周辺より出土している。

22は編台である。残存長188.4cmで、板の片側に切り込みを入れ、縦糸(繩)をかけるよう作られている。切り込みの間隔は不規則であるが、一部2箇所を近接して作り1組と

している。9区35層（古墳中期）の木道状遺構の部材として転用されていた。

泥除け 23・25は泥除けである。いずれも破片ではあるが柄を通すための切り欠きを持ち、2枚の板を柄を挟み込むようにして縛り、一組とするものである。23・24は2箇所、25は1箇所繁縝するための孔を穿つ。23・24は5区8層（古墳中期～平安）、25は8区15層（古墳中期）より出土した。

泥除けか 26～28は出土地不明であるが、広葉樹の板片で周辺部をやや薄く仕上げる。材質が広葉樹ということから歎の一種とも考えられるが、横長の形で使用されたと推定され、泥除けであった可能性もある。

鍬 29～31は鍬である。29は二又鍬の刃であると考えられる。1区22層（弥生後期～古墳前期）の蛙畔より出土した。30は出土地不明である。中央に円孔を穿ち、両側に刃を作る諸手鍬と考えられる。31は全周欠損しているが着柄部分が残り、広鍬と考えられる。5区13層（弥生中期後葉～弥生後期初頭）の河川内より出土した。

鎌の柄 32は鎌の柄と考えられる。全長21.05cmで小型であるが、上部には鉄の刃を差し込んだと推定される切り込みが残る。柄の太さは1cm強で、実用に耐えられるか疑問であり、ミニチュアの鎌として、特殊な目的を持っていた可能性がある。1区20層（奈良～平安）の河川内から出土している。この河川からは斎串、人形木製品などの律令期の祭祀遺物が出土しており、祭祀用の模造品の1つであった可能性がある。

編 鍤 33は編鍤である。上部中央に縦糸を縛るために一辺1.5cmの小孔を穿つ。7区8層（6世紀後半～8世紀）の河川内より出土した。

3 祭祀（補遺34・35）

斎串 34は斎串と考えられる。側面を切り欠くタイプの斎串で、4箇所の切り欠きが認められる。9区33層（奈良～中世）の河川内より出土した。

刀形木製品 35は欠損しているが、刀形木製品と考えられる。9区の奈良～中世の遺物を伴う河川内より出土した。

4 その他（補遺42～49）

箸状木製品 42～49は箸状木製品である。42・44は箆状で、43・46・47・49・50は串状、48は扁平な板状である。43は2／3区5層（古墳中期包含層）、44・45・48は7区8層（6世紀後半～8世紀）の河川内、42は9区20層（奈良～中世）の水田内、46・47・49・50は2／3区4～5層（中世包含層）より出土した。

第2節 土製品

（補遺36～40）

土 鍤 36～39は土鍤である。いずれも管状・土師質で、36と37は径が約1.5cmの紡錘形、38と39は径が3.5cm前後の円筒形である。瀬名遺跡出土の土鍤は、古いものが径が大きく円筒形で、新しいものが径が小さく紡錘形となる傾向にあるが、県内の出土例からは大型のものと小型のものが併存しており、時代的な変化が手法や形状にあらわれないようである。36は9区19層（平安）の河川内SR92001内から、37は9区22層（平安）の洪水による侵食痕跡内から出土した。38は7区9層（古墳中期の包含層）下部、39は8区17a層（弥生後期～古墳

前期) の畦畔内より出土した。

40は環状の土製品で、使用目的は不明である。径が4.3cm、断面は長径1.8cm、短径1cm 環状土製品の楕円形である。重量26.1gで小型の土錐としての使用も考えられるが、表面はナテにより滑らかに仕上げるという丁寧な作りをしており、瀬名遺跡出土の土錐とは作りが異なるため、別の用途であった可能性が高い。2／3区9層(古墳中期)の調査区外より単独で発見されているため、出土状況については不明である。

出土状況

第3節 石製品

年代観

(補遺4)

滑石製の小玉が1点出土している。5区8層直下の古墳中期から平安の遺物を作り河川であるSR50801の下層残存部より出土した。SR50801は遺物が上層と下層に大別され、下層の遺物は土師器などを中心とした古墳中期の土器であり、小玉も同時期のものと考えられる。重直径4.5mmで中央に2mmの孔を穿つ。表面は研磨され、中央に稜が作り出され胴部を一周している。

<参考文献>

「瀬名遺跡III(遺物編Ⅰ)」 埼玉県埋蔵文化財調査研究所 1994

第VI章 まとめ・補遺

第1節 建築材について

瀬名遺跡出土の建築材は点数・種類が豊富であるが、建築遺構からの出土がほとんどなく、水田の畦畔や河川の堰の出土ということから二次加工を受け、その用途が明確でないものが多い。また、報告を第一としたために、他の遺跡出土の部材との比較・検討が十分にできなかった。建築材については出土例も少なく、今後建築遺構からの出土が増えることによって部材の用途・組合せ関係も明確となってゆくであろう。今後の研究によって建築材の詳細が明らかとなることを期待したい。今回の報告の整理作業をする中で、建築材を中心とした大型部材において、特徴的な点がいくつかあったので、今後の検討課題として以下にあげておくことにする。

瀬名遺跡出土の建築材の中には、火を受けて炭化したものが見られた。炭化材は鼠返しに多く見られ、1点のみ10区35層で他は全て2/3区12層の出土である。いずれも弥生後期～古墳前期のもので、柱状材の187(1区28層)、190(10区33層)も同じ時期である。この他の時期のものには、弥生中期後葉～弥生後期初頭の柱状材が1点(柱状材187)、古墳中期の垂木が1点(垂木14)、奈良～平安の扉が1点(扉4)、奈良～中世の板材が1点(板材238)、平安の柱状材が1点(板材238)がある。これは、木材を切り出し、加工することが大変な労力を要するために最後まで大事に使うという当時の人々の木材に対する考え方を示すとともに、他の木材に比べて強度の劣る焼失材を使用しなければならないほど畦畔を新設・補修することが急務であったという状況を示している。また、焼失材・大型材の運搬を考えると、瀬名遺跡の水田を耕作した人々の居住域が瀬名遺跡調査範囲から遠くないことを示している。

大型部材は水田の畦畔や河川の堰に転用される際に、二次加工を受け、截断されているものがほとんどである。原形を推定する際に弥生時代後期から古墳時代前期の建築部材についてはチョウナ痕が1つの鍵となる。即ち、柱材・横架材などの表面の加工は、最終的にチョウナを使用して表面を平滑に仕上げるのが一般的で、チョウナ痕の残る部分は元の表面であり、チョウナ痕の見られない部分は二次加工によって削り取った部分と考えられる。これによって類似する部材を接合した例が、柱状材の19・20である。19については1つの材を4分割して杭に二次加工したことが判明した。

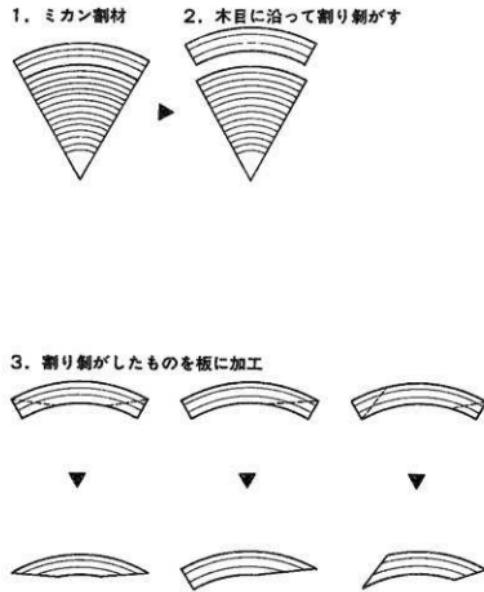
柱材は上記のように太いものは4分割するなどしている。このようにして原形を推定すると、柱材の形には断面方形のものと断面円形のものがある。幅が15cm前後で、いずれも芯を持たないため、元の原材料の木材は直径が50cm以上のものと推定される。建築材に使用される木材の樹種はほとんどがスギである。柱材の中には高床建物の柱材と思われるものがあり、上部に長いホゾ状の突起を作り出している材も見られる。柱状材の130・131・134がこれにあたると思われる。

板材は畦畔の横木や芯材に使用されることもあるが、二次加工を受けていないものも見られる。壁板材と推定されるものの中にはほぼ完形のもの(板材239・241・243など)もあり、両端と中央部が薄く削られ、柱に挟み込まれたことがわかる。これらは最大で2間分であり、3間をこえるものは見つかっていない。また、2間分といってもその間隔は遺物によって様々であり、一定ではない。

板材の作成方法は、丸太材をミカン割りにしたものを木目に沿って削り落とし、平滑にするために側縁部をチョウナで削るが一般的といわれている。瀬名遺跡では木目で削り落とした板材の側縁部の加工は、内側の側縁を2箇所削って断面台形に仕上げるものと、1箇所だけ削って断面平行四辺形に仕上げるものがある。また、外側と内側をそれぞれ削って薄くするものも見られる。薄く作った側縁部には小孔を穿ち、他の部材と重ねて繋続したと推定される。

加工に使用した工具は、表面の加工には弥生後期～古墳前期においてチョウナが多用されている。チョウナは幅5～6cmの大型のものと3～4cmのやや小型のものが見られ、やや小型のものが一般的である。切断については幅2.5cm～3.5cmの鋭利な斧痕が板材の二次加工に使用されており、鉄斧が使用されていることがわかる。また、矢板の先端などの斜めの切断には丸く窪むチョウナ痕も見られ、チョウナも切断に使用されていたことが伺える。穿孔する場合には鑿が使用されている。小孔には1cm前後の細い鑿が使用され、四方から鑿を打ち込んで穿孔した様子が伺える。やや大きめの穿孔には2cm～3cmの幅のやや広い鑿が使用されたと考えられる。

木材を二次加工などで割り取る際には、木目に沿って楔を打ち込み、割れ目を広げて割り取っていると考えられる。柱状材の89には削った面に楔が残存している。154には楔痕が削った面に残存し、117・205・206などは実際に打ち込んだものの割り跡がさすそのまま畦畔に使用したと考えられる。



第18図 板材の加工過程

第2節 濑名遺跡発掘調査報告書等の構成と内容

1. 濑名遺跡報告書等の構成

- 概報 濑名遺跡昭和61年度発掘調査概報－静清バイパス（瀬名地区）埋蔵文化財発掘調査－ 1987
瀬名遺跡－昭和62年度静清バイパス（瀬名地区）埋蔵文化財発掘調査概報－ 1988
瀬名遺跡－昭和63年度静清バイパス（瀬名地区）埋蔵文化財発掘調査概報－ 1989
瀬名遺跡－平成元年度・平成2年度静清バイパス（瀬名地区）埋蔵文化財発掘調査概報－ 1991
合計4冊
- 本報告 濑名遺跡I（遺構編I）3分冊「本文編」「図版編」「遺構図」平成3年度、1992年3月
瀬名遺跡II（遺構編II）1冊+付図（別袋）平成4年度、1993年3月
瀬名遺跡III（遺物編I）2分冊「本文編」「図版編」平成5年度、1994年3月
瀬名遺跡IV（自然科学編）1冊 平成6年度、1995年3月
瀬名遺跡V（遺物編II）2分冊「本文編」「図版編」平成7年度、1996年3月
合計9冊+付図

2. 各報告書の内容

瀬名遺跡昭和61年度発掘調査概報－静清バイパス（瀬名地区）埋蔵文化財発掘調査－

はじめに：調査に至る経過、調査方法、調査の経過、グリッド配置図

位置と環境

調査の概要：土層（5区1層～8層）

遺構（5区3層水田、5層水田、8層水田、8層直下SR09）

出土遺物（土器、木製品）

まとめ

瀬名遺跡－昭和62年度静清バイパス（瀬名地区）埋蔵文化財発掘調査概報－

はじめに・位置と環境

調査の概要：5区9層～14層

遺跡の概要：5区10層水田、12層水田、13層の遺構（流路・堰・掘立柱建物）、14層水田

まとめ：検出された遺構と遺物、遺跡の開始と存続期間

弥生中期の水田跡の検出、遺跡の広がり、水路と堰

瀬名遺跡－昭和63年度静清バイパス（瀬名地区）埋蔵文化財発掘調査概報－

はじめに

遺跡の位置と環境

調査の概要：調査の方法、調査の経過、調査工程表、グリッド配置図

遺跡の概要：基本土層（1区、2／3区、5区、6区、7区）

1区（10層水田、13層水田、16層水田、17b層水田、掘立柱建物、19層水田、自然流路、22層水田、28層水田、木棺墓、35層）

2／3区（3層水田、6層水田、8層水田）

6区（5層水田、11層水田）

7区

主要遺構一覧表、主要遺物一覧表（1区、2／3区、5区、6区、7区）

木簡（1区19層下面出土、「五百原」「西奈」の文字）

木棺（1区29層木棺墓）

普及活動

まとめ：弥生時代中期の水田を確認、木簡と祭祀具の出土

弥生時代末～古墳時代初頭の水田畠畔内部より大量の木製品出土、遺跡の東限

瀬名遺跡－平成元年度・平成2年度静清バイパス（瀬名地区）埋蔵文化財発掘調査概報－

はじめに：各区調査年度

位置と環境：静清バイパス埋蔵文化財発掘調査遺跡位置図

調査の概要：調査の方法、グリッド配置図、各区度挿図、調査の経過、平成元年～平成2年調査工程表、主要遺構一覧（全区）、主要遺物一覧（全区）

遺構の概要：2／3区（10層、12層水田、14層水田、16層水田、20層水田）

6区（13層水田、14層木道状遺構、16層水田、18層水田、19層水田、23a層）

7区（7層水田、9層木道状遺構、10層水田、12層方形周溝墓群）

8区（6層水田、10a層水田、10b層水田、13層水田、14a層水田、14b層水田、15・16層木道状遺構、17a層水田、17b層水田、18層方形周溝墓、20層、21層、22層）

9区（5層、10層水田、13層水田、20層水田、22層水田、25層、自然流路SR14、33層水田、35層木道状遺構、37層水田、38層水田、40層水田、41層方形周溝墓、42層）

10区（6層水田、9層水田、11層水路・ピット群、14層水田、16層水田、19層水田、23層水田、26層水田、30b層木道状遺構、31層水田、33層水田、35層、36層水田、39層水田、41層）

主な木製品：農具、祭祀遺物等

まとめ：何が発見されたのか（遺構・遺物）、水田とその変遷

条里型水田の確認と検討（地籍図等からみた表層条里の研究・静清平野の埋没条里について・発掘された埋没条里の検討）

瀬名遺跡I（遺構編I）「本文編」

調査に至る経過：調査区と担当者一覧

瀬名遺跡の発掘調査：予備調査、1～10区の調査

位置と環境：地理的環境、歴史的環境

調査の概要：調査の方法、調査の経過、各区工程表、主要遺構・遺物一覧

遺構整理について、グリッド配置図

各調査区で検出された遺構：基本層序、遺構の変遷、水田計測表、水田觀察表

瀬名遺跡II（遺構編II）

弥生時代中期の水田：中期中葉以前の水田関連遺構、中期後葉段階の水田

弥生時代後期後葉～古墳時代前期の水田跡：弥生時代中期後葉以降の水田

古墳時代前期段階の水田

古墳時代中期の水田

古墳時代後期～奈良時代の水田

平安時代～中世の水田：平安時代後期以降の水田、近世までの水田

水田跡の構造：水田の土壤、畔、区画、水利施設、水田面の足跡、祭祀の遺構

主要参考文献

瀬名遺跡の広報普及活動について

瀬名遺跡Ⅲ（遺物編）「本文編」

調査の方法：調査経過、遺物整理事業の基本方針、遺物整理作業の方法と内容

土器

木製品：木製品の分類、瀬名遺跡出土の木製品、一括出土として扱う木製品

農具、祭祀具、容器、食事具、土木材、

石器：打製石斧、砥石、その他の石製品

その他の出土遺物：金属製品、鉄貨

考察：瀬名遺跡出土の弥生式土器、瀬名遺跡の打製石斧について

静岡県における弥生時代・古墳時代の木製農耕具、田下駄の形態変遷と機能

遺物の自然科学的分析：

瀬名遺跡出土材の樹種について 山内 文

瀬名遺跡出土塗器資料の製作技法 賦元興寺文化財研究所 北野信彦

瀬名遺跡出土金属製品の分析結果 SMMリサーチ住友金属鉱山中央研究所

瀬名遺跡出土の弥生時代人骨 国立科学博物館人類研究部 山口 敏

遺物観察表

瀬名遺跡Ⅳ（自然科学編）

瀬名遺跡の概要：瀬名遺跡における自然科学的分析、位置と環境

静岡県瀬名遺跡におけるプランツオバール分析 株式会社古環境研究所

瀬名遺跡の縄文時代後・晩期以降の古環境変遷 パリノ・サーヴェイ株式会社

瀬名遺跡の遺構・遺物に残存する脂肪の分析 帯広畜産大学生物資源化学科 中野益男

株式会社ズコーチャ総合科学研究所

分析のまとめ

瀬名遺跡Ⅴ（遺物編）「本文編」（本書）

瀬名遺跡の概要：調査経過、位置と環境

木製品：建築部材、交通交易関連遺物、その他の木製品

文字資料

自然遺物：動物遺存体

瀬名遺跡9区出土の中世頃蓋 山口 敏

補遺：土製品、石製品、木製品

遺物観察表

分冊のまとめ

遺構番号変更表

特論 瀬名遺跡出土建築材の復原 文化庁 宮本長二郎

第3節 遺構番号の変更について（遺構編の補遺）

瀬名遺跡は調査区により調査年度・期間が異なり、担当者の入れ替わりも多かったため、遺構番号の表し方が年度・担当者により異なった。また、短期間で調査せざるを得なかった調査区では、遺構の状況により調査の進度に適した遺構番号を設定した。このため遺構整理作業にあたり、遺構番号の重複を避け、統一性をもった遺構番号とするよう変更を行ない報告書には新番号で表示した。主要遺構につい

て造構略号・調査区・層位・層位ごとの番号の順に数字を並べて造構を表すようにした。例えば5区8層の自然流路1の場合は、「SR50801」と表す。

この変更で、現地調査の年度に出された概報の造構番号と報告書の造構番号が異なるものがあるので、今後、資料を利用する際に確認できるよう以下の表にその対応関係をまとめておいた。変更されなかったものについては従来の造構番号を使用している。

1区

層位	造構番号(旧)	造構番号(新)
10層	SK101	SK11001
	SK102	SK11002
	SK103	SK11003
	SK104	SK11004
	SK105	SK11005
	SK106	SK11006
	SK107	SK11007
13層	SK114	SK11301
	SK113	SK11302
	SK112	SK11303
	SK111	SK11304
	SK110	SK11305
	SK109	SK11306
	SK115	SK11307
	SK108	SK11308
	SK116	SK11309
16層	SK117	SK11310
	SK118	SK11601
	SK119	SK11602
17b層	SD101	SD117501
17c層	SH101	SH11701
	SH102	SH11702
19層		変更なし
20層	SR102	SR12001
22層	SD102	SD12201
	SK120	SK12201
	SK121	SK12202
	SK122	SK12203
	SK123	SK12204
24層	SK124	SK12205
28層	SK125	SK12206
	SD103	SD12801
	SR103	SR12801
	SK126	SK12801
全層位	SK127	SK12802
	SR101	SR1-01

23区

層位	造構番号(旧)	造構番号(新)
3層	SK201	SK20301
	SK202	SK20302
	SK204	SK20303
	SK203	SK20304
	SK307	SK20305
	グリッドFC13S番号なし	SK20306
	SK210	SK20601
6層	SK211	SK20602
	SK213	SK20603
	SK212	SK20604
	SR205	SR20801
8層	SD201	SD20801
	グリッドFC13S番号なし	SK20801
	グリッドFC14S番号なし	SK20802
	グリッドFC14S番号なし	SK20803
9層	グリッドFE18N番号なし	SR20901
	SR205	SR20902
	グリッドFE19NF解部分	SR21001
10層	グリッドFE19N・E18N	SR21002
	D18N1号堰	1号堰
	E18S・D18N2号堰	2号堰
	H19N3号堰	3号堰
	D19S4号堰	4号堰
12層	グリッドF14S番号なし	SK21201
	グリッドE15S番号なし	SK21202
	グリッドF14S番号なし	SK21203
	グリッドD21N番号なし	SK21204
	グリッドD18S番号なし	SK21205
14層	グリッドC18S番号なし	SK21206
	SK21401	SK21401
	SK21402	SK21402
	SK21403	SK21403
	SK21404	SK21404
16層	SK21405	SK21405
	SK21406	SK21406
	SD21601	SD21601
	グリッドE16S番号なし	SK21601
20層	グリッドF14S番号なし	SK21602
	番号なし	SR22001
	番号なし	SR22002
	番号なし	SX22001
	番号なし	SX22002
	番号なし	SK22001
	番号なし	SK22002
21層	番号なし	SK22003
	グリッドE15S番号なし	SR22101
	グリッドE15S番号なし	SR22102
	グリッドD16N番号なし	SR22103
	グリッドD14N番号なし	SD22101
	グリッドE14N番号なし	SD22101の下鉤
	グリッドFC13N番号なし	SD22101の下鉤

湖名透構番号変更表

5区			6区		
層位	透構番号(旧)	透構番号(新)	層位	透構番号(旧)	透構番号(新)
3層	SR02・SR03	SR50301	5層	SK501	SK60501
	グリッドD30S番号なし	SK50301		SK502北東側	SK60502
5層	SR06	SR50501		SK502南西側	SK60503
	SR02	SR50502		SK503	SK60504
	グリッドG26番号なし	SK50501		SK504	SK60505
	グリッドG27番号なし	SK50502		SK505	SK60506
8層	SR07	洪水流痕跡		SK506	SK60507
	SR08	洪水流痕跡		SR601	SK60501
	SR09	SR50801の残存部		番号なし	SD60501
	グリッドD33N番号なし	SK50801	11層	番号なし	SK61101
10層	SR10			番号なし	SK61102
	グリッドF26番号なし			番号なし	SK61103
	グリッドD32番号なし			番号なし	SK61104
	グリッドE-E32番号なし			番号なし	SK61105
	SK501	SK51001		番号なし	SK61106
	SK502	SK51002		番号なし	SX61101
	SK503	SK51003	13層	番号なし	SK61301
	SK504	SK51004		番号なし	SK61302
	SK507	SK51005		番号なし	SK61303
	SK506	SK51006		番号なし	SK61304
	SK505	SK51007		番号なし	SK61305
	グリッドD32番号なし	SK51008		番号なし	SK61306
	グリッドE-F28番号なし	SK51009		番号なし	SK61307
12層	番号なし	大区南STI		番号なし	SD61301
	番号なし	大区南STII		番号なし	SX61301
	番号なし	大区南STIII	14層	番号なし	木道61301
	グリッドE-F28番号なし	SR51201		番号なし	木道61302
	グリッドE-E-F32番号なし	SD51201		番号なし	木道61303
	SK510	SK51201		番号なし	SX61301
	SK511	SK51202	15層	SK6-16-01	SK61601
	SK513	SK51203		SK6-16-02	SK61602
	SK512	SK51204		SK6-16-03	SK61603
13層	屢1	1号屢		SK6-16-04	SK61604
	屢2	2号屢		SK6-16-05	SK61605
	屢3	3号屢		SK6-16-06	SK61606
	屢4・屢5	4・5号屢		SK6-16-07	SK61607
	グリッドD32番号なし	導水路		SK6-16-08	SK61608
	グリッドE30・31番号なし	廻転		SK6-16-09	SK61609
	SR013	SR51301		SK6-16-10	SK61610
	SR014	SR51302		SK6-16-11	SK61611
	SR015	SR51303		SK6-16-12	SK61612
	グリッドE-F27番号なし	SH51301		SK6-16-13	SK61613
	グリッドE-F27番号なし	SH51302		SK6-16-14	SK61614
14層	グリッドE-F28番号なし	浸食痕跡		SK6-16-15	SK61615
				SK6-16-16	SK61616
				SK6-16-17	SK61617
				SK6-16-18	SK61618
				SK6-16-19	SK61619
				SK6-16-20	SK61620
				SR1601	SR61601
				番号なし	SR61602
18層	SK6-18-01	SK61801			
	SK6-18-02	SK61802			
	SK6-18-03	SK61803			
	番号なし	SK61804			
	番号なし	SK61805			
	番号なし	SK61806			
	番号なし	SK61807			
19層	番号なし	SK61901			
	番号なし	SK61902			
	番号なし	SK61903			
	番号なし	SX61901			
23a層	番号なし	SX23a01			

地名番号変更表

7区

層位	地名番号(旧)	地名番号(新)
7層	SD701	SD70701
	SK702	SK70701
	SK703	SK70702
8層	SR702	SR70801
	SD70801	変更なし
	SD70802	変更なし
	SD70803	変更なし
	番号なし	SK70801
	番号なし	SP70802
10a層	番号なし	SP70803
	番号なし	SK71001
	番号なし	SK71002
	番号なし	SK71003
	番号なし	SK71004
	番号なし	SK71005
12層	番号なし	SK71006
	番号なし	SK71007
	SR702残部	SR70801
	番号なし	SX71101
	SD7-11-01	SD71201
	SD7-11-02	SD71202

8区

層位	地名番号(旧)	地名番号(新)
6層	SK6-01~14	番号なし
	SX001~011	SX80601
	SK8-01~11	番号なし
10a層	SX012(201)	SX80801
	SR001	漫食販路1
	SR002	漫食販路2
	SK001(10a-01)	SK810a01
	SK10a-02~21	番号なし
	SK10b-01	SK810b01
13層	SK10b-02~25	番号なし
	SR003	S81301
	SK002(13-01)	SK81301
	SK13-02~52	番号なし
	SK14-01~58	番号なし
	SX013	SX81602
15~16層	SX014	SX81601
	SX015	木造状造構
	SK17a-10~11	SK817a01
	SK17a-02~04	SK817a02
	SK17a-01	SK817a03
	SK17a-08	SK817a04
17b層	SK17a-05~09	SK817a05
	SK17a-06	SK817a08
	SK17a-12~25	小町の区画の畔痕跡
	SX016	番号なし
	SX017	木製状木製品
	SX018	番号なし
18層	SK17b-08~09	SK817b01
	SK17b-01~02	SK817b02
	SK17b-03	SK817b03
	SK17b-04	SK817b05
	SK17b-05	SK817b03
	SK17b-06	SK817b04
20~21中間層	SK17b-07	SK817b03
	SD001(18-01)	SD81801
	SD002~003	SD82001
	S004	番号なし
	S005	SD82001
	SR004	SR82101
21層	SR005	漫食底座
	SD006~007	SD82101
	SX019	SR82101
	SD008~016	SD82201
	SX020	番号なし
	SX021	番号なし
22層		
24層		

通名造構番号変更表

9区

順位	造構番号(旧)	造構番号(新)
5番	SR001	SR90501
	SR002	SR90502
	SR003	SR90503
	SR004	SR90504
	SX001	埋構上坑
	SX002~005	埋構上坑群1
	SX006~008	埋構上坑群2
	SX009	駆状透壁1
	SX010	駆状透壁2
	SX011	駆状透壁3
	SX012	駆状透壁4
	SX013~14	駆群透壁
	SX015	透壁透構
13番	SK16~18~20	番号なし
	SK21	SK91303
	SK22	番号なし
	SK23	SK91302
	SK26	番号なし
	SK27	SK91301
	SE001	井戸透構
20番	SR006	SR92005
	SR008	SR92004
	SR010	SR92003
	SR011	SR92001
	SR012	SR92002
	SK045	SK92001
	SX015	SR92002
	SX016	SR92003
	SE001	井戸透構
	SX013	SR92201
22番	SX017	駆列3
	SX018	駆列1
	SX019	透食路
	SX020	流域立木群
	SX021	駆列2
	SE002	番号なし
	SR014	SR92501
25番	SR015	SR92502
	SR016	SR92503
	SX022	駆状駆列
	SR017	SR93303
	SR018	SR93302
33番	SR019	SR93301
	SK066	SK93301
	SK068	SR93302
	SK069	SK93303
	SR020	SR93701
37a番	SK70	番号なし
	SK71~72	SK93701
	SX023	SK93702
	SR021	SR93801
38番	SD001	SD93801
	SK97	SK93801
	SK98~99	SK93802
	SK100~101	SK93803
	SK102	SK93804
	SD003	岐町駅の透
	SK176	SK94001
41番	SK177	SK94002
	SR022	SR94101
42番	SP005	SD94203
	SR023	SR94201
	SR024	SR94202
	SD002	SD94201
	SD006	SD94202
	SD005	SD94203
	SD004	番号なし

10区

順位	造構番号(旧)	造構番号(新)
6番	SF0606~0608	埋構上坑群1
	SF0609~0610~0612	埋構上坑群2
	SD1101	埋構上坑
	SK番号	番号なし
	SD1101	番号なし
9番	SD1102	透食路
	SD1103~1104	SD101101
	SD1101	SD101101
	SR1401~1403	洪水浸食跡
14a番	SKW番号	番号なし
	SKW番号	番号なし
14b番	SKW番号	番号なし
	SR1601	透食路跡
19番	SK1643	駆別
	その他のSK番号	番号なし
	SKW番号	番号なし
23番	SX2301	SK102301
	SX2302~2330~2331	SK102302
	SX2303	SK102303
	SX2305	SK102304
	SX2308	SK102305
	SX2307	SK102306
	SX2304	SK102307
	SX2309	SK102308
	SD2301	SD102301
	SR2601	深い汽水浸食路
30b番	SKW番号	番号なし
	SX3001	SK1030b01
	SX3002	SK1030b02
31a番	SK3003	SK1030b03
	SK31a01	SK1031a01
	SK31a02	SK1031a02
31b番	SK31a03	SK1031a03
	SK31a04	SK1031a04
	SK31a05~07	SK1031a05
	SK31a06	番号なし
	SK31a08	SK1031a06
33番	駆状なし	駆状なし
	SR3301	洪水浸食跡
	SK3301	SK103301
	SK3302~3304	SK103302
	SK3303	SK103303
	SK3305~3306	SK103304
	SK3307	SK103305
	SK3308	SK103306
	SK3309	SK103307
	SK3310	SK103308
35番	SK3501	SK103501
	SK3502	SK103502
	SK3503	SK103503
	SK3504	SK103504
	SK3505	SK103505
	SK3506	SK103506
	SK3507	SK103507
	SR3601	透水浸食跡
36番	SD3601	SD103601
	SK3601	SK103601
	SK3602~3604	SK103602
	SK3603	SK103603
	SK3605	SK103604
	SK3606	SK103605
	SK3607	SK103606
	SK3608	SK103607
	SK3609	SK103608
	SR3901	上層の透による決食
39番	SR3902	番号なし
	SD3901	SD103901
	SK3901	SK103901
	SK3902	SK103902
	SK3903	SK103903

第VII章 特論

瀬名遺跡出土建築部材の復原

宮本長二郎

瀬名遺跡出土建築部材は梯子・鼠返し・扉・垂木・柱・桁・棟木・壁板・屋根板などの主要部材が揃っていること、及び時代的にはその多くが弥生時代後期後葉～古墳時代前期の過渡期に当る点で建築史上に重要な位置を占める資料である。本項ではこれらの建築部材のうち、鼠返し・棟木・桁・板材などの新知見を示すものについて、その復原的考察と歴史的な評価を加えることにしたい。

1. 縦柱型高床建築の軸部（鼠返し1～21）

鼠返し1は約3分の一を欠失 表1 鼠返盤出土材一覧

しているが、形状を復原すると
90×57.5×4.5cm、短辺の木口側
を円弧に仕上げる。中央に一辺
8.8cmの角枘穴があり、枘穴周辺
部に柱当り痕跡が上下面に残る。
上下面ともに火災による炭化を
受けて、柱当り部分のみ炭化し
ていない状況から、柱は倒壊せ
ずに立ったまま鎮火した様子が
窺える。

柱当り痕跡からこの建物の軸
部形式を復原すると、鼠返し上
面突起部に径21cmの角柱当り痕
跡、下面には径25cm以上と推定
される円柱当り痕跡がある。角
柱当りは鼠返盤に柱が密着した
状態で柱径の実寸法を示してい
るが、円柱は柱頭部の不陸や面取りなどから、柱当りが不整形であり、少なくとも柱径の約3倍とみて
27cm前後の直径を推定できる。

枘穴は角柱と円柱を枘で結合させるためのもので、鼠返盤は角柱と円柱の間に枘を通して挟み込む形
になる。この場合、枘は角柱から造り出し、円柱頭部の枘穴に挿入する。この角柱・円柱の仕口部分の
横力に耐えるために枘は太く長くする必要があり、円柱枘穴の深さは径の2倍（約18cm）以上、これに
鼠返盤厚（4.5cm）を加えて角柱枘の長さは25～30cm程と推定される。

角柱下面の胴付き部の当りのうち、壁付方向に壁受けの土居桁仕口痕跡が枘穴の両側に炭化状態で
残る。火災時に壁や土居桁が崩落して、角柱下端部の仕口穴が焼けた状態を示すもので、仕口幅は9cm、
深さは柱枘面までの6cmである。土居桁を角柱下端に大入れにしていたとすると、壁受け材としては幅
が狭いことから、土居桁幅を角柱と同寸法の21cmとして9cm幅の枘を造出し、成を仕口幅と同寸の9cm
とする五平材であったと考えられる。

材番号	時 期	孔 径 cm	孔形状
8	弥生中期後	9.5 × 4以上	
7	弥生後期前	(12.0) × 6.5	五平
10	"	(11.5) × -	
1	弥生後期～古墳前期	8.8 × 8.8	方形
2	"	(14.0) × 9以上	"
3	"	7.5 × 6以上	"
4	"	16.0 × 10以上	"
6	"	(11.0) × 9.5	"
9	"	- × 8.5	
11	"	(9.5) × -	
扉1	弥生後期～古墳前期	11.5 × 6.5	五平
5	古墳中期～平安前期	(10.5) × 11.5	方形

注) 括弧内数値は板の欠損が孔の隅から木の繊維方向に割れたものと
みた推定値。

以上のように鼠返盤の痕跡から円柱・角柱・土居桁の形状と仕口を復原すると、高床建築の腰まわり軸部は図1のようになる。

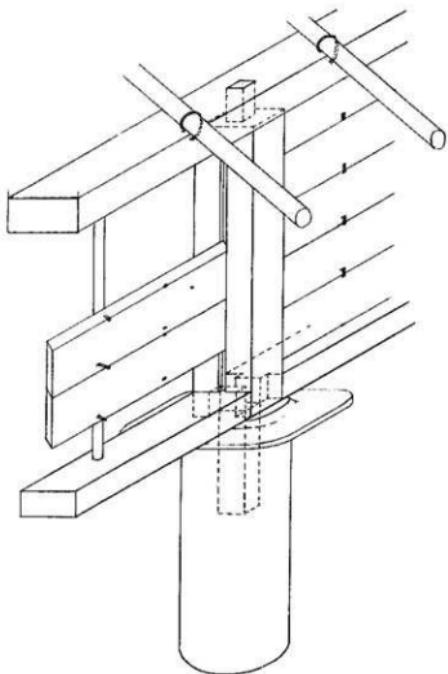


図1. 総柱型高床建築軸部構造模式図

呂・山木遺跡出土の柱材の直径は11~16cmの細い材であるが、瀬名遺跡では上部の角柱柄を受けるために円柱径を必要以上に大きくしなければならない点と、上記の床材支持方法が発掘遺構平面形式との対応関係を探る上で重要である。

つまり、瀬名遺跡復原形式を梁間1間型か総柱型のいずれを採用していたかの問題であるが、梁間1間型の柱は桁まで一本の柱とするのを原則とするのに対して、当形式は柱を床上部と床下部に分け、床下部円柱（束柱）を太くするなど、古墳時代以後の総柱型高床建築と共通する軸部形式をもっていることから、この形式は初期的な総柱型であると考えられる。

しかし、この鼠返材を総柱型高床建築（倉庫）の部材と断定するには多少の問題点がある。まず、総柱型の遺構は弥生時代後期には北九州地方や近畿地方に出現しているため、同時期に静岡県下にも総柱型高床建築が進出していた可能性もある。弥生時代後期後半から古墳時代前期に比定される鼠返盤が弥生時代にまで遡るか、古墳時代前期に降るかは瀬名遺跡や他の県下の遺跡での発掘遺構によって確認し

この鼠返盤の年代は弥生時代後期後葉から古墳時代前期である。高床建築には梁間1間型と総柱型があり、弥生時代から古墳時代前期にかけて梁間1間型が全国的に普及し、総柱型は弥生時代後期に北九州地方や畿内地方に出現して、古墳時代以後に普及する。したがって、瀬名遺跡出土の鼠返盤の時代は、梁間1間型から総柱型への過渡期にあり、その軸部形式には、それまでの弥生時代の梁間1間型高床建築にはみられない新しい要素を含んでいる。

同じ静岡県下の登呂・山木遺跡の出土建築材による高床建築の軸部形式は、床下部の円柱と床上部の角柱を一本で造出し、角柱を長方形の五平材としてこの角柱の頭部から鼠返盤、梁行台輪（床材受）、桁行台輪（壁板受）の順に落し込む形式で、造出柱式高床建築と称している。

この造出柱式と瀬名遺跡の復原建物を比較すると、後者では円柱と角柱が二材に分かれで角柱が正方形断面となり、梁行方向の台輪材が省略され、桁行方向の台輪は柱間毎の土居桁に変化する。したがって、床材は造出柱式では梁行台輪上に直接に板等の床材を桁行に敷くが、瀬名遺跡では土居桁間に根太を配って桁行に床材を敷くか、または土居桁に直接に梁行方向に床材を敷くか二通りの形式を考えられる。また、登

くか二通りの形式が考えられる。

なければならない。また、総柱型高床建物の上記のような復原は後世の軸部形式とは台輪を採用しない点で異なり、他の復原形式の可能性がないかどうか検討の余地はある。

次に、この形式を総柱型として、前後する時期の当遺跡出土鼠返材から、当遺跡における総柱型の出現時期を探ってみよう。

鼠返材は21点出土し、扉材1も扉材から鼠返材への転用材である。これらのうち中央孔の1辺以上を残す材は表1の12点である。孔が完存するもの1・扉1の2点で、後者は五平材との仕口孔をもつ。他に明らかに五平形を示す孔は7材で、7材と同時期の10材は孔の一辺を残すのみであるが、その長さは7材とほぼ等しく同形と考えられる。弥生時代後期後葉～古墳時代前期の1・4・6と古墳時代中期以後の5はいずれも正方形または正方形に近い方形孔である。

以上の例からみて、瀬名遺跡では弥生時代後期前葉までは五平孔であり、同期後葉以後に方形孔が出現したものとすることができる。したがって、総柱型高床建築の当地方への進出は九州・近畿地方とはほぼ同時期であった可能性を示している。

2. 板葺屋根（板材1～14・16・17）

16枚の板材に共通する形状は、①板材は全て板目材で木表側に手斧で整形した痕跡を残すものは7・13材のみで、全体に風化が認められる。②頭部中央の小孔は、1・4・5材が2個である以外は中央に1個である。③下端部の約40～50cm部分すなわち、全体の約1/4の表裏に腐蝕差が認められる。④中央部の木表側には直交する材の当り加工痕跡と、両側縁に2cm×1cm角の小孔がある。これら1対の小孔は直交材痕跡に対して右側が上、左側が下の位置関係にある。但し、13・14・16は逆の位置関係にあり、1・2・5・12は片側面欠損のため不明である。⑤材の上部約1/4の両側縁に2cm×1cm角の小孔があり、中央部の小孔とは異なって左右に並行する。⑥板材の表裏とともに左側縁部を斜に手斧で削り、側端部を尖らせる手斧痕を残すものが多い。但し、3・9・13・16材は右側縁部を削り、12の木表左側と、3の木表右側にはこの手斧削りはない。

これらの共通点をまとめると板材をほぼ4等分する位置に小孔、当り、風蝕がある。小孔はそれぞれの位置で他の部材と結縛するための仕口であり、下端の1/4部分はその風化の状況から屋根葺材としての葺足を示すものと考えられる。

頭部の小孔はその形状から横架材に板頭部を添え、孔に繩を通して横架材に直接結び付けたものである。上1/4部と中央部の小孔は、隣り合わせの板材同志を結ぶためのもので、板と板の側面を互いに斜めに段ぎ落とした刃刃剝とする。上部の小孔は板と板を直接に結び合わせ、中央部の小孔はその位置のずれから、棟を板に添えて、棟と共に摩架けに板と板を結び合わせる。この際に板の木表側の凸面を平にして棟と板を密着させる調整を行ったのが中央部加工痕である。

下端部の風蝕差を屋根板材としての葺足を示すものとすれば、風蝕差の認められないもの2例（3・4）、木表のみ風蝕差のあるもの4例（5・7・12）、表裏に風蝕差のあるもの8例（1・2・8・11・13・14）がある。このような風蝕差は上部3/4に板が重なることによって下部1/4に生じることから、屋根の最上段の葺材にはこのような風蝕差がなく、3・4材はこれに相当する。また、表・裏ともに風蝕を生じている例は、板葺屋根の場合に一般的にみられる補修技法で、ある程度風蝕が進むと裏返しを行ったためと考えられる。

板葺工法は、垂木上に木舞を葺足と同間隔（約45cm）に配り、軒先茅負から数えて4本目の木舞に最下段の屋根板頭部を結び付けて敷並べ、次に5本目の木舞に2段目の屋根板を1段目屋根板合せ目を覆って敷並べ、最上段屋根板の屋頭部合せ目に樋棟を置き、樋棟は棟木と結ぶ。

このようにして屋根を葺いた場合、板と板の合せ目は前記のように刃刃剝として結び合す必要はなく、

板と板は多少間隔が開いていたものと思われる。個々の屋根材は、風で吹上げられないよう屋根上に押えの石や材木を置くのが近世民家では一般的である。本例の場合は、最下段のみ押え木を下1/4の位置（9材に当り痕）に置いて木舞に結び付けて屋根板を固定し、2段目以上は屋根の内外に目地が通らず押木による木舞への固定は無理であるから、丸太や石を置いたものと考えられる（図2）。

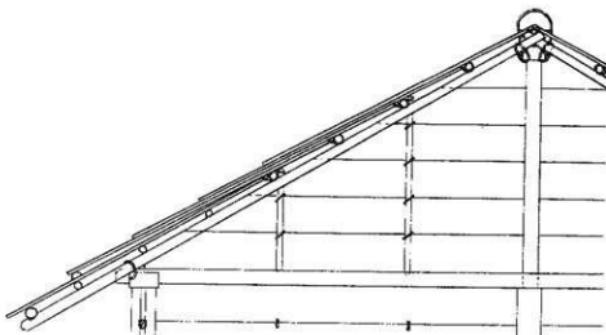


図2. 切妻造板葺屋根断面及切妻壁側立面図

したがって板材の辻刃剥と小孔（日途穴）は次項に記すように、壁板材としての仕口と考えられ、中央の加工痕は板壁の縦桟または横桟との仕合せ痕跡であるとの解釈が可能である。なお、これらの材と19・29・44・128・129は壁板から屋根板への転用材と考えられる。

その他の板材

弥生時代後期後葉から古墳時代前期の板目取り杉板材は、前記の材を含めて両側縁部に辻刃剥と日途穴仕口をもつて共通する。壁板材としての辻刃仕口は日地からの風や雨水の屋内への侵入を防ぎ、とくに横板壁の場合の雨水防止に有効である。辻刃仕口が片側のみの場合は壁の端部に位置することを示し、板の両木口に仕口がない場合は柱や梁に溝を穿って壁板を受ける（図1）。

18・20・22～27・38・40～42材は辻刃仕口に重ねて、必ずしも規則的ではないがほぼ材を3分する位置に日途穴があり、縦桟や横桟を結えたものと考えられる。22・23材には木口近くにも日途穴があり、間柱や縦桟に直接結えたものであろう。

37・46・55・85・148・180・247材は材の一端が約7寸4分勾配に切断され、同勾配の切妻屋根の妻側横板壁と想定される。但し縦桟との結合を示す日途穴位置が上下に揃わないので全て同一建物のものではない（図2）。

3. 棟持柱（柱状材7）

幅13.6cm、高9.6cmの断面台形で、一端は尖頭形に削り、他端は切損する。尖頭端から76cmの位置の両側面に繩通しのための桟穴があり、切損端部寄りにも側面を切損しているが同様の桟穴痕跡が残り、両桟穴間は74cmである。またこれらの桟穴の間には8.0×5.5cm角の枘穴があり、切損端部も同様の枘穴部で切損している状況を示し、枘穴を同様とすれば、両枘穴間は心々で58cmを測る。

以上のような形状から、この部材は独立棟持柱付き高床建築の棟木材と推定される。すなわち、切損端部の枘穴は独立棟持柱の柱頭部の枘を受け、桟穴間の枘穴は妻側中央の棟束枘穴とし、桟穴は垂木を

棟木と緊結するための繩通し穴で、尖頭部端は棟穴間隔とほぼ等しいことから、棟木を軒に転用するときに棟穴部分で切断したものと推定される。

垂木間隔を74cmとすると、草葺屋根の平行配置の垂木間隔としては広過ぎるが、妻側のけらば軒に転びをつけると、軒先の垂木間隔は狭くなるため問題はない。独立棟持柱に近接する垂木から妻側軒先までの間隔は切換して不明であるが、棟持柱からの出は20~30cm程と推定される。

この部材を棟木材と想定した理由は二つある。第1の理由は断面台形、と云うよりはむしろ三角形と云った方が適切である。断面三角形の棟木材の出土例は他に奈良県桜井市纏向遺跡（4世紀）にあるのみで、例は少ないが、古墳時代の家形埴輪の棟木端部には三角形断面を示すものが5例、最も多い半円形断面棟木の先端に三角文を施す例も4例あり、三角形断面の棟木の存在した可能性を示している（註1）。

第2の理由は柱頭枘穴の大きさである。この高床建物が梁間1間型か総柱型かはこの部材だけでは断定できないが、柄径がかなり太いことから、弥生時代に普及した梁間1間型高床建築の平納（註2）ではなく、前記の鼠返盤に依る復原の総柱型高床建築に伴なう枘穴であると考えられる。

この部材の年代は弥生時代後期後葉から古墳時代前期にかけてと推定され、纏向遺跡の棟木材（布留I式期）と同時期かやや遅るものであり、以後の古墳時代に普及する新形式としての位置付けが可能である。

4. 桁材（柱状材10・114・118・119・121~124・197・198）

表2は軒等に転用された 表2 桁出土材一覧

角材のうち、材の上面から側面に繩通しの目途穴をもつものの一覧表である。いずれも目途穴をもつ2面を残し、他は剖面とする例が多いが、No.10・197は両側面を残して幅が明らかであり、No.119は下面を残して成が明らかである。他は幅・成とも不明であるため括弧付きの現寸法で表わした。これらの括弧内数値をみると、幅は6cm台のグループと8cm前後のグループに分かれ、成は5~6cmに集中している。

これらの材は3面を残すものは2材に、2面を残すものはNo.19材のように4材に分割したものと考えられ、またこれらの実測寸法は最大径を採用していることを考慮すると、6cm台のグループの復原幅はNo.10・197材の同様の10cm前後に、8cm前後のグループは15~16cm程と推定される。各材の復原成についてもNo.119材と同様の10cm前後と推定される。

したがって、No.10・118・119・123・197材はいずれも径10cm前後の正方形断面の角材に、No.114・121・124・198材は幅15~16cm、成10cm程の断面長方形材に復原できる。

次に材端部の状況や目途穴から材の形状を復原すると、No.10材は上端欠損部は目途穴位置で切断され、

下端部は柱頭の柄を受ける枘穴位置で切断されたものと考えられ、枘穴は垂木間のはば中央にある。

No.114材は両端部切断され、2ヶ所に目途穴が残り、3ヶ所目の目途穴位置から上方は幅が狭くされて目途穴を残さないが、目途穴を約56cmの等間隔に配置していたことを窺わせる。

No.118材は2ヶ所の目途穴とほぼ同間隔に木釘が残る。No.119材では目途穴は1ヶ所のみであるが、46cm間隔に木釘痕跡が分割面に残り、118材と同様に目途穴は下端部方向に46cm前後の間隔に配置していたものと考えられる。

No.121材は2ヶ所に2個ずつの目途穴があり、古い方は46cm間隔、新しい方は上方に6~7cmづれて48cm間隔を保つ。古い目途穴は恐らく目割れのために側面を削り直し、位置をずらせて新たに目途穴を設けたものである。なお、北端部寄りには目途穴が無く、木釘痕跡も見当らないが、他の例から木釘は目途穴と違って材の中央寄りに設けていることから材の分割によって消失したものと思われる。

No.122材はちょうど材の分割面に釘穴痕跡を残し、目途穴までの間隔37cmは目途穴間隔43cmよりも狭い。No.123・124についても2ヶ所の目途穴と1ヶ所の木釘による構成が考えられるが、ともに木釘痕跡は分割によって消失したものと思われる。

No.197材は下端部が材と直角に整形され、目途穴からの長さは25cmである。2個の目途穴間隔は35.5cmで、上端部寄りの目途穴は消失している。残存長106.2cmであるから、桁材であるとすれば、柱枘穴位置で切断されたものと思われるが、材端部劣化のため枘穴痕跡を残さない。

No.198材は下端部に方形穴があり、2ヶ所に目途穴を残し、上端欠損部分寄りの目途穴は削られて残らない。

以上の材の形状から、角材の上面片側寄りから側面にかけて目途穴を設ける例と、材の中軸寄りの木釘と目途穴を併用する例がある。目途穴間隔および目途穴と木釘穴間隔は表記のように43~50cmに集中し、最小はNo.197の35.5cm、最大はNo.124の61.0cmである。61cm間隔はやや広いが、40~50cmの間隔は草葺屋根の垂木配置の間隔として妥当であり、桁材である可能性が高い。桁に目途穴を設けた例としては島根県松江市上小紋遺跡出土部材の断面円形材があり(註3)、奈良時代には、既に垂木には鉄釘を用いているが、垂木に配る屋根木舞は垂木上面に目途穴を穿って木舞を結ぶ、桁下端を目途穴を設けて土壁下地の横木舞を吊るための繩を通す形でその目途穴技法を受け継いでいる。

しかし、木釘は垂木を打ち通して桁に打ち付けることは不可能である。木釘の位置が材の中軸寄りであること、材は全て柱目の方形材で年輪を縱方向に使い、したがって木釘も垂直に打ち込まれていること、そして、目途穴間隔とほぼ等位置にあることから、木釘は材と材を打ち合わせるものではなく、桁材に深く打込むと同時に桁上面に突出させて垂木結縄のための繩掛りとしたものと考えられる。木材に孔を穿つことは材の強度を減じ、また、No.121のように目割れを生じることも多いため、2~3本置きに木釘を用いたものと思われる。

次に桁材としての断面形について検討しよう。上小紋遺跡は弥生時代末期で桁材は断面円形である。当遺跡では上小紋とほぼ同時期のNo.10・119・124材が角材であり、その他の古墳時代前期には方形材とともに幅と成の割合が3対2の横長の長方形がある。また、登呂遺跡では出土材は焼失のため残存しないが、五平材の桁によって復原され、同様の桁材は佐賀県唐津市東畠遺跡の繩文時代晚期(夜日期)の出土材がある。また、古墳時代家型埴輪では桁の表現は五平材が中期まで続か、同後期に圓形断面に移行する(註4)。

このように、桁の断面は圓形・方形・五平形の三種類が弥生時代末期には共存し、瀬名遺跡での方形断面の出現は新形式としての位置付けが可能であり、方形断面から長方形断面への移行は在来形式である五平形の影響と考えられる。五平桁は奈良時代以後に衰退するが、圓形断面の桁は古墳時代後期以後の主流となり、平安時代に圓形断面から方形断面に移行すると云う経過が現存建造物によって実証され

る。しかし、これに先立つ弥生時代末期において、既に円形断面と方形断面の桁材が共存するとすれば、少なくとも桁断面からみた建築文化は各形式とも古くから断続的に日本に移入されていたことみることができ、ルーツや移入後の地域的分布が今後の大きな課題として残される。

- 註1) 断面三角形棟木を示す家形埴輪は福岡県沖出古墳、京都府内田山2号墳、岡山県月の輪古墳、群馬県赤堀茶臼山古墳、和歌山县大谷山2号墳出土の5例。三角文は大阪府高廻り2号墳、群馬県白石福荷山古墳、赤堀茶臼山古墳(2例)の4例がある。
- 註2) 島根県松江市上小畠遺跡(弥生後期)出土桁材に平納穴があり、建築部材例は少ないが机など家具調度品に平柄の使用例が多い。
- 註3) 「北松江幹線新設工事松江連絡線新設工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書」島根県教育委員会、昭和62年3月
- 註4) 抽者「日本原始古代の住居建築」第8章第3節参照。中央公論美術出版、1986年

遺物觀察表

穂板・柱根無査表

穂板・柱根 1

番 号 No.	登録番号 区 出上位 出上通構	法量 (cm)	形 態	技 法	年代 年代表	実測箇所 写真箇所	木 取り	樹 種
1	W 49 1 区 17b 番 SH11701 SP11	最大長 最大幅 最大厚	13.1 7.9 2.9	平滑な板材を使用しており、平面形態は長方形を呈する。横GS-012と接する右側面の一部が欠損するが、残存状態は良好である。	肉側面、木口面は板材に対して垂直に切り落とされている。加工底は木口面で確認できるが不明瞭なものである。また表面には圧痕が残る。	平安～ 中世	1-1 1-1	追 査 目 スギ
2	W 50 1 区 17b 番 SH11701 SP11	最大長 最大幅 最大厚	13.7 12.9 2.1	平滑な板材を使用しており、平面形態は長方形に近いとも言えられる。1角が木口に沿って欠損するが残存状態は良好である。	両木口面は板材に対して垂直に切り落とされている。加工底は木口面で確認できるが不明瞭なものである。	平安～ 中世	1-2 1-2	板 スギ
3	W 48 1 区 17b 番 SH11701 SP13	最大長 最大幅 最大厚	14.7 11.2 4.3	側面の一方が著しく肥厚する板材を使用しており、平面形態は凹口面の中央を膨らませた弧を描く長方形を呈する。裏面両側とも中央部が側側面に比べて厚くなる。	両木口面の加工は極く垂直としただけのものとを考えられる。加工底は柔軟のため確認できない。表面には圧痕と考えられる凹凸が残る。	平安～ 中世	1-3 1-3	板 スギ
4	W 47 1 区 17b 番 SH11701 SP14	最大長 最大幅 最大厚	15.0 12.1 3.7	平滑な板材を使用しており、平面形態は長方形に近い長方形を呈する。右側面(凹面)がやや肥厚し、内側する。残存状態は良好である。	両側面、両木口面は板材に対して垂直に切り落とされている。加工底は柔軟のため確認できない。	平安～ 中世	1-4 1-4	板 スギ
5	W 46 1 区 17b 番 SH11701 SP14	最大長 最大幅 最大厚	16.4 12.3 4.5	端部を丸く加工し、穴を穿った厚板材を使用したもの。平面形態は長方形を呈し、角も1角を除いてほぼ直角である。厚みもほぼ一定である。残存状態は良好である。	彫曲する角を有する辺は、柱根間に木口面は裏面から斜めに力を入れて削る。表面は木口面で確認できない。内側壁も裏面から斜めに力を入れて穿つ。木口、側面とも対辺は板根時の割れである。加工底は木口面、内側壁で確認できるが、柔軟、柔しい。	平安～ 中世	1-5 1-5	板 スギ
6	W 52 1 区 17b 番 SH11701 SP16	最大長 最大幅 最大厚	18.7 9.5 4.3	端部を丸く加工し、穴を穿った厚板材を使用したもの。平面形態は長方形を呈し、角も1角を除いてほぼ直角である。側面一辺は穴によって一部欠損している。穴の周囲が裏面両端部で一部段差を作つて削ら薄くなる。	両側面を削ってから一方の木口面(凹面上方)は裏面から斜めに力をりだし、下方は板材を裏面に削り落とす。柱根間は木口面で方側が裏面から斜めに削る。木口、側面とも対辺は板根時の割れである。加工底は木口面で確認できるが、柔軟、柔しい。	平安～ 中世	1-6 1-6	板 スギ
7	W 45 1 区 17b 番 SH11701 SP21	最大長 最大幅 最大厚	18.3 9.3 5.1	長方形に近い平面形態をとる板材の上部(凹面上)の裏面を抉り、この抉りと対応する裏面両端部を削き切つて、パイナップルの突起を造り出した材を利用する。両側面は削出。下部は2角ともほぼ直角を呈する。板根部の横断面は裏面側が厚壁し内凹する。	両木口面は板材を垂直に切り落とす。突起部の表面、右側面(凹面上)は板根部と方側が裏面から削られ、加工底は木口面で確認できない。他の部分では加工底は柔軟のため確認できない。	平安～ 中世	1-7 1-7	板 スギ
8	W 44 1 区 17b 番 SH11701 SP22	最大長 最大幅 最大厚	15.3 8.5 3.8	平面形態は、木口部の中央部を膨らませた弧を描く長方形を呈する。板材の裏面は、立ち上がりの邊の邊ではさき角が鋭角になる三角形を呈する。	両木口面は板材に対しては垂直に切り落とされている。加工底は木口面で確認できない。立ち上がりの右側面には圧痕が見られる。	平安～ 中世	1-8 1-8	板 スギ
9	W 51 1 区 17b 番 SH11701 SP23	最大長 最大幅 最大厚	14.0 7.9 3.1	中央部がやや肥厚する板材を使用しており、平面形態は長方形を呈する。両木口面は下方(凹面上)が裏面になるほど横く切り落とされている。	両木口面は上方が板材を垂直に、下方は裏面から斜めに削り落とす。側面は左方は板材を垂直に切り落とす。右方は劣化大出。柱根W56と接した裏面を中心に広く圧痕がある。	平安～ 中世	1-9 1-9	板 スギ
10	W 40 1 区 17b 番 SH11701 SP17	最大長 最大幅	10.0 —	丸太材に地脚部の加工を施す。削面に加工は見られない。上半部は劣化による欠損が著しいものの、柱穴より深く埋設していた下子部の残存状態は良好である。	地脚部は斜かい合う2方向に削りつくり、端部を鋭角的に仕上げる。加工底は端部へ進む刀刃が削理に残り、先が木部に深く入り込むものもある。	平安～ 中世	1-10 1-10	芯 持 ち 材 ノコマキ
11	W 56 1 区 17b 番 SH11701 SP23	最大長 最大幅	18.3 20.2	L字型の平面形態を呈する柱を伴う丸太材の外側の付け部に直径10cmを切る地脚部の加工を施す。柱頭と柱の内側面に膨化痕が見られる。全体に乾燥によるひび割れが著しい。	地脚部は追跡から用材の中心に向かって削り落し、その面は中心部が丸みを持って削り落した形を呈する。加工底は部分的に残るが、不規則なものである。	平安～ 中世	1-11 1-11	芯 持 ち 材 クヌギ
12	W 55 1 区 17b 番 SH11702 SP35	最大長 最大幅	15.3 13.5	基本的に表面の付着した丸太材に地脚部の加工を施す。また横地脚は複数構築時の圧力を受け、部分的に膨化痕が見られる。全体的に劣化著しい。	地脚部は追跡から用材の中心に向かって削り落し、その面は中心部が丸みを持って削り落した形を呈する。加工底は部分的に残るが、不規則なものである。	平安～ 中世	1-12	芯 持 ち 材 コナラ

番号	登録番号 区 出土位置 出土遺構	法長 (cm)	形態	技法	年代記	古調園版 万葉園版	木取り	樹種
13	W 41 1 区 17b 男 SH11702 SP'36	最大長 19.7 底大径 10.2	丸太材に接地面の加工を施す。上半部約1/2が劣化欠損している。接地面は被物拘束時の圧力を受け、部分的に炭化現象が見られる。側面の加工は見られない。	接地面は向かい合う2方向に面をつくり、端部に角を持たせて仕上げる。加工側は辺縁から端部へ漸く刃幅が狭くなるのが確認できる。	平安～中世	1-13 1-13	芯持 ち材	コナラ
14	W 42 1 区 17b 男 SH11702 SP'37	最大長 73.2 底大径 14.2	丸太材に接地面の加工を施す。上半部約1/2が劣化欠損し、下半部の保存状態も良くない。下半部の端部全体、接地面約2/3、側面の一部に劣化現象が見られる。	接地面は辺縁から用材の中心に向かって削り出し、中心を削る様をもたせ仕上げる。加工部は部分的に残るが、不明瞭なものである。	平安～中世	1-14 1-14	芯持 ち材	コナラ
15	WK1488 8 区 24 屋 SP'062	最大長 16.8 底大径 10.8	丸太材に接地面の加工を施す。上部には擦出面の高さで劣化欠損しており、保存状態も良くない。(側面に付着する樹皮W1489を伴って出土。)	接地面は向かい合う2方向に面をつくり、中心を削る様をもたせ仕上げる。加工部は辺縁から端部へ漸く刃幅が狭くなるのが確認できる。	弥生中期	2-15 1-15	芯持 ち材	クヌギ
16	WK1489 8 区 24 屋 SP'064	最大長 12.2 底大径 9.9	丸太材に接地面の加工を施す。上部は擦出面の高さで側面の一部をもて劣化欠損しており、保存状態も良くない。接地面の中央部に炭化現象が見られる。(側面に付着する樹皮W1491を伴って出土。)	接地面は辺縁から用材の端部に向かって削り出し、端部を端材に仕上げたものと考えられる。加工部は辺縁から端部へ漸く刃幅が狭くなるのが確認できる。	弥生中期	2-16 1-16	芯持 ち材	コナラ
17	W 414 5 区 13 男 SH151301 柱穴	底大径 47.5 底大径 20.5	上方でV字に分かれれる丸太材を半周に加工した材に接地面の加工を施す。上部は擦出面の高さで劣化欠損している。接地面は被物拘束時の圧力を受けている。	接地面は辺縁から製材時の剥離面向かって斜めに削り落として仕上げる。加工側は部分的に埋延ができるが不明瞭なものである。	弥生中期 後半～ 弥生後期 初期	2-17 1-17	芯持 ち材	オニグルミ

梯子觀察表

梯子 1

番号	登録番号 区 出土位置 出土遺構	法長(cm) 小数 点 加 算 率	形態	技法	年代記	古調園版 万葉園版	木 取 り	樹 種
1	W 371 5 区 SH51301 1 号塗 13 男	16.3 36.4 10.2	表面、肉側面の一部を欠くものはほぼ完形。板材に足かけ部を4段造り出す。下端部、下端部も木口をほぼ直面に切り落とし、その平面形状は中央部がわずかに膨らむ構く。	足かけ部は、上面を水平に削りだし、板材を約4cmと削り下部をなだらかに削って盛り出している。表面全体に加工跡が見られ、削りはすべて上方から下方へ向かう。裏面に比べて、使用面である裏面の加工痕は不明瞭である。	弥生中期 後半～ 弥生後期 初期	3-1 2-1	板 目	スギ
2	W 863 2-3 区 SK21404 14 男	146.9 22.9 9.3	左側面から下端部の一部を欠くのはほぼ完形。板材に足かけ部を4段造り出す。下端部は中央部をもて左右に分離させて基部を呈する。下端部は中央部に方形の缺口を入れ、被物拘束部を造り出す。下端部の裏面の劣化が著しい。(造撃平塗面には掘削している左側面、左下端部も記載されている。取り上げ時に破壊された可能性大)	足かけ上部は、各段とも上端をほぼ水平に削り、板材を約4cmほど削して下部をなだらかに削って盛り出す。下端部は裏面に方形の缺口があり、足かけ下部の加工は裏面に明確に現れています。足かけ下部の加工は上部の木口附近では裏面にも加工痕を見ることができる。後端部の加工部も明確で、その表面は最も多く部分で三面形を呈し、木口へ行くほど裏面次第に三面形を呈するようになる。また足かけ部の加工の後に接地面部加工を行ったこともわかる。	弥生後期 初期	4-2 2-2	板 目	スギ
3	W 723 2-3 区 SK21402 14 男	68.3 7.6 2.7	2段残存。板材に足かけ部を盛り出したものと考される。板材に筋目が施されたもので上端部は風化のため、右側面をもて左右に分離して被物拘束部を造り出す。下端部はV字状の抉りをもて接地面を造り出す。	足かけ部は、上端を水平に削り、板材を約15mm残して下部をなだらかに削って盛り出す。加工痕は1段目の足かけ部と2段目の足かけ部で部分的に残るが不明瞭なものである。裏面はよく調整してある。	弥生後期 初期	4-3 2-3	板 目	スギ
4	W 258 5 区 SK51004 10 男	148.5 16.6 8.7	表面と左側面の一部を欠くものはほぼ完形。板材に足かけ部を4段造り出す。下端部の木口は裏面に切り落とし、下端部は中央にV字状の抉りをもて接地面を造り出す。	足かけ部は、1、2段目は上端をほぼ水平にし、3、4段目はやや傾斜的に削りだし、板材を約4-6cm削りして下部をやや角度をもとにし、裏面との境に複数つけて削り落しているようにも見える。裏面には加工痕は見られない。上端部の加工はすべて裏面が明らかのもので、裏面の加工痕は明確で、裏面の形状は方形を呈する。下端部の抉りの部分は裏面からのみ手をもめて入れて加工しており、加工部も明瞭に残る。両端面、裏面には調査痕等は見られない。	古墳前期	4-4 2-4	板 目	スギ
5	W 782 10 区 SK1031a03 31 男	61.3 20.0 5.4	下端部を含めて2段残存。板材に足かけ部を造り出す。上部は足かけ部の根元から削り出している。下端部は中央をV字状に削り出して被物拘束部を造り出す。全体的に劣化が著しく特に裏面については、足かけ部が2段とも痕跡的約4/5にわたって削り欠損しており、段差がかかるうして確認できる程度である。	下端部は何かに残るを側面部より上部をほぼ水平に削り、板材を約3-4cm削りて下部をなだらかに削って盛り出したものと考えられる。全体にわたって加工部は確認できない。	古墳前期	4-5 2-5	板 目	スギ

番号	登録番号 区 出工場 出工場番	法量(cm) 全长 幅 厚さ	形 態	技 法	年代版	実測図版 写真図版	木 取り 板 材
6	WS200 6 区 SK61803 18 番	17.1 22.6 7.6	上端部、内側面の一部を大きくはねて定形。板材に見かけ部を4段造り出す。上端部は小口から約6cm下方に約6cm×4cm幅の穴を穿つ(上端部の木口は直面で穴は欠損。遺漏平面図には記録されている)。下端部は木口を正面から斜めに削り落としていると考えられる。用材には木の筋が目立つ。各段の見かけ部を中心にな体的に劣化が見やすい。実際の往來は約5cm。	足かけ部は、各段とも上部をはねて水平に削った痕跡しか確認することができない。足かけ下部は板材からの剥離のみが確認できず、ゆるい相羽柄だけが確認できる。上端部の穴の内壁ははねてある。加工痕は、下端部付近で枝の後端部の仮跡が明瞭に残る他は確認できない。	赤生後期 後葉～ 古墳前期	5-6 3-6	板 スギ 目
7	W1801 9 区 SK53801 38 番	20.7 25.5 14.5	7段残存。根元を2~3cm残して粗く枝打ちしただけの丸太材に足かけ部を4段造り出す。平均段径とその間隔から上端部が削り出していると判断されるが、他の形態は不明である。側面削、裏面は劣化による大きさが著しい。下端部の丸太も削り出されたものである。筋の箇所で5段と、その他の段では、平凹、側面の各形削、大きさを大きく異なる。劣化が強めで表面くし、保存状態も良くない。実際の往來は13.3cm。	足かけ部は各段とも上部をはねて水平に削り出しているが、5~6段目は手元に行くほど外観化する。その他の段では筋が目立つ。6段目と、その他の段では、平凹、側面の各形削、大きさを大きく異なる。劣化が強めで表面くし、保存状態も良くない。	赤生後期 後葉～ 古墳前期	5-7 3-7	板 スギ 材
8	W2700 1 区 SK12202 22 番	21.2 15.6 13.0	6段残存する定形品。丸太材に足かけ部を4段造り出す。平均段径は3段目でやや右へ寄せるが、ほぼ直角に伸びている。上端部の木口は左側部を輪郭から削離または張り出し、下端部は中央で方舟の块を入れて筋跡を造り出す。下端部の木口が劣化しているのを除くと残存状態は極めて良好である。実際の往來は12.6cm。	足かけ部は、1~2段目はやや鋭角的に、その後の段では上部をはねて水平に削り出しているが、各段とも手元に行くほど外観化する。九人村式の特徴的な足かけ部は、下部をやや内側に寄せ、筋跡に残り出する。(武庫から見ると、1段目と2段目の足かけ部は横筋跡からやや下方へ偏曲するが、その後の段ではほぼ直角である。) 番面全体に輪郭から丁度直角に残る。上端部は木口側から上の方向へ、加工直角に残り、端面の断面は方舟形を呈する。下端部の块の部分は、木口側を垂直に削り出しているのが確認できるが、他の部分について劣化のため不明である。側面にはわずかに調整痕が見られるが、裏面は未加工である。	赤生後期 後葉～ 古墳前期	6-8 3-8	丸 太 材 イヌガヤ
9	W2488 6 区 SK61601 9 16 番	98.4 6.4 6.3	2段残存。板材に足かけ部を造り出したものとを考えられる。上端部の肥厚から3段目以降にあつたことが推測できる。板材に削き出されたもので、上端部風呂仕上川の欠損。右側面にフサフサの跡があるが、下端部は板端時の分割の際の剝離。下端部は左側面に次回の脚跡が見られるが、木口の裏面は不明である。(他の様子に比べて平均段径が最も多く、足かけ下部の大きさが大きい。)	足かけ部は、上部を水平に削り、板材を約20cm残して下部をさらに大きくながら削って造り出す。特に上端部が風呂仕上げで欠損する。その他の段ではやや不規則である。番面は部分的に調整痕が見られるが、裏面は未加工である。	赤生後期 後葉～ 古墳前期	6-9 3-9	板 スギ 目
10	W1372 1 区 SK12102 22 番	85.6 4.4 4.75	2段残存。板材に足かけ部を造り出したものと考えられる。板材に削き出されたもので、上端部風呂仕上川の欠損。右側面削。下端部は多く1等に加工している。表面、裏面とも無調査。	足かけ部は、上部ははねて水平に削ったものと考えられ、板材を約5~8cm削り残して下部をなだらかに削って造り出す。加工痕は確認できない。	赤生後期 後葉～ 古墳前期	6-10 3-10	板 スギ 目
11	WK424 5 区 SK51006 11 10 番	79.5 7.2 7.1	2段残存。板材に足かけ部を造り出す。板材に削き出されたもので、上端部は風呂仕上川の欠損。右側面は脚の際の削離。裏面は2段目の足かけ部が2次加工によって削離したため凹凸が著しい。下端部の加工は「次加工」のものである。	足かけ部は2段とも上部を水平に削り込むが、子前にいくほど外観化する。板材を約3~4cm削り残して下部をなだらかに削って造り出す。加工痕は2段目の足かけ部で上部で削離に残り、その他の段は不明である。但し、一次加工の加工痕は先が木部に深く入り込んだものが多く、その特徴は1段目と足かけ下部下端から下端部。裏面にまで及ぶ。	古墳前期	6-11 3-11	迫 板 スギ
12	W 957 1 区 SK12203 22 番	65.5 8.7 8.8	1段残存。板材に足かけ部を造り出す。板材に削き出されたもので、上端部は風呂仕上川の欠損。右側面は脚の際の削離。裏面は上端部の2段目の足かけ部が2次加工によって削離した。下端部は風呂仕上川の欠損。側面削は軸用時の分割の際の剝離である。	足かけ部は、上部を水平に削り、板材を約3cm削り残して下部をなだらかに削って作り出す。上部、下部とともに加工痕が明瞭に残る。裏面にも調整痕が見られる。実際の往來は48.5cm。	赤生後期 後葉～ 古墳前期	6-12 2-12	板 スギ 目
13	WK1150 10 区 SK10304 35 番	59.0 3.4 7.6	1段残存。板材に足かけ部を造り出す。板材に削き出されたもので、上端部は風呂仕上川の欠損。右側面は軸用時の分割の際の削離。裏面は上端部の2段目の足かけ部が2次加工によって削離した。下端部は風呂仕上川の欠損。側面削は軸用時の分割の際の剝離である。	足かけ部は、上部をやや鋭角的に、下部をなだらかに削って造り出す。上部、下部とともに加工痕が残る。上端部は直角である。下部には加工痕が部分的に見られる。裏面には調査痕が見られる。	赤生後期 後葉～ 古墳前期	6-13 2-13	板 スギ 目
14	W1310 2-3 区 SK21204 12 番	58.4 6.3 6.4	1段残存。板材に足かけ部を造り出す。板材に削き出されたもので、上端部は風呂仕上川の欠損。右側面は軸用時の分割の際の削離。裏面は上端部の2段目の足かけ部が2次加工によって削離した。裏面の足かけ下部の上方に底面化が見られる。	足かけ部は上部は水平に削ったものと思われる。上端部の欠損が著しいため、加工痕は検出できない。板材を約3cm削り残して足かけ部をなだらかに削り出す。下部には加工痕が見られる。	赤生後期 後葉～ 古墳前期	6-14 2-14	迫 板 スギ 目
15	W 996 2-3 区 SK21206 12 番	55.3 6.9 5.5	1段残存。板材に足かけ部を造り出す。板材に削き出されたもので、上端部は風呂仕上川の欠損。右側面は軸用時の分割の際の削離。裏面は上端部の2段目の足かけ部が2次加工によって削離した。裏面の足かけ部が2段以上あったことがわかる。裏面の側削も著しく、底面化が見られる。	足かけ部は、上部を水平に削り、板材を約4cm削り残して下部をなだらかに削って造り出す。足かけ部の上約1cmの部分に溝底に刃を入れると考えられる刃跡が見られる。上端部、下部には加工痕が見られる。下部には細かい加工痕が部分的に見られる。裏面には調査痕が見られる。	赤生後期 後葉～ 古墳前期	6-15 2-15	板 スギ 目

梯子 3

番号	登録番号 区 出土場所 出土層位	法cm) 全長 幅 厚さ	形 態	技 法	年代	実測図版 写真図版	木 取 り 樹 種
16	WK1558 10 区 SK103605 36 番	55.1 55 7.6 7.6 36 番	1段残存。板材に足かけ部を盛り出したとされる る。板材に軸用されたもので上端部は風化欠損。右側 面は板川筋の分岐の際の削除。下端部は右端に向方 の二次加工を施す。左側面に調整跡が見られることか ら、椅子材の左端部と右端部と推定される。表面の足かけ 部下部と下端部には風化跡が見られる。	足かけ部は、上部をやや傾斜的に下部をだらかに削 いて盛り出す。上部には摩滅しているか削 除を見ることができる。下端部の二次加工の軸 跡は明瞭に残る。足かけ下部、裏面は丁寧に調整し ている。	弥生後期 前葉	6-16 2-16	板 えぞ
17	W 249 2-3 区 SK21002 3 戰 10 番	148.8 9.4 8.2 8.2 10 番	4段残存。底面約10cmの比較的高い丸太材に足かけ部 を造り出す。「丸太」上端は1段目の足かけ上部の削 り込み部から劣化した凹部。下端部は右端を削りかた削 いて盛り上げて盛り出す。「段」部は左端を削 り出しして左端部を盛り出す。左端部は右端を削 り出しして右端部を盛り出している。右端部には左端部に作 られた溝を残す。全体的に風化が著しく、表面は風 化跡が残るが、全体が風化しているなど残存状況は良くない。実際 の径は47.5cm。	足かけ部は、各段とも上部を水平に削り出し。丸太 材を約4-5cmほど削って下部をなだらかに削つ て盛り立てる。足かけ上部の盛りきが丸太材の削 除し、その削除部は半円形を呈する。加工痕、調査 痕は全体にわたって確認できない。	古墳中期	7-17 3-17	丸 太 材 イリマキ
18	W 100 2-3 区 SR21001 10番下層	152.5 17.1 14.9 14.9 10番	3段残存。裏面を平滑に、両側面は原木の形を生きし ながら右の上端部を削除した丸太材に足かけ部を盛 り出す。下端部が左端の方へ盛り出す半円形を呈す る。上部は風化により少し欠損。下端部は木目を露 かす。右端に向方で削り落として後部をつくる。実際の 径は14.4cm。	足かけ部は上部をほぼ水平に削り。丸太材を約3 -6cm削除して下部をなだらかに削つて造り出 す。足かけ上部の削除部は丸太材の端の部分に達 し、その削除部は半円形を呈する。加工作は2段目の 足かけ下部より下方で裏面に現れる。特に右下段、足 かけ下部では内側面も含めて明確に残る。右下段 足かけ上部、下端部、裏面にも加工痕が不明瞭に残 る。	古墳中期	7-18 2-18	丸 太 材 えぞ
19	W 278 5 区 SK52103 12 番	117.0 27.2 3.9 3.9 12 番	残存状況が悪く、16片に削れています。縦子の段はいざ れも残しておらず、底面が3段残る。段は5cm間隔で 作られている。上端は欠損。	F端は直角的に切り落とす。縦子の下端部で あたったと考えられる段はいずれも欠損しており、 意図的に削られた可能性がある。上部も切り落と されている。裏面の加工は残存状況が悪いため不明 確。	弥生後期 前葉	7-19 4-19	板 木 キバ ヒ
20	W3175 6 区 SK61601 16 番	105.8 10.6 4.6 4.6 16 番	半分以上を欠いている。段状の加工が3段見られる が、いずれも変形が低く、机に加工したときに削られ たと考えられる。段は下段・中段が3cm、中段・上段 が22.5cmと不等で、本段は上段に上部にあたが削 られていると想われる。	心側面が直角的に切り落とす。縦子の右側面部分 を考える。段は右側面を削り落とすようだが、心側面から右側面 が鋭く、初めから縦子の下端部で加工されていた可能性がある。	弥生後期 後葉 古墳初期	7-20 4-20	板 えぞ ヒ
21	W2821 1 区 清水淀内 28 番	122.1 9.7 8.7 8.7 28 番	段が3段残存している。上から入られた刃物痕が残るた め、二次加工で段を切り落とすとしたと考えられ る。段の長さ約39cm前後と推定される。	F端は裏面より切削。下端も切削の可能性がある。 右側面は下より切り落とすようだが、心側面から右側面 が鋭く、左側面は削っている。厚端のため加工痕は不明。裏面は平 面でなく段の真にあたる部分が僅かに盛り上がり る。	弥生中期 後葉 古墳初期	8-21 4-21	板 えぞ ヒ
22	W2024 6 区 SK61601 16 番	86.3 17.0 4.9 4.9 16 番	表裏ともには平滑な板材。正面のみ上端、中央部、下 部を削っており、縦子の段を削り取ったものと思われ る。段の長さは推定31cm前後。	I端は両側面を削り、杭の加工をする。下端は二 次加工により切削されている。正面、裏面を削り落とす ようになったところを削除している。左右側面とも横で削っ ている。裏面は日付と加工が特になく木目で削った もの。	弥生後期 後葉 古墳初期	8-22 4-22	板 えぞ ヒ
23	WK1600 10 区 SK103602 35 番	76.0 52.2 5.1 5.1 35 番	正規小舟頭に段の削りが残存する。「I端と中央よりや や下に段の底跡が残り、今日で段を削り落している。 段の長さ約38.8cm。	上端は切削。下端は欠損。右側面は削られて いる。裏面は全面チャコラ痕あり。チョウナで調整 し、板状の縦子として作られている。	弥生後期 後葉 古墳初期	8-23 4-23	板 えぞ ヒ
24	WK2144 19 区 SK103503 35 番	58.9 6.0 4.2 4.2 35 番	上端と中央に段の跡跡が残る。段の長さ約26cmでやや 短めである。段は木目で削り落している。	上端は欠損。下端は正面から削り落している。左側 面は削っているが、右側面は平滑で加工面の可能 性がある。裏面は劣化のため加工しが不明瞭だが平 滑に加工されていると思われる。	弥生後期 後葉 古墳初期	8-24 4-24	板 えぞ ヒ
25	W1516 2-3 区 SK21403 14 番	42.8 6.6 2.7 2.7 14 番	中央部に段を削り落した痕跡が残る。他の段は切断さ れていたため段の大きさは不明であるが、27.2cmが残存 する。厚さが薄い部分で約16cmでかなり裏面を削り落 したためと思われる。	上端は欠損。下端は一次加工で切断されている。 ②底面は削っており、右側面は段の上の部分のか なり上にチョウナで削っている。左側の段の下の部 分に刃物痕が多数残存。裏面は木目で削られている。	弥生後期 後葉 古墳初期	8-25 4-25	板 えぞ ヒ
26	SK7-19-371 7 区 SK72003 10 番	54.5 11.0 3.6 3.6 10 番	中央よりやや下に段が残存する。他の段が残存してい ないため、段の大きさは不明である。厚さが薄い部分で 約16cmでなく、裏面を削り落としたと思われる。裏面は もっと薄い板材と推定される。	上端は欠損。下端は一次加工で切断されている。 ②底面は削っており、右側面は段の上の部分のか なり上にチョウナで削っている。左側の段の下の部 分に刃物痕が多数残存。裏面は木目で削られている。	弥生後期 後葉 古墳初期	8-26 4-26	板 えぞ ヒ

鳳返し観察表

観察し 1

番 号 り 方	登録番号 区 出止番号 出止邊境	法算(cm) 全長 幅 厚さ	形 態	技 法	年代別	支綱版 支綱版		樹 種
						木口面	裏面	
1	W1362 W1369 2-3 区 12 層 SK21204	56.3 62.8 4.8	木口面の一边を含め、2角を有する。中央部の貫穴がほぼ光存する。表面は板厚の中央部を残して周縁を削る。貫穴を穿つ。木口は「V」部を膨らませた形を描く。木口加工劣化の後、裏面とも貫穴の周辺の一部を除き著しく劣化している。この後、木口加工を下にして純然に木口側から風化が進展している。 (貫穴付近の表面損傷部は、表面は木口側の施縫部の4角を含めて全体、裏面は木口側の施縫部の4角を含めて全体、裏面は木口側の施縫部を丸く込んだ形状を有する。同時にW1343と同様は類似する。)	施縫部は貫穴の周縁を木口方向に約5cm、木口方向に約6cmほど方挫して裏面、木口面でなだらかに削り出す。木口面の加工については、カーブの端の部分は裏面を削るために手で彫造して切った跡としたと考えられるが、劣化のうちに削出たの手彫跡である。貫穴内壁は裏面表面より約1mmを入れておき、被削面は直線的な面で中央部で内側にする施縫部を形成する。裏面も貫穴の周縁の施縫部を削り、木口側を丸く仕上げる。加工作業は裏面側の施縫部面に木口方向の刃削がわざわざ残る。	弥生後期 後漢～ 古墳前期	9-1 5-1	板 木	(えぞ)
2	W1343 2-3 区 13 層 SK21204	57.6 41.4 5.2	中央部の施縫部、貫穴を含め、1角を有する。表面は板厚の中央部を残して周縁を削り出して施縫部を造り出す。さらに方形の貫穴を穿つ。木口は中央部を膨らませた貫穴を描く。全体的に著しく劣化しており、その範囲は裏面側の一部と貫穴内壁以外すべてに及ぶ。この後、木口加工上面を下にして枝状に利用したため、木口側面が風化が進展する。 (貫穴付近の表面損傷部は、裏面は貫穴側を削り、貫穴内壁では貫穴周辺をぐんぐんと円形を呈する。この形状から枝材を装着したまま風化したものとを考えられる。)	施縫部は風化が著しいため、その範囲は削離できないが、裏面、木口面までなだらかに削り出したたるものと考される。木口面の加工についても劣化のうちに削出された跡である。貫穴内壁は裏面側面から舟入れで枝条を直角に削り出す。加工痕は表面が削損曲に木口方向の刃削が厚唇に残る。	弥生後期 後漢～ 古墳前期	10-2 5-2	板 木	(えぞ)
3	W3897 6 区 16 層 SK81609	30.6 26.8 3.2	木口面の一辺を削出し、2角を有する。また、貫穴内壁のうち、側面2方、木口側1方が残存する。表面は貫穴の開口や貫穴を穿つもので裏面は複数でない。木口は貫穴側を膨らませた貫穴を描く。対応する木口は風化が進展している。 (貫穴の平面形は正方形と考られる。貫穴の大きさに比して他の資料より大きさも想い難いが無い) 全体的に劣化が著しい。	木口面は、板材を直角に切り落としたものと考えられる。貫穴内壁もやはり板材には直角な面を削り出している。加工痕は確認できない。	弥生後期 後漢～ 古墳前期	10-3 5-3	板 木	木
4	W2836 10 区 35 層 SK10593	31.4 90.4 4.4	側面1辺を削出し、2角を有する。また、貫穴の内壁のうち、側面2方、木口側2方が残存する。対応する側面は劣化が進展し、裏面は裏面側が中央部で木口方向のみ削る材料を使用している。木口は中央部を膨らませた貫穴を描いている。全体的に劣化が著しい。(当該出土の遺物の中でも最も人気のある資料である)	貫穴内壁は板材を直角に切り落す。木口面は板材を直角に切り落としているが、一部で斜面を削って裏面を丸く仕上げている部分もある。裏面・裏面ともに加工痕は確認できない。	弥生後期 後漢～ 古墳前期	10-4 5-4	板 木	(えぞ)
5	W 54 5 区 8 層	22.2 51.9 7.0	側面1辺を削出し、2角を有する。対応する側面は劣化が進展し、裏面は貫穴を削り出して施縫部を造り出し、さらに方形の貫穴を穿つ。木口は貫穴とともに中央部を膨らました弧を描く。側面側部の施縫部の貫穴から側面側部の施縫部の貫穴へかけて劣化が見られる。全体的に劣化が著しい。(木口表面のガタがかなりかなが、貫穴の大半に対して木口側面が膨らんで、木口側に厚く作られている点が注目すべき) 全体的に劣化が著しい。	施縫部は貫穴の周縁を方形に残して造り出されているが、これに伴う接合は繋げでない。木口面と裏面ともに裏面は板材を直角に削り落す。(側面)裏面は平行に仕上げている。全体にわたって加工底、調査板は確認できない。	古墳中期 ～平安	10-5 5-5	板 木	木
6	W 770 24 区 12 層 SK21206	20.0 87.1 7.4	中央部の施縫部、貫穴を含め、木口面の一方の角を削り出す。裏面は板厚の中央部を残して周縁を削り出して施縫部を造り出し、さらに木口側に貫穴を穿すと考えられる。裏面側の貫穴を穿つ。木口の平面形態は中央部を膨らませた貫穴を描くものと考えられる。全体的に劣化が進んでいる。	施縫部は貫穴の周縁を木口方向に約8cm～11cm、木口は方向に約6cm方向に残して木口までなだらかに削り出す。裏面木口は劣化が著しい部分であるが、板材を直角に削り落としたものと考えられる。貫穴内壁は裏面側面から力を入れて板材には直角な面を削り出す。裏面は平行に仕上げている。加工作業は施縫部の辺に木口方向の刃削が部分的に残る。	弥生後期 後漢～ 古墳前期	11-6 5-6	板 木	(えぞ)
7	W1500 2-3 区 14 層 SK21407	22.5 66.0 5.7	貫穴内壁のうち側面2方とその対面の施縫部、木口面の一方の角の一部が残存する。裏面は板厚の中央部を残して周縁を削り出して施縫部を造り出し、さらに木口側に貫穴を穿すと考えられる。裏面側の貫穴を穿つ。施縫部は側面側部の貫穴を削り落として木口側部の貫穴を穿つ。裏面側部は削削。平面形態も表面・木口面の劣化のため不明である。貫穴・施縫部を除くと劣化が著しく、全体的に木口方向に僅かに外離する。	施縫部は貫穴の周縁を木口方向に約9～10cm、木口方向に7cm以上方向に残して施縫部の削削をもつて木口まで削り出したものと考えられる。貫穴内壁は裏面側面から力を入れて板材には直角な面を削り出す。裏面は平行に仕上げている。加工作業は施縫部の辺に木口方向の刃削が部分的に残る。	糸作後期 前漢	11-7 5-7	板 木	(えぞ)
8	W1543 2-3 区 15 層 SK21407	15.6 86.6 3.7	下部中央に幅10cmの穴が残る。穴の周縁は幅20cmにわたって凹面が壁に盛り上がる。左側表面が風化している。復元推定約90cm。	上・下面は削り出している。左側面は大部分が欠損しているが上部が僅かに裏面に加工されている。右側面は二次加工により直角としている加工をされている。正面・裏面ともには全面チウナで加工する。	糸作初期 後漢	11-8 6-8	板 木	(えぞ)

黒道し2

番	登録番号 区 治上等別 出上通牌 サ	法量(cm) 全長 幅 厚さ	形 態	技 法	年代 級	実測回数 及直鏡版	本 取 り (ギ)	相 場
9	W1394 2-3 区 12 層 SK21204	85.2 11.1 3.6	上面中央に幅8cmの穴が残る。穴の周囲は幅2cmにわたって正面部が僅かに盛り上がる。正面一下面の一部が陥没化している。	上面・下面は削っている。右側面は僅かに斜めに切り落としている。左側面は欠損。正面・裏面とともに全面チャウナ加工。	出生後期 後業～ 古墳前期	11-9 6-9	板 (ギ)	
10	W 823 10 区 36 層 SK103602	13.4 37.2 5.1	1角を含めた木手側の貫穴内壁一辺とそれに伴う隆起部を削り、木手側の一端で残存する。周側面は削損。裏面は厚板の中央部を削り、周縁を削り落して、背面側を逆さまに削り落す。木口側の平面形状を復元させるために木口側を削り落す。木口側の平面形状を復元するため木面である。全体的に保存状態も良好である。	背面表面は貫穴の周囲を木口方向に約3cm厚厚板を削り落し、上面・下面を明確に残して刃を正確に削りて造り立てる(比較約2cm)。端から削り込みの角度約120°。木口側から裏面側の両の平面部は木口側を削り落す。裏面側は裏面側を削り落して削り落す。木口側は裏面側を削り落す。裏面側を削り落して削り落すために方を入れて切り落としている。貫穴内壁は、裏面側に対して裏面側を削り出している。加工部は裏面・裏面ともに明瞭な方板が残る。	出生後期 後業	11-10 6-10	板 (ギ)	
11	W 696 2 区 12 層 SK21204	45.0 9.8 3.6	大部分が欠損している。丸頭がまっすぐ切られており、好みのあることから、柱の通穴の一部と考えられる。右側面は斧状のJ型で加工されており、端部であったようである。	表裏とも炭化のため、チャウナによる加工は不明であるが、木手側が削り落しておらず、両側の削りの加工はいたと思われる。	出生後期 後業～ 古墳前期	11-11 6-11	直 板 (ギ)	
12	W1398 2-3 区 12 層 SK21204	14.6 42.2 4.4	大部分が欠損している。左側に向かって厚みがあり、柱の通穴があつたとを考えられる。右側は下端がやや丸味を帯びる、端部に左位置に一辺約1.5cmの方形孔がある。	表裏とも炭化が著しくチャウナ痕が不明であるが一部に認められるところからは全面がチャウナで加工されていたと考えられる。	出生後期 後業～ 古墳前期	12-12 6-9	板 (ギ)	
13	WK1373 WK1375 WK1381 8 区 17a 層 小型区画の 埋蔵痕跡	25.0 42.5 3.4	4分の1以上が欠損していると考えられる。柱の通穴は右側部は斜めに削り落して左側部は左側に向かって厚くなっている。3つに割られていた。	一部にチャウナ痕が残り、他の部分も不明瞭だがチャウナで加工した痕跡があり、裏面には全面にわたって加工されていたと考えられる。	出生後期 後業～ 古墳前期	12-13 6-13	板 (ギ)	
14	W1345 2-3 区 12 層 SK21204	23.7 55.3 3.8	ほぼ全面炭化しており、正面左側約17cmの表面を削っている。右側縁の裏側を幅15cmにわたって削り、僅かに薄くする。	上面は削り落している。下面は炭化し、焼焦している。右側面は右面・裏面から斧状のJ型で弧を描くように削りしている。左側面は欠損。正面・裏面とともに全面チャウナで表面を削る。	出生後期 後業～ 古墳前期	12-14 6-14	板 (ギ)	
15	W1366 2-3 区 12 層 SK21204	28.4 58.7 3.2	正面右側縁部の表面が炭化。最も左端部後に焼けている。裏面は全面炭化。左側は欠損している。	上面は平坦に加工され、右端が少し右肩面側にF字がよくに削られている。下面左側が約1cm欠損し、そこから丸孔が思われる幅約1cmの平面部が面があり、右側は削り落されている。右側面は弧を描くように削り落されている。正面・裏面とともにチャウナで表面を削る。	出生後期 後業～ 古墳前期	12-15 6-15	板 (ギ)	
16	SK7-10 414 429 7 区 10 層 SK71003	14.8 66.1 3.3	3分の2程度が欠損していると考えられる。左に向かって厚くなっている。左端に削り込んで薄くなる部分がある。	表裏ともチャウナで削り落している。いずれも左から右への加工である。右端と側面もチャウナJ型の加工が見られる。左の厚くなる部分は何回も刀を入れた結果が残る。	出生後期 後業～ 古墳前期	12-16 6-16	板 (ギ)	
17	W1381 2-3 区 12 層 SK21204	17.8 75.4 3.4	正面は左J型があり、裏面・上面は右J型で炭化している。穴の右側は残存していない。左側は欠損している。	上面は平場で加工されていると思われる。下面是削り落している。右側縁は裏板に加工している。正面・裏面とともに全面チャウナで加工する。	出生後期 後業～ 古墳前期	13-17 6-17	直 板 (ギ)	
18	WK2007 10 区 35 層 SK103503	21.4 56.1 3.3	正面右下部の表面が炭化している。左側縁は丸孔を帯びて加工され、下端は直線的に切る。左上部に柱を通す穴底とその周囲の厚みのある部分が残る。	上面は左J型加工ではないが、平場に加工されていると思われる。下面は削り落している。右側縁は裏板に加工し、正面を削り落すかくら左端は全面をチャウナ板で加工し、裏面は木口で削り、一部をチャウナで加工する。	出生後期 後業～ 古墳前期	13-18 6-18	板 (ギ)	
19	W2185 6 区 15 層 SK21204	56.7 25.8 4.5	3/4近くが欠損していると思われる。左端とも端部は薄く削り、左上は斜めに切り落とされており、右端として二次加工されている。	表裏ともチャウナで削り落している。チャウナはいずれも左端から右に向かって削っている。	出生後期 後業～ 古墳前期	13-19 6-19	板 (ギ)	
20	W1352 2-3 区 12 層 SK21204	31.0 62.8 3.7	4分の3程度が欠損していると思われる。右側面は丸孔を帯びて加工され、下端は直線的に切る。左上部に柱を通す穴底とその周囲の厚みのある部分が残る。	表面が炭化してて不明瞭だが、全面にチャウナ加工があったと考えられる。一部にチャウナ板が見られる。裏面には全面にチャウナ痕が見られる。	出生後期 後業～ 古墳前期	13-20 6-20	板 (ギ)	
21	WK386 5 区 10 層 SK51006	9.6 62.4 3.2	上部右側に幅15cmにわたって盛り上がりており、穴の周囲の盛り上がり部分と思われる。左側は欠損している。	上面・下端に削り落している。右側面は二次加工で削り落して尖らせている。正面の加工痕は不明瞭だが、チャウナで削っていると思われる。裏面は全面チャウナで加工する。	古墳前期	13-21 6-21	板 (ギ)	

解説表

番 号	登録番号 区 山工位 出土遺構	法 規 (cm)	形 態	技 法	年代 期	実測開版 写真開版	木 取 り 方 法
1	W3057 10 区 35 層 SK100503	最大長 最大幅 最大厚	68.4 34.7 4.7	下部の部が残存し、上部は風化欠損。下側は板材を使用し、下部の角から2cm毎内側に入った部分に軸を造り出す。内角にはほぼ直角に切り落とし。木口側は中央部を縦やかに外巻させる。板材の中央部には約6.5cm×10cm、軸より約12cm上方には1cm×4cm程の孔を穿つ。	木口面は板材を垂直に切った軸、裏面から斜めに刃を入れて加工するが、軸部内角に差し込むためにこの加工箇所は削ってゆく。両面削。中央の孔も板材を垂直に切り落とす。軸の孔は表面裏面から斜めに力を入れ、その断面形状は三角形を空す。加工痕は木口面と両孔内壁はきわめて明瞭。両面には両側面も残る。また軸上の孔の底には本部に新方向に深く入った鋭い刃跡が横一列に並ぶ。	弥生後期 ～古墳晩期	14-I 7-1 板 日
2	W8045 6 区 14 層 木造 61401	最大長 最大幅 最大厚	115.9 30.3 3.7	木口面は元存するが、上木口面、左側面付近の劣化が著しい。平行な板材を使用し、右側面の角に刃を造り出す。下木口面は軸から離れるにつれてやや左方に傾く。右上部には約3cm×2cm程の孔を穿つ。	下木口面右側面は板材を垂直に切り落とす。軸部は根元をよく面く端を出す。使用による摩擦のせいか、前面部は円滑で、節部も丸くなる。表面、裏面に木口方向の側面状が部分的に残る。	古墳中期 14-2 7-2 板 日	木 日
3	W1520 9 区 23 層 SK181- H16 5R03302	最大長 最大幅 最大厚	74.1 27.4 4.6	左側面、裏面が劣化欠損しているもののほぼ保存。平行な板材を組みし、右側面の上下両方に軸を造り出す。右側面は木口面から離れるにつれて下方向へ傾き。下木口面にはほぼ直角に切り落とす。軸は上下ともらは同じ太さで穿する。また、側面部の中央部には約10mm×2mm程の深さ約1cm程の凹みを有する。軸表面、両木口面は劣化著しい。	軸部から木口面にかけては両面とも板材を垂直に切り落とす。軸部の断面形状は両方とも楕円正方形を空す。左側面の部の頭の内腔は、両面とも板材に対して垂直に刃を入れて用材を抜り落す。裏面に下子の穴の痕跡が見えるが、加工痕は確認できない。	奈良～ 中世	15-3 7-3 板 日
4	W 327 10 区 23 層 SDJ02301	最大長 最大幅 最大厚	106.1 30.7 4.7	木口面は元存。下邊を板材を使用し、左側面の上下両方に軸を造り出す。上木口面は方形、下木口面は直角の角部に刃を入れて軸を造り出す。右木口面は木口面から離れるにつれて下方向へ傾き。下木口面にはほぼ直角に切り落とす。左側面は木口面から離れるにつれて下方向へ傾き。下木口面には約2cm×2cm程の不整形状の凹みを有する。右側面下方に約部分的に軸底が見られる。被覆等が摩滅しているものの、保存状態は良好である。	木口面は上、下方ともに、刃を入れて軸部より低い位置で、板材を表面に切り落とした後、上方は平行形に、下方は三角形に、裏面裏面から斜めに刃を入れて加工する。両側部の長さはほぼ等しいが、楕円上袖の方が多い。ともに使用によって摩滅しており、その断面形状は軸が楕円形、下側部が円形を呈し、軸部部も丸くなる。また側部と付け根の部分の軸部が端部よりよく崩れる。両側面は板材を垂直に切り落とす。中央部の凹みの加工痕は確認できるが、被覆剥離である。また木口面に加工痕が確認できるが、要確認。表面、両側面には側面状が確認できる。	奈良～ 平安	15-4 7-4 板 日
5	W 169 5 区 8層木室内	最大長 最大幅 最大厚	93.5 15.1 2.9	右木口面のみ残存。表面の平滑な板材の右下部の角に軸を造り出す。平面部は圓面、内木口面とともに裏直の笠形を空すると考えられる。右上部には約2cm角の孔を穿つ。上木口面、裏面を中心に劣化著しい。	下木口面、丸型は板材を垂直に切り落とす。下側部は断面形状が楕円形を呈し、端部が丸くなっているなどして断面形状も含めて摩滅の影響を受けている。加工痕は確認できない。	古墳中期 ～平安	15-5 7-5 板 日
6	W 455 2-3 区 12 層 SK21201	最大長 最大幅 最大厚	85.7 26.2 4.6	右側が欠損。左下に大きさ8cm、高さが2cm×3cmの方形形状の凹部がある。左下の軸に当たる部分は上と下側面から切り離されている。上部と下部に板柵の溝を穿ち奥まで貫通している。	左側面に木立つ加工なし、正面はチョウナで加工するが、裏面は木立つ加工無なし。溝は正面から穿つ。	弥生後期 後葉～ 古墳前期	16-6 7-6 板 日
7	W 491 2-3 区 12 層 SK21204	最大長 最大幅 最大厚	98.4 17.2 2.5	やや薄い板材。左下に大きさ5cmの四面軸の欠損があるが、裏面が2cm×4.5cmで軸としては扁平である。左側上部を外軸、右側を内軸とされる。上部が側面部に孔を穿っていたと思われる痕跡あり。	上部は緩くカーブする。正面、裏面ともチョウナで加工。	弥生後期 後葉～ 古墳前期	16-7 7-7 板 日

墨木觀察表

墨木 1

番号	登録番号 区 名	法規(cm) 高さ 底面 幅 厚	形 態	特 徴	①上端の加工 ②下端の加工 ③その他	年代観	古墳開 発 草 原 版	本 取 り	樹 種
1	W 482 8 区 木造快適構 築層上	603.0 9.5	6mの長大な丸太材。下端は漸次細くなる。	①削面を斜め込んで、丸味のある頭を作り出す。正面を上と下からV字状に大きく切り込んで抉りを作る。先端は削面を削って尖らせる。 ②先端裏面を下に向かって斜めに切り落す。		古墳中期	17-1 8-1	芯持 ち材	イヌマキ属
2	W 480 8 区 木造快適構 築層	603.0 8.8	6mの長大な丸太材。太さは上下ともほぼ一定。	①斜め上と正面から切り欠く。正面はかなり垂直に切り込んでいる。先端は両削面を削って尖らせる。 ②先端は正面と裏面から斜めに切るが純丸である。 ③表面を下に向かって斜めに切り落す。		古墳中期	17-2 8-2	芯持 ち材	イヌマキ属
3	W 502 8 区 木造快適構 築層上	599.0 10.5	6m近い長大な丸太材。太さは上下ともほぼ一定。やや彎曲する。	①上からなり難いV字状に切り欠く。切り口はかなり規則的である。先端は両削面から削って尖らせる。 ②表面を下に向かって斜めに切り落す。		古墳中期	17-3 8-3	芯持 ち材	イヌマキ属
4	W 484 8 区 木造快適構 築層	437.0 8.6	太さは上下ともほぼ一定。	①斜め上と正面から切り欠く。正面は垂直に切り込む。長い部分は削面と裏面を右方向から削り、頭を作り出す。先端は頭に切り落とし、正面も少し削る。 ②ほぼ直に切り落す。		古墳中期	17-4 8-4	芯持 ち材	イヌマキ属
5	W1597 6 区 木造快適構 築層 14 層	406.5 5.1	細い丸太材で2片に割れている。中央でやや彎曲する。	①斜め上から切り込み、三角形状に抉りを作る。先端は頭と裏面を削って尖らせる。 ②裏面を斜めに切り落とす。下端直角。		古墳中期	17-5 9-5	芯持 ち材	イヌマキ属
6	W 287 2-3 区 SR21001 4号層 10 層	276.3 7.8	下部がやや彎曲した丸太材。太さは上下ともほぼ一定。上端の風化が苦しい。	①斜め上から切り込みで三角形状に切り欠く。先端は頭のため不明瞭だが、裏面と正面を斜めに削って尖らせる。 ②裏面は先端が劣化のため不明瞭だが、自然に細くなっている。目立った加工は見られない。		古墳中期	18-6 9-6	芯持 ち材	イヌマキ属
7	W 366 2-3 区 SR21001 5号層 10 層	273.0 8.8	下部がやや彎曲した丸太材。太さは上下ともほぼ一定。	①正面、両削面の3方向から先端に向けて削り尖らせていく。 ②下部は先端が劣化のため不明瞭だが、自然に細くなっている。目立った加工は見られない。		古墳中期	18-7 9-7	芯持 ち材	イヌマキ属
8	W 218 2-3 区 SR21001 1号層 10 層	255.0 8.0	下部が細くなる丸太材。	①正面を2方向から先端に向かって尖らせるように削る。中央にむら削りをもれて小さな抉りをつける。先端部は裏面から削る。 ②片方の削面を2方向から削り、既に尖らせていく。		古墳中期	18-8 9-8	芯持 ち材	イヌマキ属
9	W 218 2-3 区 SR21001 2号層 10 層	(247.5) 7.5	円錐が欠損。ほぼ直線にのびる丸太材。	①7方向から削りエンビツ状に尖らせる。 ②欠損のため不規則。		古墳中期	18-9 10-9	芯持 ち材	イヌマキ属
10	W 205 2-3 区 SR21001 1号層 10 層	245.0 8.5	下部が細くなる丸太材。	①頭からと背面から切り込んで三角形状に切り欠いたりせられ、さらに正面と側面を削って先端を鋭く尖らせる。 ②エンビツ状に両削面を削って尖らせる。		古墳中期	19-10 10-10	芯持 ち材	イヌマキ属
11	W 337 21 層	243.0 4.8	円錐に彎曲する細い丸太材。太さは上下ともほぼ一定。中先部の風化が苦しい。	①正面上端から斜め込んでV字状に切り欠く。上端は正面と裏面から上に向かって尖るよう削る。 ②下部に向けて斜めに切る。 ③表皮の下の皮が残る丸太材。	平安	19-11 10-11	芯持 ち材	イヌマキ属	
12	W 854 7 区 SR70801 2号層 8 層	241.8 5.0	筋の部分からやや彎曲する丸太材。太さは上下ともほぼ一定。	①正面上端から斜めにV字状に切り欠く。先端は上から裏面と正面に向かって斜めに切り落す。 ②劣化のため不規則だが削面を削ってエンビツ状に尖らせる。一方が本部に深く入り込むものが見られるが不明瞭なのである。 ③表面のみ手で削取っている。	古墳～ 奈良	19-12 10-12	芯持 ち材	イヌマキ属	
13	W1801 3-4 区 9 層	240.8 8.8	正面中央部を削取りしている。下部で2片に割れている。	①正面を上と下からV字状に切り欠く。先端は上から裏面と正面に向かって斜めに削る。 ②劣化のため不規則だが削面を削ってエンビツ状に尖らせる。一方が本部に深く入り込むものが見られるが不明瞭なのである。 ③表面のみ手で削取っている。	古墳中期	20-13 11-13	芯持 ち材	イヌマキ属	

墨木2

番 号	登録番号 区 内	法量(cm) 飛良 最大径	形 態	技 法	①上端の加工 ②下端の加工 ③その他	年代 級	実測回数 写真回数	本 取 り	種 類
14	W 247 2-3 区 SR21001 下層 1 号層 10 層	235.5 10.0	弓状に弯曲する。大きさは上下ともほぼ一定。表面が全体的に劣化している。	①前面を削って丸味のある頭を作り出す。頭部は全体的に削くなるように削り、抉りの部分がよくわからなくなる。先端は正面を斜めに切り、裏面や側面からも削って丸味をつけている。 ②3-4方向から削る。		古墳中期	20-14 11-14	芯持 ち材	イヌマキ属
15	W 247 2-3 区 SR21001 2 号層 10 層	237.5 15.0	やや弓状に弯曲する。上下は欠損のため不明だが、大きさはほぼ同じで一起に鏡方面に削っている。	①欠損のため小形。 ②欠損のため不明。一部鏡方面に削って頭を取っている。		古墳中期	20-15 11-15	芯持 ち材	イヌマキ属
16	W 860 7 区 SR7001 2 号層 8 層	(21.9) 5.5	ねずみに弓状に弯曲する。大きさは上下ともにはほぼ一定。	①上と正面から斜めに切り込み、V字状に切り欠く。先端は上から両側面に向かって斜めに切り落とす。 ②劣化と欠損のため不明。 ③表皮の下の甘皮が残る丸太材。		古墳後期 -奈良	21-16 11-16	芯持 ち材	イヌマキ属
17	W 851 7 区 SR7001 2 号層 8 層	208.6 7.0	中央部がやや弯曲する。大きさは上下ともにはほぼ一定。	①上と正面から斜めに切り込み、縦いV字状に切り欠く。先端は両側面を削り落としている。 ②劣化して不明瞭であるが平根に削っていたようである。 ③表皮の甘皮が残る丸太材。		古墳後期 -奈良	21-17 11-17	芯持 ち材	イヌマキ属
18	W 227 2-3 区 SR21001 2 号層 10 層	(198.5) 7.0	太さは上下ともにはほぼ一定。下端部の劣化が著しい。	①前部と上部から斜めに切り込み、頭を平根に切って台形状に切り欠く。上端は正面と裏面から平根になるように切る。 ②欠損のため不明。 ③表皮の甘皮が残る丸太材。		古墳中期	21-18 12-18	芯持 ち材	イヌマキ属
19	W1223 9 区 SK93303 33 層	185.2 4.5	やや正面に内凹する。大きさは上下ともにはほぼ一定。	①正面を上から斜めに切り込み、頭を平根に切って台形状に切り欠く。上端は正面と裏面から平根になるように切る。 ②半円に切る。 ③表皮を削った丸太材。		奈良- 中世	22-19 12-19	芯持 ち材	イヌマキ属
20	W 858 7 区 SR7001 2 号層 8 層	(174.0) 5.6	正面に内凹する。大きさは上下ともにはほぼ一定。	①正面と上から斜めに切り込み、三角形状に切り欠く。やや角張りはない。先端は正面と裏面から斜めに削る。 ②欠損のため不明。 ③表皮の下の甘皮が残る丸太材。		古墳後期 -奈良	22-20 12-20	芯持 ち材	イヌマキ属
21	W 272 7 区 SR7001 1 号層 8 層	165.0 4.7	上部が弯曲する。大きさはほぼ一定。	①正面と上から切り込み、断面の2分の1を切り欠く。底面は裏面から斜めに切り、さらに先端部を左から右側から削る。 ②左側からエンビ式に削る。 ③表皮の下の甘皮が残る丸太材。		古墳後期 -奈良	22-21 12-21	芯持 ち材	イヌマキ属
22	W 890 7 区 9 層	(137.7) 5.1	やや弯曲し、下端の方が太くなる。	①側面を削て丸い球状のものを作り出す。下から上に8方向から削る。先端は斜めに切り、下に向かって5方向から削る。 ②欠損のため不明。 ③表皮を削った丸太材。		古墳中期	23-22 13-22	芯持 ち材	イヌマキ属
23	W 875 7 区 SD7001 8 層	(129.2) 5.2	ほぼ直線に伸びる。大きさは上下ともにはほぼ一定。	①正面と上から切り込み、断面の2分の1を切り欠く。先端は裏面から斜めに削る。平根または直角状にしている。 ②欠損のため不明。 ③表皮の下の甘皮が残る丸太材。		古墳後期 -奈良	23-23 13-23	芯持 ち材	イヌマキ属
24	W1386 1 区 SK12002 22 層	(134.0) 12.4	ほぼ直線に伸びる。大きさは上下ともにはほぼ一定。下部は欠損している。(円柱の可能性もある。)	①上から切り込み、断面の2分の1を切り欠く。先端は裏面から斜めに削る。 ②欠損のため不明。 ③表皮の下の甘皮が残る丸太材。		先史後期 -六墳前 期	23-24 13-24	芯持 ち材	イヌマキ属
25	W1509 6 区 SK61101 11 層	(71.7) 9.8	やや弯曲する。大きさはほぼ一定と考えられる。下部の大部分が欠損している。	①上から切り欠いて抉りをつくる。先端は上から斜め削削面に削って削る。 ②欠損のため不明。 ③裏面は表皮を剥いた丸太材。		平安	23-25 13-25	芯持 ち材	イヌマキ属
26	W 246 7 区 SR7001 1 号層	(35.5) 7.4	下部の大部分が欠損している。	①上から切り欠いて抉りをつくる。先端は正面と裏面2方向から削る。 ②欠損のため不明。 ③裏面は表皮を剥いた丸太材。		古墳- 奈良	23-26 13-26	芯持 ち材	イヌマキ属

法量の()は残存長

円柱観察表

番号	登録番号 区 出土遺構 出土部位	法量(cm) 幅 高 奥	形 態	技 法	①上端の加工 ②下端の加工 ③その他	年代範 古墳中期	実測調査版 等真図版	木取り 芯持ち材	樹種
1	W 229 2-3 区 SR21001 1 号墳 10 層	315.5 15.5	上端は段差状に加工し、下端はエンビツ状に削って尖らせる。	①高さ15cm、幅6cmの段差をつける切り欠きがある。 ②下端60mmを削り尖らせる。		古墳中期	24-1 14-1 15-1	芯持 ち材	イヌマキ属
2	W 217 2-3 区 SH21001 2 号墳 10 層	280.0 10.0	2本に割れている。下端がやや太くなる丸太材を使用。上端は段差状、下端は圓錐を削て尖らせる。上端は炭化している。	①高さ17cm、幅3cmの段差をつける切り欠き。 ②下端17~18cmを削って尖らせる。 ③下端の削りの上部がやや深くまで削り込んでいる。		古墳中期	24-2 14-2 15-2	芯持 ち材	イヌマキ属
3	W 327 2-3 区 SR21001 1 号墳 10 層	251.2 12.6	断面極円錐の丸太を使用。上端は丸く加工し、段差状に加工する。下端はエンビツ状に削って尖らせる。	①高さ14cm、幅6cmの段差をつける切り欠き。 ②下端30cmを削り細く尖らせる。		古墳中期	24-3 14-3 15-3	芯持 ち材	イヌマキ属
4	W 270 2-3 区 SR21001 4 号墳 10 層	230.0 10.0	全体的に剥離が進んでいる。上端加工部の突起がやや残る。下端は炭化し不明である。	①残存する高さ114cm、幅2.4cmの段差状の切り欠き。 ②下端17cmを削って尖らせる。		古墳中期	25-4 14-4 15-4	芯持 ち材	イヌマキ属
5	W 650 10 区 木造軒道構 30b 層	254.2 11.5	側面に多数のチヨウナ痕が残り、多面柱状に仕上げている。上端は段差状、下端は鋭く尖らせる。中央部で削がれた丸太を使用している。	①高さ23.5cm、幅6cmの段差をつける切り欠き。 ②下端17cmを削って尖らせる。		古墳中期	25-5 14-5 15-5	芯持 ち材	イヌマキ属
6	W 645 10 区 木造軒道構 30b 層	277.2 12.0	上端は段差状に加工し、下端はエンビツ状に削って尖らせる。	①高さ21cm、幅6cmの段差をつける切り欠き。 ②下端45cmを下方向に削って尖らせる。 ③下端67cmの表面が荒れており、土中に埋まっていたと考えられる。		古墳中期	25-6 14-6 15-6	芯持 ち材	イヌマキ属

柱状材観察表

柱状材 1

番号	登録番号 区 出土遺構 出土部位	法量(cm) 幅 高 厚さ	形 態	技 法	①上端の加工 ②下端の加工 ③その他	年代範 先史後期 ～古墳前 期	実測調査版 等真図版	木取り 芯持 ち材	樹種
1	W 911 7 区	324.0 9.0 7.0	ほぼ中央より下端を断面五角形に削る加工がある。細長い丸太材である。	①上端は表皮を削いた丸太材。下2分の1を削取 りしている。 ②両端とも丸孔のため不明。		先史後期 ～古墳前 期	26-1 16-1	芯持 ち材	イヌマキ属
2	W 640 10 区 SK100003 30b 層	297.3 11.0 7.4	両端を丸に作り、上端には1.5cm×2.8cmの貫通孔がある。下端は欠損しているが、何様の孔のあった可能性もある。	①表皮を削いた丸太材。 ②両端とも断面西角形の状。採方面から削り、特に表裏を大きく削っている。		先史後期 ～古墳前 期	26-2 16-2	芯持 ち材	イヌマキ属
3	W1588 2-3 区 没木根跡 20 層	126.7 19.8 20.1	雙板が中を通る円柱の軸用附か。8cm×12cmの大きな貫通孔が1箇にある。軸に通る時に柱の切削面を削したため、かくら状の突起が残ったと考えられる。	①外側は表皮を削いた丸太材。内側はチヨウナで削る。 ②下端は断続状に加工し、上端は斧状のもので切断されている。		弥生中期	26-3 16-3	芯持 ち材	ヒノキ
4	W 871 7 区 SD70001 8 層	103.6 8.5 8.4	ねじれでやや曲がった丸太材を使い、上端に作り出している。	①表皮を削いた丸太材。 ②下端は欠損。上端は約9cmを削って薄くして いる。 ③下の部分は平らに削っている。		古墳～ 奈良	26-4 16-4	芯持 ち材	イヌマキ属
5	W 96 8 区 SX80001 6 層	65.4 10.8 8.4	丸太材の上端にを作り出している。下端は斜め45°に切っている。	①表皮を削いた丸太材。 ②下端は欠損。上端は斜め2.5cm、及び20cmのを作る。 ③全体的に削や施設で施工されている。		不明 (近視 代か)	26-5 16-5	芯持 ち材	カエデ カエデ属
6	W1729 9 区 SK9003 38 層	(166.1) (135) 10.4	6cm×4cmと、4.2cm四方で貫通していない穴がある。上端は状の突起がある。下へ行くほど済くなる不正形の丸太である。	①全面削り出。 ②下端は左右2方向から切り。上端は多方向から削り中央を柱に残している。		弥生後期 ～古墳前 期	27-5 17-6	板 日	スギ

柱状材2

番号	空保番号 区 出土地 目上層位	法量(cm) 全長 厚さ	形 器	技 法	①上端の加工 ②下端の加工 ③その他	年代記	古墳圓版 子貝圓版	木 取 り	樹 種
7	W 250 7 区 SR20801 1 号層 8 層	157.3 13.6 9.5	中央部に2cm×2.5cmの貫通孔が並び、上にも7cm×8.5cmのかなり大きな孔がある。上端は欠しているが、大型の円孔が穿ってあったと考えられる。	①正面のみ側面に削り、平らにしている。 ②下端は丸方向から削り夫らせし。上端は丸の底面が残り、片方の縁が少し盛んでいる。	古墳～ 奈良 17-7		板 木 日	(スギ)	
8	W 460 8 区 SK12202 22 層	138.9 7.1 6.5	丸太材の中央部を正面と裏面から削って薄くしている。	①表面を削いた丸太材。 ②下端は丸方向で鋸削でまっすぐに切っている。片方の側面を2方向から削り、やや傾く。上端は欠損。 ③中央の削りは下方から上方に向かって削っている。	弥生後期 ～古墳前 期	27-8 17-8	芯 持 ち 材	イヌマキ キクイ	
9	WK2705 10 区 SK10304 33 層	140.0 12.1 5.9	上端は表面から斜めに削る。やや上方に斜めに貫通する方形孔を穿っている。	①全面削り面。 ②上端は正面から15°、裏面は5°の角度に削る。下端は大きくなっている。 ③穿孔は上辺が90°、下辺が50°の角度に穿つ。	弥生後期 ～古墳前 期	27-9 17-9	板 木 日	(スギ)	
10	WK1734 10 区 SK10304 35 層	115.2 9.6 5.6	正面より右側面に抜ける孔が2ヶ所ある。左側面には貫通しない孔が2ヶ所ある。	①正面と右側面とチョウナで下から上に向けて削っている。 ②下端は曲面状に切り、夫らない。上端は欠損している。	弥生後期 ～古墳前 期	27-10 17-10	板 木 日	(スギ)	
11	WK3053 10 区 SK10304 33 層	101.2 10.0 5.0	9とはほぼ形状が同じ。大きさもよく似る。	①全面削り面。 ②上端は正面から15°、裏面は5°の角度に削る。下端は欠損。 ③穿孔は上辺が45°、下辺が50°の角度に穿つ。	弥生後期 ～古墳前 期	27-11 17-11	板 木 日	(スギ)	
12	WK2052 9 区 SK90802 38 層	86.5 11.7 3.8	正面中央に三ヶ月型の溝があり、中央部分は20cm×2.5cmの長方形孔になっている。実際の厚さは3.65cm。	①正面と左側面をチョウナで加工する。下から上に向けて削っている。 ②上端は欠損。下端は側面を削って夫らせせる。溝の幅は2~2.5cm。溝底面は木口の凹面が見られる。	弥生後期 ～古墳前 期	27-12 16-12	板 木 日	(スギ)	
13	WK2524 10 区 SK10305 35 層	74.2 10.2 4.1	12と同じ形状をしていたと思われる。曲がった溝と反対側面の一部が残存している。	①正面のみチョウナで加工する。上から下へ削るが、下端は下から上へ削っている。 ②上端は欠損。下端は側面を斜めに切って夫らせている。	弥生後期 ～古墳前 期	27-13 16-13	板 木 日	(スギ)	
14	W1087 1 区 SK12202 22 層	70.0 8.2 2.6	中央部の幅が広くなり、4cm四方の方形孔を穿つ。中央部の幅約1cm。他は5cm~5.5cmである。	①中央部を残して側面を削る。 ②上端欠損。下端は右側面を斜めに切り落とす。	弥生後期 ～古墳前 期	28-14 18-14	板 木 日	(スギ)	
15	W1257 1 区 SK12202 22 層	67.0 11.1 4.9	上端を作り、中央部に1.6cm×0.7cmの穿孔を持つ。孔には、栓が残存する。	①左側面をチョウナで加工する。他は削り面。 ②上端は円方向から削りを作る。側面は1cmほどどの段差となっている。下端は欠損。	弥生後期 ～古墳前 期	28-15 17-15	板 木 日	(スギ)	
16	W1137 1 区 SK12202 22 層	63.3 8.3 4.3	上端を作り出す。先端は正面から45°の角度で斜めに切り落としている。	①全面削り面。左側面の一端にチョウナ痕が残る。 ②上端は側面を切り落として作る。下端は欠損。	弥生後期 ～古墳前 期	28-16 18-16	板 木 日	(スギ)	
17	WK2332 10 区 SK10305 35 層	37.4 12.5 7.9	内絞を方形に切り欠く。正面より右の角度で斜めに切り込んで切り落している。切り欠きが穿孔底があつた可能性がある。	①裏面のみチョウナで裏面を削る。 ②上端はチョウナのようならべて切り落とされている。下端は正面から45°、裏面から17°。	弥生後期 ～古墳前 期	28-17 18-17	板 木 日	(スギ)	
18	WK2772 10 区 SK10303 35 層	28.9 10.3 4.5	17と似た形態。切り欠きは同じく45°で削るが、穿孔底であり、9や11のような形態のものと破壊した材と考えられる。	①全面削り面。 ②上端は欠損。下端は正面と裏面から斜めに削っている。	弥生後期 ～古墳前 期	28-18 18-18	板 木 日	(スギ)	
19 a	WK2750 10 区 SK10304 33 層	133.2 8.8 6.2	円柱状を板に転用したもの。穴の切り欠きが半分残る。実際の径は5.8cm。	①正面と右側面にチョウナ加工をしている。 ②上端は丸の下端として正面と側面を削って夫らせせる。下端は欠損。	弥生後期 ～古墳前 期	28-19a 18-19a	板 木 日	(スギ)	
19 b	WK2774 10 区 SK10304 33 層	135.2 9.2 7.4	19aの左側に接合する材。穴の切り欠きが半分残る。実際の径は7.2cm。	①正面と左側面にチョウナ加工をしている。正面はかなり加工痕が不明瞭である。 ②上端は多方向から削る。下端は欠損。	弥生後期 ～古墳前 期	28-19b 18-19b	板 木 日	(スギ)	

柱状材3

番号	登録番号 PK 出土遺構 出土部位	法線(cm) 全長 幅 厚さ	形 質	技 法	①上端の加工 ②下端の加工 ③その他	年代 紀	実測回版 写真回版	木 取り 目	解 説
19 c	WK2814 10 区 SK103301 33 窓	117.6 8.6 5.0 cm	19bの裏に接合する材。穴の切り欠きが半残る。正面が19bに接合した際の裏面となる。実際の径は5.0cm。	①正面と右側面にチョウナ加工をしている。正面のチョウナ底は不明瞭である。 ②下端は上と側面を削る。下端は欠損。	發生後期 ～古墳前 期	28-15c 18-15c	板 目	(えき) 目	
19 b	WK2750 WK2774 WK2814	135.4 15.4 11.6 cm	3つの材が接合されたもの。本来は断面11cm×15cmの長方形の材だったものを4つに割って枕にしたと考えられる。約8cm×9cm四方の大穴あきあり。実際の径は11.4cm。	①外側の面は全てチョウナで加工している。下から二列削る。 ②本來は平らに切ってあつたようだが枕にする際に四分割した後各々削っている。	發生後期 ～古墳前 期	28 19 18-15c	板 目	(えき) 目	
20 a	WK2812 10 区 SK103304 33 窓	128.6 10.6 6.8 cm	四角柱を枕に組用したもの。穴の切り欠きが残る。	①正面と右側面にチョウナ底が残る。 ②下端は正面と側面を削って尖らせる。上端は欠損。	發生後期 ～古墳前 期	29-20 18-20a	板 目	(えき) 目	
20 b	WK2913 10 区 SK103304 33 窓	125.8 10.7 5.2 cm	20aの裏に接合する材。穴の切り欠きが残る。実際の径は4.5cm。	①正面と右側面は右側面のみ、他は削り面である。 ②下端は側面を削って尖らせる。上端は欠損。	發生後期 ～古墳前 期	29 20b 18-20b	板 目	(えき) 目	
20	W2812 W2913	128.8 11.2 10.5 cm	2つの材が接合されたもの。19と同じ形状だったたると、穴が未完となるため本来は3つか4つに割ったものと考えられる。実際の径は10.0cm。	①正面と左側面にチョウナ底が残る。 ②下端は平坦に削られていたが、枕にする際に削った後削って尖らせるようである。 ③穴の周囲はさらに削って仕上げる。	發生後期 ～古墳前 期	29 20 18-20	板 目	(えき) 目	
21	WK686 5 区 SK51009 10 窓	133.0 8.6 5.0 cm	多面柱を十文字に削って4分割した材。	①曲面上に2列のチョウナ底が残る。 ②上端は欠損、下端は正面と右側面を削っているようである。	古墳前期	29-21 19-21	板 目	(えき) 目	
22	WK694 5 区 SK51009 10 窓	161.3 9.2 5.7 cm	多面柱を商く削った材。	①曲面上に2列のチョウナ底が残る。 ②上端は欠損、下端は正面と側面の3方向を削って尖らせる。	古墳前期	29-22 19-22	板 目	(えき) 目	
23	WK1478 10 区 SK103305 33 窓	180.5 6.7 7.3 cm	21と形状が同じ。	①チョウナ加工底が曲面上に3列残る。 ②上端は欠損、下端は5方向から削って尖らせている。	發生後期 ～古墳前 期	29-23 19-23	板 目	(えき) 目	
24	WK1324 10 区 SK103305 33 窓	177.6 9.2 5.2 cm	21と形状が似る。21よりもやや幅が広い。	①チョウナ加工底が曲面上に3列残る。 ②上端は欠損、下端は5方向から削って尖らせる。末端は底面に沿り削損している。	發生後期 ～古墳前 期	29-24 19-24	板 目	(えき) 目	
25	WK1481 10 区 SK103306 33 窓	164.0 7.3 5.9 cm	21と形状が同じ。	①チョウナ加工底が曲面上に3列残る。 ②上端は欠損、下端は5方向から削って尖らせる。	發生後期 ～古墳前 期	29-25 19-25	板 目	(えき) 目	
26	WK1458 10 区 SK103305 33 窓	161.5 10.0 7.6 cm	21と形状が似る。22よりもやや幅が広い。	①チョウナ加工底が曲面上に3列残る。 ②上端欠損、下端は裏面と両側面を削って尖らせる。	發生後期 ～古墳前 期	29-26 19-26	板 目	(えき) 目	
27	不明 10 区 不明	158.0 8.6 5.8 cm	21と形状が同じ。下端がやや傷くなる。	①チョウナ加工底が曲面上に残る。下方は3列だが上方は4列ある。 ②上端は欠損。下端は裏面と両側面を削って尖らせる。	不明	30-27 19-27	板 目	(えき) 目	
28	WK2170 10 区 SK103304 33 窓	156.5 8.8 7.3 cm	多面柱か。中央部は正面と裏面を削って盛める。下端に径1.2cm、深さ1.5cmの非常孔がある。	①下端はチョウナの加工底が全削し、凹面程度裏を作り出す。 ②上端は欠損。下端は4方向から削り尖らせる。	發生後期 ～古墳前 期	30-28 20-28	板 目	(えき) 目	
29	WK1729 10 区 SK103304 33 窓	155.9 9.0 6.3 cm	多面柱をT字型に削った材か。	①曲面上にチョウナ底が5列程度残る。チョウナ底は一部に見られるのみ。 ②上端は欠損。下端は正面と側面を削って尖らせが先端は平坦に切る。	發生後期 ～古墳前 期	30-29 20-29	板 目	(えき) 目	
30	WK1042 10 区 SK103302 33 窓	152.8 9.2 5.2 cm	四角柱片か。下端裏面に段を作る。	①正面と右側面をチョウナで加工。正面3列、側面2列のチョウナ底がある。 ②上端は欠損。下端は側面を削って尖らせている。先端はだった可能性もある。	路井後期 ～古墳前 期	30-30 20-30	板 目	(えき) 目	

柱状材 4

番号	登録番号 区 出土遺構 出土層位	法量(cm) 外 幅 厚さ	形 態	技 法	①上端の加工 ②下端の加工 ③その他	年代概 算	実測(出版 写真版)	木 取り 目	樹 種
31	WK1471 10 区 SK103305 33 層	150.6 8.8 6.8	多面柱を十文字形に切って 4分割した材、22と同じ形態。	①曲面上に 4列のチョウナ痕がある。 ②上端は欠損。下端は 5方向から削って尖らせる。	弥生後期 ～古墳前期	30-31 20-31	板	(えぞ) 目	
32	WK1486 10 区 SK103305 33 層	147.8 7.7 4.6	21とはほぼ同じ形態の多面柱片。	①曲面上に 3列のチョウナ痕がある。 ②上端は欠損。下端は 5方向から削って尖らせる。	弥生後期 ～古墳前期	30-32 20-32	板	(えぞ) 目	
33	WK1457 10 区 SK103305 33 層	145.6 8.9 6.9	22と同じ形態と考えられる多面柱片。	①曲面上に 4列のチョウナ痕がある。 ②上端は欠損。下端は 5方向から削って尖らせる。	弥生後期 ～古墳前期	30-33 20-33	板	(えぞ) 目	
34	WK1462 10 区 SK103306 33 層	145.2 8.4 6.0	21と同じ形態の多面柱片。	①曲面上に 4列のチョウナ痕がある。 ②上端は欠損。下端は 5方向から削って尖らせる。 左側面の削りに僅かな段差が見られる。	弥生後期 ～古墳前期	30-34 20-34	板	(えぞ) 目	
35	WK229 5 区 SK51009 10 層	144.8 7.2 5.4	21と同じ形態の多面柱片。	①曲面上に 2列のチョウナ痕がある。 ②上端は欠損。下端は右側面と正面を削って尖らせる。 左端は平端に切っている。	古墳前期	30-35 20-35	板	スギ 目	
36	WK1522 10 区 SK103305 33 層	143.2 8.7 4.8	21と同じ形態の多面柱片。	①曲面上に 3列のチョウナ痕がある。 ②上端は平端に切る。下端は内側面を削り尖らせる。	弥生後期 ～古墳前期	31-36 21-36	板	(えぞ) 目	
37	WK1461 10 区 SK103305 33 層	143.4 13.6 5.4	多面柱を二の字形または丁字形に 3分割した材。	①曲面上に 7列のチョウナ痕がある。 ②上端は欠損。下端は 4方向から削り尖らせる。左側面を大きく切り込む。	弥生後期 ～古墳前期	31-37 21-37	板	(えぞ) 目	
38	WK1298 10 区 SK103304 33 層	143.2 8.4 7.6	28と同じ形態。中央部を削り探める。	①下端には全周 10列のチョウナ加工が見られるが、上部にはチョウナ加工がない。 ②上端は欠損。下端は多方向から削りエンビツ状に尖らせる。	弥生後期 ～古墳前期	31-38 21-38	板	(えぞ) 目	
39	WK1474 10 区 SK103305 33 層	141.8 7.5 4.9	21と同じ形態の多面柱片。	①曲面上に 3列のチョウナ加工が見られる。 ②上端は欠損。下端は 4方向から削り尖らせる。	弥生後期 ～古墳前期	31-39 21-39	板	(えぞ) 目	
40	WK1169 10 区 SK103305 33 層	141.2 6.8 6.3	21と同じ形態の多面柱片。	①曲面上に 3列のチョウナ加工が見られる。 ②上端は欠損。下端は多方向から削りエンビツ状に尖らせる。	弥生後期 ～古墳前期	31-40 21-40	板	(えぞ) 目	
41	WK2234 10 区 SK103304 33 層	140.0 16.5 7.2	上部に 2.5cm × 4 cm の穴を持つ角材。上部左側面は曲面に切り欠く。其他の径は 16.7cm。	①正面の一部にチョウナ加工が見られる。 ②上端は欠損。下端は正面を削る。右側を大きく削る。	弥生後期 ～古墳前期	31-41 21-41	板	(えぞ) 目	
42	WK1521 10 区 SK103304 35 層	138.5 11.6 3.9	多面柱を T 字形に削った材か。	①曲面上に 3列のチョウナ加工が残る。 ②上端は斧かチョウナで平端に切る。下端は再側面を削り尖らせる。	弥生後期 ～古墳前期	31-42 22-42	板	(えぞ) 目	
43	W 442 10 区 SK103305 23 層	137.6 18.6 10.0	欠損のため原形がわかりにくいが、7.5cm × 6.5cm の方孔をもつ角材。	①表面は欠損のため丸くねじ等不規則。 ②上端は欠損。下端は正面を削る。右側を大きく削る。 左側を削り尖らせる。	奈良～平安	31-43 22-43	板	(えぞ) 目	
44	WK2808 10 区 SK103304 33 層	135.7 8.0 5.8	19や20と同様の形態である。四角柱を 4分割した材か。	①正面に 3列、左側面に 3列のチョウナ加工痕が残る。 ②上端は欠損。下端は正面と側面を削って尖らせる。	弥生後期 ～古墳前期	32-44 22-44	板	(えぞ) 目	
45	WK1730 10 区 SK103304 35 層	135.2 9.0 5.8	21と同じ形態の多面柱片。	①曲面上に 3列チョウナ加工痕が残る。 ②上端は平端に切る。下端は底面によって折損しているが、左側面を削って尖らせていていると考えられる。	弥生後期 ～古墳前期	32-45 22-45	板	(えぞ) 目	
46	WK1727 10 区 SK103304 35 層	134.6 7.5 5.8	21と同じ形態の多面柱片。	①曲面上に 3列チョウナ加工痕が残る。 ②上端は平端に切る。下端は底面によって折損しているが、左側面を削って尖らせていていると考えられる。	弥生後期 ～古墳前期	32-46 22-46	板	(えぞ) 目	

柱状材 5

番号	登録番号 区 山土油燃 上居屋	計量(cm) 今井 横 厚さ	形 態	技 法	①上端の加工 ②下端の加工 ③その他	年代 生後期 ～古墳前 期	実測国版 写真版	木 取 り 日	樹 種
47	WK1322 10 区 SK103305 33 番	97.4 4.4 6.0	21と同じ形態の多面柱材。裏面に5cm強の長さで5mmくらい削られている穴跡と考えられる部分がある。	①前面に3列チャウナ加工痕がある。 ②上端は欠損。下端は下端3分の1の裏面を削りさらに左側面を削って丸めをしている。	生後期 ～古墳前 期	32-47 22-47	板 目	(スギ)	
48	WK1341 10 区 SK103304 33 番	93.6 (5.3) 3.0	ほぼ中央に径1.3cmの丸孔を穿ち、その上下に幅1.5cm、長さ18cmにわたって溝を作る。	①裏面と右側面にチャウナ加工痕がある。 ②上端は裏面から斜めに切り落とす。下端は欠損。	生後期 ～古墳前 期	32-48 22-48	板 目	(スギ)	
49	WK1463 10 区 SK103305 33 番	92.3 10.4 4.4	37と同じ形態と考えられる多面柱材。正面下端には5mmの段差がつけられ、表面が平坦に削られている。	①前面に4列のチャウナ加工痕がある。 ②上端は欠損。下端は4方向から削り尖らせる。特に内側面を大きく削る。	生後期 ～古墳前 期	32-49 22-49	板 目	(スギ)	
50	W1383 1 区 SK12202 22 番	75.0 6.0 4.0	F端より約13cmの側面をV字に切り欠き、かえしを作り出している枕材。	①全周削り曲。 ②上端は欠損。下端は正面と両側面を上方から削って丸めをしている。	生後期 ～古墳前 期	32-50 22-50	板 目	(スギ)	
51	W1074 1 区 SK12202 22 番	74.4 5.8 4.8	下端を階段状に削る材。	①全周削り曲。 ②上端は欠損。下端より約10cmと15cmの部位に段差がある。先端は4方向から削って丸めをしている。	生後期 ～古墳前 期	32-51 22-51	板 目	(スギ)	
52	W2886 1 区 SK12202 22 番	67.8 4.3 3.6	D端より約12cmの部位の角をそれぞれ切り欠き、かえしを作り出している枕材。	①全周削り曲。 ②上端は欠損。下端は正面と裏面を削って丸めしている。	生後期 ～古墳前 期	32-52 22-52	板 目	(スギ)	
53	WK1704 10 区 SK103302 35 番	67.0 5.8 4.8	丸太の上部に長さ10cmのを作り出す。付け根部分は斜めに切り、50°-60°の傾きで接合するように作られている。	①表面は甘皮のついた丸太材。 ②D端より約10cmの部位を丸方形容となるよう先端から削り込まれていて、先端は4方向から切り、尖らせている。下端は欠損。	生後期 ～古墳前 期	33-53 23-53	芯持 材	イヌマキ属	
54	WK787 1 区 SK51203 12 番	112.3 10.0 6.0	1.一部に長さ12.5cmのを作り出す。両側面は削り曲、本末は細く細かった可能性はある。は断面方形合付け根の部分は裏面に5cmの段がある。	①表面は全周削り曲。チャウナ加工があり、裏面も一部にチャウナ加工がある。 ②は側面と裏面を削って作り出す。下端は枕として多方角から削られている。	生後期 ～古墳前 期	33-54 23-54	板 目	(スギ)	
55	WK788 5 区 SK51203 12 番	112.1 9.6 6.8	上部に長さ10cmのを作り出す。の正面はわずかに削り、D端の大きさでわざに先端に向かって下げる。裏面は約2cmと段差がある。	①正面と左側面をチャウナ加工する。 ②は側面と裏面を削って作り出しているが、正面もむしむし削る。下端は4方向から削り枕として尖らせる。	生後期 ～古墳前 期	33-55 23-55	板 目	(スギ)	
56	WK2700 10 区 SK103304 33 番	(140.4) 8.2 5.1	D端より27cmの部位に段があり、延8.5cmの方形孔の軌跡と思われる。	①正面と右側面をチャウナ加工する。 ②上端は欠損。下端は側面を削って枕として尖らせている。	生後期 ～古墳前 期	33-56 23-56	板 目	(スギ)	
57	WK3009 10 区 SK103302 33 番	(168.5) 9.8 7.4	D端より12cmの部位に段があり、方形の穴または、組み合わせせるための切り欠きと考えられる。	①正面と右側面をチャウナ加工する。 ②上端は欠損。下端は左側面と正面、裏面を削って枕に加工している。	生後期 ～古墳前 期	33-57 23-57	板 目	(スギ)	
58	WK2706 10 区 SK103304 33 番	176.2 9.4 4.8	下端の7cmは幅約2cmであった可能性がある。	①右側面をチャウナで加工する。 ②上端は劣化で小範囲だがまぐすぐ切断している。下端は裏面を削って枕に加工している。	生後期 ～古墳前 期	33-58 23-58	板 目	(スギ)	
59	WK3007 6 区 SK69501 5 番	(26.6) 6.9 6.6	上部が幅4cmのを作りだし、下部は中央に縦長い孔を穿って枕をねじ込む柱状の構造である。	①断面が円筒となるように加工されている。 ②上端は側面を削ってを作る。下端は欠損。	中近世	33-59 23-59	板 目	(スギ)	
60	W 171 10 区 21 番	(56.9) 8.4 8.0	上部の16.5cmの部分が総長のとなる丸太材。中央部に2カ所切り欠きがある。表面の下端部分のみチャウナ加工が残る。断面径16.2cm。	①表面に甘皮の残る丸太材。 ②上端は先端を欠損しているが側面を削って作る。下端は4方向から斧状の道具で切り取っている。	平安	33-60 23-60	芯持 材	イヌマキ属	
61	WK2546 10 区 SK103306 33 番	138.8 10.2 7.3	D端から24cmの部位に段がある。2cmまっすぐに切り斜めに切る。斜めに切った右側に元は左側先端と両側の状況ががあった可能性がある。	①正面は劣化のためチャウナ痕は認められないが、すずめがあり、加工されたと考えられる。他の面は削り曲である。 ②上端は欠損。下端は右側面と裏面を削って枕にしている。	生後期 ～古墳前 期	34-61 24-61	板 目	(スギ)	
62	WK2388 10 区 SK103306 35 番	146.2 8.5 8.4	下端から13cmの部位に段がある。2.3cmまっすぐに切り、斜めに切る。61と同様の形態と考えられる。	①正面と左側面がチャウナで加工されている。裏面も削り曲している。 ②上端は欠損。下端は右側面と裏面を削って枕にしている。	生後期 ～古墳前 期	34-62 24-62	板 目	(スギ)	

柱材状6

番 号	登録番号 区 出士遺構 名 出土位置	法式(cm) 全長 幅 厚さ	形 態	技 法	①上端の加工 ②下端の加工 ③その他	年代範 囲	支綱回版 写真版面	木 取り 方	附 註
63	WK2386 10 区 SK10506 35 番	144.8 8.2 8.1	下端から15cmの部位に段がある。わずかにまっすぐ切った断跡があり、斜めに切る。突起部の幅が4cmであり、斜めに切った部分には欠陥はなかったと考えられる。	①正面、右側面、裏面をチュウナ加工する。左側面は削り面である。 ②下端は欠損。下端は右側面を斜めに削り、先端は正面と裏面を削って尖らせる。	先牛後期 後漢～ 古墳前期	34-63 24-63	板 （スギ） 日		
64	WK2705 6 区 SK61605 16 番	93.5 10.2 3.8	下端から6.7cmの部位に幅8cmの穴あきまたは方形切り欠きが認められる。また下端から21cmの部位に段があり、上を斜めに切り落としている。	①左側面をチュウナで加工する。地は削り面。 ②上端は欠損。下端は右側面を斜めに削り、先端は正面を削るように1方向から削る。 ③上端は欠損。下端は裏面と両側面を削って杭にしている。	先牛後期 後漢～ 古墳前期	34-64 24-64	板 （スギ） 日		
65	WK2382 10 区 SK10506 35 番	137.4 8.4 5.3	下端から17cmの部位に1cmの段差がある。かなり細い材なので右側面を削った一部と思われる。	①正面と右側面にチュウナ痕が残る。裏と左側面は削り面。 ②上端は欠損。下端は右側面を斜めに削り、先端は正面を削っている。	先牛後期 後漢～ 古墳前期	34-65 24-65	板 （スギ） 日		
66	WK2748 10 区 SK10304 33 番	144.4 6.4 5.8	下端から13cmの部位に0.8cmの段差がある。これも細い材であり、角柱を削った一部と思われる。	①全面削り面。 ②上端は欠損。下端は側面と裏面を削って実らせている。	先牛後期 後漢～ 古墳前期	34-66 24-66	板 （スギ） 日		
67	WK1043 5 区 SK10302 33 番	175.6 8.2 断面8.2 径	下端から12cmの部位に1cmの段があり、反対側は斜めに切り落としている。右側面の上端から6.3cmの部位に溝を切り欠く。	①正面のみチュウナ痕が認められる。右側面は平に削り上されているため、チュウナで削った可能性がある。 ②上端は欠損。下端は正面と裏面で削って杭に作る	先牛後期 後漢～ 古墳前期	35-67 25-67	板 （スギ） 日		
68	WK6000 5 区 SK51009 10 番	169.8 7.8 6.6	下端から8.5cmの部位に1.5cmの段があり、反対側は斜めに切り落としている。左側面の下端から10.5cmの部位に幅1.2cmの孔痕が認められる。	①左側面にチュウナ痕が認められる。裏面にも不規則だがチュウナ痕がある。 ②上端は欠損。下端は正面と裏面、左側面を削つけて杭に作る。	古墳前期	25-68 25-68	板 （スギ） 日		
69	WK2421 10 区 SK10269 36 番	132.9 10.6 4.5	下端から27cmの部位に5cmの段を作る。	①左側面にチュウナ痕が認められる。 ②上端は欠損。下端は杭としての加工が特に見られない。	先牛後期 前漢	35-69 25-69	板 （スギ） 日		
70	WK2421 10 区 SK10268 36 番	138.6 11.2 5.4	下端から28.5cmの部位に5.5cmの段を作る。69の上に接合する可能性あり。	①左側面にチュウナ痕が認められる。正面は劣化のため不明なのが、チュウナで加工されていたと思われる。 ②上端は欠損。下端は杭としての加工が特に見られない。	先牛後期 前漢	35-70 25-70	板 （スギ） 日		
71	W 644 7 区 SK70801 8 番	139.0 5.6 3.8	上部約40cm、下部約32cmの右側面を削る。	①右側面をチュウナで加工する。 ②下端は正面と裏面を削つて尖らせる。	古墳後期 ～奈良	35-71 25-71	板 （スギ） 日		
72	WK1465 8 区 SK817a02 17a 番	103.6 7.8 4.3	下から約25cmの部位から上を削り落す。断面に約14°の傾きを持つよう斜めに削る。上部に貫通孔1、下部と上部の左側面に斜めの切り欠きがある。右側か、	①正面と裏面にチュウナ痕が認められる。 ②上端は欠損。下端は側面を削り、さらに角を取るよう削つて尖らせている。	先牛後期 後漢～ 古墳前期	35-72 25-72	板 （スギ） 日		
73	W2048 6 区 SKG1601 16 番	82.4 7.0 2.7	下部の右側面に25°の角度で斜めに貫通する孔跡を持つ。	①全面削り面である。 ②上端は欠損。下端は平坦に斜めに削られ、杭としての加工がされていない。欠損の可能性もある。	先牛後期 後漢～ 古墳前期	35-73 25-73	板 （スギ） 日		
74	WK48 5 区 SK52002 10 番	138.7 8.2 断面6.5 径	左側面、下部より28cmの部位に幅2cm強の方形の切り欠きがある。	①チュウナ痕は認められなかったが右側面がかなり凹凸があり、加工されていたと考えられる。 ②上端は斜めに削り、下端は右側面を削つて尖らせる。	古墳前期	36-74 25-74	板 （スギ） 日		
75	W 371 7 区 SR70801 8 番	108.5 18.0 8.1	左側面の下端より25cmの部位に角を取る形で幅1cmの切り欠きがある。	①正面から右側面にかけて緩やかに丸味をおびるよう加工されている。裏面は削り面か。 ②下端は欠損。上端は中央が丸められたようになっている。	6 C後 ～8 C	36-75 26-75	板 （スギ） 日		
76	WK1284 9 区 SK93001 38 番	105.8 6.8 6.1	チュウナで12mmを削り出し、ほぼ円柱状に仕上げる。	①チュウナで全面加工。12mm。 ②上端は欠損。下端は半周に押丁されいており、正面を斜めに削つて杭に加工したようである。	先牛後期 後漢～ 古墳前期	36-76 26-76	板 （スギ） 日		
77	WK604 5 区 SK51009 10 番	129.0 5.8 5.5	円柱を1/4削した材。	①正面にチュウナ痕が3列残る。表面劣化のため不規則である。 ②上端は欠損。下端は先端が突出しているが、右側面を削り尖らせていたようである。	古墳前期	36-77 26-77	板 （スギ） 日		

番 号	登録番号 区 出土遺構 号	法量(cm) 全長 幅 厚さ	形 態	技 法	①上端の加工 ②下端の加工 ③その他	年代	支承側面 弓背側面		木取 り 目	樹 種
							支承側面	弓背側面		
78	WK698 5 区 SK51009 10 層	136.1 10.7 6.6	円柱を削った材。断面で約1/4が残る。	①正面にチヨウナ痕が4列残る。表面劣化のためかなり不明瞭である。 ②上端は欠損。下端は両側面を削って尖らせている。	古墳前期	36-78 26-78	極	(スギ) 目		
79	WK701 5 区 SK51009 10 層	140.6 7.9 4.2	円柱を削った材。断面で約1/4が残る。	①表面の劣化でかなり不明瞭だが正面にチヨウナ痕が3列残存。 ②上端は欠損。下端も欠損しているが、側面を削って尖らせられている。	古墳前期	36-79 26-79	極	(スギ) 目		
80	WK623 5 区 SK51009 10 層	142.8 6.6 5.2	円柱を削った材。断面で約1/4が残る。	①正面にチヨウナ痕が3列残存。 ②上端は欠損。下端も欠損している。下端はやや瘤くなるが、尖らせる加工は見られない。	古墳前期	36-80 26-80	極	(スギ) 目		
81	WK1300 10 区 SK103305 33 層	136.1 9.0 4.8	四角柱を4分割した材。	①正面に3列、左側面に1列チヨウナ痕が残存。 ②上端は欠損。下端は両側面と正面を削って尖らせている。	先史後期 後葉～ 古墳前期	37-81 27-81	板	(スギ) 目		
82	WK2815 10 区 SK103304 33 層	136.2 7.2 3.7	四角柱を削った材の一節。	①正面に2列、右側面に1列チヨウナ痕が残存。 ②上端は欠損。下端は下から25cmの部位に段をつけるように切り欠いている。	先史後期 後葉～ 古墳前期	37-82 27-82	板	(スギ) 目		
83	WK1279 10 区 SK103305 33 層	136.2 11.0 6.0	四角柱の2分割材か。	①正面に5列チヨウナ痕が残る。側面の加工は不明だが、加工されていると思われる。 ②上端は欠損。下端も劣化が著しいが裏面と両側面を削って尖らせている。	先史後期 後葉～ 古墳前期	37-83 27-83	板	(スギ) 目		
84	WK684 5 区 SK51009 10 層	141.0 9.2 5.6	円柱を削った材。	①正面にチヨウナ痕が3列残存。 ②上端は欠損。下端は側面と正面を削って尖らせている。	古墳前期	37-84 27-84	進 板	(スギ) 目		
85	WK522 5 区 SK51009 10 層	158.6 8.2 5.2	円柱を削った材。下端より21cmの部位までが丸れており柱の根元として土に埋まっていた可能性がある。	①正面にチヨウナ加工痕が3列残存。 ②上端は欠損。下端も側面を削って尖らせている。	古墳前期	37-85 27-85	板	(スギ) 目		
86	WK601 5 区 SK51009 10 層	156.2 8.8 6.6	円柱を削った材か。四角柱の可能性もある。	①正面にチヨウナ痕が2列残る。 ②上端は欠損。下端は側面を削って尖らせている。	古墳前期	37-86 27-86	進 板	(スギ) 目		
87	WK540 5 区 SK51009 10 層	167.4 8.6 4.8	円柱を削った材。断面で1/2残存。	①正面にチヨウナ痕が3列残る。表面の劣化によりかなり不明瞭。 ②上端は欠損。下端は側面を削って尖らせている。	古墳前期	37-87 27-87	板	(スギ) 目		
88	WK77 5 区 SK51002 10 層	163.8 7.2 3.1	四角柱を削った材。	①正面と左側面にチヨウナ痕が残存。 ②上端は欠損。下端は左側面を削って尖らせている。右側面、裏面も僅かに削る。	古墳前期	38-88 28-88	極	(スギ) 目		
89	WK625 5 区 SK51009 10 層	158.6 7.8 5.9	四角柱を削った材。左側面の削り跡に木打または楔の一部が正面から打ち込まれた跡で残る。	①正面と右側面に不明瞭だがチヨウナ痕が見える。 ②上端は欠損。下端は両側面を削り尖らせている。	古墳前期	38-89 28-89	板	(スギ) 目		
90	WK1224 10 区 SK103304 33 层	161.1 10.6 8.4	四角柱を削った材。	①正面に3～4列、左側面に3列チヨウナ痕が残る。 ②上端は欠損。下端は両側面を削り尖らせている。	先史後期 後葉～ 古墳前期	38-90 28-90	板	(スギ) 目		
91	WK1059 10 区 SK103302 33 层	165.0 11.0 6.6	四角柱を削った材。	①正面に4～5列、左側面に2～3列チヨウナ痕が残る。 ②上端は欠損。下端は両側面を削り尖らせるが、先端はまっすぐに切り尖らない。	先史後期 後葉～ 古墳前期	38-91 28-91	板	(スギ) 目		
92	WK524 5 区 SK51009 10 層	169.7 8.4 7.1	四角柱を削った材。	①正面と右側面にチヨウナ痕が残る。 ②上端は欠損。下端は両側面を削り尖らせる。裏面もやや削っている。	古墳前期	38-92 28-92	板	(スギ) 目		
93	WK242 10 区 SK103308 33 层	171.0 9.1 4.1	四角柱を削った材。	①正面に2列、右側面に1列チヨウナ痕が残る。 ②上端は欠損。下端は両側面を削りさらに角を取る形で四方から削って尖らせている。	先史後期 後葉～ 古墳前期	38-93 28-93	板	(スギ) 目		

柱状材 8

番号	登録番号 区 出土地 遺構 号	法算(cm) 全長 幅 厚さ	形 態	技 法	①上端の加工 ②下端の加工 ③その他	年代範 囲	実測断面 写真版図	木取り 目	樹種
94	WKCS20 10 区 33 番	179.6 6.6 7.6	四角柱を削った材か。		①正面のみチヨウナ底が2列残存。 ②上端は欠損。下端は6方向より削る。	先史後期 後葉～ 古墳前期	38-94 28-94	板 目	(スギ)
95	WK605 5 区 SK51009 10 番	183.0 8.4 6.0	四角柱を削った材。		①不明瞭だが、正面と右側面にチヨウナ底が残る。 ②上端は欠損。下端は両側面を削って尖らせる。	古墳前期	38-95 28-95	板 目	(スギ)
96	WK807 5 区 SK51009 10 番	180.2 7.4 5.7	四角柱を削った材。		①正面のみチヨウナ底が残る。 ②上端は欠損。下端は正面、表面を削って尖らせる。	古墳前期	38-96 28-96	板 目	(スギ)
97	WK611 5 区 SK51009 10 番	167.3 7.4 6.2	四角柱を削った材。		①正面のみ不明瞭だがチヨウナ底が認められる。 ②上端は欠損。下端は両側面を削って尖らせる。正面、裏面は先端のみ削っている。	古墳前期	38-97 28-97	板 目	(スギ)
98	WJ011 2-3 区 SK21206 12 番	137.5 8.8 2.7	薄い四角柱かまたは板材の一部と考えられる。		①正面、右側面にチヨウナ底があり、裏面の中央部にもチヨウナ底が認められる。上端と下部でチヨウナの削り方向が逆となる。 ②上端は欠損。下端は土に右側面を大きく削って尖らせる。左側面は先端のみ僅かに削る。	弥生後期 後葉～ 古墳前期	39-98 29-98	板 目 木真	(スギ)
99	WK151 10 区 SK103302 33 番	138.5 10.8 7.4	四角柱を削った材か。		①表面の劣化により不明瞭だが正面に2列のチヨウナ底が残る。 ②上端は欠損。下端は様々な方向から削り、先端をエンピツ状に尖らせる。	先史後期 後葉～ 古墳前期	39-99 29-99	板 目 木真	(スギ)
100	WK1293 10 区 SK103305 33 番	136.7 12.5 6.6	四角柱を削った材か。		①正面と側面の一部にチヨウナ底が残る。正面と側面の間の角を削るように削っている。 ②上端は欠損。下端は正面と両側面の3方向を削ったと見われるひっかけたような粗い削りである。	先史後期 後葉～ 古墳前期	39-100 29-100	板 目	(スギ)
101	WK1335 10 区 SK103305 33 番	141.8 6.9 9.2	円柱を削った材。断面で1/6程度が残る。		①不明瞭だが、正面にチヨウナ底が2～3列残存。 ②上端は欠損。下端は正面と裏面を削る。先端には孔眼の可能性のある切り欠きがある。	先史後期 後葉～ 古墳前期	39-101 29-101	板 目	(スギ)
102	WK1288 10 区 SK103305 33 番	151.2 8.6 5.2	四角柱を削った材。		①正面と右側面にチヨウナ底が残る。 ②上端は欠損。下端は様々な方向から削り、エンピツ状に尖らせる。	弥生後期 後葉～ 古墳前期	39-102 29-102	板 目	(スギ)
103	WK3006 10 区 SK103902 33 番	153.0 9.6 7.1	四角柱を削った材。下端より9.3cmの部位に段があり、斜めに削っている。		①正面と右側面にチヨウナ底が残る。 ②上端は欠損。下端は左側面と裏面を削って尖らせるが、先端は板となり下面を平板に切っている。	先史後期 後葉～ 古墳前期	39-103 29-103	板 目	(スギ)
104	WK698 5 区 SK51009 10 番	160.4 8.3 5.3	四角柱を削った材。		①不明瞭だが、正面のみチヨウナ底が残る。 ②上端は欠損。下端は両側面を削って尖らせている。	古墳前期	39-104 29-104	板 目	(スギ)
105	WK2496 10 区 SK103308 33 番	158.0 6.4 3.8	四角柱を削った材。		①正面にチヨウナ底が残る。 ②上端は欠損。下端は両側面を削って尖らせているが先端は下端が平面に切る。	先史後期 後葉～ 古墳前期	39-105 29-105	板 目	(スギ)
106	WK2456 10 区 SK103308 33 番	154.6 8.6 5.6	四角柱を削った材。やや弓状に弯曲する。		①正面と右側面にチヨウナ底が残る。正面は4～5列認められるが、裏側面は一部のみである。 ②上端は欠損。下端は両側面を2方向から削って尖らせるが、先端は下端が平面となるように切る。	先史後期 後葉～ 古墳前期	39-106 29-106	板 目	(スギ)
107	WJ1372 2-3 区 SK21203 12 番	231.4 7.3 6.0	表面に凹凸が僅かに残る丸太材。上端より65cmの部位の内側面を削りやや盛める。上端より約130cmの部位は正面のみを僅かに削り盛める。実際の径は6.5cm。		①削っている部分以外は日々つ加工がない。 ②上端はかなり平坦に切断されている。下端は周囲を6方向から削りエンピツ状に尖らせている。	先史後期 後葉～ 古墳前期	40-107 30-107	芯 持材	(イタマツ)
108	WK1743 10 区 SK103504 25 番	130.8 8.4 7.3	107と形態が似る。中央部の両側面を削る。107よりは短くやや太めの材を使用している。		①正面は表面に甘皮が残るが、他の面に縦方向に削られている。 ②上端は平担に削られ、下端は削れか甚しく、加工は不規則である。 ③側面の切り欠きは上から削り込んでいる。	先史後期 後葉～ 古墳前期	40-108 30-108	芯 持材	(スギ)

柱状材 9

番 号	ひび番号 区 出土地 地番	位置(x) 床 幅 厚さ	移 動	状 態	技 法	①上端の加工 ②下端の加工 ③その他			年代範 囲	大測定版 等真鍮版	本 取 り	樹 種
						④	⑤	⑥				
109.	WK1289 10 区 SK10205 33 屋	132.4 9.0 6.0	107と形態が似る。中央よりやや上の部分の側面を削り欠いている。丸太の平削材を使用している。			①正面に甘口が残る。裏面は削り面。 ②上端は欠損。下端は多方向から削り欠らせている。 ③側面の切り欠きは上と下から刃を入れ、両をまっすぐに切り込みを作る。			発生後期 後葉— 古墳前期	40-109 30-109	芯 材 半削	(スギ)
110.	WK1301 1 区 SK12202 22 屋	142.4 10.4 6.1	107と形態が似る。中央よりやや上の部分の側面を削り欠いている。実際の径は5.5cm。			①正面に甘口が残る丸太材。 ②上端は半円となるように切る。下端はやや欠損しているが、平均に切ってある可能性がある。 ③側面の切り欠きは上から切り込んで欠く。			発生後期 後葉— 古墳前期	40-110 30-110	芯 材	イヌマキ 材
111.	WK1298 1 区 SK12202 22 屋	151.0 11.4 6.7	上端より12cmの部位の側面に幅2.5mm強の切り欠きがある。断面形状の材で約20°の傾きで右側に厚くなる。			①正面に甘口が残る丸太材。 ②上端は半円となるように切る。下端はやや欠損しているが、平均に切ってある可能性がある。 ③側面の切り欠きは上から切り込んで欠く。			発生後期 後葉— 古墳前期	40-111 30-111	芯 材 半削	(スギ)
112.	WK2432 10 区 SK10308 33 屋	173.8 10.3 5.3	角材片で削りに他の部材を組むための孔の削りが2ヶ所追加して残る。			①正面に削り面がある。 ②上端は欠損。下端は周囲7.5方向から削るが、先端は平面が半円となるように切る。 ③孔は追加の正方形孔と考えられる。			発生後期 後葉— 古墳前期	40-112 30-112	板	(スギ) 日
113.	WK2564 10 区 SK10306 33 屋	167.8 8.1 7.2	角材を削った材か。中央部よりやや上の右側と下方に向かって約50°の角度で部材を組み合わせた孔と考えられる孔の削りが見られる。			①左側面のみチョウナ痕がある。 ②上端は欠損。下端は周囲7.5方向から削るが、先端は平面が半円となるように切る。 ③孔は追加の正方形孔と考えられる。			発生後期 後葉— 古墳前期	40-113 30-113	板	(スギ) 日
114.	WK620 5 区 SK51009 10 屋	173.2 8.2 6.1	下端と中央部の2ヶ所に正面から右側面に貫通する孔がある。孔はいずれも2cm強×1.5cm強の大きさである。			①正面と右側面にチョウナ痕が残る。 ②上端は欠損。下端は内側面を削って尖らせる。			古墳前期	41-114 31-114	板	(スギ)
115.	WK2548 10 区 SK10506 33 屋	181.5 8.8 5.6	F端より約23cmの部位の左側面に長さ12cm、深さ1.3cm~2cmの切り欠きがあり、材を組み合わせた孔と考えられる。中央部右側面にも切り欠きがある。			①左側面のみチョウナ痕が1~2例残存する。 ②上端は欠損。下端は6方向から削て尖らせ先端は削り組合せとなるように上から切る。 ③中央部の切り欠きは側面が緩いV字に切り欠く。直は長方形形に切り欠く。			発生後期 後葉— 古墳前期	41-115 31-115	板	(スギ) 日
116.	WK2538 10 区 SK10306 33 屋	192.6 8.5 6.2	F端より約110cmの部位に能材を組み合わせた孔の跡と考えられる削りが左側面右側面に残る。			①正面に3例のチョウナ痕が残存。下端から24cmの部位まで背面を削く削る。 ②上端は欠損。下端は内側面を削って尖らせる。			発生後期 後葉— 古墳前期	41-116 31-116	板	(スギ) 日
117.	WK2545 10 区 SK10306 33 屋	208.2 9.1 7.2	下端より23cmの部位に段差がある。また左側面の下端より10cmの部位に能材を組み合わせた孔の跡と思われる削りが残る。その7cm上部に1.6cm×0.6cmの木釘が打ち込まれている。			①裏面と右側面にチョウナ痕が残る。 ②上端は欠損。下端は周囲面を削って尖らせている。投げた木釘が残る。			発生後期 後葉— 古墳前期	41-117 31-117	板	(スギ) 日
118.	WK653 5 区 SK51009 10 屋	139.7 6.3 5.0	角材を削ったもの。下端より20cmの部位と中央部に正面から右側面に残る孔がある。正面右端部には木釘が打ち込まれている。			①正面と右側面にチョウナ痕が残る。 ②上端は欠損。下端は周囲面を削り番として尖らせる。			古墳前期	42-118 32-118	板	(スギ) 日
119.	WK2295 10 区 SK10306 33 屋	142.5 9.6 5.8	角柱を削ったもの。下端より43cmの部位に左側面に抜ける孔がある。上端より50cmの部位に斜め方向の切り欠きがある。1.5cm強あまりは僅かに削る。			①正面、右側面にチョウナ痕が残る。 ②上端は欠損。下端は内側面を削るよう4方向から削って尖らせている。先端部裏面に1.3cmの後突が見られる。			発生後期 後葉— 古墳前期	42-119 32-119	板	(スギ) 日
120.	WK2296 10 区 SK10306 33 屋	148.2 6.6 4.4	断面六角形の材。23の幅さを持つ。下端より48.5cmの部位に正面から左側面に抜ける孔がある。			①正面、裏面、左側面にチョウナ痕が残る。 ②上端は欠損しているが下端はまっすぐ削っているようである。下端は内側面を削って尖らせる。			発生後期 後葉— 古墳前期	42-120 32-120	板	(スギ) 日
121.	WK652 5 区 SK51009 10 屋	153.2 8.0 5.0	下部と中央部に正面から左側面に抜ける孔が2つずつやや斜めに削って穿っている。			①正面のみチョウナ痕が残る。 ②上端は欠損。下端は内側面を削って尖らせる。			古墳前期	42-121 32-121	板	(スギ) 日
122.	WK653 5 区 SK51009 10層水田	169.0 6.5 3.9	下部と中央部に正面から右側面に抜ける孔が2つずつやや斜めに削って穿っている。丸太が穿たれている。上端より45cmの部位に斜め方向の切り欠きがある。			①表面の劣化のためチョウナ痕は不明。かなり半円に仕上げられているのでチョウナ加工されたと思われる。 ②上端は欠損。下端は内側面を削って尖らせている。			古墳前期	42-122 32-122	板	(スギ) 日
123.	WK655 5 区 SK51009 10層水田	168.4 6.6 5.8	下部と中央部に正面から右側面に抜ける孔が2つずつやや斜めに削って穿っている。			①正面と右側面に不規則なチョウナ痕が残る。 ②上端は欠損。下端は内側面と裏面を削って尖らせる。			古墳前期	42-123 32-123	板	(スギ) 日

柱状材10

番号	登録番号 区 出土遺物 品名	法規(cm) 全長 幅 厚さ	形 態	技 法	①上面の加工 ②下端の加工 ③その他	年代範 囲	実測断版 写真断版	木 取り 方 種
124	WK639 5 区 SK51009 10 竹	169.9 8.4 5.4	下部と中央部に正面から側面に抜ける孔が穿たれている。	①正面と側面に不明瞭だがチヨウナ痕がある。 ②上端は丸鋸。下端は側面を削って尖らせる。	古墳前期	42-124 32-124	板 板	スギ 日
125	WK1291 10 区 SK10305 33 竹	162.4 12.7 4.0	四角柱を割った材。上端より19cmの部位に段を作り、下を側かに削って薄くしている。	①正面と右側面にチヨウナ痕がある。 ②上端は丸鋸。下端は側面を削って尖らせている。先端のみ正面と裏面を削る。	先史後期 後葉～ 古墳前期	43-125 38-125	板 板	スギ 日
126	WK1297 10 区 SK10305 33 竹	165.2 9.8 6.8	125と形質が似る。上端より27cmの部位に僅かに段を作り、下を削る。	①山腹面の一端を側面にチヨウナ痕がある。 ②上端は丸鋸。下端は側面を削って尖らせている。先端のみ削る。	先史後期 後葉～ 古墳前期	43-125 33-125	板 板	スギ 日
127	不明	167.4 7.4 4.3	断面半円形で下に向かって幅広くなる。下端は正面、裏面から削って薄くする。複数の形をしているが上端は断面円形でならない。実際の径は43.7cm(断面)。	①表面劣化のため、加工は不明。下端は正面、裏面とも削り切っている。 ②上端は平出しに切り落とす。下端は欠損している。	不明	43-127 33-127	板 板	スギ 日
128	W1365 1 区 SK12302 22 竹	154.2 11.6 9.8	上端は断面円形の丸太状で中央部より裏面を削り下をへう形に仕上げる。	①表面を削りだ丸太木で下端に向かって正面と裏面を削り落とす。 ②上端は丸鋸。下端は薄く削り裏面を先端のみ削って尖らせる。	先史後期 後葉～ 古墳前期	43-128 33-128	芯 芯持 材	スギ
129	WK23 5 区 SK51001 10 竹	167.6 7.5 2.4	下部に向かって幅広くなる材。下端より5cmの部位に幅3.5cmの溝が削られている。	①表面に目立つ加工は見られない。 ②上端は丸鋸。下端は正面から斜めに切り落とす。	古墳前期	43-129 33-129	板 板	サカキ 日
130	W2029 1 区 SK12203 22 竹	112.8 10.6 6.4	下端より25cmが幅広くなく、断面は円形であったと思われる。上端は幅くなり断面冠状のハサニ加工で削られていたと思われる。下端復元径14.8cm上端は断面が一回40cm前後の複角形と推定される。	①正面にはほぼ全面チヨウナで加工されていたと思われる。裏面と下端の右側面は一次加工で削られている。 ②上端・下端ともに丸鋸。	先史後期 後葉～ 古墳前期	44-130 34-130	板 板	スギ 日
131	W1569 2-3 区 ST 6 16 竹	104.4 13.8 16.2	丸太材を加工して、上部を断面11.2cm×8.6cmの方形に加工する。下端は断化しており彫刻している。下部の裏面も幾枚している。	①上端はチヨウナにより加工。 ②下端は粗く切削されており、二次加工の可能性がある。	先史中期 後葉	44-131 34-131	芯 芯持 材	カヤ
132	WK334 5 区 SK51004 10 竹	80.6 9.5 4.9	断面が三角形状となる部材。上部に2cm×1cmの小孔を穿つ。小孔は裏面から穿ったと思われる。上端は丸鋸。	①正面・裏面をほぼ全面チヨウナで加工。左側面は一部に加工跡が残る。右側面はかなり平面で加工の可能性が高い。 ②下端は側面・裏面を削って尖らせるが、先端は直線的に切断されている。	古墳前期	44-132 34-132	板 板	スギ
133	WK1133 10 区 SK10302 35 竹	71.7 8.2 5.4	断面が三角形状となる部材。左側面に2cm×1cmの小孔を穿つ。上端は丸鋸しているが、裏面の一端が丸鋸が認められ、切断の可能性もある。	①正面・裏面をチヨウナで削る。右側面は本日で削られている。 ②下端は斜状の上端で粗く切断されている。	先史後期 後葉～ 古墳前期	44-133 34-133	板 板	スギ 日
134	WK2086 10 区 SK10303 35 竹	57.8 7.8 5.9	下部約6cmが幅広く厚くなっている。上部は断面方形のホゾ状に作られたと推定される。下端は丸鋸。	①上部のホゾ状の部分は正面・左側面をチヨウナで加工し、右側面を削り切っている。下部の大きい部分は全面削り落とした面。 ②下端は裏面を削って尖らせるが、左側面から斜めに切削して尖らせていく。	先史後期 後葉～ 古墳前期	44-134 34-134	板 板	スギ 日
135	WK1090 10 区 SK10302 33 竹	77.3 10.3 5.9	断面が二角形状となる部材。右側面部に2cm×1cmの小孔を穿つ。右側面左端部に上端にかけて丸鋸している。	①正面・裏面とも劣化のため加工痕が不明瞭だが、チヨウナ痕で削り切っている。裏面は半円に、正面はやや丸みを帯びる。 ②下端は裏面を削って尖らせるが、先端は直線的に切断されている。	先史後期 後葉～ 古墳前期	44-135 34-135	板 板	スギ 日
136	WK1051 10 区 SK10302 33 竹	104.4 11.7 5.0	正面から右側面に斜めに孔を穿っている。孔は3cm×1.5cmである。右側面・裏面は削られており、先端は丸鋸であったと推定される。上端は丸鋸。	①正面は全面チヨウナで加工。 ②下端は裏面を斜めに切削。右側面から斜めに切り込みでやや輪を抜く。	先史後期 後葉～ 古墳前期	44-136 34-136	板 板	スギ 日
137	WK1469 10 区 SK10305 33 竹	29.4 12.6 5.4	裏面は円形で元は円柱状であったと推定される。チヨウナ痕が凹曲状である。上端は丸鋸。	①裏面は全面チヨウナで加工する。チヨウナ痕が外周1.5cm前後、長さ2cm前後と非常に細かい。 ②下端は正面・裏面・内側面を削って尖らせていく。	先史後期 後葉～ 古墳前期	44-137 34-137	板 板	スギ 日
138	WK2810 10 区 SK10304 33 竹	125.6 10.8 5.8	上部に長さ8cm、下部に長さ12cmの貫火穴が残る。下端は丸鋸。	①正面の一部をチヨウナで加工している。裏面は木口で削り、内側面は削り落としている。 ②下端は正面と右側面を削り尖らせていく。先端のみ左側面を削る。	先史後期 後葉～ 古墳前期	45-138a 35-138a	板 板	スギ 日

柱状材11

番 号	登録番号 区 出上造構 成土層厚 寸	法益(cm) 全長 幅 厚さ	形 態	技 法	①上端の加工 ②下端の加工 ③その他	年代記	本側固版 か真四版	木 板 厚 り	樹 種
138 b	WK2087 10 区 SK10394 33 層	112.5 10.8 6.4	下部正面に大きさ5cmの両側面に抉ける孔底が残り、その左に長さ12cmの貫穴底がある。上端は欠損。土圧で僅かに倒伏する。	①毛刺はほぼ全面チサウナ加工。裏面は木口で削る。貫穴の左上は斜めに切る二次加工を受けていると思われる。 ②下端は正四、裏面、左側面を切って尖らせている。		出生後期 後葉一 古墳前期	45-138 35-138	板 月	(スギ)
138	WK2810 WK2087	126.6 20.6	下部に一道12cm四方の貫穴が残る。穴の上部は斜めに切り取られているが、穴の下は斜めに残っている。上端は欠損。右側に丸孔があり、左には見られないため、右側に他の部材を組み合わせたと思われる。上端は欠損。	①正面は木口で割りチクナで加工する。裏面、左側面は斜めに削りされている。右側面も斜めに削られていると思われる。 ②下端は貫穴の部材の上下を切り落とし、統としての加工をしている。		出生後期 後葉一 古墳前期	45-138 35-138	板 日	(スギ)
139	WK2916 10 区 SK10304 33 層	122.9 12.5 5.8	下部に貫穴底がある。穴の長さは10cm。裏面は削り落とす。穴の上は削り、下は割り削している。上端は欠損。138mに相当。	①正面をチクナで加工する。左側面は平削で加工が不明確だが、加工されていたと考えられる。裏面、右側面は斜めに削りされている。 ②下端は右側面由来穴の下から割り削りし、さらに右側面、裏面を斜めに削り落とすが、先端は直線的に切り落とされている。		出生後期 後葉一 古墳前期	45-139 35-139	板 月	(スギ)
140	WK2926 10 区 SK10304 33 層	121.9 12.9 7.0	下部に貫穴底がある。穴の長さは9cm。上端の欠損部に残在長8cm×幅3cmの孔底が残る。右側面は丸孔を帯びるように加工されている。元は円柱状の断面を持つ部材であった可能性がある。	①正面・裏面は木口で削り、正面下部のみチクナで裏面に偏して平面を削る。右側面は3列のチサウナ底が残り、丸孔を帯びるように加工されている。 ②正面は元の穴の下を削って輪郭を狭くし、先端は両側面を削って尖らせる。		出生後期 後葉一 古墳前期	45-140 35-140	板 月	(スギ)
141	WK2576 10 区 SK10306 33 層	112.4 13.4 4.6	下部に長さ9cmの貫穴底が残る。穴の上は斜めに削り、下は割り削している。上端は劣化で倒伏している。	①右側面のみチクナで平坦に加工している。他は削り削っている。 ②正面は左側面と正面の右方向から削て尖らせ、先端は正面から斜めの工具で切断している。		出生後期 後葉一 古墳前期	45-141 35-141	板 月	(スギ)
142	WK1348 10 区 SK10326 33 層	112.8 5.6 5.8	円形の断面を持つ材を1/4に削ったと思われる。下部に長さ6.8cmの孔底が残る。上端は欠損。	①正面・左側面にかけて丸を帯びるようにチクナで削る。チクナは4列残る。裏面は木口で削り、右側面は削り削る。 ②正面は丸孔から正面を大きく削り、先端のみ両側面を削って尖らせる。		出生後期 後葉一 古墳前期	45-142 35-142	板 月	(スギ)
143	WK2551 10 区 SK10306 33 層	114.9 7.6 5.0	下部に長さ7cmの孔底が残る。孔の上部は左側面を削り、下部は削り削っている。上部は劣化し欠損している。	①正面と右側面はチクナで加工。裏面は木口で削り、左側面は削り削りしている。 ②正面は丸孔を及ぼすように両側面を削る。先端は側面側から直線的に削り切られている。		出生後期 後葉一 古墳前期	46-143 36-143	板 月	(スギ)
144	WK2722 10 区 SK10304 33 層	109.3 4.8 6.3	下部に長さ9.1cmの貫穴底が残る。穴の貫穴から下は削り削し、やや縮径くなっているが、下端を尖らせる加工はされていない。	①正面・右側面をチクナで加工。裏面は木口で削り、左側面は削り削りしている。 ②正面は正面側から切り落としている。上端は欠損しているが、一部に丸孔底が残り、切断している可能性がある。		出生後期 後葉一 古墳前期	45-144 36-144	板 月	(スギ)
145	WK2521 10 区 SK10306 33 層	103.1 8.5 8.0	下部に長さ7cmの溝が切られている。溝の部分は丸を帯び、断面が1/4円柱となるように加工されている。元は断面が四角形の材で、溝の部分のみ円形となるよう加工されていたと推定される。上端は欠損。	①裏面のみチクナで平坦に加工される。溝の中の部分もチクナ底が残る。他は削り削りされている。 ②正面は丸孔から切り落としている。先端は正面に削り落とされている。		出生後期 後葉一 古墳前期	46-145 36-145	板 月	(スギ)
146	WK1825 10 区 SK10302 33 層	109.2 7.3 6.7	下部に長さ9cmの貫穴底が残る。穴より下は削り削いている。上端は欠損。下端は1/2の幅に削り削かせている。	①正面はチクナで平坦に加工。正面は木口で削り、右側面は削り削りされている。 ②正面は穴の下を削り削り、縦を抜くしているが、先端は直線的に切り落としている。		出生後期 後葉一 古墳前期	46-146 36-146	板 月	(スギ)
147	WK1854 10 区 SK10302 33 層	106.0 4.0 5.0	下部に長さ7cmの孔底が残る。上部は欠損。下部は上部に比べてや厚い。	①正面が削り削りされている。 ②下端は裏面を大きく削て尖らせている。		出生後期 後葉一 古墳前期	46-147 36-147	板 月	(スギ)
148	WK1502 10 区 SK10305 36 層	94.4 3.2 3.2	下部に長さ約3.1cmの孔底が残る。上端は欠損。細く削られている。	①正面のみチクナで平坦に加工している。裏面は木口で削り、両側面は削り削りされている。 ②下端は裏面から斧状の工具で切断している。		出生後期 後葉一 古墳前期	46-148 36-148	板 月	(スギ)
149	SK7-10-14 7 区 SKT1007 10 層	93.0 7.0 3.9	下部に長さ約5cmの孔底が残る。上端はやや劣化している。	①正面のみチクナで平坦に加工している。裏面、右側面は削り削りされている。左側面は一部削り削りされているようであるが、平坦であり、加工の可能性もある。 ②上端は裏面から切り落としたと思われる。下端は両側面を切り落とす。		出生後期 後葉一 古墳前期	46-149 36-149	板 月	(スギ)
150	WK2189 10 区 SK10303 35 層	92.0 8.0 3.7	中央よりやや上部に長さ8.5cm、幅2cm弱の方形の切り欠き底が残る。下部は土圧により大きく弯曲する。下端は劣化している。	①左側面はチクナで加工。左側面と正面との間の角を削るような加工も見られる。正面と裏面は木口で削る。右側面は削り削りされている。 ②上端は右側面裏面から斧状の工具で切断。下端は両側面を切り落とす。		出生後期 後葉一 古墳前期	46-150 36-150	板 月	(スギ)

柱状材12

番号	登録番号 区 内七種類 登記上位	法量(cm) 全長 幅 厚さ	形 態	柱 法	①上端の加工 ②下端の加工 ③その他	年代範 囲	支綱版 支綱版	本 取り 組
151	WK1915 10 区 SK103506 35 層	70.0 6.2 4.6	上部に長さ 5cm の方形の孔底が残る。上端は欠損。	①正面・裏面はチョウナで平面に加工されている。 背面側は木目で削り、左側面も削り剥きされている。 ②下端は斧状の工具で切り落としている。正面と裏面から各々切り込んでいたため、裏面が一段低くなっている。	先生後期 後葉一 古墳前期	46-151 36-151	追 延 日	(文 化)
152	WK1574 10 区 SK103302 33 層	72.0 10.0 4.8	中央よりやや下に長さ 5cm の孔底が残る。上端に孔底の切れ込みがあるが、孔底が切断に伴う切れ込みか不明。	①正面のみチョウナで削る。裏面は木目で削り、両側面は削り落としている。 ②上端は板で切削している。下端は左側面からホゾ穴に向かって斜めに削り落とし、穴からは削り落としている。上端は斧状の工具で粗く切っている。刃痕が裏面に残る。刃幅 2.5cm。	先生後期 後葉一 古墳前期	46-152 36-152	板 日	(文 化)
153	WK2709 10 区 SK103304 33 層	76.5 8.4 4.9	下端部に長さ 2cm のホゾ穴が残る。下端より 20cm 正面を削り。やや落とする。	①正面・裏面は木目で削り削して削る。 ②上端は板で切削している。下端は左側面からホゾ穴に向かって斜めに削り落とし、穴からは削り落として削る。	先生後期 後葉一 古墳前期	46-153 36 153	板 日	(文 化)
154	WK1397 10 区 SK103504 35 層	78.6 4.3 5.3	左側面中央部に裏から櫻を打ち込んだ跡があり、さらに 13cm にも桜を打ったと想定される蓋がある。下端は下から上に向かって切り込んだと思われる、裏表の部分で刀を止めている。上端は欠損。	①正面は全面チョウナで加工。裏面は木目で削る。右側面は削り落し、左側面は削り落し削り落す加工板が残る。 ②下端は斧状の工具で右側面から直線的に削り落としている。上端は斧状の工具で粗く切っている。特に左側面から斜めに切り込み削くする。	先生後期 後葉一 古墳前期	46-154 36-154	板 日	(文 化)
155	WK2837 10 区 SK103304 33 層	119.4 8.0 6.0	下部に長さ 9cm の穴底痕が残る。丸み方形の断面となる材を 1/4 に削ったものと想定される。上端は欠損。	①正面と両側面をチョウナで加工する。正面はやや丸みを帯びる。 ②下端は両側面を削り、裏面との角を取るように削られている。先端は平坦に加工されている。	先生後期 後葉一 古墳前期	47-155 37-155	板 日	(文 化)
156	WK2622 10 区 SK103306 33 層	121.2 12.1 5.8	下部に長さ約 6cm のホゾ穴底が残る。穴の周囲に他の部材が当たっていたために孔が残る。上端は欠損。	①正面・裏面は木目で削る。両側面は削り取られて削る。 ②下端は両側面を削って尖らせる。	先生後期 後葉一 古墳前期	47-156 37-156	板 日	(文 化)
157	WK1396 10 区 SK103305 33 層	116.4 8.7 4.4	下部に長さ 6.3cm のホゾ穴底が残る。正面が削り落がれていたため裏面に彫りが残るのみである。端は劣化し、欠損している。	①左側面をチョウナで加工する。正面・裏面は木目で削り落す。右側面は削り取って削る。 ②下端は正面・裏面・両側面を削って粗く尖らせる。	先生後期 後葉一 古墳前期	47-157 37-157	板 日	(文 化)
158	WK2419 10 区 SK103308 33 層	107.0 7.8 5.3	下端より約 20cm の部位の正面に段差がある。長さ 8cm 前後の穴の底跡と思われる。右側面の中央部に長さ 3cm の切り欠き跡がある。上端は欠損。	①正面はチョウナで加工。裏面は木目で削る。両側面は削り落して削る。 ②下端は両側面を削り尖らせる。正面も穴の底跡の下の部分を削り落として削る。	先生後期 後葉一 古墳前期	47-158 37-158	板 日	(文 化)
159	WK1268 10 区 SK103305 33 層	125.1 14.4 3.7	正面・裏面とも上端・下端が削化している。中央よりやや下に 2.5cm × 3cm の方形孔を穿つ。裏面の上の長さ 18cm × 幅 4.5cm にわたる削りがあり、当たりの可能性がある。上端は劣化欠損。	①正面・裏面とも削り落し一部をチョウナで削って調整する。両側面は木目で削る。 ②孔は両側から穿っている。	先生後期 後葉一 古墳前期	47-159 37-159	板 日	(文 化)
160	WK2206 10 区 SK103304 33 層	117.6 12.4 5.9	上端に空孔の痕跡あり。残存長 8.5cm 幅 3cm の縦長い孔がある。上端には欠損しているための長いはり跡。	①右側面をチョウナで削る。正面・裏面は木目で削り、一部をチョウナで削る。 ②左側面は削り落す。 ③下端は両側面を削り尖らせる。先端のみ正面も削る。	先生後期 後葉一 古墳前期	47-160 37-160	板 日	(文 化)
161	W1836 10 区 SK103504 35 層	92.1 7.2 4.9	上部に正面から左側面に抜ける穿孔があり、中央部に裏面から裏面に抜ける穿孔がある。上端に丸みと思われる切り欠きがあり、中央よりやや下に方形の切り欠きがある。上端は欠損。	①正面・裏面・左側面はチョウナで加工する。右側面は削り落している。 ②下端は左側面から斜めに切り落としている。 ③下部の左側面部を長さ 9cm にわたって斧状の工具で削っている。	先生後期 後葉一 古墳前期	47-161 37-161	追 延 日	(文 化)
162	WK2363 10 区 SK103506 35 層	108.6 7.9 4.1	下端に 2.5cm × 2cm の方形孔を穿つ。裏面の左半分が斜めに削っている。上端は欠損。	①全面削り落された面で目立つ加工痕はないが、正面の左半分が削めに平坦になってしまい、明確な加工痕はないが、加工された可能性がある。 ②下端は左側面を削り落す。さらに角を取る様に削り落して尖らせる。	先生後期 後葉一 古墳前期	47-162 37-162	板 日	(文 化)
163	W1545 11 区 SK12202 22 層	31.5 11.2 5.8	上端の太部分が欠損していると見られる。一辺が 4cm の小穴穴を穿つ。穴は裏面が長さ 7cm とやや縦長となる。このため孔の中心に段差が見られる。	①正面・裏面とも木目で削る。両側面は削り落して削る。 ②下端は正面に両側面を削って尖らせるが、先端は正面・裏面も削る。	先生後期 後葉一 古墳前期	47-163 37-163	板 日	(文 化)
164	W1761 11 区 SK12206 22 層	30.8 12.0 4.9	上部約 11cm をホゾ状に作り、そのホゾ部に 2cm × 2.5cm の方形孔を穿つ。下端の大部分が欠損しており裏面は厚めの板材であった可能性が高い。	①表面の劣化が著しく、加工痕は不明瞭。 ②上部のホゾ状の部分は正面・裏面を側面に削り落としている。	先生後期 後葉一 古墳前期	47-164 37-164	追 延 日	(文 化)

柱状材13

番 号	登録番号 区・通 出上層部	法規(m) 全長 幅 厚さ	形 通	柱 法 透	①上端の加工 ②下端の加工 ③その他の	年代観 古調版 等真版	木取 板	樹 種
165	W1036 2-3 区 SK21206 12 層	45.4 7.6 3.2	下端に一辺2mmの方形状の孔を残す。上部は下部よりも僅かに幅が狭くなっている。上端は欠損。	①正面・裏面ともチップウナで加工する。側面もチップウナで平坦に削っている。 ②下端は側面削を斜めに切って尖らせる。 ③孔は上に正面から穿ち、裏面も僅かに削る。	先牛後期 後裏一 古調前期	47-165 37-165	板	(え ギ) 目
166	W1002 2-3 区 SK21206 12 層	55.8 6.8 2.5	上部に横長の排水孔を、下に並んで2つ穿つ。孔間は6cm。上端は欠損するが切断された可能性もある。	①正面・裏面は削り跡が残っている。左側面は木口で削っている。右側面はチップウナで加工されている。 ②下端は正面に右側面を斜めに切り、左側面も僅かに切って尖らせる。 ③孔は正面・裏面両方から穿っている。	先牛後期 後裏一 古調前期	47-166 37-166	板	(え ギ) 目
167	W2308 1 区 SK12205 22 層	67.8 8.0 3.0	下端に一辺約3mmの方彎孔が残る。上端は劣化のため欠損。	①正面・裏面とも木口で削り、両側面も削り跡が残り、断面は加工直後は見られない。 ②下端は両側面を斜めに切って尖らせる。 ③孔は正面から穿つ。	先牛後期 後裏一 古調前期	47-167 37-167	板	(え ギ) 目
168	W3024 6 区 SK61601 16 層	69.9 6.7 3.4	左側面に孔既と思われる方彎の切り欠きが2つ残る。上端には穴あき部分も孔であった可能性がある。切り欠きの間隔は16cm。上端からの部分と上の切り欠きとの間隔は17cmである。	①正面・裏面は木口で削り、全面をチップウナで加工する。 裏面は木口で削り、両側面は削り跡。 ②上端は両側面を斜めに切って尖らせる。 ③孔は木口から穿つ。	先牛後期 後裏一 古調前期	47-168 37-168	板	(え ギ) 目
169	W3022 6 区 SK61601 16 層	67.9 6.8 3.6	上部に一辺2.5mmのボソ穴を穿つ。ホゾ穴の周囲はチップウナで削製しており、他の木材を組合せたためか加工と思われる。上部に比べて下部2/3は幅を狭く加工している。	①正面・裏面は木口で削り、全面をチップウナで加工している。左側面は削り跡が残っている。 ②上端は両側面から削切。下端は正面に両側面を削つて尖らせる。 ③孔は正面を削る。	先牛後期 後裏一 古調前期	47-169 37-169	板	(え ギ) 目
170	W2309 1 区 SK12205 22 層	74.2 6.2 4.6	下端に一辺3mmの方彎孔が残る。正面のみ孔の周囲の表面を薄くチップウナで削る。上端は劣化欠損。	①正面・裏面は木口で削り、両側面は削り跡している。 ②下端は角材の角を取るように側面から切り込み尖らせる。	先牛後期 後裏一 古調前期	47-170 37-170	板	(え ギ) 目
171	WK1654 10 区 SK10302 35 層	86.8 5.5 5.3	中央部に孔既と思われる切り欠きがある。孔は長さ4.5cm、上は裏面に切り込み、下は斜めに切り込んである。近づいて見ると角材の丸となる可能性がある。孔から側面の右側面をさらに削て幅を狭くしている。上端は欠損。	①正面は不規則だが全面をチップウナで加工している。他の面は削り跡している。 ②下端は正面と両側面を切って尖らせる。	先牛後期 後裏一 古調前期	48-171 38-171	板	(え ギ) 目
172	W 982 2-3 区 SK21202 12 層	97.6 6.4 5.7	中央部よりやや上に孔既と思われる抉りがある。抉りは上から斜めに切り込み、下を裏面に切って面を切り欠く。	①正面・裏面は木口で削る。裏面の一部にチップウナ痕が残る。両側面は斜めに切り込みがないが、平坦であり、加工した可能性がある。 ②上端は切り落しと、裏面と裏面から上に、下端は切り落されている。	先牛後期 後裏一 古調前期	48-172 38-172	板	(え ギ) 目
173	W 730 10 区 30B 層	155.8 7.6 5.6	中央部よりやや下に、下から上に切り込んだ抉り状の孔がある。裏面下端を長さ7.5cmにわたって削り削り、あたり状の凹部をする。上部がやや薄くなっている。上端は欠損。	①正面・裏面は木口で削り、両側面も削り直している。 ②下端は正面と両側面を削って尖らせる。	古調中期	48-173 38-173	板	(え ギ) 目
174	W 16 2 区 SK20902 事務所付 9 層	82.2 5.0 7.8	正面・右側面に赤鉛色の孔既が3箇所残存する。孔は外側が長く内側がやや短く、下端は幅が狭くなるが、劣化による欠損と思われる。	①裏面は木口で削られていると思われる。右側面、正面側面は削り跡している。左側面はやや丸みを帯びるが削り出で加工されて可能性がある。 ②上端は正面と裏面を斜めに切り尖らせる。	古調中期	48-174 38-174	板 板	(え ギ) 目
175	WK595 5 区 SK51008 10 層	71.2 7.1 5.0	左側面に抉りを入れる。抉りは4箇所残存し、開隙は20mm~25mm程度である。完全に残る抉りは長さ11cm深さ2cm程度である。上端は欠損。	①正面から左側面にかけて横やかな曲面を作る。 裏面は平削で削り直せる可能性がある。右側面は木口で削り直している。 ②下端は右側面・裏面を削り尖らせる。	古調前期	48-175 38-175	板 板	(え ギ) 目
176	W2382 6 区 SK61601 16 層	124.7 3.9 5.48	長さ11cm~15cmの抉りが3箇所残存する。抉りは上から下へ削りを入れて切り欠く。	①正面・裏面はチップウナで加工する。両側面は削り直している。 ②上端は左側面を削り細くする。下端は正面から切り込みで切削している。裏面側を一段削り、尖らせる。	先牛後期 後裏一 古調前期	48-176 38-176	板	(え ギ) 目
177	W2374 6 区 SK61601 16 層	134.2 6.2 5.6	正面・左側面に抉り既が3箇所残存する。抉りは上から下に向って前後込んで切り欠き、長さは10mm後で開隙は上が34cm、下が36cmである。上端は欠損。	①正面・左側面は木口で削り、チップウナで加工されて削り跡している。裏面もチップウナで削る。両側面は木口で削り直されている。 ②下端は正面から斜めに切り込んで切削している。	先牛後期 後裏一 古調前期	48-177 38-177	板	(え ギ) 目
178	W 66 2 区 SK20601 6 層	87.0 10.6 3.3	右側面に複雑なV字状の切り欠きがある。切り欠きは長さ10.8cm、下から斜めに切り込んで面を欠いている。上端は欠損。裏面が黒化している。	①正面・左側面・裏面は木口で削り直している。右側面は削り跡が残っている。 ②下端は正面を削り薄くしている。裏面も先端のみ削る。	平安	48-178 38-178	板	(え ギ) 目

番 号	登録番号 区 出・登録 登録位 所	法規(m) 全長 幅 厚さ	形 態	技 法	①上端の加工 ②下端の加工 ③その他			年代 区分	古美開版 子真向版	木 取 り 種 類
					①正面の加工 ②裏面の加工 ③その他					
179	W3416 6 区 SKR61001 15 屋 西岸	73.6 6.9 1.0	下端を右側面から人字く切り欠く。正面中央部を長さ12cmにわたりてやや薄く削っている。	①正面は木口で削り、チップナで溝整する。裏面は木材をもとにもやや削りに削る。右側面は削りはがし、左側面はチップナで削りに削られている。 ②正面は斧状の工具で横く切削する。下端は正面・裏面から斜めに削り尖らせる。				昭和後期 古美開版 子真向版	48-179 38-179	板 (スギ) 日
180	W 652 23 区 SKR2101 12 屋	32.7 7.2 2.6	元は断面が円形となっていたと思われる。右側に木口の上端のような穂いV字状の切り欠きがある。上端は欠損。	①正面・裏面とも木口で削っている。裏面は劣化のため削りは不明。 ②下端は斜めに切り落としている。				昭和後期 古美開版 子真向版	48-180 38-180	板 (スギ) 日
181	W2441 1 区 SKU2203 22 屋	66.8 6.3 3.6	下端と正面と裏面の表面を削り落すする跡跡が見られる。裏面の削りは正面に比べてやや強くなっている。上端は欠損。	①正面・裏面はチップナで削るがかなり粗い加工である。両側面は削り削されている。 ②下端は斧状の工具で切り落とされている。				昭和後期 古美開版 子真向版	48-181 38-181	板 (スギ) 日
182	WK1119 10 区 SKU10302 33 屋	119.0 10.4 6.0	上端に非貫通の孔穴を2つ、穴は4.5cm×3cmで深さは4cmである。また、周囲が他の部分よりも僅かに盛り上がる。上端は欠損。	①正面は木口で削り、一端をチップナで加工。裏面はチップナで加工する。裏面は木口で削り、右側面は削り削られている。 ②下端は裏面を削り尖らせる。				昭和後期 古美開版 子真向版	49-182 30-182	板 (スギ) 日
183	WK1443 10 区 SKU10305 33 屋	95.6 10.8 4.5	心側縁のやや上部よりに8cm×3cmの非貫通の方形の孔が残る。上端は欠損。	①正面と左側面をチップナで加工する。裏面は木口で削り、右側面は削り削られている。 ②下端は裏側面を切って尖らせる。正面先端部に段差が見られる。				昭和後期 古美開版 子真向版	49-183 30-183	板 (スギ) 日
184	W 56 3 区 6 屋	93.0 9.8 4.1	非貫通の孔痕を削り削したと思われる跡が2箇所に存在する。孔の大きさ10cm×11cm、孔幅は35mmと推定される。上端は欠損と思われる。	①正面は劣化のため加工底は不明。裏面は木口で加工の粗さが高い。右側面は沿らかに丸みを帯び劣化しているが、加工されたと思われる。左側面は削り削られている。 ②下端は斧状の工具で切断されている。				平安	49-184 39-184	板 (スギ) 日
185	W 230 1 区 SKR12001 20 屋	45.7 7.0 6.0	右側縁に孔痕の可能性のある跡跡が2箇所として残存する。孔の木口は削り削されている。右側面上面も孔痕の可能性がある。	①全体的に劣化し、加工は不明瞭である。正面・裏面とも木口で削り、右側面は削り削していると思われる。 ②上端は削り削し、折折する。下端は右側面を切り尖らせる。				奈良・平安	49-185 39-185	板 (スギ) 日
186	W 81 23 区 SKR12001 10 屋	85.8 8.2 3.0	上部に穂いからV字状の溝を切る。溝の幅は約3mm、溝の裏面は約4mmにわたって斧状の工具で削り落としている。刀痕が多く残り刃幅は2.5mm前後。	①正面・裏面は木口で削り、正面の一部をチップナで削る。裏面は削り削いていると思われる。 ②上端は削り削し、折折する。下端は右側面を削り尖らせる。				古墳中期	49-186 39-186	板 (スギ) 日
187	W 411 5 区 SKR51301 3 号庫 13 屋	138.2 17.2 8.4	右端に左側面化している。下から約3cmの部位にかえし状の跡が見られる。段は正面・裏面・右側縁を上から下へ削って作成している。上端・下端ともに欠損。刃の跡跡は丸房形である。	①削成化して表皮の加工は不明瞭。正面は手廻で加工されている。裏面も加工した可能性がある。右側縁は木口で削り削られていると思われる。				弥生中期 後葉・ 後半後葉 初期	49-187 39-187	芯 芯持 木 材
188	W1481 1 区 SKU12206 22 屋	22.4 8.1 4.4	上端は欠損。大部分が欠損していると思われる。正面中央に5cm×6cmの細い削り跡があり、斜めに他の木材の入る穴穴であったと推定される。	①正面は削り跡が見られる。左側面は木口で削れています。裏面・右側面にかけた深い円形となるようく削り削す。				弥生後期 後葉・ 古墳前期	49-188 39-188	板 (スギ) 日
189	WK1101 10 区 SKU10302 35 屋	80.0 14.4 4.7	正面に斜めの穿孔がある。孔の角度は全体で12°である。上端は欠損。	①正面・裏面は木口で削っている。左側縁の一部を削るが削るが削る。 ②下端は右側縁から大きく切り、孔を切削し先端まで削り、左側縁も斜めに削って尖らせる。				弥生後期 後葉・ 古墳前期	49-189 39-189	板 (スギ) 日
190	WK1220 10 区 SKU10305 33 屋	113.0 16.8 5.0	正面に斜めの穿孔がある。孔の角度は32°である。全面が劣化している。下端は欠損する。中央で斧状の工具により2つに切断されている。切断部分を削る。	①裏面の加工は劣化のため不明だが全面削り削されている。 ②下端は右側縁を削って尖らせる。正面も先端をやや削る。				弥生後期 後葉・ 古墳前期	49-190 39-190	板 コ シ イ 日
191	WK1216 10 区 SKU10305 33 屋	90.4 12.2 4.8	下端に斜めの穿孔がある。下端は欠損する。中央で斧状の工具により2つに切断されている。切断部分を削る。	①正面・裏面とともに木口で削ったと思われる。両側面は平削りに加工している。木口付加工痕は見られない。 ②正面は右側縁から大きく切り、孔を切削し先端まで削り、左側縁も斜めに削って尖らせる。				弥生後期 後葉・ 古墳前期	49-191 39-191	板 コ ナ ラ 節 日
192	WK1212 10 区 SKU10306 35 屋	164.8 7.2 4.2	下端左側面に約1cmの後退が見られる。下部の裏面が劣化し欠損している。上端は欠損。	①正面・裏面は木口で削っている。右側縁は僅かに削ることによるようにチップナで加工する。左側縁は削り削している。 ②下端は右側縁から大きく切り、孔を切削し先端まで削り、左側縁も斜めに削って尖らせる。先端は斧で直線的に切断する。				弥生後期 後葉・ 古墳前期	50-192 40-192	板 (スギ) 日

柱状材15

番号	登録番号 区 出土遺物 出土位置	法長(cm) 全長 幅 厚さ	形 態	技 法	①上端の加工 ②下端の加工 ③その他	年代範 囲	実測版 写真版	木 取り (スギ)	樹 種
193	WK2219 10 区 SK103506 35 層	105.4 6.9 4.3	下端にホゾ状の細い突起を作る。突起の残存長22cm。左側面と正面をショウナで加工する。上端は欠損。	①正面・裏面は木目で削る。左側面はショウナで加工する。右側面は削り剥している。 ②下端は左側面を斜めに削り、やや膨張する。ホゾ状の突起の先端は左側面から切り落す。	弥生後期 後葉～ 古墳崩期	50-193 40-193	板 日	(スギ)	
194	WK1795 10 区 SK103504 35 層	60.4 4.6 4.4	下部にやや斜めに傾く穿孔底がある。孔は長さ4cm、角度は75°である。上端は欠損。	①正面・裏面は木目で削る。正面は加工の可能性がある。左右側面は削り剥している。 ②下端は孔底から下の部分の左側面を削りがし幅を狭くる。	弥生後期 後葉～ 古墳崩期	50-194 40-194	板 日	(スギ)	
195	W 766 2-3 区 SK21201 12 層	72.9 7.3 3.5	下端にホゾ状の突起を作り出す。突起は長さ約7cm、厚さ2.4cm、幅3.5cmで付け根の部分の正面と右側面がややくびれる。上端は欠損。	①正面はチヌナで平面に加工。裏面は平坦だが立つ加工がなく、削り剥されていると思われる。右側面は木目で削る。 ②下端は裏面は正面と右側面を斜めに切り尖らせる。	弥生後期 後葉～ 古墳崩期	50-195 40-195	板 日	(スギ)	
196	W1055 2-3 区 SK21201 12 層	82.4 7.6 4.4	上端にホゾ状の突起を作り出す。突起の残存長約11cm、幅約3cm、厚さ4cm。上端は欠損している。	①正面・裏面は木目で削り、右側面は削り剥している。 ②下端は裏面に右側面を削るが、正面・裏面の先端角の先端を8方向から削って尖らせる。	弥生後期 後葉～ 古墳崩期	50-196 40-196	板 日	(スギ)	
197	WK2852 10 区 SK103504 35 層	105.2 10.7 6.1	正面から右側面に抜ける孔が2箇所ある。孔の間は35.5cm。上端は欠損。下端も欠損している。	①正面・両側面はショウナで加工する。正面の加工は不明瞭だが全面加工されていると思われる。裏面は削り剥いている。 ②下端は棒状の工具で直線的に切削されている。刃幅は約2.5cmである。	外洋後期 後葉～ 古墳崩期	50-197 39-197	板 日	(スギ)	
198	WK681 5 区 SK51009 10 層	147.8 7.9 5.6	正面から左側面に抜ける孔が2箇所ある。孔の間は50cm。下端より右側面の部位にも波状があり、孔または切り欠きの模様の可能性がある。上端は劣化し欠損する。	①正面・左側面はショウナで加工されている。右側面は木目で削り、裏面は削り剥されている。 ②下端は右側面を斜めに切って尖らせる。左側面も僅かに削る。 ③孔は正面と左側面の両方から穿つ。孔は1.5cm四方では手作は傾く。	古墳崩期	50-198 39-198	板 日	(スギ)	
199	W1062 2-3 区 SK21201 12 層	57.7 4.7 2.5	下端が大きく円状のカーブを描くように切り欠かれている。元は半円状の切り欠きのある板材の可能性がある。上端は欠損。	①正面・裏面・左側面をショウナで加工する。右側面は削り剥している。 ②下端は円状の切り欠きの部分で切断する。	弥生後期 後葉～ 古墳崩期	50-199 39-199	板 日	(スギ)	
200	W1442 2-3 区 SK21461 14 層	50.2 8.6 5.0	下端に人気な弧状の切り欠きがある。下部に比べ、I.部はやや幅が狭い。	①劣化のため加工痕が不明瞭だが正面と右側面にカーブ状が残る。左側面と裏面は削り剥されていると思われる。 ②上端は切り落とされた可能性がある。下端は左側面と裏面を削って尖らせる。	弥生崩 50-200 39-200	板 日	(スギ)		
201	W2833 10 区 SK103503 35 層	27.2 7.6 6.8	下端にホゾ穴状の突起を作る。突起は長さ9cm、幅2.5cm、厚さ5.1cm残存する。	①正面・裏面は木目で削る。右側面は削り剥されており、左側面は既往またはショウナで削られていて。 ②上端は加工化しているが、先端は半円状の工具で切削されている。下端は正面と右側面から切り込んで折り取っている。	弥生後期 後葉～ 古墳崩期	50-201 40-201	板 日	(スギ)	
202	WK1470 10 区 SK103504 35 層	78.4 3.4 5.3	下端に長さ3.5cm程度のホゾ孔の突起が残存する。突起は右端まであたると思われるが切削されている。厚い部分との段差2cm。上端は欠損。	①正面はショウナで加工する。裏面は木目で削り、右側面は削り剥されている。左側面が削られ方が厚くななる。左側面と裏面と削る溝が残る。 ②下端は棒状の工具で切削する。	弥生後期 後葉～ 古墳崩期	50-202 40-202	板 日	(スギ)	
203	WK1714 10 区 SK103502 33 層	74.8 8.8 5.0	下端にホゾ状の突起が残存する。突起の残存長25cm。右側面部分との段差は3cm。上端は欠損。	①正面はショウナで加工する。右側面は削り剥した上をショウナで削る。左側面・裏面は削り剥している。 ②下端は棒状の工具で切削されている。	弥生後期 後葉～ 古墳崩期	50-203 40-203	板 日	(スギ)	
204	WK1718 10 区 SK103502 35 層	60.6 10.8 3.8	下部の右部分が切り取られている。下端より14.3cmの右側面にはショウナ痕があるが、その上7cmは削り剥して状態になってしまっており、二次加工の可能性はある。上端は欠損。劣化が著しい。	①正面・左側面はショウナで加工する。裏面は木目で削っている。右側面は下端のみショウナで削り、他の部分は削り剥している。 ②下端より30cmの正面を薄く削り、下端に向かって薄くなるように削り作られている。	弥生後期 後葉～ 古墳崩期	50-204 40-204	板 日	(スギ)	
205	WK235 5 区 SK51003 10 層	112.4	正面に8箇所の本釘を打ち込んだ孔。2箇所に孔底がある。うち1箇所に木釘が残存し、2箇所は真までも木釘が貫通する。下部の裏面にも1箇所木釘の入った跡がある。上端は欠損。	①正面と左側面はショウナで平坦に加工されている。右側面は削り剥されている。 ②下端は裏面を削って尖らせる。	古墳崩期	51-205 41-205	板 日	(スギ)	
206	WK1559 10 区 SK103605 36 層	85.8 3.6 4.8	正面中央部と下端に木釘を打ち込んだと思われる孔跡があり、左側面にも上端と中央部に痕跡が残る。右側面には木釘が打ち込まれた状態で残る。下端の上端は欠損。	①正面と右側面はショウナで削る。裏面は木目で削り、左側面は削り剥されている。 ②上端と裏面が切削されている。下端は正面・裏面を削って尖らせる。	弥生後期 後葉～ 古墳崩期	51-206 41-206	板 日	(スギ)	

柱状材16

番 号	登録番号 区 出上機種 出上位	法量(cm) 全長 幅 厚さ	形 態	柱 法	①上端の加工 ②下端の加工 ③その他	年代記	古墳後期 後葉～占墳前期	本 取 引	樹 種
207	W2497 6 区 SK1601 16 箱	58.8 4.0 2.1	下端より5cmの部位に円形の压痕が残る。元は板材で あった可能性がある。	①正面・裏面・両側面をチップウッドで加工する。右側 面は木目で削る。裏面の上端より25.8mmが削りき れています。 ②上端は丸削りと思われる。下端は欠損しているが、 直線的に加工されていたと思われる。	朱生後期 後葉～占墳前期	51-207 41-207	板 日	板 (スギ)	
208	W1056 2-3 区 SK12301 12 箱	65.1 5.2 5.0	正面の中央線上に段差がある。段差の裏面の部分は平 坦になっており、加工されたと思われる。正面の左半 分は木口で削っている。上端は欠損。	①正面右側部分～右側面は丸みを帯びているが、加 工痕はなく、削りきされたと思われる。両側面は削 り刻む。裏面は木口で削られている。 ②下端はS字方向から削り尖らせる。	朱生後期 後葉～古墳前期	51-208 41-208	板 日	板 (スギ)	
209	WK1052 10 区 SK10302 35 箱	81.4 4.6 3.3	正面～両側面の間の角を削り取るように加工してい る。下端には段差があり、小孔の候跡の可能性がある。 上端は欠損。	①正面は板工具に不向きだが手道具で全面加工され ていたと思われる。両側面は木口で削っている。裏 面は削りきされている。 ②下端はS字方向を斜めに切り尖らせる。先端は正 面から底面に切り込んで欠く。	朱生後期 後葉～古墳前期	51-209 41-209	板 日	板 (スギ)	
210	WK1636 10 区 SK10302 33 箱	88.1 4.8 3.6	正面～両側面の間の角を削り取るように加工してい る。上端は劣化し欠損している。	①正面は板工具になるよう加工する。両側面は木口で 削っているが、裏面は加工した可能性がある。裏 面は削りきされている。 ②下端は片状の工具で正反面からの断面。	朱生後期 後葉～古墳前期	51-210 41-210	板 日	板 (スギ)	
211	WK2793 10 区 SK10304 33 箱	119.6.3 42	正面右側面～右側面にかけて27cmの長さで溝を削る。 右側面は削り刻まれているいため溝の部分が右側に広 がる可能性がある。上端は欠損。	①正面・裏面は木口で削っている。両側面は削り刻 まれている。 ②下端は両側面を削って尖らせる。	朱生後期 後葉～占墳前期	51-211 41-211	板 日	板 (スギ)	
212	WK1288 10 区 SK10305 33 箱	136.7 10.7 6.8	正面～両側面にかけて丸みを削りて削られている。元 は円錐の断面を持つ材を削り取ったものと推定され る。上端は欠損。下端も先端部が劣化し欠損している。	①正面は板工具が不向きだが3～4列のチップウ ッドで削り刻まれたと思われる。右側面は木口で削っ てある。裏面は削りきされており、中央が僅かに人 為的なものではない。 ②下端は多方から削り尖らせている。	朱生後期 後葉～古墳前期	51-212 41-212	板 日	板 (スギ)	
213	W2582 6 区 SK1601 16 箱	142.8 8.5 5.2	上端と両側面を斜めに削り、やや尖らせる。上部の一部 が縮んでしまっているが、劣化し取除したものもある。	①正面と両側面をチップウッドで加工する。右側面と 裏面は斜めに削り出している。 ②上端は両側面から斜めに切り込んで切削している。下 端は両側面を斜めに削り尖らせる。	朱生後期 後葉～古墳前期	51-213 41-213	板 日	板 (スギ)	
214	W1179 10 区 SK10302 33 箱	22.4 8.0 7.3	上端に枝状の裂を作り出す。下端は丸みを帯びる大き な块りがあり些少の一部があった可能性がある。頭部 は表面に近い角度で両側面を片方向から切り込み下 方は片方向から緩く削って作り出されている。	①両側面は極力方向の加工が見えるが、ほぼ表皮を削 した丸太材の表皮に近い。 ②上端は両側面から削り、やや半道にする。下端は扶 りの部分の裏側から2方向から削って切削し尖らせ せる。	朱生後期 後葉～古墳前期	51-214 41-214	芯 芯持 ち材	モニ モニ	
215	W 340 2-3 区 続編内 9 箱	23.6 8.5 7.6	上端にホゾ状の突起がある。突起の残存長は約5cmで ある。裏面は大きく抉りを入れている。	①表皮を削りだした丸太材。一部を工具で削除する。 ②上端は削除されている。下端は両側面を大きく斜 めに切って尖らせる。	古墳中期	51-215 41-215	芯 芯持 ち材	イヌ マキ ム	
216	WK2468 10 区 SK10308 33 箱	108.6 10.5 6.7	下端にホゾ穴があり、中にホゾが残存する。ホゾ穴の 上に段差があり、他の板材と組み合わせるために薄く加 工したと思われる。上端は欠損。	①全面削りきがされている。 ②下端は両側面を削って尖らせる。正面も後姿の 部分の上を削り取っている。	朱生後期 後葉～古墳前期	51-216 41-216	板 日	板 (スギ)	
217	WK2329 10 区 SK10305 35 箱	168.8 7.2 6.5	断面が9～10角形のはざみに近い形であり、中央部の 両側面に大きな抉りを入れ縫を抜く。上端・下端 は欠損。中央の抉りの部分で2つに折れている。	①全面チップウッドで加工する。 ②両側面を削除して作成している可能性がある。下端は 切断の可視性もある。	朱生後期 後葉～古墳前期	52-217 42-217	板 日	板 (スギ)	
218	WK1286 10 区 SK10305 33 箱	112.1 8.0 4.3	丸太材を1/2に削ったものの、上部正面に長さ28cmで わたって大きく抉る。上端は欠損。	①正面はほぼ全面チップウッドで加工する。裏面は削 り刻む。裏面は削り取っている。 ②下端は両側面から削って尖らせ、先端は正面・裏 面も削る。	朱生後期 後葉～古墳前期	52-218 42-218	芯 芯持 ち材	スギ スギ	
219	W 773 2-3 区 SK12201 12 箱	95.9 9.2 8.0	丸太材の周間を面取りしている。中央部の両側面を大 きく抉り縫を抜く。上端は欠損。	①全面チップウッドで加工する。 ②下端は両側面を削り、エンビック状に尖らせる。	朱生後期 後葉～古墳前期	52-219 42-219	芯 芯持 ち材	イヌ マキ ム	
220	WK2123 10 区 SK10303 35 箱	75.2 11.0 6.3	丸み材を1/2に削ったものの、中央部を削って断面が方 形となるように加工してあったと推定される。上端は 欠損。上部は下部に比べやや太くなっている。	①正面は枝を削り取っているが、ほぼ表皮を削 いた丸太材である。裏面は削り削している。 ②下端は両側面からほぼ表皮に近い角度で切り込み 切削している。	朱生後期 後葉～古墳前期	52-220 42-220	芯 芯持 ち材	スギ スギ	
221	W 749 10 区 SK103102 31a 箱	132.0 7.6 6.4	下端から約40cmの部位の正面を2方向から削り、正面 中央に角を作る加工をしている。ゴブの多い丸太材を 使用している。上端は欠損。	①枝を削り削した丸太材で枝を落としてコブになった 部分を削るなどして太さを削除している。 ②下端は裏面を大きく削り先端部の両側面・正面 を削る。	古墳前期	52-221 42-221	芯 芯持 ち材	イヌ マキ ム	

柱状材17

番号	登録番号 区 出七法構 造土層位	法量(cm) 今 輪 厚 さ	形 態	技 法	①上端の加工 ②下端の加工 ③他の施	年代 級	古 都 國 版 万 真 國 版	本 取 り	樹 種
229	W4040 W4034 6 区 SK10106 16 層	127.0 12.9 5.3	上端に溝を切る。溝は幅5mm、深さ2cm位。正面は丸みを帯び先は断面が円錐の形であったと推定される。中央で2つに割られ、2本の杭になっていた。上端は欠損。	①正面→右側面はチャウナで丸みを帯びるように削る。裏面、右側面は削り削している。 ②下端は各々先端を側面に削り尖らせる。	既生後期 後漢→ 古墳前期	52-222 42-222	板 片	(スギ)	
230	WK2744 10 区 SK10304 33 層	107.8 9.4 7.2	中心に上から下まで傾いてV字状の溝を刻む。溝の幅は2.5mmでは一寸である。溝の一部も幅3cm位があるが、正面はどの断面が溝ではなく割り削がされたような浅い溝である。上端は焼損している。	①全面チョウナでやや丸みを帯びるように加工されているが、断面は横円形に近い形である。 ②下端は両側面から切りて尖らせ、先端のみ正面を削る。一部に焼けた痕跡がある。	既生後期 後漢→ 古墳前期	52-223 42-223	板 片	(スギ)	
231	W1110 2-3 区 SK21204 12 層	51.6 3.0 2.3	角を削ってやや丸状に作る。上端は断面が円形に近く、下部はやや扁平となる。裏面は平面となっている。上端は欠損。	①表面を丸くかに加工する。 ②下端は丸の角を取るように4方向から削り尖らせる。	既生後期 後漢→ 古墳前期	52-224 42-224	板 片	(スギ)	
232	W1466 2-3 区 SK21202 14 层	60.8 3.6 3.6	細い丸棒状に加工されている。下端は削り取っている。	①表面は断面が円形となるよう縦方向の調整を行なわれている。チャウナによる加工と思われる。 ②上端は正面と裏面の両方から切り、切断している。	既生後期 後漢→ 古墳前期	52-225 42-225	板 片	(スギ)	
233	W 662 2-3 区 SK21201 12 层	95.3 4.8 4.3	断面が円形となるように加工されている。下端は斜く、上端は大きい。上端は欠損または折損。	①正面・裏面は木口で削れており、平面になっている。両側面は丸みを帯びるように縦方向の加工をしている。 ②下端は裏面を削て薄く尖らせる。	既生後期 後漢→ 古墳前期	52-226 42-226	板 片	(スギ)	
234	W 666 2-3 区 SK21201 12 层	103.4 5.0 4.3	断面が円形となるように加工されている。下端は斜く、上端は小さい。226に形状が似ており同一対であった可能性がある。上端は欠損または折損。下端の先端も折損。	①正面・裏面は木口で削れており、さらに削っていく。両側面は丸みを帯びるように縦方向の加工をしている。 ②下端は3方向から削て尖らせる。	既生後期 後漢→ 古墳前期	52-227 42-227	板 片	(スギ)	

板材捲索表

板材 1

番号	登録番号 区 出七法構 造土層位	法量(cm) 今 輪 厚 さ	形 態	技 法	①両端の加工 ②側面の加工 ③表面の加工	年代 級	古 都 國 版 万 真 國 版	本 取 り	樹 種
1	W2124 9 区 SK33892 38 层	19.0 (18.6)3.4 1.4	内側縫の劣化が著しい。両側縫の木口下端部には横円形の孔を、下部約1/4から中央部にかけての右側縫には約2cm×1cmの丸形九角形の小孔が不規則に穿たれている。裏面中央部には横架材の当たりの加工が残る。実際の板の厚さは2.5cm。尾根板材か。	①左側縫正面と右側縫裏面をチャウナで加工して削りしている。 ②下端より約1cmは表面がやや崩くなっている。	既生後期 後漢→ 古墳前期	53-1 43-1	板 片	(スギ)	
2	W3356 6 区 SK61601 16 层	211.8 17.7 3.1	肉厚にはほぼ完存。木口上端部の中央に約3cm角の孔を穿ち、右側縫の上部約1/4と中央の位置に約1cm四方の小孔を穿つ。裏面中央部には横架材の当たりをこぼり削り削っている。尾根板材か。	②右側縫裏面をチャウナで加工。 ③下端より約45cmの正面、裏面とともに表面が荒れや薄くなっている。	既生後期 後漢→ 古墳前期	53-2 43-2	板 片	(スギ)	
3	W1427 10 区 SK103504 35 层	199.5 10.0 4.4	左側縫の一部を欠くがほぼ完形。木口上端部の中央に約3cm角の孔を穿ち、右側縫の上部約1/4と中央の位置に約2cm×1cm角の小孔を穿つ。裏面中央部には横架材の当たりをこぼり削り削っている。(木裏面有)尾根板材か。実際の板の厚さ3.2cm。	②左側縫裏面をチャウナで加工。 ③左側縫中央部の孔の周辺が削り落められているが、欠損の可能性はある。	既生後期 後漢→ 古墳前期	53-3 43-3	板 片	(スギ)	
4	W2015 10 区 SK103503 35 层	195.4 24.2 3.5	左側縫の劣化が著しい。木口上端部の中央と右端に不定形の孔を穿つが、背面は非貫通。右側縫の上部約1/4と中央の位置に約2cm×1cm角の小孔を穿つ。左側縫の中央部に平行して拡大した小孔の剥離が残る。実際の板の厚さ3.0cm。	②右側縫裏面をチャウナで加工。 ③右側縫の正面下部を上から削りはがしている。右側縫中央部の孔の周辺を削り落めている。	既生後期 後漢→ 古墳前期	53-4 43-4	板 片	(スギ)	
5	W3034 10 区 SK103503 35 层	193.8 17.8 2.9	右側縫が欠損し、保存状態もよくない。左側縫の木口付近には横に骨をそえる横円形の孔を穿ち、上部約1/4と中央の位置に約2cm×1cm角の小孔を穿つ。裏面中央部には横架材の当たりごく深い加工があるが、やや右側縫側に寄る。尾根板材か。	②左側縫正面をチャウナで加工。 ③下端より約43cmの正面は底が極端に薄くなる。	既生後期 後漢→ 古墳前期	53-5 44-5	板 片	(スギ)	
6	W1431 10 区 SK103504 35 层	193.8 20.0 2.5	下部分が分岐されるが、ほぼ完存。木口上端部の中央に不規形の孔を、右側縫の上部約1/4と中央の位置に約2cm×1cm角の小孔を穿せて穿つ。裏面中央部には横架材の当たりごく深い加工があるが、やや右側縫側に寄る。尾根板材か。	②右側縫裏面をチャウナで加工。 ③下端より約51cmの正面が薄くなる。	既生後期 後漢→ 古墳前期	54-6 44-6	板 片	(スギ)	
7	W2151 10 区 SK103503 35 层	192.8 27.0 3.6	右側縫部の一部と下木口が劣化しているが、保存状態は良好。木口上端部の中央に約3cm角の孔を穿ち、右側縫の上部約1/4と中央の位置に約2cm×1cm角の小孔を穿つ。裏面中央部には横架材の当たりの加工が見られる。実際の板の厚さ3.1cm。	③下端より約48cmが正側、裏面とともに薄くなる。正面は全面にわたってチャウナで加工される。	既生後期 後漢→ 古墳前期	54-7 44-7	板 片	(スギ)	

機材2

番 号	登録等分 区 域	法量(cm) 全長 幅 厚さ	形 態	技 法	①内側の加工 ②側面の加工 ③表面の加工	年代記	実測版 写真版	本 取 り	備 考
8	山口 县 出雲原 出七層村	192.2 10 K SK103603 35 M	右側縫止部を大きくはねる。木口上端部の中央に約4cm角の孔を穿ち、左側縫止部の上部約1/3と中央の位置に約1cm角の孔を穿つ。表面中央部には「東洋櫻花材」の当たりの加工が見られる。実際の板の厚さ2.0cm。	②右側縫止部をチョウナで加工。 ③下端より45cmが正面、裏面ともに磨くなる。その上部10cmはほんおり削った可能性がある。	先生後期 後業～ 古墳前期	54.8 44.8	板 目	(えき)	
9	W1487 10 区 SK103604 35 M	191.8 20.3 4.6	左側縫止部の一部を大きく、両木口も劣化している。木口上端部の中央に不規則な孔を穿ち、右側縫止部の上部約1/4と中央の位置に約1cm角の孔を穿つ。表面中央部には櫻花材の当たりの加工が残る。実際の板の厚さ2.0cm。	②右側縫止部を段落をつけて削く削られている。 ③下端より45cmは劣化が著しく、その後12.5cmは正面のみ削られていると考えられる。	先生後期 後業～ 古墳前期	51.9 45.9	板 目	(えき)	
10	W1821 10 区 SK103602 35 M	191.0 21.8 2.7	下方の両側縫止部一部を大きく、両木口にはねる。木口上端部の中央に約2cm角の孔を穿ち、右側縫止部の上部約1/4と中央の位置に約1cm角の孔を穿つ。表面中央部には櫻花材の当たりの加工が残る。全体的に劣化著しい。	②右側縫止部をチョウナで加工。 ③F端より48cmが正面、裏面とも若しく劣化。	先生後期 後業～ 古墳前期	55.10 45.10	板 目	(えき)	
11	W2726 10 区 SK103603 35 M	(190.1) 25.0 4.9	保存状態の良好な資料である。両木口が劣化するものの穴は完璧。木口上端部の中央に約3cm×4cm角の孔を穿ち、さらに右側縫止部の上部約1/4と中央の位置に約2cm×1cmの孔を穿つ。表面中央部には櫻花材の当たりの加工が残る。実際の板の厚さ2.0cm。	②右側縫止部と左側縫止部をチョウナで削る。 ③下端より52cmのF端がやや磨くなる。	先生後期 後業～ 古墳前期	55.11 45.11	板 目	(えき)	
12	W2150 10 区 SK103603 35 M	(189.0) 21.0 2.2	一方の木口が劣化欠損する。右側縫止部の上部約1/4と中央の位置に約2cm×1cmの孔を穿つ。中央の小孔の周囲に僅かに加工が見られる。	②左側縫止部は段落となっている。 ③下端より45~51cmの範囲でごく僅かに正面が削っている。	先生後期 後業～ 古墳前期	55.12 45.12	板 (えき)		
13	W1563 10 区 SK103604 35 M	182.5 23.2 2.8	中央よりやや下方に木口に分割されるなど劣化著しい。木口上端部の中央に約3cm×4cm角の孔を穿ち、右側縫止部の上部約1/4と中央の位置に約2cm×1cmの孔を穿つ。(左側縫止部の孔は欠損) 実際の板の厚さ2.0cm。	②右側縫止部は正面、裏面ともにチョウナで加工する。 ③下端より44cmは正面、裏面ともに削れており薄くなっている。正面上部はチョウナで加工する。	先生後期 後業～ 古墳前期	55.13 45.13	板 (えき)		
14	W2727 10 区 SK103603 35 M	182.2 16.2 3.2	下木口から下端両側縫止間にかけての劣化著しい。木口上端部の中央に約3cm×4cm角の孔を穿ち、右側縫止部の上部約1/4と中央の位置に約2cm×1cmの孔を穿つ。実際の板の厚さ2.0cm。	②左側縫止部と右側縫止部をチョウナで加工する。 ③下端より43cmは正面、裏面ともに表面が荒れ、劣化が著しい。	先生後期 後業～ 古墳前期	56.14 46.14	板 目	(えき)	
15	W1856 9 区 SK53802 38 細	151.0 15.0 2.6	下木口の両側縫止部の一部を大きく、両木口にはねる。右側縫止部の上部約3/5と中央部で2cm×1cm角の孔を穿つ。裏面の1/3木口は約1.5cm位近に段差があり、側縫止部を中心に当たりの加工が残る。実際の板の厚さ2.0cm。	①上端は表面が裏面に削り戻り作る。 ②右側縫止部をチョウナで加工。 ③裏面はほぼ全面にチョウナ底が残る。	先生後期 後業～ 古墳前期	56.15 46.15	板 (えき)		
16	W3043 10 区 SK103603 35 M	(122.8) 25.8 3.7	側縫止部の木口を削り切っている。上部部のみ存在し、下部は2次加工で木口上端部の中央に約3cm×4cm角の孔を穿つ。裏面の1/3木口は約1.5cm位近に段差があり、側縫止部を中心に当たりの加工が残る。実際の板の厚さ2.0cm。	①下端は取り上げ時に切断されたものと思われる。 ②右側縫止部上部をチョウナで加工。	先生後期 後業～ 古墳前期	56.16 46.16	板 (えき)		
17	W3042 10 区 SK103603 35 M	(118.6) 21.5 2.4	上半部のみ残す。下部部には三次加工の木口欠損。木口上端部の中央に約3cm×4cm角の孔を穿ち、両側縫止部は木口より約5cm位の下端に約2cm×1cm角の孔を穿つ。実際の板の厚さ2.0cm。	①下端の右半分には正面から切り込んだ刃物痕が残る。左半分は側縫止部から切断する。 ②左側縫止部は正面と右側縫止部をチョウナで加工する。	先生後期 後業～ 古墳前期	56.17 46.17	板 目	(えき)	
18	W3357 6 区 SK61501 16 M	212.5 (16.0) 2.3	下端木材を削り切っている。左側縫止部欠損。右側縫止部の1/3部に約1cm角の孔を穿つ。はねは均等に穿つ。	②右側縫止部をチョウナで加工する。	先生後期 後業～ 古墳前期	57.18 47.18	板 目	(えき)	
19	W4755 6 区 SK61611 16 M	(206.8) (15.0) 2.7	木口、右側縫止部欠損。木口上端部の中央に約3cm×4cm角の孔を穿ち、木口上端から約40cm、下端から約50cmの位置に約3cm×1cm角の孔を穿つ。裏面の板の厚さ2.0cm。	①右側縫止部をチョウナで加工。 ②裏面、下端とも裏面をえらべり9cmの部までやや薄く削る。	先生後期 後業～ 古墳前期	57.19 47.19	板 (えき)		
20	W 452 2-3 区 SK21204 12 M	(201.6) 21.0 3.2	右側縫止部欠損。右側縫止部には中央の位置に約1cm角の孔を穿つ。また側縫止部にも孔の痕跡が残る。実際の板の厚さ2.7cm。	①右側縫止部をチョウナで加工。 ②裏面、下端とも裏面をえらべり9cmの部までやや薄く削る。	先生後期 後業～ 古墳前期	57.20 47.20	板 (えき)		
21	W 440 2-3 区 SK21204 12 M	153.5 21.3 3.3	上端、下端ともに欠損。短部には孔模様またはコ字形の切り欠きがそれぞれ中央にある。やや下端寄りに1cm×3cm角の孔を穿つ。	①右側縫止部をチョウナで加工。 ②裏面、下端とも裏面をえらべり9cmの部までやや薄く削る。	先生後期 後業～ 古墳前期	57.21 47.21	板 (えき)		
22	W3358 6 区 SK61601 16 M	213.0 (17.6) 2.1	左側縫止部。右側縫止部に木口上端より約70cmと下同端より約120cmに約2cm×1cm角の孔を穿つ。裏面とも下端約1/3の位置に当たりの加工がいずれも左側縫止部に残る。雙板か。	①下端は斧で粗く切り込まれており、2次加工されていると考えられる。 ②右側縫止部正面をチョウナで加工。 ③上端裏面が薄く削られている。	先生後期 後業～ 古墳前期	58.22 47.22	板 (えき)		

樹材 3

番号	登録番号	法量(m ³)	材種	技 法	年代範囲	米鋼製版 真鋼版	木取り 樹種
23	W3724 6 区 SK61605 16 屋	211.4 18.7 2.6	木口の一部を欠くが、ほぼ完存。右側縫の木口下部の1/3の位置に約2cm×1cm角の孔を穿つが、左側縫には非貫通の小孔の下部に集中して残る。表面中央部には横貫通の溝状の加工が残る。堅板か。実際の板の厚さ1.9cm。	①右側縫の加工 ②左側縫の加工 ③表面の加工	弥生後期 後葉～ 古墳前期	58-23 48-23	板 (スギ) 日
24	W3353 6 区 SK61601 16 屋	211.5 14.3 1.9	木口の一部を欠くが、ほぼ完存。右側縫上部から約1/3と同木口下部に約2cm×1cm角の小孔を穿つ。表面下部約1/3の左側縫には新たに加工が残る。右側縫裏面にも当たりの加工がある。堅板か。	①右側縫は正面をチョウナで斜めに削っている。 ②左側縫正面をチョウナ加工してやや薄くしている。 ③正面は全面チョウナ加工。裏面は削り面。	弥生後期 後葉～ 古墳前期	58-24 48-24	板 (スギ) 日
25	W 468 2-3 区 SK21204 12 屋	(186.0) (6.50) 3.0	左側縫部のみ残存し、下端部は欠損。上部約1/6の位置でも折断する。下部約1/3の位置に約4cm×1cm角の小孔を穿つ。	①左側縫は正面、裏面ともチョウナで加工されている。 ②裏面は削り面。	弥生後期 後葉～ 古墳前期	59-25 48-25	板 (スギ) 日
36	W3830 6 区 SK61605 16 屋	(165.0) (11.4) 2.5	左側縫部のみ残存し、木口は欠損。右側縫上部下端部よりそれぞれ約50mmの位置に約2cm×1cm角の小孔を穿ち、同上木口附近に約3cmの横内溝の孔を穿つ。実際の板の厚さは2.0cm。	②左側縫正面をチョウナで加工。2-3列のチナ底が残る。	弥生後期 後葉～ 古墳前期	59-26 48-26	板 (スギ) 日
27	W 474 2-3 区 SK21204 12 屋	(156.0) (9.2) 2.4	左側縫部のみ残存し、両木口は欠損。木口上端～約60cmすつ側縫をおいて約1cm角の小孔を穿つ。	①右側縫正面をチョウナで加工。加工は上部ほど幅広となる。	弥生後期 後葉～ 古墳前期	59-27 48-27	板 (スギ) 日
28	W2938 1 区 SK12203 22 屋	(140.0) (11.8) 3.1	右側縫部のみ残存し、下木口は欠損。上木口から約1mの位置に約2cm×1cm角の小孔を穿つ。裏面の一部が削離するなど表面状態は良くなかった。実際の板の厚さ2.6cm。	①下端は4cmほど斜めに削られ、2次加工と思われる。 ②左側縫正面をチョウナで加工。	弥生後期 後葉～ 古墳前期	59-28 48-28	板 (スギ) 日
29	WK2005 10 区 SK10503 35 屋	(95.8) 22.7 2.8	下端部は風紋のみ欠損。木口上部裏面の中央には約2cm×1cm角の孔を穿ち、さらに約5cm下の右側縫には約1cm角の小孔を穿つ。保存状態の良好な良木である。実際の板の厚さ2.1cm。	②左側縫正面と右側縫裏面をチョウナで加工し、裏面を平行四辺形状に仕上げる。	弥生後期 後葉～ 古墳前期	59-29 49-29	板 (スギ) 日
30	W2219 9 区 SK33802 38 屋	(91.7) (14.8) 3.6	右側縫が加工しない。板端部の木口に段差の加工を施す。右側縫の段差の部分に約2cm×1cm角の孔を穿ち、左側縫下部には約2cm×1cm角の孔を約50cm周期であわせて穿つ。また、上方の孔に対応する側面にも穿孔の痕跡が残る。	①上端は縦に凹を描くように加工する。 ③正面、裏面ともにチョウナで加工され、裏面は風紋である。	弥生後期 後葉～ 古墳前期	60-30 48-30	板 (スギ) 日
31	W1662 9 区 SK33701 37 屋	(65.0) (10.0) 4.7	両側縫は削面。下部は風紋のため欠損。右側縫の木口に段差の加工を施す。段差部のはば中央に約2cm角の孔を穿ち、左側縫下部には約2cm×1cm角の孔を約50cm周期であわせて穿つ。また、上方の孔に対応する側面にも穿孔の痕跡が残る。3Dによる。	④正面、裏面ともにチョウナで加工。チョウナ底の跡、開闊感かなり広い。	弥生後期 後葉～ 古墳前期	60-31 49-31	板 (スギ) 日
32	W 636 7 区 SR30801 1号塙 8 屋	(154.0) (10.5) 5.0	左側縫部のみ残存。板端部の木口に段差の加工を施す。段差部のはば中央に約2cm角の孔が穿られているが、直上部に残る孔の底が残る。また段差から75cm下部にも約3cm角の孔を穿つ。実際の板の厚さ4.7cm。	①左側縫の一部にチョウナ底が残る。裏面はかなり平滑だが立目加工痕はない。	古墳後期 後葉～	60-32 49-32	板 (スギ) 日
33	W1845 9 区 SK33802 38 屋	(161.9) 19.1 2.7	下部欠損。右側縫下部は二段加工。板端部の木口に段差の加工を施す。段差部のはば中央に約2cm角の孔を穿つ。右側縫の部分には右側縫に約1cm角の孔を穿き、左側縫の部分には右側縫に約3cm×1cm角の孔を穿つ。右側縫には約2cm×1cm角の孔を約30cm周期に4段差つ。右側縫は2個対応する。又は木口や削面附近にこれよりややおきめの孔を不規則に穿つ。実際の板の厚さ2.0cm。	②右側縫もかなり平滑でチョウナで加工したと思われる。 ③正面はチョウナで加工。裏面は削り面で所々チョウナで加工する。	弥生後期 後葉～ 古墳前期	60-33 49-33	板 (スギ) 日
34	W2218 9 区 SK33802 38 屋	(158.6) 18.9 2.7	過半修折損。右側縫上部3/4は二段加工。板端部の木口に段差の加工を施す。右側縫の段差の部分には約1cm角の孔を穿き、左側縫の部分には右側縫に約3cm×1cm角の孔を穿つ。右側縫には約2cm×1cm角の孔を約30cm周期に4段差つ。右側縫は2個対応する。又は木口や削面附近にこれよりややおきめの孔を不規則に穿つ。実際の板の厚さ2.3cm。	②左側縫をチョウナで削る。右側縫、丸井をチョウナで削る。裏面も一部加工する。	弥生後期 後葉～ 古墳前期	60-34 49-34	板 (スギ) 日
35	W3826 6 区 SK61605 16 屋	226.0 15.2 2.5	左側縫の劣化著しい。右側縫上部から約60cm下方と同木口より50cm上方に方形の孔を穿ち、左側縫下方に不定形の孔を穿つ。実際の板の厚さ2.2cm。	④上端より40cmあまりの正面、裏面が荒れ劣化している。中央部がやや僅み、当たりの加工とともに考えられる。	弥生後期 後葉～ 古墳前期	61-35 49-35	板 (スギ) 日
36	W2610 6 区 SK61601 16 屋	210.8 24.2 3.8	木口の端の残存状態はほぼ良好である。右側縫中央部と下端部に拘束的に摩耗した小孔が残る。実際の板の厚さ2.6cm。	①上下端ともに正面を大きく、裏面を約5cmにわたりて削り削り仕上げる。 ③正面、裏面ともに不明瞭だがチョウナで加工する。	弥生後期 後葉～ 古墳前期	61-36 50-36	板 (スギ) 日

板材 4

番号	登録番号	法量(cm)	形態	技法	①溝等の加工 ②側縁の加工 ③表面の加工 ④その他	年代級	実測開版 及び既版	本取り 種類
37	WK20 5 区 SK51091 10 層	212.4 18.0 2.0	板材にV字状の加工を施して板に軽用。左側縁中央部に段差が残る。右側縁の2ヶ所、右側縁4ヶ所に小孔を等間隔に穿っていたことで確認できる。右側縁は下部を中心で欠損。	①下端は二次加工か。 ②右側縁裏面をチョウナで加工。 ③正面はほぼ全面にわたってチョウナ痕が残る。	古墳前期 50-57	61-37 50-37	板 目	(えき) 目
38	W3351 6 区 SK61001 16 層	209.8 (17.2) 2.6	板材の右半分が残存。左側縁上端には方形容の孔の痕跡が残る。右側縁は上木口から60cmずつ間隔をあけて2ヶ所に小孔を穿つ。実際の板の厚さ2.2cm。	②右側縁裏面をチョウナで加工。 ③正面の左側縁寄りをチョウナで加工したと思われる。	不明	61-38 50-38	板 目	(えき) 目
39	SK7-10 -211 7 区 10 層	(170.0) 14.4 2.4	下半部欠損。上木口より40cm下の内側縁に小孔を対をなして穿つ。この他にも右側縁に3個の小孔が残るが、穿孔の位置は不規則である。実際の板の厚さ2.1cm。	③金剛刷り面である。右側縁は斜めに切っているが加工痕は確認できない。	弥生後期 後葉～ 古墳前期	61-39 50-39	板 目	(えき) 目
40	W2343 1 区 SK2202 22 層	(167.8) 17.0 2.2	上木口欠損。右側縁に計2ヶ所50mmの間隔をあけて方形の小孔を穿つ。	②正面の内側縁はチョウナで加工。裏面は右側縁のみチョウナで加工されているようである。 ③正面には全面チョウナ痕が残る。	弥生後期 後葉～ 古墳前期	61-40 50-40	通 板 目	(えき) 目
41	W3347 6 区 SK61001 15 層	(168.0) 12.5 2.8	下平部欠損。両側縁端部の劣化著しい。右側縁は上木口より60cmずつ間隔をあけて小孔を穿つ。裏面は右側縁が屈曲し、端部が尖る。上部左辺は穿孔したと思われる孔跡が残る。実際の板の厚さ2.0cm。	②右側縁裏面をチョウナで加工。 ③下端より24cmの部位まで裏面の荒れが著しい。	弥生後期 後葉～ 古墳前期	62-41 51-41	板 目	(えき) 目
42	W 490 2-3 区 SK2204 12 層	(155.0) 15.0 2.8	上部と右側縁は欠損。右側縁は下木口より60mm離れた位置に小孔を穿つ。さらに45cm上部に同じく2つの小孔を穿つ。下端右の側縁部分に孔跡と思われる切り込みがある。実際の板の厚さ2.6cm。	①右側縁上面をチョウナで加工。左側縁の裏面の一端にもチョウナ痕が残る。 ③上端から33cmの部位まで裏面をチョウナで削る。	弥生後期 後葉～ 古墳前期	62-42 51-42	板 目	(えき) 目
43	W 476 2-3 区 SK2201 12 層	149.8 17.9 2.1	左側縁部欠損。右側縁部には上方から小孔1個、3cm角の孔、瓶に並んだ2つの小孔を等間隔に穿つ。上木口に孔の跡が残る。	②平凹に仕上げられており、明確ではないがチョウナで加工したと思われる。 ③正面は不明瞭だがチョウナで加工。裏面も平坦でチョウナ加工とされる。	弥生後期 後葉～ 古墳前期	62-43 51-43	板 目	(えき) 目
44	W2761 1 区 SK1203 22 層	165.6 19.6 3.8	横断板の転用材と考られる板材。上木口中央部に横方向の孔を穿つ。裏面には右側縁。中央部には左側縁の小孔を穿ち、中央の孔の20cm下方に右側縁の孔を穿つ。実際の板の厚さ3.6cm。	②右側縁の正面、裏面と左側縁の裏面をチョウナで加工。 ③裏面の中央部を削除し、ほぼ全面にチョウナ板が残る。	弥生後期 後葉～ 古墳前期	62-44 51-44	板 目	(えき) 目
45	WK1458 8 区 SK817w03 17a 層	102.1 13.8 2.4	板材に軽用したとのと考えられる。上木口左端は強く加工し、下木口は右から左へ斜に切り落す。下木口から20cm下の右側縁に小孔が残る。	①下端は二次加工だと考えられる。 ③正面と裏面ともチョウナの加工痕が全面にわななって残る。	弥生後期 後葉～ 古墳前期	62-45 51-45	通 板 目	(えき) 目
46	WK1463 8 区 SK817w03 17a 層	98.7 20.2 2.4	筋に軽微する無漆から弦への軽用材。板材の上下に50mmの間隔をあけて小孔が残るが、F端加工のない左側縁に点ある孔が点と異なる。	①下端は二次加工だと考えられる。 ③正面はチョウナ痕がほぼ全面に残るが、裏面は側縁部のみである。	弥生後期 後葉～ 古墳前期	62-46 51-46	板 目	(えき) 目
47	W 949 7 区 SD71201 12 層	359.5 23.0 5.0	ほぼ完存。材材を軽用し右端として使用したと考えられる。一方の木口は軽用前の穴を留めて右側縁を作りだし、もう一方の木口は真直ぐに切り落す。全体的に裏面の方向へ著しく内湾する。	②右側縁が僅かに波状となっている。 ③表面に日本式加工痕は認められない。	弥生中期 後葉～ 古墳前期	63-47 52-47	板 目	(えき) 目
48	W 485 8 区 木造欠損 15 層	319.0 23.0 11.0	ほぼ完存形を呈するが、裏面に分割。広葉樹の半割材を使用しており加工でも違ひない。木口端に接合部を作りだし、さらにこの孔の上方に約14cm×4cm、下方に約10cm×4cmと6cm×4cm程の複数の孔を等間隔に穿つ。	①コの字形に加工。 ③劣化のため目立つ加工痕は認められなかった。 ④孔は約15cm間隔で穿っている。	古墳中期 52-48	63-48 52-48	芯 持 材	キハ ダ
49	W2850 9 区 33 層	272.4 25.4 6.6	ノ版材の木口両端に接合部を作り落す。小切部には約15cm×7cmの孔を穿ち、さらにこの孔の上方に約14cm×4cm、下方に約10cm×4cmと6cm×4cm程の複数の孔を等間隔に穿つ。	①コの字形に加工。 ③裏面は不明瞭だがチョウナで加工したと思われる。	奈良～ 中世	63-49 52-49	通 板 目	(えき) 目
50	WK536 5 区 SK51006 10 層	(250.0) 14.4 5.8	両側縁の粗い板材を使用。上木口から約15cm下方に約14cmの隅の方形の孔を穿つ。下端部は同様の孔の痕跡から欠損。	③目立つ加工痕は認められない。 ④かなり筋の多い材を使用している。	古墳前期	63-50 52-50	板 目	(えき) 目

板材5

番号	登録番号 区 市道構 出土層位	計量(cm) 全長 幅 厚さ	形 態	技 法	①両端の加工 ②側面の加工 ③表面の加工	年代範 囲	実測版 写真版	木取り 板 目	樹 種
51	W-64 1 区 SR1201 20 層	(161.8) 17.6 8.2	下端面は欠損。下端部と側面に孔をつける。中央部には径約8cmの孔を穿ち、表面が側面には側面 に通じるかぎり穴を穿ら、その平面径は約5cm×3cm をはいる。裏面も段差のすぐ近くに非貫通孔の痕跡が 残る。実際の板の厚さ6.5cm。	②孔のある右側面をチョウナで加工。左側面も平 面でチョウナ加工と思われる。 ③正面、裏面とともに劣化のため不明だがチョウナ で調整していると思われる。	奈良一 平安 63-51 52-51			板 目	(えき 目)
52	W4061 6 区 SK61606 16 層	(132.7) 15.7 4.8	ケハシと指定される板材。側面縫の劣化著しい。中 央部には縫、高さともに2cm弱の隆起が認められる が、下方へ進むごとに漸次的に消えてゆく。実際の板 の厚さ4.2cm。	②左側面を約1.5mmにわたって薄く削る。右側面には 後14.5mmの半円の切り欠きがある。 ③劣化のため加工痕は認められない。	弥生後期 後葉～ 古墳前期 63-52 52-52			板 目	(えき 目)
53	W3277 6 区 SK61601 16 層	316.0 17.7 3.5	上部は欠損。下端に幅約5mm、長さ5.5mmの窪状の突起 を作り出す。半分が削った板状である。実際の板の厚 さ3.3cm。	④表面劣化のため加工痕は認められない。	弥生後期 後葉～ 古墳前期 53-53			板 目	(えき 目)
54	W2533 6 区 SK61601 16 層	(313.0) (18.2) 3.9	50に似るがやや幅が広い。上端から5.5mm下ろし、下端 より46mm上方にそれぞれ追が7mmの方孔を穿つ。 下端より2/3の位置で2つに割れている。実際の板の 厚さ3.4cm。	⑤木部で削っており、目立つ加工が認められない。	弥生後期 後葉～ 古墳前期 53-54			板 目	(えき 目)
55	W2179 9 区 SK93801 38 層	(304.6) (18.2) 2.9	下端は斜めに切り落とし、二次加工と思われる。右側 縫部に1cm×3cmの長方形孔を3ヶ所、3cm×3.5cm の方孔を1ヶ所穿つ。また上端より11.5mm下方に方 形の切り欠きが1ヶ所ある。	⑥上端は約15mmの正面を削って薄くしている。 ⑦正面には目立つ加工痕がなく、裏面の一部にチョ ウナ加工痕が残る。	弥生後期 後葉～ 古墳前期 53-55			板 目	(えき 目)
56	SK7-10-309 7 区 SK71005 10 層	293.9 12.2 2.6	左側縫部を欠損。上端より10.5mm下方に幅4cmと長 2.5cmの円孔を2つ穿り、さらに72mm下方にも両側の穿孔 がある。下端にも孔痕と思われる切り込みが残る。実 際の板の厚さ2.2cm。	⑧裏面はかなり平削で、劣化のため小形ではある が、一部チョウナ加工をしている可能性がある。	弥生後期 後葉～ 古墳前期 54-56 33-56			板 目	(えき 目)
57	W1615 9 区 市道構 35 層	270.0 14.0 3.2	右側縫よりに2cm×5cmの長方形孔を41cm～50mmの 間隔で穿つ。	⑨右側縫は平削に削られている。 ⑩正面も平削に加工される。裏面は木目で削れて いる。 ⑪全体的に丁寧な作りの板材。	古墳中期 54-57 53-57			板 目	(えき 目)
58	W4063 6 区 SK61606 16 層	259.8 12.9	上端側縫部が欠損していると思われる。板材に沿った部 位の付根は孔底とえらわれる。また中央部にも孔痕と 思われる幅6mmの切り欠きが残る。	⑫目立つ加工痕は認められない。	弥生後期 後葉～ 古墳前期 53-58			板 目	(えき 目)
59	WK259 5 区 SK51003 10 層	256.6 12.2 2.0	上端を欠損する。側面は端に作り出端に小孔を穿つ。 側面は下端へ向かって窪くなるように穿っている。大き く4つに割れている。	⑬全面削り面で目立つ加工痕は認められない。	古墳前期 54-59 53-59			板 目	(えき 目)
60	W-443 2-3 区 SK21204 12 層	238.0 19.0 4.3	下端を欠損する。上端は端に作り出端に小孔を穿つ。 側面は5mmの大きな不規則孔3、中央に小孔1を穿つ。縫 合して二次加工され、右側面に32～34mm間隔で斜い 溝を穿つ。	⑭上端は右を10cm、左を5cm切り欠いてを作り出 し、付根部分が一直線とはならない。	弥生後期 後葉～ 古墳前期 55-60 54-60			板 目	(えき 目)
61	W-484 2-3 区 SK21204 12 層	235.8 22.4 3.6	右側縫部欠損。右側縫に2～3cm×4～5cmの方孔 を2ヶ所穿つ。左側縫にも2つ穿つの痕跡があり右側縫 を含め並ぶことから他の2ヶ所にも穿孔の可能性が ある。	⑮下端は斜めに切っており、板として一次加工さ れると考えられる。 ⑯右側縫はチョウナ加工。 ⑰裏面に不明瞭だがチョウナ痕が残存。	弥生後期 後葉～ 古墳前期 55-61 54-61			板 目	(えき 目)
62	WK362 5 区 SK51001 10 層	236.2 15.5 7.0	左側縫中央を方形に切り欠く。切り欠きを端にさる ために削り落とす。右側縫寄りの上端から17cmの部 位に2cm×3.5cmの方孔を穿つ。下端から15mmの部位に 1.5cm×3cmの方孔を穿つ。実際の板の厚さ6.8cm(側 面)。	⑱かなり平削でチョウナ加工と思われる。 ⑲筋のない材のため、かなり凸凹があり、高くなっ ている部分をチョウナで無理に加工する。	古墳前期 55-62 54-62			板 目	(えき 目)
63	W1783 2-3 区 SK21201 12 層	225.5 21.8 4.8	下端を欠損。上端から8.5cmの部位に5cm×6cmの方 孔を穿つ。下端は粗削のため不明だが、削れている 部分に孔を穿っていた可能性がある。	⑳下端は斜めになり切り落とされているようであ るが、二次加工の可能性がある。 ㉑右側縫は平削に加工されている。 ㉒正面の中央部が平坦に加工されておりチョウナ で加工されたと思われる。	弥生後期 後葉～ 古墳前期 55-63 54-63			板 目	(えき 目)
64	W2793 1 区 SK12202 22 層	219.5 10.8 2.7	上端中央に1.5cm×1.5cmの方孔を穿つ。左側縫寄り の上端から47mmの位置に1cm弱の方孔を、さらに 5.5mm下方の右側縫寄りに1.5cm×1cmの方孔を穿 つ。	㉓右側縫は木しらの縫合としての二次加工を受け 19cm後側の間隔で溝をつけていく。本来はチョウ ナで平削に加工されていたと思われる。	弥生後期 後葉～ 古墳前期 56-64 55-64			板 目	(えき 目)
65	W2449 1 区 SK12203 22 層	219.2 15.0 2.8	下端の大部分と左側縫1/2を欠損。上端から8cmと 12.5cmの部位に孔を、中央部に2つの孔。下端にも 1つ孔を穿つ。	㉔右側縫は木しらの縫合としての二次加工を受け 19cm後側の間隔で溝をつけていく。本来はチョウ ナで平削に加工されていたと思われる。	弥生後期 後葉～ 古墳前期 56-65 55-65			板 目	(えき 目)

板材 6

番号	登録番号 区分 出立場 出立部位	法規(cm) 全員 幅 厚 さ	形 態	技 法	①両端の加工 ②側面の加工 ③表面の加工	年代 別	実測図版 直真版面	取 扱 り 種 類
66	W3176 6 区 SK61601 16 番	212.5 8.6 12.2 1.6	L、下端を欠損。中央部に2つの小孔を穿ち、65cm形状が低いが、幅は狭い。下端から67cmの部位に小孔を穿つ。実際の板の厚さ0.9mm。	①下端10cmは薄く削る。 ②右側縫正面をチャウナで加工。左側面もチャウナで削る。左側面には溝状の切り込み痕と思われるものがあり、幅合に二次加工された可能性がある。	発生後期 後葉～ 古墳前期	66-68 55-67	板	(スギ) 目
67	W3230 6 区 SK61601 16 番	209.4 18.3 24.4 2.4	ほぼ不定形、右側縫下部を入りきり寄り合っているのは一次加工と思われる。右側縫の上端より68cmの部位と、下端より66cm～70cmの部位に小孔を穿つ。また中央のやや寄り方に2cm×5mmの横円孔を穿っている。実際の板の厚さ2.2mm。	①上端は正面、裏面ともに削って薄くする。 ②正面は全面チャウナで加工されている。裏面は削り面である。	発生後期 後葉～ 古墳前期	66-67 55-67	板	(スギ) 目
68	SK710 7 区 SK72003 10 番	188.4 13.6 2.4	下端を欠損。上部に20.5mm×8mmの不定形の穿孔がある。実際の板の厚さ2.5mm。	①上端は片側で軽く切り取っている。 ②左側面は平坦であり、加工されていると思われる。 ③表面には日々つ加工痕は認められない。	発生後期 後葉～ 古墳前期	66-68 55-68	板	(スギ) 目
69	W 576 2-3 区 SK21201 12 番	185.8 13.5 3.0	ほぼ完形、右側縫に2.5mm×3mmの方形孔を穿つ。	①上端をやや薄く削る。 ②左側縫には溝状の痕跡があり、幅合に転用した可逆性がある。 ③表面の大部分と裏面の左側縫部をチャウナで加工。	発生後期 後葉～ 古墳前期	66-69 55-69	板	(スギ) 目
70	W2135 1 区 SK12202 22 番	181.6 9.2 1.5	左側縫を欠損している。右側縫の中央部に1cm×3cmの長方形孔を穿つ。左端で2つに割れているが、削れた部分に小孔が穿ってあったと思われる。実際の板の厚さ1.2mm。	②右側縫は斜めに削っているがチャウナ板は認められない。	発生後期 後葉～ 古墳前期	66-70 55-70	板	(スギ) 目
71	W4153 6 区 SK61606 16 番	180.0 12.6 1.5	右側縫が劣化、欠損している。上端右側縫に丸さ1.5mmの孔痕があり、中央丸いや下端でも孔痕がある。左側縫は小孔ばかりくつちぎってあったと思われるが痕跡などはない。左端から60cmの部位の左1つだけである。	③表面の劣化が著しく、加工痕等は認められなかった。	発生後期 後葉～ 古墳前期	67-71 56-71	板	(スギ) 目
72	W3286 6 区 SK61601 16 番	171.8 13.4 1.8	左側縫が欠損している。下端も欠損していると思われる。上端に斜5cmの円孔を穿ち、右側縫の上端から59cmの部位、さらに6cm下に小孔を穿つ。実際の板の厚さ1.4mm。	②右側縫をチャウナで加工。 ③F端25mmの正面、裏面ともに荒れていて劣化が著しい。	発生後期 後葉～ 古墳前期	67-72 56-72	板	(スギ) 目
73	WKG31 5 区 SK51006 10 番	(174.0) 14.8 2.7	右側縫を欠損。上端から6.5mmの部位に孔を穿ち、9.5cm下に2つ、さらに1cm下に1つ小孔を穿つ。左側縫には方形の切り欠きがある。正面面にやや劈曲する。	①下端は杭として尖らせている。 ②左側縫裏面をチャウナで加工。	古墳前期	67-73 56-73	板	(スギ) 目
74	W3223 6 区 SK61601 16 番	171.2 19.2 3.1	右側縫部の削りは一次加工か。上下両端に5cm×9cmの長方形孔がそれぞれ左1つずつ残る。	①複い円形に切る。 ②かなり平坦であり、チャウナで加工したと考えられる。 ③平坦であり、チャウナで加工したと考えられる。	発生後期 後葉～ 古墳前期	67-71 56-74	板	(スギ) 目
75	W1823 5 区 SK33801 38 番	169.4 16.0 2.0	下部を欠損。右側縫に0.4cm×3.5cmの細長い小孔1孔の痕跡1。	①L端15cmをやや薄く削る。 ②右側縫部の正面、裏面をチャウナで加工する。 ③左側縫にはほぼ全面チャウナ加工。	発生後期 後葉～ 古墳前期	67-73 56-75	板	(スギ) 目
76	W1546 2-3 区 14 番	162.6 11.0 2.3	下部を欠損。上端より64cmとF端より37cmの部位に各2cmの円孔を穿つ。	①下端は正面のみ削って薄くしている。 ②左側縫部の正面、裏面をチャウナで加工する。 ③左側縫にはほぼ全面チャウナ加工。	発生後期 後葉～ 古墳前期	67-76 57-76	板	(スギ) 目
77	WKG228 6 区 SK51004 33 番	162.2 11.2 3.5	下部と右側縫を欠損。右側縫側に穴あきまたは切り欠き痕が2箇所残る。下端にある切り欠き痕跡の前面は当たりの加工がされている。実際の板の厚さ3.2mm。	②左側縫はチャウナで加工。 ③裏面は左側縫部をチャウナで加工。正面は削り面。	発生後期 後葉～ 古墳前期	67-77 57-77	板	(スギ) 目
78	W1744 2-3 区 SK21201 12 番	146.3 20.6 3.0	「端を欠損、上端に深3mmの方形孔やや左寄り」に寄つ。右端は「下端と左27cmにわたって削り落してある。下端の削り落している部分に孔が穿てられていたようである。実際の板の厚さ2.4mm。	①左側面はチャウナで加工。 ③裏面をチャウナで加工。	発生後期 後葉～ 古墳前期	68-78 57-78	板	(スギ) 目
79	W3131 6 区 SK61601 16 番	159.9 18.6 3.3	上端より20cmの部位に6.5mm×7mmの方形孔。下端より22cmの部位に2.5mmの方形孔を穿つ。	④劣化のため加工痕は不明だが平面に加工されており、正面、裏面ともにチャウナで加工されていたと思われる。	発生後期 後葉～ 古墳前期	68-79 57-79	板	未 考
80	W4537 6 区 SK61601 16 番	156.8 29.2 2.3	上部を裁いて作る。右側縫には2つの小孔と方彌切欠き、左側縫には2つの小孔が残る。下部は欠損して木端が幅が広くなっている。実際の板の厚さ2.0mm。	①上端のは丸く無いカーブで切り出されている。 ②表面に斜立加工痕は認められない。	発生後期 後葉～ 古墳前期	68-80 57-80	板	(スギ) 目

板材 7

番号	登録番号 区 出上邊機 出上層板	法量(cm) 全長 幅 厚さ	形 態	技 法	①両面の加工 ②裏面の加工 ③裏面の加工	年代 範 囲	実測面 等実測版	本取 り	判 別
W 66 2 区 81 SK20601 6 番	138.2 17.2 2.4	かなり高さな板材で下端をやや薄く削る。		①上端を2~3mm削り、下端を3.5~4.5mm削っている。 正面、裏面ともに削る。下端は上端に比べてかなり直線的に切断されている。 ②裏面は小刻みだが、チョウナで加工されている。 裏面もかなり平坦で加工されていると思われる。	平安	68-81 57-81			△
W1694 82 1 区 SK12201 22 番	(157.0 10.6 2.0	両側縫の大損が著しく、右側縫中央に孔底と思われる 切り欠きが1箇所ある。左側縫にも孔底かと思われる 歪みが見られるが、孔か大損が不明である。		①下端は正面から芦で切り込んで切断する。下端は斜めに切られてしまっている。 ②裏面は小刻みだが、チョウナで加工されている。 ③右側縫をチョウナで加工する。	准生後期 後葉一 古墳前期	68-82 58-82	板 目		△
W2122 83 1 区 SK12202 22 番	155.4 10.6 3.2	下端を欠損する。両側縫の孔底が著しく、孔底と思われる 部位も大損していて不明瞭である。上端に2cm× 4cmの横の穿孔がある。 実際の板の厚さ2.9cm。		①下端は竹状の工具で左側から切り込んで切断している。 ②裏面は劣化で小刻みだが、ほぼ全面をチョウナで 加工する。裏面は且立つ加工は認められない。	准生後期 後葉一 古墳前期	68-83 58-83	板 目		△
W1615 84 9 区 木製造機 36 番	143.6 7.5 3.4	L端は斧で鋸めて切り落とされており、二次加工も考 えられる。上端より46cmと縁より20cmの部分は長方 形の切り欠きがあり、方形の穿孔底も考えられる。		①右側縫は鋸面で削る。左側縫はかなり平坦に加工さ れている。 ②裏面はかなり平坦であり、加工されていると思 われる。 ③裏面もかなり平坦に加工される。下端は鋸面を だが、右側縫をチョウナで削る。	古墳中期	69-84 58-84			△
W 94 10 区 85 SK103501 35 番	153.4 12.6 1.9	右側縫を鋸りで欠損する。下端は鋸面に切り落とさ れ、二段加工の可能性がある。上端から8cmと下端か ら41cmのやや中心より左側縫により小孔を穿ってい る。		①裏面はかなり平坦であり、加工されていると思 われる。 ②裏面はほぼ全面チョウナで加工されている。裏 面は不明瞭だが、チョウナで加工されたと思われ る。	准生後期 後葉一 古墳前期	69-85 58-85	板 目		△
W3031 86 10 M SK103503 35 番	152.9 17.0 2.9	左側縫一面を欠損する。右側縫は内側から約5cmの部 位に、左側縫はその孔よりもやや上にすれる部位で小 孔を穿っている。		①下端が裏面で切られた部分に対し、上端は中央が 残して加工している。 ②裏面と裏面に対し、ほぼ直角の面を作る。	准生後期 後葉一 古墳前期	69-86 58-86	板 目		△
W2549 87 6 区 SK561601 16 番	145.7	右側縫と左側縫下部を欠損。全体的に劣化と変形が著 しい。上端より49cmの部位に4cm×6cmの長方形の入 き孔を穿つ。実際の板の厚さ3.5cm。		③目立つ加工痕は見られないが、正面はチョウナ で加工した可能性がある。	准生後期 後葉一 古墳前期	69-87 58-87	板 目		△
W1949 88 9 区 SK93802 38 番	145.7 13.5 2.7	左側縫部を欠損する。下端から22cmの部位に2cm× 4.5cmの横円形の孔を穿つ。		④正面は平端に削られており、チョウナで加工さ れたと思われる。裏面はほぼ全面チョウナで加工。 裏面左側縫の下端から25cmの部位と、右側縫の上 端から65cmの部位が裏面に盛り上がる。	准生後期 後葉一 古墳前期	69-88 59-88	板 目		△
W1079 89 8 区 SK817a05 17a 番	143.6 16.0 2.8	右側縫部の大部分が欠損している。ほぼ中央部の右側 縫寄りに2cm×4cmの楕円形の孔が穿たれている。		⑤左側縫は平端であり、削る加工がされていると思 われる。 ⑥正面左半分と裏面の右側縫をチョウナで加工す る。	准生後期 後葉一 古墳前期	69-89 59-89	板 目		△
W1951 90 9 区 SK93802 38 番	142.8	左側縫下部を欠損。表面はほぼ木目に沿って削ってい る。実際の板の厚さ2.3cm。		⑦両端は斧等で切り込み切断されている。 ⑧全面削り金で目立つ加工は認められない。	准生後期 後葉一 古墳前期	69-90 59-90	板 目		△
W1630 91 9 区 SK93701 小木製造機 37 番	142.2 13.5 2.0	上部に3cm×4cmと、5.5cm×5cmの方形孔。下部1/3 の部位に4.5cmの穿孔がある。下端は大損のため不明だが、 右側縫には左側縫の孔とはほぼ中央に小孔が2つずつあ って穿っている。		⑨下端は上端にくらべかなり後に切断されており、 二段加工の可能性がある。 ⑩裏面、正面、裏面とも平坦で劣化のため不明だ が、チョウナで加工されていると思われる。	准生後期 後葉一 古墳前期	70-91 59-91	板 目		△
W 99 92 1 区 SK12202 22 番	130.7 13.5 3.4	上端と左側縫を欠損する。上端より18cmの部位に2 cm×4.5cmの穿孔がある。下端は大損のため不明だが、 右側縫に突き出たが、または左側縫となってコの字形 となる。		⑪正面の大部分と、裏面の中央部にチョウナ底が 認められる。 ⑫裏面はチョウナで加工されたと考えられる。	准生後期 後葉一 古墳前期	70-92 59-92	板 目		△
W 606 93 2-3 区 SK21201 12 番	138.3 11.1 1.7	上部側縫部を欠損。右側縫に2つ並んで孔を穿つ。上端 の右側縫には格子形の孔をそれぞれ穿っている。下端 の左側縫にも孔底がある。		⑬左側縫はチョウナで加工されたと考えられる。 ⑭化のため不明瞭だが、正面、裏面とも平坦で チョウナで加工されている可能性がある。	准生後期 後葉一 古墳前期	70-93 59-93	板 目		△
W 586 94 2-3 区 SK21201 12 番	137.1 12.1 1.8	I.下端を欠損する。左側縫に2つ並んで孔を穿つ。所 が、ほぼ左側縫で2箇所ある。下端は欠損していて不 明だが、孔底または切り欠き底が残る。		⑮表面に目立つ加工痕は認められないが、かなり 平坦に作られている。	准生後期 後葉一 古墳前期	70-94 59-94	板 目		△
W 493 95 2-3 区 SK21204 12 番	135.8 18.0 2.6	右側縫中央を欠損する。欠損部中央は孔底と思われ る。さらに下部に穿孔が2箇所ある。実際の板の厚さ 2.2cm。		⑯下端は上端に比べてかなり板く切り底としてお り、二段加工の可能性が高い。 ⑰裏面に不明瞭だが、チョウナ底と思われる加工 痕がわずかに認められる。	准生後期 後葉一 古墳前期	70-95 59-95	板 目		△

板材 8

番 号	登録番号 区 出・造構 出・上層	法 令 全長 厚さ	形 態	技 法	①両端の加工 ②側面の加工 ③表面の加工	年代範 囲	古墳園版 等真園版	木 取 り	樹 種
96	WK1407 10 区 SK10305 33 番	135.7 13.9 4.1	下端に3cm×3cmの方孔を穿つ。右側縁部に小孔を2つ穿つ。実際の板の厚さ3.7mm。	①下端は執として二次加工されている。 ③全側面裏面で目立つ加工痕は認められない。	弥生後期 ～古墳前 期	70-95 60-95	板 目	「スギ」	
97	W 905 7 区 SD71201 12 番	132.4 11.4 2.2	上下端とも刃で切り落とされる二次加工がされている。下端は正面を削って凹なりの加工をしているようである。左側縁に2つあんてんで孔を穿った箇所が4箇所残る。実際の板の厚さ1.5mm。	④内側面ともチョウナで加工されたと思われる。 ⑤正面、裏面とも木材で削っている。	弥生中期	71-97 60-97	板 目	「スギ」	
98	SK7-10 -12B SK71006 7 区 10 番	130.0 14.8 3.0	側縁部が僅かに欠損している。左側縁に1下端それだけが1.5mmの部分に、他の部分と組み合わせたと思われる切り欠きがある。	⑥正面の左右の側縁をチョウナで削り、薄く往上げる。 ⑦正面は不明瞭だが、ほぼ全面にチョウナ板が残る。	季冬時期 ～古墳前 期	71-98 60-98	板 目	「スギ」	
99	W 691 10 区 木造次造築 30b 番	109.0 10.3 3.1	上端から6mmの部材に2.5cm×4.5cmさらに31cm下方に2.2cm×5.5cmの長方形孔を中心線上に穿つ。	⑧上下端とともに正面、裏面、両側面を削て齊い右端部に削れがある。 ⑨正面はかなり平垣で仕上げられている。裏面はチョウナで加工されたと思われる。	古墳中期	71-99 60-99	板 目	「スギ」	
100	WK1897 9 区 SK93081 38 番	105.3 11.9 3.2	下端を欠損する。上端から18cmの部位に4.7cm×3cmの横貫の長方形孔を穿つ。	⑩兩側面ともチョウナで加工。 ⑪正面、裏面ともほぼ全面チョウナで加工。	弥生後期 ～古墳前 期	71-100 61-100	板 目	「スギ」	
101	W1434 8 区 SK81703 17a 番	105.6 24.8 3.0	左側縁上部を削り、やや右側縁を残りの上端から23mmの部位に5cm×5.5cmの方孔が、下端から17.5mmの部位に6cm×6.5mmの方孔を穿つ。左側縁上端にも穿孔が見られる。実際の板の厚さ2.8mm。	⑫内側縁もチョウナで加工。 ⑬劣化で不明瞭だが、正面、裏面ともチョウナで加工されたと思われる。	季冬後期 ～古墳前 期	71-101 61-101	板 目	「スギ」	
102	W 901 7 区 木造次造築 9 番	102.8 12.4 2.8	左側縁と下端を欠損する。左側縁に並行して小孔を穿つ箇所が4箇所あり、ほぼ等間隔である。	⑭側縁はチョウナで加工されたと思われる。 ⑮正面からなり縁の無い加工痕が残る。裏面は一部チョウナの加工があり、おそらく全面加工されていたと思われる。	古墳中期	71-102 61-102	板 目	「スギ」	
103	W 191 2-3 区 SR21001 10 番	102.7 31.9 2.1	F端と左側縁を欠損。右側縁も一部欠損している。右側縁欠損部には7cm×1.5cmの長方形孔がある所があったと思われる。中央の右側縁部と下端に方孔を穿っている。実際の板の厚さ1.5cm。	⑯上端10mmをやや削ぐ削る。 ⑰正面は劣化のため不明瞭だが、裏面は一部をチョウナで削ったと思われる。	古墳中期	71-103 61-103	板 目	「スギ」	
104	W1503 2-3 区 14 番	100.2 15.6 2.0	左下端を欠損する。欠損の上部は2箇所の穿孔部と怠らる。上部は右端部と中央部に左側縁部、右側縁部に2箇所の穿孔。裏面は上部で削けて劣化している。	⑱上端はやや裏面に削られている。裏面下端はやや薄く削られていた。 ⑲裏面は全面に細かいチョウナ加工痕が残る。	季冬後期 古墳前 期	71-104 61-104	板 目	「スギ」	
105	W 537 8 区 SK81703 17a 番	99.6 17.4 2.1	下端を欠損し、上部は板の部分が削れて欠損している。裏面に焼痕が残る。1cm×2cmの孔が左側縁に3箇所残っている。右側縁には中央と下端に孔がある。	⑳下端は斧で斜く切り、二次加工されている。 ㉑裏面はほぼ全面にチョウナ加工痕が残る。裏面は削り面で裏面である。	季冬後期 古墳前 期	72-105 61-105	板 目	「スギ」	
106	W1639 10 区 SK163302 33 番	87.8 25.2 3.7	完形成。上下端が丸棒を彫り、上部下端の表面を削り、中央部を削らないため中央部がやや厚くなる。手前にやや彫琢する板材である。実際の板の厚さ3.0cm。	㉒チョウナで加工されている。 ㉓正面は上部と下部をチョウナで加工。裏面は上部を中心にチョウナで加工。片面中央部に方孔痕が見られる。	季冬後期 ～古墳前 期	72-106 61-106	板 目	「スギ」	
107	WK1184 10 区 SK103503 35 番	91.5 19.9 2.9	I端を欠損する。右側縁の下端から20mmの部位に2.5cm×4.5cmの孔。その45mm上方に3.5cm×4.5cmの孔を穿っている。左側縁の中央部に1cm×1cmの小孔を穿っている。	㉔下端は斧板として二次加工されている。 ㉕左側縁はチョウナで加工。右側縁は削り面。 ㉖正面は削り面だが、裏面は側縁をチョウナ加工する。	季冬後期 ～古墳前 期	72-107 61-107	板 目	「スギ」	
108	WK1362 10 区 SK103504 35 番	96.4 17.5 3.2	上端を欠損する。ドロボコの形で切り欠き、左側縁部の上端と中央部にねぶように小孔を穿つ。上端の小孔はややずれた位置で穿っている。実際の板の厚さ2.8mm。	㉗正面、左側の側縁部をチョウナで加工する。裏面も左側縁を加工する。 ㉘正面、裏面とも木口で削っている。	季冬中期 ～古墳前 期	72-108 61-108	板 目	「スギ」	
109	SK7-10 -457 7 区 SK71003 10 番	76.2 12.4 2.2	下端を欠損する。I端と中央部に左右並んだ抜茎で孔を穿つ。上端から15cmの部位に3.5cm×4cmの孔。14.5cmの部位に2cm×2.5cmの小孔を穿っている。下部30cmの部位に5mmの段差部がいてやや厚くなる。	㉙正面は劣化のため目立つ加工痕は認められないが、かなり平垣で途中に段差があることからチョウナで加工されていたと考えられる。	季冬後期 ～古墳前 期	72-109 60-109	板 目	「スギ」	
110	W 298 2-3 区 SR21001 1 号屋 10 番	69.6 14.6 6.4	上端と左側縁を欠損する。大きく突起させた箇所が2箇所残る。その右起の右下には2.3cm×3.6cmの小孔を穿っている。	㉚裏面は立った加工痕は認められないが、全体的に平垣で丁寧に仕上げられている。裏面は平垣で、是等の台の上面とでも考えられる。	古墳中期	72-110 60-110	板 目	「スギ」	

板材9

番号	登録番号 K 出先機械 出先着付	法量(cm) 半径 厚さ	形 態	技 法	①側面の加工 ②側面の加工 ③表面の加工	年代範 囲	実測面積 等高線圖	木 取 り 幅 高
111	W253 10 K SK103307 33 番	62.9 13.2 2.0	上端より15.5cmの部位に径2cmの円孔を穿つ。下端は斧で切り落とされる二次加工がされており、112に接合する可能性がある。	②右側面はチョウナで加工。左もチョウナ加工と思われる。 ③正面、裏面とも全面にわたってチョウナで加工する。	斧牛後期 ～古墳前 期	72-111 60-111	板 （スギ） 目	
112	W255 10 K SK103307 33 番	59.3 13.4 2.6	左側縁上部を欠損。下端は斧で切り落とし、二次加工されている。111に接合する可能性あり。下端の一次加工中央部に凹凸感と思われる僅みがある。実際の板の厚さ2.4cm。	①右側面はチョウナで加工。左は不明だがチョウナ加工と思われる。 ②正面、裏面とも全面にわたりチョウナで加工す。 ③正面、裏面とも全面にわたりチョウナで加工す。	斧牛後期 ～古墳前 期	72-112 60-112	板 （スギ） 目	
113	W 445 2-3 K SK21204 12 番	177.6 19.6 2.1	I.下端も側縁部を一部欠損する。上端から33cm～44cmの部位の正面がやや窪む。 II.上端を斜めに切り落とし平行四辺形状に作る板材。実際の板の厚さ2.8cm。	①上端は長い側縁状に切り、下端はやや斜めに切 ②正面左側縁はチョウナ削りかと思われる。 ③表面劣化のため加工は不明瞭だが正面のみチョウナで加工しているようである。	隼牛後期 ～古墳前 期	73-113 62-113	板 （スギ） 日本表	
114	W294 6 K SK61601 16 番	136.4 16.0 3.4	上下端を斜めに切り落とし平行四辺形状に作る板材。実際の板の厚さ2.8cm。	②表面は劣化が著しく、加工痕は不明である。木目で割っていると思われる。	隼牛後期 ～古墳前 期	73-114 62-114	板 （スギ） 目	
115	W 361 5 K SK51301 13 番	163.0 23.2 4.2	下部右側縁を欠損。直ぐに弓形に変形された板材である。F部は裏面がはがれ落ちなくなり、下端は厚度が1cm程度である。実際の板の厚さ3.9cm。	②右側面ともに平坦に加工され、チョウナ加工かと思われる。	隼牛中期 後葉～ 隼牛後期 初期	73-115 62-115	板 （スギ） 目	
116	W 315 5 K 北壁 12 番	167.0 17.6 4.1	F部右端を欠損する。上端には5cm×17.5cmを切り欠く。大きく、かなり厚い板。	③時に目立つ加工痕はない。木目で割っている部分が多い。	隼牛後期 前葉	73-116 62-116	板 （スギ） 目	
117	SK7-10 -103 7 K SK71005 10 番	168.0 4.3 4.6	I.端を欠損する。上端を4.7cm×3.2cmの方形に切り欠き。下端はやや円形状に4.1cm×3.7cmを切り欠く。板架材の側縁性がある。	④左側縁は不明瞭だがチョウナ痕が残る。右側縁は不明だが、かなり削り跡がある。 ⑤正面にはチョウナ痕が跡々に残る。裏面は右側縁を傷かにチョウナで加工し、他の削り面となっている。	隼牛後期 後葉～ 古墳前期	73-117 62-117	板 （スギ） 目	
118	W1006 2-3 帆 及表 20 番	178.0 18.6 1.9	下端を一部欠損。左側縁上部、右側縁の一部を欠損する。下端中央は骨乳頭かと思われる僅みがある。実際の板の厚さ1.7cm。	④左側縁の裏面を傷かに削っている。裏面は不明瞭であるがチョウナで加工したと思われる。	隼牛中期 前葉	73-118 62-118	板 （スギ） 日本表	
119	W1959 9 K SK5092 38 番	150.4 15.8 3.4	左側縁下部を欠損。直ぐな長方形に加工された板材である。実際の板の厚さ2.5cm。	⑤下端は削れで、丸あら切っている。 ⑥表面はやや劣化しており、右側縁の裏面のみをチョウナで削っていると思われる。	隼牛後期 後葉～ 古墳前期	74-119 63-119	板 （スギ） 日本表	
120	W 910 7 K SR71101 12 番	141.5 20.8 3.6	ほぼ平行形。左側縁裏面3.5cmに段落をついている。	⑦下端4.5cmを薄くする。 ⑧左側縁は薄くごと、右側縁は平坦に切っていい。 ⑨表面の劣化のため加工痕は不明。	隼牛中期 後葉～ 古墳前期	74-120 63-120	板 （スギ） 日本表	
121	W 930 7 K SD71201 12 番	134.8 20.8 5.1	かなり使い作りの板材。下端は斧で切り込んだ痕が残り、二次加工とも考えられる。実際の板の厚さ4.5cm。	⑩正面、右側縁部はチョウナで削っている可能性がある。左側縁、裏面はチョウナで削る。 ⑪削りはがしが多い。	隼牛中期 後葉～ 古墳前期	74-121 63-121	板 （スギ） 目	
122	W2111 9 K SK93802 38 番	136.0 16.4 2.4	直ぐな長方形の板材。上端に比べ下端は先端に切っており、二次加工と思われる。	⑫左側縁にチョウナ痕が残る。 ⑬正面、裏面とも割り曲面。上端右側の裏面を傷かに削り薄くしている。	隼牛後期 後葉～ 古墳前期	74-122 63-122	板 （スギ） 日本表	
123	W3594 6 K SK61601 16 番	80.8 18.7 4.0	下端を欠損する。上端から9.5cmの部位から下15cmを正面のみ削って傷かに窪めている。実際の板の厚さ3.7cm。	⑭目立つ加工痕はないが、平坦となるように削ら れているようである。正面には刃物痕が僅かに残る。	隼牛後期 後葉～ 古墳前期	74-123 63-123	板 （スギ） 目	
124	W2805 6 K 16 番	64.7 18.7 3.0	上端を欠損する。下端は板板として二次加工されてい る。下端より36cmの部位に刃形孔の痕跡がある。	⑮下端は右を斜めに切り落として矢板に加工され ていたと思われる。 ⑯表面劣化のためチョウナ痕不明。	隼牛後期 後葉～ 古墳前期	74-124 63-124	板 （スギ） 日本表	

番号	登録番号 区 山土通機 号	法規(cm) 今長 幅 厚さ	形 態	技 法	①肉瘤の加工 ②側面の加工 ③表面の加工 ④その他	年代記	実測開版 実測閉版	木取り 種類
125	W1638 11 区 SK10302 33 箱	88.0 32.3 3.0	ん側面を欠損する。やや前に向かって弯曲する。右側 縫中外部は15cm×24cmにわたり裏面の割りがなく、や や僅んでいるようである。左側面は上端より25cmの部 位に15cmにわたりて孔の粗面が残る。堅板材。	③右側縫中央部には刃物痕が残る。他の部分はほ とんどチョウナで削っている。裏も同様の加工 である。	先後期 後葉～ 古墳前期	74-125 63-125	板 スギ 目	
126	W 448 2-3 区 SK12094 32 箱	124.9 14.3 4.7	下部に一辺約5.5cm×6cmの方形孔を打つ。上端は欠損 しているが、同様の孔を残っていたと思われる。下端 は厚く孔から上はほんの一辺に開窓されている。	①下端は正面を斜めに削り、右側面を斜めに切り落としている。 ②右側縫は正面を斜めに削り落としている。 ③正面・裏面とも木目で削るが、小孔のある左側縫 の裏面をチョウナで削る。 ④左側縫の下端より45cmで劣化し、荒れている。	先後期 後葉～ 古墳前期	75 126 64-126	板 スギ 目	
127	W2347 6 区 SK61601 16 箱	100.5 15.0 4.7	上部に約3cm×5cmの孔を穿つ。孔の内側にも同様の 孔があった可能性がある。左側縫に小孔が2つ残って おり、孔と孔の間は約37cmである。下端は欠損。	①上端は斧状の工具で正面から切り落としている。 ②右側縫は正面を斜めに削り落としている。 ③正面・裏面とも木目で削るが、小孔のある左側縫 の裏面をチョウナで削る。 ④左側縫の下端より45cmで劣化し、荒れている。	先後期 後葉～ 古墳前期	75 127 64-127	板 スギ 目	
128	W2917 10 区 SK10303 35 箱	123.2 18.2 5.2	下部に大きな孔を切り落とした痕跡が残る。他の部分 は厚く、裏面も裏に上がる。他の部分の厚さは6cm程 度。下端は12cmの部位では裏面を削り落としている ため残さが1cm程度である。左側縫は欠損。	①上端、下端とも正面と裏面から斧状の工具で切 り落す。上端より15cmの部分に側面の孔を穿つ。 ②右側縫は正面を斜めに削り落としている。 ③正面は斧状の工具で削り落す。裏面は木口で削り 側面は削り落す。	先後期 後葉～ 古墳前期	75-128 64-128	板 スギ 目	
129	W2067 5 区 SK61601 16 箱	87.1 20.8 2.2	上端より6cmの部位に2.5cm×4cmの孔を穿つ。左側 縫に小孔があり、反対側にも小孔があったと推定され る。右側縫は僅かに欠損していると思われる。	①上端は斧状の工具で削り落としているが、やや直線的に 削り落していたと思われる。下端は斧状の工具で粗く切 削している。 ②右側縫は正面を削り落としている。 ③正面は斧状の工具で削り落す。裏面は木口で削り 側面は削り落す。	先後期 後葉～ 古墳前期	75-129 64-129	板 スギ 目	
130	WK2678 10 区 SK10303 36 箱	81.7 12.4 2.2	下端の約30.5cmの右側面を切り取って縫を狭くしてい る。左側縫の中央よりやや上に延び3cmの孔を穿 る。右側縫の中央より孔を穿つ。下端より30cmの前 り取った部位にも孔があつたと推定される。下端より 12cmの部位にも孔痕が残る。	①上端は劣化しているが、裏面から筋めに削って 切っている。下端は正面を削ってやや落として いる。裏面は正面から切断する。 ②左側縫は正面を削り落し、右側縫は加工されていると 思われる。 ③正面・裏面は木口で削ったと思われる。	先後期 後葉～ 古墳前期	75-130 64-130	板 スギ 目	
131	W1375 2-3 区 SK21291 12 箱	69.8 7.1 3.0	下端約18.5cmをやや薄いホゾ状に作り、下端より約10 cmの部位に一辺が2cmのホゾ穴を穿つ。上端は欠損。	①下端は正面と裏面をチョウナで削る。 ②右側縫は正面を削り落している。裏面がやや薄くなっ ている。 ③正面・裏面とも裏面の加工は見られない。裏面は 正面に比で平滑である。	先後期 後葉～ 古墳前期	75-131 64-131	板 スギ 目	
132	W2928 1 区 SK12203 22 箱	49.8 13.0 4.1	上部に2cm×6cmの横長の丸形孔を穿つ。孔の部分 が削りされている。下端は欠損。	①上端は正面・裏面から切断している。 ②右側縫は正面を削り落している。裏面がやや薄くなっ ている。 ③正面・裏面とも裏面の加工は見られない。裏面は 正面に比で平滑である。	先後期 後葉～ 古墳前期	75 132 64-132	板 コジイ 目	
133	W2882 1 区 SK12202 22 箱	55.8 12.1 2.5	下端に1.5cm×7cmの横長の細い孔を穿つ。孔は両面 から斧状の工具で穿っている。下端は両側面を斜めに 切り落せられている。	①上端は正面・裏面とともに落く削る。先端は一部 は側面に削り落していったと思われる。 ②左側縫は正面を削り落されたと思われる。右側縫 は削り落がされている。 ③正面・裏面とも木口で削り落す。裏面を平坦にする ため、横方向に削り落す。	先後期 後葉～ 古墳前期	75-133 64-133	板 スギ 目	
134	W1409 2-3 区 SK12104 14 箱	62.6 12.4 2.4	下端に一辺約5cmの方形孔を穿つ。上端は劣化し欠損 しているが、切断されている可能性がある。	①下端は正面と裏面を斜めに削る。左側縫は削り 落していったと思われる。 ②右側縫は正面を斜めに削り落す。左側縫は削り 落がしている。 ③正面・裏面とも木口で削り落す。	先後期 後葉～ 古墳前期	75 134 64-134	板 スギ 目	
135	W1604 1 区 SK12201 22 箱	53.5 9.0 2.6	下端正面を1/4円状に薄く削り、削った部分の左側 縫に孔痕が残る。孔は裏面からミ状の工具で穿って ある。元は2倍の幅を持った板と推定される。上端は欠 損。	①下端は斧状の工具で正面と裏面から削り落してい る。 ②右側縫の裏面を斜めに削り落す。左側縫は削り落 がされている。 ③正面は木口で削り落す。裏面はほぼ全面チョウナで 削り落されている。	先後期 後葉～ 古墳前期	75 135 64-135	板 スギ 目	
136	WK1454 10 区 SK10304 35 箱	59.8 14.5 3.4	左側縫から下に向かって大きくなり欠いている。下端 より12cmまでを切り下は削り落している。切り欠き の上端は少しづか、下端も孔痕か。上端は欠損。	①下端は正面から削り落がされている。 ②右側縫は正面を削り落しているようであるが、 上から下へ削り落した痕が左側縫に見られる。左側 縫は削り落がされている。 ③目立つ加工痕はないが、正面左側縫部を薄く 削り落していると思われる。	先後期 後葉～ 古墳前期	75-136 64 136	板 スギ 目	

番号	登録番号 区 出立金額 出立金額位	法規(cm) 全長 幅 厚さ	形 態	技 法	①右側面の加工 ②左側面の加工 ③表面の加工			年代別 区分後期 後業～ 古墳前期	古墳周囲 茅貝殻器	木 取り 目	樹 種
					④	⑤	⑥				
137	WK2361 10 区 SK103965 35 目	68.2 12.3 1.8	下部左側面に孔がある。上端は欠損しており、幅3cmの孔があったと推定される。	①下端は直面を切り込んでやや幅を狭くしている。先端は刃幅2cmの斧状の工具で切削している。 ②両側面とも削り残している。 ③正面・裏面とも本日で削っている。				区分後期 後業～ 古墳前期	75-138 64-137	板 目	(スギ)
138	W 429 2-3 区 SK121201 12 目	97.3 10.5 2.4	上部と下部に1つずつ孔を穿いている。上部は一辺4cmの方形孔に対し、下部は長さ7cmにもわたる円孔である。	①上端は斧状の工具で正面・裏面を削り直していいる。下端は正面をために削り落とす。 ②左側面も正面を削り直している。 ③正面・裏面とも本日で削り、縦方向に調整していると思われる。				区分後期 後業～ 古墳前期	75-138 64-138	板 目	(スギ)
139	W5289 6 区 SK61801 16 目	226.5 16.0 3.2	上端と下部に孔がある。上部の孔は約4.5cm×7cmの長い方形孔だが、下部は不整形孔で次第によし可能性ある。全体的に劣化が著しい。上端より下部がやや薄くなる。	①上端・下端ともやや丸みを帯びて直線的に切削される。斧状の工具による切削か。 ②両側面とも削り残している。 ③立付加工はなく、本日で削ったと思われる。				区分後期 後業～ 古墳前期	76-139 65-139	板 目	(スギ)
140	W1122 1 区 SK12205 22 目	38.5 19.4 2.3	3cm×2cmの複数孔が5箇所残存する。下部にもう1箇所あったと思われる。上・下端とも欠損する。	①全体的に劣化が著しく、加工は不明である。おそらく本日で削っていると推定される。				区分後期 後業～ 古墳前期	76-140 65-140	板 目	(スギ)
141	W1555 2-3 区 ST-6 15 目	26.3 15.3 1.9	上部に一辺約3cmの方形孔。左側縁に1cm×2cmの長方形孔。右側縁に2cm×4cmの長方形孔を穿つ。下端は一部を残し欠損している。	①上端は斧状の工具で切削されている。下端10cmを正面・裏面とも削ってやや薄くしている。 ②左側縁は裏面を削り直している。 ③平端部に加工されていると思われる。裏面はチヨウナによる加工か。				区分中期 後業	76-141 65-141	板 目	(スギ)
142	W 356 1 区 SR1200 壁土中 20 目	29.2 10.3 2.3	右側縁に2cm×1cmの小孔がある。左側・下端は欠損。下端も欠損しているか切削の可能性がある。	①右側縁はチヨウナで加工。左側面は削り直しておらず、孔底の可能性のある切り欠きが中央部にある。 ③正面・裏面とも本日で削っている。				余糞～ 平安	76-142 65-142	板 目	(スギ)
143	W 542 2-3 区 SK121201 12 目	28.0 7.2 2.1	上部に一辺1cmの小孔がある。左側・下端は欠損。	①下端は斧状の工具で切削されている。 ②右側縁は削り直していると思われる。 ③正面は木口で削っている。裏面は加丁痕が不明確であるが、やや平坦に加工されている可能性がある。				区分後期 後業～ 古墳前期	76-143 65-143	板 目	(スギ)
144	W1267 2-3 区 SK121204 12 目	50.2 9.4 2.6	下部に3cm×2.5cmの不整形孔を穿つ。孔は周囲から斜めに切り込んで穿ち、刃幅2cm～3cmの工具で正面・裏面両面から切っている。上端は欠損。	①下端は刃幅2.5cmの刃物で切削されている。 ②両側縁は削り直している。 ③正面・裏面は木口で削っている。				区分後期 後業～ 古墳前期	76-144 65-144	板 目	(スギ)
145	W1268 2-3 区 SK121204 12 目	45.8 11.6 2.8	144に似る。下部に2cm×2.5cmの孔を穿つ。孔は周囲から斜めに切り込んで穿ち、正面・裏面の両面から切り込んでいる。上端は欠損しているが、切断した可能性もある。	①下端は左側面を斜めに切り落とし尖らせる。 ②両側縁はやや丸みを帯びるように加工されていると思われる。 ③正面の一部を強く削っているが、裏面は加工ではない。裏面は木口で削る。				区分後期 後業～ 古墳前期	76-145 65-145	板 目	(スギ)
146	W1779 10 区 SK103906 36 目	155.0 16.9 2.3	孔を多く穿つ板材。孔の人さきは先がおり、穿孔はかなり粗く不定形な孔となっている。孔は正面・裏面の両面から穿つ。右側の大部分を欠損する。	①上端は刃幅2.5cmの斧状の工具で穿つ。下端も斧状の工具で削り残されている。 ②右側縁は平面に削り直されている。左側縁は約38.5cmの部位に長さ1cm幅1cmの方形の切り欠きがある。 ③正面・裏面とも本日で削り、厚い部分をチヨウナで削かに削っている。				区分後期 後業～ 古墳前期	76-146 65-146	板 目	(スギ)
147	WK2474 10 区 SK103908 33 目	122.6 11.4 4.0	穿孔が多く残るやや弱めの板材。中央よりやり下に6cm×2.5cmの縫合の孔。右側縁中央に大きさ3.5cm×7cm、上端に13cm×3.5cmの大型の孔がある。上部の孔は周辺に削れているためより大きくなっていると思われる。上端は欠損する。	①穿孔は左側面を方形に切り欠く。孔底の可能性がある。 ②両側縁とも平整となるように加工している。 ③正面・裏面とともに木口で削っている。				区分後期 後業～ 古墳前期	76-147 65-147	板 目	(スギ)
148	W 465 2-3 区 SK121201 12 目	115.5 16.2 1.8	上面に縫合の孔。下端に一辺約1.5cmと1cmの2つの方形孔がありそれ1つずつある。また5cm×5.5cmの方形孔底が下端にある。左側縁・下端を欠損する。	①上面は裏面から削って切削している。下端は右側縁を斜めに削り落とす。 ②両側縁は平面に加工する。 ③正面・裏面とともに木口で削っている。				区分後期 後業～ 古墳前期	76-148 65-148	板 目	(スギ)
149	W1549 2-3 区 小野町 16 目	117.0 12.1 4.0	右側縁中央部に8.5cm×5.5cmの切り欠きがある。上端より21.5cmまでの正面・28cmまでの裏面を薄く削り、上端より11cmと26cmの部位に一辺約3cmの小孔を穿つ。	①上面は直線的に切削している。下端は斧状の工具で削り直している。 ②左側縁は平面に加工する。右側縁は上面は平頭刃ではなく刃部が削り残している可能性がある。 ③正面・裏面とともに木口で削っている。裏面には1cmの段差が見られる。				区分中期 後業	76-149 65-149	板 目	(スギ)

番号	登録番号	法規(cm) 全長 幅 厚さ	形 態	技 法	年代範 囲	実測面版 等異常部	本 取 り	特 徴
150	W3005 2-3 区 SK61601 16 等	89.0 22.0 4.0	下端部に2cm×5cmの複数の孔を穿つ。下端より約59cmの両側縁部に小孔を1つずつ穿つ。小孔は側面に抜ける。左上部が削れている。	①両側は斧状の工具で粗く切断する。下端は両側面を削り、矢張り側面に加工する。 ②両側面は削り切っている。 ③正面・裏面は木口で削り立つ加工はない。 ④下端の丸は正面と裏面から穿つ。	弥生後期 後葉～ 古墳前期	77-150 65-150	板 スギ 目	
151	W 422 2-3 区 SK21205 12 等	68.4 12.6 3.0	上端に2.4cm四方の穿孔がある。下部左側縁にも2cm×1cmの複数の孔がある。上端の左側縁にも孔が複数ある。	①上端は手彫り・裏面から削り切られれている。下端は裏面から斧状の工具で削り立つ加工されている。 ②両側面とも削り切っている。右側面は平坦である。 ③正面・裏面は木口で削り立つ加工はない。 ④正面・裏面は木口で削り左側縁部を削り落としている。	弥生後期 後葉～ 古墳前期	77-151 65-151	板 スギ 目	
152	W 905 7 区 SK71007 10 等	44.5 9.0 2.0	右側縁に4cm×1.2cmの複数の方形孔を2つ穿つ。孔間は約30mm。左側縁に2cm×1.5cmの方孔が1つ孔が2つ残存する。孔間は44.5cmと12.5cmで、上は広い、下は狭い。上端は欠損。	①正面は裏面から斧状の工具で切断されている。 ②左側面は加工されていると思われる。右側面は削り落としている。 ③正面はチップナで加工されている。裏面は木口で削り立っているが、半周に削除している可能性がある。	弥生後期 後葉～ 古墳前期	77-152 65-152	板 スギ 目	
153	W 916 2-3 区 SK21201 12 等	61.2 13.6 2.8	比較的大きな孔のある板材。下端近くに2.5cm×4cmの複数の丸孔がある。上面のやや右側縁に4cm×3cmの複数の方孔を2つ、左側縁は欠損している。上端から右側縁上部にかけて欠損している。	①下端は両側面を斜めに削り底をくくる。先端の丸正面向きを落とし削り、裏面から直線的に切断する。 ②左側面は平面で加工されていると思われる。右側面は削り落としている。 ③正面はほぼ全部チップナで加工する。裏面は劣化しているが、右側縁裏面にチップナ痕が残存している。	弥生後期 後葉～ 古墳前期	77-153 65-153	板 スギ 目	
154	W2996 6 区 SK61601 16 等	66.4 14.6 3.2	中心線上の上端と中央部に一辺約3cmの小孔をそれぞれ2つ穿つ。裏面の孔の周辺がやや探し。上端は欠損。	①正面は両側面を斜めに削って尖らせ、更に角を落すように削り削りして鋭く仕上げている。 ②両側面は半円で加工されている。 ③正面は全面チップナで加工。裏面は木口で削り側縁部を加工している。	弥生後期 後葉～ 古墳前期	77-154 65-154	板 スギ 目	
155	W1198 1 区 SK12302 22 等	60.2 13.3 3.1	中央よりやや下に小孔を穿つ。孔はノミ状の工具で正面・裏面から穿っている。複数方向に大きさ2回切込みを入れ、縁を穂に削って削いている。右側は僅かに欠損している。	①上端は切断している。下端も刃幅3mmの斧状の工具で両側面で切断させている。 ②両側面は削り削りして側縁部を削り落としている。 ③正面・裏面とも右側縁部を削り落としている。	弥生後期 後葉～ 古墳前期	77-155 65-155	板 スギ 目	
156	W4760 6 区 SK61611 16 等	73.5 8.7 2.5	下端より約18cmの部位に2.4cm×2.8cmの方形孔を穿つ。中央部のやや上よりの正面を長さ20cmにわたって斜く削りあたりの加工をしている。下端は欠損。	①下端は正面に裏面から切り込み切断している。 ②両側面は削り削りして側縁部をチップナで加工している。 ③正面・裏面は木口で削っている。	弥生後期 後葉～ 古墳前期	77-156 65-156	板 スギ 目	
157	W 954 10 区 SK100901 38 等	101.0 17.0 1.8	厚さかねは一定に調節されており、丁寧に仕上げられていた板材。下部の右側縁に丸孔を2つ穿つ。右側は正面から側縁は裏面から穿つ。左側縁の中央部に2つ孔を穿っている。上端は欠損しているが、孔を穿った痕跡がある。	①上端・下端とも正面・裏面両方から切り込んで底面を削り落としている。 ②両側面は木口で削る。左側面はチップナで僅かに削るために、上端をやや軽く削っている。 ③正面・裏面とも半円で側縁部にチップナで加工されている。	弥生後期 前葉	77-157 65-157	板 スギ 目	
158	WK1267 10 区 SK103504 35 等	104.9 7.5 2.5	右側縁中央に一辺1.5cmの小孔を穿り、その上と下に1つずつ孔がある。右側縁下部は下端より24cmの距離を斜めに切り込み、下端を2cmほど縮狭していく。上端は欠損。	①正面は正面・裏面両方から斧状の工具で切り落とす。 ②両側面は木口で削る。 ③正面は斜めに加工はないが平面であり加工されている可能性がある。 ④正面・裏面は木口で削っている。	弥生後期 後葉～ 古墳前期	77-158 65-158	板 スギ 目	
159	W 643 10 区 木炭焼造橋 30b 等	96.7 11.4 2.6	下端と上端に4cm×2cmの複数の孔を穿っている。下端より28.5cmの左側縁裏面に非貫通の小孔があるが、欠損によるものと思われる。上端は欠損しているか切断の可能性がある。	①正面は正面・裏面両方から直線的に切断していると思われる。 ②左側面とともに半円で加工されている。左側縁上面に底部は欠損している。 ③正面・裏面とも木口で削っている。 ④孔は正面・裏面両方から穿っていると思われる。	古墳中期	77-159 65-159	板 スギ 目	
160	W1415 2-3 区 SK21402 14 等	104.8 14.6 3.7	左側縁に円孔の痕跡が残る。上の孔は長さ3cmで非貫通であったと思われる。下の孔は長さ4.2cmで貫通している。上端・右側縁は欠損。	①正面は板部を直線的に切断していると思われる。 ②左側面は木口で削っている。 ③正面は削り落としている。裏面はかなり平坦であり加工したと思われる。	弥生後期 前葉	77-160 65-160	板 スギ 目	
161	W 709 2-3 区 SK21201 12 等	81.2 10.0 2.8	中央が幅広くそのやや下に孔を穿っている。中央の幅広の部分は藍があり、その部分がコブ状になっていたと思われる。節の部分を削り削っている。上端は欠損しているようであるが、裏面に刃幅3cmの軋があり、切断している可能性がある。	①F歯斧状の工具で正面・裏面から切断している。 ②両側面とも削り削りしている。 ③正面・裏面とも木口で削る。 ④孔は正面から穿つ。	弥生後期 後葉～ 古墳前期	78-161 65-161	板 スギ 目	

番号	登録番号 区 域 地 点 上 土 屋 所 位 置	法量(cm) 全 幅 幅 厚さ	形 態	技 法	①内側の加工 ②側面の加工 ③表面の加工	年代 級	支 持 固 定 方 法 方 法	木 取 り 方 法	樹 種
162	W1411 2-3 区 SK21204 14 屋	76.0 10.2 2.0	中央線上に小孔を3つ穿つ。中央よりやや下に2つ上部に1つ穿っている。下部の丸削は4cm。上部の丸削は約19mmである。上端・下端とも欠損しているが、切断している可能性がある。	②両側面は目立つ加工はない。 ③右端にはほぼ全面をチョウナで加工する。裏面は木口で削り、両側面をチョウナで加工する。正面下端の裏面の表面に削がれています。	外生後期 後葉	78-162 67-162	板 (又ギ)	月	
163	WK1475 10 K SK103504 35 屋	96.1 7.1 1.9	下部より約15mmの部位に小孔を穿つ。上端は欠損しているが切削の可能性もある。	①下端は万能3cm削の斧状の工具で切断している。 ②両側面は削りしている。 ③正面・裏面とともに木口で削っている。	外生後期 後葉～ 古墳前期	78-163 67-163	板 (又ギ)	月	
164	W 458 2-3 区 SK21204 12 屋	88.5 18.2 2.5	上端から24mm、下端から19mmの正面を薄く削っている。裏面は下端のみ薄く削っている。中央部よりやや上部に小孔があり、他の部位が残存している。孔は裏面まで抜けている。	①上端・下端とも斧状の工具で切断している。刃幅は上端では2.5cm、下端では3cm程度である。 ②左端には両側面をチョウナで加工してある。裏面はほぼ全面をチョウナで加工する。	外生後期 後葉～ 古墳前期	78-164 67-164	板 (又ギ)	月	
165	W 444 2-3 区 SK21204 12 屋	94.5 16.5 2.9	中央に4cm×8mmの長方形孔を穿つ。上部の右側を欠損している。	①上端・下端とも直線的に切断されている。 ②両側面はチョウナで工具に加工し、右側面はチョウナで斜めに削られている。 ③正面・裏面ともチョウナで加工する。左は平坦に右はやや斜めになるように加工されている。	外生後期 後葉～ 古墳前期	78-165 67-165	板 (又ギ)	月	
166	W 477 2-3 区 SK21201 12 屋	92.3 17.1 3.0	上・下端を丸くカーブするように切り、左側面中央を切り欠く。下端右側には2.5cm×1cm前後の小孔を2つ穿つ。	①上端・下端とも斧状の工具で左側面に向かって丸くカーブさせる。 ②左側面は平削で切り欠く。右側面は上端約4cmは平削になっているが、下にかかるて削り削している。 ③正面・裏面とも木口で削りしている。	外生後期 後葉～ 古墳前期	78-166 67-166	板 (又ギ)	月	
167	W1794 2-3 区 SK21201 12 屋	102.0 26.6 2.2	中央よりやや左の右側縁部寄りに6cm×4cmの孔を穿つ。孔は正面・裏面両面から穿つ。下端は欠損しているが、上端による切断の可能性もある。	①上端は斧状工具により切断する。 ②正面裏面とも斜めに削りしている。 ③正面・裏面とも木口で削る。裏面化のため加工は不明瞭だが、正面の両側縁部を加工しているものと思われる。	外生後期 後葉～ 古墳前期	78-167 67-167	板 スギ	月	
168	W 710 2-3 区 SK21201 12 屋	84.3 9.1 2.4	下端より約24.5mmの右側縁部寄りに一辺1cmの孔を穿つ。孔は正面・裏面両面から穿つ。上端は欠損。	①上端は正面・裏面から斧状の工具で切断する。 ②右側縁部は斜めに削り削る。 ③正面・裏面とも木口で削る。正面の右側縁のみチョウナで削り削っている。	外生後期 後葉～ 古墳前期	78-168 67-168	板 (又ギ)	月	
169	W2007 1 K ST-41 22 屋	62.7 11.6 2.3	右上から左に向かって斜めに格子状の孔を3つ穿つ。孔間は約20mm前後。	①上端・下端とも斧状の工具で切断されている。 ②左側縁部も木口で削る。	外生後期 後葉～ 古墳前期	78-169 67-169	板 (又ギ)	月	
170	W1061 2-3 区 SK21201 12 屋	66.6 11.3 2.5	左側面で170度に接合する。左側面中央に孔痕が残る。	①上端・下端とも斧状の工具で切断する。 ②左側縁部は加工痕は不明瞭だが削り削っている。 ③正面・裏面ともにチョウナで加工する。	外生後期 後葉～ 古墳前期	78-170a 67-170	板 (又ギ)	月	
170 b	W1059 2-3 区 SK21201 12 屋	66.6 11.0 2.6	右側面で170度と接合する。右側面中央に孔痕が残る。左側面の下端にも孔痕状の方形の切り欠きがある。	①上端はやや丸みを帯びるように加工する。下端は削り削っている。 ②左側縁部は上端から12cmの部分を切り込んで、下端の縁をやや削ぐする。平坦に削っている。 ③正面・裏面ともチョウナで加工されている。	外生後期 後葉～ 古墳前期	78-170b 67-170	造 板 (又ギ)	月	
170	W1061 1059 2-3 区 SK21201 12 屋	66.6 18.4 3.1	中央に2cm×3.6cmの長方形の孔を穿っている。孔の上は右側を、孔の下は左側を切り込んで分割している。	170a、170bの加工に同じ。	外生後期 後葉～ 古墳前期	78-170 67-170	造 板 (又ギ)	月	
171	W 695 2-3 区 SK21201 12 屋	78.4 10.6 1.6	中央よりやや上の右側縁に3cm×15mmの複円形の孔を穿つ。上端は欠損。	①下端は名化しているが、直線的に切断されている。 ②右側縁は薄く加工され、左側縁は削り削されている。 ③正面・裏面とも木口で削る。正面には一部チョウナの加工痕が見られる。	外生後期 後葉～ 古墳前期	78-171 67-171	板 (又ギ)	月	
172	W 695 2-3 区 SK21201 12 屋	46.4 11.2 1.4	上部に孔を穿つ。孔は主に正面から穿ち、裏面も僅かに削っている。上端は欠損している。	①下端は右側面を切り欠いて、やや幅狭くしている。 ②半円で加工していると思われる。 ③正面・裏面とも不規則だが、全面チョウナで加工されていると思われる。	外生後期 後葉～ 古墳前期	78-172 67-172	板 スギ	月	

機材14

番号	機材番号 区 所	法量(cm) 全 幅 厚さ 出し層位	形 態	技 法	①端部の加工 ②側面の加工 ③表面の加工 ④その他	年代別	実測開版 写真開版	木 取 り	樹 種
173	WK943 10 区 SK102901 33 層	80.5 12.7 1.9	左側縫下端より9cmの部位に一辺1mm弱の小孔を穿つ。下部のやや右側縫よりも円形の小孔が1つある。この小孔は裏面に長さ9cm、幅1cmのわら棒があり、その中央に孔を穿つ。上端は欠損。	①下端は斧状の工具で斜めに切削する。 ②右端・裏面は木目で削り、正面左側縫をチョウナで斜めに削る。		弥生後期 後葉一 古墳前期	79-173 68-173 68-173	板	(スキ)
174	W3478 6 区 SK61618 16 層	107.8 9.0 1.9	左側縫下部に幅1.5cmの切り欠きがあり、下端も斜めに切っている。上端は劣化し、欠損しているが、切断の可能性もある。下端も先端部のみ欠損。	②右側縫と木目で削る。 ③正面・裏面ともにチョウナで加工する。		弥生後期 後葉一 古墳前期	79-174 68-174 68-174	板	(スキ)
175	W 659 2-3 区 SK21201 12 層	119.0 14.2 3.2	右側縫の中央よりやや下に縦く弧を描くようになります。左側縫下部を欠損する。	①下端は正面・裏面を削り、薄く尖らせる。 ②右側縫は平削にて削り、左側縫は正面から斜めになっており、加工されていると思われる。 ③正面・裏面とも木目で削り、尖らつ加工は見られない。		弥生後期 後葉一 古墳前期	79-175 68-175 68-175	板	(スキ)
176	WK1271 10 区 SK103005 33 層	123.4 2.3 2.8	左側縫中央に1cm×1.5cmの長方形孔を穿つ。上端は欠損。	①下端は両側面から切り欠き尖らせる。 ②右側縫は木目で削り、左側縫は正面から斜めになっており、加工されていると思われる。 ③正面・裏面とも削り削り。少しよりやや欠けの正面と、左側縫の裏面をチョウナで加工する。		弥生後期 後葉一 古墳前期	79-176 68-176 68-176	板	(スキ)
177	W3227 6 区 SK61601 16 層	134.0 21.1 2.1	右側縫中央に径3cm×2.5cmの楕円形の孔を穿つ。下部にも2.5cm×1.7cmの孔がある。孔の間は約3cmである。孔の裏面は正面が削られてやや薄くなっている。下端は欠損。左側縫の上下が大きく削れています。	①上面は斧状の工具で正面と裏面から切り込んで削る。 ②両側縫は平削にて削る。 ③正面・裏面とも加工の跡跡がなくて削り削ったものと思われる。 ④正面・裏面とも劣化のため加工痕は不明瞭。正面はチョウナ痕が多少に残る。裏面は平削にてあり加工された可能性が高い。		弥生後期 後葉一 古墳前期	79-177 68-177 68-177	板	(スキ)
178	W 573 2-3 区 SK21201 12 层	135.0 13.0 2.1	右側縫に2cm×1cmの楕丸の小孔が2つある。孔は約7mm。孔は正面から穿つ。上端は欠損。	①下端は左側縫を斜めに切り落す。右側縫裏面を削り削り尖らせる。 ②右側縫は平削にて削る。左側縫は正面から斜めにて削り削る。 ③正面・裏面とも木目で削る。		弥生後期 後葉一 古墳前期	79-178 68-178 68-178	板	(スキ)
179	W 659 2-3 区 SK21201 12 层	137.6 16.0 3.6	正面に段階が見られ、左半分が薄くなっているが、裏面が削かれたものと思われる。やや右側縫切り口に2cm×1cmの小孔を2ヶ所。孔間5cm。孔は正面より穿っている。上端は欠損。	①上面は幅約2.5cmの斧状の工具で切削していると思われる。 ②右側縫は削り削りしている。左側縫も削り削りしてあると思われる。 ③正面・裏面とも全面チョウナで加工している。右側縫・裏面もチョウナで加工している。		弥生後期 後葉一 古墳前期	79-179 68-179 68-179	板	(スキ)
180	W2252 10 区 SK103007 33 層	73.3 19.3 2.2	右側縫下端に小孔を穿つ。上端も欠損。	①下端は右側縫を斜めに切り落す。上端はほぼ直線的に切削する。 ②右側縫は薄く、右側縫裏面を斜めに削る。 ③正面・裏面とも全面チョウナで削る。		弥生後期 後葉一 古墳前期	79-180 68-180 68-180	板	(スキ)
181	W1197 2-3 区 SK21204 12 層	62.4 13.4 2.6	右側縫に4cm×1.5cmの楕丸の孔を穿つ。左側縫上端にも孔があつた可能性がある。上端は欠損。	①上面は斧状の工具で横に切り落す。 ②右側縫は平削にて削る。左側縫裏面を斜めに削る。 ③正面・裏面とも全面チョウナで削る。		弥生後期 後葉一 古墳前期	79-181 68-181 68-181	板	(スキ)
182	W 708 1 区 ST 38 22 层	55.5 9.2 2.6	右側縫中央に2cm×1cmの孔を穿つ。全体的に劣化が強く、下端は一部残るが、大半が欠損し、上端も欠損している。	②右側縫は削り削られている。右側縫裏面を斜めに削る。薄くしてあると思われる。 ③正面・裏面とも木目で削っている。 ④左側縫は削り削りや削る。		弥生後期 後葉一 古墳前期	79-182 68-182 68-182	板	(スキ)
183	W1192 2-3 区 SK21204 12 層	52.8 12.0 2.0	右側縫下部に直径3.5cmの楕円形の孔がある。左側縫にも中央よりやや下に3cm×1cmの孔を穿つ。左側縫上端・下端も欠損している。	①下端は斧状の工具で切削している。 ②右側縫は正面をチョウナで削り落としている。 ③正面・裏面とも加工は不明瞭だが、チョウナで全面加工していると思われる。		弥生後期 後葉一 古墳前期	79-183 68-183 68-183	板	(スキ)
184	W1263 10 区 SK103005 33 層	29.7 20.5 2.2	右側縫の中央よりやや上に小孔を穿つ。上端・下端ともに欠損。	②右側縫とも裏面をチョウナで削り、薄くなるように加工されている。 ③正面・裏面とも加工は不明瞭だが、チョウナで全面加工していると思われる。		弥生後期 後葉一 古墳前期	79-184 68-184 68-184	板	(スキ)
185	W 544 2-3 区 SK21201 12 層	33.4 13.4 2.1	左側縫上端に一辺1cmの小孔の痕跡がある。小孔は正面より穿つ。	①上端・下端とも正面を削り切する。刃幅2.5cm前後の工具で切っている。 ②右側縫は平削にて削り削られていると思われる。左側縫は裏面を斜めに削り落す。 ③正面・裏面ともチョウナで全面加工している。		弥生後期 後葉一 古墳前期	79-185 68-185 68-185	板	(スキ)

番号	登録番号 区 川土造構 出土部位	法量(cm) 外 部 幅 厚さ	形 態	技 法	①裏面の加工 ②側面の加工 ③表面の加工	年代 後 期 後 漢 古 墳 前 期	実測図版 写真図版	木 取 り 種 類
186	W2287 6 区 SK61601 16 層	66.0 28.0 2.0	丸長方形の板であったと思われる。左側縁上部に小孔があり、右側縁下部には一辺約3cmの方形孔がある。上端は劣化のため欠損。	①下端は正面・裏面とも削りや傷つく。 ②右側面は平削にかく。左側面も加工されていると思われる。 ③正面・裏面とも全面ショウナで加工する。	先生後期 後漢～ 古墳前期	80-186 69-186	追 延 日	(え き)
187	W4536 6 区 SK61602 16 層	75.8 19.4 3.0	下部左側に大きな切り欠きがある。切り欠きは上を垂直に切り込み、下を斜めに切って三角形状となっている。下端を一部欠損している。	①下端は正面・裏面から切り、直線的に切断している。下端は正面から削り先端に向って薄くする。 ②右側面は削り先端に向って薄くしていると思われる。左側面はやや丸みを持つように削りされている可能性がある。 ③正面は全面ショウナで加工。裏面は木目で削り左側縁端をショウナで削る。	先生後期 後漢～ 古墳前期	80-187 69-187	板 日	(え き)
188	W1703 1 区 SK12201 22 層	89.5 13.4 2.3	右側縁下部に小孔を穿つ。両側縁上部を僅かに欠損する。	①上端は削断されている。下端は両側面から切って丸らせる。 ②右側縁正面を斜めに削り薄くしている。 ③正面・裏面とも木目で削る。	先生後期 後漢～ 古墳前期	80-188 69-188	板 日	(え き)
189	W1055 1 区 SK12202 22 層	96.5 5.2	右側縁に2.5cm×1cm強の橢円形の孔を穿つ。左側は斜めで欠損していると思われる。	①上端は切斷されている。下端は左側からやや丸みを持つように削り、先端を尖らせる。 ②右側縁正面を斜めに削って薄くする。 ③正面・裏面とも木目で削る。	先生後期 後漢～ 古墳前期	80-189 69-189	板 日	(え き)
190	W1808 2-3区 SK20901 9 層	161.0 12.4 2.6	下端を方形に切り欠く。下端より45cmの部位の左側面を切り込み、上に向かって削り取って上部をやや幅狭くする。	①上端は正面と裏面を削て切削している。下端は正面から斜めに削り取ります。 ②右側縁は削れていていると思われる。左側縁は下端を削り削し、上部は削られていっている。 ③正面・裏面は劣化により不正確だが、平坦であり加工されている可能性がある。	古墳時代 中期	80-190 69-190	板 日	(え き)
191	WK706 5 区 10 層	100.8 9.4 1.8	下部が上部にくらべ5cm程度狭くなっている。左側縁の幅狭くなる部分の上端には及ぼ2cm強の孔があつたと思われる。右側縁上部に小孔があり、下部にも孔板と思われる切り欠きがある。上端は欠損。	①下端は右側縁から斜めに切り落としている。 ②左側縁は平削だけ削り削していている。 ③正面は全面ショウナで加工している。裏面も不正確だがショウナで加工されていると思われる。	古墳時代 前期	80-191 69-191	追 板 日	(え き)
192	WK1185 10 区 SK102503 大根列 35 層	93.8 21.6 3.0	下端を欠板状に加工する。板は左から右に向かって厚くなる。左側縁中央に小孔を2つ重ねるように寄る。右側縁は欠損。	①下端は両側面を切って尖らせ先端を正面・裏面から削る。 ②左側縁をショウナで削り薄く加工する。右側縁は削り落としている。 ③正面・裏面とも木目で削り削している。	先生後期 後漢～ 古墳前期	80-192 69-192	板 日	(え き)
193	WK1186 10 区 SK103503 大根列 35 層	85.2 20.7 1.8	下端を欠板状に加工する。左がやや薄い。左側縁中央に小孔を2つ穿す。そのやや左に小さな複いV字状の切り欠きがある。上端は劣化し欠損している。	①下端は両側面を切って尖らせる。木目も薄く削る。 ②裏面は正面を削り薄くするため正面・裏面をショウナで削る。右側縁は削り落としていると思われる。 ③正面・裏面とも木目で削り削している。	先生後期 後漢～ 古墳前期	80-193 69-193	板 日	(え き)
194	WK1183 10 区 SK103503 大根列 35 層	72.5 19.3 2.9	やや厚めの板を欠板に加工している。左に向かって厚くなる。正面右側が荒化している。右側縁下部に小孔の痕跡と思われる切り込みがある。上端は劣化し欠損。	①下端は裏面を削って尖らせる。先端は裏面を削りやや丸くなる。 ②右側縁は正面を削り薄くする。左側縁は削り削していると思われる。 ③正面・裏面とも右側をショウナで加工。裏面は木目で削り削っている。	先生後期 後漢～ 古墳前期	80-194 69-194	板 日	(え き)
195	W4128 6 区 SK61606 16 層	55.5 20.4 1.8	左側縁中央と下端に小孔がある。下端は欠板状に加工されている。	①上端は粗く切削されている。下端は右側面をショウナで斜めに削り尖らせる。 ②右側縁は削り削し、左側縁は正面を斜めに削って薄くする。 ③正面・裏面とも全面ショウナで加工する。	先生後期 後漢～ 古墳前期	80-195 69-195	板 日	(え き)
196	WK1182 10 区 SK103503 大根列 35 層	51.0 19.2 2.4	下端を欠板状に加工する。右側縁に小孔を穿つ。やや左に向かって厚くなる。上端は欠損。	①下端は両側面を斜めに削って尖らせる。 ②右側縁は正面・裏面を削り薄く加工する。右側縁は削り削している。 ③正面・裏面とも全面ショウナで加工。裏面は木目で削り削している。	先生後期 後漢～ 古墳前期	80-196 70-196	板 日	(え き)
197	W2040 6 区 SK61601 16 層	57.4 19.6 3.1	下端を細く尖らせている。中心線上に2つ小孔を穿つ。孔間は約3.5cm。右側縁上部にも小孔がある。上端は欠損。	①下端はショウナで両側面を削り尖らせる。 ②劣化のため不明だが、右側縁は正面・裏面を削り削いて上にしている。 ③正面は全面ショウナで加工。裏面は平坦となるように一部を削る。	先生後期 後漢～ 古墳前期	81-197 70-197	板 日	え き
198	W2003 6 区 SK61601 16 層	65.8 37.5 3.7	幅広の板を欠板に加工している。中心線上に小孔が2つある。孔間は約3.5cm。左側縁上部に小孔を穿つ。このほか上端に2つ孔があるが人為的なものかどうかが不明である。上端は劣化のため欠損。	①下端は直線的に切り、左右の角を削り落すように両側面から削り削している。 ②右側縁は削り削していると思われる。左側縁はショウナで斜めに削る。	先生後期 後漢～ 古墳前期	81-198 70-198	板 日	(え き)

番号	登録番号 区 点・赤線 点七位	法長(m) 全長 幅 厚さ	形 態	技 法	①両面の加工 ②側面の加工 ③表面の加工	年代観	古墳時代 写真復元	本 取 り	樹 種
199	W4166 6 区 SK61608 16 番	70.2 31.3 22	肉側縁中央に小孔を穿っている。下端はやや薄くなっている。上端は劣化し、欠損している。	①下端は正面と裏面から竿状の工具で直線的に削削し、両方の角を落とすように両側面から斜めに切り欠く。 ②右側縁は正面面を、左側縁は裏面を斜めに削り落とす。 ③正面・裏面とも全面ショウナで加工している。		弥生後期 後葉～ 古墳前期	81-199 70-199	板 目	(えき)
200	W4167 6 区 SK61608 16 番	75.4 31.8 22	199に似る。両側縁中央に小孔を穿つ。上端は劣化のため欠損。下端は欠板に加工されている。	①下端は両側面を斜めに切って尖らせる。 ②右側縁は正面面を、左側縁は裏面を斜めに削り、端部を落とす。 ③正面・裏面とも全面ショウナで全面加工。	弥生後期 後葉～ 古墳前期	81-200 70-200	板 目	(えき)	
201	WK162 5 区 SK51009 10 番	90.2 35.6 22	中心線上に孔が1つあり、その下方にも竿状の工具で削削されているが、丸底が1つある。孔周辺は約2mm。工具は正反より1つ、両側縁の孔端にも欠損しているが2つ孔底が残る。その下にも丸底の可能性のある箇所がつづつある。上端は欠損。	①下端は両側面を斜めに切って尖らせる。先端部は欠損しているが切断の可能性もある。 ②両側縁とも正面面に加工されていると思われる。 ③正面・裏面とともにショウナで全面加工している。	古墳前期	81-201 70-201	通 紙 目	(えき)	
202	W2021 6 区 SK61601 16 番	73.2 29.8 3.3	やや右側寄りに孔が上吊並ぶような形で穿つ。孔周囲は約4cm。やや左側が凹くなる。裏面の孔と孔の間の位置に別の部材が組合せられたと思われる。	①下端は両側面を削りて尖らせる。上端は竿状の工具で切削する。 ②両側縁とも1部底は見られない。 ③正面・裏面とも全面ショウナで加工。裏面は本目で削り一部をショウナで調整する。	弥生後期 後葉～ 古墳前期	81-202 70-202	板 目	(えき)	
203	W2028 6 区 SK61601 16 番	69.4 32.9 3.6	中心線上の下部に小孔を上下並ぶように穿つ。孔周囲は約4cm。間に別の部材を組み合せていたと思われ、やや左側。また孔の周囲の正面は削られている。上端は欠損。	①下端は両側面から斜めに切り込んで尖らせる。先端は断続的に切削されている。 ②正面面は削り直してやや薄くしているが、加工底は不明瞭である。 ③正面・裏面とも削り削した面である。	弥生後期 後葉～ 古墳前期	81-203 70-203	板 目	(えき)	
204	W4164 6 区 SK61608 16 番	92.0 31.3 3.8	欠板上に加工された幅広の板で、左側が厚い。上端は欠損。	①下端は右を大きく切り、左を僅かに切って尖らせる。 ②両側面とも平底に加工されている可能性がある。 ③正面・裏面とも削り削する。 ④正面・裏面とも削り削した面である。	弥生後期 後葉～ 古墳前期	82-204 71-204	板 目	(えき)	
205	WK2492 9 区 SK92803 38 番	79.0 18.8 2.2	やや幅長い大板状に加工されている。上端は欠損。	①下端は両側面を切って尖らせる。 ②両側面とも加工の可能性がある。 ③正面・裏面とも削り削し、正面のみ一部を加工する。	弥生後期 後葉～ 古墳前期	82-205 71-205	板 目	(えき)	
206	WK2493 9 区 SK92803 38 番	62.0 15.4 5.8	かなり厚い材を加工して欠板にする。正面に僅かに段があり、左側が厚くなっている。上端は欠損。	①下端は両側面と裏面の矢嘴を削り尖らせる。 ②右側縁はショウナで加工し、左側面は削り削している。 ③正面の右側はショウナで全面加工しているが、左側面は削り削した後、一部をショウナで調査している。裏面は全面加工している。	弥生後期 後葉～ 古墳前期	82-206 71-206	板 目	(えき)	
207	WK1975 9 区 SK93802 38 番	64.0 17.4 2.2	欠板状に加工されている。上端は欠損しているが、粗く切断された可能性もある。	①下端は両側面を切って尖らせる。 ②両側面とも削り削していると思われる。 ③正面は不明瞭だがショウナで加工されている。裏面は削り削している。	弥生後期 後葉～ 古墳前期	82-207 71-207	板 目	(えき)	
208	WK2013 9 区 SK93802 38 番	66.2 12.5 1.6	幅の狭い欠板状に加工されている。	①両側面を切って尖らせるが、左は僅かに右は大きくなる。先端は正面面を削る。 ②右側面は削り削してある。左側面は平底に加工している可能性がある。 ③正面は削り削した一部をショウナで加工する。裏面は削り削した面。	弥生後期 後葉～ 古墳前期	82-208 71-208	板 目	(えき)	
209	WK2021 9 区 SK93802 38 番	64.0 11.8 1.9	208に似る。幅の狭い欠板状に加工されている。	①上端は粗く切断する。下端は両側面を切って尖らせる。 ②両側面とも加工底は不明瞭である。削り削した可能性がある。 ③正面は削り削した一部をショウナで加工する。裏面は削り削した面。	弥生後期 後葉～ 古墳前期	82-209 71-209	板 目	(えき)	
210	WK2461 9 区 SK93803 38 番	66.2 22.6 2.6	欠板状に加工されている。上端は欠損。上端に孔がある可能性のある切り欠きが残る。	①下端は両側面から斜めに切り込んで尖らせる。 ②右側縁は削り削し、左側縁は斜めに削ってあると思われる。 ③正面は全面ショウナで加工している。厚さを調整するため右側の裏面をショウナで削っている。	弥生後期 後葉～ 古墳前期	82-210 71-210	板 目	(えき)	
211	WK1961 9 区 SK93802 38 番	82.2 25.4 2.1	やや幅広の材を欠板状に加工している。上端は欠損。	①下端は両側面を斜めに切り尖らせる。 ②両側面とも削り削るとと思われる。右側縁がやや厚くなつたあたり上端の可能性がある。 ③正面は右側をショウナで削り、左側は削り削したままとなっている。裏面も削り削している。	弥生後期 後葉～ 古墳前期	82-211 71-211	板 目	(えき)	

番	登録番号 区 出上場構 造	法量(cm) 全長 幅 厚さ	形 態	技 法	①両端の加工 ②側面の加工 ③表面の加工	年代範 囲	実測回数 等真因版	木 取 扱 難
212	WK187 10 区 SK10953 欠板部 35 層	59.6 15.2 3.4	下端を欠板部に加工するが、やや丸みを帯びて加工されていたものを、さらに削ったと考えられる。上端は欠損。	①下端は両側面を斜めに切り込んで尖らせる。 ②右側面はチップナで加工したと思われる。左側面は削り落としている。 ③正面・裏面とも全面チップナで加工している。裏面は木口で削っている。	午後後 後葉～ 古墳前開	82-212 71-212	板 目	えぎ 目
213	WK2629 9 区 SK93802 38 層	55.4 14.6 2.0	欠板部に加工している。み脚が欠損している。上端も欠損。	①下端は両側面を切り込んで尖らせる。 ②正面面はチップナとなるように加工する。 ③正面面は木口で削り、その上をチップナで削整している。裏面は木口で削っている。	先生後期 後葉～ 古墳前開	82-213 71-213	板 目	えぎ 目
214	W2002 9 区 SK93803 38 層	64.2 18.2 2.6	欠板が2つに割れ、左端が削れた形状をしている。	①下端は月輪2cmの斧状工具で切断する。下端は両側面を斜めに切り、下端を尖らせる。 ②右側面は削り落す。右側面はチップナで加工された可能性がある。 ③正面・裏面とも全面チップナで加工する。	先生後期 後葉～ 古墳前開	82-214 71-214	板 目	えぎ 目
215	WK2455 9 区 SK93803 38 層	67.4 20.0 2.2	右側から左に向かってやや厚くなる板材を欠板部で加工する。右側面中央部が細かく削られている。	①下端は両側面を削って尖らせる。 ②側面は斜めに削るよう仕上げる。右側面は削り落としていると思われる。 ③正面は全面チップナで加工し、裏面も右側面裏を削きチップナで加工する。	先生後期 後葉～ 古墳前開	82-215 71-215	板 目	えぎ 目
216	WK1492 10 区 SK105965 33 層	103.9 14.9 6.0	中央よりやや右寄りに約4cmの溝を上から下まで削る。溝は深さ約1cm。上端は欠損。欠板部に約6cm×4.5cmの孔を穿つ。	①下端は両側面を切り尖らせる。先端のみ正面も削る。 ②右側面は削り落とす。左側面はチップナで削整している。 ③正面と裏面は木口で削っている。	先生後期 後葉～ 古墳前開	82-216 71-216	板 目	えぎ 目
217	W 655 8 区 SK617a05 17a 層	112.5 15.4 5.0	裏面に深さ1cm弱、幅1cm前後の断面が緩いV字形となる溝を削む。溝は正面に4本、裏面に3本ある。1.5cm下端も左端を欠損する。	①下端はU字形に切り取る。上端は幅9cmの大きさなど方に削り落す。 ②両側面は削り落とす。左側面はチップナで削整している。 ③正面・裏面とも木口で削り落す。	先生後期 後葉～ 古墳前開	82-217 71-217	板 目	えぎ 目
218	W 4 2 区 SK20601 6 層	143.8 17.5 4.9	やや厚い板材で枝状の加工を受けている。裏面の中心線上に縦方向に表面を削り取っているが、加工であるか不明。	①下端は両側面を削り落して尖らせる。明確な加工ではない。 ②両側面は比較的平滑になっているが、一定の面が見られると上であるか不明。 ③正面・裏面とも木口で削り落す。	平安	83-218 72-218	板 目	えぎ 目
219	W3355 6 区 SK61901 16 層	165.0 14.6 2.0	上端と下端で加工が異なる。上端は直線で切り、薄く削られ、下端はんを方角に削り落す。左端を欠損していると思われる。	①上端は月輪の工具で正面と裏面から切り込み式的に切削する。また正面を削り落す。下端は先端はU字形で削るが、方形の削り欠きがあり、裏面の削り跡は認められない。 ②右側面は削り落している。 ③正面・裏面とも木口で削り、正面は一部をチップナで加工する。	先生後期 後葉～ 古墳前開	83-219 72-219	板 目	えぎ 目
220	W 776 7 区 SK70801 8 層	242.8 20.2 3.9	やや厚めの板材。厚さはは一定である。全体的に表面の劣化が激しく加工は不明瞭である。下端は欠損か。右側面をやや多く切っていると思われる部分がある。	①上端は月輪の工具で切削する。 ②両側面とも木口で削り落す。 ③正面面は木口で削っているが、一部平坦に調節するがチップナで加工する。裏面も木口で削るが側面部を加工して平面にしていると思われる。明確な加工痕は見られない。	奈良～ 平安	83-220 72-220	板 目	えぎ 目
221	W 459 2-3 区 SK21204 12 層	246.9 22.4 1.9	側面部に小孔が残存する。右側面に3つあり、孔間は4cm×2.2cmで一定ではない。左側面に1つあるが下端は欠損しており他の孔があった可能性がある。下端は欠損している。	①上端は左端を削るが、やや丸みを帯びるよう切削されている。下端は削り落としているが、正面を削り落す。 ②右側面は直線を、左側面は正面を削り落す。 ③正面・裏面とも木口で削り側面部をチップナで削る。	先生後期 後葉～ 古墳前開	83-221 72-221	板 目	えぎ 目
222	W 778 8 区 SK817a02 17a 層	72.3 17.0 4.3	正面を丸く削りしている。径25cm前後の内核を薄く板状に削った材の可能性がある。上端は欠損。	①下端は斧状の工具で切削している。正面・裏面両側面から切り込み中央を折取る。先端は直線的に切削する。 ②右側面は直線を、左側面は正面を削り落す。 ③正面・裏面ともチップナで削り丸みをつける。 ④正面・裏面とも木口で削り落す。	先生後期 後葉～ 古墳前開	84-222 72-222	板 目	えぎ 目
223	W 528 2-3 区 SK21201 12 層	66.6 14.8 3.6	中央に幅広く浅い溝を削り落している。溝の幅は7~8cm前後、深さは浅いところでも2cm弱である。	①上端は幅3cm程度の斧状工具で横幅で粗く切削されている。下端は裏面を大きく二回削りやや落す。先端は直線的に切削する。 ②右側面は直線を、左側面は正面を削る。 ③正面の平頭部はチップナで削る。溝の中も大きなチップナ削りが見られる。裏面は凸凹があるが縱方向に加工する。	先生後期 後葉～ 古墳前開	84-223 72-223	板 目	えぎ 目

番号	登録番号 区 島・港 出七番目	法量(cm) 全長 幅 厚さ	形 態	技 法	①溝の加工 ②曲面の加工 ③表面の加工	年代版	木側側面 写真図版	本 取り 組
226	WK885 10 区 SK10301 33 番	99.8 19.4 2.8	長い穴複数に加工された板。両側面を切って下端を細くする加工だが、先端まで切り落とさず途中から下に削り落す。上端は欠損。	①下端は両側面を切り落とす。先端は右側面から单側の工具で直角的に削られている。 ②両側面とも大部分が削り落しているが、削り落されていると思われる。 ③正面は一歩チャウナで調整。裏面は木口で削る。	先生後期 後業～ 古墳前期	84-224 72-224	板 （スギ） 目	
227	WK297 10 区 SK10304 33 番	86.2 13.1 2.4	正面の両側縁中央部をチョウナで削り、やや丸みを帯びるように加工する。	①上端は概々切り取らされている。刃幅2.5cmの切断が残る。下端は正面から斧状の工具で直角的に切断されている。 ②両側面は削り落されている。 ③正面・裏面とも木口で削る。裏面の両側縁は平行となるように縱方向に加工する。	先生後期 後業～ 古墳前期	84-225 72-225	板 （スギ） 目	
228	WK1376 10 区 SK10304 35 番	63.6 9.8 1.9	薄い板状で下端を約6cmほどホゾ状に突出させる。上端は欠損。	①下端は両側面から切り落としで削り取られている。 ②両側面とも平底で加工されていると思われる。 ③正面・裏面ともほぼ全面チャウナで加工している。	先生後期 後業～ 古墳前期	84-226 72-226	板 （スギ） 目	
229	W1622 2-3 区 SK22001 20 番	40.1 10.3 3.6	断面と中央が盛り上がる様子で加工されている板状。右側縁木口で削り落ちており、左は左と倒影の形でいたと思われる。上端は欠損。両側縁も大部分が欠損。	①下端は斧状の工具で粗く切り落としている。 ②右側は木口で削れ、左側はやや薄くなってしまっており、加工されたと思われる。 ③裏面はほぼ平底で加工されている。	先生中期 後業	84-227 72-227	追 板 （スギ） 目	
230	W5107 6 区 SK61801 18 番	118.6 24.2 5.3	厚い板状を加工し、下部に一辺約7cmの方形孔を穿く。上面に幅約4cmの大形の孔を穿く。下端は両側縁から下端端まで木口から裏面にかみくわっている。	①下端は先端から7cmの正面を削り、僅かに落く。 ②両側縁は木口で削られ、左側縁の下部をチョウナで調整する。 ③正面は木口で削り、左側縁の下部をチョウナで調整する。 ④裏面は木口で削り、両側縁をチョウナで調整する。	先生後期 後業	84-228 73-228	板 （スギ） 目	
231	W 307 2-3 区 SK21204 12 番	77.9 17.8 5.5	上部に約2cm×3.5cmの孔を2つ穿き、下端には8cm×4cmの孔を1つ穿いている。右側に比べ左側が厚く、中央に凹部がある。上端は欠損。両側縁を欠く。下端は約6cmである。	①下端はやや丸みを帯びるように切断している。 ②劣化のため全体的に加工痕は不明。	先生後期 後業～ 古墳前期	84-229 73-229	板 （スギ） 目	
232	W 175 1 区 SR12001 ■ 土 士 20 番	78.7 19.4 5.8	中心軸の中央部にやや上に一辺約5cmの方形孔を穿く。孔は正面から穿っている。孔のある部分よりやや下の左側縁に長さ6cmの抉りがある。抉りは下から切り欠く。	①上端は正面・裏面から切り落として切断する。下端は木口5.5cm後の斧状の工具で裏面を削って切断する。 ②両側縁も木口で削り、左側縁の下部をチョウナで削り落す。 ③正面・裏面とも木口で削り、左側縁の裏面をチョウナで削り落す。 ④正面・裏面とも木口で削り落す。	奈良～ 平安	84-230 73-230	板 （スギ） 目	
233	W 872 1 区 SK12203 22 番	66.2 19.8 6.8	断面が無いU字形になる。右側縁のほぼ中央に長さ5.5cmの抉りがあり、半円形に削られている。抉りは上に正面から切り落されている。	①上端・下端とも正面・裏面から棒状の工具で切断する。 ②右側縁は木口に削り落している。左側縁は一部に削り落した部分があるが、大部分は削り落していない。 ③正面・裏面とも木口で削り落す。	先生後期 後業～ 古墳前期	84-231 73-231	板 （スギ） 目	
234	W 858 10 区 35 番	50.5 19.8 3.6	上部に大きな孔底のある板状。孔は劣化のため大きくなっている。実際の幅は7cm程度と推定される。下端は側縁を欠く。	①上端は削り落されている。下端は一部欠損しているが、半分は斧状の工具で削り取られている。 ②両側縁とも削り落されている。裏面は木口で削る。	先生後期 後業～ 古墳前期	84-232 72-232	板 （スギ） 目	
235	W1637 1 区 SK12201 22 番	37.4 19.0 2.4	正面に刃幅2.5cmの斧状工具の切断痕が見られる。直角的に切断しようとした跡跡か。正面は幅4.5cmで4列、裏面は幅3cm強で5列のチョウナ列がある。	①上端・下端とも正面・裏面から直角的に切断する。 ②両側縁とも木口で削り落されている。右側縁部を削る。裏面とも木口で削る。 ③正面・裏面とも木口で削る。左側縁は裏面を斜めに削り落す。 ④正面・裏面ともほぼ全面チャウナで加工する。	先生後期 後業～ 古墳前期	84-233 72-233	板 （スギ） 目	
236	W1563 2-3 区 ST 6 16 番	60.6 23.2 4.6	厚い板を加工する。右側縁上面を約9cm×5cmの方形に、下端を約15cm×9cmの方形に切り欠く。右側縁中央部に長さ約5cm、幅約2cmの横筋孔を穿つ。正面は丸の開口部を削り落す。裏面は両側縁を削り落して出している。	①上端・下端は直角的に切断する。 ②両側縁とも木口で削り落されている。右側縁部を削る。裏面とも木口で削る。 ③正面・裏面とも木口で削る。裏面は木口で削る。下端から18cmと下端から8cmを削く削る。裏面は木口で削る。下端から4cmと上端から20mmを削く削る。	先生中期 後業	85-234 73-234	板 （スギ） 目	
237	W 386 2-3 区 SR21001 10 番	87.6 26.7 2.9	右側縁中央部に幅5cm×4cmの長方形孔を穿つ。正面中央部がやや隆起のような形で削られているが、コブ状になった部分を木口で削るために削ったと考えられる。上端から左側縁上端を欠く。	①上端・下端とも直角的に切断している。 ②右側縁は木口で削り落していると思われる。左側縁部は削る。裏面とも木口で削る。 ③正面・裏面とも木口で削る。左側縁は裏面を斜めに削り落す。 ④正面・裏面とも木口で削り落す。	古墳中期	85-235 73-235	板 （スギ） 目	
238	W3071 1 区 SK12204 22 番	100.1 51.3 3.6	人骨の板材で、右側縁下端に孔がある。孔は劣化が著しいための欠損と考えられる。	①上端・下端とも劣化が著しいが、斧状の工具で直角的に削り落す。左側縁部を削る。 ②右側縁は木口で削り落す。左側縁も一部削り落すはあるが削り落すと思われる。 ③正面・裏面とも劣化が著しく加工痕は不明だが、字盤に加工したと思われる。	先生後期 後業～ 古墳前期	85-236 73-236	板 （スギ） 目	

番号	登録年 区 出土地 上位機 等	法 量(cm) 全長 幅 厚さ	形 態	技 法	①両面の加工 ②側面の削り落とし ③表面の加工	年代 別	実測面版 表裏面版	木 取 り 種 類
237	WK1482 8 区 SK817a02 17a 等	90.5 26.0 3.8	長方形型の厚めの板材。右側端下端を約13cm×5cmの長方形に切り欠く。上端は劣化により一部が欠損している。	①上端・下端とも直線的に切る。 ②両側とも目立つ加工がなく、削り落としていると思われる。 ③正面・裏面とも木目で削る。	外生後期 後葉～ 古墳前期	55-237 73-237	板 目	(スギ)
238	W1181 9 区 SR83303 33 等	67.2 34.6 3.6	かなり厚い板材。左側端下部に長さ4cm程の孔を穿った跡がある。正面・裏面ともに劣化しており、左側面部は焼損している。下端の右がやや丸みを帯びて加工されている。	①上端は斧状の工具で切り落とす。下端は木に正面から切り、直線的に切断している。 ②両側とも削り落としていると思われる。 ③正面・裏面ともチョウナで平面に調整してあり、火を受けた後にさらに粗く削って加工したのではないかと思われる。	外生～ 中世	55-238 73-238	板 目	(スギ)
239	W1635 1 区 SK12202 22 等	422.5 23.0 3.0	残存部の削り材が多く、保存状況も良くない。中央部と両端から約1cm離れた位置の右側縁に小孔を穿つ。中央部には当たりの加工が残る。	①上端は斧頭の工具で切り落とす。 ②左側縁正面と右側縁裏面を削り落くなるように加工する。	弥生後期 後葉～ 古墳前期	86-239 74-239	板 目	(スギ)
240	W 467 2-3 区 SK21204 12 等	424.0 11.5 2.0	下部への残存状況が悪く大半が欠損している。右側縁に小孔を穿つ。中央部は削れて残存状況がかなり悪いため、当たりの加工は不明である。	①上端は正面を削り落としている。 ②右側縁正面をチョウナで削する。	弥生後期 後葉～ 古墳前期	86-240 74-240	板 目	(スギ)
241	W1638 1 区 SK12201 22 等	421.2 13.2 2.4	側縁部が所々欠損している。中央部に当たりの加工があり、当たりの上端に円孔を穿つ。右側縁に小孔を穿つ。	①上端は正面と裏面から削って落としているが、下端は裏面のみ削る。	外生後期 後葉～ 古墳前期	86-241 74-241	板 目	(スギ)
242	WK336 5 区 SK51004 10 等	370.0 18.5 2.0	125と同様、柄状の削り板材を使用している。上端から約1m下端の小孔を穿つ。中央部には当たりの加工が残る。	①上端とも右側縁を削っている。 ②右側縁をチョウナで加工する。	古墳前期	86-242 74-242	板 目	(スギ)
243	WK337 5 区 SK51004 10 等	364.8 15.0 1.6	側縁部を所々欠損している。上下端と中央を落と加工している。	①上端裏面を21cm、下端正面を10cm、裏面を15cm削り落す。(+)②正面はほぼ全面にチョウナ痕がある。裏面は右側縁のみを削る。	古墳前期	86-243 74-243	板 目	(スギ)
244	W2131 1 区 SK12202 22 等	312.8 14.4 1.8	全体的に残存状況が悪く、下端は欠損している。上端と中央部を落としている。右側縁の上端より9cmの部位に直径1cmの小孔を穿つ。整板材。	①上端正面6.6cm、裏面9cmを削る。 ②正面右側縁を削っている。 ③中央は20.6cmにわたり正面のみを削る。	弥生後期 後葉～ 古墳前期	86-244 74-244	板 目 木 板	(スギ)
245	W 460 2-3 区 SK21204 12 等	317.2 22.6 2.0	上部欠損、全体的に劣化が著しい。中央部の左側縁に3cm程の小孔を穿つ。裏面は木や大きめの孔跡と思われる。上端はやや大きめの孔跡と思われる。	①下端は丸味を帯びる。 ②正面は不明瞭だが、ほぼ全面にわたってチョウナで削り落としている。裏面は木目で削った面である。	弥生後期 後葉～ 古墳前期	86-245 74-245	板 目	(スギ)
246	W1853 9 区 SK93082 38 等	314.0 13.0 1.8	右側縁を欠損している。中央部に直径1cmの小孔を穿つ。	①上端11cm～12cmは正面、裏面を削って落としている。下端は欠損の可能性があるが、5.5cm程度正面が落くなっている。 ②左側縁を正面、裏面とも削り落としている。 ③中央は20.6cmにわたり正面のみを削る。	外生後期 後葉～ 古墳前期	86-246 74-246	板 目	(スギ)
247	WK530 5 区 SK51006 10 等	238.6 11.2 2.0	左側縁を欠損している。下端より25.5cmとその上方6cmと17.5cmに孔を穿つ。	①下端の斜め切り落としは二次加工か。 ②正面ははは全面チョウナで削る。裏面は削り面である。	古墳前期	86-247 74-247	板 目	(スギ)
248	W2133 1 区 SK12202 22 等	201.8 13.8 2.0	右側縁の上端と下端を欠損する。上端は削ってやや薄くなる。上端より6cmの部位とその36cm下方に小孔を穿つ。	①上端7cmの正面を削って落としている。 ②左側縁部をチョウナで削る。	弥生後期 後葉～ 古墳前期	86-248 74-248	板 目	(スギ)
249	SK7-10-11 7 区 SK71007 10 等	303.0 9.8 2.4	下部欠損。側縁部の欠損も著しい。右側縁に4cm×2cmの横円形の孔が3つ残存する。実際の板の厚さ2.2cm。	①上端は直線的に削り落す。 ②右側縁正面を削り落す。左側縁裏面は段状になっているが、加工されているかは不明である。	弥生後期 後葉～ 古墳前期	87-249 75-249	板 目	(スギ)
250	W1445 8 区 SK817a03 17a 等	255.6 12.8 2.2	下部欠損。側縁部の欠損も著しい。左側縁寄りに3cm×15cmの孔を穿つ。	①正面の左側縁をチョウナで加工する。 ②裏面はかなり平坦だが、加工は不明だが、丁寧に成形されている。	外生後期 後葉～ 古墳前期	87-250 75-250	板 目	(スギ)
251	W1468 8 区 SK817a02 17a 等	177.4 7.4 1.3	残存状況が悪く、かなり欠損している。136と形状が似る。15cm×3cmの横円形の孔が中央部に残る。	②正面右側縁に不明瞭だがチョウナ痕が残る。	弥生後期 後葉～ 古墳前期	87-251 75-251	板 目	(スギ)

番号	登録番号 区 出土遺構 出土層位	法 江量(cm) 全 幅 厚さ	形 態	社 法	①表面の加工 ②側面の加工 ③裏面の加工	年代範 囲	実測圖版 写真圖版	本 取 り	留 意 事 項
252	W 475 2-3 区 SK21204 12 層	389.5 15.2 6.8	上端右側と下端を欠損する。上端より47cmの部位とその178cm下方に近5.5cmの方形孔があるが、周囲が著しく欠損し、形状が不明瞭である。実際の板の厚さ6.8cm。	①上端は僅かに残るが、かなり直線的に切断されている。 ②両側面とも下端を削り、幅を調整したと思われる。	弥生後期 後葉～ 古墳前期	87-252 75-252	板	えき 日	
253	WK705 5 区 10 層	252.5 20.3 断面3.1 径	下部を欠損する。近5cmの孔底が2箇所、3cm×3.5cmの小孔が1箇所残る。厚さが均一な板材。	①上端は半円状になっているが、細じか欠損からは年代のため不明。 ②左端に削り。 ③加工痕は不明だが、かなり藍色られている。	古墳前期	87-253 75-253	板	えき 日	
254	W1554 2-3 区 16 層	241.0 16.6 断面4.4 径	中央に4cm×4.5cmの方形孔を穿つ。幅はやや下方向へ向かって狭くなる。実際の板の厚さ4.2cm。	①上端は左を方形に切り欠き、右を円形に削る。下端も同様であるが、左は板の加工の際に斜めに切られたと考えられる。 ②全周削り目。	先史中期 後葉	87-254 75-254	板	えき 日	
255	W 774 2-3 区 SK21201 12 層	237.1 19.3 断面2.0 径	上端右側と右側縁の大部分を欠損。下端も欠損している。	②側面は平坦に削る。 ③正面、裏面とも板の中心部をチョウナで削る。正面は右側縁もチョウナで加工している。	先史後期 後葉～ 古墳前期	87-255 75-255	板	えき 日	
256	W 63 2 区 SK20001 5 層	232.0 20.6 断面6.0 径	両側縁ともかなり欠損している。特に下から1/4の部分が大きく欠損し、側面に穴があつた可能性がある。 実際の板の厚さ5.3cm。	①上端は平坦だが、下端は中央がやや溝状に陥んでいる。 ②右側縁は段差が見られるが、下端にはない。 ③加工痕は認められず、木目で削ったと思われる。	平安	87-256 75-256	板	えき 日	
257	WK38 5 区 SK51001 10 層	214.2 14.2 断面3.7 径	上端、下端とともに中心部を欠損する。上端は字状に欠いていた可能性もある。	②側面は平行となるよう加工する。 ③正面は削り凹。裏面は加工痕不明だが、両側縁に向かってやや薄くなる。	古墳前期	87-257 75-257	板	えき 日	
258	W2134 1 区 SK12202 22 層	207.6 15.4 断面3.2 径	上端を欠損する。正面右側縁中央がやや薄むが、欠損によるものと思われる。側面円錐状になる板材である。実際の板の厚さ2.7cm。	②下端は板として二次加工を受けている。 ③正面左側縁をチョウナで加工する。	先史後期 後葉～ 古墳前期	87-258 75-258	板	えき 日	
259	SK7-10-634 7 区 SK71003 10 層	390.3 5.7 断面2.8 径	削れ長い村で中心部が溝状になっている。下方がやや幅広くなるが、下端は絶く尖る。	①上端、下端とも加工痕は不明である。 ③中央部に裏に直交する加工が右側縁にある。	先史後期 後葉～ 古墳前期	87-259 75-259	板	えき 日	

装身具・紡織具觀察表

装身・紡織 1

名 号	遺 物 名	登 録 番 号	出 土 地 點	法 長 (cm)	形 態	特 徴	技 法	今 代 規	実 測 圖 版 写 真 版	本 取 引	相 模
1 1	W 236 8 区 14b 層 木箱	残存長 11.1	横彌形で、出土した段階に歯が欠け散っていた。根元から歯先端まで3cm弱である。			1cmの間に10本前後の歯を削り出しように切り込まれている。		88-1 余 真 — 平安			イスノ キ
2 2	W 26 2-3 区 6 層 下 駄	全長 19.6 全幅 8.1 厚さ 0.5 25/1.2	最大幅が9.1cmと狭く半円形を呈する。歯の段差は残存しているところで1cm弱であり、明顯な歯の段差がある。小さな円孔の縦孔が3つ空たれており、歯ははば中央にあり、この下駄が左用か右用か不明である。			裏歯の奥は幅3cmほど明顯に削り出している。縦孔は直徑4mmと小さく圓孔穿孔している。		88-2 平 安 時 代		板	スギ
3 3	W 43 7 区 8 層 ド 駄 木箱 SR70801 既返	全長 15.9 全幅 7.8 厚さ 3.0/1.4	全長が15.9cmと短い。前後端とも平頭面を作り落している。縫孔は彌丸刀刃の長さ1cmほどである。歯孔は中央にあり、左右が不明である。			此歯差が1.5cmほどあり、歯のつけ根付近は幅2.7cmほどあり、下駄部では1.5cmほどになるよう削り出されている。		88-3 古 墳 後 — 奈 良		板	スギ
4 4	W 503 7 区 8 層 SR70801 下 駄	全長 25.7 全幅 10.9 厚さ 2.6/1.5	平頭形は横円を呈し、縫孔は綾長の指円形で、大きく寄せられている。歯は使用のためか不明だが、残存部は低い。歯孔が左に寄っており、右足用である。			他の下駄がすべてスギの板目材であるが、これは板目材を用いている。		88-4 古 墳 後 — 奈 良		新	スギ
5 5	W 574 7 区 8 層 SR70801 下 駄	全長 24.3 全幅 10.5 厚さ 2.2/1.9	平頭形は横円を呈し、縫孔は綾長の隅丸方形に大きくなっている。歯の幅は前の歯で1.7cmと狭い。前歯と後歯との間が11.3cmと長い。歯孔が右に寄っており、左足用である。			前歯端の丸味は丁寧な物形を施している。左右の歯孔は左右端近くに寄っている。		88-5 古 墳 後 — 奈 良		板	スギ
6 6	W1210 9 区 33 層 SR22330 下 駄	残存長 20.5 全幅 7.6 厚さ 1.8/1.5	残存歯が7.6mmと極めて狭い。平頭形は横円形である。歯孔は歯孔のみ残り、板友の横円である。歯孔が右に寄っており、左足用である。			残存状態が悪く加工痕はあまり観察できない。歯の比歯差は5mm程度で底く削り落してい。		88-6 余 真 — 小 世		板	スギ
7 7	W 380 9 区 22 層 SR22201 下 駄	残存長 9.2 全幅 10.3 厚さ 6.0/1.5	下部三分の一程度が残存している。平頭形は横円形であろう。高齢の下駄で歯の比歯差が1.8cmもある。			表面は板目材から判断すると平滑にする難形が施されている。高齢で想來付近に縦縫である。下駄部は板目材に削り出している。		88-7 余 真 — 中 世		板	スギ
8 8	W 32 2-3 区 6 層 下 駄	残存長 20.5 残存幅 4.5 厚さ 2.1/1.4	左三分の一程度が残存している。平頭形は横丸形に近い横円形とちぎりられる。孔の部分が欠損しているため、左用か右用か不明である。前歯の歯幅約4mm、後歯が約4.5mmの幅を持つ。			外形は直線的に整形し、角張った作りとなっている。穿孔は次第に大きくなるが、端から1cm程度内側に削ったと考えられる。		88-8 平 安 時 代		板	(スギ)
9 9	W 415 9 区 SR22502 ~ 33303 下 駄	残存長 19.6 残存幅 5.2 厚さ 1.8/1.4	右三分の一弱が残存している。平頭形は横円形である。歯孔は前歯の一部と後歯の半分が残るが、いずれも横円形であると考えられる。前方部がやや深むため左足用の可能性がある。			残存状態が悪く、加工痕が不明瞭である。歯は前後とも幅が約2.5mmで、歯と歯の間が1.5mmとやや広めである。前、後とも先端は漸くなるよう加工されているようである。		88-9 余 真 — 中 世		板	ヒノキ
10 10	W 371 9 区 20 層 SK051 下 駄	残存長 21.5 残存幅 5.3 厚さ 2.8/1.2	左二分の一が残存している。横円形の平頭形の縫孔を穿っている。歯は横3mmで歯頭の方で後量より5mm程度高い。歯孔の左端や強め、縫孔の歯頭と考えると、右足用と推定される。			前後の歯がやや薄く作られている。歯は両面に近い角度で削り出されており、所産である。歯孔は端に近く穿ら、歯頭約1.2mmで封孔穿孔している。歯孔もやや欠損しているが、同程度の大きさのものと考えられる。		89-10 余 真 — 中 世		板	(スギ)

装身・防護2

番号	登録番号 区 出上層位 出上通路	法量 (cm)	形 態	技 法	年代 記	実測図版 写真図版	木 取り	用 意
11	W 43 2-3 区 8 層 海水浴施設	全長 8.5 残存幅 7.2 厚さ 0.7	底径8.5cm~9cm程の四角状をなす。縫合より機械の方が多いと推定する。中央の穿孔は5cm円方の方形に割たれていって。	やや機械の方が良い精因になるが、裏面とも平滑な仕上げをしている。	平安 時代	89-11 77 11	直 板	えき 日
12	W1734 9-1 区 37b 層	残存長 68.5 全幅 21.8 厚さ 3.0	海水の上下端付近に穴を穿つて横木を挿入固定している。横木は残存部長で68.5cmであるが、仮定すると全長74cm程度になると思われる。横木の高さは21.8cmあり、縫合部は10.5cmある。	下端部と下の横木は欠落しているが、ほぼ全体が把握できる。横木の上、下端をやや右端方にしめたり、縫合部を削りだしたりしているように手作りである。	春 生 代 古 跡	89-12 77 12	板	えき 日

交通・交通関連遺物観察表

交通・交易1

番号	登録番号 区 出上層位 出上通路	法量 (cm)	形 態	技 法	年代 記	実測図版 写真図版	木 取り	用 意
1	W1559 2-3 区 16 層 SK21602	残存長 14.1 残存幅 12.0 厚さ 2.4	機械部の長さが44.1cmあり、柄の部分は欠落している。下端部は若干不規則しているが、ほぼ全体の形が確定する。機械の中央部は肥厚に作られ細部的なものになっている。	機械状態は悪いが、全体的に非常に丁寧な作りである。機械の小尖端は凸台状に肥厚に削りだしておらず、左端部は薄く仕上げている。	春 生 中 期	90-1 78-1	板	えき 日
2 a	船 1 2-3 区 12 層 SK21201	残存長 85.6 残存幅 32.0	やや内側に盛る三日月形をしており、上と考えられる部分に穴が9箇所残る。	残存状況が悪く、薄くなっている部分が多い。外側の一部に剥落がある。	春 生 木 古 墳	90-2a	直 板	えき 日
2 b	船 2 2-3 区 12 層 SK21201	残存長 412.0 残存幅 37.0	一端は直線的に切られ、もう一端は「く」の字状に切られているが、本来は「く」と同じ形状をしていたと考えられる。上と考えられる部分に穴が11箇所残る。	上と考え方される端部には削り跡が見られ、波よけ板を結合したものと考えられる。	新 生 木 古 墳	90-2b	直 板	えき 日
3	W 46 2-3 区 8 層	残存長 20.5 残存幅 15.4 厚さ 2.1	機械部の長さが20cmあまりの小型の船である。V字の船体部に丸み形の穴が開いている。左右の中央部付近には、ほぼ正方形に近い穴がある。先端へ行くとやや薄くなり、V字の船体部付近は厚手でできている。左半分が欠落している。	イヌキの幹が自然に屈曲する部分を用いて加工している。船頭のため、木目が乱れ、筋が多く加工に困難であったらしく、不規則な加工がが多く観察できる。	金 真 一 平安	91-3 78-3	板	えき 日
4	W 238 7 区 8 層 SR70801	残存長 16.6 残存幅 27.7 厚さ 2.1	1回機小型の船である。3ヶ所の穴はいずれも正方形でほぼ同心形であった。厚さは1.7cmほどで全体同じくらいの厚さにしている。右端部の穴より先端は欠落している。	1回機。木目が乱れており、素性の悪い船頭部を用いて加工している。	占 墳 一 空 舟	91-4 78-1	板	えき 日
5	W 659 1 区 20 層 SR12001	残存長 11.2 全幅 2.5 厚さ 0.3	船部を半球状にし、左右両側からV字型に1ヶ所づつ切り込んでいる。下端部は欠落している。	薄い板状の板材を幅2.5mほどにし、一方の端部をV字形にしてV字のくびれを切り込むことで型を作っている。加工は概ね直線的である。	奈 良 一 平安	91-5 78-5	板	えき 日
6	舟 木 製 品	W 18 2-3 区 6 層	舟形は可いところで7mmほどあり、やや厚手である。船部は半球状にし、Aはナメ鋼板に削りだしている。裏面とも凸凹のある剥離面である。下端部は直線的に落としている。	切断はすべて直線的である。表面面とも剥離もあるが、不規則のまま放置していると観察できる。	平安 時代	91-6 78-6	板	えき 日
7	舟 木 製 品	W 6 3 区 5 層	当初、人骨木製品と分類されていたものである。木材部に縫合があり、対口ナメ鋼板に切り込んでいる。下端部は一部欠落しているが、尖らせるように切り込んでいる。	表面を丁寧に整型している。切断はすべて直線的である。	中 近 世	91-7 78-7	板	えき 日

交通・交易2

番 号	通 物 名	登録番 号 区 出上場代 出上場機	法量 (cm)	形 態	技 法	年 代 期 限	実測箇所 等良板	本 取 引	樹 種
8	付 札 状 木 製 品	W 50 5 区 8 等 洪水流痕跡	全長 20.8 全幅 2.9 厚さ 0.5	全長が20cmとこの種の木製品の中では長い。頭部は平に直線的に切り落としている。V字型に内側からくじれの切り込みが入っている。	表面は平滑である。断面は三角形になり、左側がやや厚く右へ薄くなるように削られている。	平 安 時代	91-8 78-8	板 (スギ) 日	
9	付 札 状 木 製 品	W 61 7 区 8 等 SR10901 砂糖上面	全長 11.0 全幅 3.5 厚さ 0.7	V端部は欠落している。頭部は平に作られていたと思われる両側にV字型のくじれが入っている。	やや埋めの板目材を加工している。裏面は不整形である。	古 墳 — 奈 良	91-9 78-9	板 (スギ) 日	
10	付 札 状 木 製 品	W 863 7 区 8 等	全長 10.5 全幅 2.2 厚さ 0.8	幅が2.2cmと狭く、その割には厚さが8mmとやや厚手である。頭部は平で、両側からV字型にくじれが入っている。	切断は直線的であるが、丁寧に左右対称になるよう削りだしている。	古 墳 — 奈 良	91-10 78-10	板 (スギ) 日	
11	付 札 状 木 製 品	W 862 7 区 8 等	全長 11.0 全幅 2.0 厚さ 0.7	頭部、くじれともGとは同じ形である。下端部は欠落している。	裏面は不整形のままである。頭部の削り落しては丁寧に何度も刀を当てているのが観察できる。	古 墳 — 奈 良	91-11 78-11	板 (スギ) 日	
12	付 札 状 木 製 品	W 867 7 区 8 等	全長 10.3 全幅 2.4 厚さ 0.5	頭部は概ね複雑になるように削り込まれている。表面と残存状態は良くなく凸凹が残る。	残存状態が悪いだけなのかもしれないが、整形が粗雑なままである。	古 墳 — 奈 良	91-12 78-12	板 (スギ) 日	
13	付 札 状 木 製 品	W 886 7 区 トレンチ	全長 10.5 全幅 2.2 厚さ 0.5	頭部は平に直線的に切り落とされている。左右両側からくじれはV字型に入っている。下端部は欠落している。	表面に整形した際に残ったと思われる加工痕が残る。裏面は不整形である。	不明	91-13 78-13	板 (スギ) 日	
14	付 札 状 木 製 品	W 802 9 区 25 等 SR92501	全長 12.2 全幅 2.3 厚さ 0.7	頭部は平で直線的であり、くじれはV字型に入るものを観察できる。全体的に残存状態が悪い。	木目を表面にし、平滑に整形している。裏面は不整形のままである。	古 墳 — 平 安	91-14 78-14	板 (スギ) 日	
15	付 札 状 木 製 品	W3609 10 区 30 等	全長 17.7 全幅 2.8 厚さ 0.3	厚さが3mmと薄く、上端は直線的に切り落としており、くじれは小さなV字型で1-10とは趣を異とする。タガ状に入めて用いたものと考えられる。	板目の薄い板目を丁寧に整形している。	沐 生 後 期 新 羅	91-15 78-15	板 (スギ) 日	

武具・その他の木製品調査表

番 号	登録番号 区 域	法量 (cm)	形 態	技 法	年 代 範 囲	実測図版 写真図版	木 取 り 材 種
1 刀 子	M 1 7 区 SK70801 武威	全長 26.5 取人幅 2.2 柄部厚さ 1.8	刀身が中央や下で45度に鋸曲してしまっている。刀身は筋が進行し、底型を描かない。中には8.3cmある。末は断面横円形をし、握りの部分にはわざかに黒漆の付着痕が残る。	直刀に黒漆を施した末を挿入した刀子である。末は断面が横円形になるように角を丁寧にとつて整彫している。	古 墳 — 平 安	92.1 79.1	芯 持 材 ムラキ
2 弓	W191 10 区 29 SD103001	残存長 43.7 長径 3.1 短径 2.5	大半が欠損しているが、概に「1束」の構を成む。また浮き彫りとして表現される2束の凸巻が一束する。この部分に巻が付着し、巻き付けられたと思われる。	断面を横円形になるように整彫している。浮き彫りの手法は周囲を保かに削って凸巻を作り出す。凸巻部は周囲と色が違い、着色された可能性がある。	古 墳 — 中 期	92.2 79.2	板 (えぞ) 目
3 矢	W 54 2-3 区 10 層 SK21001 1号室	全長 48.5 全幅 1.4 厚さ 1.2	全長が48.5cmの矢型の木製品である。頭部を有傾状に削り出している。断面は円形を呈す。下端はやや細くなりながら端部に至る。	横状のスギ材で頭部を削りだし、断面円形の棒状に全体を整彫している。	古 墳 — 平 安	92.3 79.3	板 (えぞ) 目
4 橋	W 362 5 区 13 層 SR51301 1号室	全長 100.4 全幅 45.0 厚さ 2.3	5区のSR51301の壁内に用いられた桟材収容が検索し、この橋になった。全長100cm、幅45cm、厚さ2.3cmの板である。中央付近に把手の跡を通してあろう3つの孔が穿たれている。	上端は弧を描くように切断しており、表面には斜めに縦溝を刻んでおり、孔は小さな方孔で穿たれている。表面とも丁寧に整彫している。	古 墳 — 中 期	92.4 79.4	板 (えぞ) 目
5 車 塔 橋	W8001 6 区 2 層 南邊隣水溝 の残存部	残存長 32.7 残存幅 7.1 厚さ 7.1	板に2次加工されている。下部半分は尖らせるように加工している。上部は欠落しており、矢長は不明である。下部に二本の桟材の締結があり、満州は炭化している。「木の締約」の上に梵字とも見える焼いた記号跡のものがある。	頂のある丸太材を用いて粗雑な加工をしている。表面は平坦面を削りだし、そこに縦割れ跡を入れている。	中 世 世	92.5 79.5	芯 持 材 クロマツ
6 木 橋	W 93 5 区 SR50901 の残存部	残存長 21.1 全幅 18.5 厚さ 2.7	結構であるが、他の藤竹のように、表面に繩目川の渦を作り出している。石斧の柄にしても裏面に裏面に裏面のため造作がないため、ここではただ木柄としておく。	柄の部分及び脚の部分は刀底が無数に観察でき、丁寧に仕上げようとしていることから了解できる。	古 墳 — 中 期	92.6 79.6	芯 持 材 サカキ

用途不明品観察表

用途不明 1

番 号	登録番号 調査区	出土部位 遺構	法承 (cm)			形態・性状	年代範 囲	実測図版 写真図版	本 取 り	相 持
			長さ	幅	厚					
1	W1617 1655 2-3 区	2la 層 SK22102	(122.0)	(10.0)	5.1	四条の刻線で同心円と直施文様。溝の深さ5mm~8mm。	先史中期 80-1	板	目	(スギ)
2	W 440 10 区	23 層 小鉢坪	(78.0)	18.5	3.3	断面横円形のを特徴。	奈良~ 平安 80-2	板	目	(スギ)
3	W 201 1 区	20 層 SR12001	23.8	4.0	2.3	上端は丸味を持つて尖る。有。	奈良~ 平安 81-3	板	目	(スギ)
4	W 49 2-3 区	9 層	19.3	3.1	0.8	表面に不整形、表面は平滑。有。	古墳中期 81-4	板	目	ヒノキ
5	W 125 5 区	8 层 ST 9	65.1	2.7	1.8	表面のみ整形、両端は細く尖る。有。	古墳中期 平安 81-5	板	目	(スギ)
6	W 167 5 区	8 层 ST 25	47.4	3.8	2.0	上端は台形状、表面は太済壁。縦カシキ型田下駄の横板の可能性あり。有。	古墳中期 平安 81-6	板	目	スギ
7	W4663 6 IK	16 層	(37.6)	3.1	3.3	断面凸レンズ状。有。	弥生後期 古墳前 81-7	板	目	(スギ)
8	W 467 8 IK	16 層	(22.2)	3.3	1.2	断面凸レンズ状。有。	古墳中期 81-8	板	目	(スギ)
9	W 285 10 区	24 层 砂 壤	(31.4)	3.6	1.2	断面凸レンズ状。有。	奈良~ 平安 81-9	板	目	(スギ)
10	W 468 10 区	23 层	41.7	2.7	1.3	断面凸レンズ状。有。削り出した部分の付根に径2.5mmの穿孔あり。	奈良~ 平安 81-10	板	目	スギ
11	W 162 5 区	8 层	(26.0)	(2.5)	2.5	縱方向に表面を加工。先端は四方向から削る。棒状。	古墳中期 平安 81-11	板	目	(スギ)
12	W 208 7 区	8 层 SR70801	(22.3)	2.5	2.5	上端に斜めの穿孔底あり。棒状。	古墳~ 奈良 81-12	板	目	(スギ)
13	W 132 7 区	8 层 SR70801	(29.2)	1.2	1.4	先端は四方向より削る。棒状。	古墳~ 奈良 81-13	板	目	(スギ)
14	W 200 7 区	8 层 SR70801	(22.4)	(1.0)	0.9	断面横円形。棒状。	古墳~ 奈良 81-14	板	目	(スギ)
15	W 865 7 IK	8層上面	(26.0)	(7.4)	2.1	側面に幅5mmの溝を斜めに削む。ヘラ状。	古墳~ 奈良 81-15	板	目	(スギ)
16	W 433 8 IK	8 层 14b 层	(40.0)	(2.0)	2.0	端部は四方向から削る。棒状。	平安~ 中世 81-16	板	目	(スギ)
17	W 779 9 IK	25 层 SR82501	23.5	(4.0)	2.9	断面六角形。中央は三方向より削る。棒状。	奈良~ 中世 81-17	板	目	(スギ)
18	W 220 10 IK	18 层	(26.4)	(1.5)	1.1	先端は三方向より削り出す。棒状。	奈良~ 中世 81-18	板	目	(スギ)
19	W1495 2-3 区	11 层 SK21602	(31.4)	(3.2)	2.7	先端部に溝を一箇させる。棒状。	弥生後期 奈良 82-19	芯持ち材	ムタロジ	
20	W 17 2-3 区	6 层	(13.5)	(1.0)	1.3	上端部に溝がある。有頭棒状。	平安 82-20	板	目	ヒノキ
21	W 2 2-3 区	3 层	(15.7)	(3.1)	2.2	両側面を切り落す。有頭棒状。	中~近世 82-21	板	目	(スギ)
22	W 29 5 区	5 层 SR50501	(31.6)	3.2	2.6	溝が3本一列する。右側面に7、左側面に12の切り込み溝がある。有頭棒状。	古墳中期 平安 82-22	板	目	(スギ)
23	W 147 5 区	8層水田 ST 19	(42.0)	(2.4)	2.1	断面舟形。片面より溝を刻む。有頭棒状。	古墳中期 平安 82-23	板	目	(スギ)
24	W 165 5 区	8層水田 渓水流底	(37.7)	2.5	2.1	断面八角形。片面より溝を刻む。縦方向に粗く削る。有頭棒状。	古墳中期 平安 82-24	板	目	(スギ)
25	W3214 6 区	16層水田 SK61601	(53.7)	(5.6)	2.0	下部は斜い棒状に加工。有頭棒状。	弥生後期 古墳前 82-25	板	目	(スギ)

用途不明2

番号	登録番号 測量区	出土層位 構造	法量(cm)			形態・技法	年代範	実測(板 等高線版)	本 取り	特徴	
			長さ	幅	厚						
26	W12-3 7 区	6 層 南辺排水溝	(17.0)	(3.0)	3.6	下部を細く作る。有頭板状。	95-26 82-26	板 目	(スギ)		
27	W 235 8 区	14a 層	(18.1)	(2.6)	2.4	下に向かってやや側くする割りを入れている。有頭板状。	奈良～ 平安	95-27 82-27	板 目	(スギ)	
28	W2157 9 区	38 層 SK93803	(46.7)	2.3	1.8	下部はやや扁平化する。穿孔1。有頭板状。	弥生後期 ～古墳前	95-28 82-28	油 板 目	(スギ)	
29	W1578 9 区	33 層	37.9	2.6	2.0	両端は段差をつけ内側に溝を刻む。片方の側面にも溝を刻む。有頭板状。	奈良～ 中世	95-29 82-29	延 目	(スギ)	
30	WK1037 9 区	25 層 SR02501	51.3	3.8	3.5	円錐から扁平な把手を作り出す。有頭板状。	奈良～ 中世	95-30 82-30	板 目	(スギ)	
31	W 409 2-3 区	12 層 SK21201	(36.7)	(7.4)	1.2	横横が美しいが、難であった可能性もある。有頭板状。	弥生後期 ～古墳前	95-31 82-31	延 目	カシ	
32	W 410 2-3 区	12 層 SK21201	(29.9)	(6.3)	0.9	中途より緩く片側に曲がる。	弥生後期 ～古墳前	95-32 82-32	延 目	カシ	
33	W 641 2-3 区	12 層 SK21201	(22.8)	4.3	1.5	側面にV字状切り欠き1。頭部を長く作る。有頭板状。	弥生後期 ～古墳前	95-33 82-33	板 目	(スギ)	
34	W1729 2-3 区	12 層 SK21201	(30.0)	4.5	1.8	頭部をやや縦様に作る。有頭板状。	弥生後期 ～古墳前	96-34 82-34	板 目	(スギ)	
35	W1728 2-3 区	12 層 SK21201	35.8	4.5	2.0	側面に縦いV字状切り欠き1。有頭板状。	弥生後期 ～古墳前	96-35 82-35	板 目	(スギ)	
36	W 399 2-3 区	12 層 SK21201	(34.6)	3.8	1.6	下に向かって断面を扁平にする。下部の大なり切り欠きは数回にわたりて切り込む。有頭板状。	古墳中期	96-36 83-36	板 目	(スギ)	
37	W 40 2-3 区	6 層 木造遺構	(22.9)	2.7	1.0	切り欠きは下から切り込み、削った部分を残り取る。有頭板状。	平安	96-37 83-37	板 目	(スギ)	
38	W 34 2-3 区	6 層 SK20601	(25.4)	3.8	1.0	深い方の切り欠きは上から下へ2回切り込んで削り取っているため頭部が段状となる。有頭板状。	平安	96-38 83-38	板 目	(スギ)	
39	W 314 5 区	12 層	(25.3)	2.6	1.3	切り欠きは表面と両側面の三方向から切り欠き、立体的頭部を作る。有頭板状。	弥生後期 ～古墳前	96-39 83-39	板 目	(スギ)	
40	W 58 5 区	6 層 洪水調節溝	(17.5)	3.9	1.5	切り欠きは下から削りを入れ、折り欠いている。有頭板状。	中・近世	96-40 83-40	板 目	(スギ)	
41	W 61 5 区	8 層 ST'20	(19.2)	4.15	1.9	側面を縦やかなV字に切り欠く。有頭板状。	中・近世	96-41 83-41	板 目	(スギ)	
42	W42-1 5 区	6 層	(21.1)	(3.4)	1.1	側面をU字状に切り欠く。有頭板状。	平安	96-42 83-42	板 目	(スギ)	
43	W 49 5 区	8 層 SR50801 残存部	(23.8)	(2.0)	1.2	片方は表面のみ浅く切り欠く。有頭板状。	平安	96-43 83-43	板 目	(スギ)	
44	W 30 5 区	6 層	(24.3)	(3.3)	1.4	頭部断面は4mm～5mm削り、細狭に作る。有頭板状。	平安	96-44 83-44	板 目	(スギ)	
45	W 8 5 区	3 層	(19.6)	(4.6)	1.4	片面の下部を削り、薄く作る。有頭板状。	中・近世	96-45 83-45	板 目	(スギ)	
46	W 173 8 区	8 層	36.9	(5.4)	1.9	肉端を頭板状に作る。有頭板状。	平安～ 中世	96-46 83-46	板 目	サカキ	
47	WK2897 9 区	38 層 SK93802	(48.3)	(6.0)	1.9	下部を削り、薄く作る。有頭板状。	弥生後期 ～古墳前	96-47 83-47	板 目	(スギ)	
48	W1669 1 区	22 層 SK12201	(24.5)	(6.4)	2.8	横円状穿孔1。長方形状穿孔1。有孔。	弥生後期 ～古墳前	97-48 83-48	板 目	(スギ)	
49	W1599 2-3 区	16 層 SP021601	(23.9)	(6.5)	1.1	長方形状の穿孔2。有孔。	弥生中期	97-49 83-49	板 目	(スギ)	
50	W 345 2-3 区	12 層 SK21201	(25.6)	(7.9)	1.0	穿孔1。側面欠損部に切り欠きまたは穴あきと考えられる痕跡2。有孔。	弥生後期 ～古墳前	97-50 83-50	板 目	(スギ)	

用途不明3

番号	登録番号 調査区	出土層位 遺構	法量(cm)			形態・技法	年代概 算	実測図版 等高線版	本取り	断面		
			長さ	幅	厚							
51	W1505 2-3区	14層 SK21403	(22.6)	6.0	1.0	穿孔3。有孔。	弥生後期 前葉	97-51 89-51	板	日	(スギ)	
52	W382 2-3区	10番下部 SK21501	(13.1)	6.6	1.1	邊約1cmの正方形状の穿孔2。有孔。	古墳中期	97-52 89-52	板	日	(スギ)	
53	W17 3区	6層	(25.6)	6.5	1.1	不規則形の穿孔7。有孔。	平安	97-53 89-53	板	日	(スギ)	
54	W5-1 3区	5層	12.2	6.3	1.0	U字状切り欠き2。有孔。	中・近世	97-54 84-54	板	日	(スギ)	
55	W5-2 3区	5層	8.1	2.7	0.6	径5mmの円形穿孔1。有孔。	中・近世	97-55 84-55	板	日	(スギ)	
56	W253 5区	10層 SK51004	21.6	15.8	0.9	中央で2つに割れている。穿孔7。中央1部の2つの穴をそれぞれ整ぐらに溝を切る。有孔。	古墳前期	97-56 84-56	板	日	(スギ)	
57	W251 5区	10層 SK51004	(23.1)	6.0	1.0	穿孔2。2つに折出したものと考えられる。有孔。	古墳前期	97-57 89-57	追	板	日	(スギ)
58	W213-1 5区	10層 SK51008	12.7	5.6	0.8	縦方向に調整。有孔。	古墳前期	97-58 84-58	板	日	(スギ)	
59	W213-2 5区	10層 SK51008	7.2	2.7	0.7	長方形状の板材。有孔。	古墳前期	97-59 84-59	板	日	(スギ)	
60	W161 5区	8層 渓水流痕跡	(18.1)	3.1	2.0	長方形穿孔1。有孔。	古墳中期 ～平安	97-60 84-60	板	日	(スギ)	
61	W119 5区	8層 ST 11	(20.2)	3.0	1.1	側面の欠損部に外へ出る段があったと推定される。有孔。	古墳中期 ～平安	97-61 84-61	板	日	(スギ)	
62	W109 5区	8層 SK50801	(22.1)	6.2	1.0	径4mmの円形穿孔1。有孔。	古墳中期 ～平安	97-62 84-62	追	板	日	(スギ)
63	W89 5区	8層	(30.35)	3.8	0.5	中央部が陥没して深む。有孔。	古墳中期 ～平安	97-63 84-63	板	日	(スギ)	
64	W158 5区	8層 渓水流痕跡	(29.3)	7.0	1.1	溝を切って凸部を作り出す。長方形穿孔1。有孔。	古墳中期 ～平安	97-64 84-64	板	日	(スギ)	
65	W144 5区	8層 渓水流痕跡	(28.6)	6.0	1.5	側面に向かって傾斜となり二又に分かれるとと思われる。有孔。	古墳中期 ～平安	97-65 84-65	板	日	(スギ)	
66	W143 5区	8層 渓水流痕跡	(28.4)	4.8	1.4	欠損部に方形の穿孔痕跡あり。有頭板状。	古墳中期 ～平安	97-66 84-66	板	日	(スギ)	
67	W154 155 5区	8層 SK50801	(20.1)	7.0	1.0	穿孔2。有孔。	古墳中期 ～平安	97-67 84-67	板	日	(スギ)	
68	W151 5区	8層 SK50801	(16.7)	4.5	1.3	V字の溝を横断する形で放矢部の穿孔あり。側面の抉りは上から5回前りをいわれている。有孔。	古墳中期 ～平安	97-68 84-68	追	板	日	(スギ)
69	W86 5区	8層水田	(8.7)	1.6	0.4	穿孔1。有孔。	古墳中期 ～平安	97-69 84-69	板	日	(スギ)	
70	W35 5区	6層	31.0	3.7	1.4	径3mmの円形穿孔3。有孔。	平安	98-70 84-70	板	日	(スギ)	
71	W46 5区	3層下	(19.9)	11.0	1.7	上端中央にU字状の切り欠き2。有孔。	中・近世	98-71 84-71	板	日	(スギ)	
72	W59 60 5区	8層 渓水流痕跡	(23.6)	11.0	1.7	円角形状の穿孔2。有孔。	中・近世	98-72 84-72	板	日	(スギ)	
73	W74 5区	8層	(23.8)	6.0	1.5	上端の山齒に向かって削りを入れ、やや薄く作る。有頭板状。	古墳中期 ～平安	98-73 84-73	板	日	(スギ)	
74	W38 5区	5層	(32.0)	12.0	2.2	穿孔6。輪カンジキ型出下駄の部材か。有孔。	平安	98-74 84-74	板	日	(スギ)	

用途不明 4

番 号	登録番号 調査区	出土層位 地盤	法長(cm)			形態・性状	年代観	古墳時代 写真図版	木取り	樹種
			長さ	幅	厚					
75	W5202 6 区	18層水田 SK61603	(48.4)	(6.3)	1.3	長方形穿孔1。長方形穿孔底1。有孔。	弥生後期 前期	98-75 85-75	板 目	(スギ)
76	W4184 6 区	16層水田 SK61608	(47.4)	(21.9)	2.4	長方形の穿孔4。間に横木を差している。有孔。	弥生後期 ～古墳前	98-76 85-76	板 目	(スギ)
77	W4202 6 区	16層水田 SR61601	(30.3)	(9.5)	2.8	長方形の穴状の穿孔1。有孔。	弥生後期 ～古墳前	98-77 85-77	板 目	(スギ)
78	W4432 6 区	16 層 SK61612	(45.9)	(5.6)	2.4	四角形の穿孔2。円形の穿孔1。有孔。	弥生後期 ～古墳前	98-78 85-78	板 目	(スギ)
79	W3694 6 区	16 層 SK61605	(36.2)	5.4	2.2	穿孔2。片面に削りの調整痕が残る。有孔。	弥生後期 ～古墳前	98-79 85-79	板 目	(スギ)
80	W4732 6 区	16層水田 SK61605	(25.5)	(7.4)	1.1	延約1cmの円形穿孔あり。有孔。	弥生後期 ～古墳前	99-80 85-80	板 目	(スギ)
81	W8027 6 区	11 層	(22.6)	(4.5)	0.9	切り欠き状の痕みは周囲を削って作る。板状。	平安	99-81 85-81	板 目	(スギ)
82	W8028 6 区	11 层	(17.7)	(4.0)	2.2	曲線状の大きな切り欠きあり。板状。	平安	99-82 85-82	板 目	(スギ)
83	SK7-10 -572 7 区	10 層 SK71003	(22.7)	5.2	1.5	長方形状の穿孔1。有孔。	弥生後期 ～古墳前	99-83 85-83	板 目	(スギ)
84	SK7-10 -41 7 区	10 层 SK71007	(30.7)	8.5	2.6	長方形状の穿孔1。有孔。	弥生後期 ～古墳前	99-84 85-84	板 目	(スギ)
85	SK7-10 -735 7 区	10 层 SK71003	(34.9)	13.0	1.9	横円形穿孔1。延1.7cmの方形穿孔1。有孔。	弥生後期 ～古墳前	99-85 85-85	板 目	(スギ)
86	SK7-10 -100 7 区	10 层 SK71006	(38.7)	7.3	1.2	長方形状の穿孔1。下端は各回削りを入れ切り落とす。有孔。	弥生後期 ～古墳前	99-86 85-86	板 目	(スギ)
87	W 840 7 区	8 层 SR70801 2号塚	(30.7)	9.1	2.4	縦方向の調整痕が残る。板状。	古墳後期 ～奈良	99-87 85-87	板 目	スギ
88	W 567 7 区	8 层 SR70801	(30.7)	5.9	3.6	下端は両面を削り、薄いへた状に作る。板状。	古墳後期 ～奈良	99-88 85-88	板 目	(スギ)
89	W 362 7 区	8 层 SR70801	(33.2)	6.0	3.3	延2cm強の方形の穿孔1。棒状。	古墳後期 ～奈良	99-89 85-89	板 目	(スギ)
90	W 206 7 区	8 层 SR70801 2号塚	(23.3)	9.2	1.3	延5mmの方形の穿孔1。棒状。	古墳後期 ～奈良	99-90 85-90	板 目	(スギ)
91	W 54 7 区	8 层 SR70801	(15.6)	7.2	1.3	穿孔3。棒状。	古墳後期 ～奈良	99-91 85-91	板 目	(スギ)
92	W 207 7 区	8 层 SR70801	(16.1)	6.3	0.8	穿孔2。棒状。	古墳後期 ～奈良	99-92 85-92	板 目	(スギ)
93	W 708 7 区	8 层 SR70801	(13.7)	5.1	0.8	上下面をやや薄く作る。穿孔1。棒状。	古墳後期 ～奈良	99-93 85-93	板 目	(スギ)
94	W 79 7 区	8 层 SR70801	(12.6)	1.6	0.6	穿孔1。断面は半円形状。棒状。	古墳後期 ～奈良	99-94 85-94	道 棒 目	(スギ)
95	W 14 7 区	6層下部	(18.2)	8.5	1.0	横円形の穿孔3。全断面薄か。棒状。	平安	99-95 85-95	道 棒 目	(スギ)
96	W 451 8 区	16 层	(16.4)	6.3	0.8	径5mmの方形の穿孔1。棒状。	古墳中期	99-96 85-96	板 目	(スギ)
97	W 414 8 区	15 层	(29.3)	6.6	1.9	段をつけて長方形状に切り欠く。有。	古墳中期	100-97 85-97	板 目	(スギ)
98	W1317 9 区	33 层 SK93301	(25.5)	7.0	3.4	上端はやや厚く作る。有。	奈良～ 中世	100-98 85-98	板 目	(スギ)
99	W1561 2-3 区	16 层	(29.6)	13.7	2.3	1.、延約3cmの四角形の穿孔1。有・有孔の板状。	弥生中期 後期	100-99 85-99	板 目	(スギ)

用途不明5

番号	登録番号 調査区	出土位置 遺構	法規(cm)			形態・後法	年代範 図	古墳圖版 写真図版	本取引	搬送	
			長さ	幅	厚						
100	W 563 9 区	25 番 SK92501	(28.5)	12.3	0.8	円形の穿孔2つ。神皮が残る。容器の部材か。有孔。	奈良～ 中世 87-100	100-101 86-101	板	日	(スギ)
101	W 3365 6 区	16番水田 SK51601	(19.6)	(5.1)	1.4	長方形状穿孔底が残る。有孔。	弥生後期 ～古墳前 86-102	100-101 86-102	板	日	(スギ)
102	W 168 8 区	10a 番	(15.7)	(6.0)	2.8	中央が窪む。円筒の管状の形態。	平安～ 中世 86-102	100-102 86-102	板	日	(スギ)
103	W 725 10 区	30b 番	(25.5)	7.2	3.5	長方形の穴を持つ。有孔。	古墳中期 87-103	100-103 87-103	板	日	(スギ)
104	W 2225 1 区	22 番 SK12220	(36.0)	10.3	3.3	造約2cmの四角形の穿孔1。中心部が窪む。有孔。	弥生後期 ～古墳前 87-104	100-104 87-104	板	日	(スギ)
105	W 674 1 区	20 番 SR12901 覆土上	(42.9)	10.2	3.7	両面を削り、中央を薄くする。上部は状にやや落する。右。	奈良～ 平安 87-105	100-105 87-105	板	日	(スギ)
106	W 140 1 区	20 番 SR12901 覆土上	46.9	6.2	1.8	両端の端を抜いて作っていると考えられる。中心に溝がある。右。	奈良～ 平安 87-106	100-106 87-106	板	日	(スギ)
107	W 277 5 区	12 番 水出真上 砂煙	(42.0)	18.7	2.0	造約1cmの造三角形状穿孔1。辺1cmの正方形状穿孔1。有孔。	弥生後期 ～古墳前 86-107	101-107 86-107	板	日	(スギ)
108	W 591 5 区	13 番 2号塚 等水路内	(23.0)	14.7	2.9	裏面を削り、下部を薄くする。突起部付き。		101-108 89-108	板	日	カシ
109	W 44 7 区	8 番 SK70801	(18.9)	(13.1)	3.5	中心より片側を薄くする。突起部付き。	古墳後期 ～奈良 86-109	101-109 86-109	板	日	(スギ)
110	W 332 5 区	13 番 SK51301	(30.3)	12.4	3.4	大部分が焼損。凹凸または柄物の破片か。四脚部付き。	弥生中期 ～弥生後期 87-110	101-110 87-110	板	日	(スギ)
111	W 2867 9 区	38 番 SK92801	(39.0)	(10.1)	2.4	隅丸長方形状の穿孔1。有孔。	弥生後期 ～古墳前 88-111	101-111 88-111	板	日	(スギ)
112	W 1628 9 区	37 番 SK93701	(34.0)	(13.6)	1.7	長方形状穿孔1。有孔。	弥生後期 ～古墳前 88-112	101-112 88-112	板	日	(スギ)
113	W 1595 9 区	35 番	(25.0)	(14.0)	1.0	両面より細い切り込みを入れて穿孔。有孔。	古墳中期 88-113	101-113 88-113	板	日	(スギ)
114	W 44 2-3 区	8 番 SK20801	49.4	10.8	3.0	突出部の欠損部に長方形状の切り欠きあり。突出部付き。	奈良～ 平安 87-114	101-114 87-114	板	日	(スギ)
115	W 201 2-3 区	10 番 1号塚	(27.4)	15.3	10.9	把手・脚の付いた人頭状の破片である。底部は楕円形となる。把手付き有脚。	奈良～ 平安 89-115	102-115 89-115	板	日	(スギ)
116	W 41 7 区	8 番 SR70801	(24.3)	7.8	2.7	椭円形の穿孔で裏まで貫通していない。四脚部付き。	古墳後期 ～奈良 88-116	102-116 88-116	板	日	(スギ)
117	W 1243 9 区	33 番 SK93301	12.0	17.9	5.7	中央に窪む。両方の側面に断面直角の溝を刻む。四脚部付き。	奈良～ 中世 89-117	102-117 89-117	板	日	(スギ)
118	W 1250 9 区	33 番 SK93301	(13.2)	17.2	4.6	四角形状の足が残す。後2本足の施跡がある。有脚。	奈良～ 中世 89-118	102-118 89-118	板	日	(スギ)
119	W 1596 9 区	35 番	(20.2)	(8.9)	2.6	方形の大穴穿孔1。長方形の穿孔に木村を差し込む。組み合わせ部材付き。	古墳中期 88-119	102-119 88-119	板	日	(スギ)
120	W 915 7 区	10a 番 SK71003	(32.1)	(17.0)	1.4	四角に分かれる。突起部付き。	弥生後期 ～古墳前 89-120	102-120 89-120	板	日	(スギ)
121	W 502 7 区	8 番 SK70801	(17.5)	(8.0)	5.0	脚状突起2。環状小把手1。脚付の小型古の手扣したもののか。把手付有脚。	古墳～ 奈良 89-121	102-121 89-121	板	日	(スギ)
122	W 8062 6 区	11 番	(10.0)	(2.0)	2.7	側面の穴に木片が貫通する。組み合わせ部材付き。	古墳中期 88-122	102-122 88-122	板	日	(スギ)
123	W 169 8 区	9 番	20.0	5.4	0.6	先端の内側をV字形に切り欠く。神皮が残る。容器の部材か。右。	平安～ 中世 88-123	102-123 88-123	板	日	(スギ)
124	W 1357 9 区	33 番 SK93301	(15.7)	(6.8)	1.2	円形の穿孔1。有孔ヘラ状。	奈良～ 中世 89-124	103-124 89-124	板	日	スギ
125	W 699 3 区	25 番 SK92501	(12.8)	8.8	7.0	端部は平塗の面を1面作り出す。縫の一體か。右彌脚状。	奈良～ 中世 89-125	103-125 89-125	芯持材	タリ	

用途不明 6

番号	登録番号 県立区	出土層位 遺構	法量(cm)			形態・特徴	年代範 囲	実測版 写真版	木取引	種類
			長さ	幅	厚					
126	W 777 9 区	25 層 SK92501	(16.9)	5.4	5.1	大型の穿孔孔が複数。有孔。	奈良～ 中世 89-126	遺 標 日	(スギ)	
127	W 757 9 区	25 層 SK92501	(18.5)	3.6	3.3	方形の穿孔内に枝の差し込んだ木材が残る。有孔。	奈良～ 中世 89-127	遺 標 日	(スギ)	
128	W 697 9 区	25 層 SK92501	8.4	5.1	2.7	複数の脚部と思われる穴柱。有孔。	奈良～ 中世 94-128	遺 標 日	(スギ)	
129	W 711 9 区	25 層 SK92501	53.4	4.1	3.5	工具の本削か。棒状。	奈良～ 中世 90-129	芯 材	イヌガヤ	
130	W 500 9 区	22 層 浅食瓶路	28.5	4.8	2.0	方形の切り欠きあり。板状。	奈良～ 中世 90-130	板 日	(スギ)	
131	W 780 10 区	32 層	24.2	2.7	0.4	穿孔1。蒸板が4箇所に残る。有孔。	古墳前期 90-131	板 日	(スギ)	
132	W 797 10 区	31a 層 SK1031a04	(62.5)	7.4	1.5	櫛状の外形を持つが断面は平坦である。櫛状。	古墳前期 90-132	板 日	カシ	
133	W 565 10 区	24 层 流路内	(9.7)	5.4	2.4	断面カマゴ形。長方形状の穿孔1。穿孔1。有孔。	奈良～ 平安 94-133	板 日	(スギ)	
134	W 278 10 区	21 層	14.8	2.8	2.5	長方形状の穿孔2。有孔。	平安 94-134	板 日	(スギ)	
135	W 281 10 区	21 層	6.5	2.8	0.5	円形の小孔2。有孔。	平安 94-135	板 日	(スギ)	
136	W 206 10 区	18 层 砂 壁	(28.4)	15.7	2.0	径1cmのU形穿孔2。U字形の削り込み。有孔。	平安 90-136	板 日	(スギ)	
137	W 913 7 区	10b 層	19.9	56.2	2.5	断面は下駄形に似る。様々な大きさの孔G。有孔。	弥生後期 ～古墳前 90-137	板 日	(スギ)	
138	W 633 9 区	25 層 SK92501	34.0	7.6	1.7	孔1。孔の跡跡と考えられる箇所2。有孔。	奈良～ 中世 90-138	板 日	(スギ)	
139	W2168 9 区	38 层 SK93803	36.2	9.1	1.7	4.5cm×1.5cmの断面いぬき円形孔1。有孔。	弥生後期 ～古墳前 91-139	板 日	(スギ)	
140	W1101 8 区	17a 層 SK817a03	41.1	9.7	1.7	横溝が狭い。5cm×3cmの横円形孔1。有孔。	弥生後期 ～古墳前 90-140	板 日	(スギ)	
141	W1002 10 区	35 層 SK103502	40.0	13.1	2.1	板材の板材片か。上部を薄く削り1cm×1.3cmの長方形孔を1つつぶっている。有孔。	弥生後期 ～古墳前 90-141	板 日	(スギ)	
142	W 223 5 区	10 層 SK51002	34.0	10.3	1.5	上をチョウナで削って薄くしている。1cmあたりの小孔2。有孔。	古墳前期 90-142	遺 標 日	(スギ)	
143	W1663 1 区	22 層 SK12201	41.7	12.2	2.3	下端に約1cmの方穿孔の痕跡がある。他に小孔1。有孔。	中・近世 90-143	板 日	スギ	
144	W 612 8 区	17a 層 SK817a05	36.6	15.4	2.7	H型をした板材。板状。	弥生後期 ～古墳前 90-144	遺 標 日	(スギ)	
145	W 664 8 区	17a 層 SK817a05	47.6	8.5	1.2	上・下両端の幅が狭くなる板材。孔は裏から横に切り込んで作っている。有孔。	古墳前期 90-145	板 日	(スギ)	
146	W2851 9 区	38 层 SK93801	38.3	7.1	1.5	1.6cm×0.8cmの長方形孔1。横円形の小孔1。下端は裏面から左側で切り落としている。有孔。	弥生後期 ～古墳前 91-146	板 日	(スギ)	
147	W4734 6 区	16m 水田 SK61605	31.6	9.7	1.8	3cm×2.4cmの方穿孔がある。両側面に向かって薄くなる板材。有孔。	弥生後期 ～古墳前 91-147	板 日	(スギ)	
148	W1606 9 区	35 層	27.6	6.6	1.5	径5mmの丸い孔1。有孔。	古墳中期 91-148	板 日	(スギ)	
149	W2892 1 区	22 層 SK12202	21.0	10.7	0.9	鉈の刃形の形をした板材。全体が薄く作られている。板状。	弥生後期 ～古墳前 91-149	板 日	カシ	
150	W 25 2-3 区	6 層	14.8	7.7	1.3	三方を縦い角度で斜めに切り落とす。板状。	平安 91-150	遺 標 日	(スギ)	
151	W5185 6 区	18層水田 SK61801	43.8	5.0	3.4	切りは長さ7cm、深さ4mm、下端の長さ5cm、抉りの下は裏面と内側面を切り落す。木本状。	弥生後期 91-151	板 日	(スギ)	

用途不明 7

番号	登録番号 調査区	出土層位 遺構	法規 (cm)			形態・枝法	年代範 囲	実測圖 写真図版	本 取 り	樹種	
			長さ	幅	厚						
152	W2574 1 区	22 層 SK12205	56.1	5.9	3.2	両側面をV字に切り欠く。抉りはかなり短く、1cmの深さに削る。先端は枝として加工されている。垂木状。	弥生後期 ～古墳前	105-152 91-152	板	日	(スギ)
153	WK2092 10 区	35 層 SK103503	61.6	4.8	3.0	抉りは長さ10cm、深さ4mm。下端の反きも2cm。抉りの下が両側面をV字状に切り欠く。垂木状。	弥生後期 ～古墳前	105-153 91-153	板	月	(スギ)
154	WK2113 10 区	35 層 SK103503	56.4	3.4	3.7	抉りは長さ11cm、深さ1cm。下端の反きも7cm。抉りの下は裏面を切り欠く。	弥生後期 ～古墳前	103-154 91-154	板	日	(スギ)
155	W 551 2-3 区	12 層 SK21201	80.7	4.3	2.8	断面半円形。高さ3cm、深さ4mmの方孔の切り欠き。垂木状。	弥生後期 ～古墳前	105-155 91-153	板	日	(スギ)
156	WK2523 10 区	35 層 SK103505	84.5	4.0	4.6	抉りは長さ12cm、深さ7mm。下端の反きも6cm。抉りの下は2回切り欠く。垂木状。	弥生後期 ～古墳前	105-156 91-156	板	日	(スギ)
157	WK1030 8 区	17a 層 SK17a05	56.1	7.0	3.4	正面を斜め上から削って、深さ1cmの抉りを作る。上に向かって薄くなり、幅もやや狭くなる。板状。	弥生後期 ～古墳前	105-157 91-157	板	日	(スギ)
158	W 288 10 区	24 層 砂 層	48.7	5.4	2.9	側面を削ってを作る。先端部は裏面を削ってさらに削くする。板状。	奈良～ 平安	105-158 91-158	板	日	(スギ)
159	W 326 10 区	21 層 砂 层	41.8	8.4	6.2	正面を0.1cm～1.2cm切り落して作る。はさみで裏面を調整する。裏面にもはさみで裏面を残る。右。	平安	105-159 91-159	板	日	(スギ)
160	W1786 2-3 区	12 層 SK21201	46.2	16.7	5.5	右方が方孔に遅れて1がれる形に側面を削る。上端もやや厚くなる。裏面にいたる。削った部分も2.5mmとかなり厚みがある。板状。	弥生後期 ～古墳前	105-160 91-160	板	日	(スギ)
161	W 385 1 区	20 層 SR12001	8.8	1.5	0.3	刀形の束の部分に削る薄く細い材。	奈良～ 平安	106-161 91-161	板	日	(スギ)
162	W 352 1 区	20 层 SR12001	10.8	2.0	0.3	刀形の束の部分に削る。板状。	奈良～ 平安	106-162 94-162	板	日	(スギ)
163	W 38 2-3 区	8 层 SR20801	11.6	3.4	1.7	側面を切り落とし、下端を直角状に丸らせる。板状。	奈良～ 平安	106-163 94-163	板	日	(スギ)
164	W 456 2-3 区	12 层 SK21204	20.3	4.3	0.8	人形または鳥形の端部に似る。小孔1。板状。	弥生後期 ～古墳前	106-164 92-164	板	日	(スギ)
165	W 412 9 区	25-33層 SR2503 -3303	42.7	2.1	0.9	上端を両側面から切り落として尖らせらる。板状。	奈良～ 中世	106-165 92-165	板	日	(スギ)
166	W1534 9 区	33 层 SR2502	52.7	4.5	2.1	人形に似る。下から切り込みを入れ、間を削取って足状の表現をする。上部に向かって薄くなる。板状。	奈良～ 中世	106-166 92-166	板	日	(スギ)
167	W1006 9 区	25 层	54.5	6.1	1.2	下端を両側面から切り落とす。板状。	奈良～ 中世	106-167 92-167	板	日	(スギ)
168	W 322 10 区	22 层	73.25	3.35	3.2	角材の角に切り欠きを5回入れる部分が上部各角に2箇所である。下部の断面は円形の器具か。棒状。	平安	106-168 92-168	板	日	(スギ)
169	W1793 2-3 区	12 层 SK21201	51.8	5.8	2.9	上部に方孔の頭を付するようにした棒。有頭棒状。	弥生後期 ～古墳前	106-169 92-169	板	日	(スギ)
170	W 57 5 区	8 层	16.6	7.0	1.7	上端右側面を切り欠く。左も欠損しているが同様にかんがえられる。下部は大足の脚板か。有頭棒状。	古墳中期 ～平安	106-170 91-170	板	日	(スギ)
171	W 318 1 区	20 层 SR12001	16.3	1.8	1.7	正面を尖角状に作る。裏もやや盛り上がるがねとなっている。有頭棒状。	奈良～ 平安	106-171 94-171	板	日	(スギ)
172	W 655 10 区	30b 层 SK1030602	19.4	3.3	3.0	上部を尖角状に作る。下部は正面と裏を4mm～5mm削って薄くなり、長方形の孔を穿つ。	古墳中期	106-172 94-172	板	日	(スギ)
173	W 22 2-3 区	6 层	20.4	3.1	1.2	下部を幅広に作り、先端のみ薄く削る。上部のみみみは欠損。有頭棒状。	平安	106-173 92-173	板	日	(スギ)

用途不明8

番 号	登録番号 測量区	出土解説 遺構	法尺 (cm)			形態・技法	年代	実測図版 写真図版	本 取 り	樹 種	
			長さ	幅	厚						
174	W 24 5 区	5 番	23.9	6.4	1.3	右側面上面を切り欠く。左側面は欠損か。 有縫板状。	中・近世 92-174	106-174 92-174	板	日	(スギ)
175	W 125 10 区	146 番	23.5	3.3	0.3	付札状の形態。かなり薄い。左側面下部を V字に切り欠く。右側面にも同様の痕跡 が残る。有縫板状。	中・近世 92-175	106-175 92-175	板	日	(スギ)
176	W 45 10 区	8 番	18.6	2.2	0.9	付札状の形態。断面長方形状に加工され ている。上端に小孔1。有縫板状。	中・近世 94-176	106-176 94-176	板	日	(スギ)
177	W 887 7 区	9番下部 木造状遺構	15.7	1.6	0.9	付札状の形態。残存状況が悪い。有縫板 状。	古墳中期 94-177	106-177 94-177	板	日	(スギ)
178	W 106 10 区	16番～21番	14.1	1.2	0.5	小型の付札の形態。下に向かって薄くな る。有縫板状。	平安 94-178	106-178 94-178	追査	日	(スギ)
179	W 809 9 区	25 番 SR92501	22.1	6.0	3.4	大きな変形をもつ。左側はかなり薄い板状 となっている。右側。	奈良～ 中世 94-179	107-179 94-179	板	日	(スギ)
180	W 2548 9 区	28 番 SK93083	26.5	5.8	5.6	梯子の形状か。表面を削って段を作り出 している。有縫。	弥生後期 ～古墳前	107-180 92-180	板	日	(スギ)
181	WK1837 10 区	36 番 SK18305	62.2	14.6	1.6	5cm×7cmの大きな舟孔1。有孔。	弥生後期 ～古墳前	107-181 92-181	板	日	アカガシ空洞
182	W1354 2-3 区	12 番 SK21204	54.3	13.1	3.9	上がU字形に作られている。有孔。	弥生後期 ～古墳前	107-182 92-182	板	日	アカガシ空洞
183	W1562 2-3 区	16 番	30.3	10.3	2.2	正面に上部斜状の溝に切り込みがある所 を見られる。中央は丸孔状の切り欠きが ある。板状。	弥生中期 後半	107-183 92-183	板	日	(スギ)
184	W1108 9 区	25 番	20.1	4.8	2.8	中央部に弓の溝跡があり、元は上部しと 溝と開拓に終わっており、左側部の切 り欠きがあったと考えられる。有縫。	奈良～ 中世 94-184	107-184 92-184	板	日	(スギ)
185	W1361 9 区	33 番 SR93301	13.5	2.2	1.9	1.3cm×0.6cmの長方形の穿孔が上部にあ る。下部にも穿孔痕が残り、同様の形狀と 考えられる。有孔。	奈良～ 中世 94-185	107-185 94-185	板	日	(スギ)
186	W 243 2-3 区	10 番 SK21001	14.6	7.1	1.9	下部の生鉄品か。上部には垂直に月を入 した鉛栓がある。有縫。	古墳中期 92-186	107-186 92-186	板	日	(スギ)
187	W 491 8 区	16 番	12.6	3.2	2.6	円筒状の棒に邊道1.2cmの方形孔を両側か ら穿つ。有孔。	古墳中期 94-187	107-187 94-187	板	日	(スギ)
188	W2488 1 区	22 番 SK212205	31.7	3.6	2.1	上部の輪を抜くし、1.2cm×1.4cmの方形孔 を穿つ。表面を削り、やや薄くしている。 有孔。	弥生後期 ～古墳前	107-188 92-188	板	日	スギ
189	W 719 8 区	17a 番 SK817a05	36.0	3.9	1.7	1.5cm×1.7cmの舟孔1。上部にも舟孔痕が残 る。	弥生後期 ～古墳前	107-189 92-189	板	日	(スギ)
190	W 13 3 区	5 番	39.7	4.2	1.1	径4mmの小舟孔1。上端は丸く切る。割れの 部分の孔は欠損があるもの。有孔。	中・近世 92-190	107-190 92-190	板	日	(スギ)
191	W1857 9 区	38 番 SK93082	48.45	5.55	2.8	2.8cm×1.2cmの舟孔1。舟孔跡1。有孔跡。	弥生後期 ～古墳前	107-191 92-191	板	日	(スギ)
192	W2138 9 区	38 番 SK93083	54.2	5.2	2.0	1.4cm×0.7cmの長方形孔を穿つ。舟孔跡 状。	弥生後期 ～古墳前	107-192 92-192	板	日	(スギ)
193	W 806 10 区	31a 番 SK1031a05	62.2	4.6	3.4	4cm×1cmの長方形孔1。舟孔跡状。	古墳前期 92-193	107-193 92-193	板	日	(スギ)
194	W 608 2-3 区	12 番 SK21201	89.5	2.0	2.1	上端の側面を切り欠いて底の突起を作 る。弓に似る。上端は側面から見ると輪 があり、軽く大らう。右。	弥生後期 ～古墳前	107-194 92-194	芯 柄 材		イヌマキ属
195	W1672 9 区	38 番 SK93071	37.2	6.0	1.8	邊1.4cmの方形孔1。孔の横跡1。下部に 似る。有孔。	弥生後期 ～古墳前	108-195 93-195	板	日	(スギ)
196	W12-2 7 区	6 番 南迎待水塚	40.7	3.4	1.5	小舟2。斜めに穿つ。有孔。	不明	108-196 93-196	板	日	(スギ)
197	W29H1 9 区	38 番 SK93084	25.5	8.7	1.3	径3mmの小舟4。有孔。	弥生後期 ～古墳前	108-197 93-197	板	日	(スギ)

用途不明⑨

番号	登録番号 調査区	出土層位 遺構	法規(cm)			形態・枝法	年代観	古墳園版 茅真版	本取り	樹齢	
			長さ	幅	厚						
198	W1649 9 区	33 層 SR33201	25.6	8.6	2.0	約1cm四方の方彌孔1。尖端部の上端は方形の切り欠き底がある。表面は一部チョウナで調飾している。有孔。	奈良～中世 93-158	108-198 93-158	板	日	(スギ)
199	W1011 7 区	8 層	26.5	7.0	1.2	下端に小凹孔1。上端にも丸の痕跡がある。有孔。	古墳後期～奈良 93-159	108-159 93-159	板	日	(スギ)
200	W 21 3 区	6 層	14.0	6.7	0.9 断面径	椭圆あり。徑5mmの小孔1。有孔。	平安	108-200 93-200	追	日	(スギ)
201	W 283 10 区	30 層 泥炭 西側排水溝	13.6	4.3	1.1 断面径	方彌孔1。有孔。	古墳中期 94-201	108-201 94-201	板	日	(スギ)
202	W 151 10 区	18 層 西側排水溝	10.35	4.2	0.85	泥除け片か。小孔1。有孔。	平安	108-202 94-202	板	日	(スギ)
203	W 28 2-3 区	6 層	16.0	5.8	1.0	小孔1。有孔。	平安	108-203 93-203	追	日	スギ
204	W 666 8 区	17b 層 SK517a08	17.1	5.8	1.4	片幅1.5cmの方彌孔1。正面、裏面、右側面はチョウナで調飾している。有孔。	弥生後期～奈良 94-204	108-204 94-204	板	日	(スギ)
205	W2541 1 区	22 層 SK12203	18.4	6.3	0.9 断面径	二又繋の先端に形状が似る。徑5mmの斜めの穿孔がある。有孔。	翁生後期～古墳 93-205	108-205 93-205	板	日	アカガシア属
206	W 293 8 区	14b 層	6.3	5.5	2.7	方形の大きさ切り欠きを持つ。有孔。	奈良～平安 94-206	108-206 94-206	板	日	(スギ)
207	W 154 8 区	9 層	21.0	6.9	1.4	上端に徑8mmの凹孔1。下端にも円孔の軌跡がある。有孔。	平安～中世 93-207	108-207 93-207	板	日	(スギ)
208	W1772 2-3 区	12 層 SK21201	24.1	7.4	1.1	1.5cm×1.2cmの棒状凹孔1。表面ともナラウナで手揉みの痕跡。有孔。	弥生後期～古墳 93-208	108-208 93-208	板	日	(スギ)
209	W 690 1 区	20 層 SR12001	16.8	5.4	0.9	小孔3。並んで穿つ。中央の孔は見通しない。有孔。	奈良～平安 93-209	108-209 93-209	板	日	(スギ)
210	W 181 8 区	10a 層	20.0	3.1	1.9	穿孔状の切り欠き1。直前に下駄の角の部分を削り落としたような痕跡あり。下駄を壊した破片か。有孔。	平安～中世 94-210	108-210 94-210	板	日	(スギ)
211	W2856 1 区	22 層 SK12202	5.0	20.4	1.05	梢円形の丸の痕跡2。有孔。	翁生後期～古墳 93-211	108-211 93-211	板	日	(スギ)
212	W 807 9 区	25 層 SR32501	19.4	4.8	1.5 断面径	上端に小孔痕あり。下端は大きく凹状に認み、中央に貫通しない穴がある。	奈良～中世 93-212	108-212 93-212	板	日	(スギ)
213	W 54 1 区	20 層 SR12001	22.7	3.8	0.7	椭圆あり。縦横に切り込みがあり。その間に斜めに稚皮を施す。正面月牙痕が多い。小孔3。有孔。	奈良～平安 93-213	109-213 93-213	板	日	(スギ)
214	W 68 7 区	8 層 SR70801	19.9	2.7	0.5	済い材、方形小孔2.孔には木釘が残存する。有孔。	古墳後期～奈良 94-214	109-214 94-214	板	日	(スギ)
215	W 2 1 区	10 層 SK11003	15.5	2.0	1.0 断面径	方形の穿孔痕1。有孔。	中・近世 94-215	109-215 94-215	板	日	(スギ)
216	W 184 5 区	8 層	11.4	2.1	0.9	小孔3。有孔。	古墳中期～平安 94-216	109-216 94-216	板	日	(スギ)
217	W 191 10 区	18 層 西側排水溝	7.4	2.6	0.75	泥除けか。小孔1。有孔。	平安	109-217 94-217	板	日	(スギ)
218	W 148 8 区	9 層	9.0	4.1	0.8	小孔1。ESに似るが、やや厚めである。有孔。	平安～中世 94-218	109-218 94-218	板	日	(スギ)
219	W 3 3 区	4 層	22.0	4.2	4.4	かなり厚い板材に大きな角孔と穿った材の剥離。板状。	中・近世 93-219	109-219 93-219	板	日	(スギ)
220	W 562 10 区	24～26層 壁	54.7	3.0	1.0 断面径	刃形に形状が似る。中央部右を正面から穿っている。板状。	奈良～平安 93-220	109-220 93-220	板	日	(スギ)
221	W 817 9 区	25 層 SR92501	5.3	2.7	0.6	表裏透空り。板状。	奈良～中世 94-221	109-221 94-221	板	日	(スギ)
222	W 191 5 区	8層水田内	5.85	2.15	0.9	小孔1。有孔。	古墳中期～平安 94-222	109-222 94-222	板	日	(スギ)

用途不明10

番号	登録番号 調査区	出土層位 遺構	法量 (cm)			形態・特徴	年代概 算	実測開版 写真復原版	木取り	樹種
			長さ	幅	厚					
223	W 604 10 区	26 層 ST78	8.7	2.5	1.0	1cm×0.5cmの横長の孔)。下端に曲がってやや幅が広くなる。有孔。	奈良～ 平安 94-223	板	日	(スギ)
224	W 196 10 区	15 層 内側側水溝	10.1	2.0	0.6	小孔1)。下端は円形に切り、上端は直線的に切る。有孔。	平安 94-224	板	日	(スギ)
225	W 297 8 区	14b 層	9.5	3.2	0.9	円形穿孔痕1)。既存状況が悪い。有孔。	奈良～ 平安 94-225	板	日	(スギ)
226	W 126 10 区	18 層	11.0	2.5	0.6	小孔1)。既除けかげ。217とはほぼ同じ形状だがやや深い。有孔。	平安 94-226	板	日	(スギ)
227	W4735 6 区	16 层 SK61605	27.5	3.8	0.9	上端左右をV字状、下部左を円形に切り欠く。板状。	奈良後期 ～平安 93-227	板	日	(スギ)
228	W 253 7 区	8 层 SR70801	19.5	5.4	0.7	右側面中央を円形に切り欠く。板状。	古墳後期 ～奈良 93-228	板	日	(スギ)
229	W 297 7 区	8 层 SR70901	20.35	2.05	0.1	ごく薄い板状。上端左が斜めに切り欠きとされており、齒物の側板の可能性がある。	古墳後期 ～奈良 94-229	板	日	(スギ)
230	W2900 1 区	22 层 SK12203	22.85	1.6	1.3	小型の蝶の柄に似る。上部は側面に削れがある。棒状。	奈良後期 ～古墳前 94-230	板	日	(スギ)
231	W 241 8 区	15層直上	18.95	2.3	1.5	円の先端の形狀。やや仄っている。棒状。	古墳中期 94-231	板	日	(スギ)
232	W1522 2-3 区	14 层 SK21403	28.4	4.9	3.25	周囲を頂方から切り欠いて頭を取り出す。下部は直線と左側面の2方向から切り欠く。有根棒状。	奈良後期 ～奈良 93-232	芯持材	キリ	
233	W 639 1 区	20 层 SR12001	34.95	3.7	3.15	周囲を多方向から削り、円形状の頭を作り出す。	奈良～ 平安 93-233	芯持材	イヌマキ属	
234	SKT-10 -111 7 区	10 层 SK71006	351.0	2.7	2.8	円のような形狀だがやや太めで下端に行くほど幅くなる。円の様な反りは認められない。棒状。	奈良後期 ～古墳前 93-234	板	日	(スギ)
235	W 36 2-3 区	7 层	10.4	1.7	0.6	下は尖っていたと考えられる。右側面にV字状の切り欠き1)。板状。	奈良～ 平安 94-235	板	日	(スギ)
236	W222-1 5 区	10 层 SK51009	16.3	6.1	1.4	四又歯片の形狀。板状。	古墳前期 94-236	板	日	アカガシ属
237	W 31 2-3 区	6 层	11.9	3.9	1.1	直状の削物片か。板状。	平安 94-237	追査	日	(スギ)
238	W1216 9 区	33 层 SR93301				左側面をV字状に切り欠いて三角形状の頭を作り出している。	奈良～ 中世 94-238	板	日	(スギ)
239	W 165 2-3 区	10 层 SK21001 2号櫛	50.0	5.0	3.1	上部に極内斜の頭を作り出す。断面横円形。正面をチョウナで削り、平坦な面を作る。有根棒状。	古墳中期 95-239	板	日	ヒノキ
240	W 137 5 区	8 层	75.6	5.4	4.2	下端にかえしを作る。左側面はやや丸みを帯びる。かえし付き棒状。	古墳中期 ～平安 95-240	板	日	(スギ)
241	W 138 5 区	8 层	82.6	5.0	4.0	20前に似る。右側面に削りの加工があり。かえし付き棒状。	古墳中期 ～平安 95-241	板	日	(スギ)
242	W 729 2-3 区	14 层 SK21402	49.9	3.3	3.0	角材の各々の面を削り、頭を作り出す。右側棒状。	奈良後期 ～古墳前 95-242	板	日	(スギ)
243	W 719 2-3 区	12 层 ST-5	73.8	4.4	2.7	角材の各々の面を削り、頭を作り出す。右側棒状。	奈良後期 ～古墳前 95-243	板	日	(スギ)

補遺図版銀査表

補遺 1

番号	遺物名	登録番号 出土地位 出土通情	法量 (cm)	形態・技法		年代 紀	実測図版 写真図版	木 板 紙
				長さ	幅			
1	曲物	W 33 2-3 区 6 層	15.4 残存幅 厚さ 1.0	カキゾコの底板。約2分の1が残存する。カバ縫が1箇所、側板には平行せず直交に近い角度に残る。	平	112-1 97-1	板 口	スギ
2	曲物	W 3 2-3 区 8 層 西側排水溝	18.2 残存幅 厚さ 0.9	カキゾコの底板。2分の1箇所が残存する。カバ縫が2箇所側板の接合部に残る。復元後18.7cm。	全 身 一 平 安	112-2 97-2	板 口	スギ
3	曲物	W 6 2-3 区 4 層	13.5 全幅 断面厚 1.05	底板3分の1箇所が残存する。カバ縫、木釘痕等は残っていない。復元後15.8cm	中 近 世	112-3 97-3	板 口	スギ
4	曲物	W 50 2-3 区	18.5 残存幅 厚さ 1.2	端に穿孔が1箇所残存する。底板が四角であったとすると平行が40.4cmとなり、かなり太昂品となるため、精円形であつた可能性がある。	古 墳 中期	112-4 97-4	板 口	スギ
5	曲物	W 37 2-3 区 8 層	16.0 残存幅 断面厚 0.9	カキゾコの底板。約4分の1が残存する。側板の接合部にカバ縫が1箇所残る。復元後 20cm。	古 墳 身 一 平 安	112-5 97-5	板 口	スギ
6	曲物	W 15 2-3 区 5 層	12.3 残存幅 断面厚 0.8	底板約4分の1箇所が残存する。カバ縫、木釘等は残っていない。復元後 13.0cm	平	112-6 97-6	板 口	スギ
7	曲物	W 52 5 区 6 層	13.9 残存幅 断面厚 0.9	底板2分の1箇所が残存する。カバ縫、木釘等は残っていない。表面に刀痕のような痕がある。	平	112-7 97-7	板 口	スギ
8	曲物	W 703 1 区 22 層	17.6 残存幅 断面厚 0.8	カキゾコの底板の約3分の1が残存する。カバ縫、木釘等は残っていない。復元後 19.2cm。	鉢 身 一 古 前	112-8 97-8	板 口	スギ
9	側物	W 57 3 区 5 層 SK311	91.4 全幅 厚さ 9.4	平面長方形のかなり大型品である。周囲の立ち上がりよりも底の方方が薄く作られている。	平	113-9 97-9	板 口	スギ
10	側物	W1244 3 区 33 層 SKG3361	34.2 残存幅 厚さ 4.7	平面長方形と考えられ。把手が1箇所残存している。	鉢 身 一 中 世	113-10 97-10	板 口	スギ
11	側物	W1673 9 区 37 層	46.3 残存幅 厚さ 6.4	平面長方形で内部を上から平底になるよう削っている。また、18cmの長さの縫があり、側面には脚と思われる表現が見られる。	鉢 身 一 古 前	113-11 97-11	板 口	スギ

補遺2

番 号	遺 物 名	登録番号 区 出・把位 出・遺傳	法 長 (cm)	形 態 ・ 技 法	年 代 概 算	実測図版		木 取 り 密 度
						東 京 中 世	東 京 近 世	
12	削 物	W1170 9-1 区 33 番 SR20301	長さ 41.3 残存幅 8.5 厚さ 4.5	平面長方形と考えられ。把手が1箇所残存する。	奈 良 中 世	113-12 97-12	板 目	スギ
13	削 物	W 333 2-3 区 10 番	残存長 27.5 残存幅 4.7 厚さ 3.1	底の一部が残存しているのみで、大部分が欠損しているが、平面長方形と考えられる。	古 墳 中 期	113-13 97-13	板 目	スギ
14	削 物	W 611 1 区 20 番 SR12001	残存長 14.3 残存幅 4.3 厚さ 5.0	大部分が欠損しているが、平面長方形と考えられる。	奈 良 一 平 安	113-14 97-14	板 目	スギ
15	削 舟	W1799 1 区 22 番 SK12205	残存長 15.9 残存幅 19.5 残存厚 16.9	円筒の把手とその周辺のみが残存する。平面は縦に長い小 舟型と考えられる。	弥 生 — 古 墳	113-15 97-15	追 格 目	スギ
16	削 舟	W1711 2-3 区 12 番 SK21201	残存長 6.1 残存幅 35.5 断面厚 1.4	約4分の1～3分の1が残存。横円形の穿孔痕が2箇所残 る。	弥 生 — 古 墳	114-16 98-16	板 目	スギ
17	削 舟	W 482 2-3 区 12 番	残存長 9.3 全幅 27.0 厚さ 2.0	約2分の1が残存。方形状の穿孔が2箇所残る。中央部がや や僅か。	弥 生 — 古 墳	114-17 98-17	板 目	スギ
18	削 舟	W 904 7-1 区 10番上面	残存長 15.2 全幅 53.9 厚さ 1.8	2分の1箇が残存。細長い横円形の穿孔が4箇所残る。孔間 は上の約7cm、下の約3cmとなり狭い。	奈 良 — 古 墳	114-18 98-18	板 目	スギ
19	削 舟	W 479 2-3 区 12 番 SK21301	残存長 15.4 全幅 47.0 厚さ 2.6	2分の1箇が残存。方形状と思われる穿孔孔が4箇所残る。	弥 生 — 古 墳	114-19 98-19	板 目	スギ
20	削 舟	W 627 2-3 区 12 番 SK21201	残存長 9.5 全幅 33.4 厚さ 2.1	3分の1が残存。方形状の穿孔が2箇所残る。	奈 良 — 古 墳	114-20 98-20	板 目	スギ
21	削 舟	W 52 2-3 区 9 番	残存長 13.5 残存幅 34.5 厚さ 1.9	約3分の1が残存。横円形の穿孔が2箇所見られる。	古 墳 中 期	114-21 98-21	板 目	スギ
22	縫 合	W1601 9 区 35 番	全長 188.4 全幅 9.5 厚さ 3.7	上部に15箇所のV字状切り欠きが不規則に並ぶ。下部には 中央よりややずれた位置に方形の切り欠きが1箇所ある。	古 墳 中 期	114-22 98-22	板 目	スギ

補遺3

番号	遺物名	登録番号 区 出土地	法量 (ca)	形態・技法	年代 古 中 — 平 安	実測図版 写真復版	木取り 目	樹種
23	泥除け	W 110 5 区 8 層	全长 12.7 全幅 7.2 厚さ 0.7	約4分の1が残存。小孔が2つ残る。柄を装着するための大きな切り欠きがある。装着角度は不明。	古 中 — 平 安	115-23 99-23	板	(スギ)
24	泥除け	W 68 5 区	全长 12.4 全幅 4.3 厚さ 0.8	約8分の1が残存。小孔2つと柄を装着するための切り欠きが残る。装着角度は不明。	古 中 — 平 安	115-24 99-24	追 板	(スギ)
25	泥除け	W 408 8 区 15 層	全长 14.9 全幅 4.5 厚さ 1.1	約8分の1強が残存。小孔1つと柄を装着するための切り欠きが残る。装着角度は50度である。	古 中 — 平 安	115-25 99-25	板	(スギ)
26	泥除け	不 明	残存長 11.7 残存幅 7.3 厚さ 1.2	下部に向かって薄くなるように作られている。側端は3cmのところから削って尖らせている。	不 明	115-26 99-36	追 板	アカガシモミジ
27	泥除け	不 明	長さ 10.4 残存幅 19.6 厚さ 1.4	下部に向かって薄くなるように作られている。側端と下端、上端の側面寄りの部分はさらに削って尖らせている。	不 明	115-27 99-27	板	アカガシモミジ
28	泥除け	不 明	長さ 15.3 残存幅 2.5 厚さ 1.3	下部に向かって薄くなるように作られている。側端は15mmのところから削って薄く尖らせている。	不 明	115-28 99-28	板	アカガシモミジ
29	又板	W2265 1 区 22 層 SK12203	長さ 38.8 全幅 8.8 厚さ 1.2	又板の刃の片方が残存する。刃の軸が下に向かってやや広くなり、刃先に向けて傾くなる。	古 代 — 古 代	116-29 99-29	板	アカガシモミジ
30	硝子	硝子 不明	長さ 46.3 全幅 13.7 厚さ 3.8	硝穴周辺が欠損しているが、円孔の痕跡が残る。他の硝子と異なり硝穴周辺が隆起せず、全体的に同じ厚さとなっている。	不 明	116-30 99-30	板	アカガシモミジ
31	硝子	悉考不明 5 区 10 層	長さ 21.9 全幅 8.0 厚さ 2.4	全周欠損のため屋型は不明だが広底のような形になると推定される。硝穴周辺が隆起し、周辺は薄く加工している。着柄角度50°。	古 代 — 古 代	116-31 99-31	板	アカガシモミジ
32	縄	W 556 1 区 20 層 SR12001	長さ 21.05 全幅 1.8 厚さ 1.1	小型ではあるが、上部に3.7cmの穴を差し込んだ穴の痕跡が残る。	古 代 — 平 安	116-32 98-32	板	ヒノキ
33	縄	W 568 7 区 8 層 SR70801	残存長 7.8 全幅 14.0 厚さ 3.1	丸太材の木柵に近い部分を加工して作られている。I辺1.2cmの方形の穴が上部中央にあけられている。	古 代 — 平 安	116-33 98-33	板	アカガシモミジ

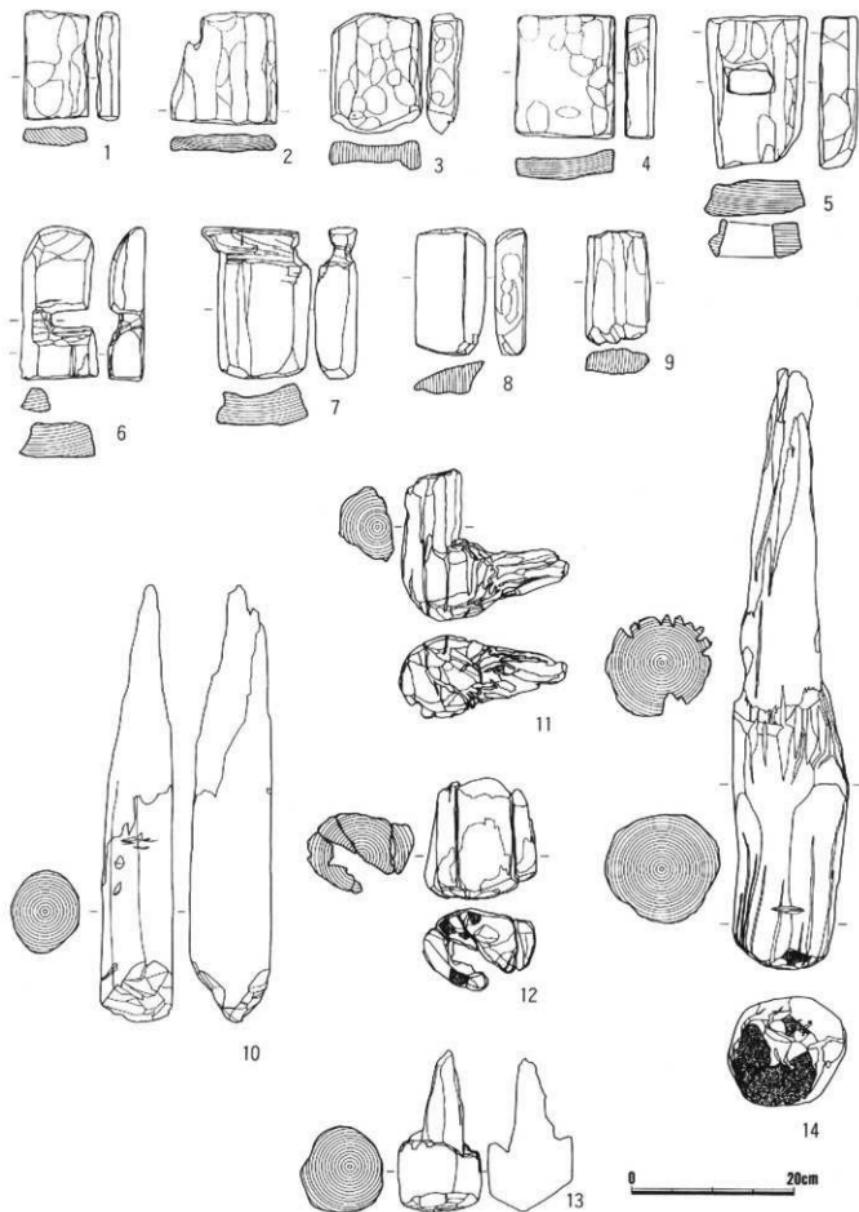
補遺4

番 号	遺 物 名	登録番号 区 出土施設 出土遺構	法 長 (cm)	形 態 ・ 技 法	年 代 紀	文 書 写 真 図 版	木 取 り	樹 種
34	刀	W129 9 区 33 層	残存長 34.15 残存幅 3.0 厚さ 1.7	上部の半分が残存する。側面にV字状の切り欠きが4箇所ある。	奈 良 中 世	116-34 98-34	板	スギ
35	刀	W 921 9 区 25層～ 33 層 SR52502 ～93303	残存長 35.4 残存幅 2.9 厚さ 1.2	刀の背にあたる部分と、刃の先端を欠損している。柄は刃側を2箇所三角形に切り欠いて表現している。	奈 良 中 世	116-35 98-35	板	スギ
36	土 鉢	P 62 9 区 19 層 SR52001	長さ 4.02 全幅 1.45 厚さ 1.31	完形品。楕円質の細長い円柱状の土器で、径約5mmの孔が貫通する。上下端は平坦に作り、上部には粘土をねじった軽鉢がある。重量9.2g。	中 近 世	117-36 96-36		
37	土 鉢	P 208 9 区 22 層	長さ 4.01 全幅 1.44 厚さ 1.42	ほぼ完形品。上端部を平坦に作る円柱形の土器で、径約1cmの孔が貫通する。孔を貫通させた後、さらに両端を押しつけて平出にしている。重量26.3g。	中 近 世	117-37 96-37		
38	土 鉢	P 441 7 区 9層下部	長さ 4.90 全幅 3.89 厚さ 3.51	ほぼ完形品で下端の一部が欠損している。中央が最も膨らむ勃起部の上端で、径4mmの孔が貫通する。重量7.0g。	古 墳 中期	117-38 96-38		
39	土 鉢	P632.683 8 区 17a 層	長さ 5.66 全幅 3.83 厚さ 3.41	上端を平坦にする円柱状の土器で、中央部に径約1cmの孔がやや斜めに貫通する。側面には所々に粘土の合せ目が残る。4分の1欠損。重量52.8g。	奈 良 古 墳	117-39 96-39		
40	痕 状 1. 製 品	P 1 2-3 区 9 層	長さ 4.3 全幅 4.21 厚さ 1.8	完形品。全周ナナメ仕上げで、孔内面には横ナナメがあり、やや傾んでいる。	古 墳 中期	117-40 96-40		
41	白 玉	S 2 5 区 8 層 SR50801	長さ 0.45 全幅 0.45 厚さ 0.35	滑石製。胸部中央に接縫を残す。L. 下端は平坦に研削されるが、上端はやや斜めになっている。胸部表面には研削跡が見られる。	古 墳 中期	117-41		
42	痕 状 人 頭 部	W 252 9 区 20 層	長さ 8.9 全幅 1.0 厚さ 0.4	L. 上端は正面と裏面から割り、薄く作る。左側面も同じ。右側面は割り面で欠損か。	奈 良 中 世	117-42 98-42	板	スギ
43	痕 状 木 製 品	W 11 2-3 区 5 層	長さ 8.8 全幅 0.6 断面厚 0.5	途中で折れている。断面には正方形状をしている。下端は正面と両側面を削って作り出す。	中 近 世	117-43 98-43	板	スギ
44	痕 状 木 製 品	W 751 7 区 8 層 SR70801	長さ 11.6 全幅 0.7 厚さ 0.4	やや横幅がある。下端は欠損しているものと考えられる	古 墳 後 ～ 奈 良	117-44 98-44	板	スギ

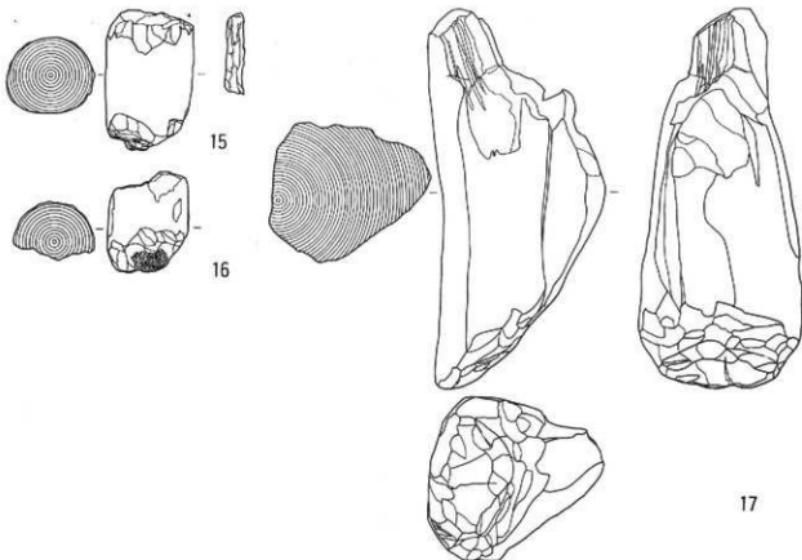
補遺5

番 号	直 物 名	分類番号 区 出上昇化 治上通橋	法量 (cm)	形 態 ・ 状 法	年 代 観	大 判 図 版 写 真 版	木 取 り	樹 種	
45	管 状 木 製 品	W 870 7 区 8 番 SR70801	長さ 全幅 断面厚	10.4 0.9 0.5	やや瘤瘤があるもの。下端は内側面と正面を削って尖らせ ている。	古 墳 後 — 奈 良	117-45 98-45	板 口	(えぞ)
46	管 状 木 製 品	W 7 2-3 区 4 番 下	長さ 全幅 厚さ	10.9 0.7 0.5	下端が鋭く尖る。上部の大部分は欠損していると思われる。 上端はへら状に丸く切っている。	中 近 世	117-46 98-46	板 口	(えぞ)
47	管 状 木 製 品	W 16 3 区 4 番	長さ 全幅 厚さ	12.8 0.7 0.6	欠損しているが、両側の尖ったものと考えられる。	中 近 世	117-47 98-47	板 口	(えぞ)
48	管 状 木 製 品	W 52 7 区 8 番 SR70801	長さ 全幅 断面厚	14.9 0.7 0.3	平たく内側面が削り凹であり、欠損の可能性がある。上端は 平坦に切る。下端は欠損する。	古 墳 後 — 奈 良	117-48 98-48	板 口	(えぞ)
49	管 状 木 製 品	W 9 2-3 区 5 番	長さ 全幅 厚さ	17.7 0.7 0.5	下端は側面と正面を削って尖らせている。上端は欠損。	中 近 世	117-49 98-49	板 口	(えぞ)
50	管 状 木 製 品	W 1a 3 区 4 番	長さ 全幅 厚さ	20.0 0.5 0.5	両端の先端を側面から削って尖らせている。	中 近 世	117-50 98-50	板 口	(えぞ)

遺物実測図版

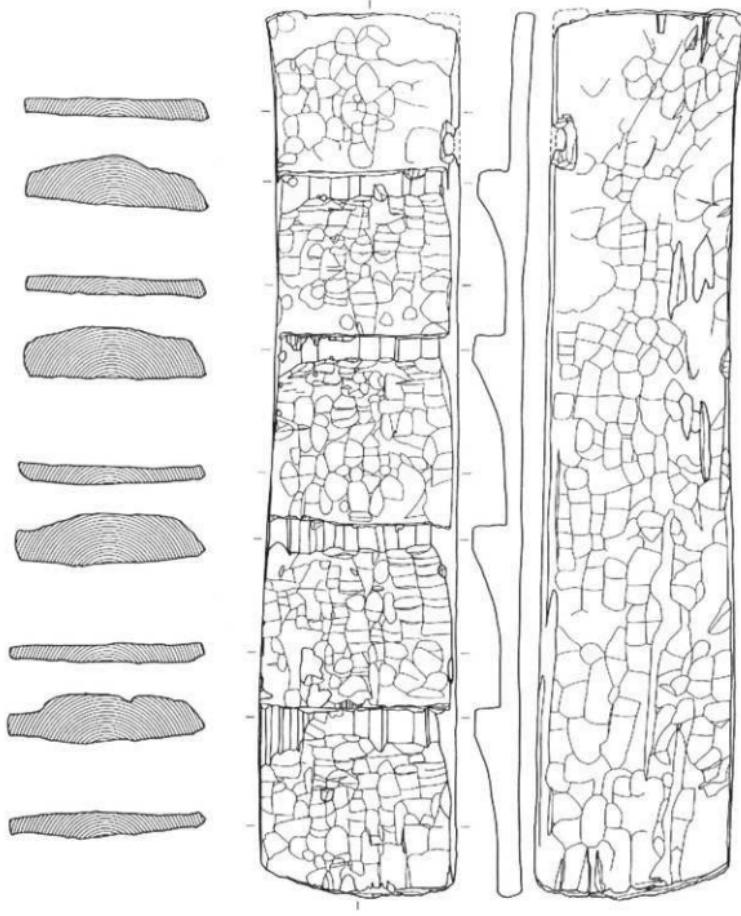


第1図 硬板・柱根実測図1

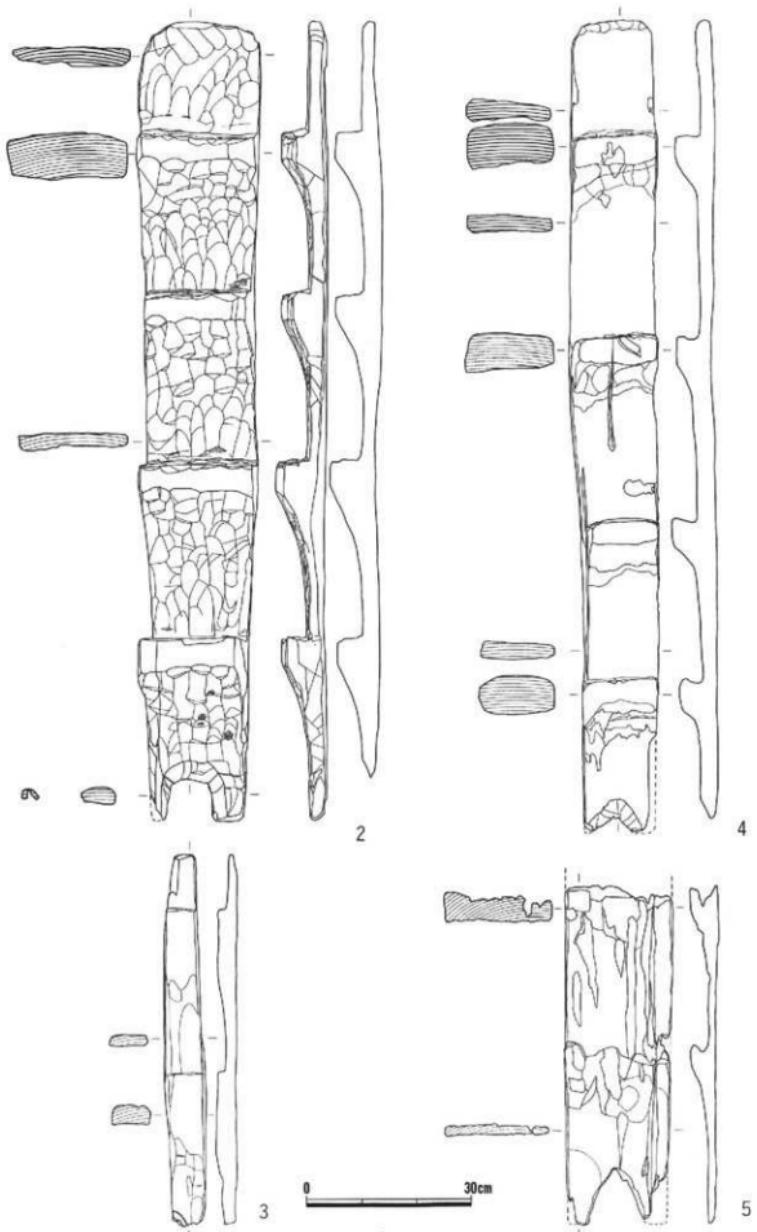


0 20cm

第2図 磁板・柱根実測図2



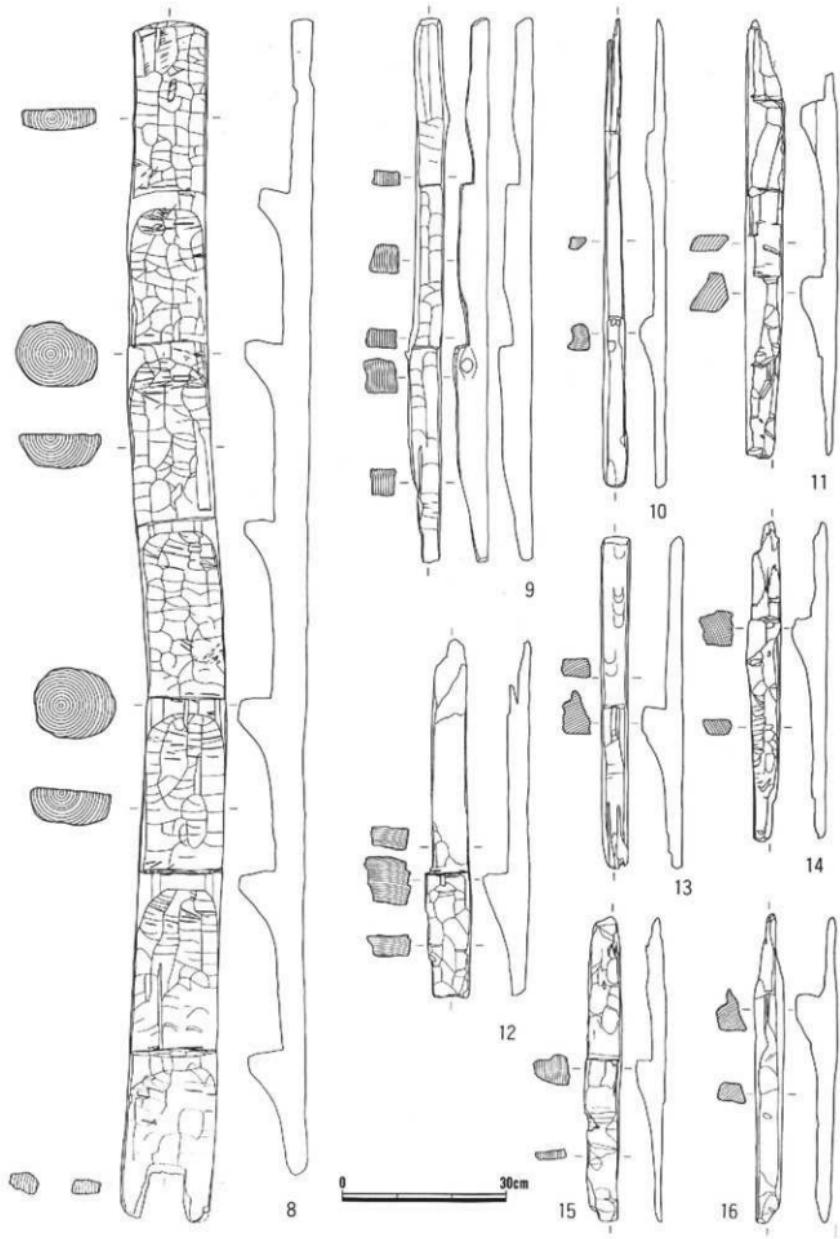
第3図 梯子実測図1



第4図 様子実測図2



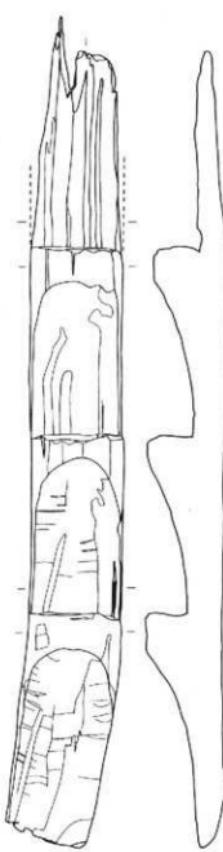
第5図 梯子実測図3



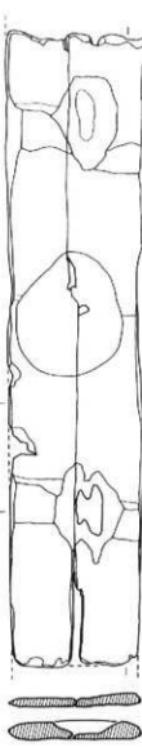
第6図 梯子実測図4



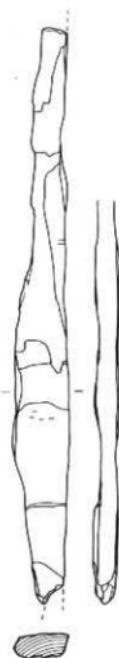
17



18



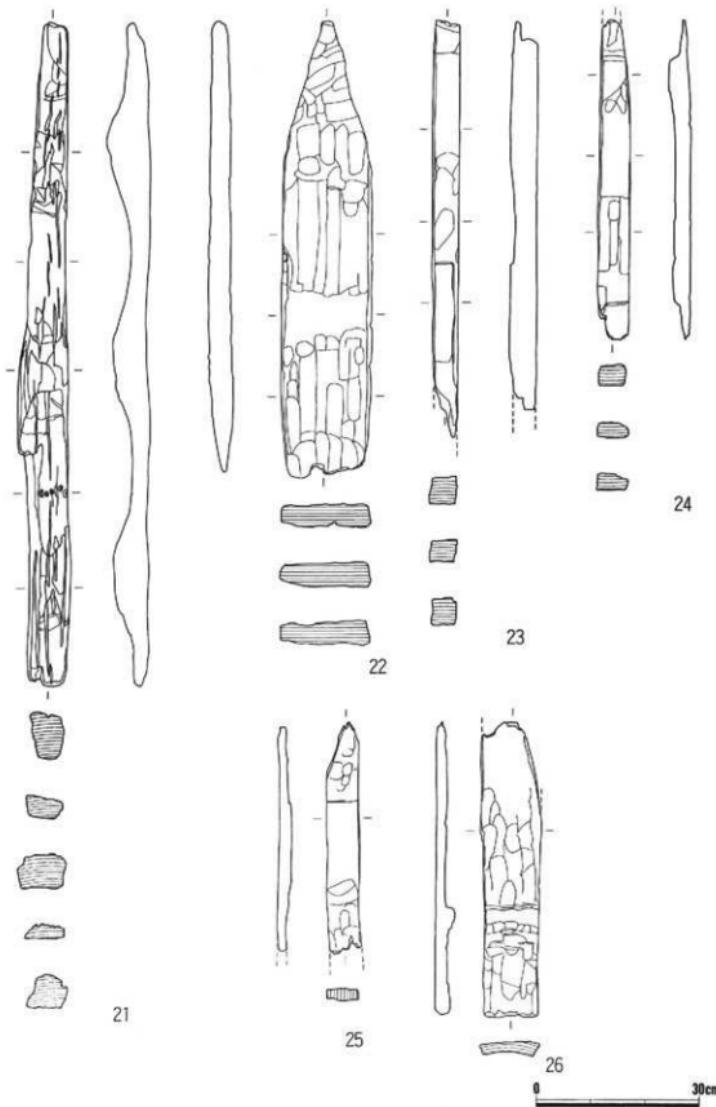
19



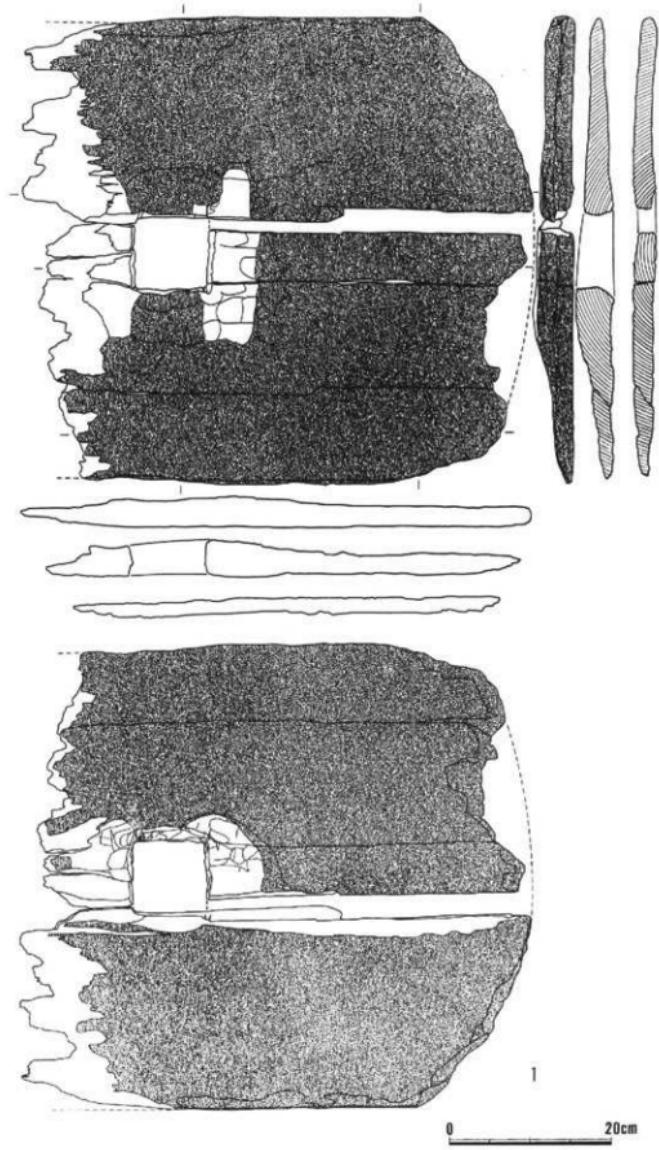
20

30cm

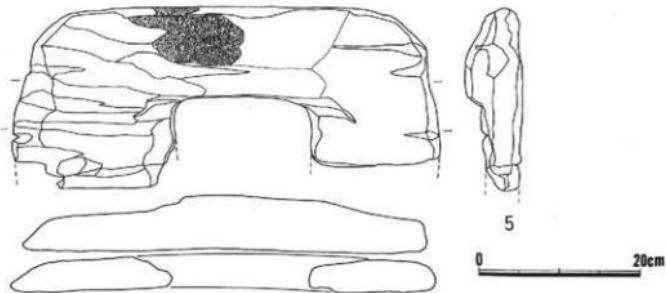
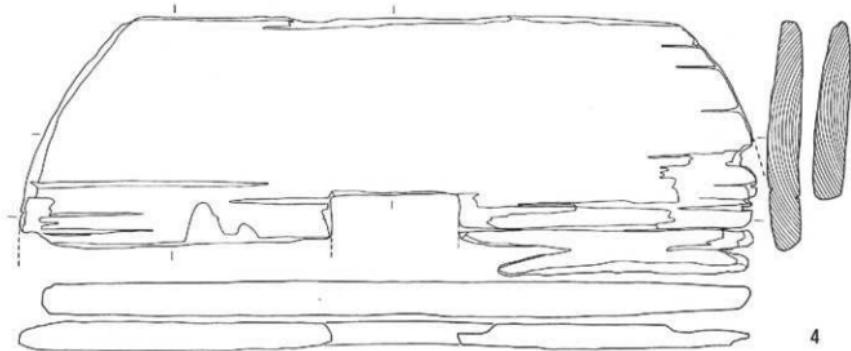
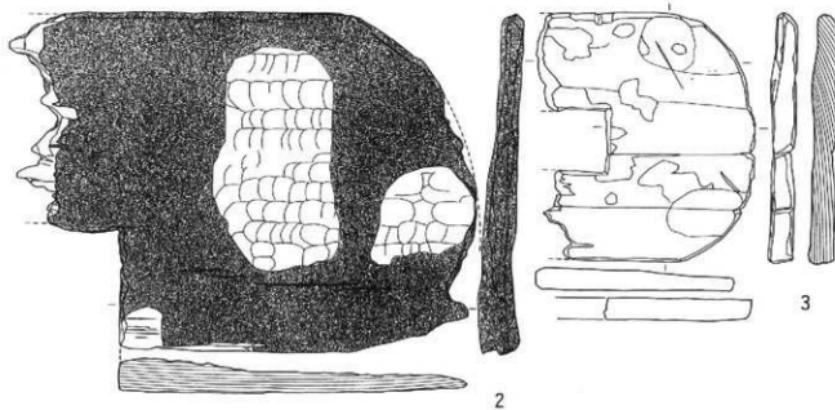
第7図 梯子実測図5



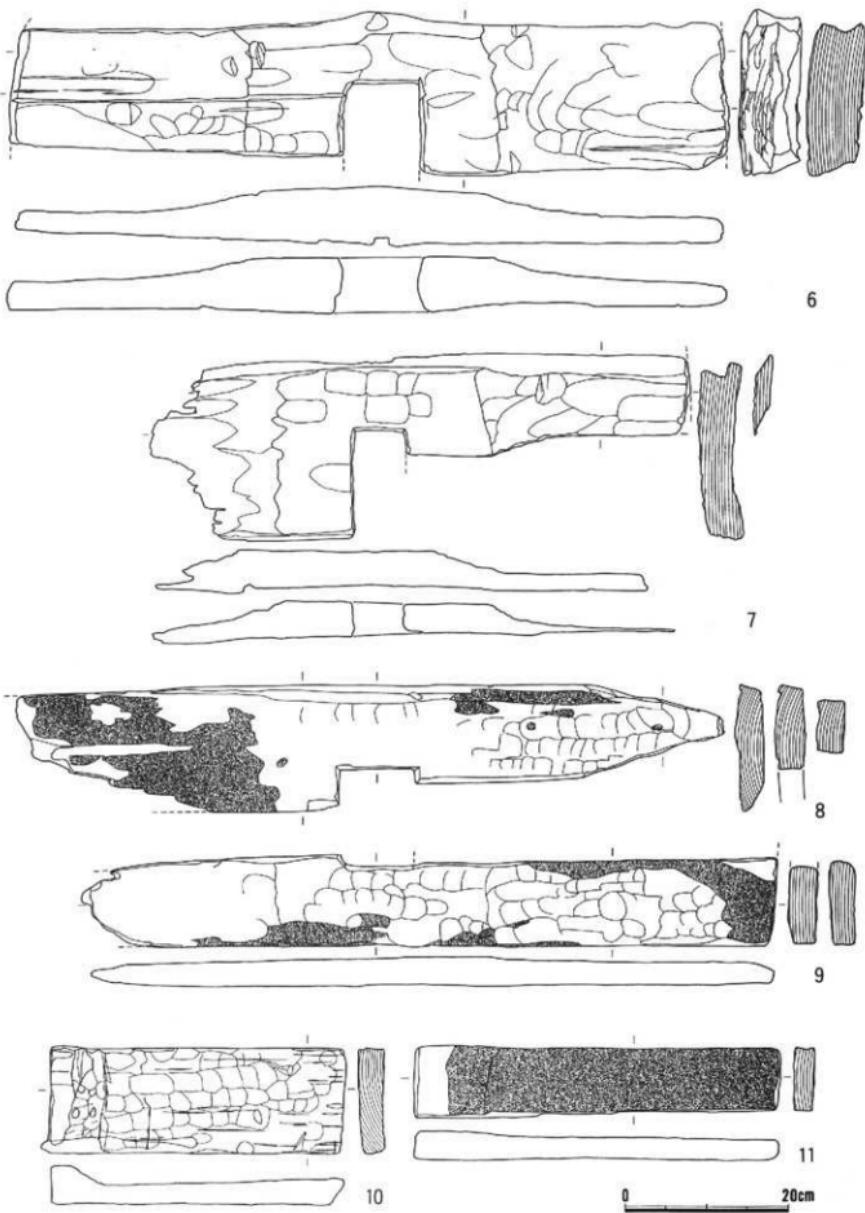
第8図 梯子実測図6



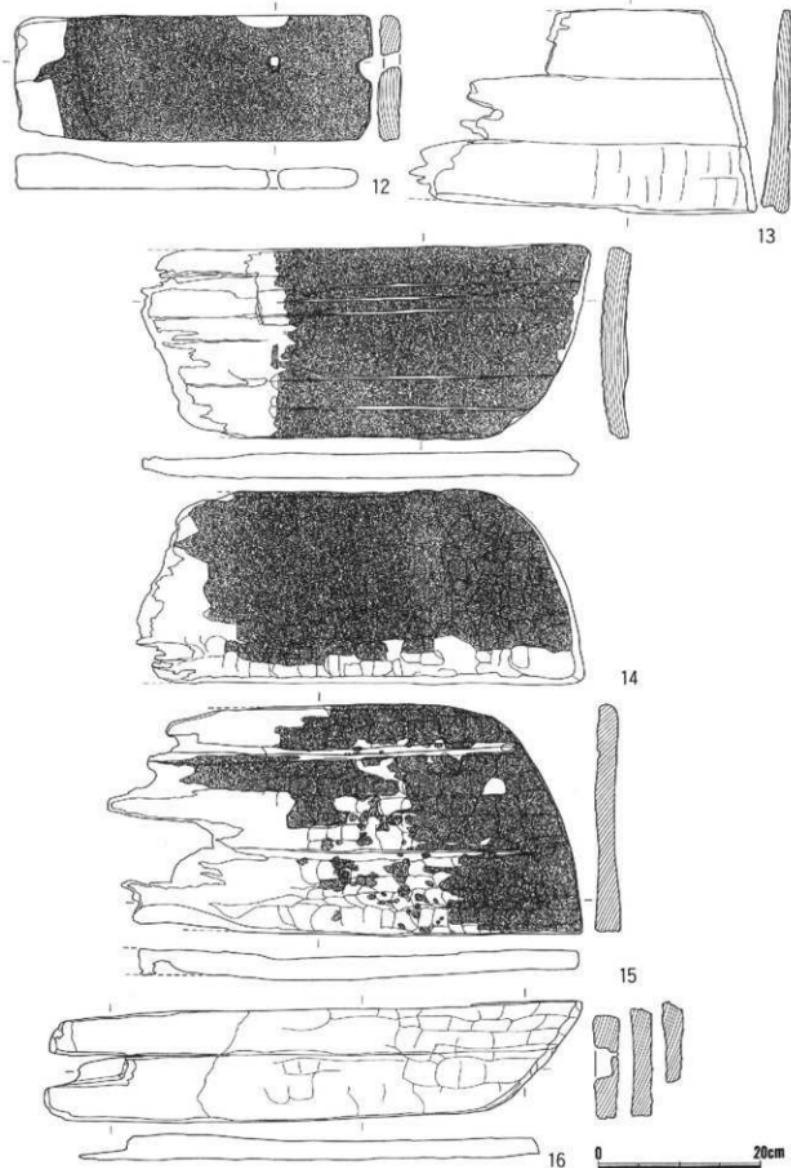
第9図 鼠返し実測図1



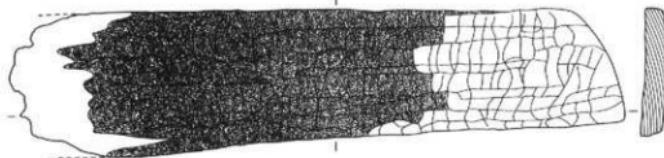
第10図 鼠返し実測図2



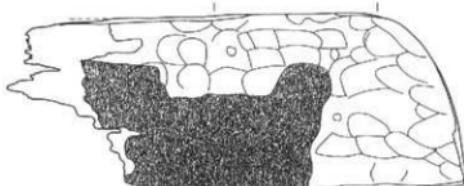
第11図 鼠返し実測図3



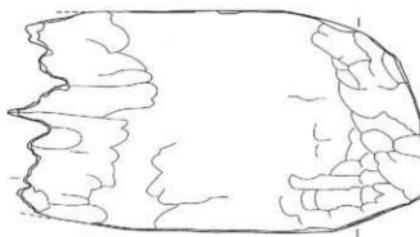
第12図 鼠返し実測図4



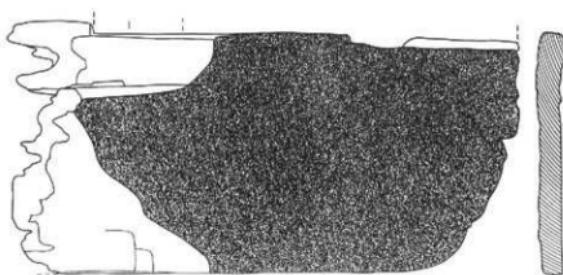
17



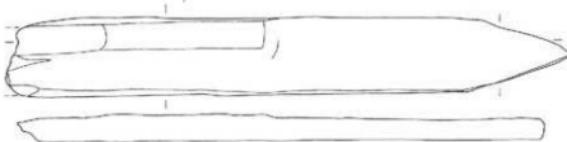
18



19

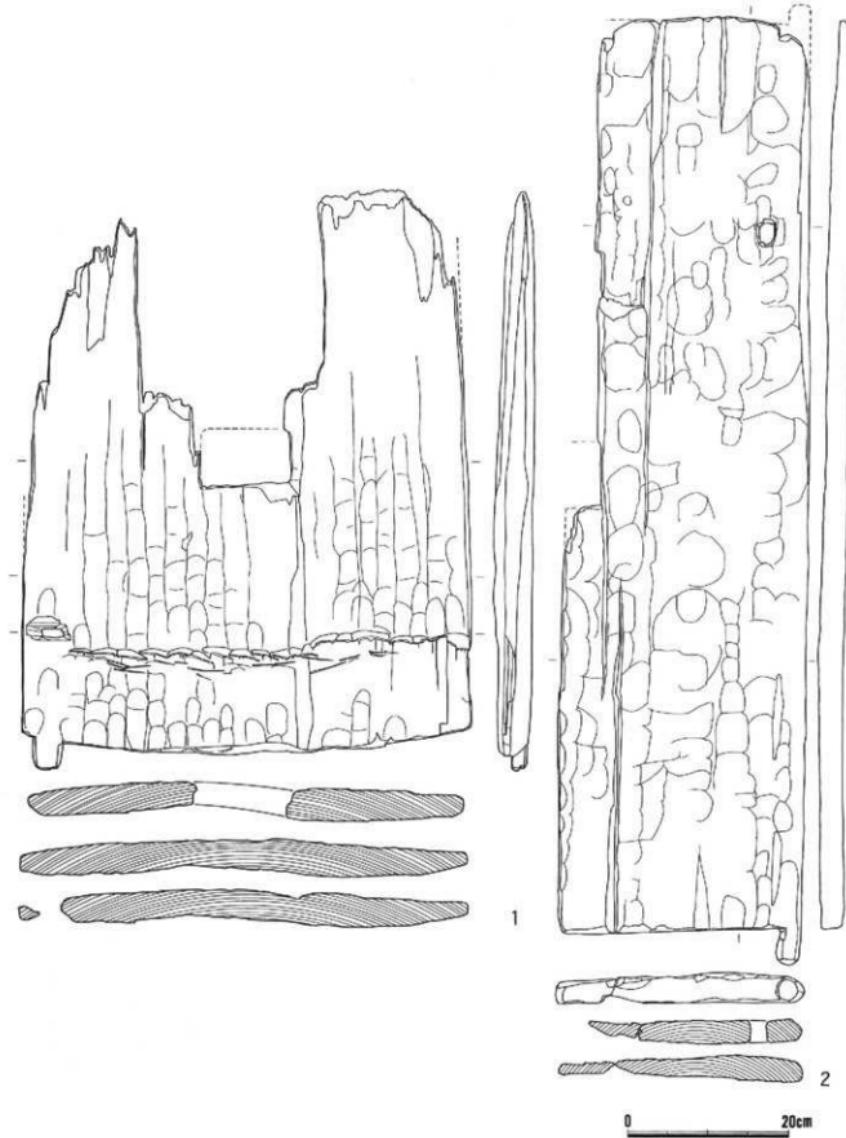


20



21

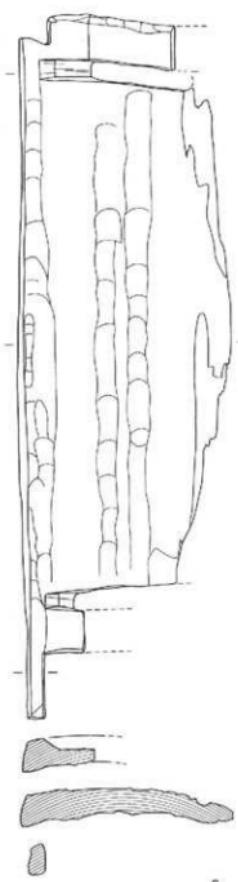
第13図 鼠返し実測図5



第14図 肌実測図1



第15図 考古測図2



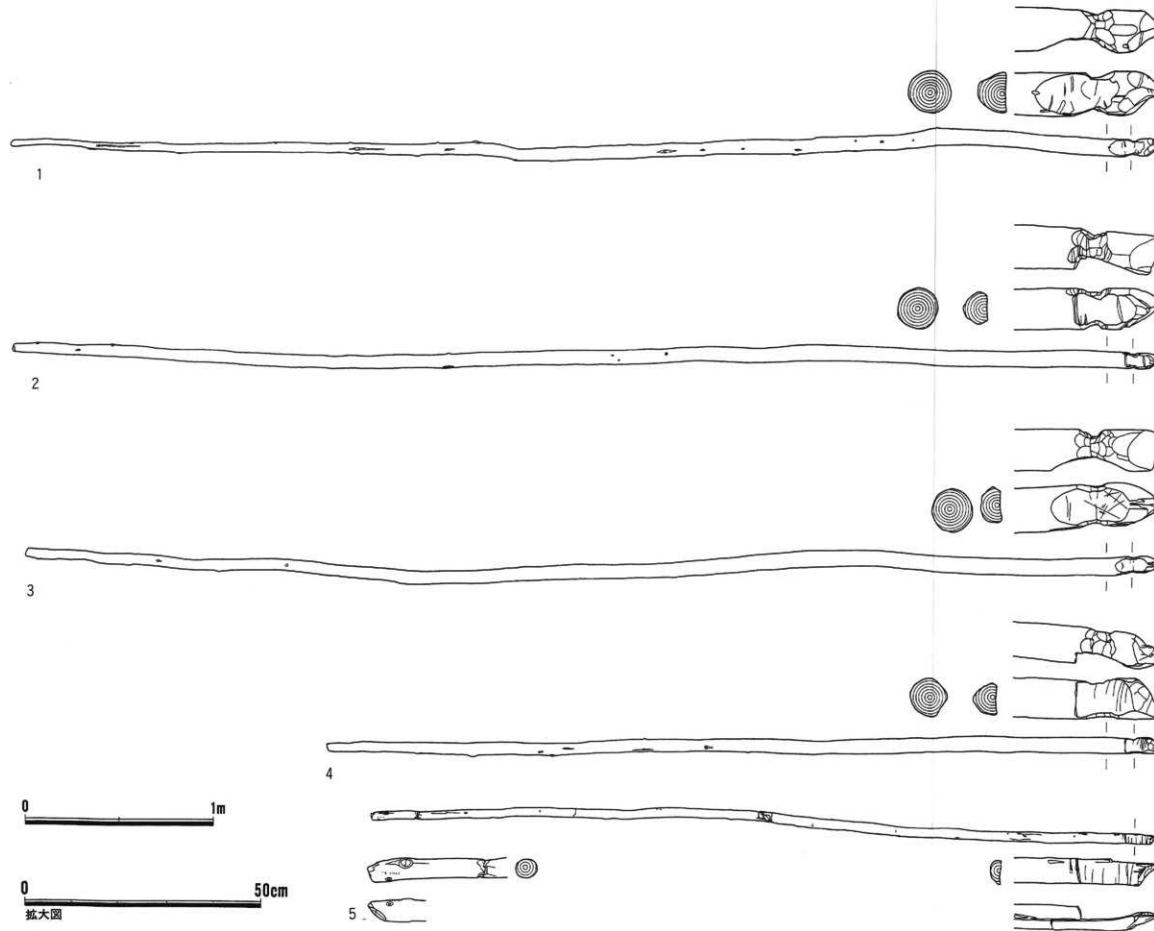
6



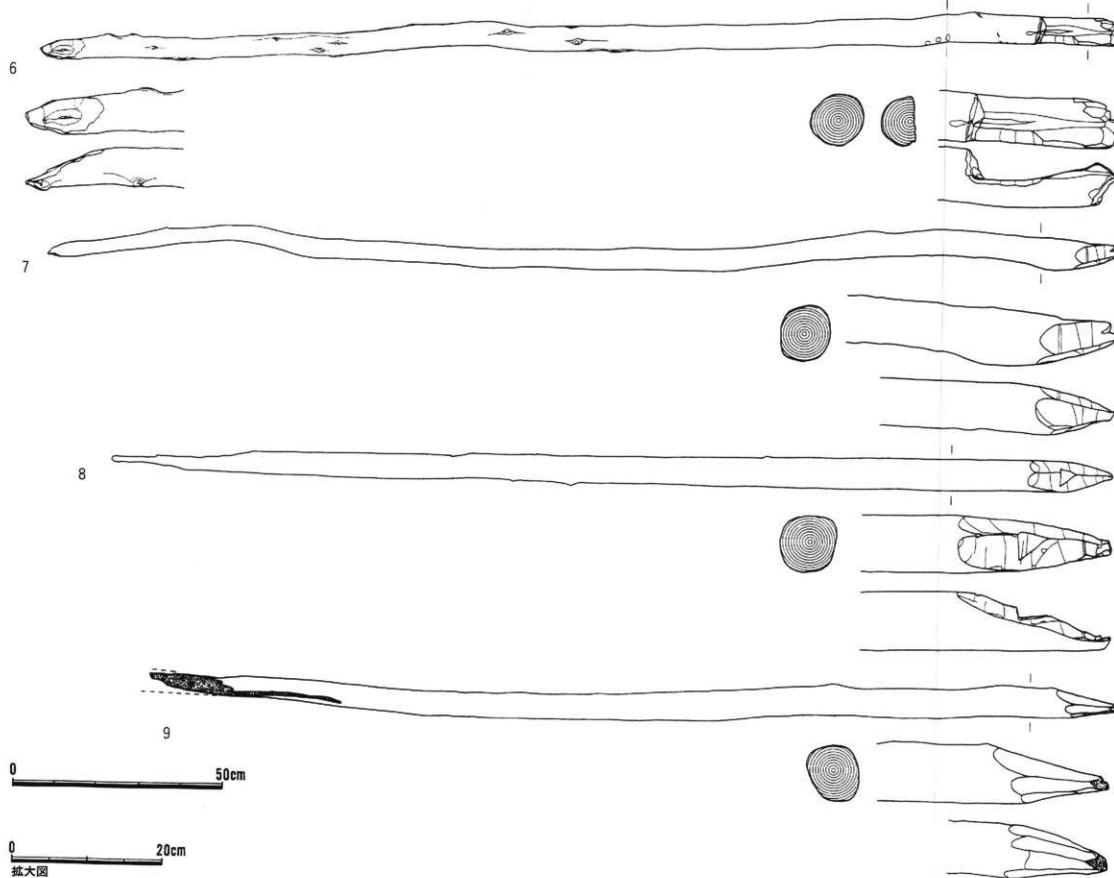
7

0 20cm

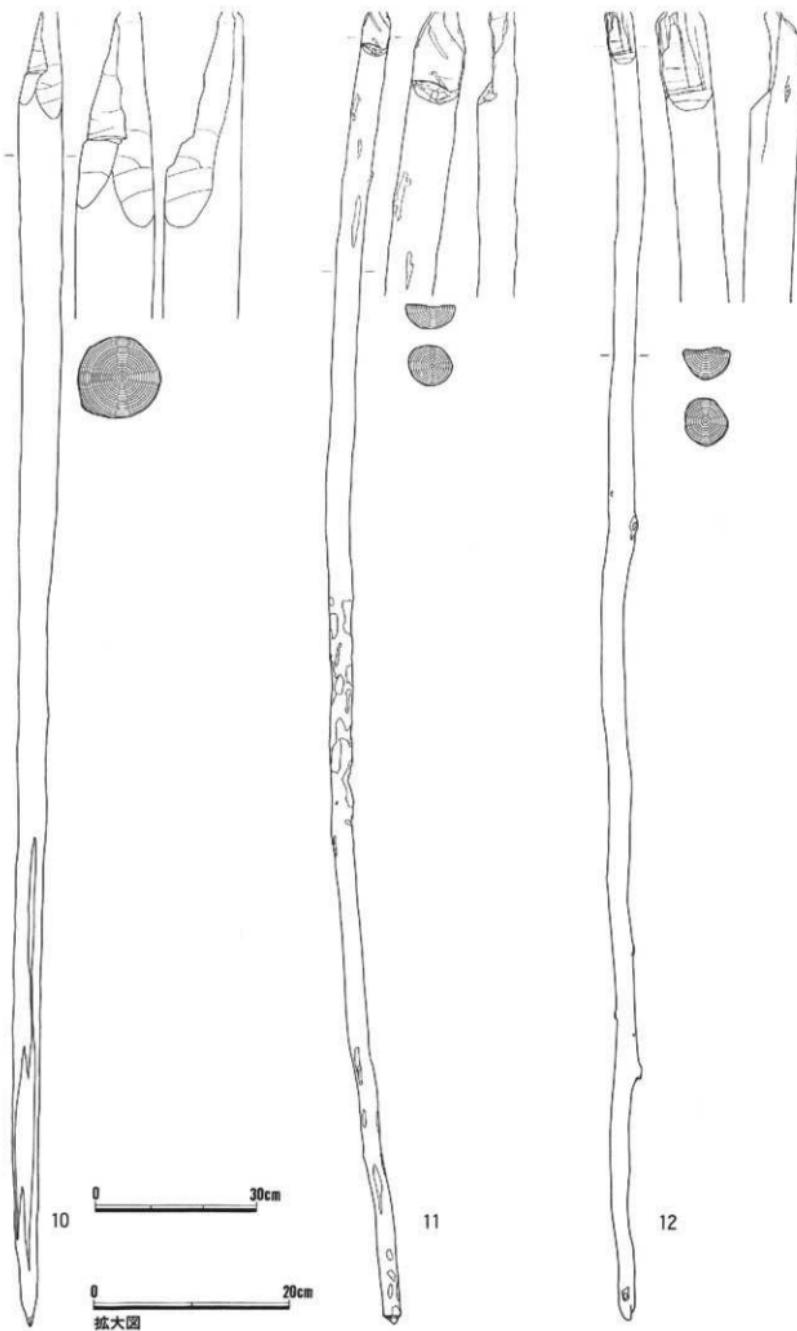
第16図 鹿央測図3



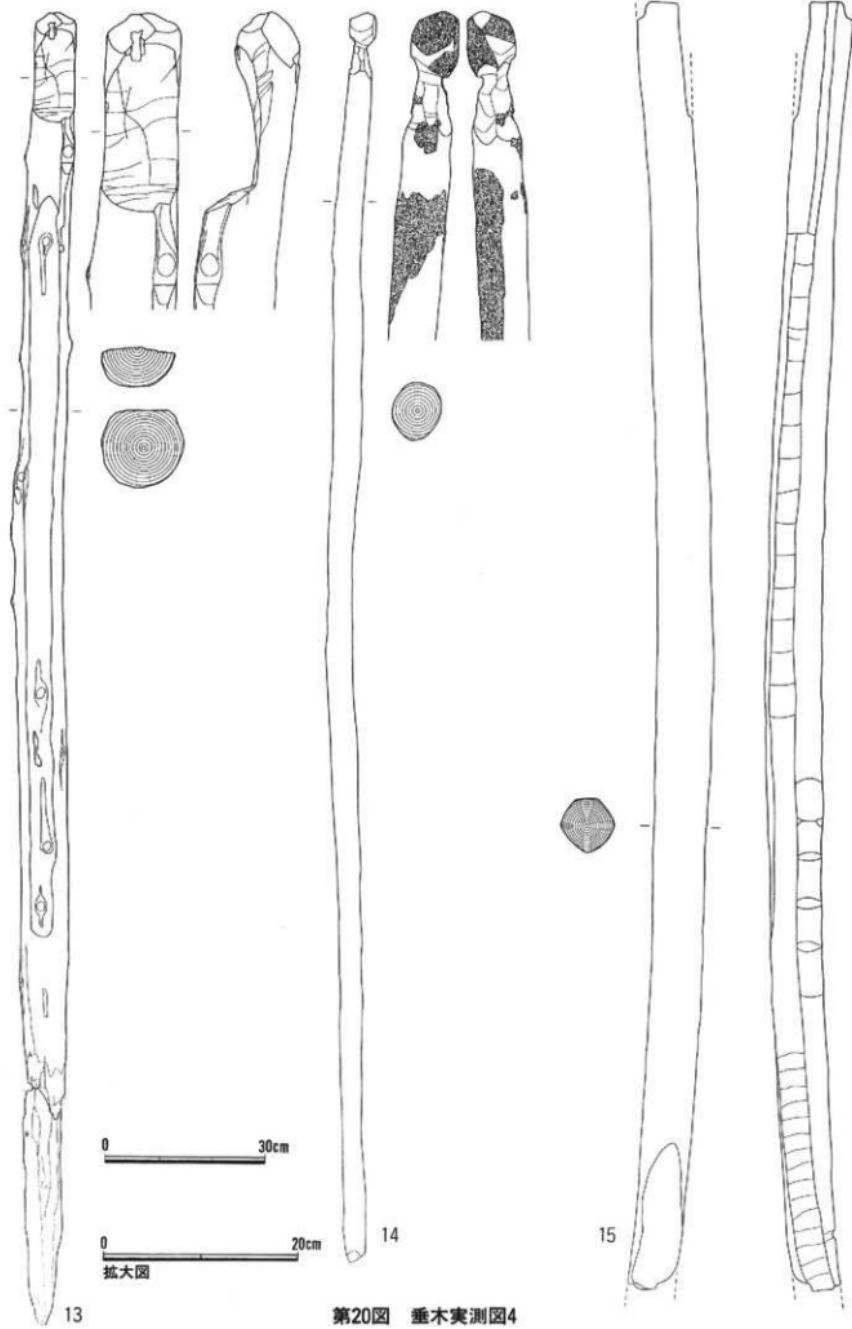
第17図 垂木実測図1



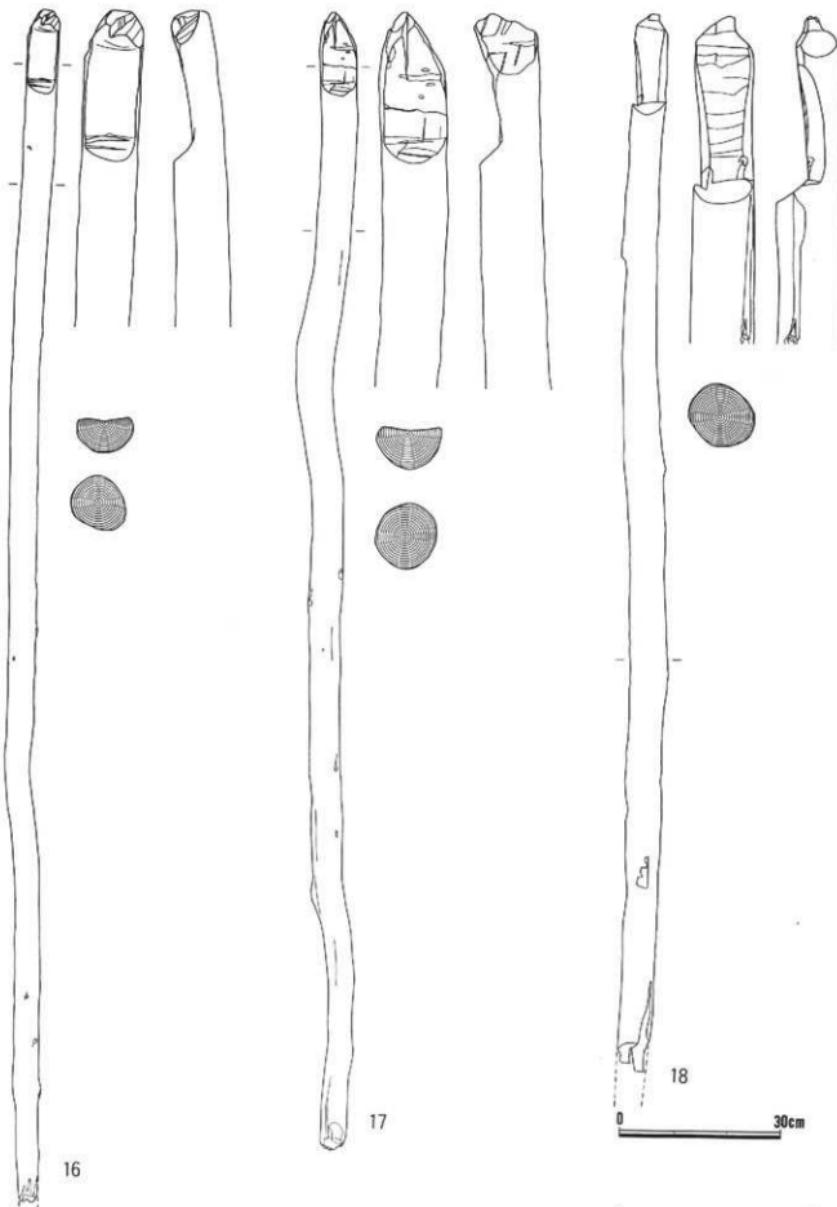
第18図 垂木実測図2



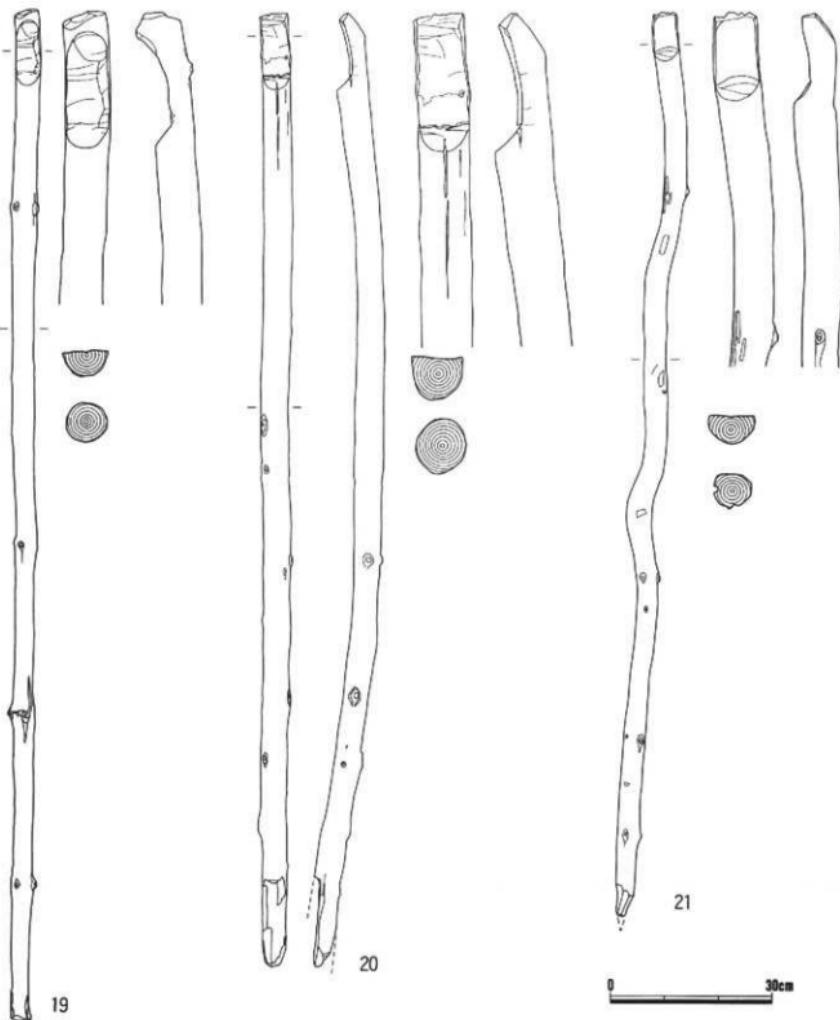
第19図 垂木実測図3



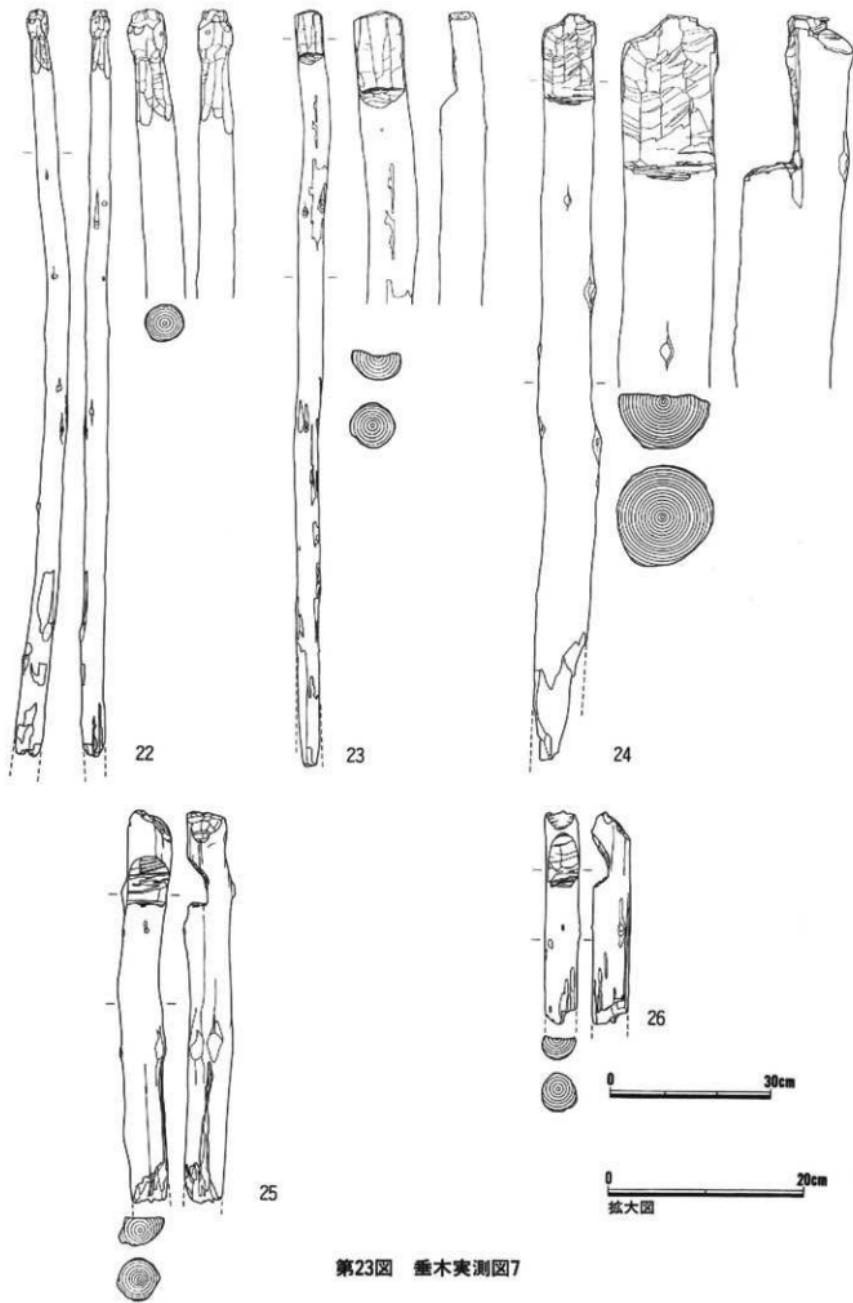
第20図 垂木実測図4



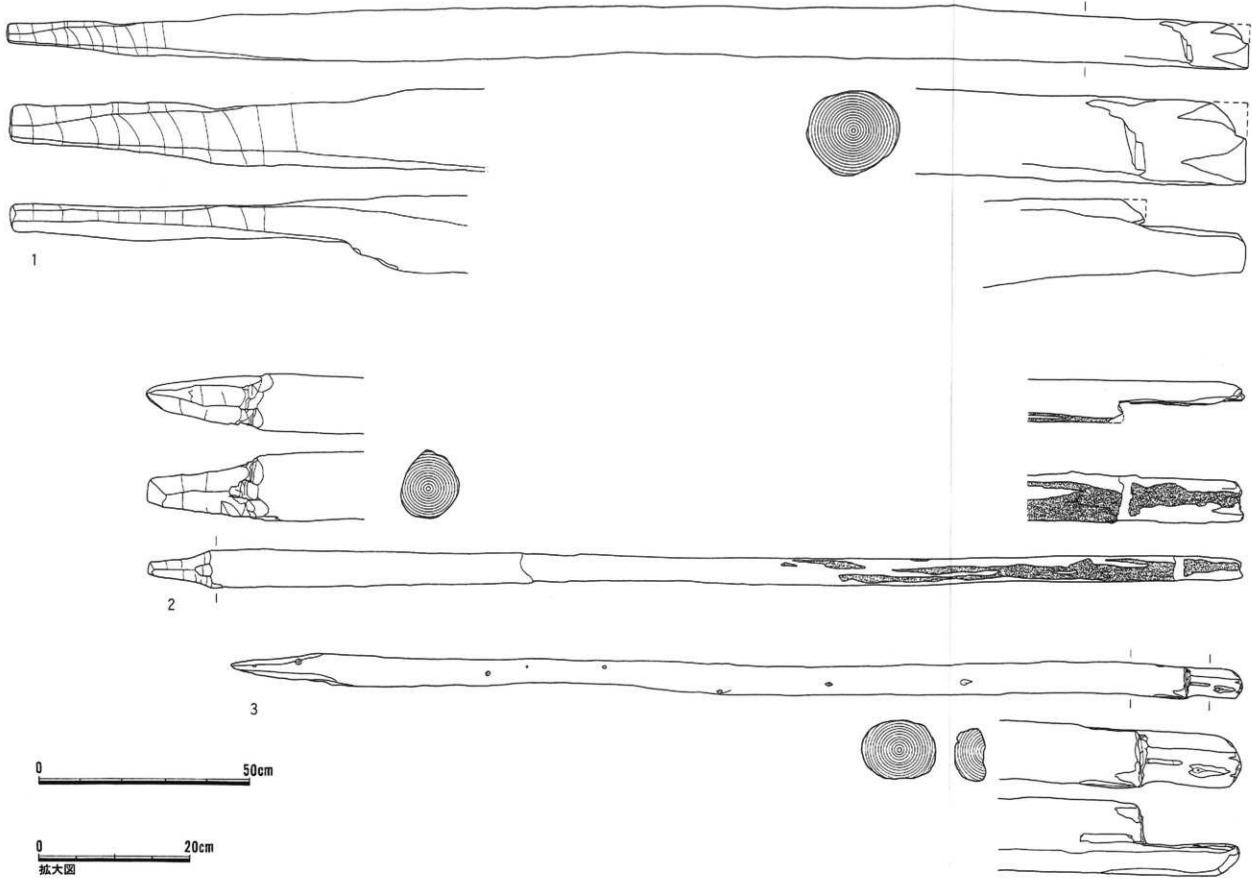
第21図 垂木実測図5



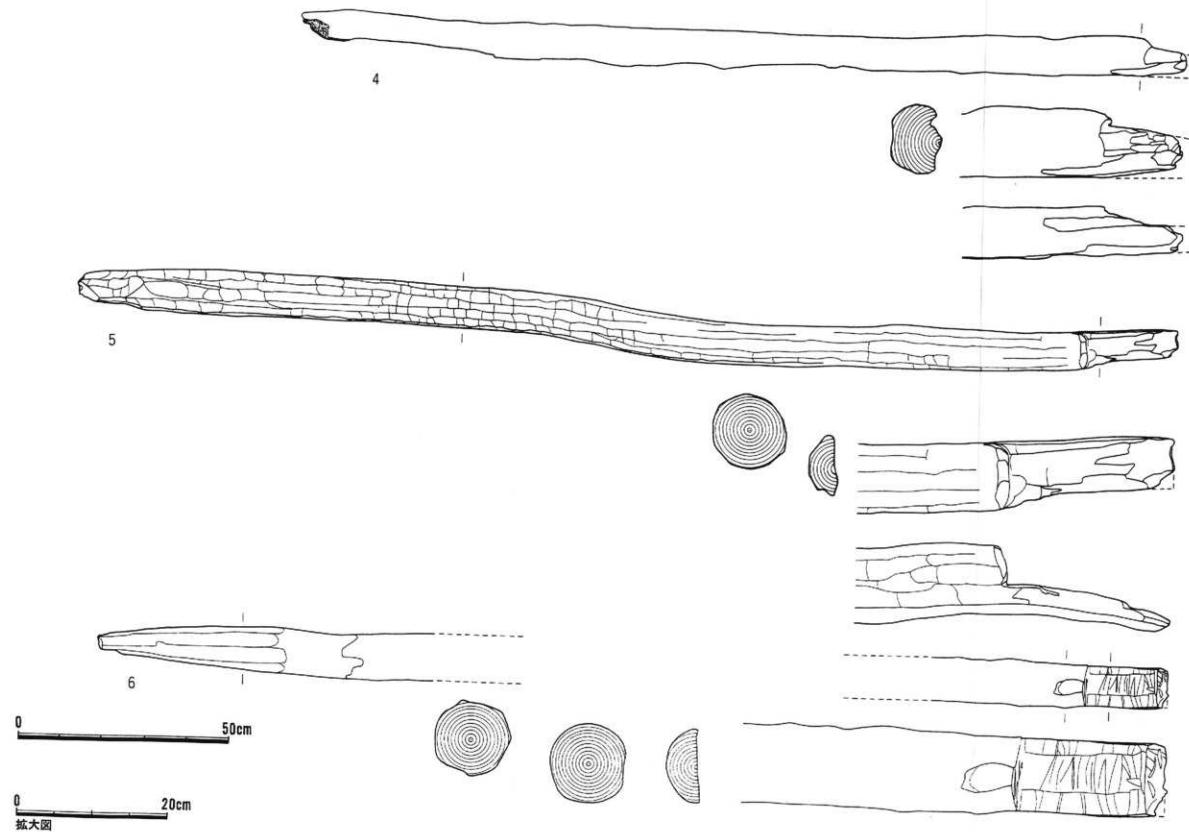
第22図 垂木実測図6



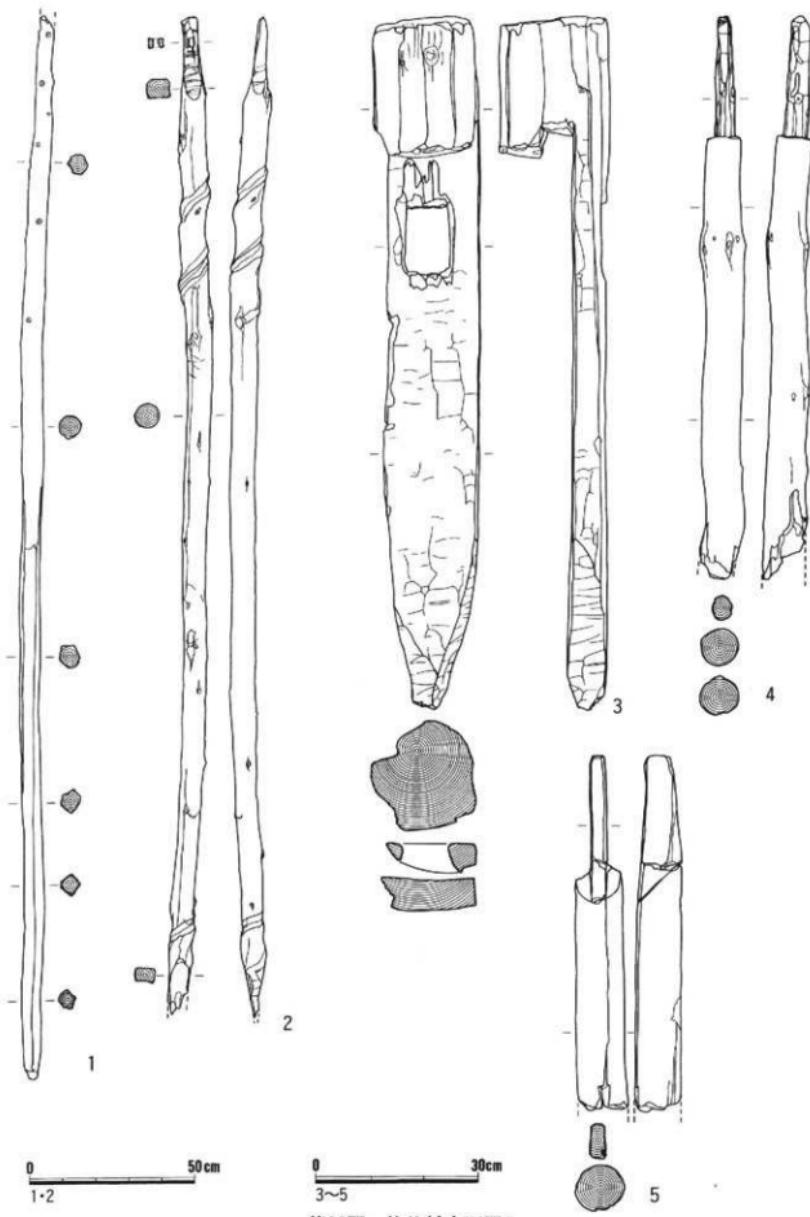
第23図 垂木実測図7



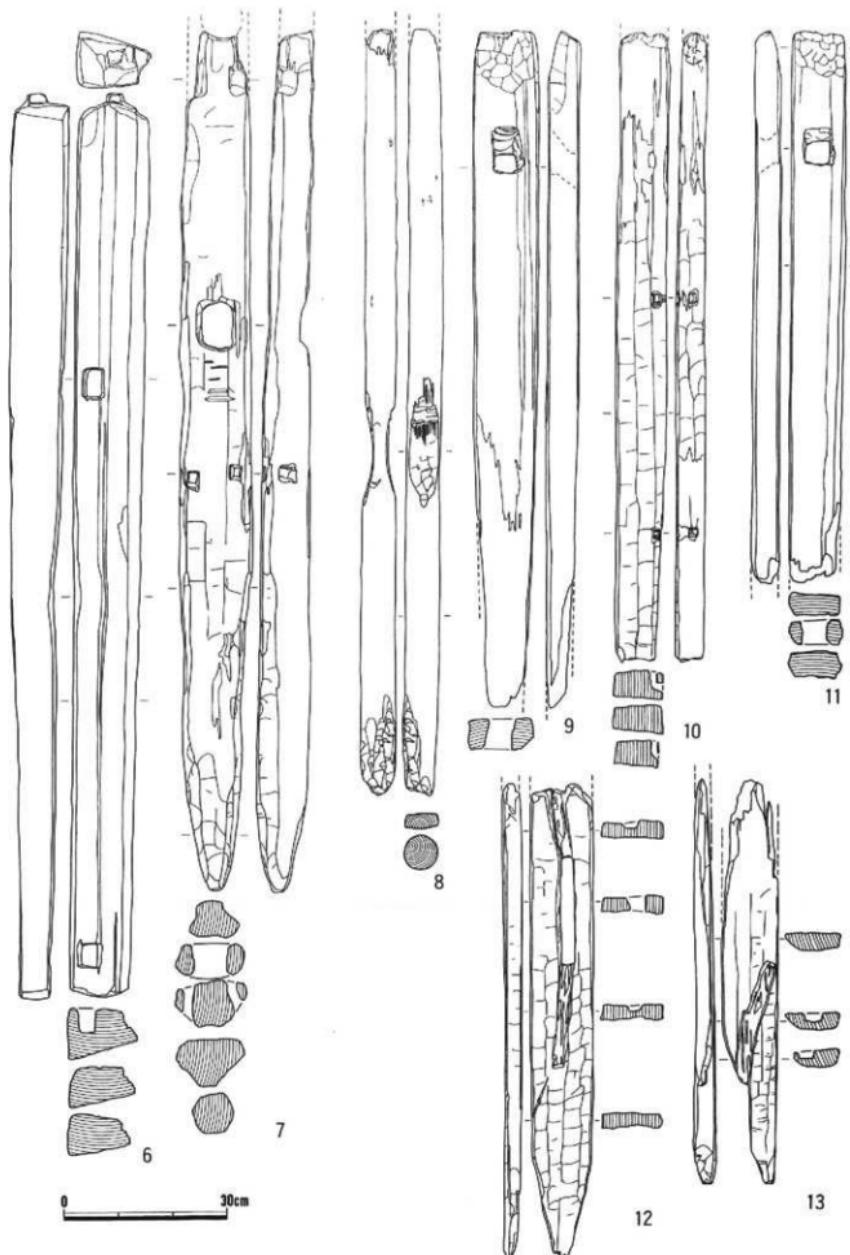
第24図 円柱実測図1



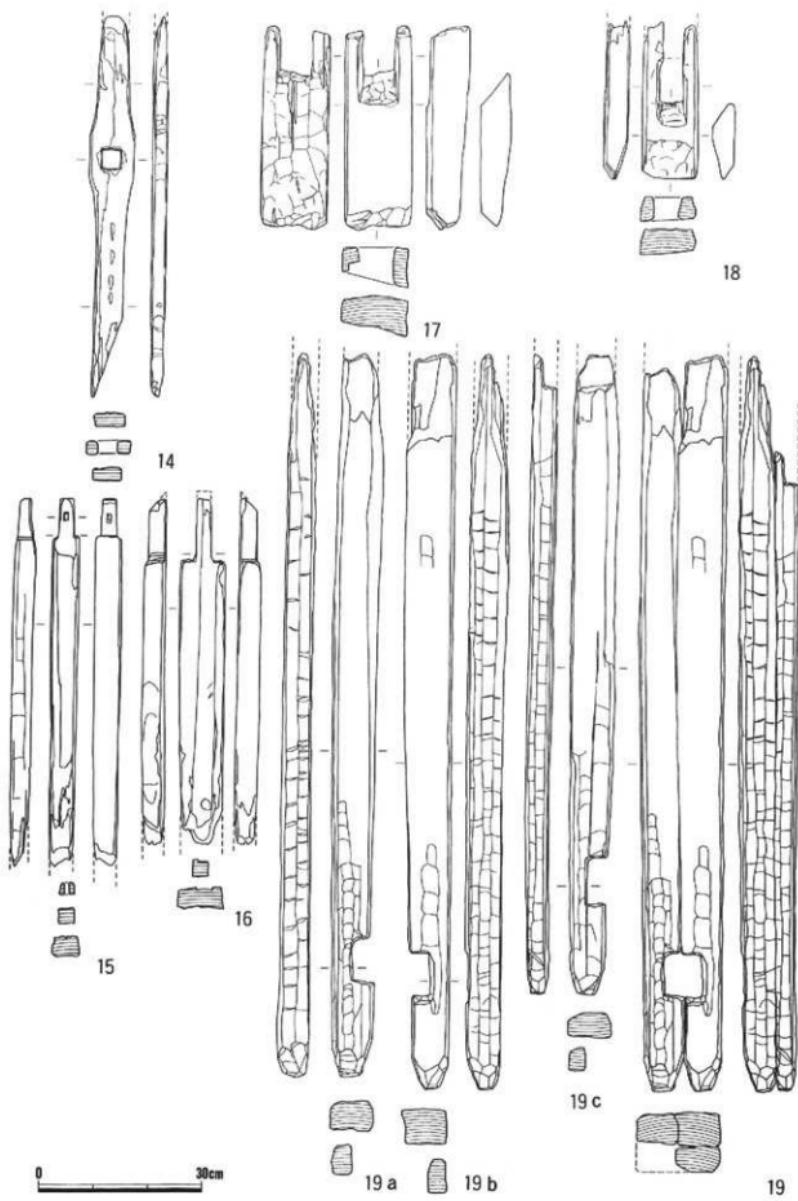
第25図 円柱実測図2



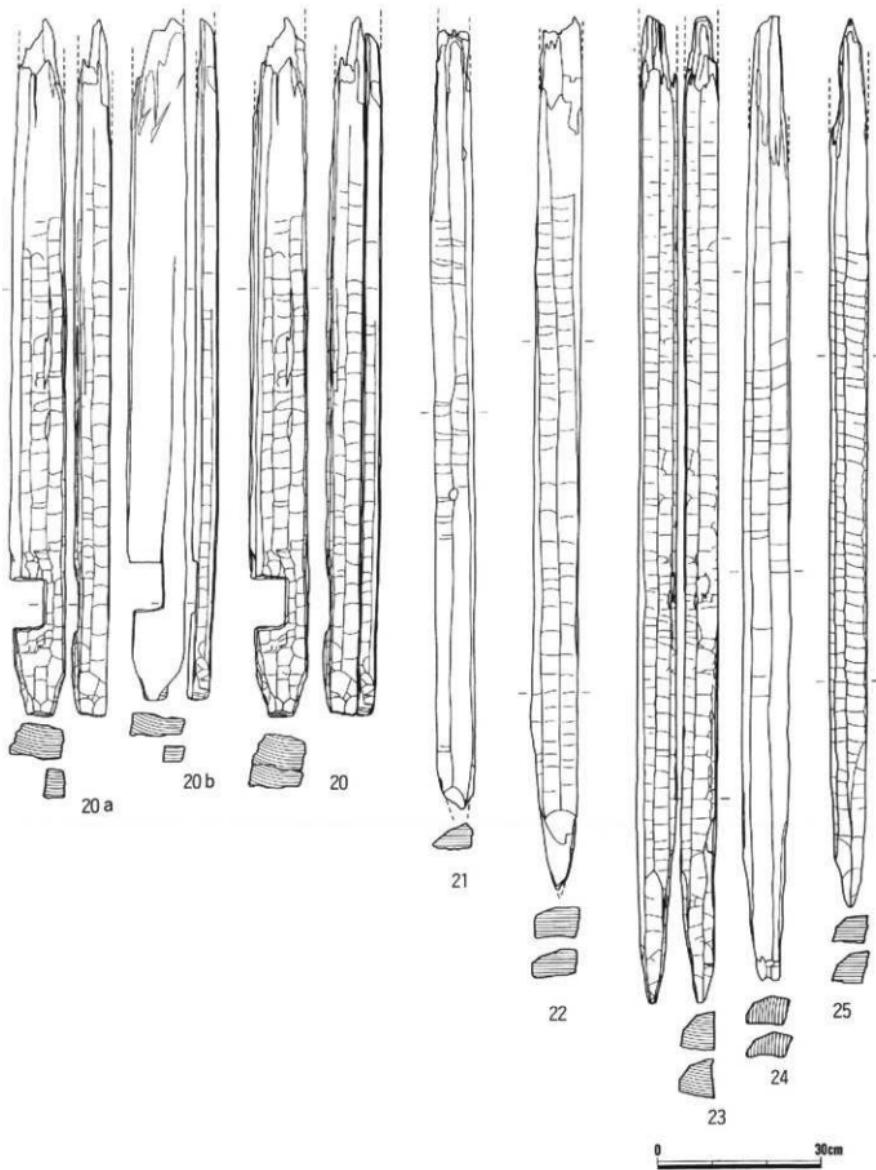
第26図 柱状材実測図1



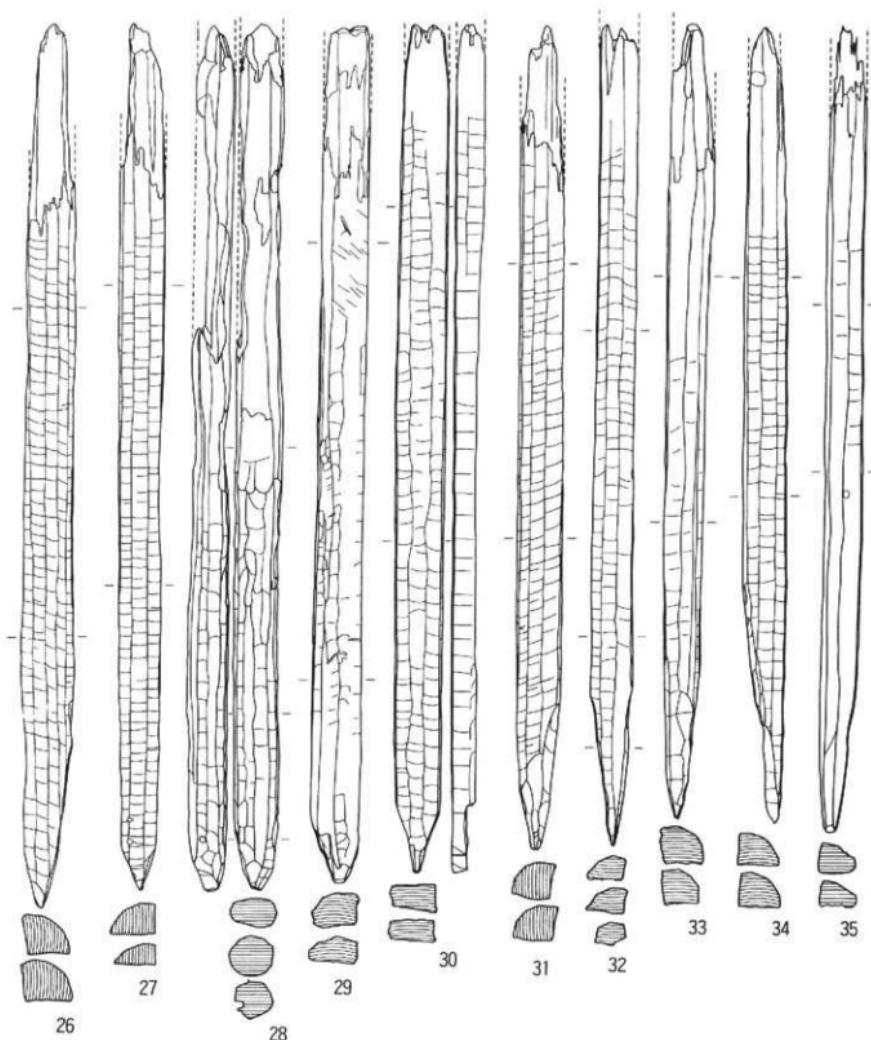
第27図 柱状材実測図2



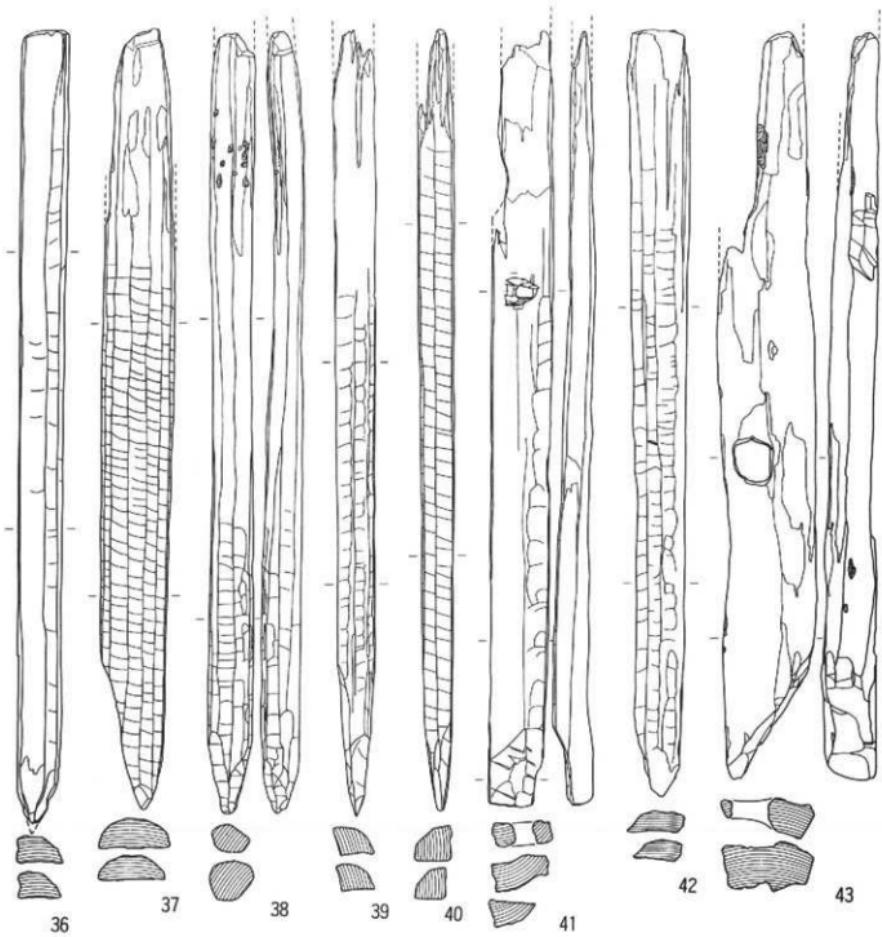
第28図 柱状材実測図3



第29図 柱状材実測図4

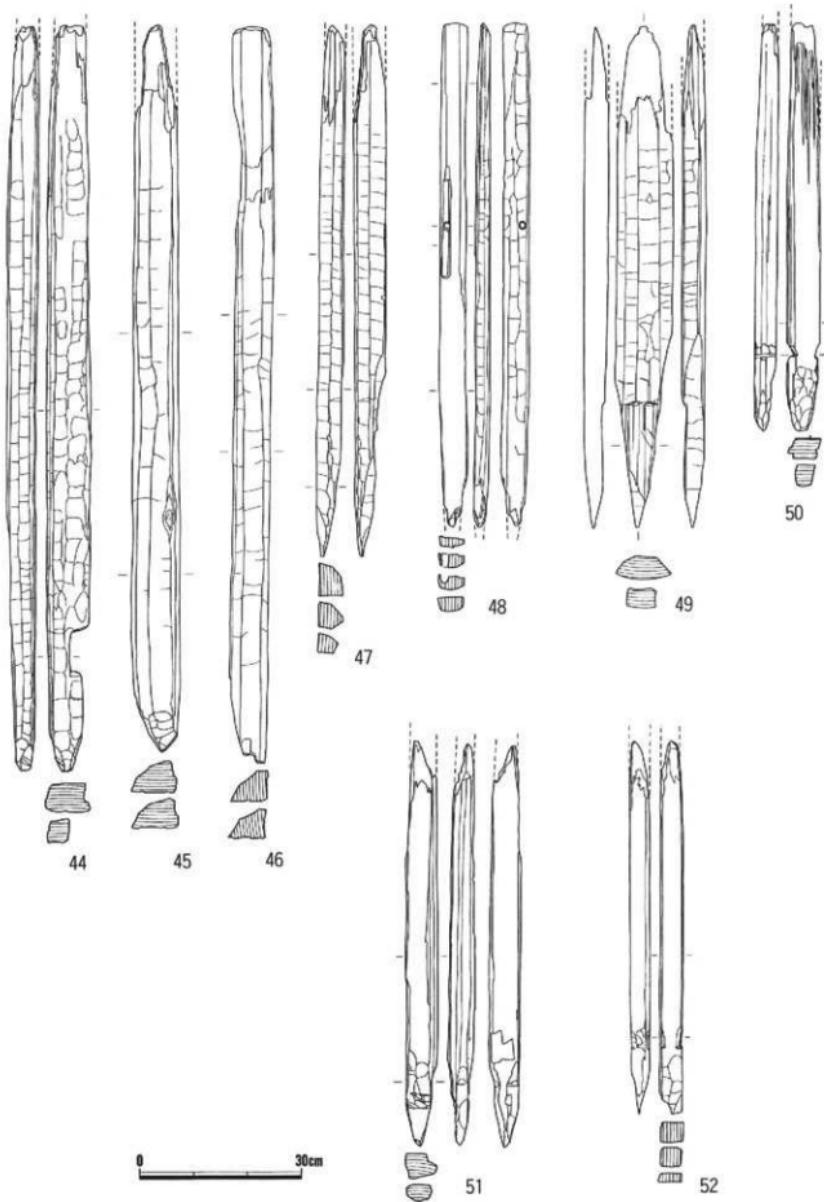


第30図 柱状材実測図5

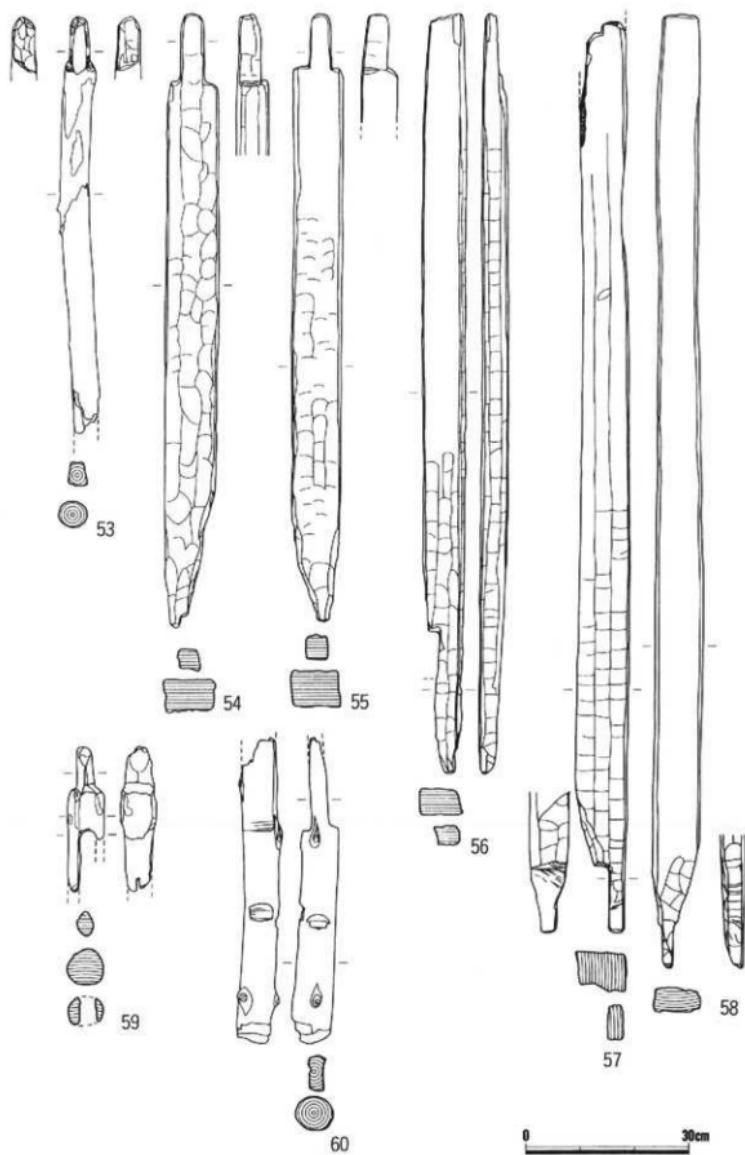


0 30cm

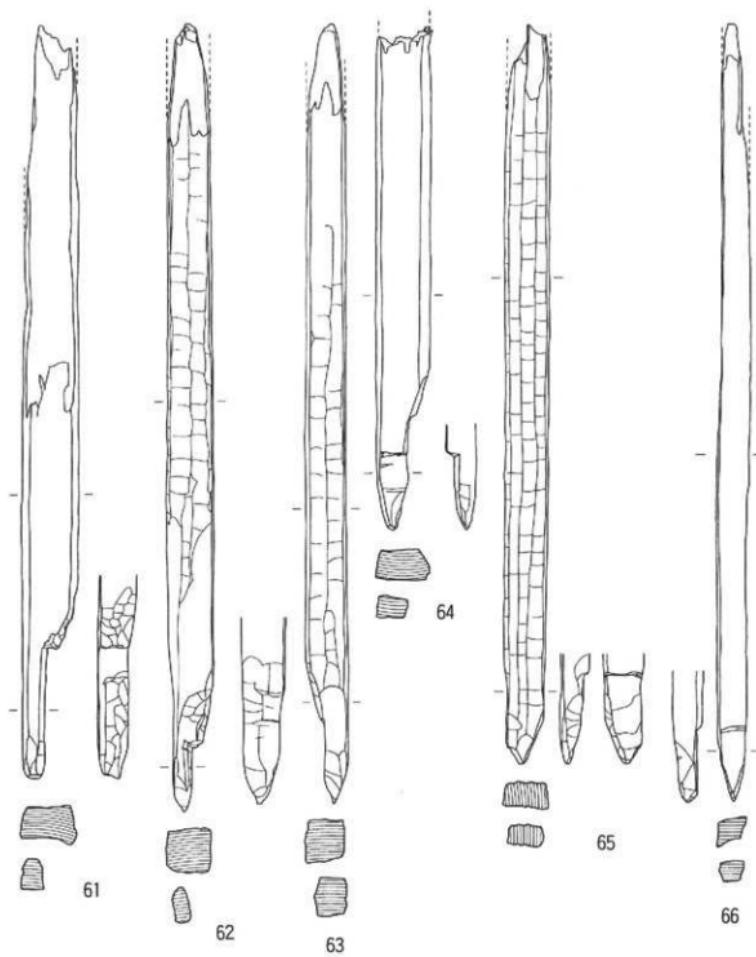
第31図 柱状材実測図6



第32図 柱状材実測図7

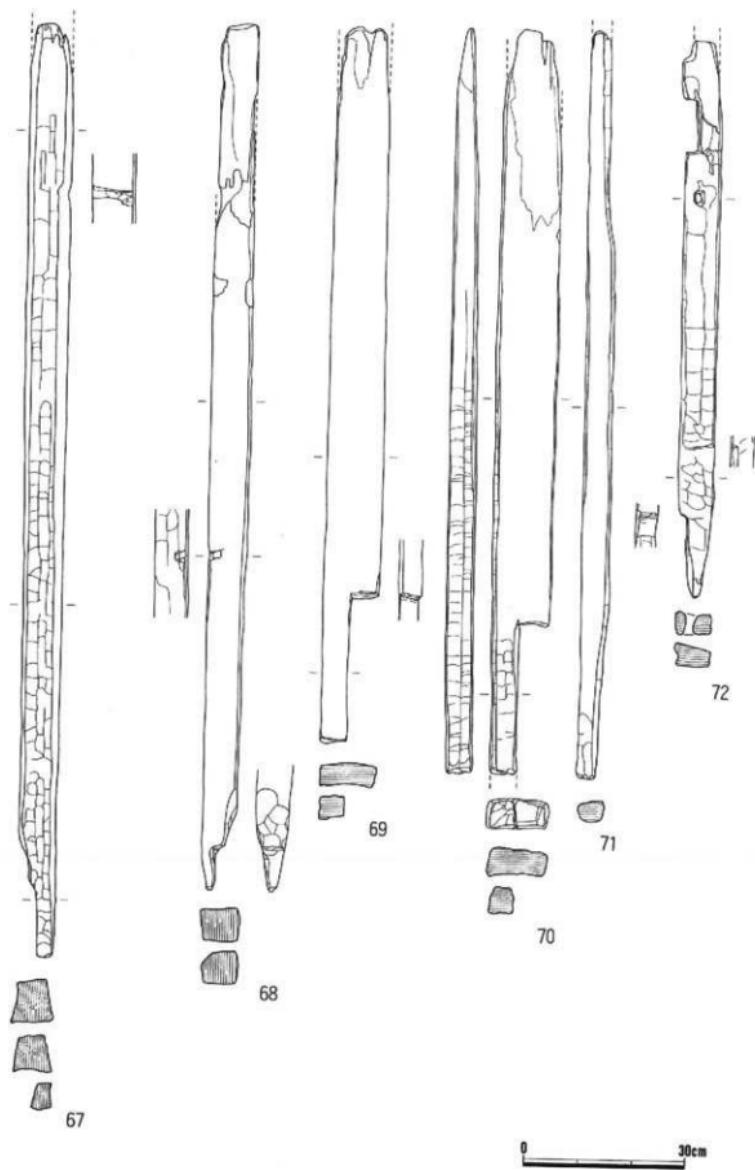


第33図 柱状材実測図8

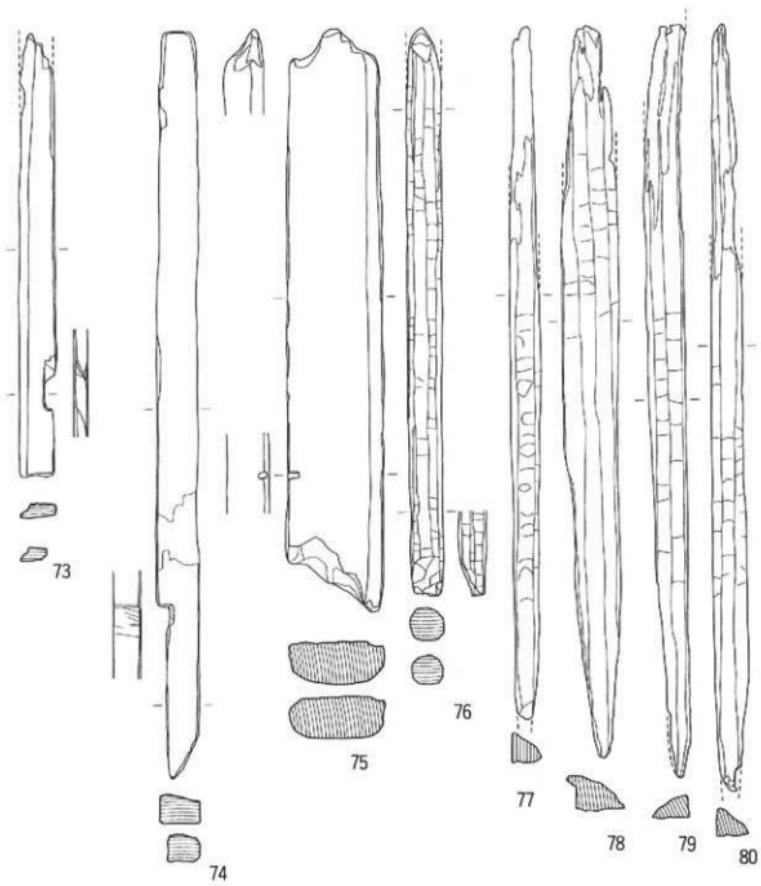


0 30cm

第34図 柱状材実測図9

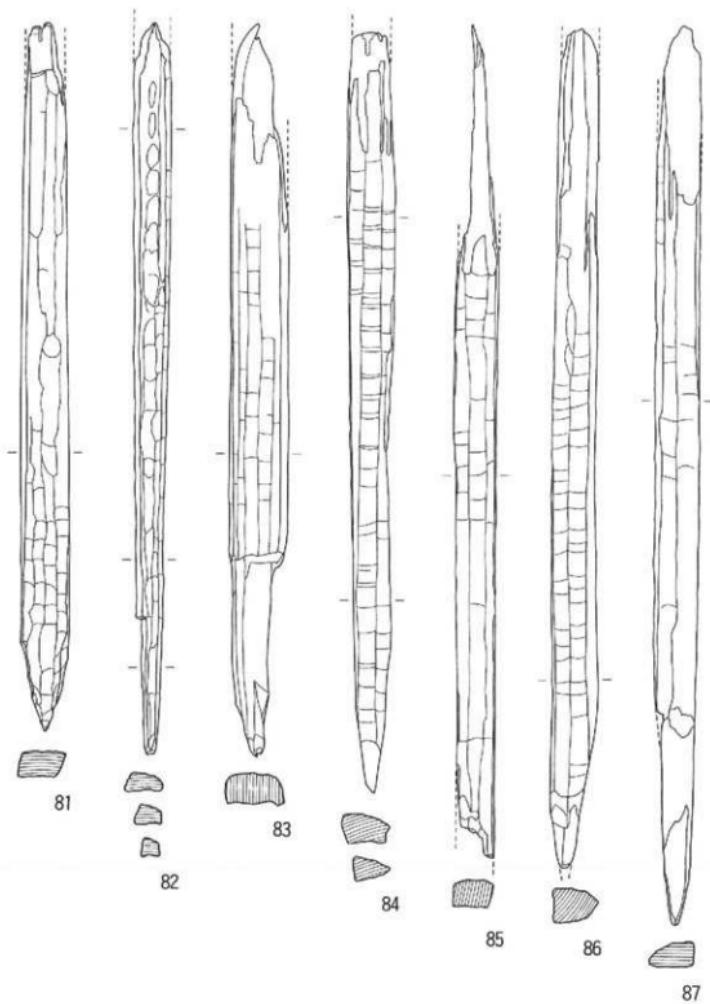


第35図 柱状材実測図10



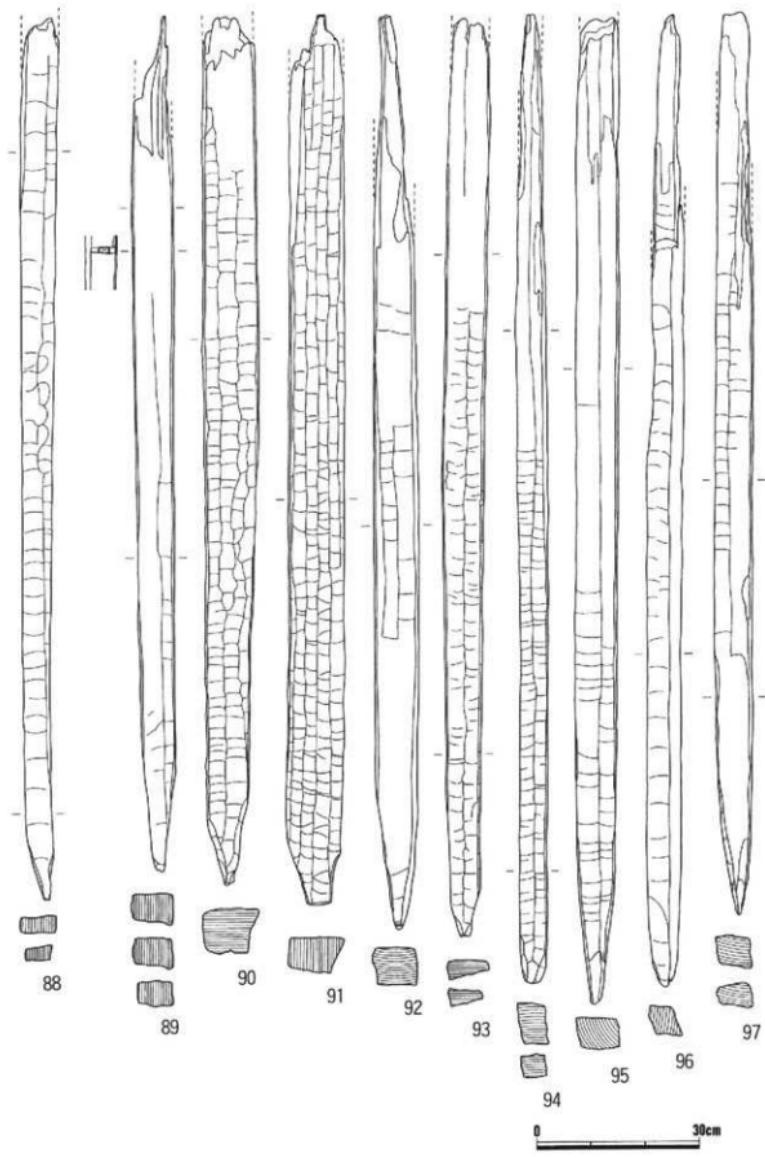
0 30cm

第36図 柱状材実測図11

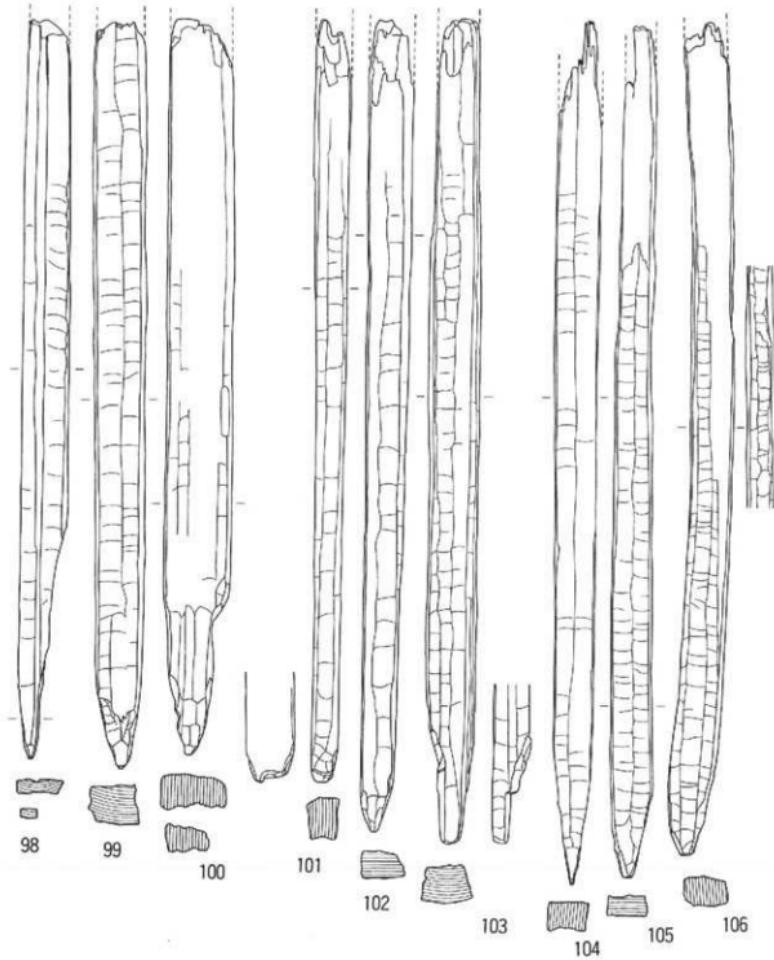


0 30cm

第37図 柱状材実測図12

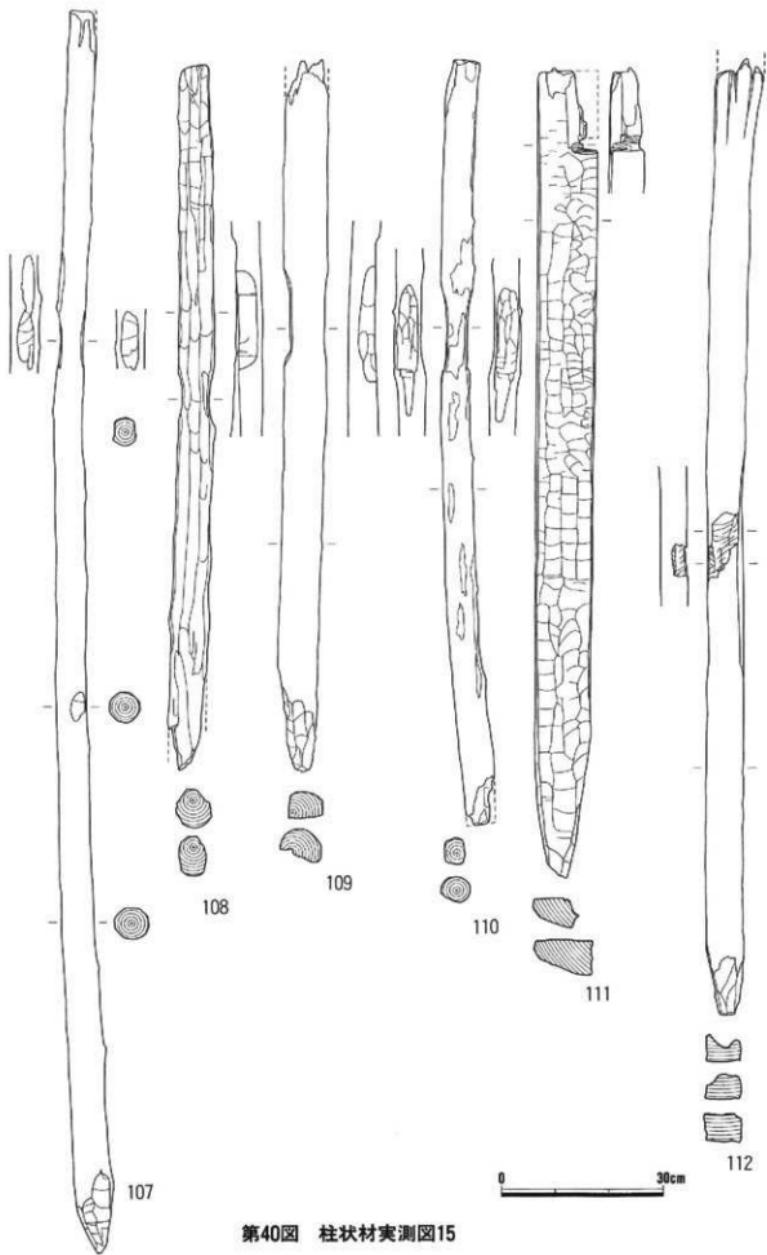


第38図 柱状材実測図13

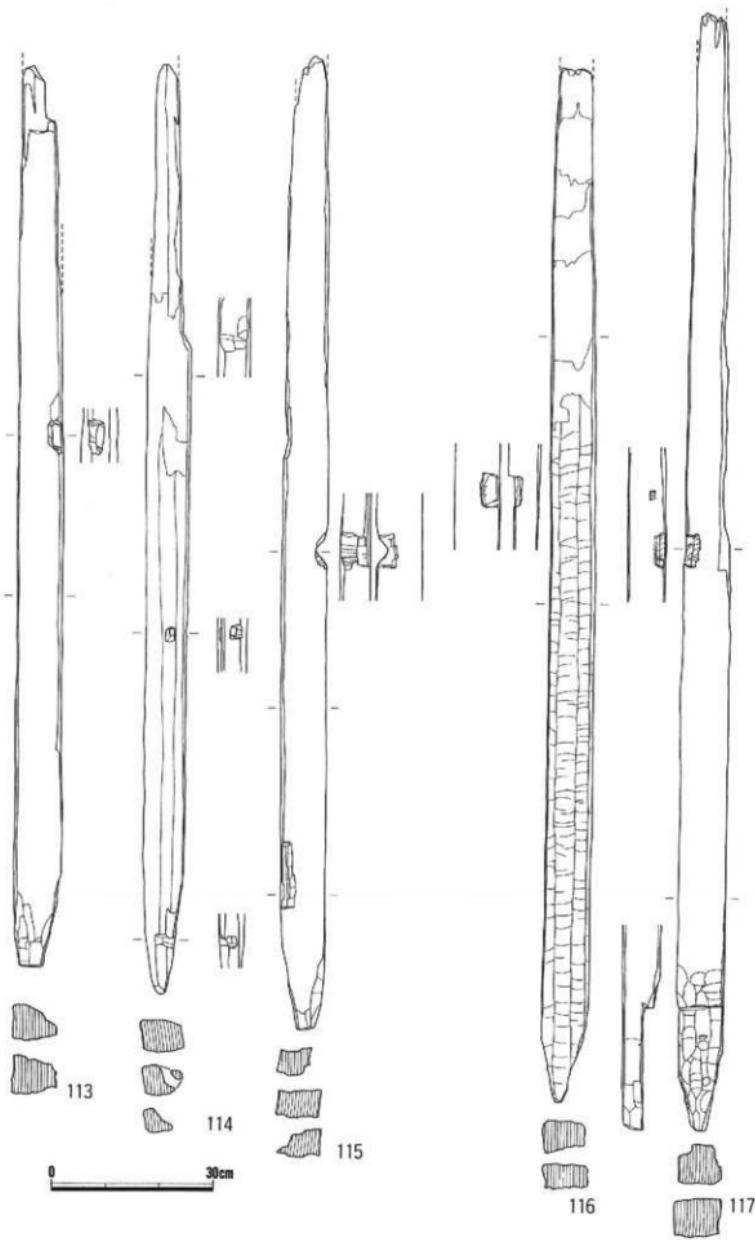


0 30cm

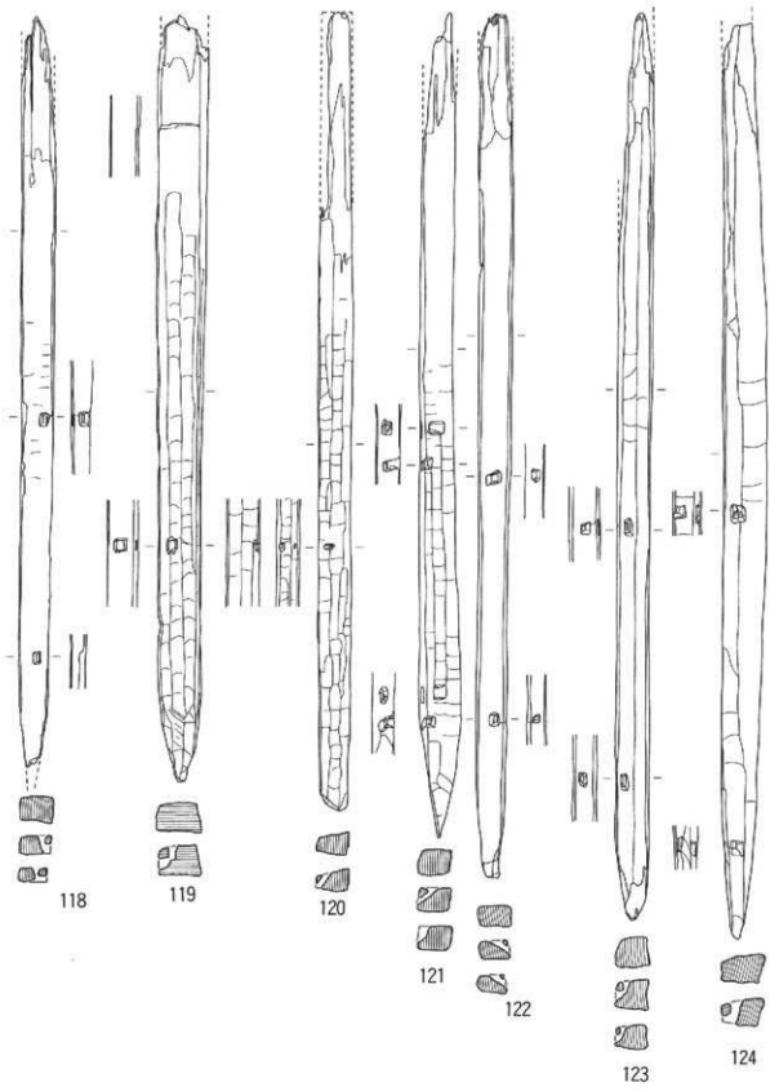
第39図 柱状材実測図14



第40図 柱状材実測図15

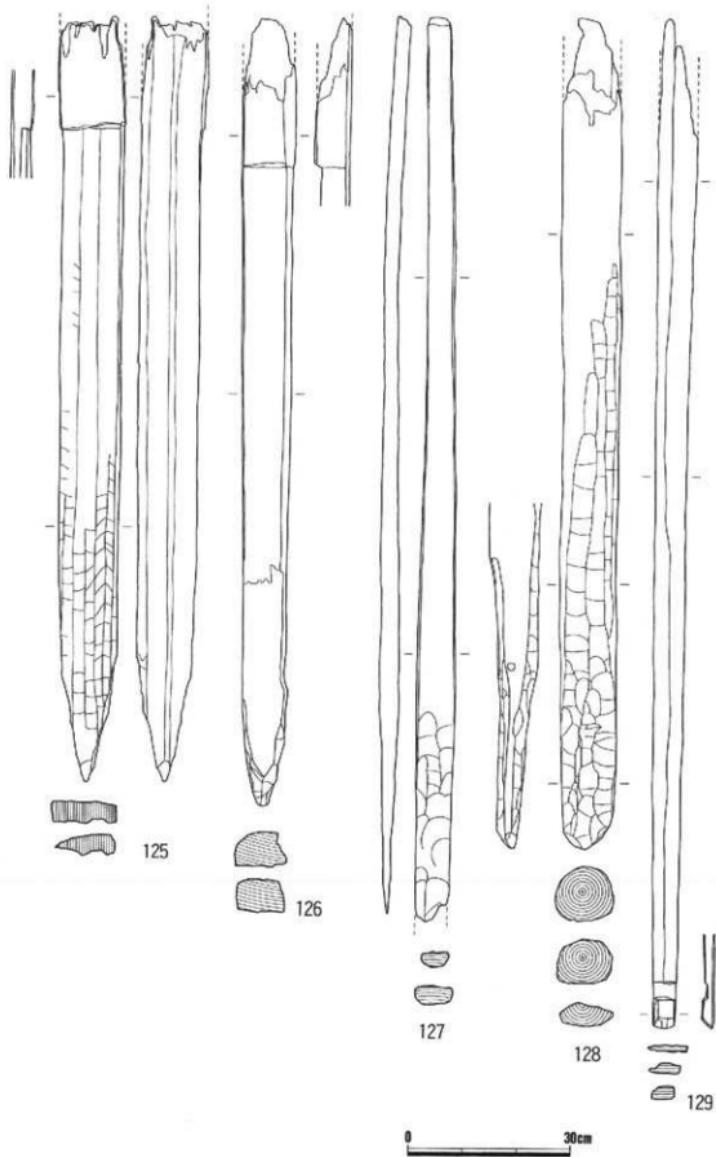


第41図 柱状材実測図16

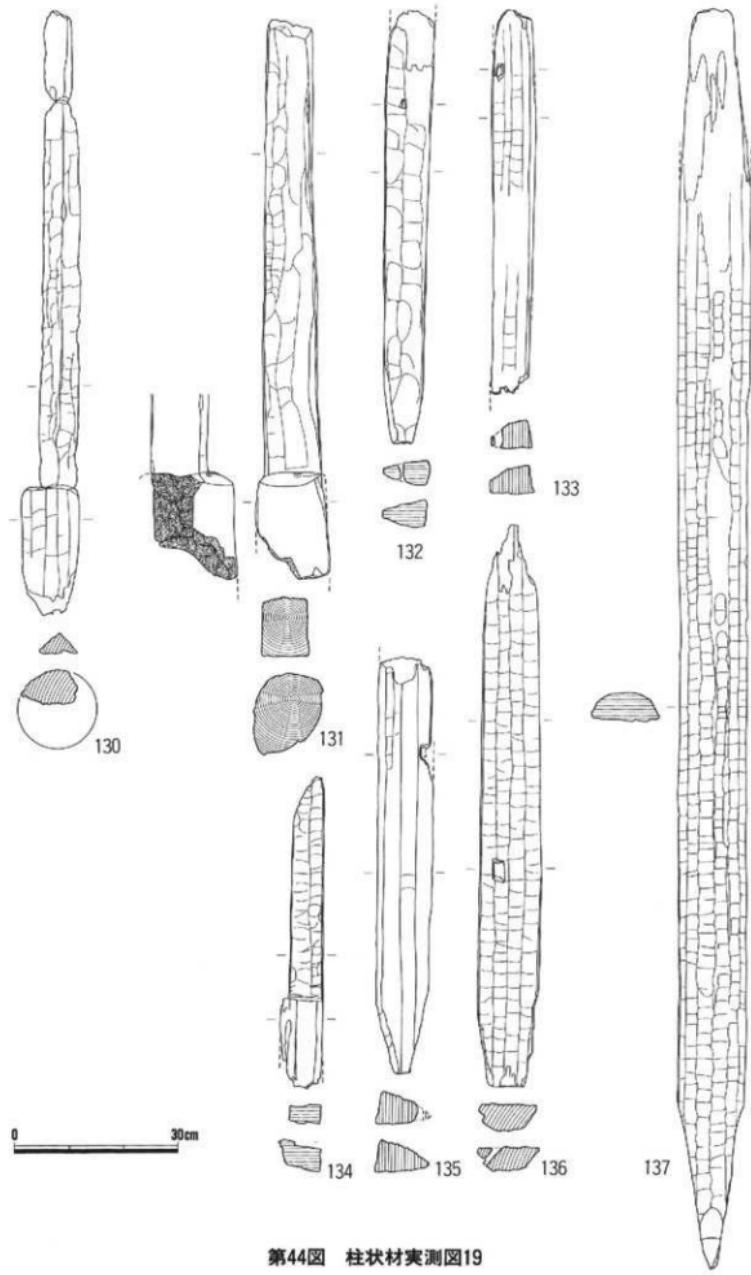


0 30cm

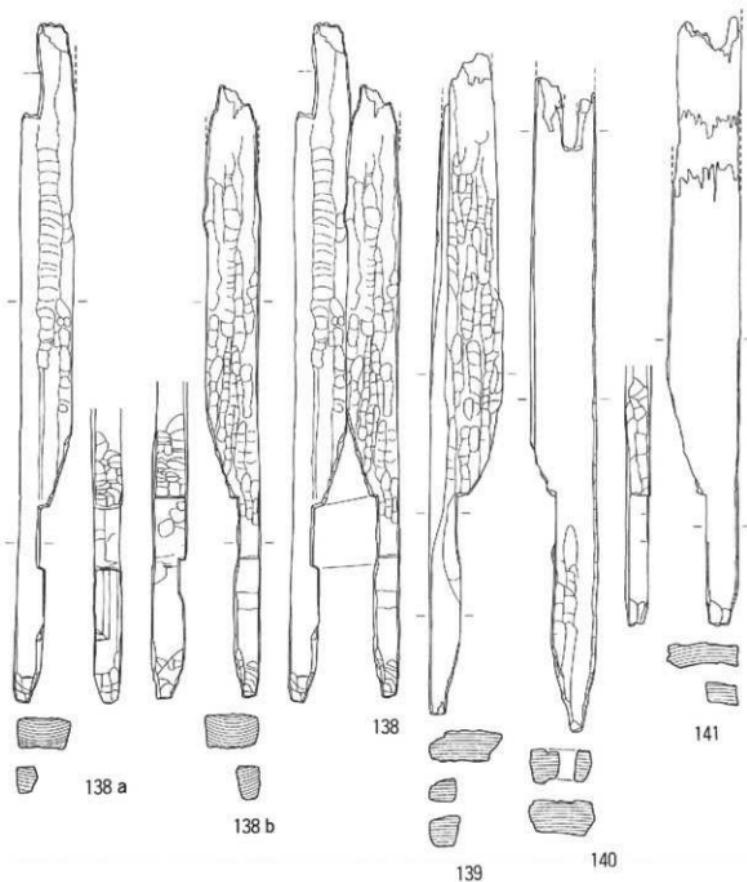
第42図 柱状材実測図17



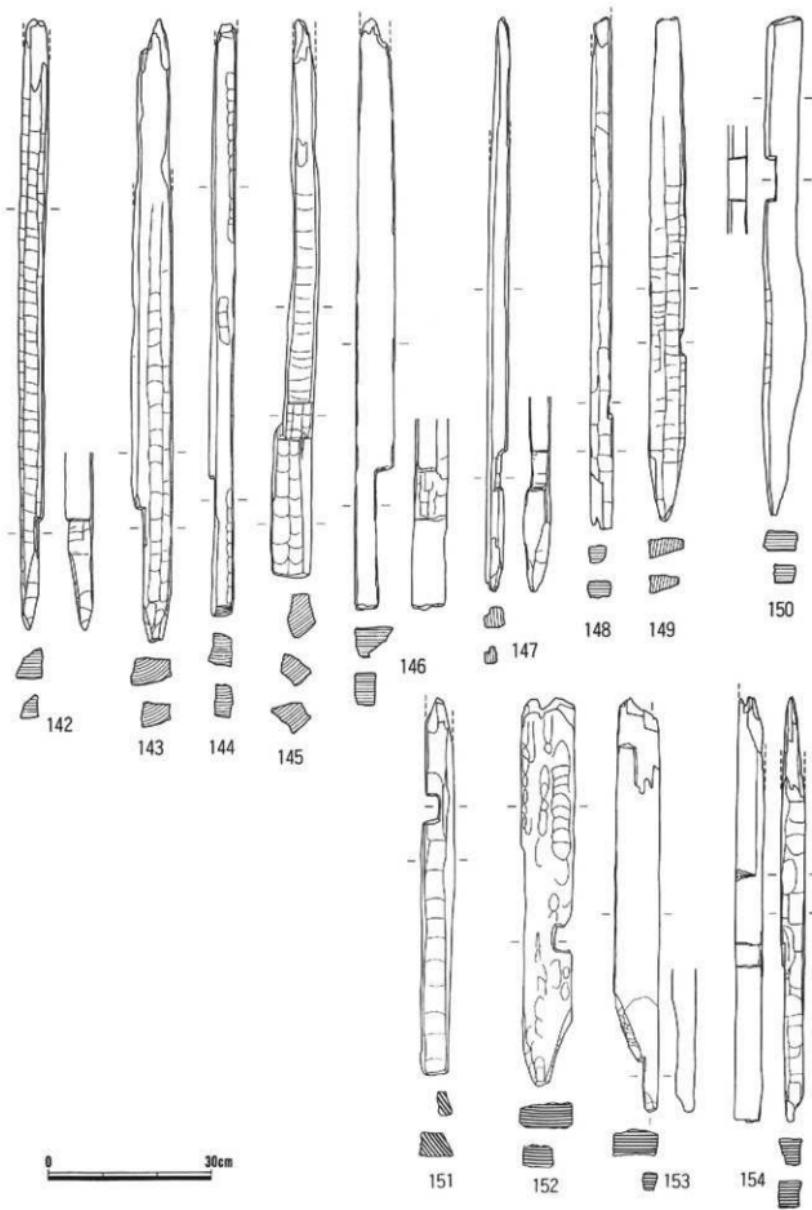
第43図 柱状材実測図18



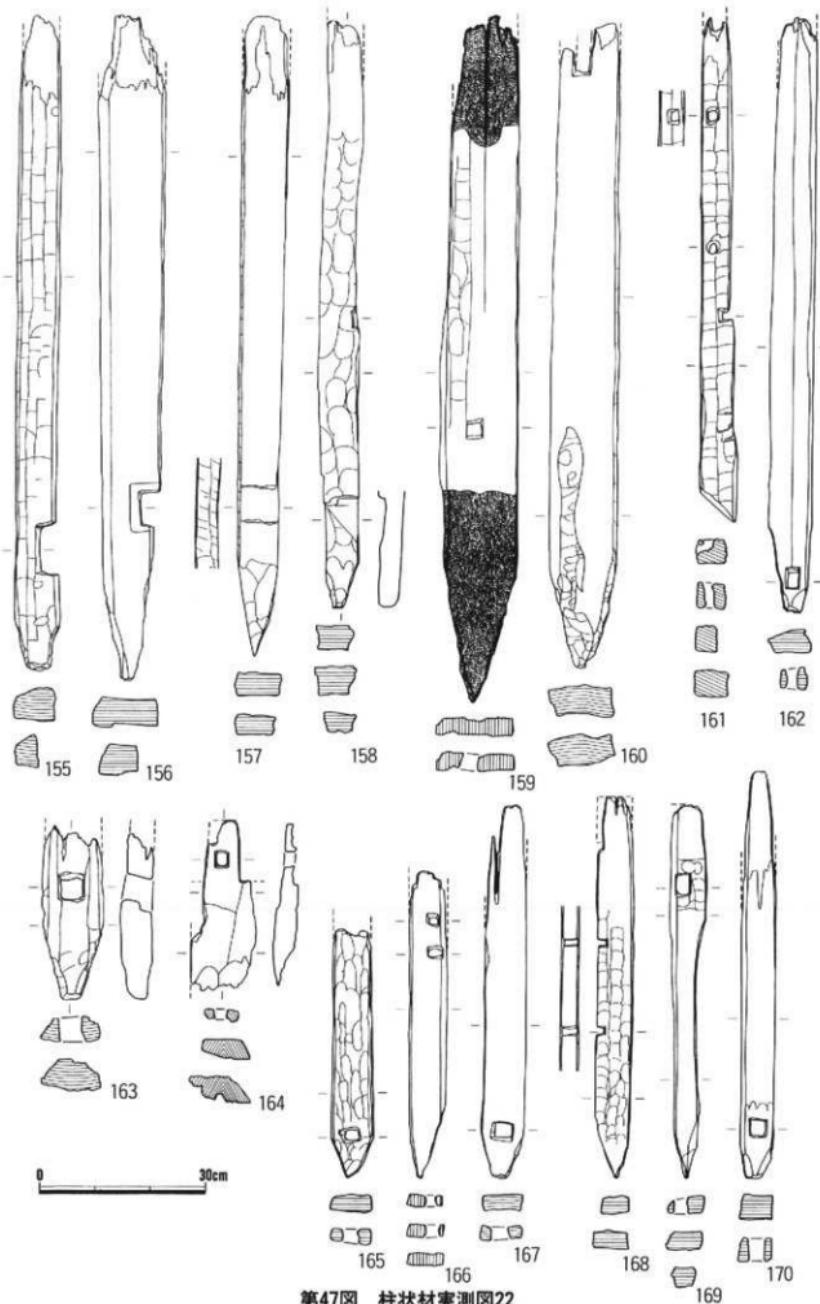
第44図 柱状材実測図19



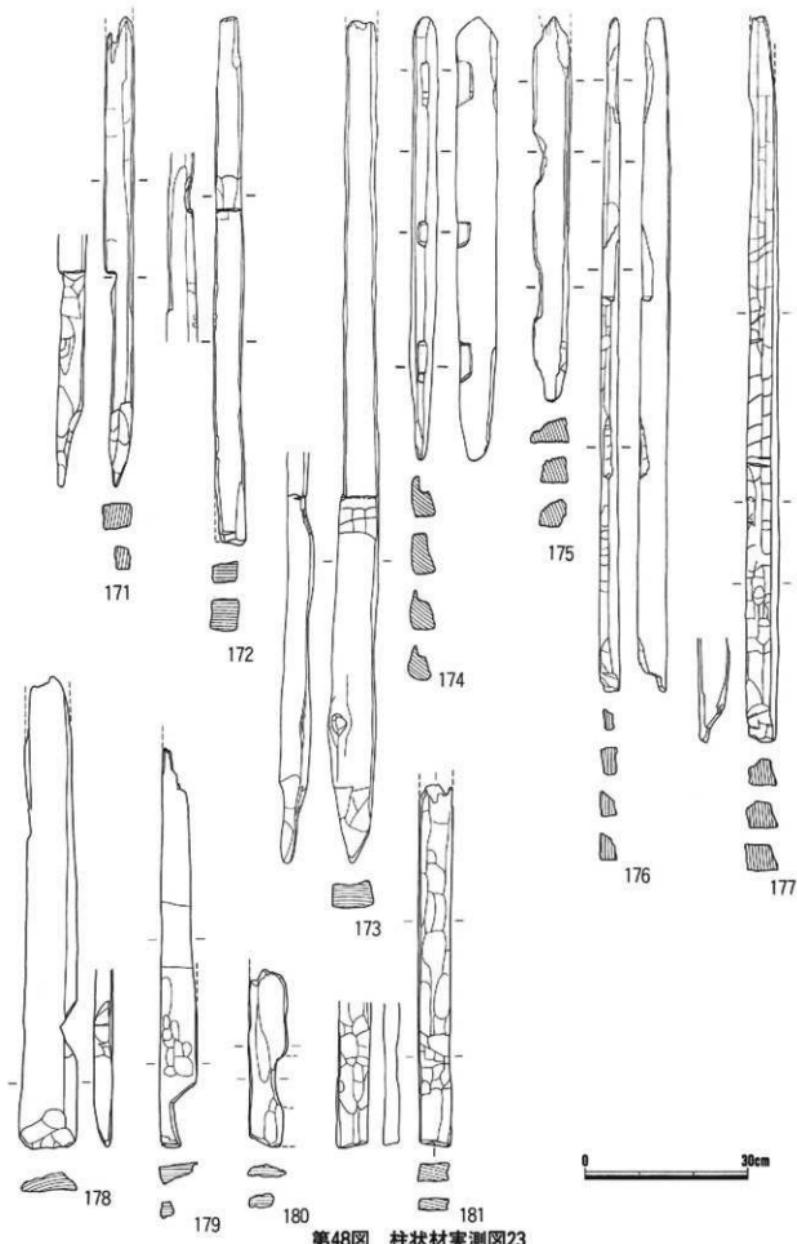
第45図 柱状材実測図20



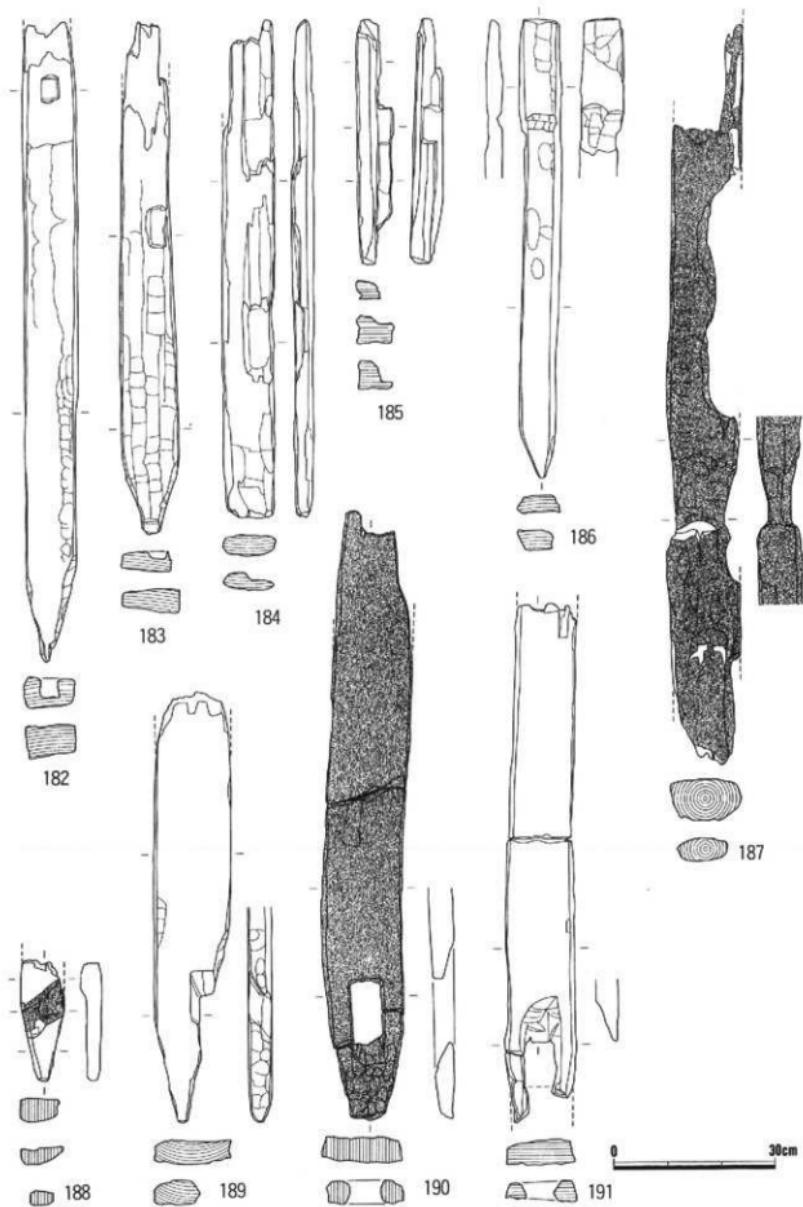
第46図 柱状材実測図21



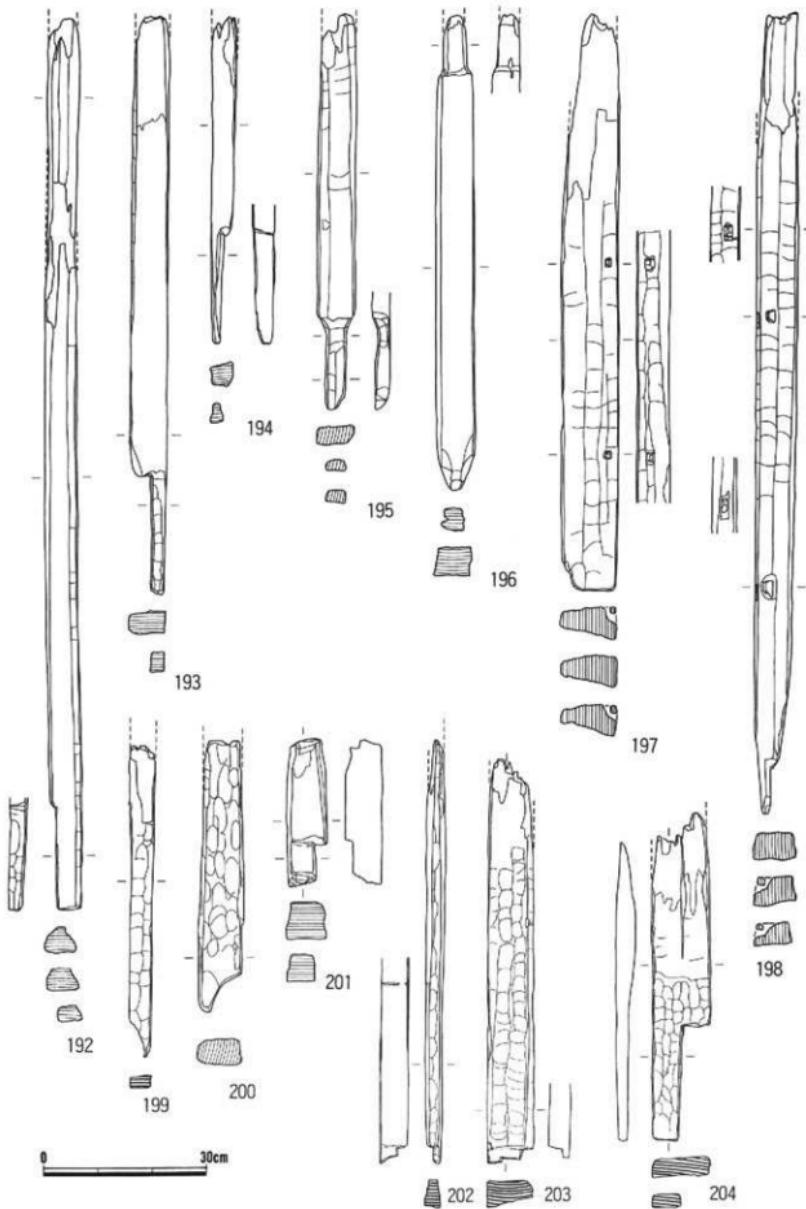
第47図 柱状材実測図22



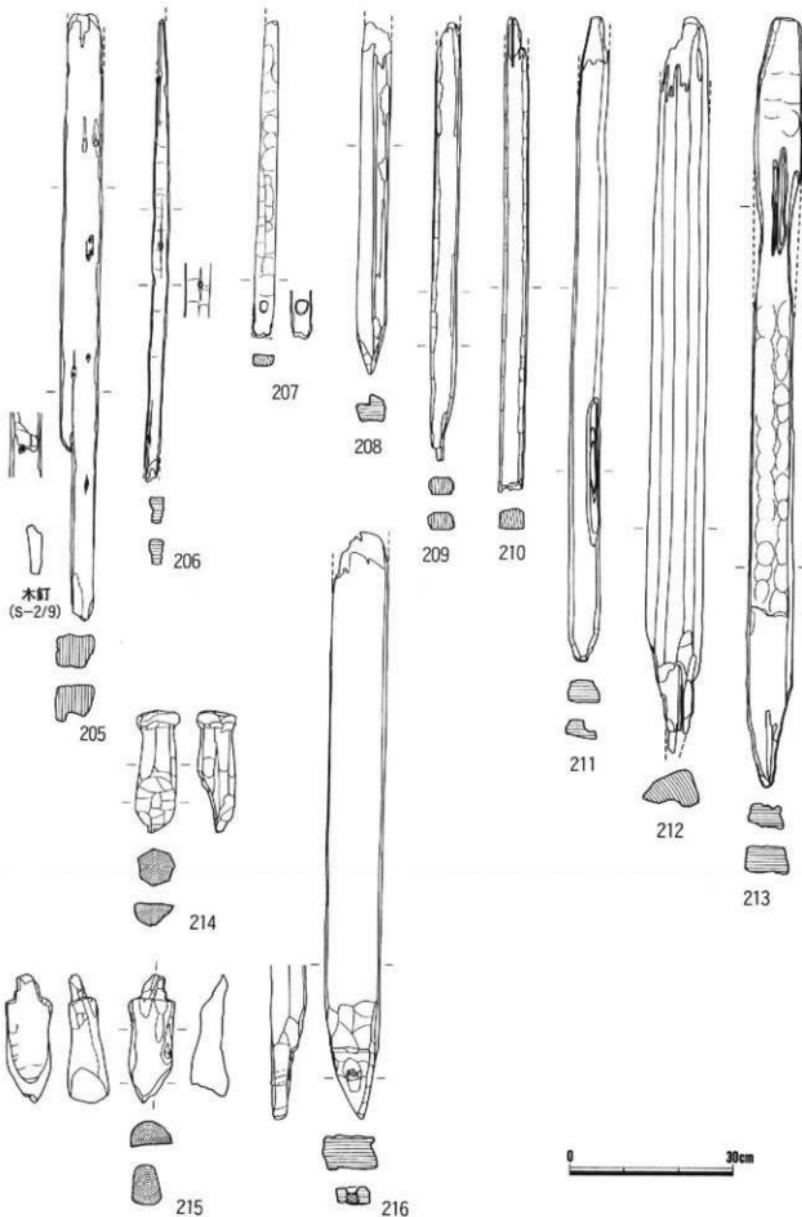
第48図 柱状材実測図23



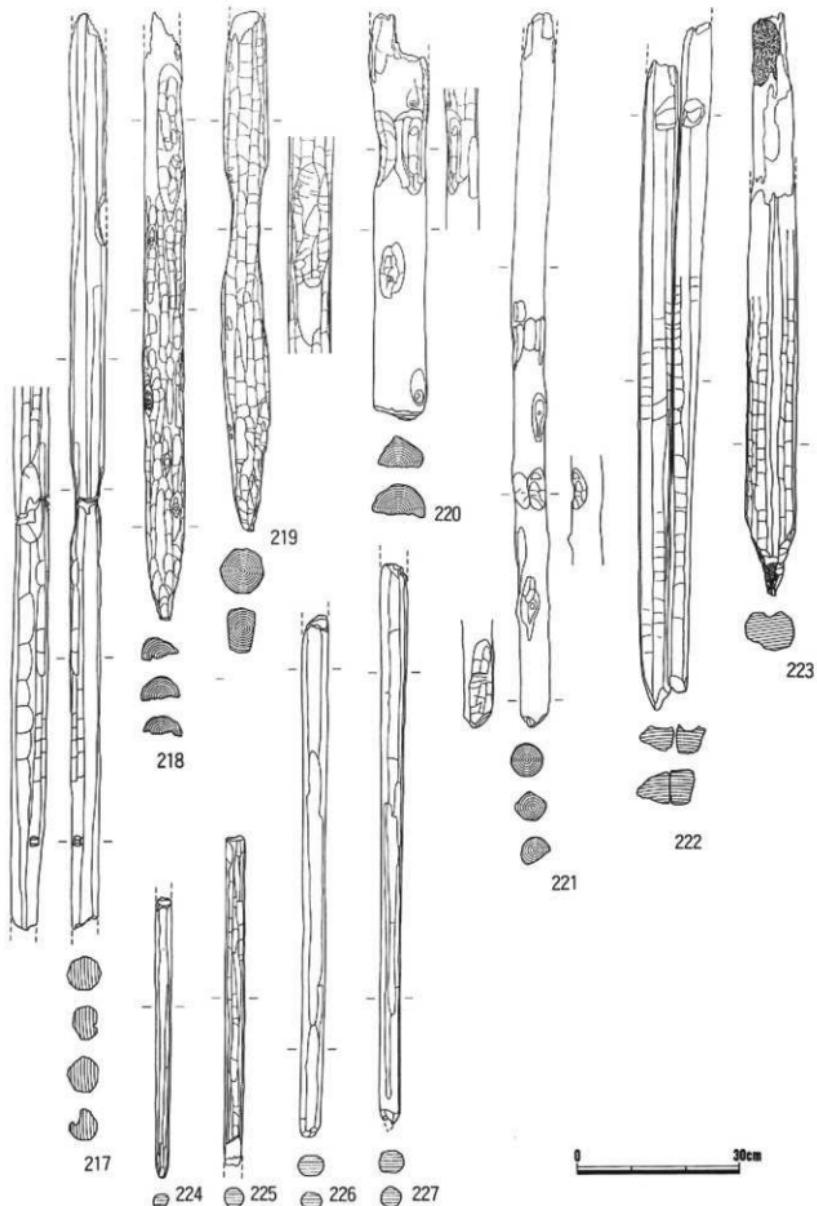
第49図 柱状材実測図24



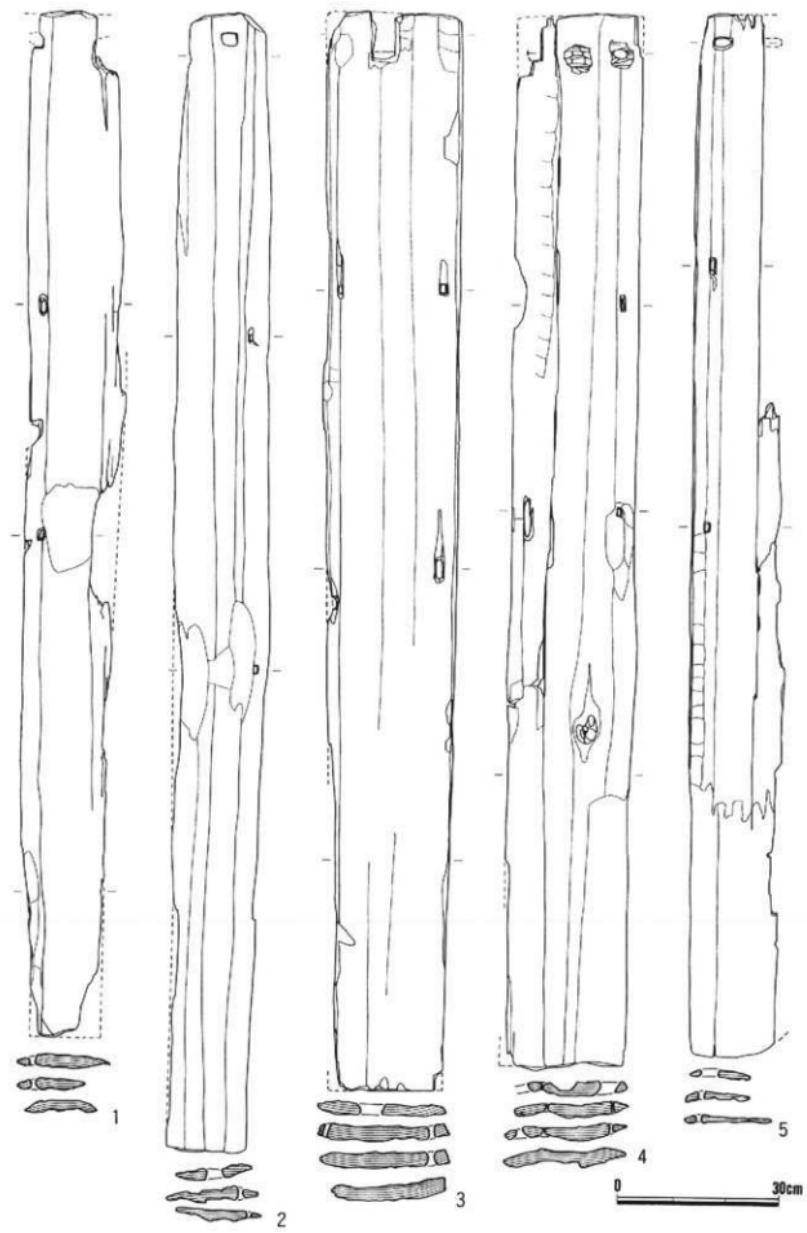
第50図 柱状材実測図25



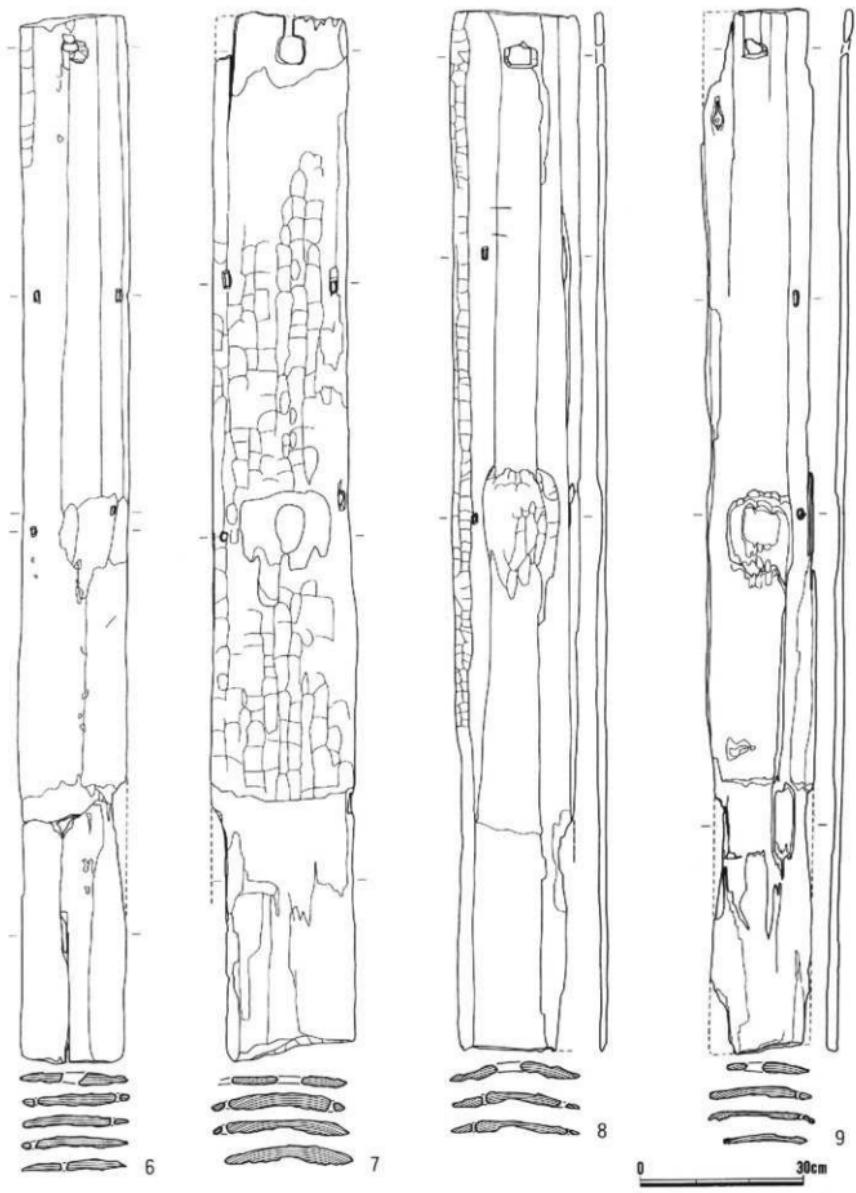
第51図 柱状材実測図26



第52図 柱状材実測図27



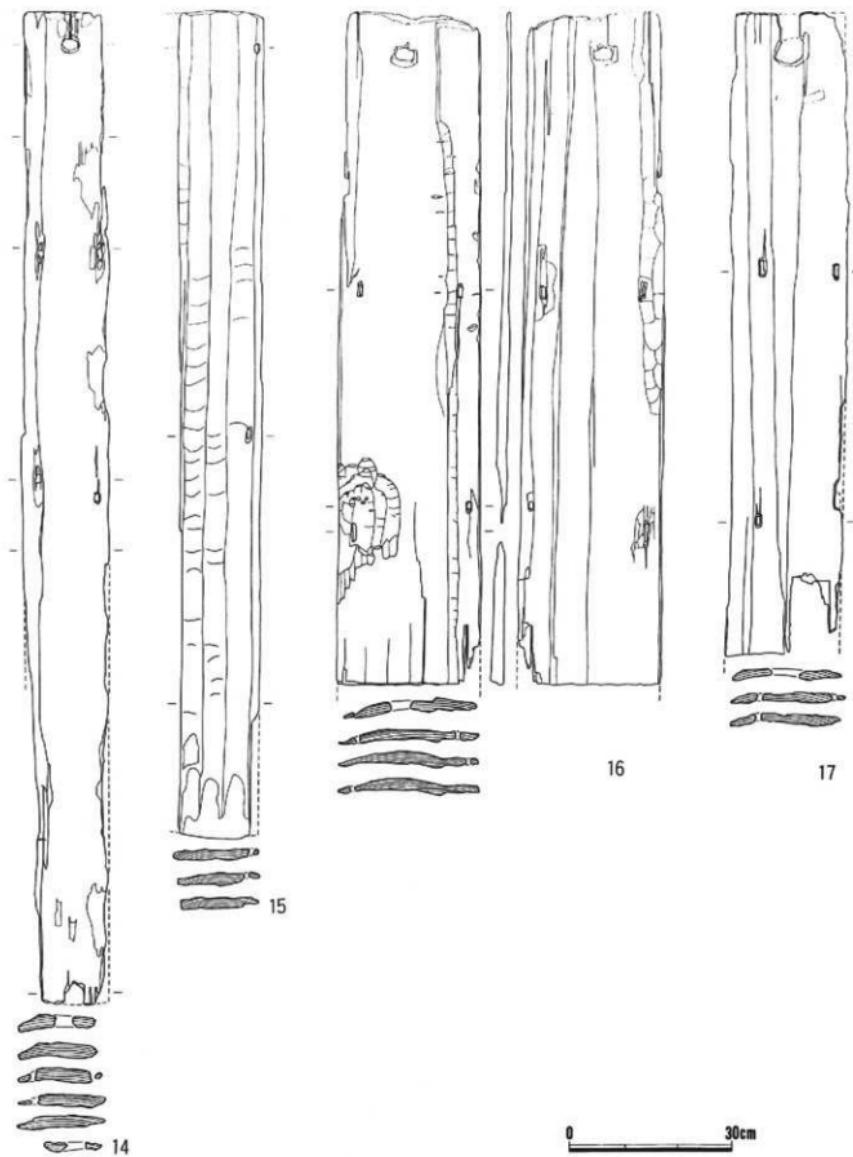
第53図 板材実測図1



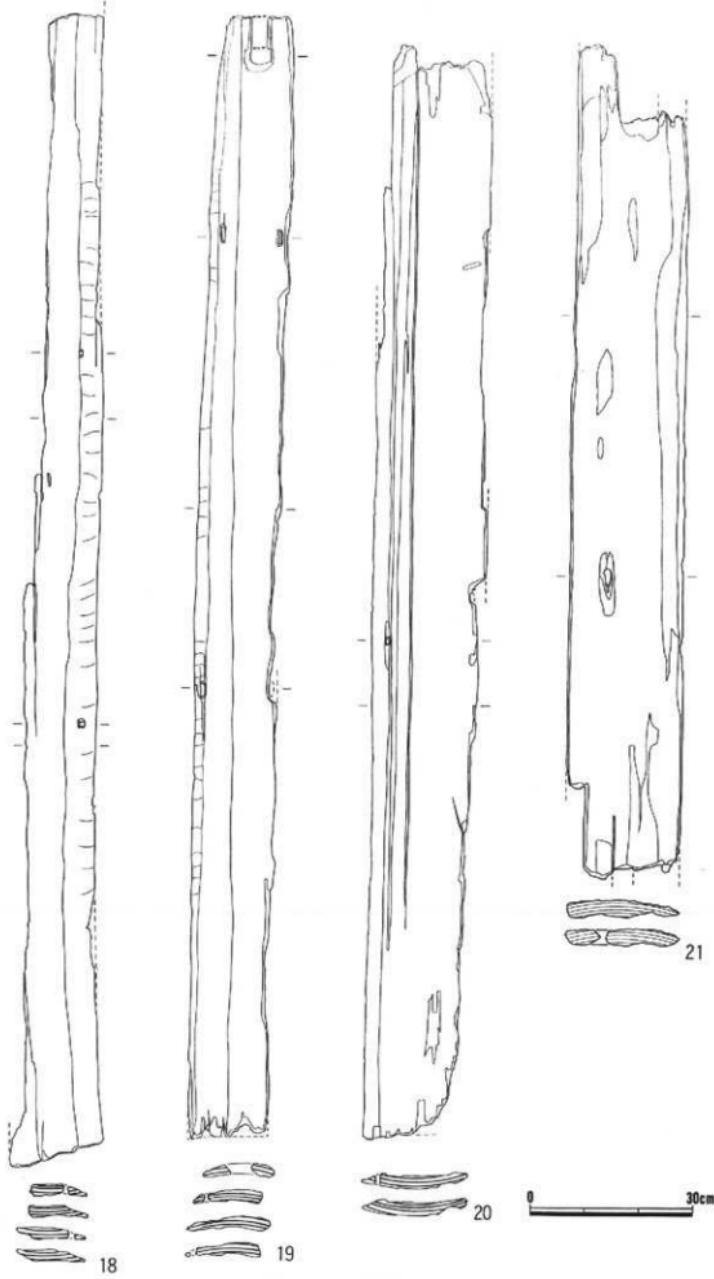
第54図 板材実測図2



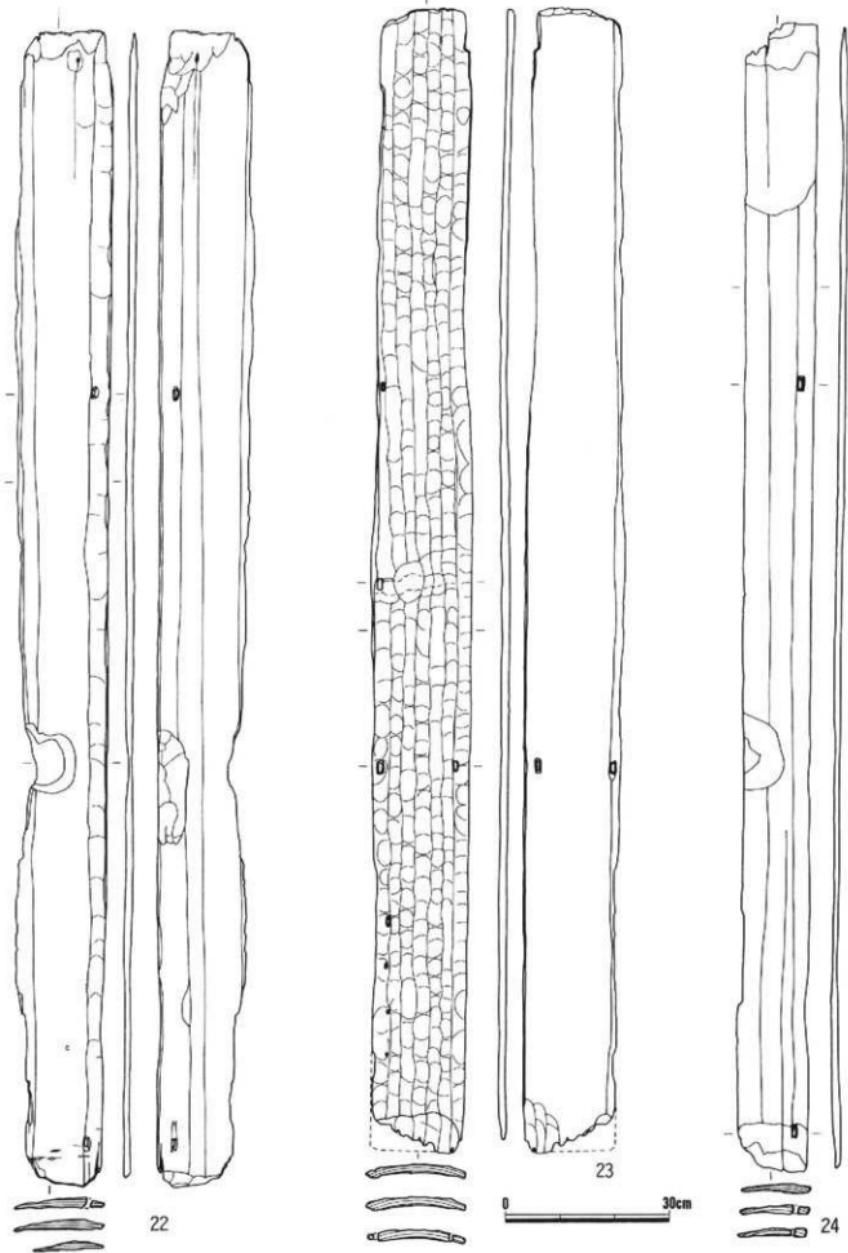
第55図 板材実測図3



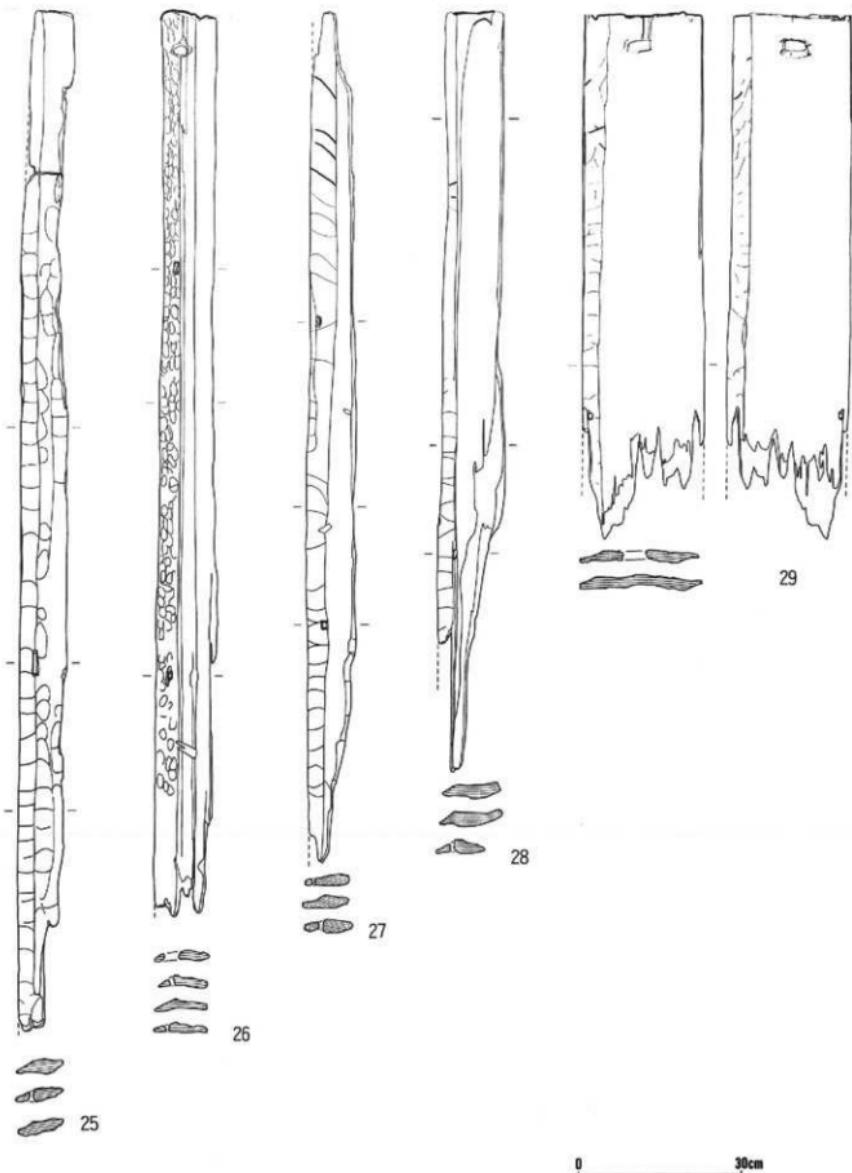
第56図 板材実測図4



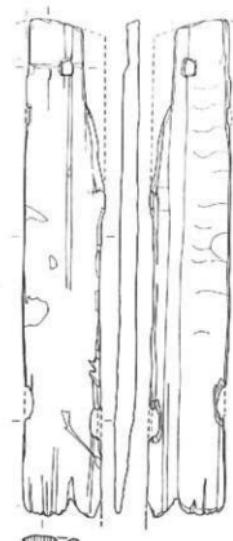
第57図 板材実測図5



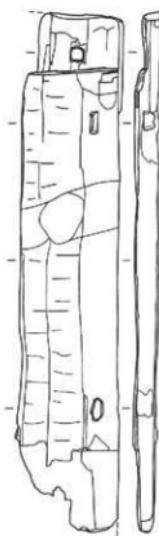
第58図 板材実測図6



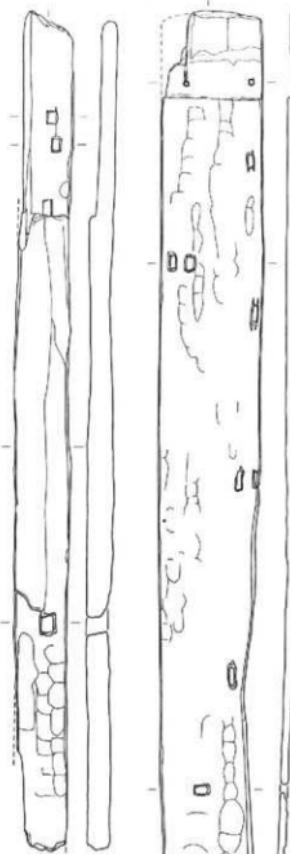
第59図 板材実測図7



30



31



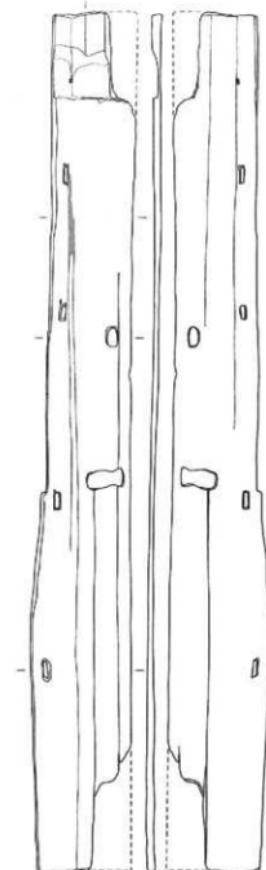
32

第60図 板材実測図8

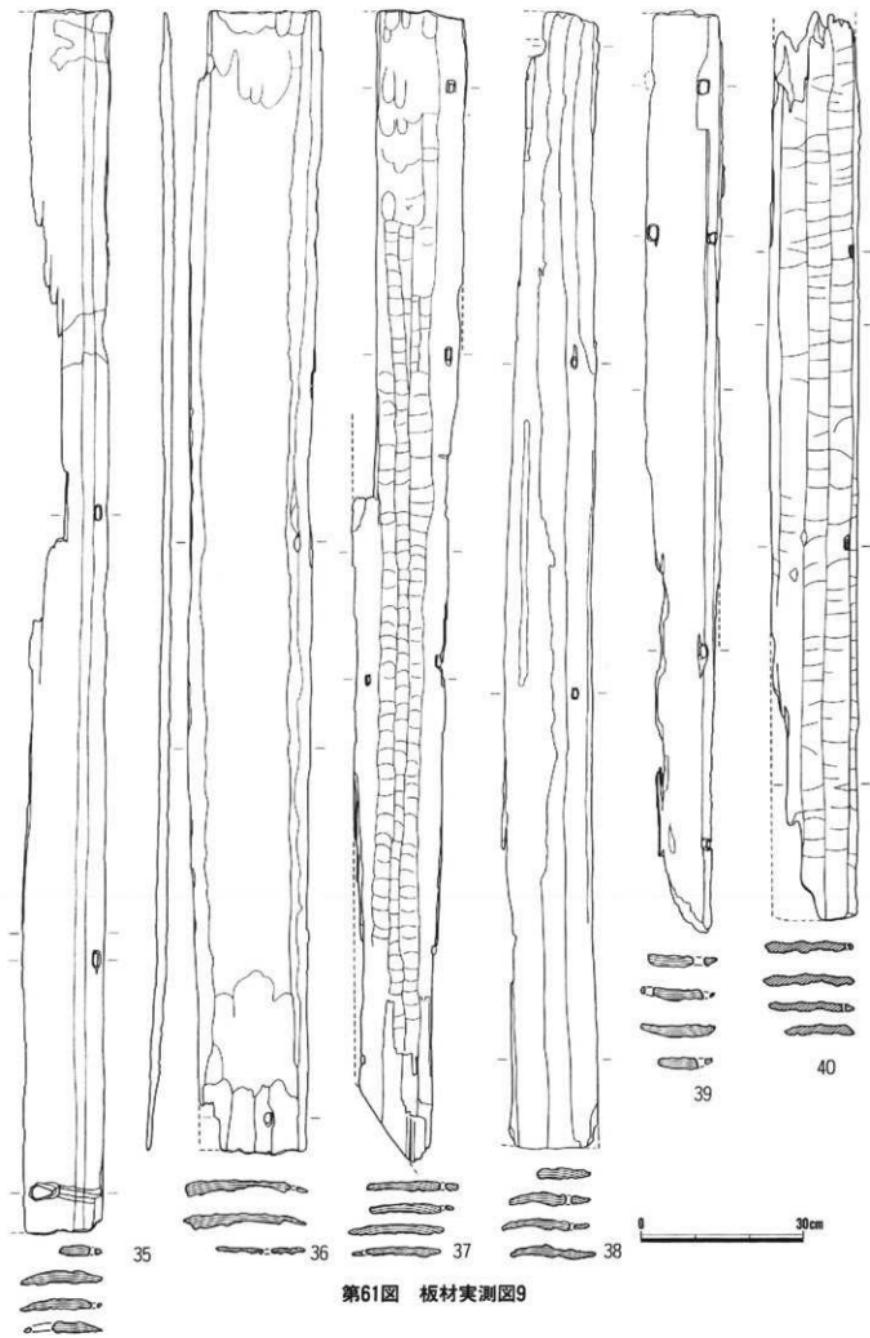


33

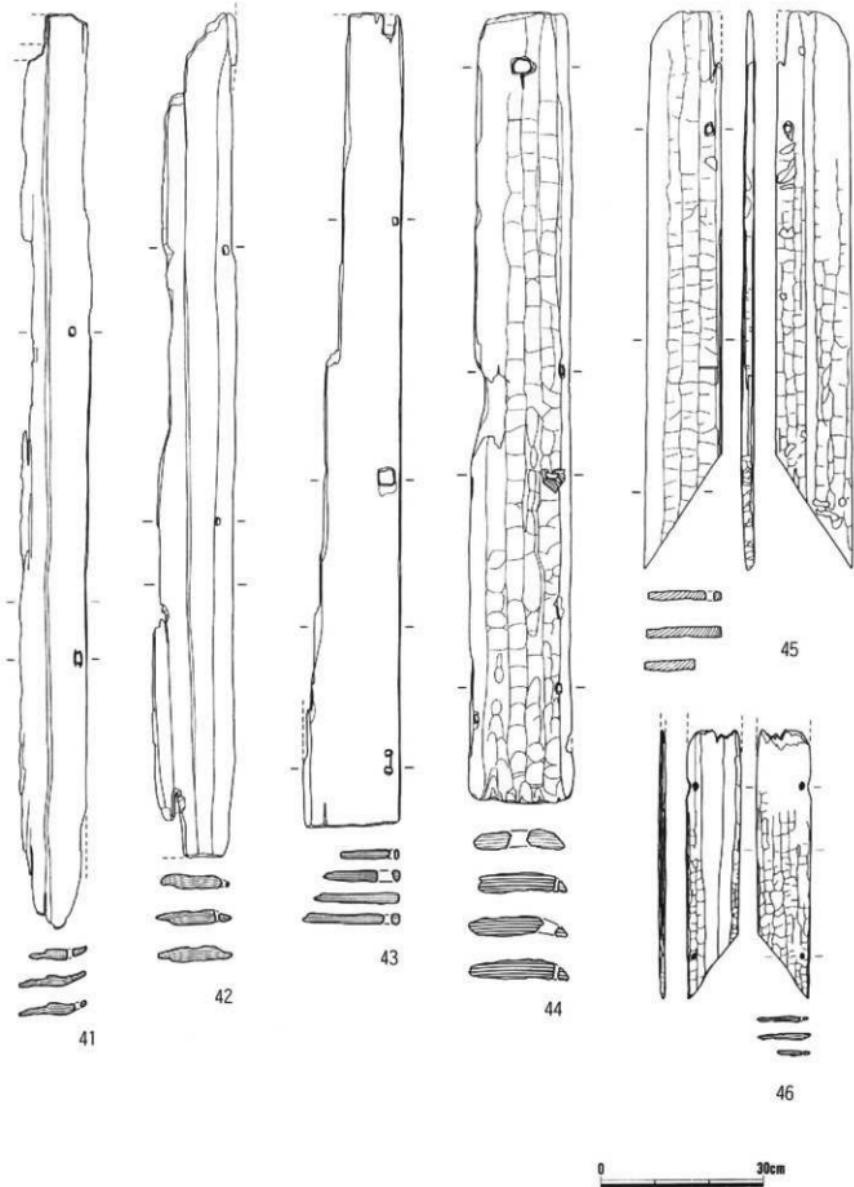
A scale bar indicating a length of 30 cm, with markings at 0, 10, 20, and 30.



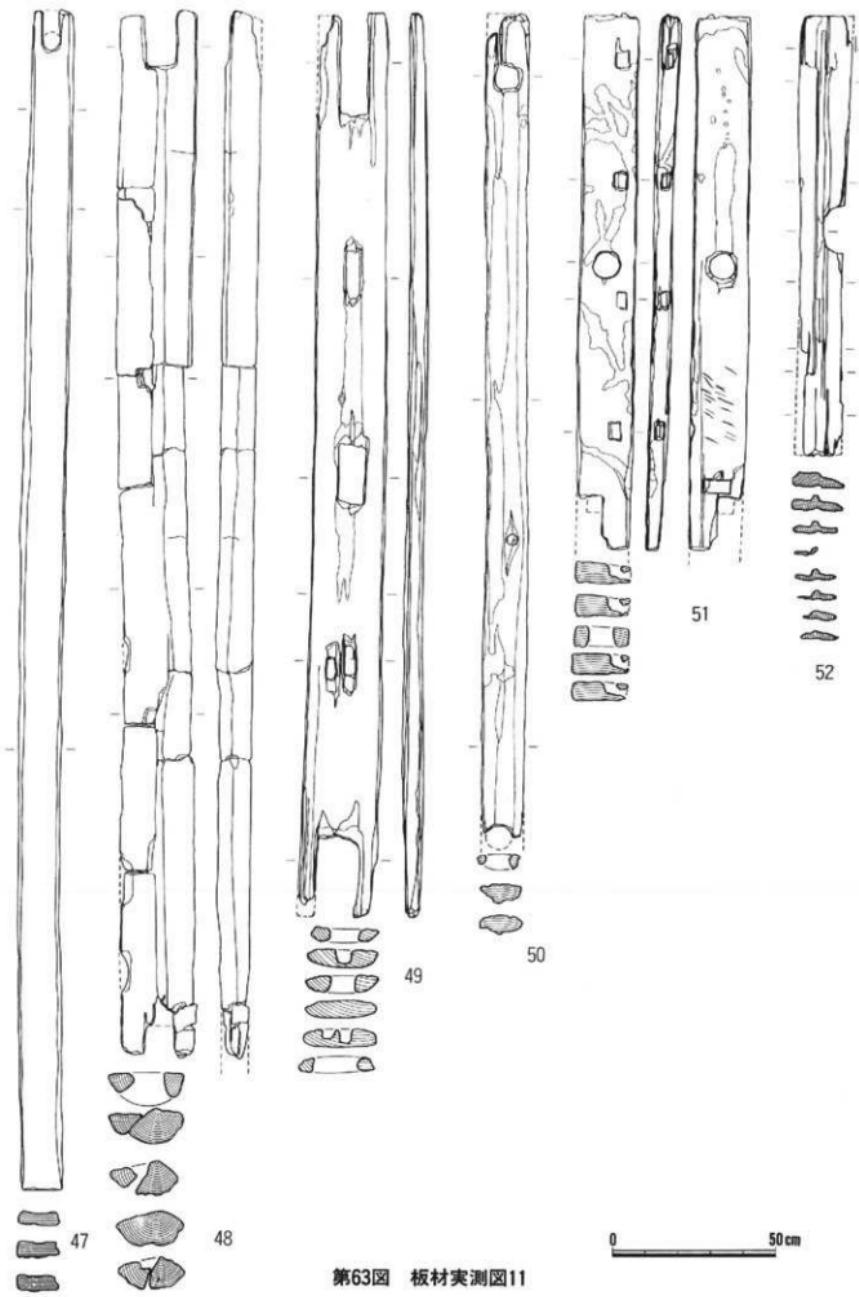
34



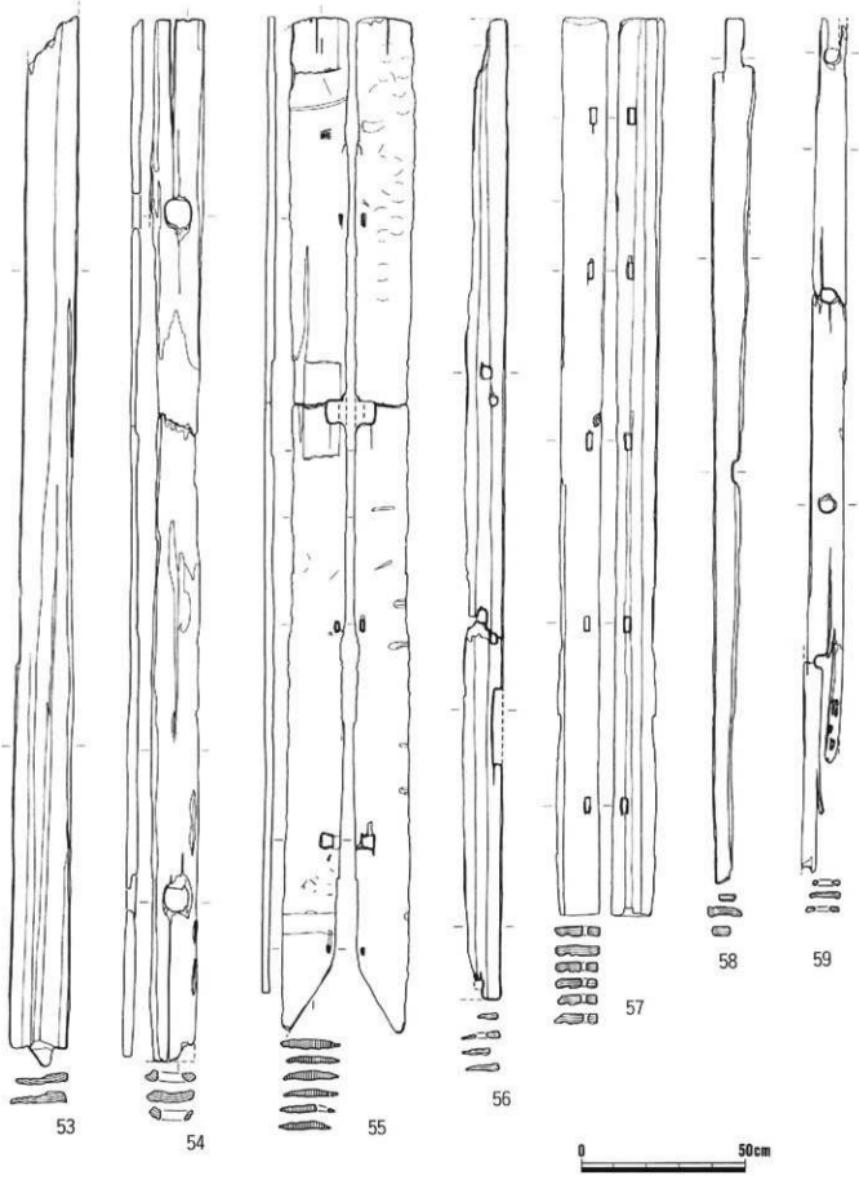
第61図 板材実測図9



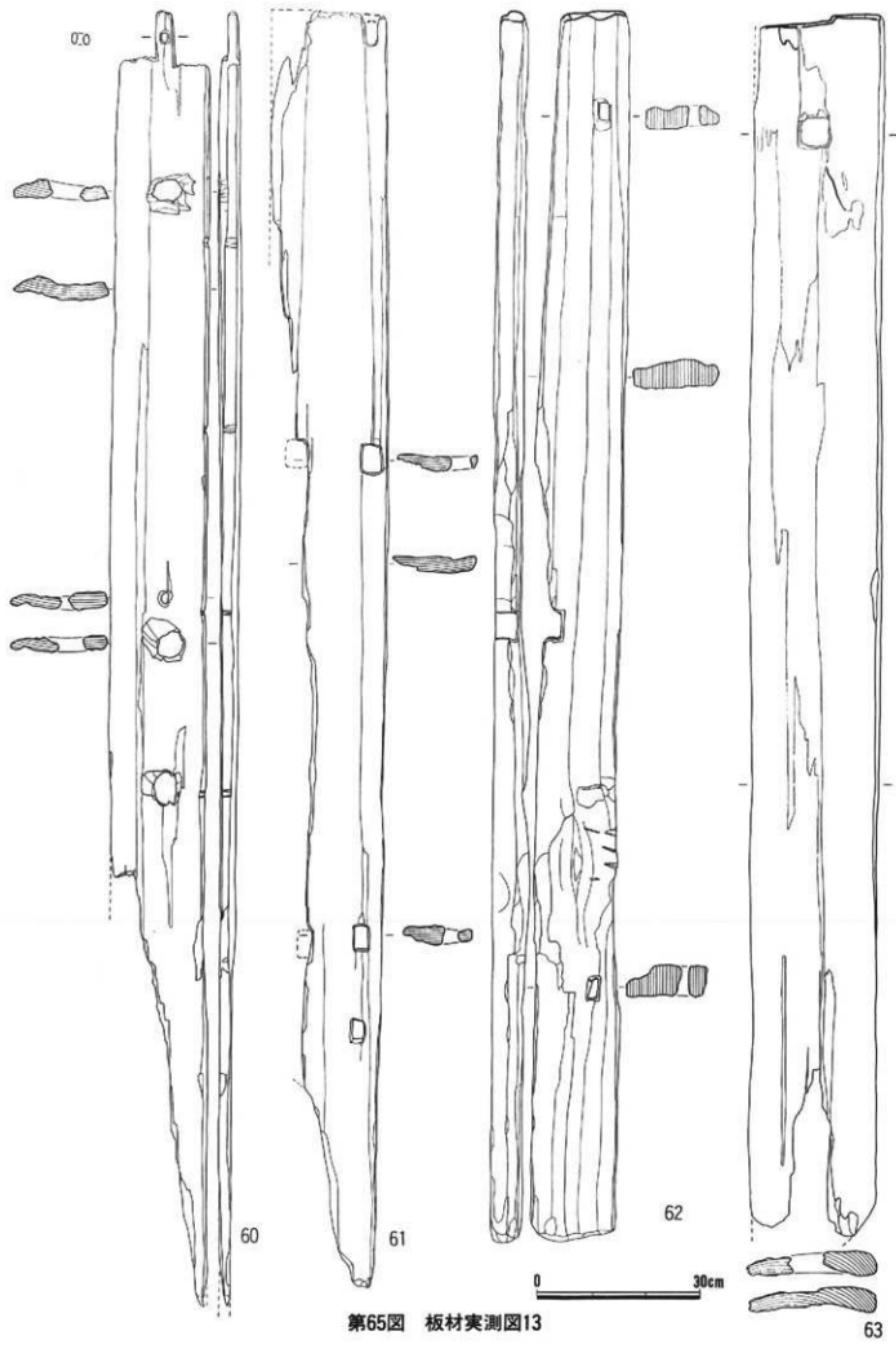
第62図 板材実測図10



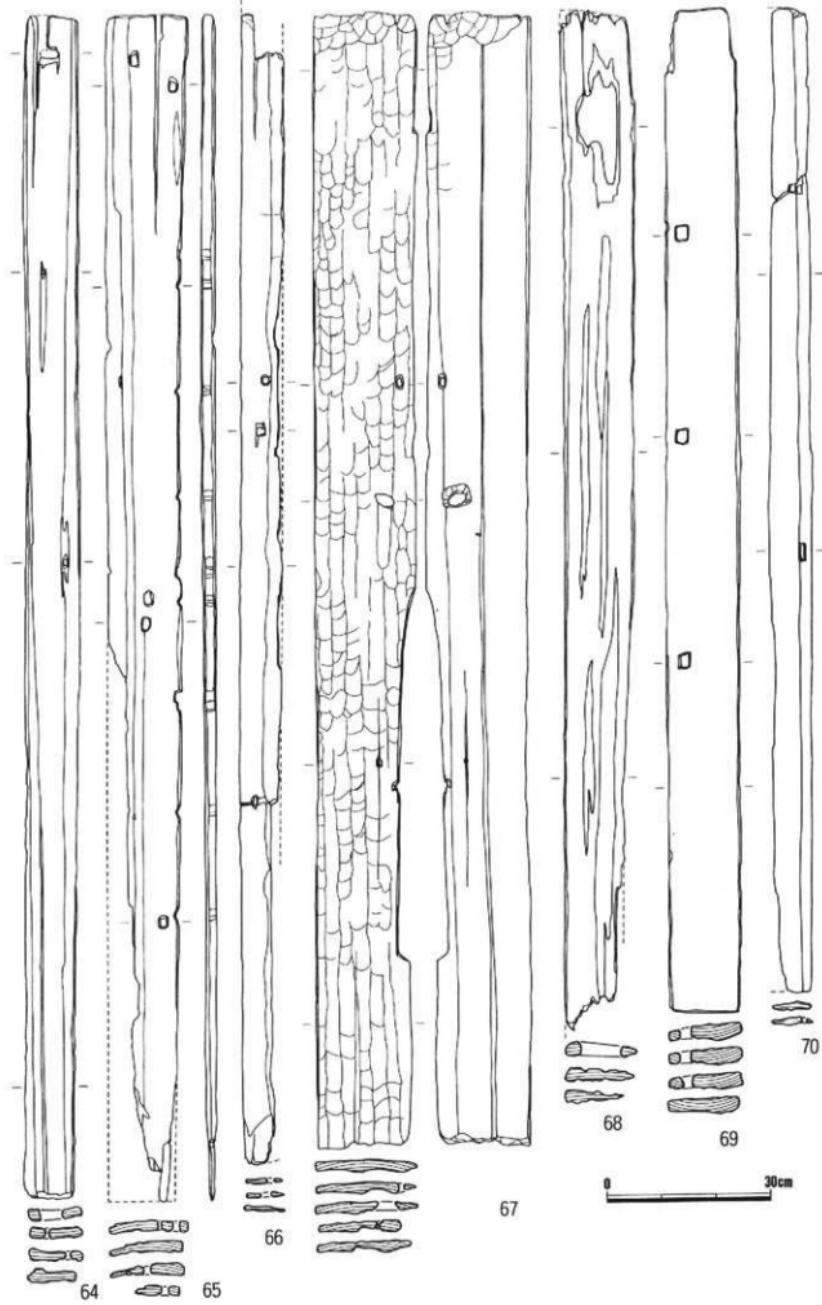
第63図 板材実測図11



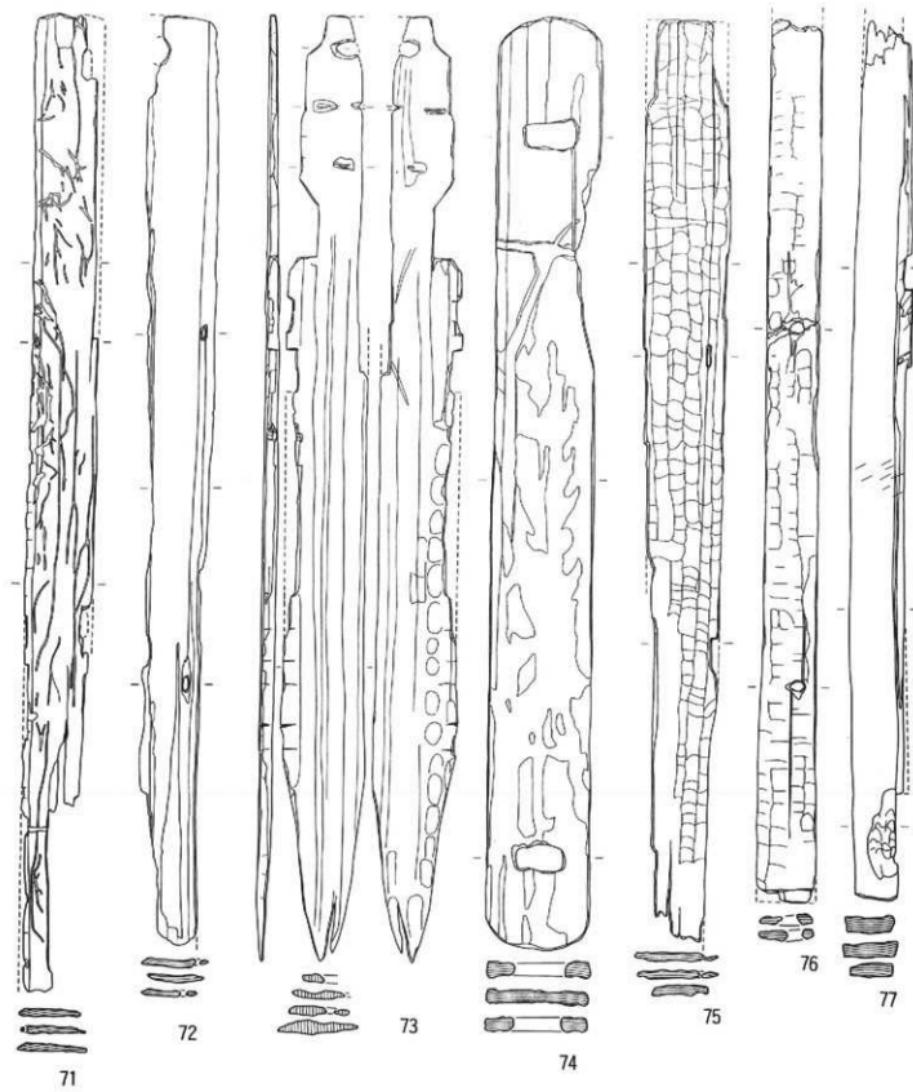
第64図 板材実測図12



第65図 板材実測図13

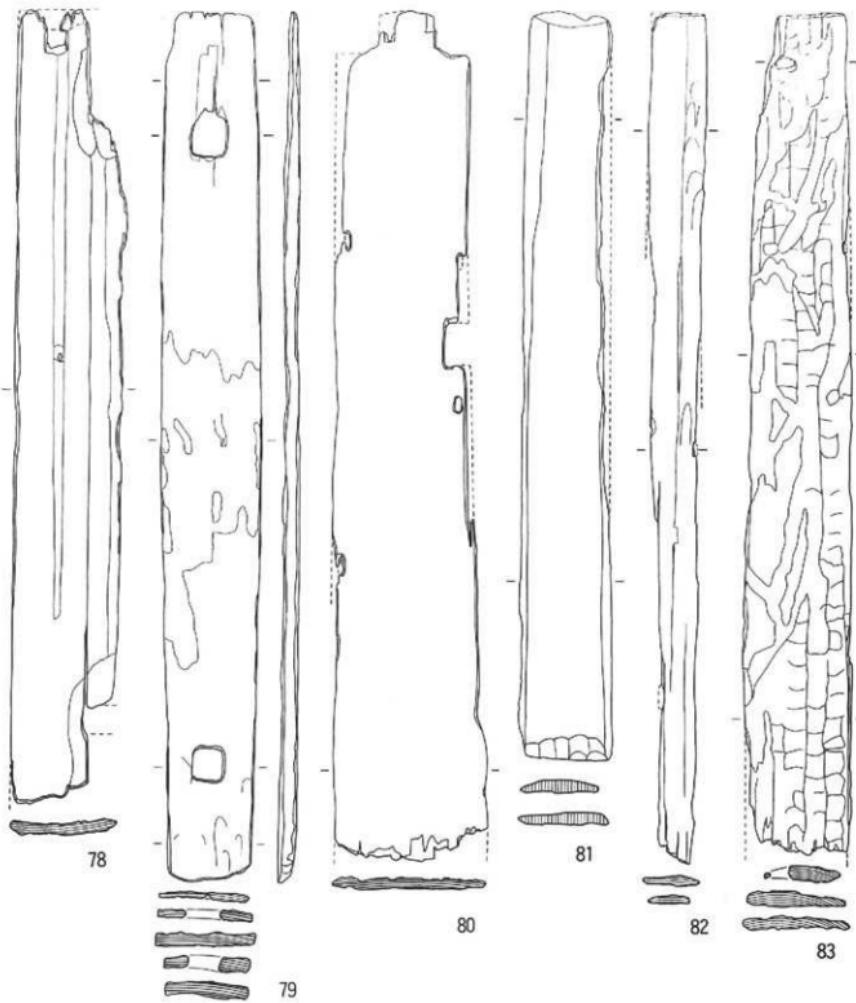


第66図 板材実測図14



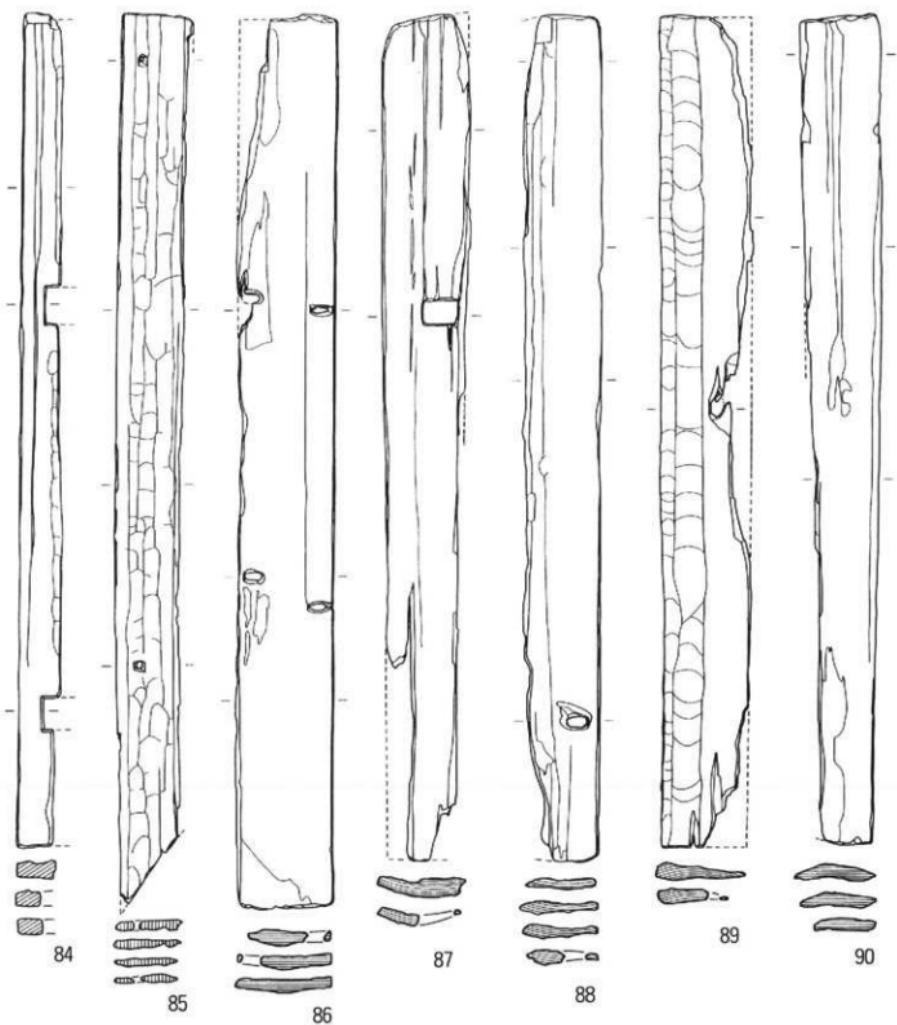
第67図 板材実測図15

0 30cm



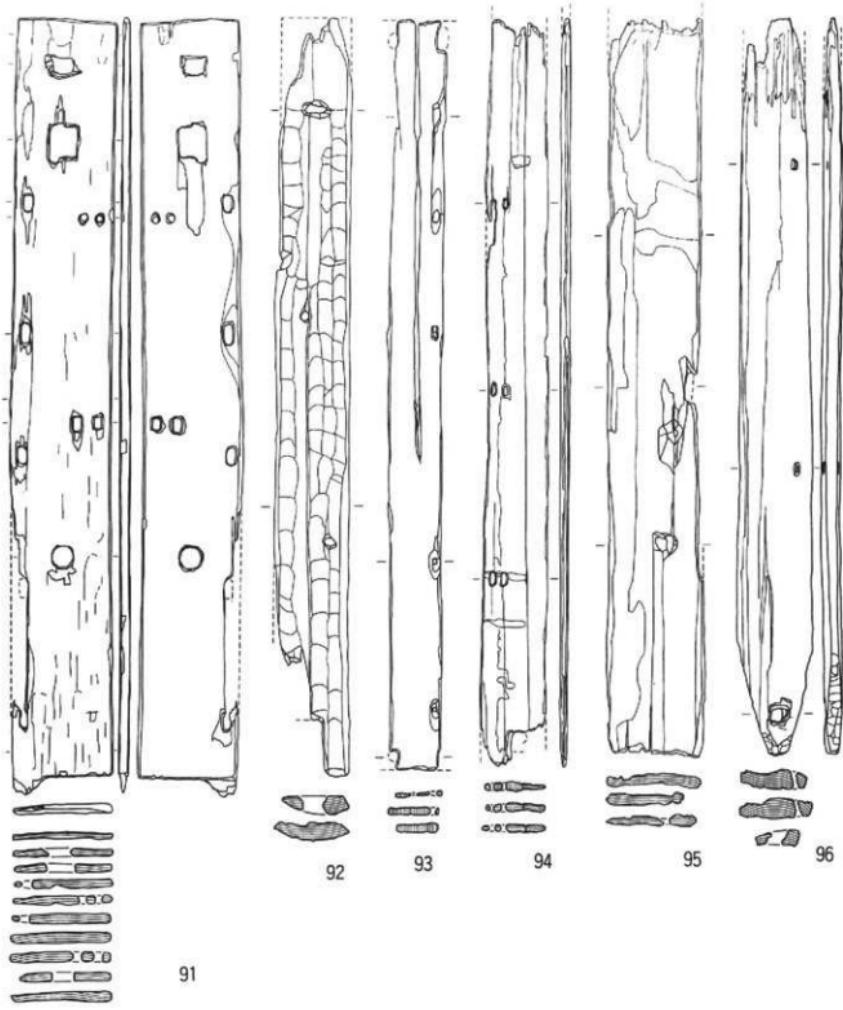
第68図 板材実測図16

0 30cm

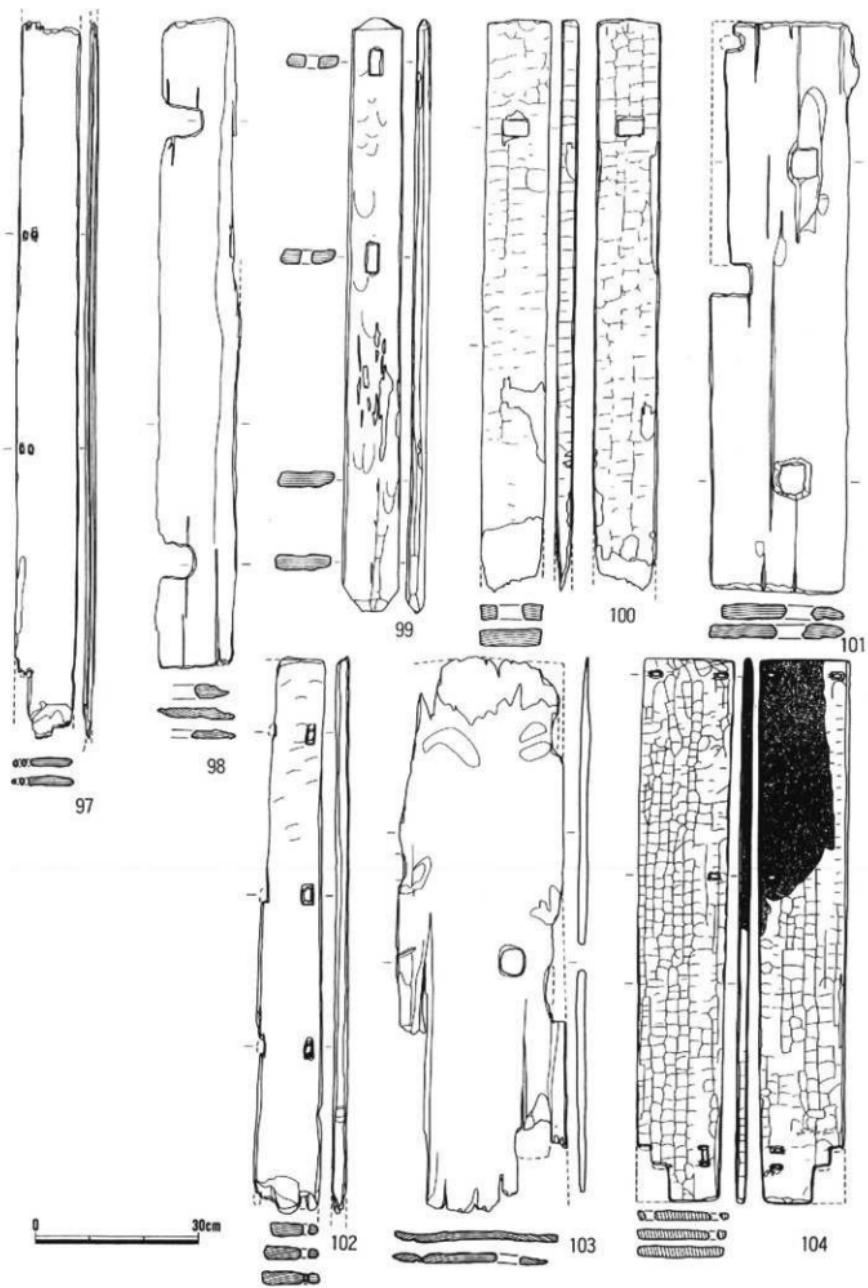


第69図 板材実測図17

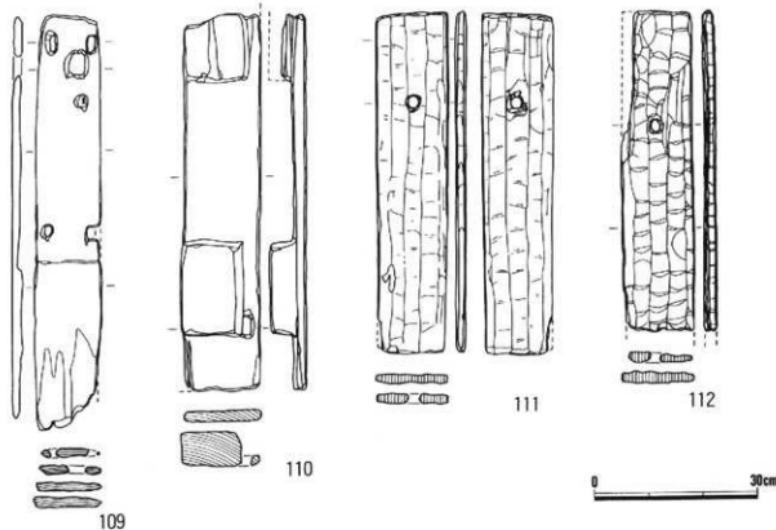
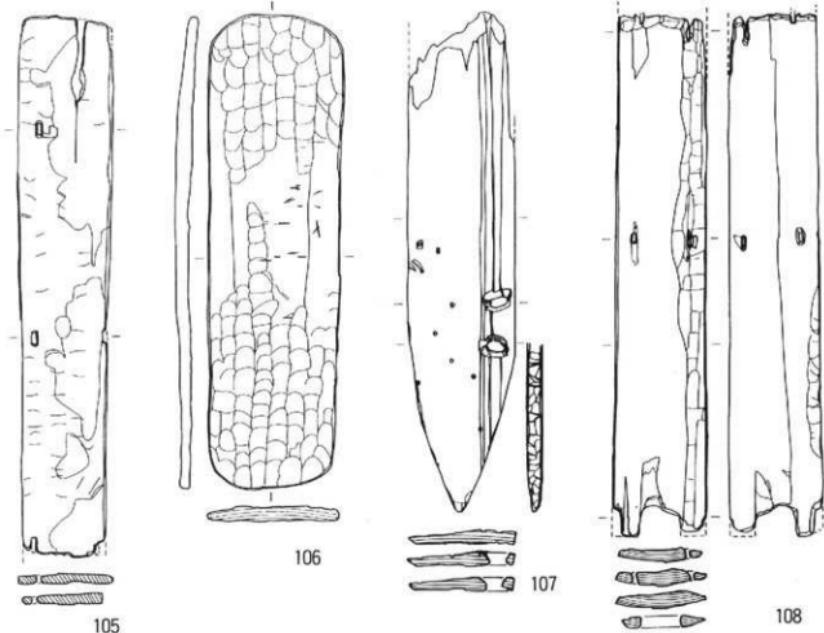
0 30cm



第70図 板材実測図18

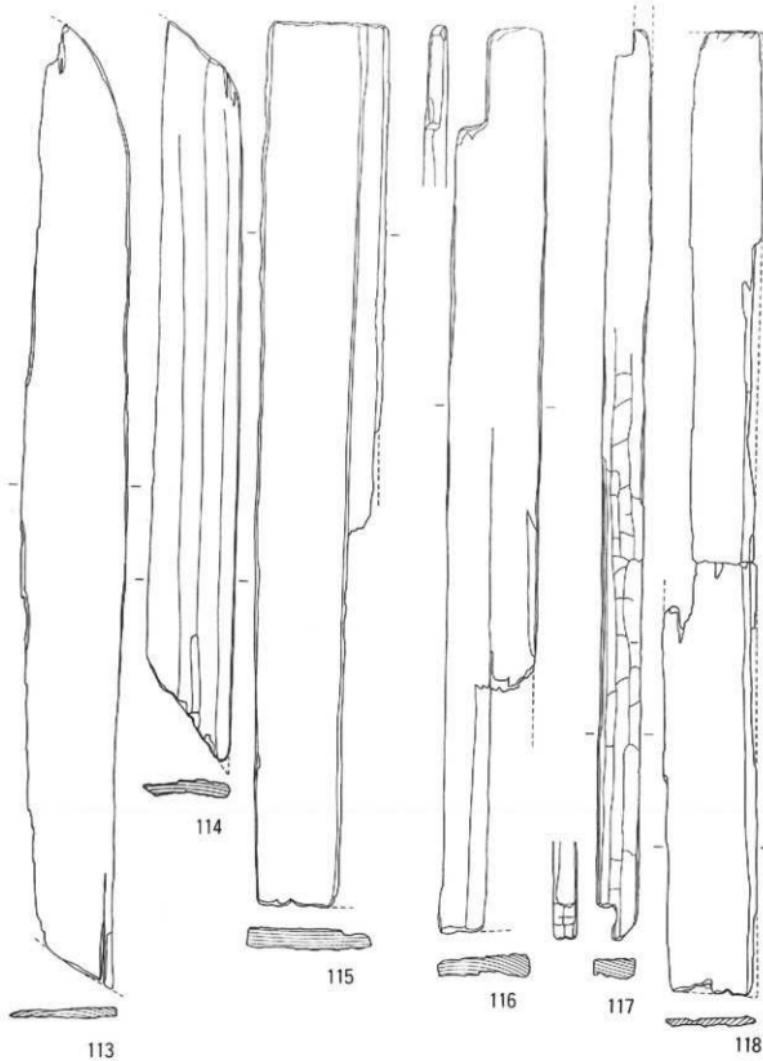


第71図 板材実測図19



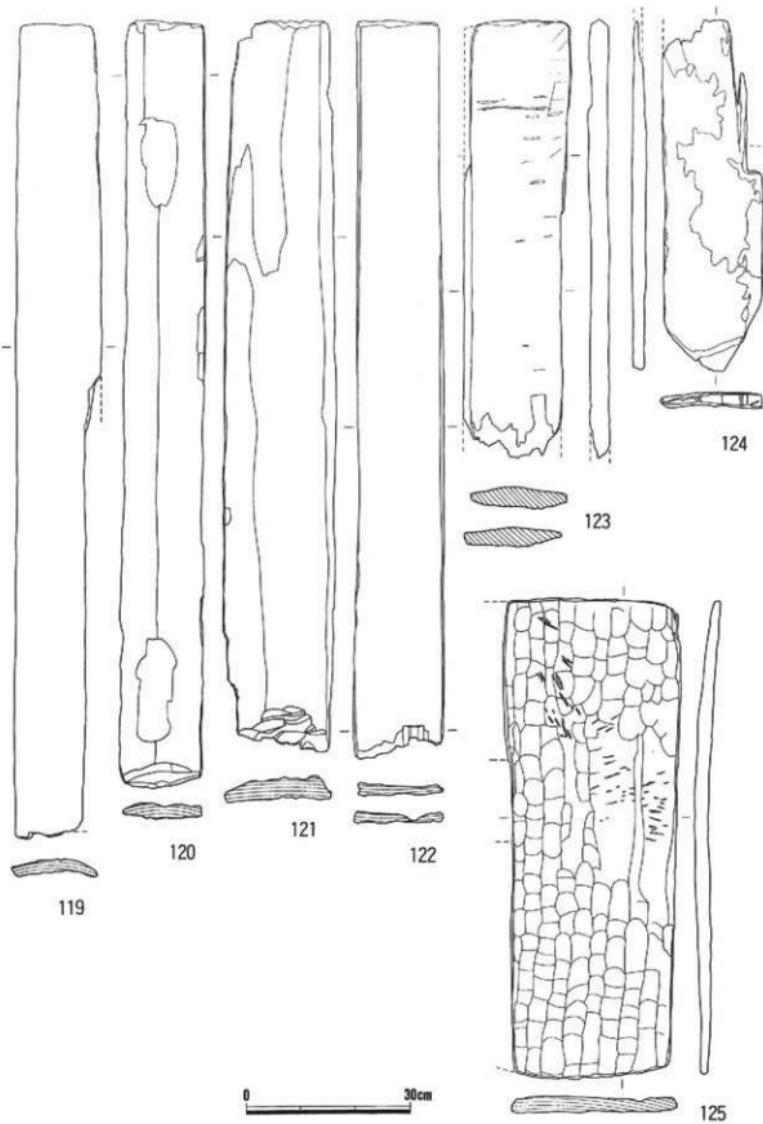
0 30cm

第72図 板材実測図20

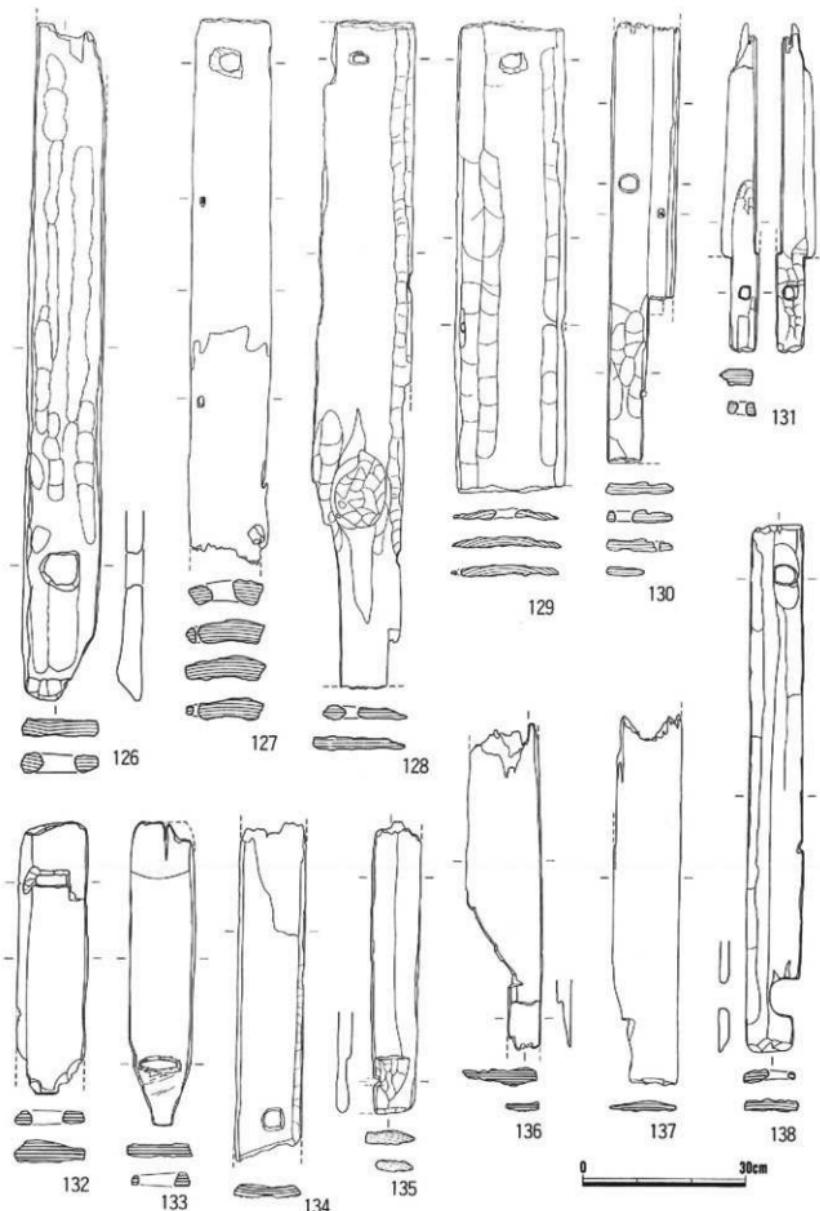


第73図 板材実測図21

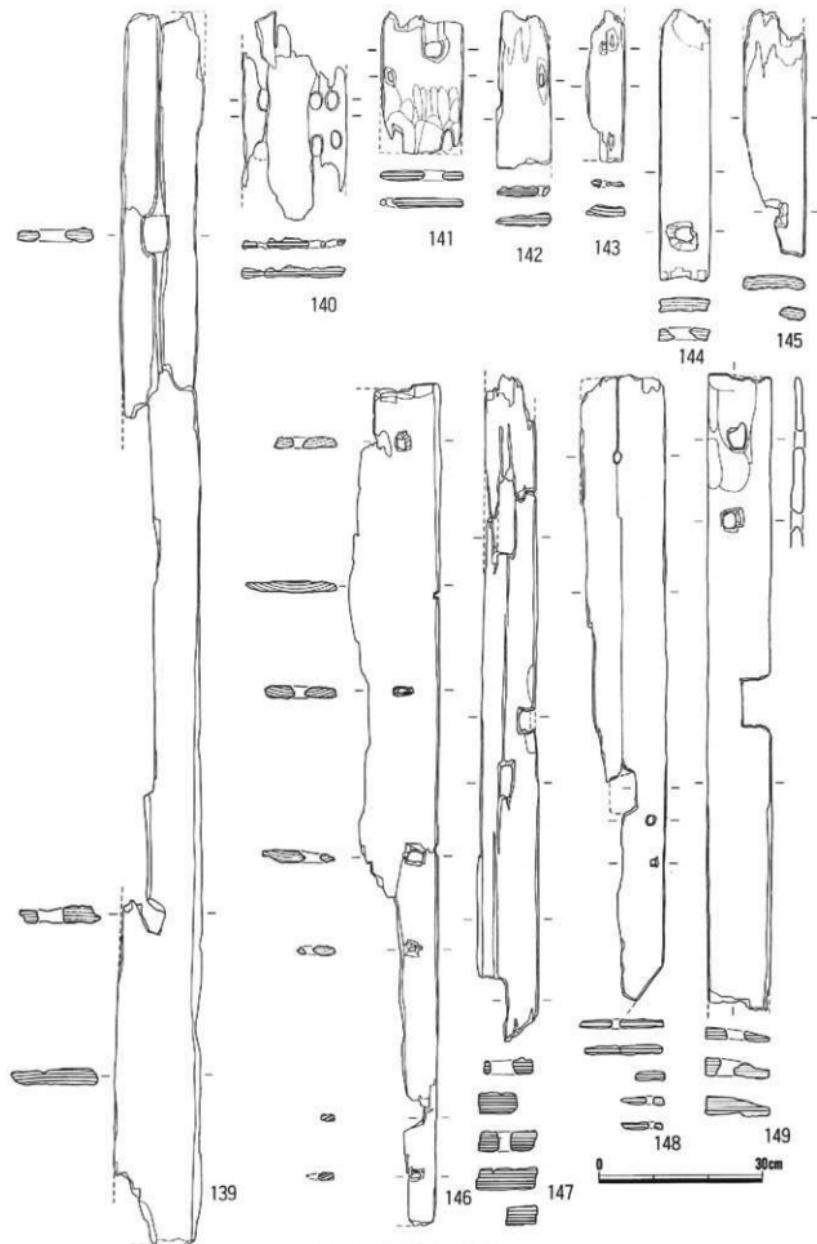
0 30cm



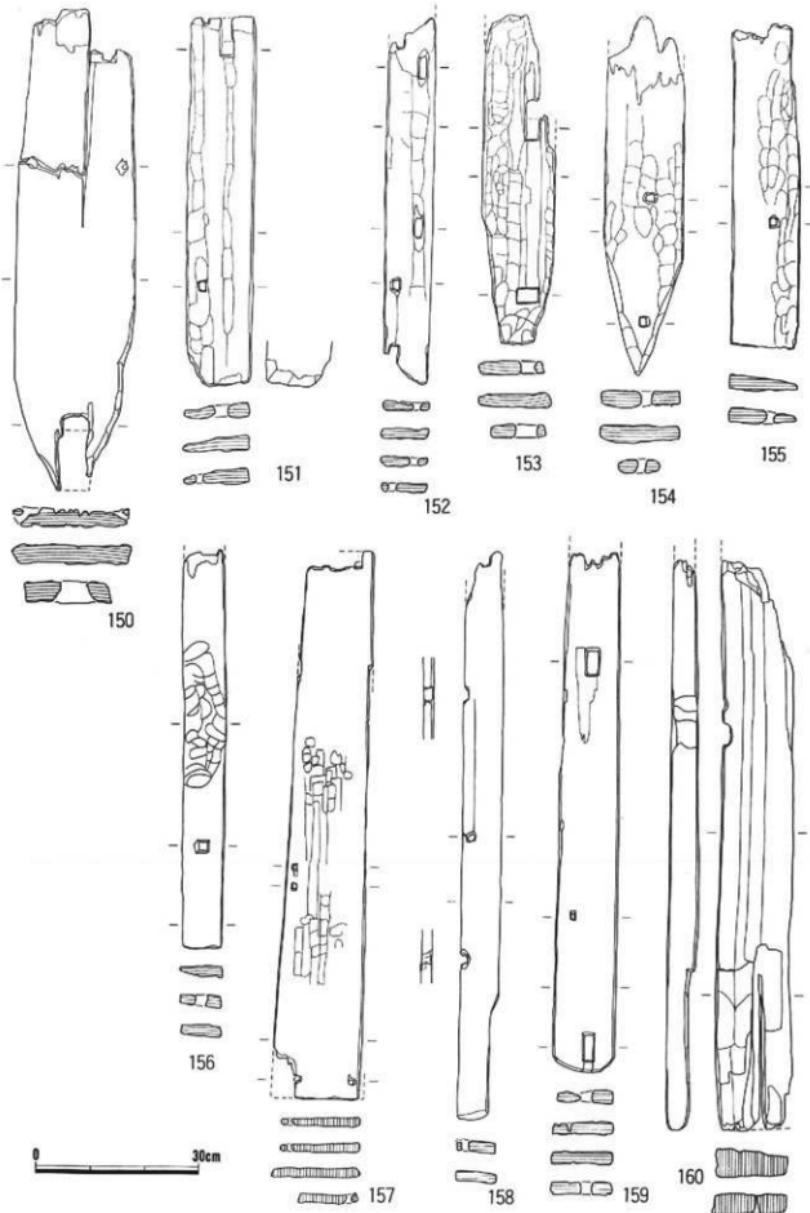
第74図 板材実測図22



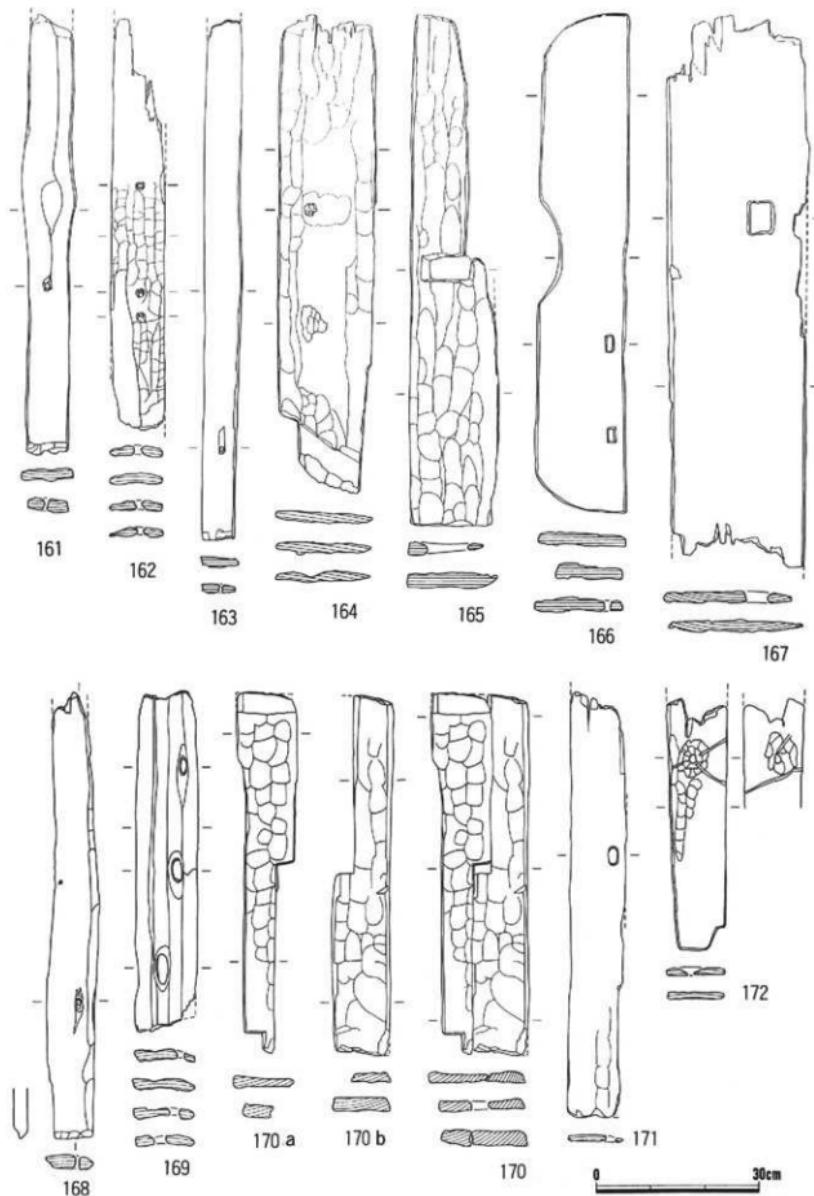
第75図 板材実測図23



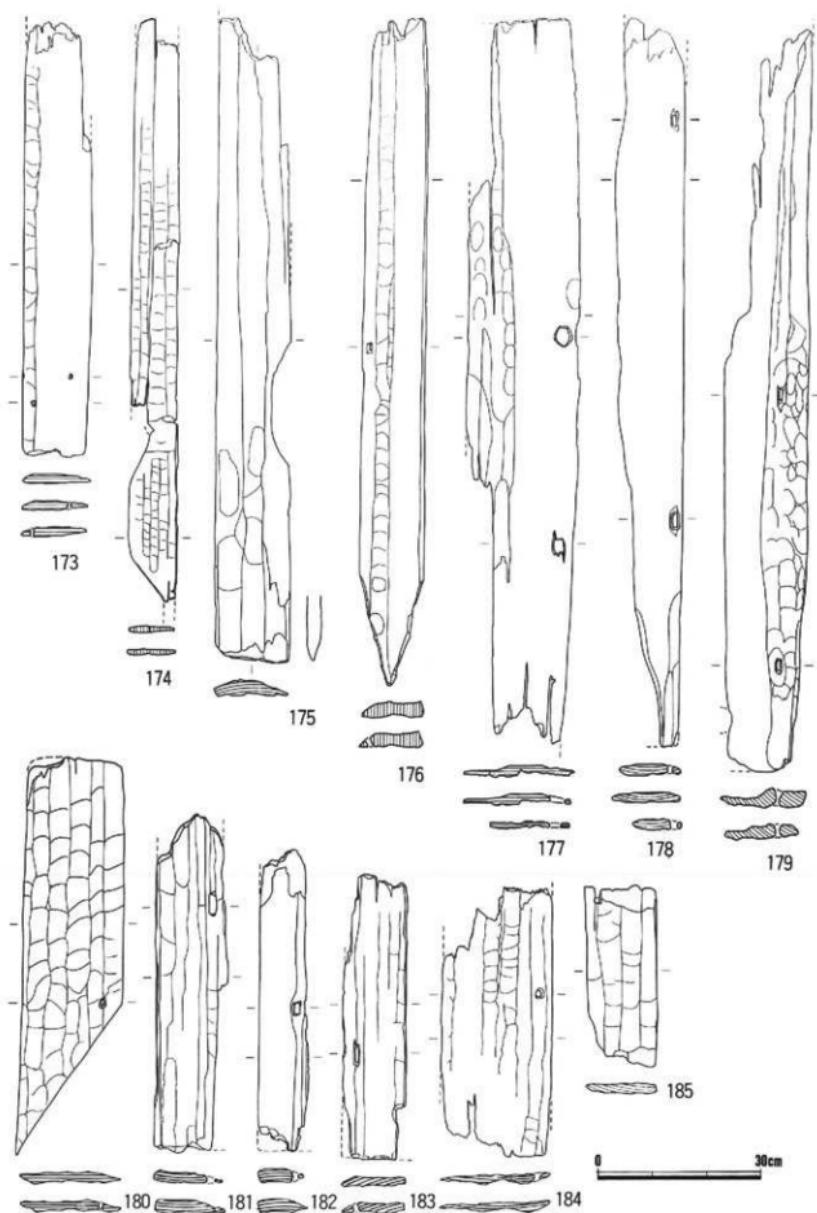
第76図 板材実測図24



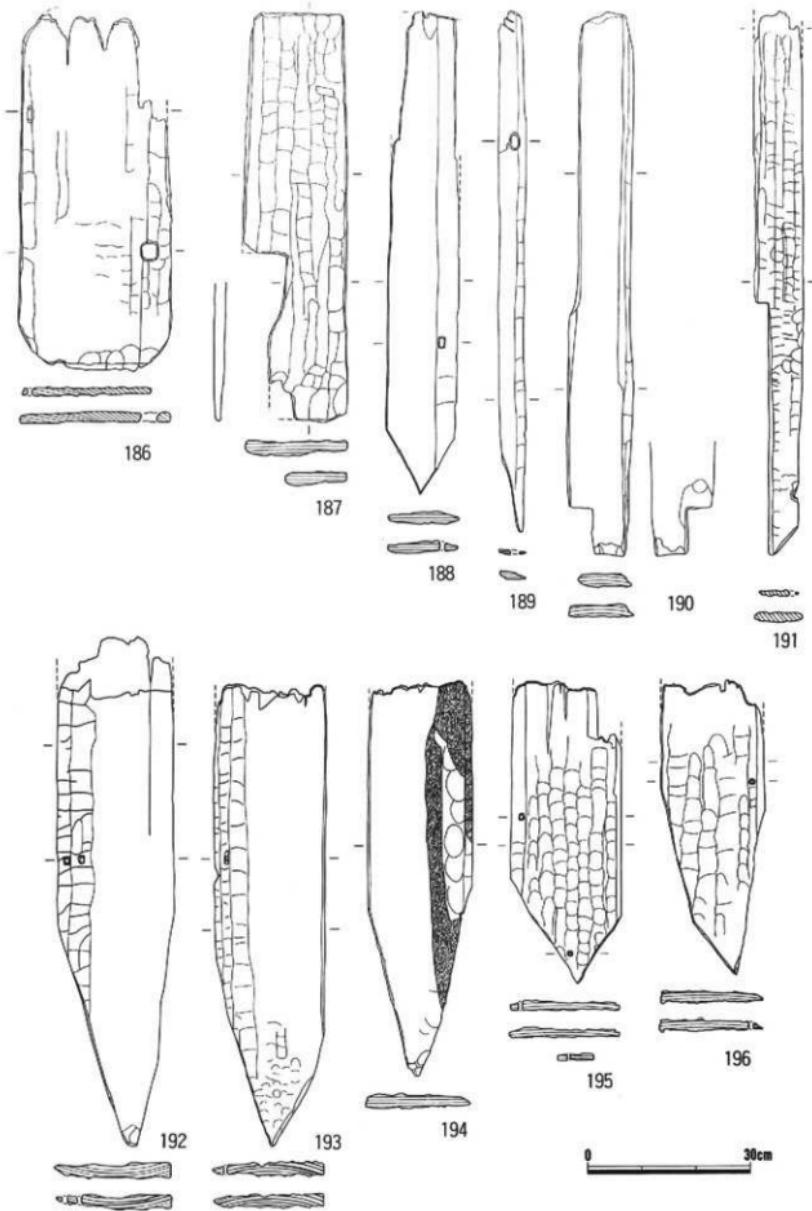
第77図 板材実測図25



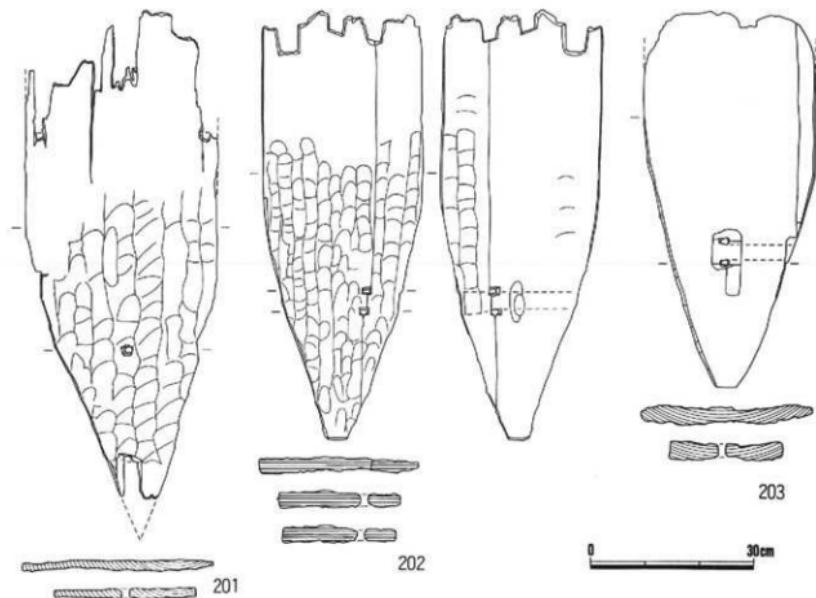
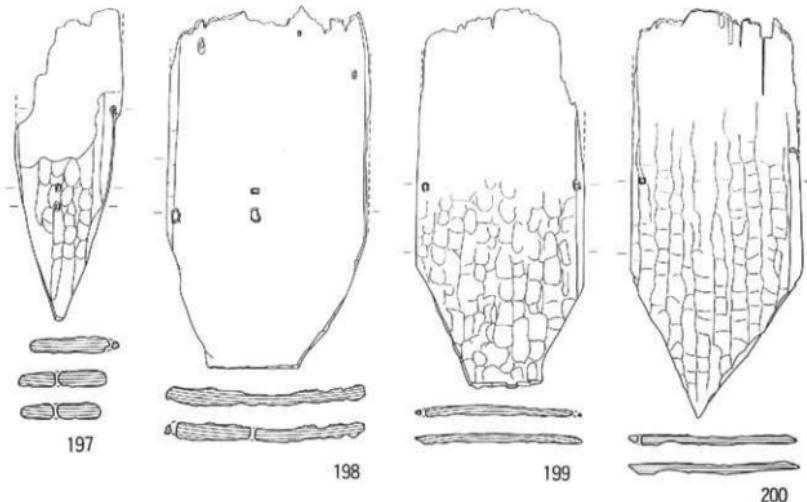
第78図 板材実測図26



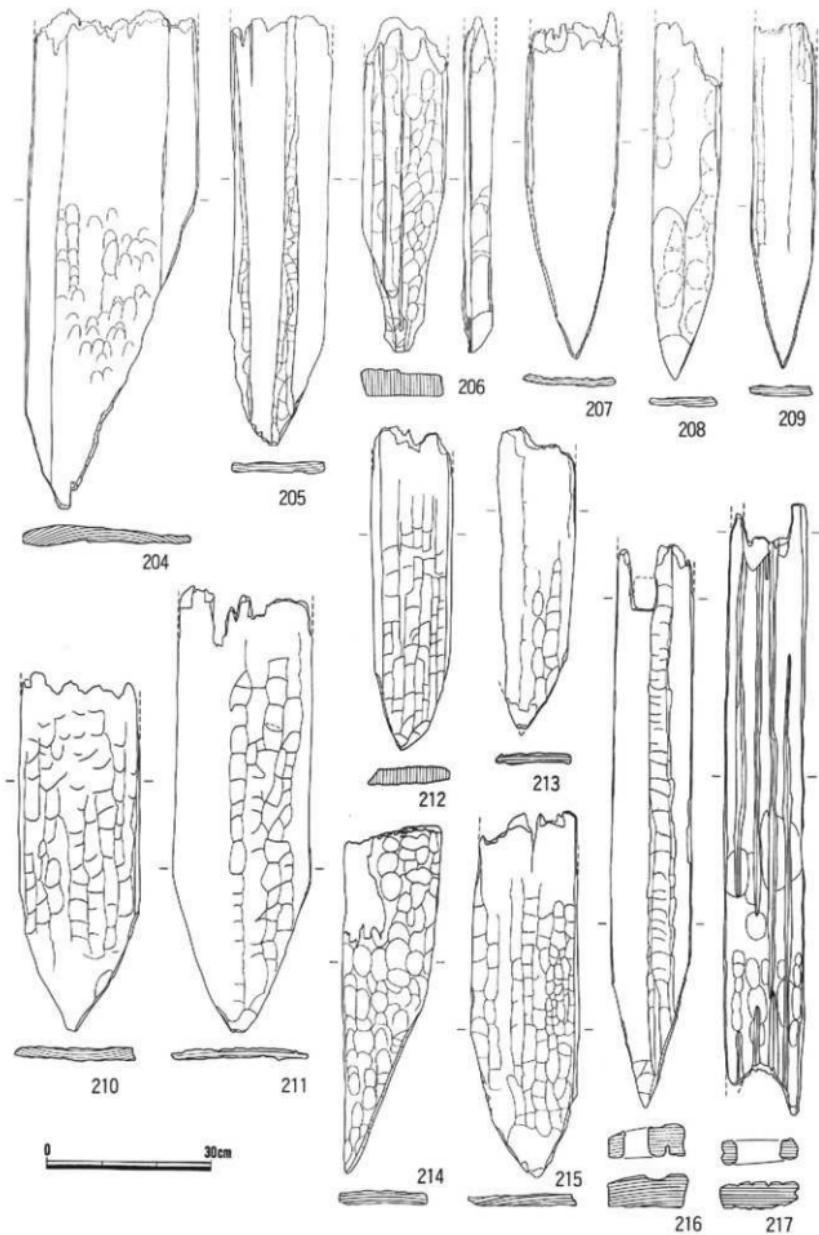
第79図 板材実測図27



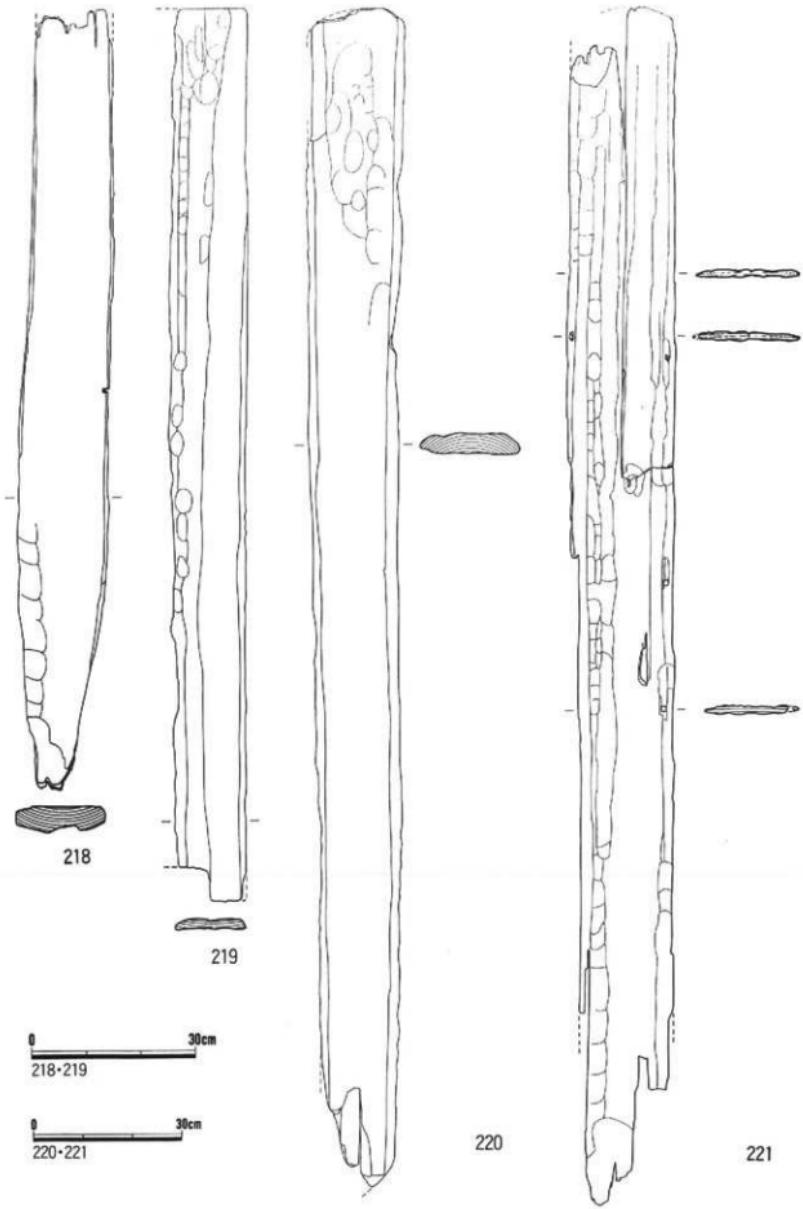
第80図 板材実測図28



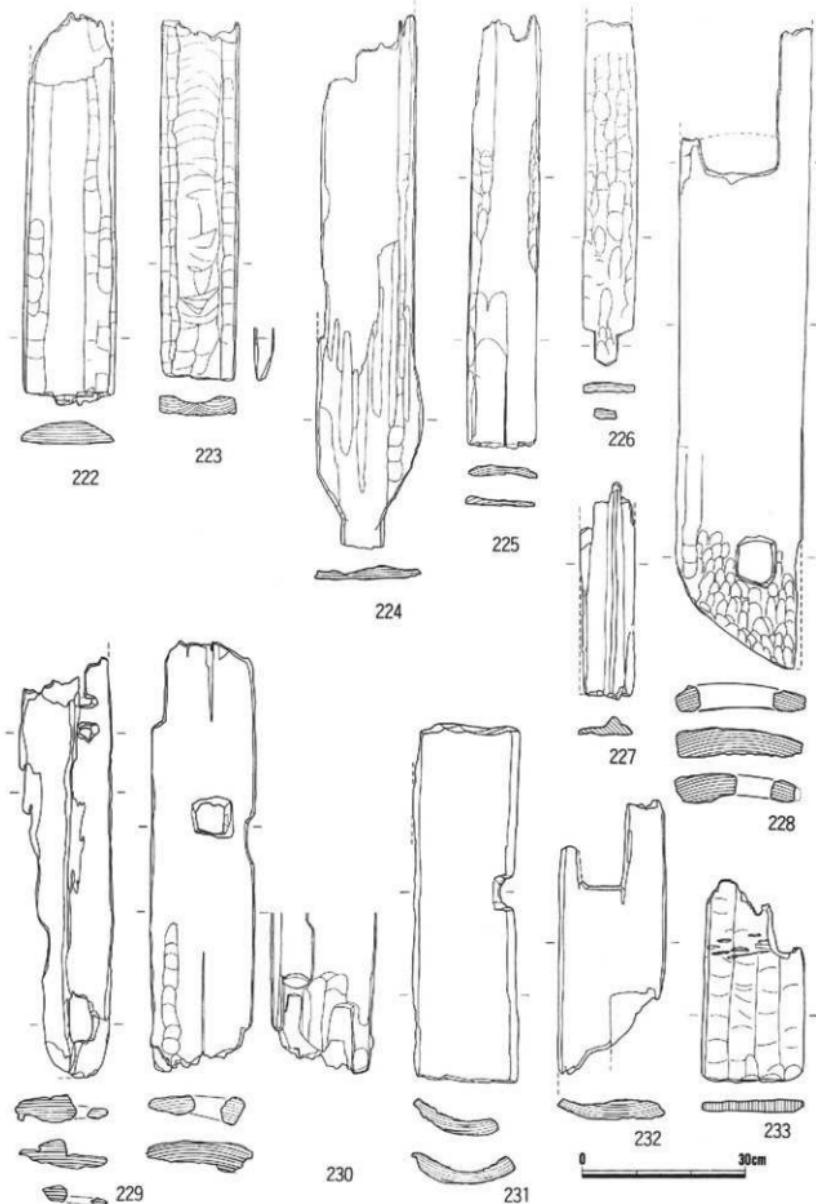
第81図 板材実測図29



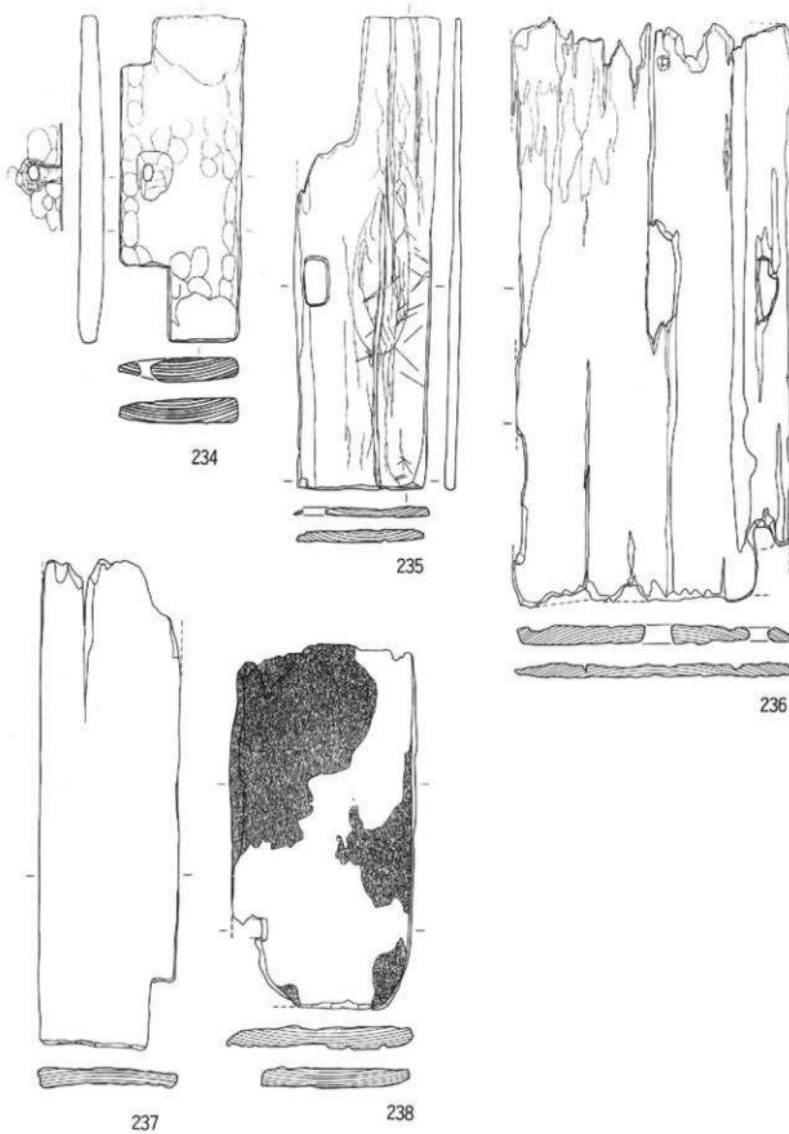
第82図 板材実測図30



第83図 板材実測図31

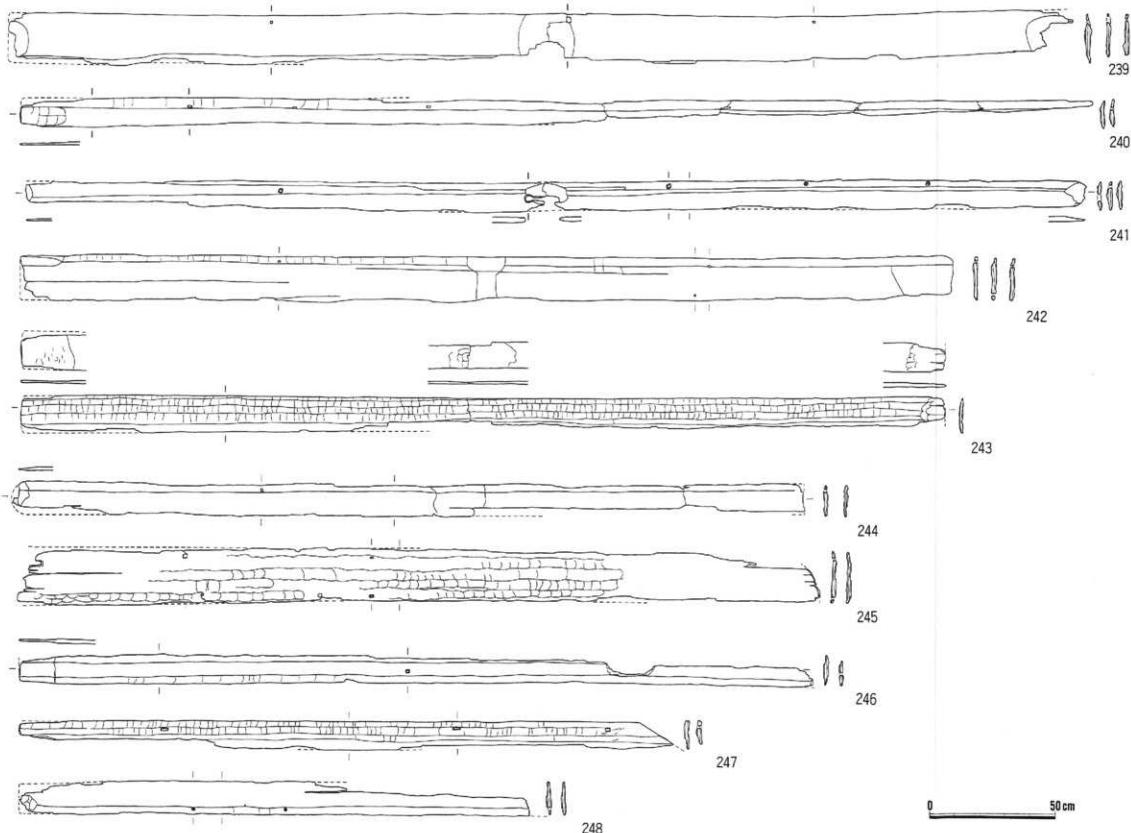


第84図 板材実測図32

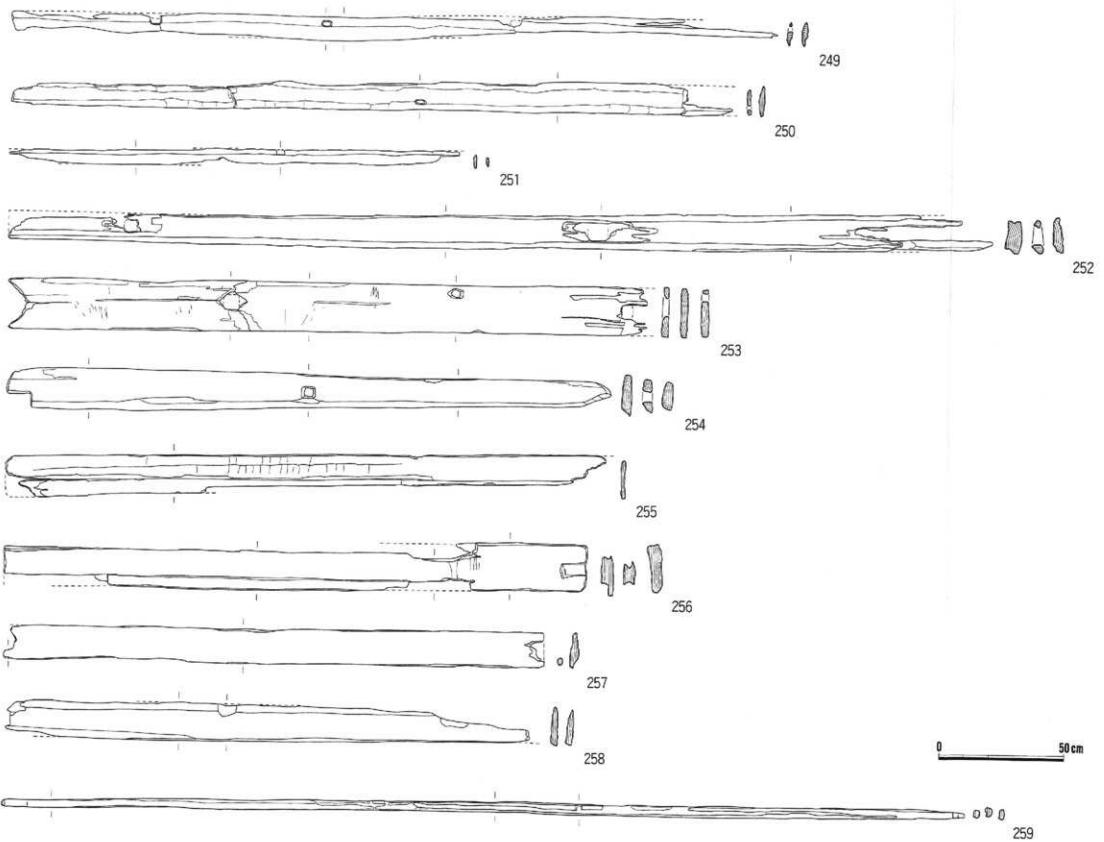


0 30cm

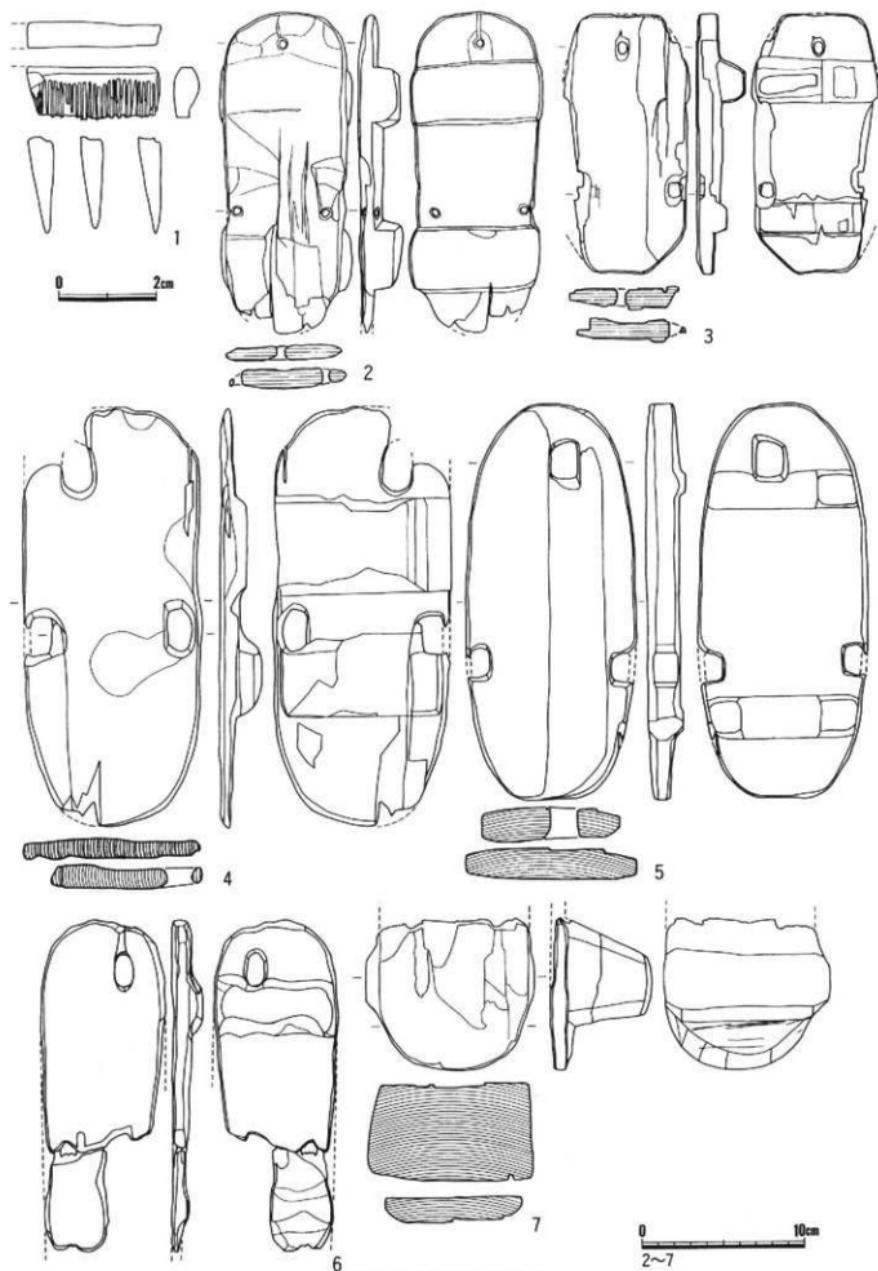
第85図 板材実測図33



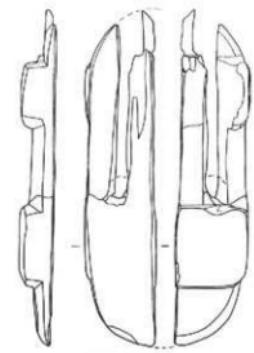
第86図 板材実測図34



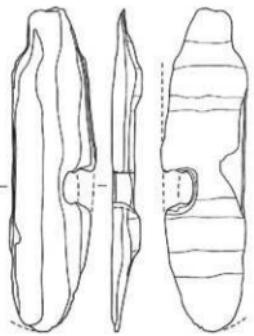
第87図 板材実測図35



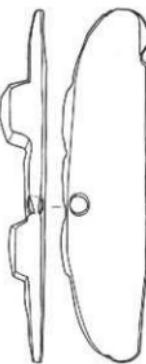
第88図 装身具実測図1



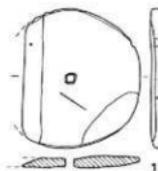
8



9



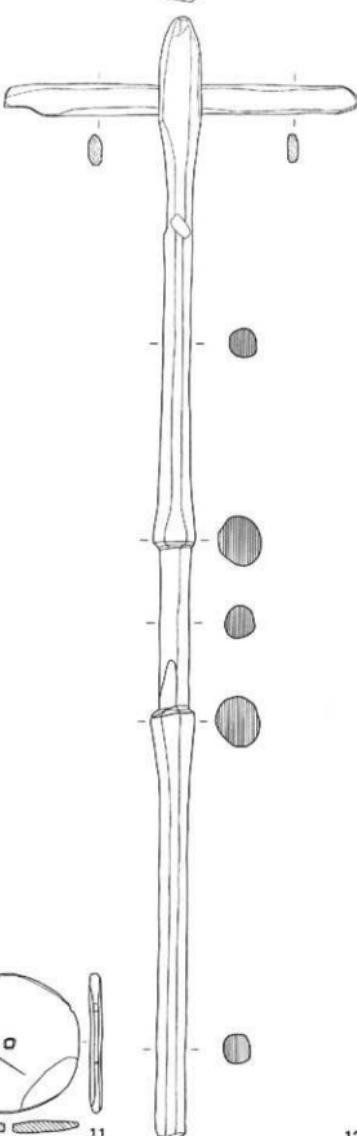
10



第89図 装身具実測図2・紡織具

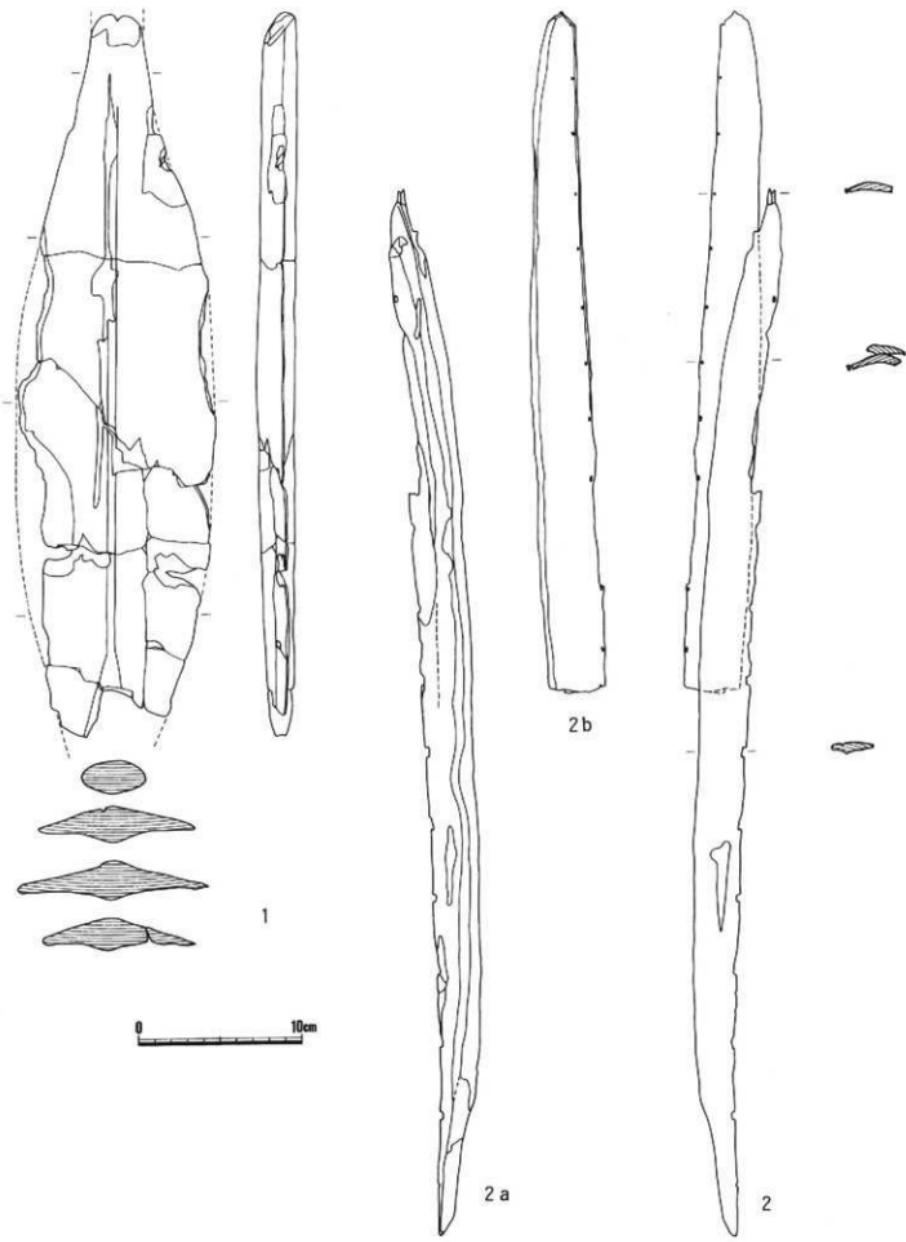


0 10cm

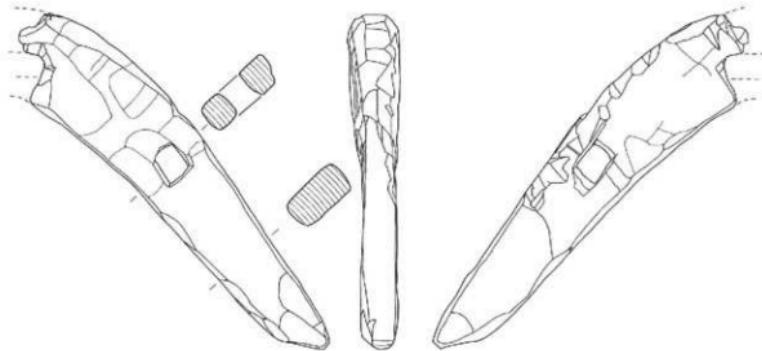


12

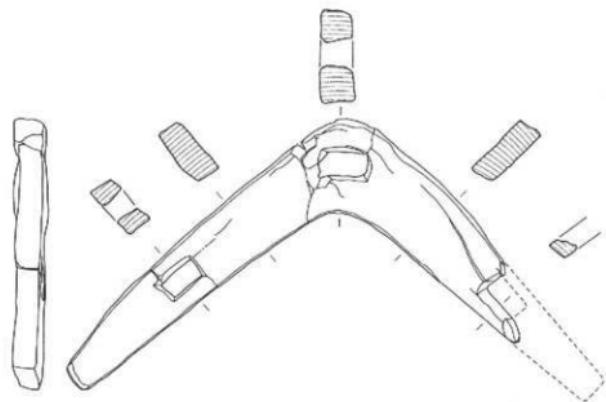




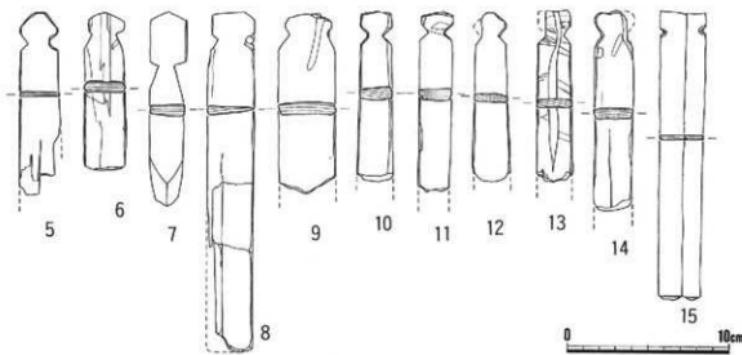
第90図 交通交易間連遺物実測図1



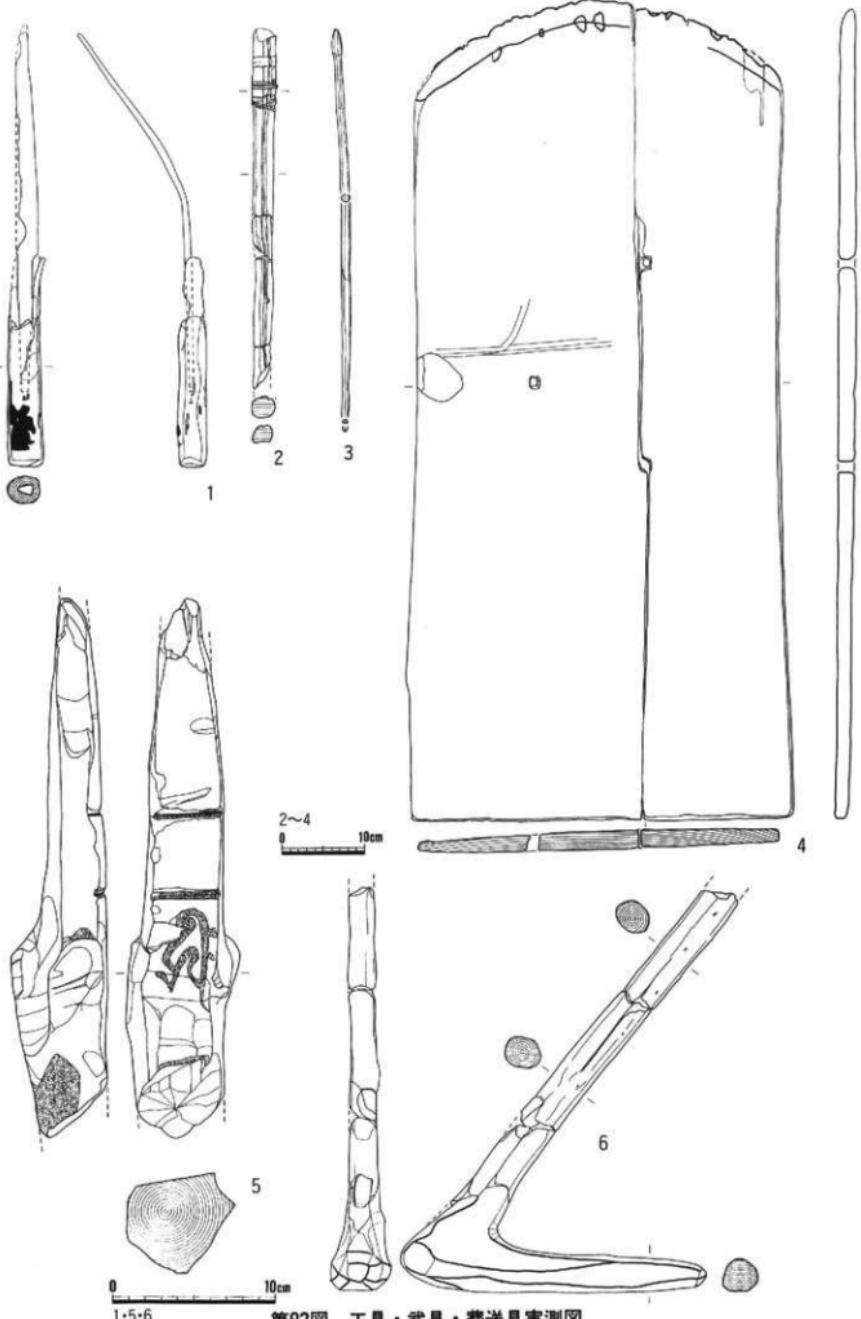
3



4



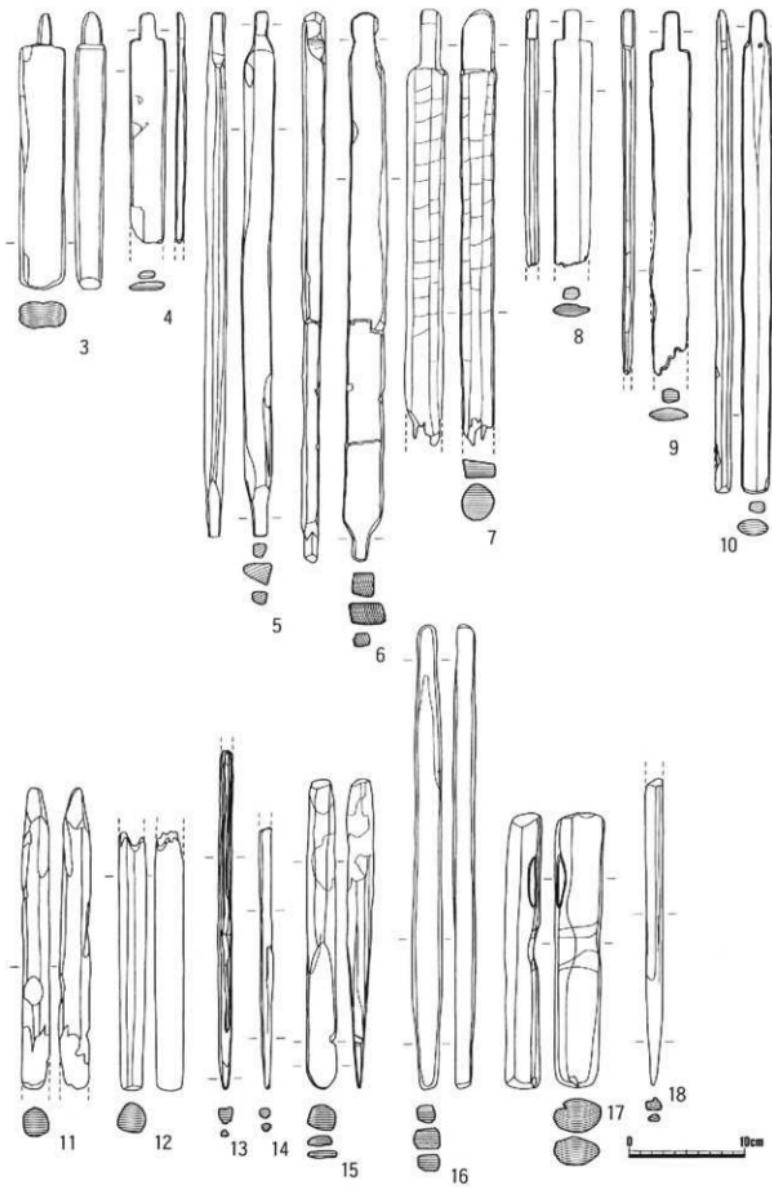
第91図 交通交易関連遺物実測図2



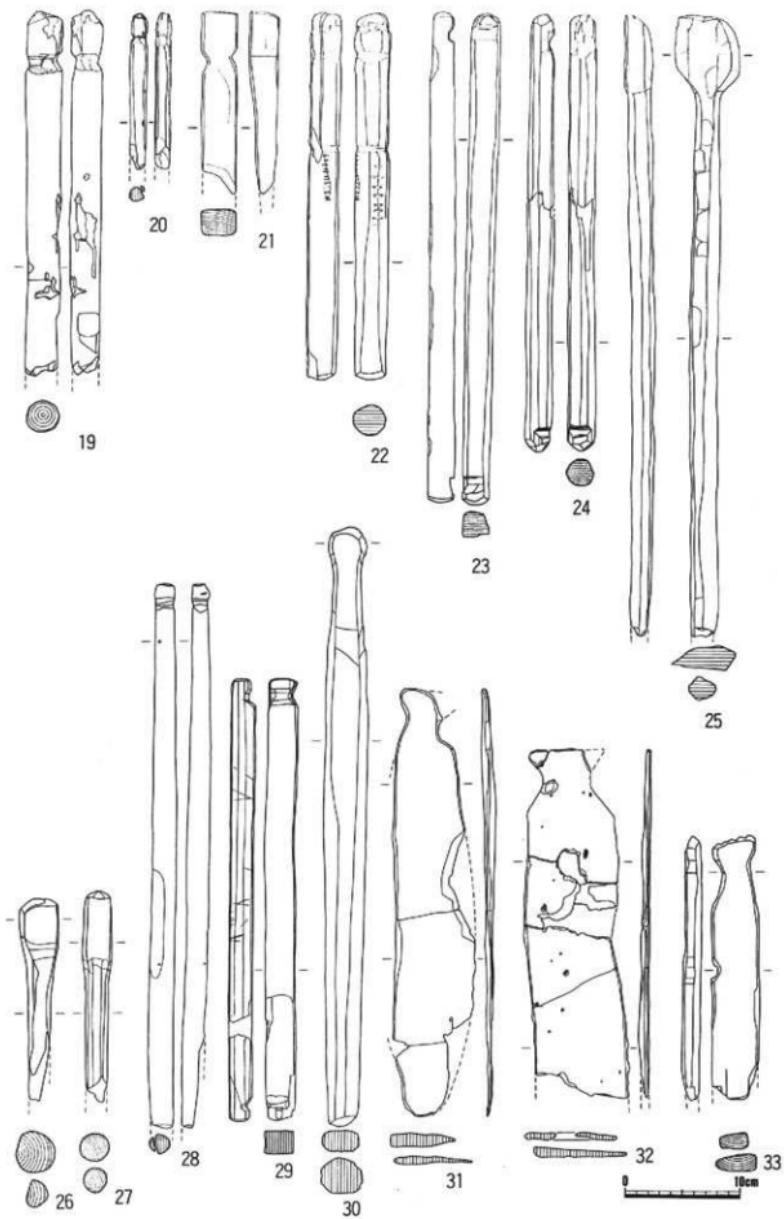
第92図 工具・武具・葬送具実測図



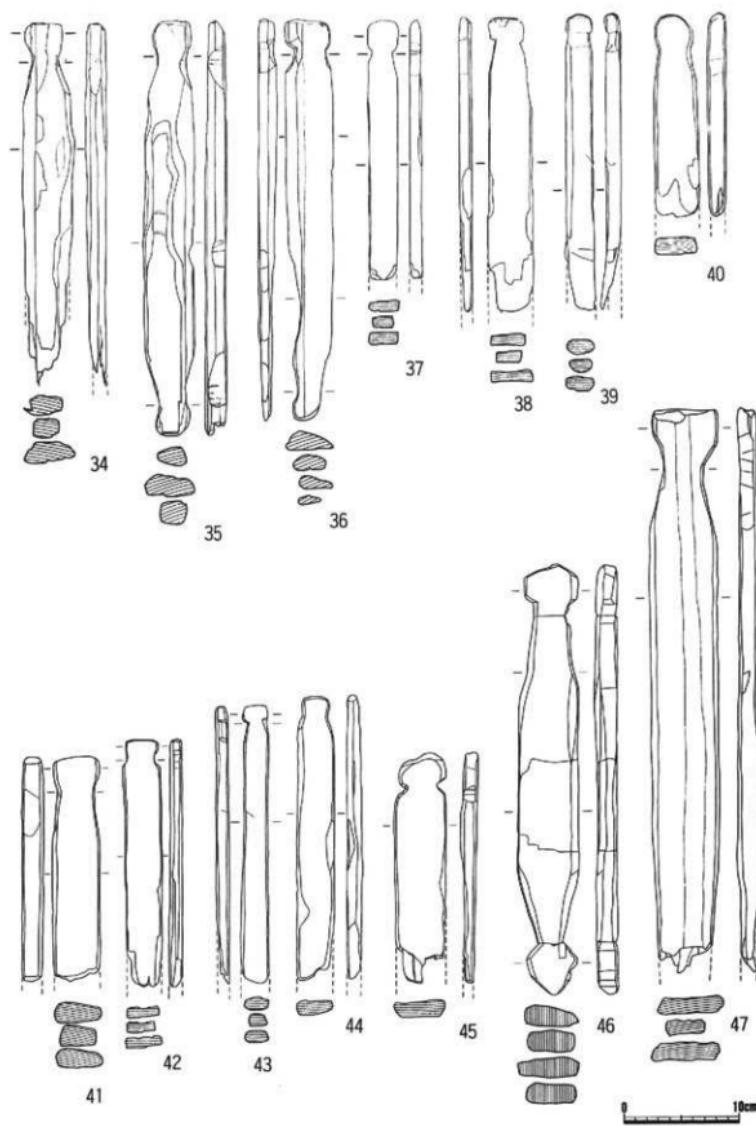
第93図 用途不明木製品実測図1



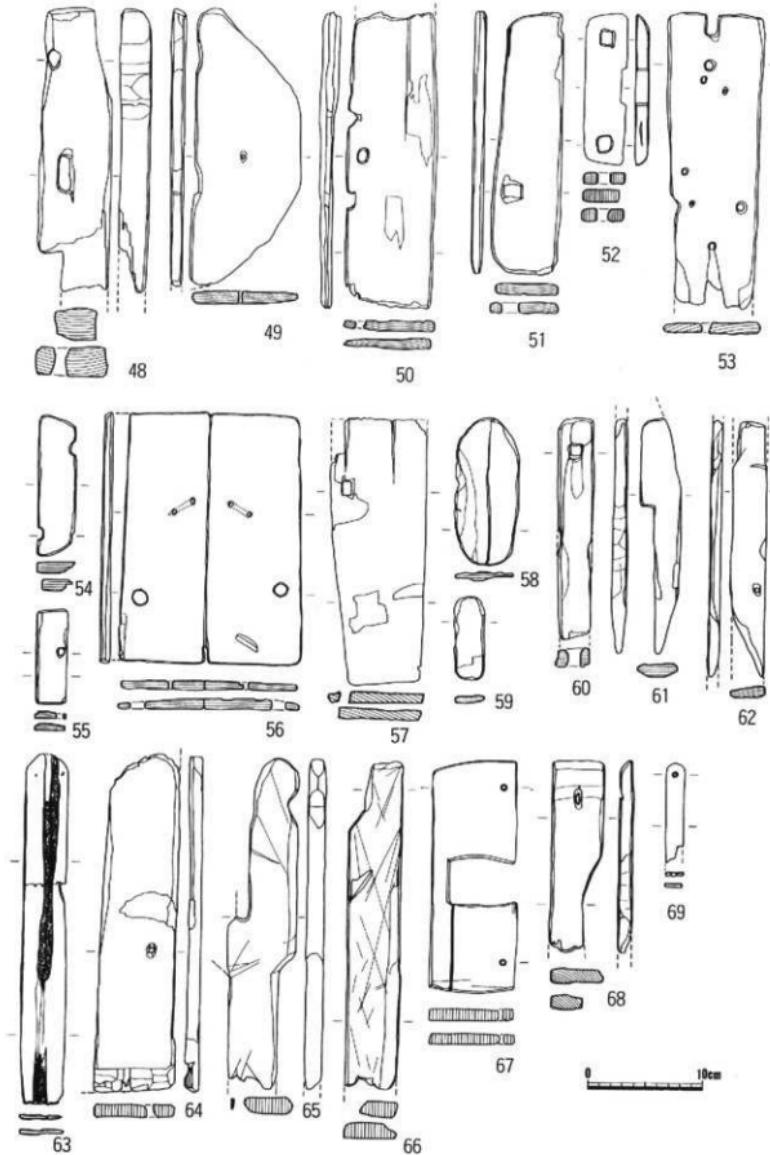
第94図 用途不明木製品実測図2



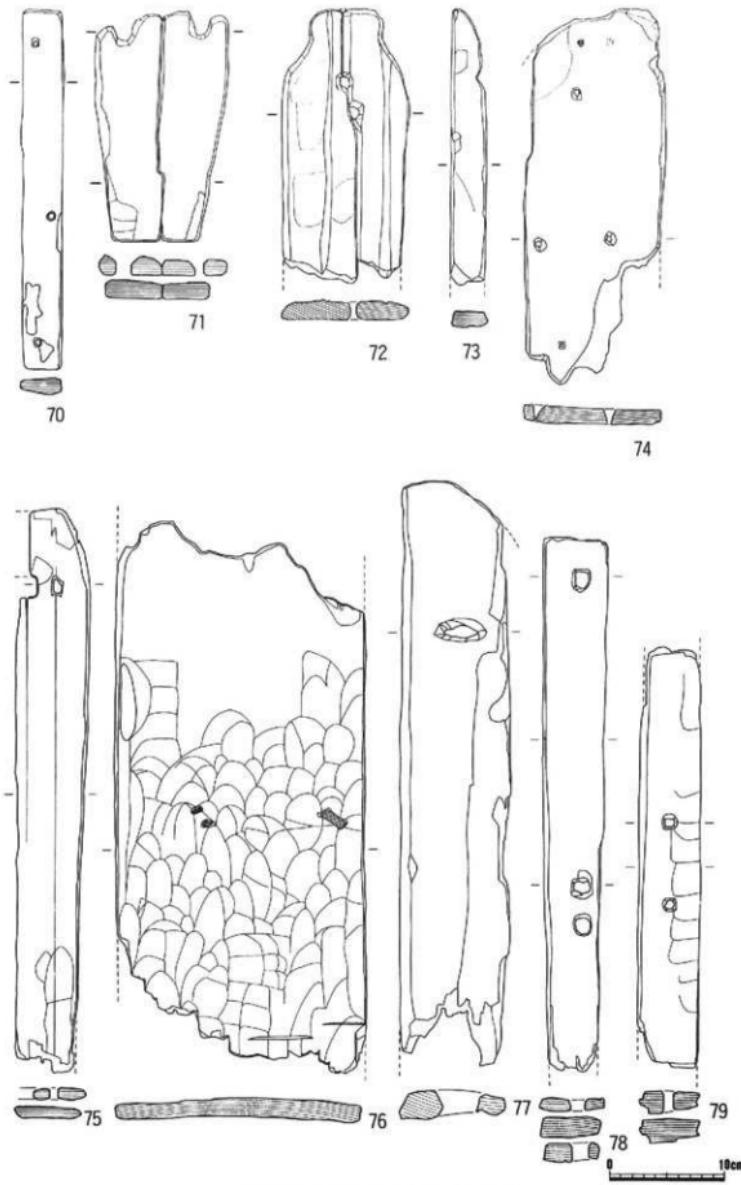
第95図 用途不明木製品実測図3



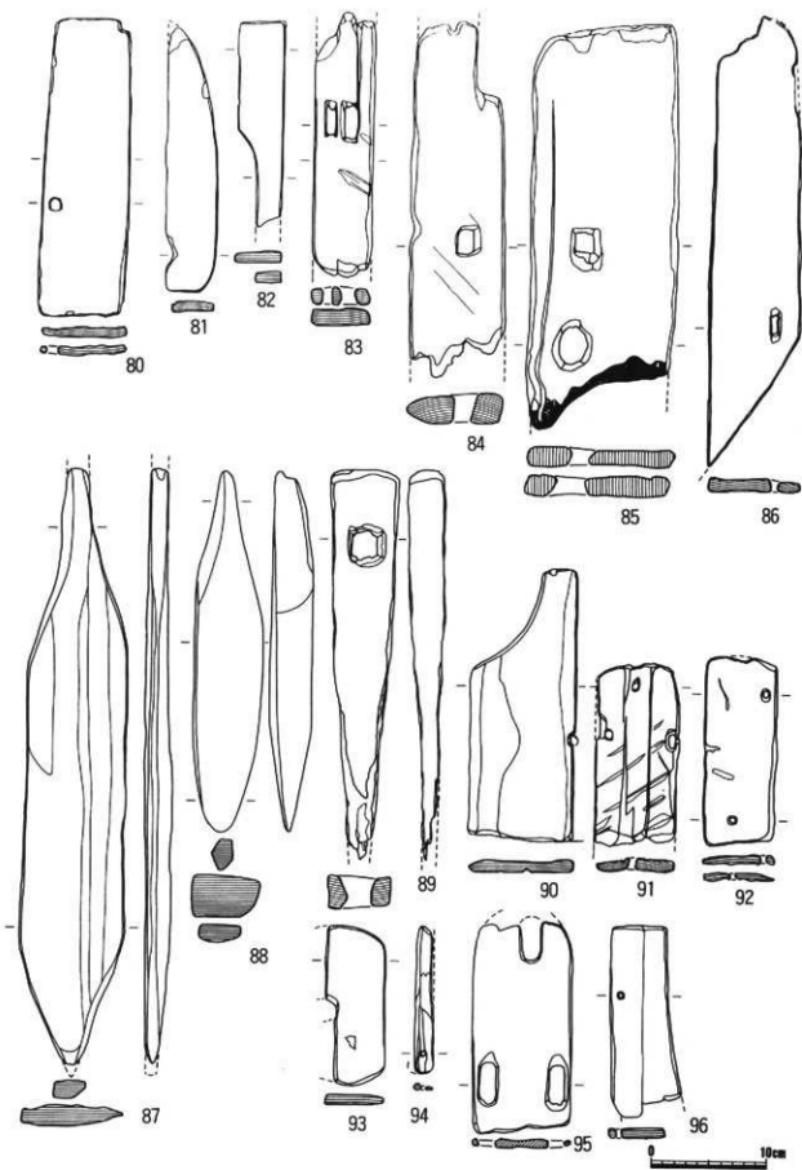
第96図 用途不明木製品実測図4



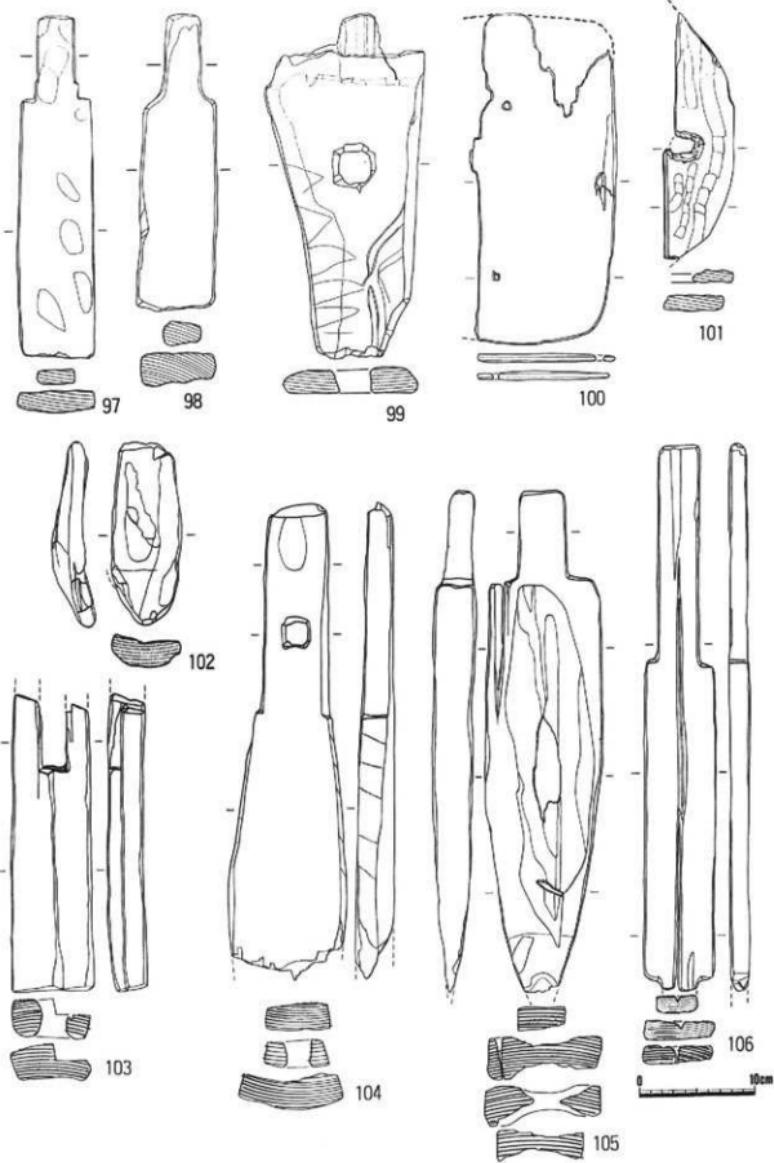
第97図 用途不明木製品実測図5



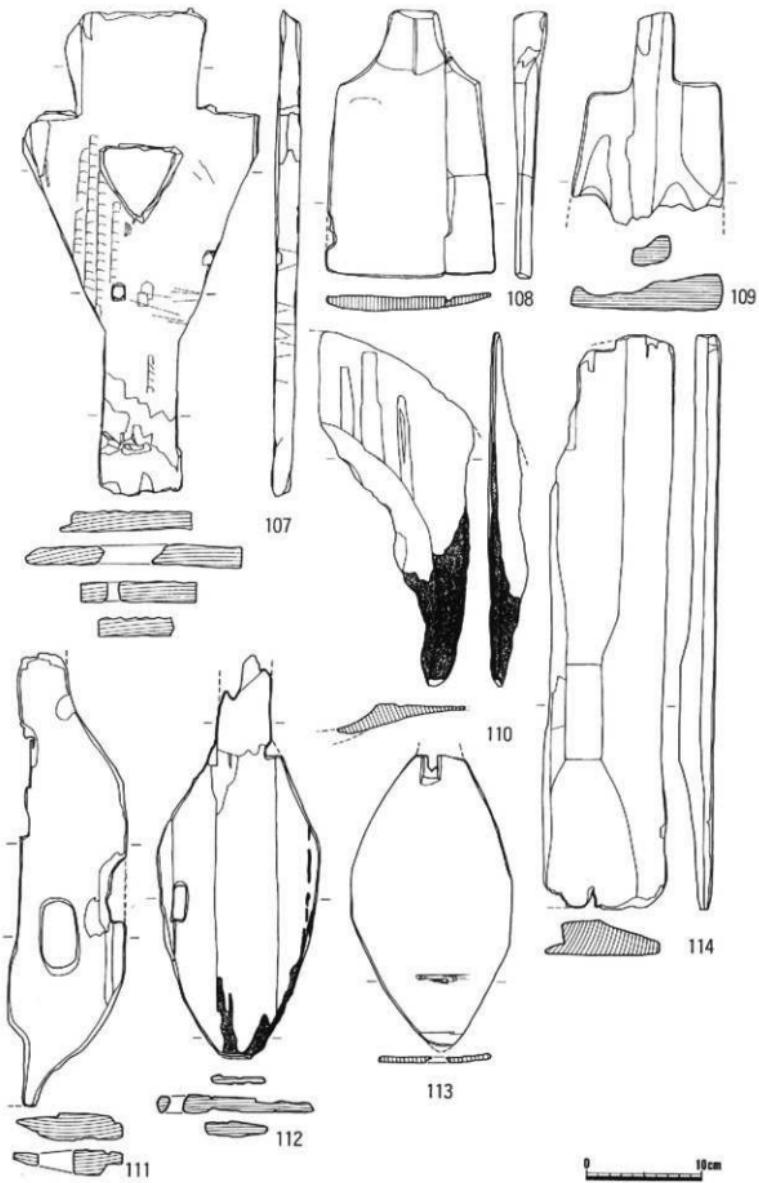
第98図 用途不明木製品実測図6



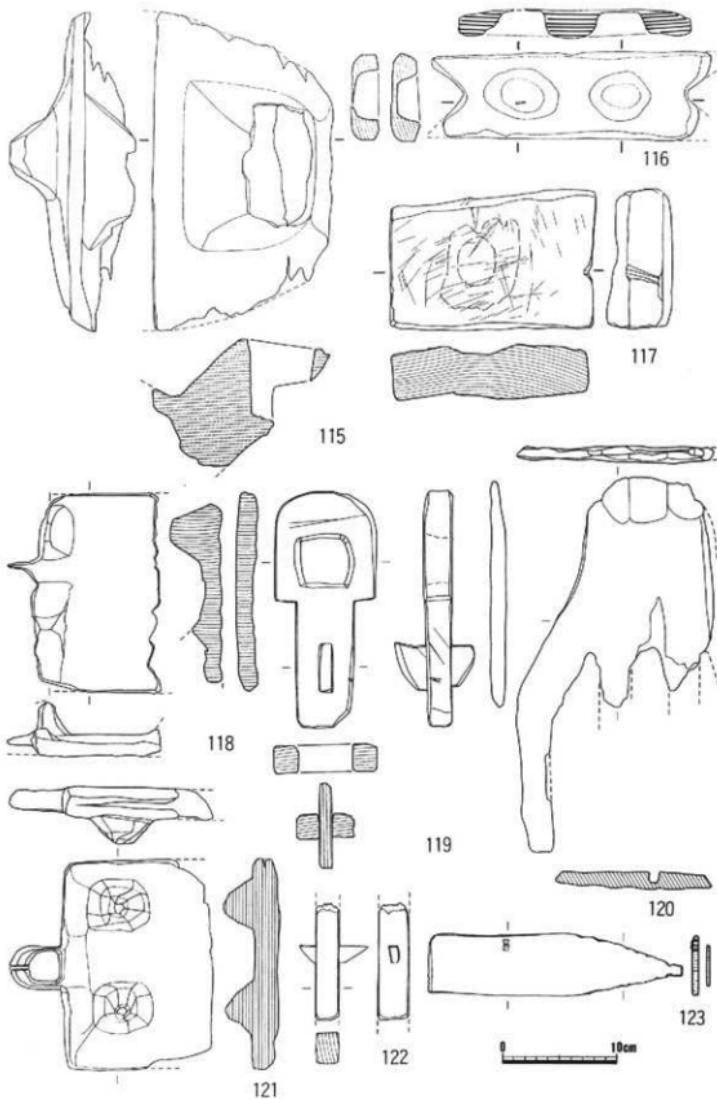
第99図 用途不明木製品実測図7



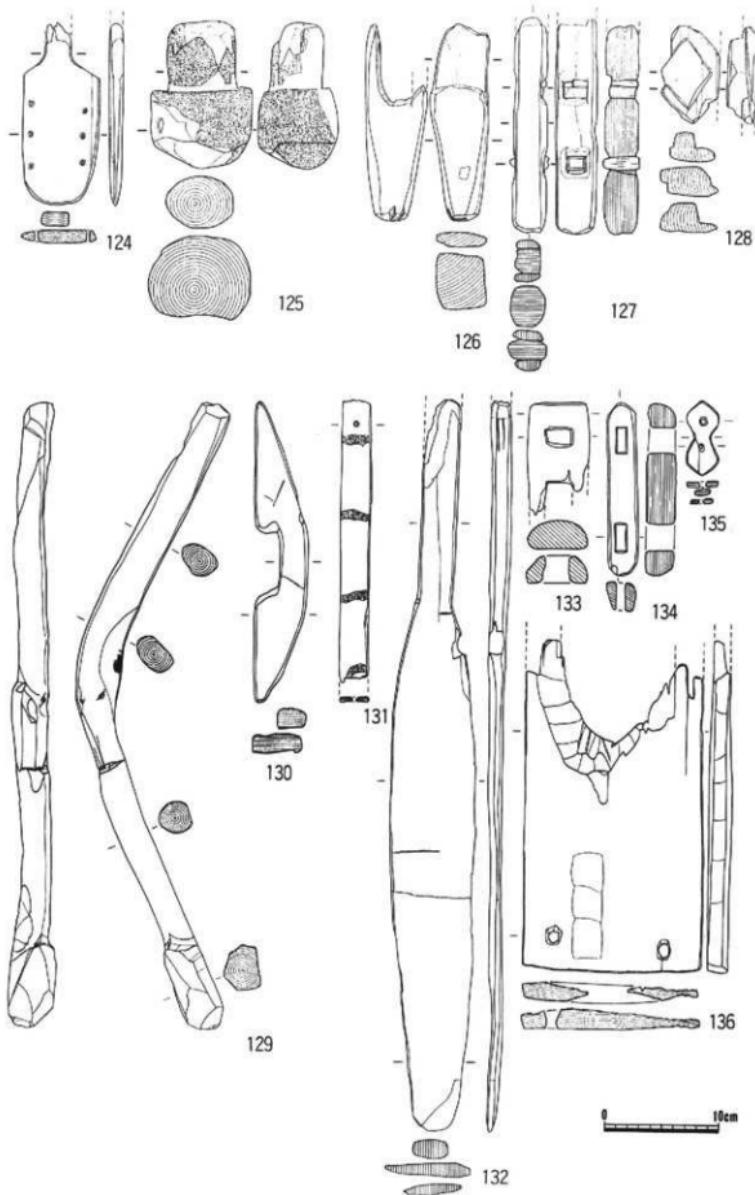
第100図 用途不明木製品実測図8



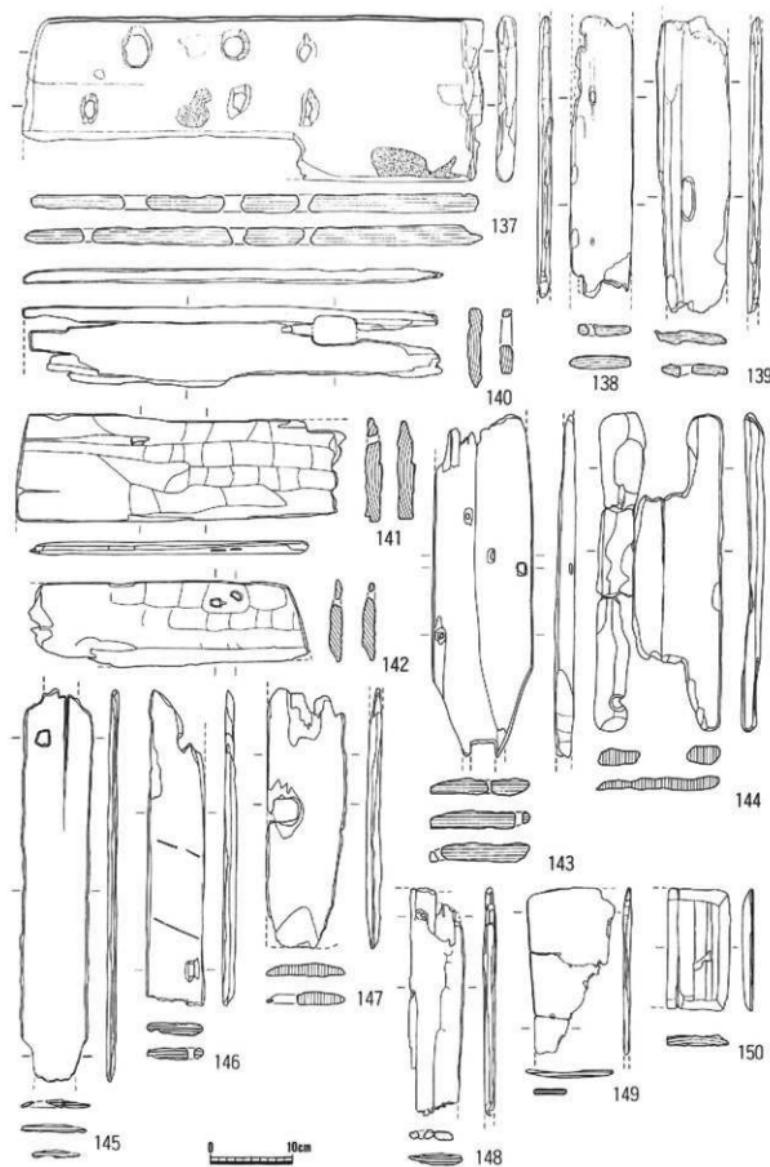
第101図 用途不明木製品実測図9



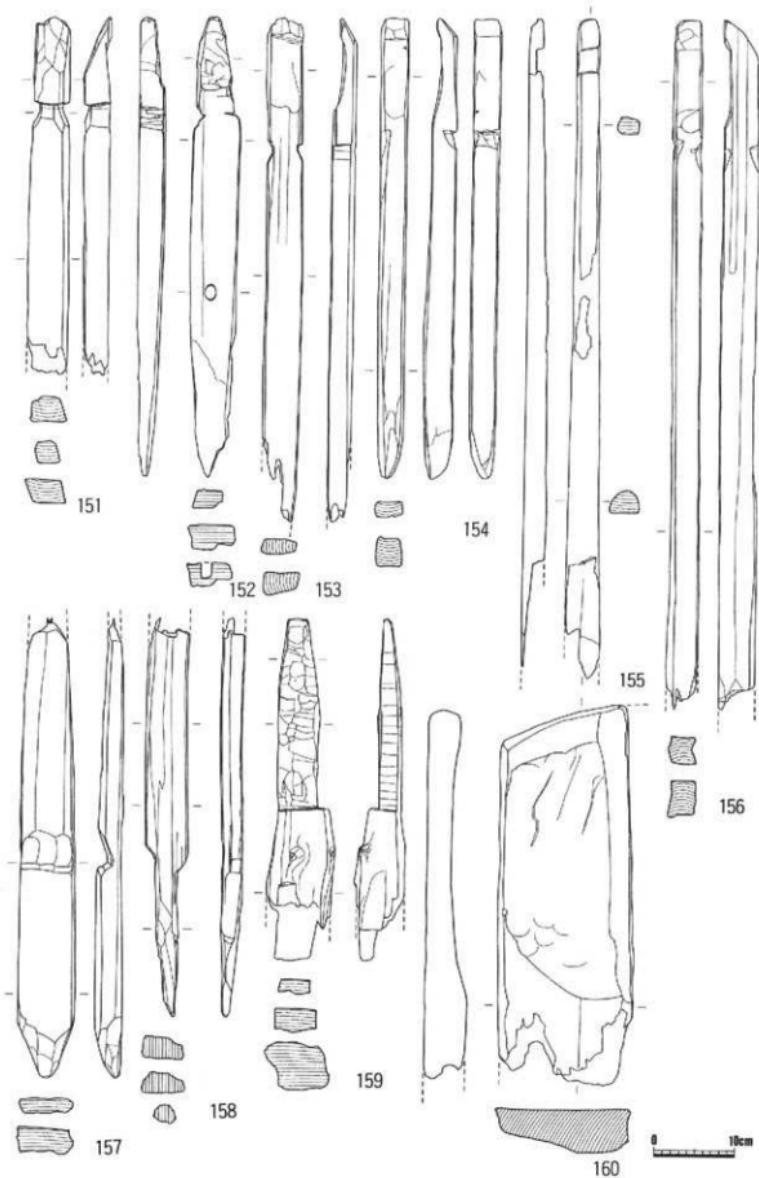
第102図 用途不明木製品実測図10



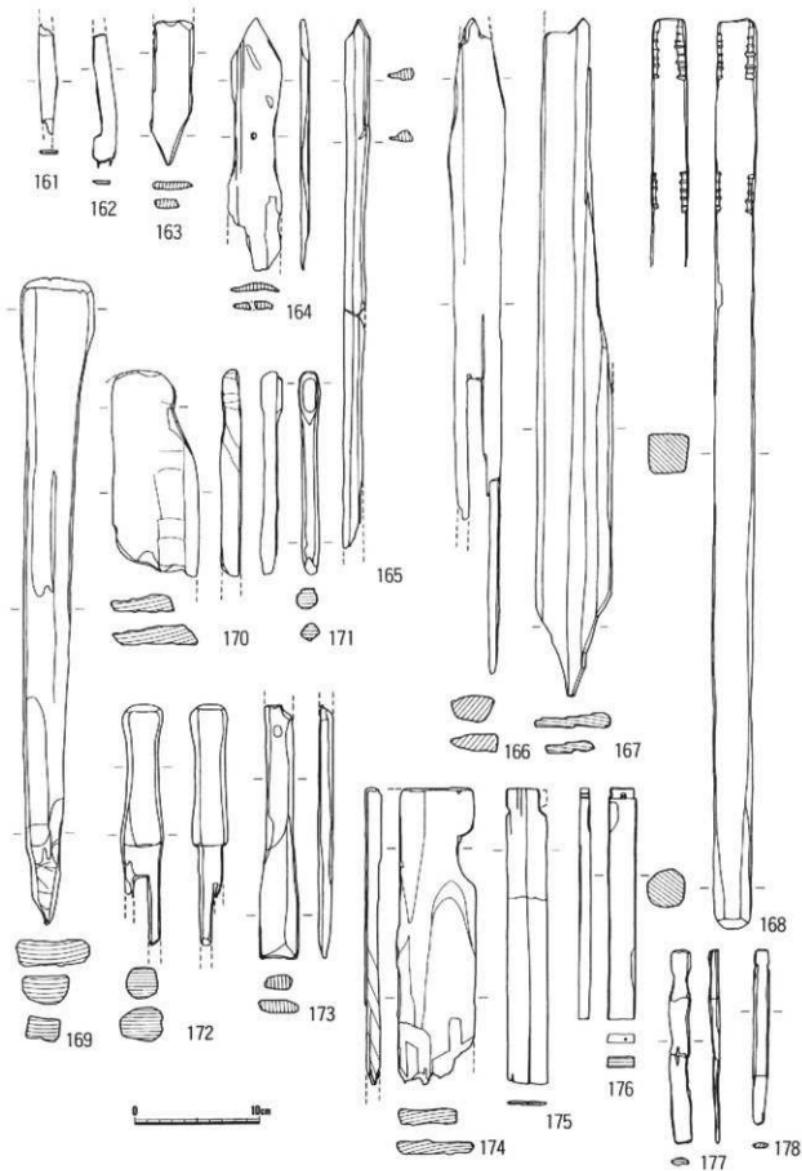
第103図 用途不明木製品実測図11



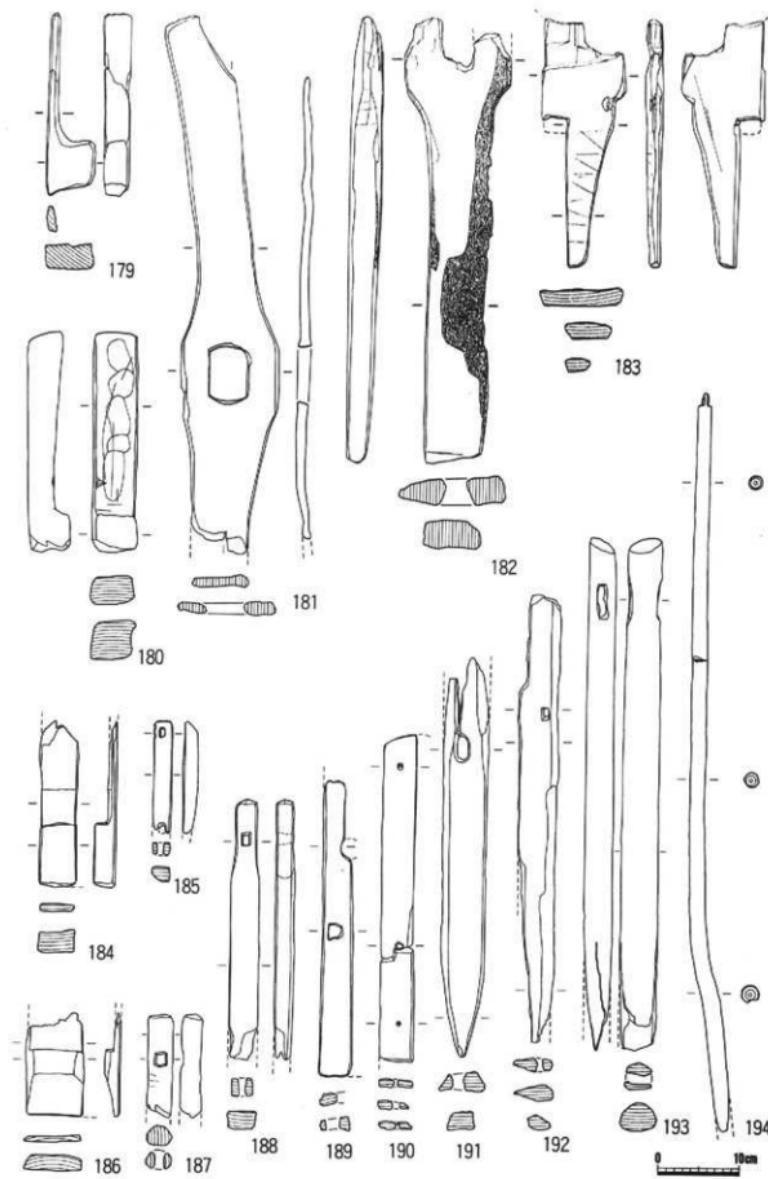
第104図 用途不明木製品実測図12



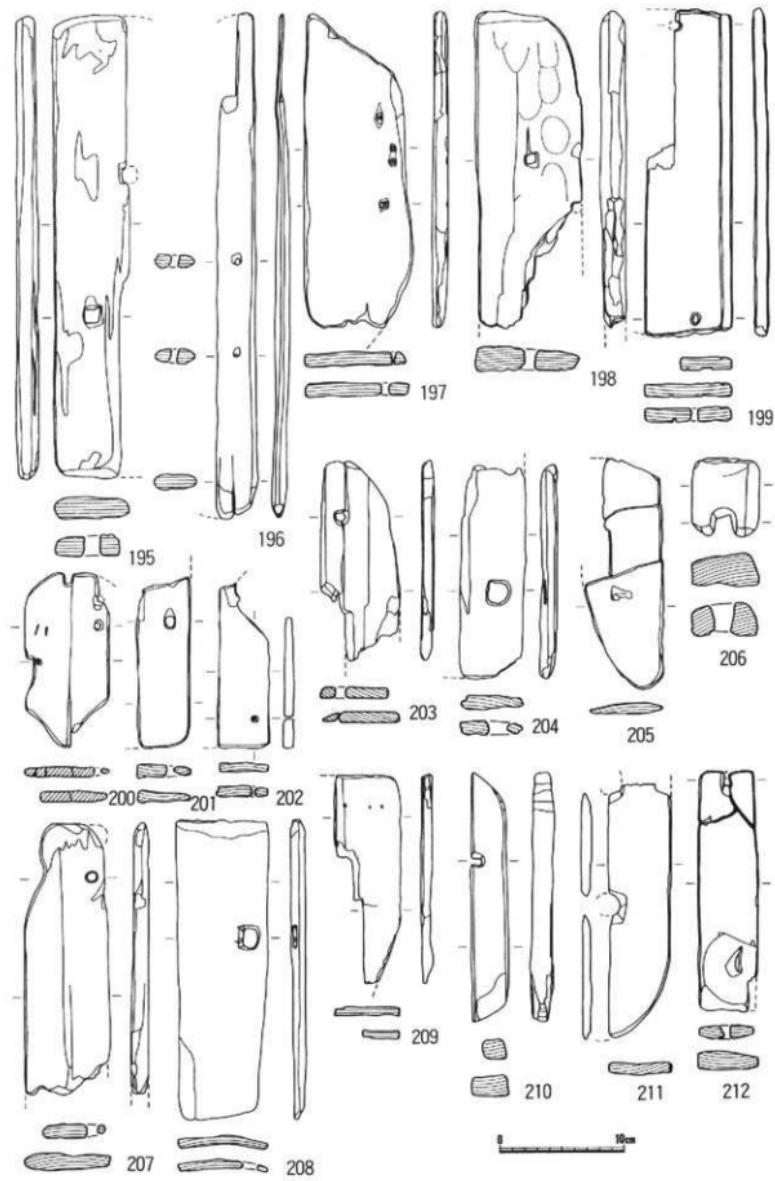
第105図 用途不明木製品実測図13



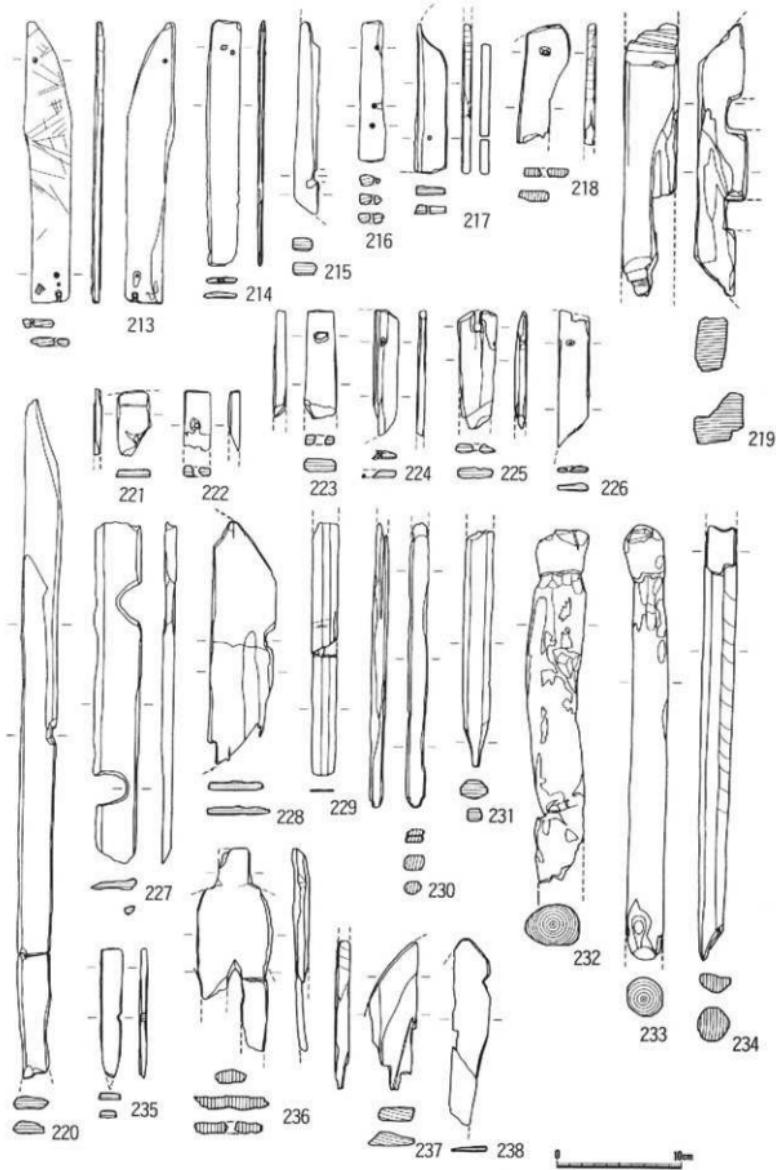
第106図 用途不明木製品実測図14



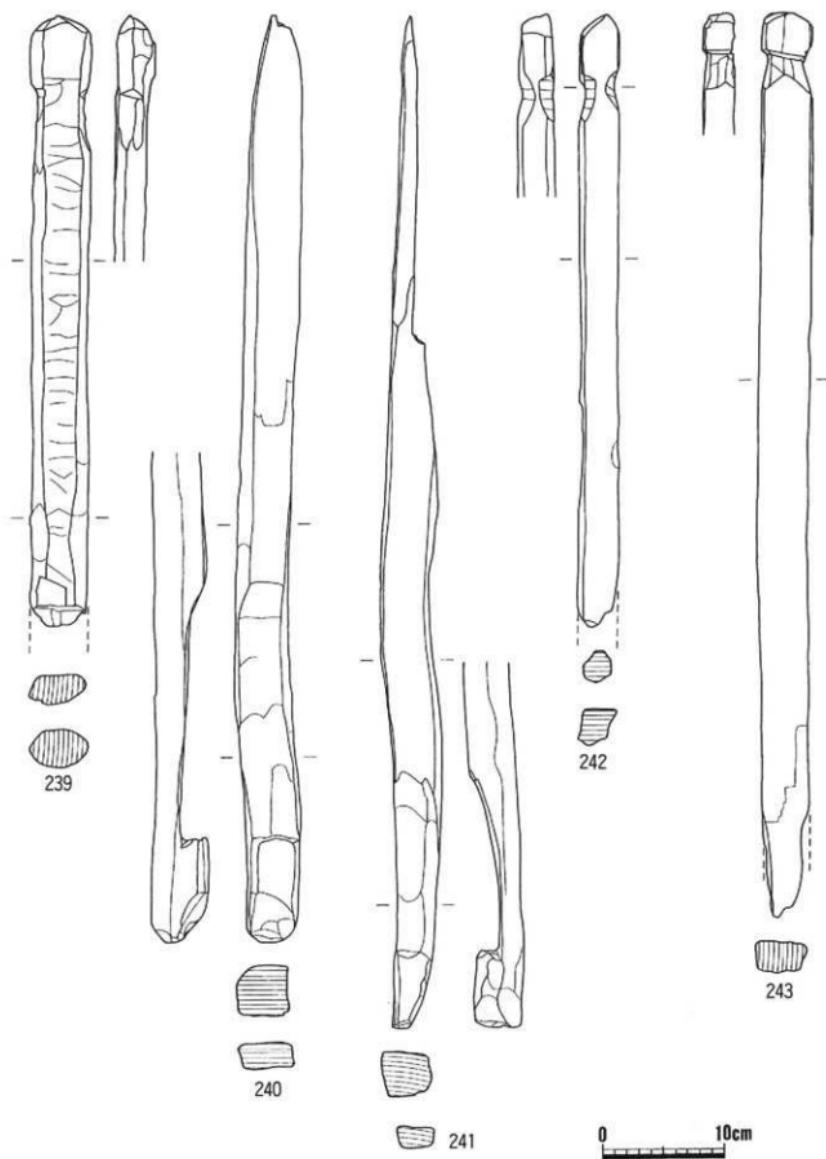
第107図 用途不明木製品実測図15



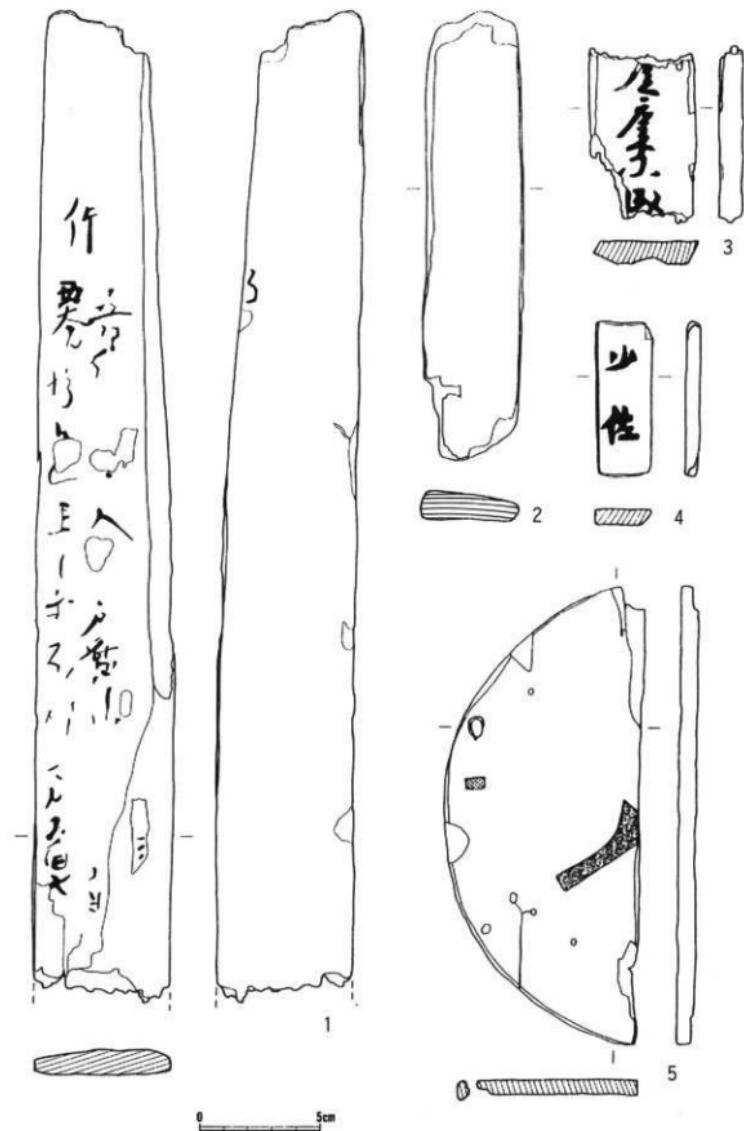
第108図 用途不明木製品実測図16



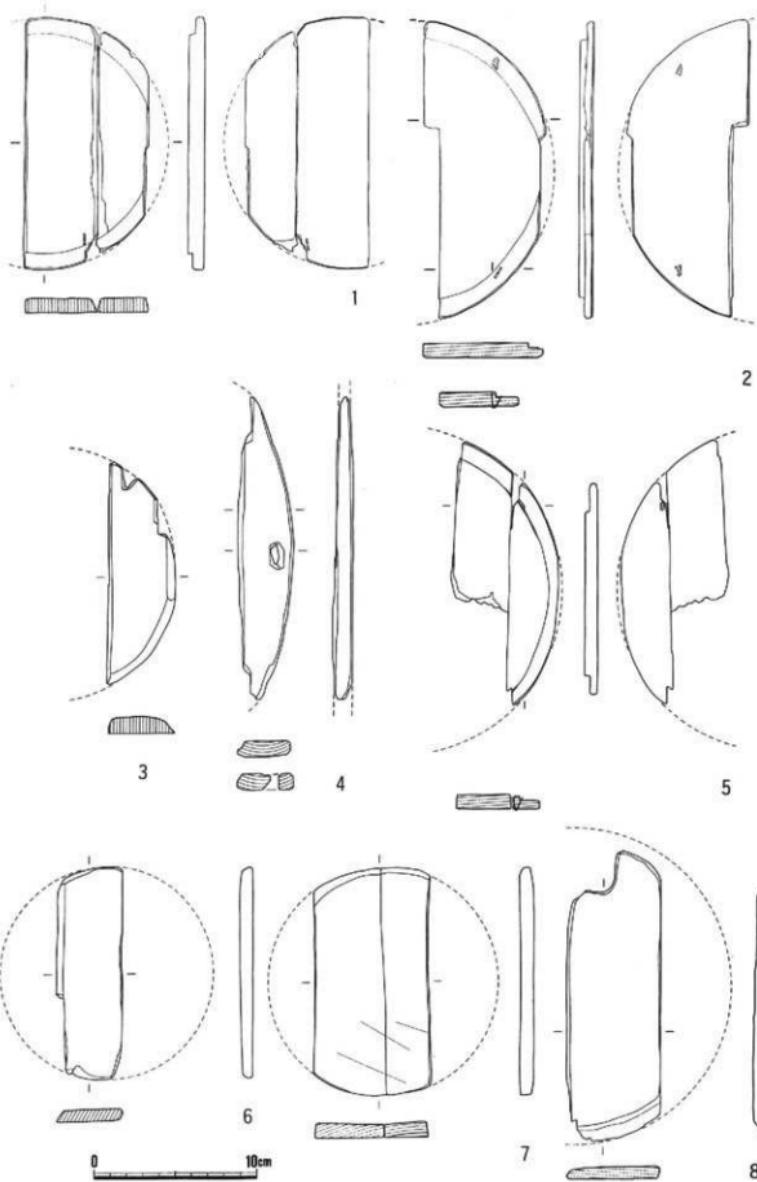
第109図 用途不用木製品実測図17



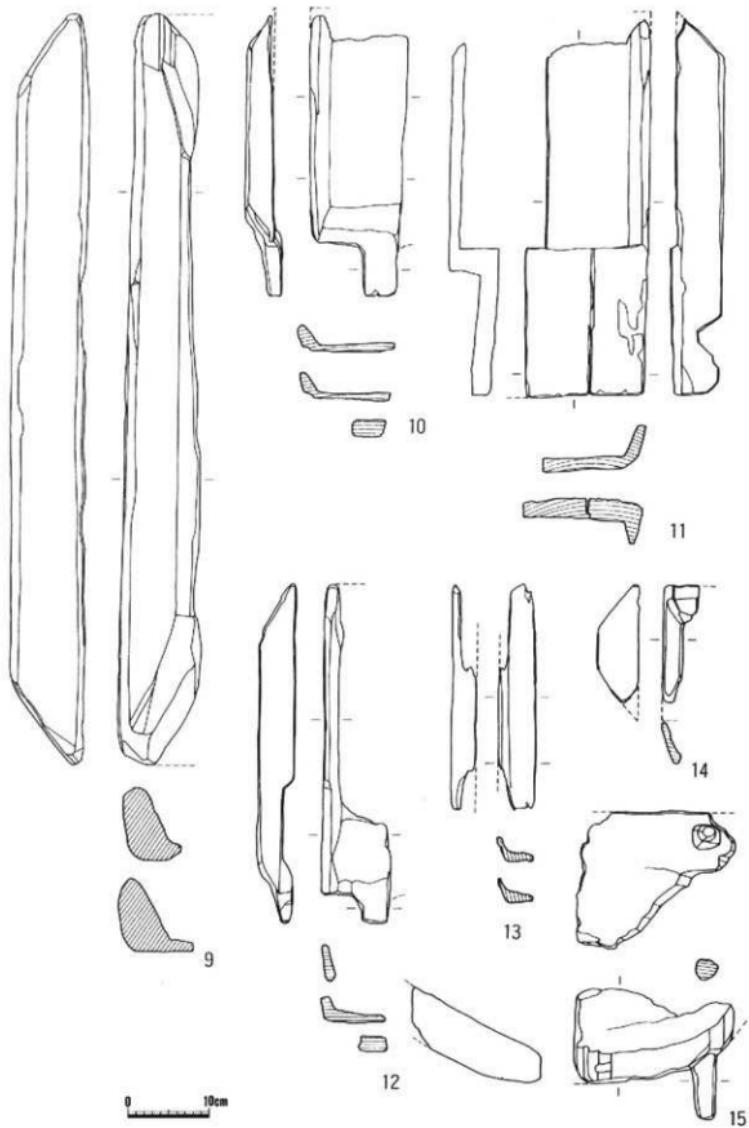
第110図 用途不明木製品実測図18



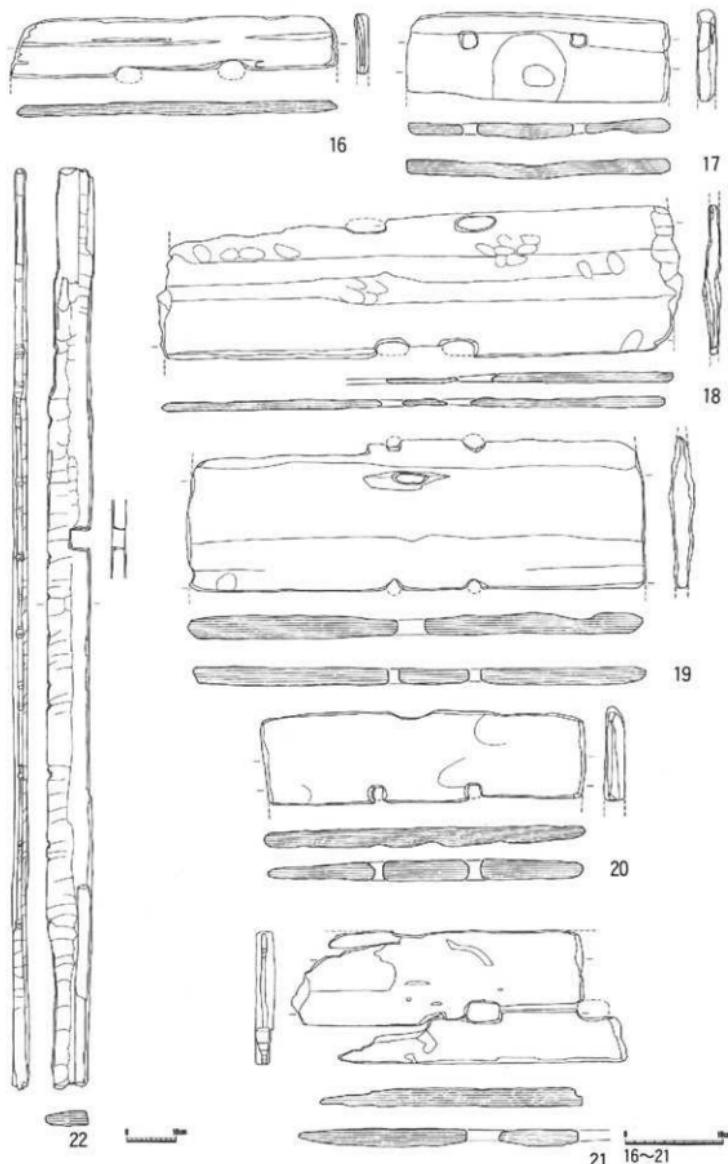
第111図 文字資料実測図



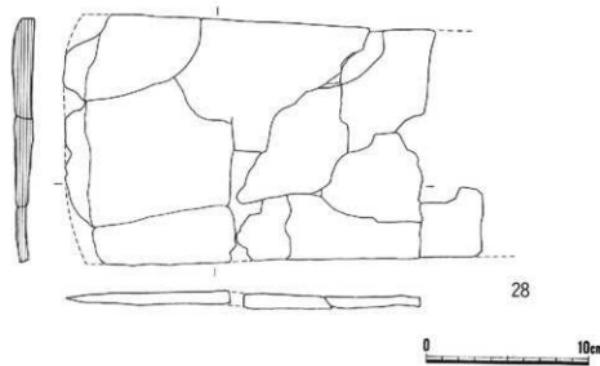
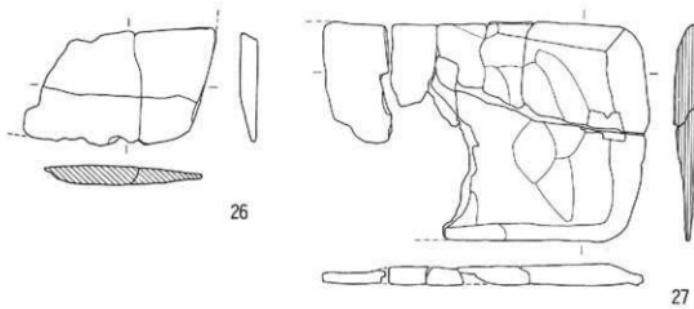
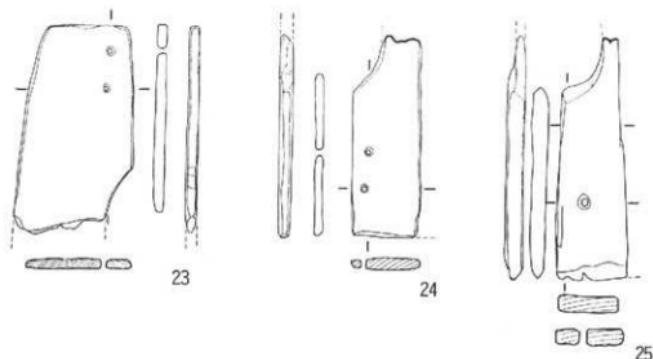
第112図 捕遺1 曲物実測図



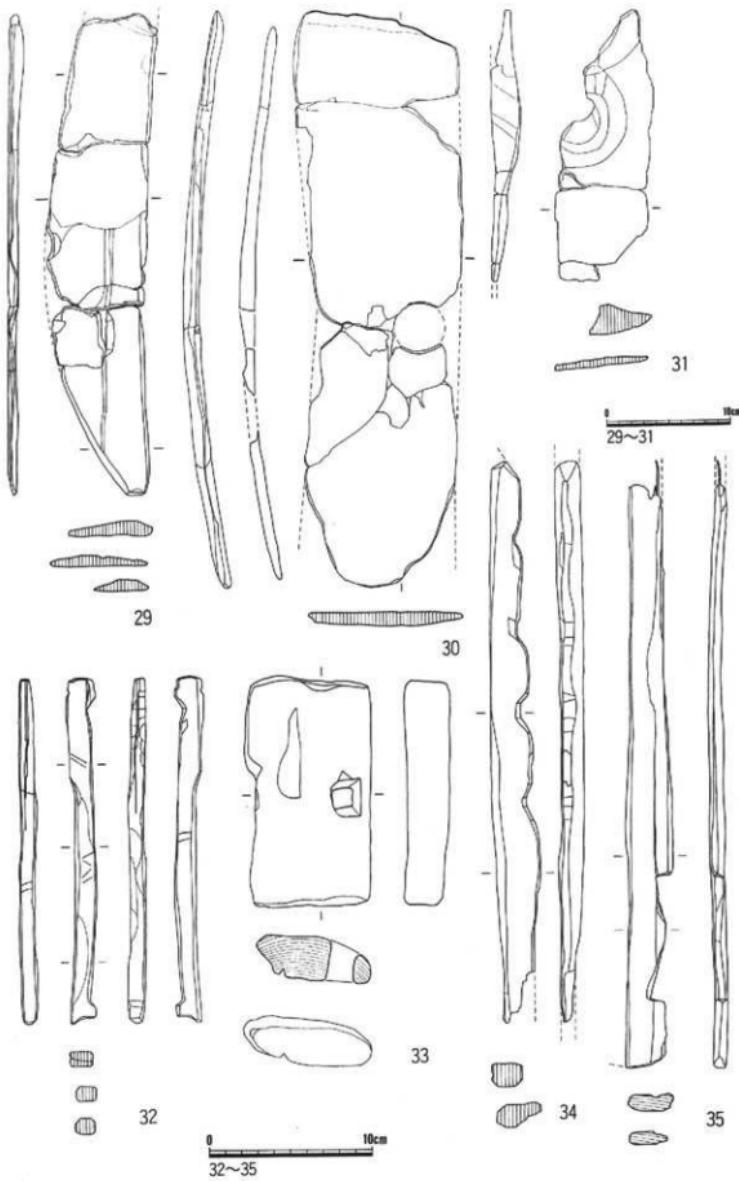
第113図 捕達2 剣物・田舟実測図



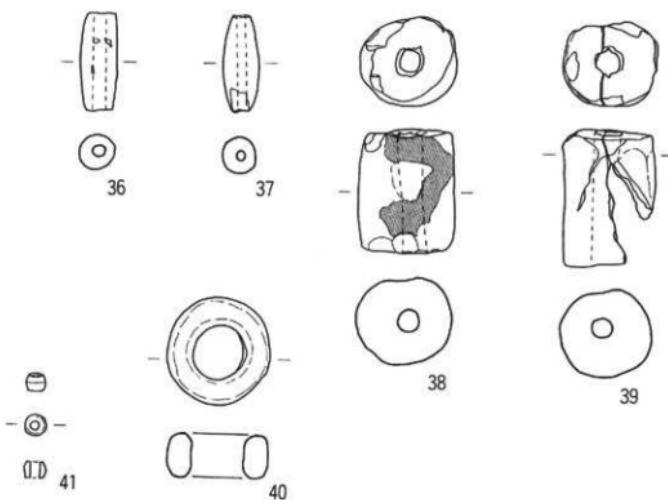
第114図 捕造3 農具実測図1



第115図 補遺4 農具実測図2

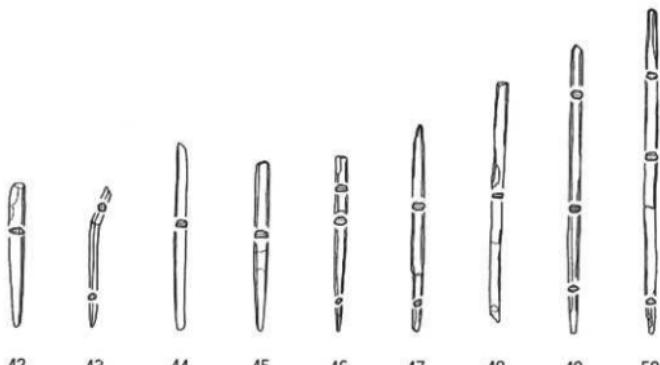


第116図 捕獲5 農具実測図3・祭祀具実測図



0
41 2cm

0
36~40 5cm



0
10cm

第117図 捕道6 石製品・土製品・箸状木製品実測図

報告書抄録

ふりがな	せないせき いぶつへん						
書名	瀬名遺跡Ⅴ(遺物編II)						
副書名	静清バイパス(瀬名地区) 埋蔵文化財報告書5						
卷次							
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告						
シリーズ番号	第79集						
編著者名	岩崎しのぶ・望月由佳子(山口敏、宮本長二郎)						
編集機関	静岡県埋蔵文化財調査研究所						
所在地	〒424 清水市江尻台町18-5 TEL 0543-67-1171(代)						
発行年月日	1996年3月29日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 度	東経 度	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
瀬名遺跡 瀬名	静岡県静岡市 瀬名	22201	35度 25分 31秒	138度 0分 18秒	19860403~ 19911115	182,834	静清バイパス(瀬名 地区) 埋蔵文化財発 掘調査業務
所収遺跡名	種別	主な時代	主な構造	主な遺物		特記事項	
瀬名遺跡	生産遺跡	弥生時代 中期	水田 方形周溝墓 溝	弥生土器、歌、鍛、田下駄、 杭、打製石斧		当地方の初期農耕段階の水 田。	
		弥生時代 後期 + 古墳時代 前期	水田 掘立柱建物 溝 渠	弥生土器、古式土器、鐵、 鍛、田下駄、舟、ヨコヅチ、 堅柱、編籠、かせい、 網代、橋、木製高杯、剣物、 舟形木製品、鳥形木製品、 木棺、柱根、梯子、ネズミ 返し、杭、舟材		多数の杭を打ち込んだ水田 跡を全調査区で確認。多数の 木製農具の出土	
		古墳時代 中期	木道状遺構	土師器、歌、田下駄、堅柱、 舟形木製品、剣物、杭、柱 材、垂木、梯子、鐵鎌、鐵 劍			
		古墳時代 後期 + 平安時代	水田 溝 自然流路	土師器、須恵器、田下駄、 舟、ヨコヅチ、曲物、剣物、 挽物、剣物、漆椀、人形木製 品、柾串			
		平安時代	水田 溝 掘立柱建物 自然流路	土師器、陶器、田下駄、田 舟、ヨコヅチ、曲物、剣物、 挽物、漆椀、刀形木製品、 柾串、舟形木製品、箸、下 駄、木簡		朱里型地割を示す水田区画 を確認。	
		中・近世	水田 自然流路	土師器、陶器、田下駄、挽 物、曲物、漆椀、箸、柾串、 木簡、辛塔婆、錢貨、鐵鎌			

本書は瀬名遺跡より出土した建築部材を中心とした木製品、文字資料、自然遺物について扱った。

資料整理参加者

瀬名遺跡の資料整理には当研究所職員および整理作業員等があたった。

瀬名遺跡出土遺物の整理作業及び本書の編集は下野第一整理事務所(下野綠町1番地バイパス高架下)で行なった。

本書の資料整理参加者名は以下の通り

技術職員 石井弘道 石原 背 榎本喜代子 川瀬由美子 杉山すず代

技術補助員 柴田圭子 早瀬容子

整理作業員 浅野富恵 跡部麻由子 池田きよ子 稲垣訓子 井上のり子 岩石文江

遠藤幸子 祢山節子 加藤百合子 川口シゲ子 河村琴子 河村雅子

木村泰美 後藤輝乃 酒井春江 佐々木智子 佐藤静枝 佐藤容子

生子和江 白井温子 新村佳子 杉山久美子 鈴木記代 高田清子

宅見寿美子 竹中比呂美 辻澤久江 鶴橋扶美代 平井高代 望月澄子

森本てる子 山李静子 脇田千晶

特殊技術員 森田恭史

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第79集

瀬名遺跡V（遺物編II）
静清バイパス（瀬名地区）埋蔵文化財調査報告書5
本文編

平成8年3月29日

編集発行 財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
清水市江尻台町18-5
TEL 0543-67-1171

印刷所 星光社印刷
静岡市豊田3丁目6-12
TEL 054-286-3131